

市原市根田代遺跡

2005

市原市教育委員会
財団法人市原市文化財センター

ね だ だい
市原市根田代遺跡

2005

市原市教育委員会
財団法人市原市文化財センター



序 文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、山間部の縁豊かな自然環境のなかにあり、先史からの多数の遺跡が所在しています。21世紀をむかえ、活力ある市原市を創造していくためには、社会資本の整備もまた着々と進めていかなければなりませんが、先人達の残した文化遺産も、豊かな自然とともに、後世に伝え残すことが重要です。

国分寺台区画整理事業は、文化財保護と開発の調整を図る上で、さまざまな教訓を残すこととなりました。私たちは、これを糧として、調和のとれた街づくりを今後とも進めてまいりたいと考えております。

今回報告する根田代遺跡では、弥生時代の遺跡を代表する「環濠集落」が発見されました。市原市の弥生時代は、関東地方でも屈指の遺跡密集地帯であり、東日本最古の古墳である神門古墳群や、姉崎古墳群、上総国府、国分寺の建立につながる発展の基礎をつくった時代であります。本遺跡の発掘調査によって、稻作農耕が開始された当時の村のようすを知る、さまざまな情報がもたらされました。また、本遺跡は、国分寺台地区では、唯一ともいえる旧石器時代の調査遺跡であります。

発掘調査事業は、本書の刊行をもって終了しますが、発掘調査によって得られた貴重な成果は、記録として将来に伝えると同時に、現在においても積極的に活用されなければなりません。市民の生涯学習意欲が年々高まりをみせる中、本書の刊行を新たなステップとして、文化財の積極的な活用に、より一層心を碎いてまいりたいと考えております。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なご尽力をいただきました、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課、旧上総国分寺台遺跡調査団、旧市原市国分寺台土地区画整理組合並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

市原市教育委員会
教育長 山中齊

例　　言

- 1 本報告書は、千葉県市原市根田2丁目1~3、根田3丁目3・6・7他に所在する、根田代(ねだだい)遺跡の発掘調査報告書である。調査段階の旧代表地番は根田416番地他である。
- 2 発掘調査は、国分寺台区画整理事業にともない、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、上総国分寺台遺跡調査団が行い、整理作業については、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 3 根田代遺跡の発掘調査は、1979(昭和54)年度、1980(昭和55)年度に行われたが、本報告は、1979(昭和54)年度に実施した根田1号墳(国分寺台地区130号墳)調査区をのぞく、1980(昭和55)年度調査区を対象とする。
- 4 発掘調査は、上総国分寺台遺跡調査団(団長滝口宏)のもと、当時同調査団副団長であった平野元三郎が代表を務めていた平野考古学研究所が中心となって実施した。なお、旧石器時代調査は、大貫静夫氏の指導を得た。
- 5 本遺跡の調査面積は、9,070m²である。このうち本報告対象面積は6,860m²、内訳はA地点7,360m²のうちの5,150m²、B地点1,710m²である。A地点下層調査面積は165m²である。面積値は、今回全体図から再測した。
- 6 発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

発掘調査 昭和55年度 担当 平野元三郎、谷島一馬、浅利幸一、鈴木英啓
整理作業 平成14年度 担当 大村直
平成15年度 担当 忍澤成視、浅利、大村
平成16年度 担当 大村

- 7 整理作業は、遺構関係を忍澤が中心となり浅利、大村が、旧石器時代遺物は安井健一が、縄文時代遺物、貝類は忍澤が、中世遺物は櫻井敦史が、その他の遺物は大村が担当した。
- 8 本書の執筆編集は主に大村が行ったが、忍澤(第2章第2節、第2章第3節遺構部分、第3章第2節)、安井(第2章第1節)、櫻井(第2章第4節)が執筆を分担した。
- 9 出土人骨の鑑定は平田和明氏、長岡朋人氏(聖マリアンヌ医科大学解剖学教室)、テフラ分析、石質肉眼同定はパリノ・サーヴェイ株式会社、旧石器時代石器実測はアイシン精機に委託した。また、今回の整理作業にあたり、遺物の探索等について田中新史氏の、旧石器について田村隆氏、島立桂氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
- 10 本報告書は、フルデジタルでの入稿を行った。その仕様・記録について、付編にまとめた。
- 11 土器観察表等一部表については、添付のCD-ROMのみの収録とした。CD-ROMのフォーマットは、Windows、Macに対応する。ファイル形式は、XLS、CSV、TXT(タブ区切り)形式であり、ファイル形式ごとにフォルダに格納している。本文掲載の表についても、情報を追加し、CD-ROMに収録したものがある。表目次(CD-ROM収録)を参照のこと。また、本編についても、PDF形式(中解像度、標準圧縮版)で収録した。閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader(無償版)、ないしはAdobe Acrobat(製品版)が必要である。
- 12 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
 - 日本地図センター 2万5千分1彩色地形図(五井・蘇我・姉崎・海士有木) (第2図)
 - 市原市基本図(1:3,000)昭和38年10月測図、市原市作成
 - 市原市基本図(1:2,500)昭和55年3月測図、市原市作成
 - 土地区画整理事業現況図(1:500)昭和44年3月測図、市原市国分寺台区画整理組合作成また、第1・219図はカシミール3D、第230~232図は市原市遺跡情報管理システム(GIS)から作成出力した。
- 13 本書に収録した出土遺物および調査記録は、市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。
- 14 遺構番号は、本書作成の段階で変更している。遺物注記等については調査段階の遺構番号を使用しており、その対照は遺構一覧表に明示した。なお、遺物注記のコード名は「NEDA」(A地点)、「NEDB」(B地点)であり、竪穴住居跡は「H」を頭文字にしている。

本文目次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の立地と概要	2
第3節 発掘調査・整理作業の方法	8
第4節 根田代遺跡の概要	20

第2章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代	23
第2節 繩文時代	43
第3節 弥生・古墳・奈良時代	47
(1) 穫 穴	47
(2) 溝(環濠)	178
(3) 古 墳	213
(4) 土 坑	242
(5) 地下式土坑	249
(6) 粘土採掘坑	251
第4節 中近世	258

第3章 自然遺物および自然科学的分析

第1節 根田代遺跡のローム層序対比	265
第2節 根田代遺跡検出の貝層	269
第3節 根田代遺跡(千葉県市原市)から出土した人骨	273

第4章 市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落

第1節 根田代遺跡変遷の概要	276
第2節 宮ノ台式と久ヶ原式の成立	283
第3節 中期環濠集落と後期集落	293
付編 DTP入稿について	328

挿図目次

第 1 図 根田代遺跡位置図(1) 南関東地方弥生時代中期環濠集落	1	第 43 図 5号竪穴(5) 遺物	59
第 2 図 根田代遺跡位置図(2)	3	第 44 図 5号竪穴(6) 遺物	60
第 3 図 根田代遺跡と国分寺台遺跡群	4	第 45 図 6号竪穴 遺構遺物	61
第 4 図 根田代遺跡と周辺の調査遺跡	5	第 46 図 7号竪穴(1) 遺構	63
第 5 図 根田代遺跡地形図	6	第 47 図 7号竪穴(2) 遺物、8号竪穴 遺構遺物、9号竪穴 遺構遺物	64
第 6 図 根田代遺跡全体図(1)	7	第 48 図 10号竪穴 遺構遺物、11号竪穴(1) 遺構	66
第 7 図 根田代遺跡調査区	8		
第 8 図 根田代遺跡全体図(2)	9・10	第 49 図 11号竪穴(2) 遺物	67
第 9 図 根田代遺跡 A 地点全体図(1)	11・12	第 50 図 12号竪穴 遺構遺物、13号竪穴(1) 遺構、14号竪穴(1) 遺構、15号竪穴(1) 遺構	69
第 10 図 根田代遺跡 A 地点全体図(2)	13・14	第 51 図 13号竪穴(2) 遺物、14号竪穴(2) 遺物、15号竪穴(2) 遺物	70
第 11 図 根田代遺跡 A 地点全体図(3)	15・16	第 52 図 16号竪穴 遺構遺物、18号竪穴(1) 遺構	73
第 12 図 根田代遺跡 A 地点時期別全体図	17・18		
第 13 図 根田代遺跡 B 地点全体図	19	第 53 図 18号竪穴(2) 遺物、17号竪穴 遺構	74
第 14 図 根田代遺跡下層調査区	24	第 54 図 19号竪穴(1) 遺構	76
第 15 図 石器出土状況 器種別	25	第 55 図 19号竪穴(2) 遺物、20号竪穴(1) 遺構遺物	77
第 16 図 石器出土状況 石材別	26	第 56 図 20号竪穴(2) 遺物	78
第 17 図 石器接合関係(1)	27	第 57 図 21号竪穴 遺構遺物	79
第 18 図 石器接合関係(2)	28	第 58 図 22号竪穴(1) 遺構、23号竪穴(1) 遺構、24号竪穴(1) 遺構	82
第 19 図 旧石器時代出土石器(1)	29	第 59 図 22号竪穴(2) 遺構遺物、23号竪穴(2) 遺構、24号竪穴(2) 遺構	83
第 20 図 旧石器時代出土石器(2)	30	第 60 図 22号竪穴(3) 遺物	84
第 21 図 旧石器時代出土石器(3)	31	第 61 図 22号竪穴(4) 遺物	85
第 22 図 旧石器時代出土石器(4)	32	第 62 図 22号竪穴(5) 遺物	86
第 23 図 旧石器時代出土石器(5)	33	第 63 図 23号竪穴(3) 遺物	87
第 24 図 旧石器時代出土石器(6)	34	第 64 図 23号竪穴(4) 遺物、24号竪穴(3) 遺物	88
第 25 図 旧石器時代出土石器(7)	35		
第 26 図 旧石器時代出土石器(8)	36	第 65 図 24号竪穴(4) 遺物	89
第 27 図 旧石器時代出土石器(9)	37	第 66 図 24号竪穴(5) 遺物	90
第 28 図 旧石器時代出土石器(10)	38	第 67 図 25号竪穴(1) 遺構	93
第 29 図 接合資料分割工程図(1)	39	第 68 図 25号竪穴(2) 遺物、27号竪穴(1) 遺物	94
第 30 図 接合資料分割工程図(2)	40		
第 31 図 縄文土器出土分布図	43	第 69 図 26号竪穴 遺構遺物	95
第 32 図 縄文時代出土遺物(1)	44	第 70 図 27号竪穴(2) 遺構、28号竪穴(1) 遺構	96
第 33 図 縄文時代出土遺物(2)	45		
第 34 図 縄文時代出土遺物(3)	46	第 71 図 28号竪穴(2) 遺物、30号竪穴 遺構遺物	97
第 35 図 1号竪穴 遺構遺物	49		
第 36 図 2号竪穴 遺構遺物	50	第 72 図 29号竪穴(1) 遺構遺物	99
第 37 図 3号竪穴 遺構遺物	52		
第 38 図 4号竪穴(1) 遺構遺物	54	第 73 図 29号竪穴(2) 遺物、31号竪穴(1) 遺構	
第 39 図 4号竪穴(2) 遺物、5号竪穴(1) 遺構	55		
第 40 図 5号竪穴(2) 遺物	56		
第 41 図 5号竪穴(3) 遺物	57		
第 42 図 5号竪穴(4) 遺物	58		

.....	100
第 74 図 31 号竪穴 (2) 遺物	101
第 75 図 32 号竪穴 遺構遺物	103
第 76 図 33 号竪穴 (1) 遺構	105
第 77 図 33 号竪穴 (2) 遺物	106
第 78 図 34 号竪穴 遺構遺物	107
第 79 図 35 号竪穴 (1) 遺構	108
第 80 図 35 号竪穴 (2) 遺物	109
第 81 図 35 号竪穴 (3) 遺物	110
第 82 図 36 号竪穴 (1) 遺構遺物	111
第 83 図 36 号竪穴 (2) 遺物	112
第 84 図 37 号竪穴 (1) 遺構	114
第 85 図 38 号竪穴 (1) 遺構	115
第 86 図 37 号竪穴 (2) 遺物、38 号竪穴 (2) 遺物	116
.....	116
第 87 図 39 号竪穴 遺構、40 号竪穴 遺構遺物	117
第 88 図 41 号竪穴 (1) 遺構遺物	119
第 89 図 41 号竪穴 (2) 遺物	120
第 90 図 42 号竪穴 (1) 遺構	121
第 91 図 43 号竪穴 (1) 遺構	123
第 92 図 42 号竪穴 (2) 遺物、43 号竪穴 (2) 遺物、44 号竪穴 遺構遺物	124
.....	124
第 93 図 45 号竪穴 遺構遺物	125
第 94 図 46 号竪穴 遺構遺物、47 号竪穴 (1) 遺構	127
.....	127
第 95 図 47 号竪穴 (2) 遺物	128
第 96 図 47 号竪穴 (3) 遺物	129
第 97 図 47 号竪穴 (4) 遺物、48 号竪穴 (1) 遺構、49 号竪穴 (1) 遺構	130
.....	130
第 98 図 48 号竪穴 (2) 遺物	131
第 99 図 49 号竪穴 (2) 遺物、50 号竪穴 遺構遺物	132
.....	132
第 100 図 51 号竪穴 (1) 遺構遺物	134
第 101 図 51 号竪穴 (2) 遺物	135
第 102 図 52 号竪穴 遺構遺物、53 号竪穴 (1) 遺構、54 号竪穴 (1) 遺構	137
.....	137
第 103 図 53 号竪穴 (2) 遺物、54 号竪穴 (2) 遺物	138
.....	138
第 104 図 55 号竪穴 (1) 遺構、56 号竪穴 (1) 遺構、57 号竪穴 (1) 遺構	140
.....	140
第 105 図 55 号竪穴 (2) 遺物、56 号竪穴 (2) 遺物、57 号竪穴 (2) 遺物	141
.....	141
第 106 図 58 号竪穴 遺構遺物、59 号竪穴 (1) 遺構	143
.....	143
第 107 図 59 号竪穴 (2) 遺物	144
.....	144
第 108 図 60 号竪穴 (1) 遺構遺物	145
.....	145
第 109 図 60 号竪穴 (2) 遺物	146
.....	146
第 110 図 61 号竪穴 遺構遺物	147
.....	147
第 111 図 62 号竪穴 遺構遺物、63 号竪穴 遺構遺物	149
.....	149
第 112 図 64 号竪穴 遺構遺物	151
.....	151
第 113 図 65 号竪穴 遺構遺物	152
.....	152
第 114 図 66 号竪穴 遺構遺物、67 号竪穴 遺構遺物	153
.....	153
第 115 図 68 号竪穴 遺構遺物	155
.....	155
第 116 図 69 号竪穴 遺構遺物、70 号竪穴 遺構遺物	156
.....	156
第 117 図 71 号竪穴 遺構遺物	157
.....	157
第 118 図 72 号竪穴 (1) 遺構、73 号竪穴 (1) 遺構	159
.....	159
第 119 図 72 号竪穴 (2) 遺物、73 号竪穴 (2) 遺物、74 号竪穴 (1) 遺物、76 号竪穴 (1) 遺物	160
.....	160
第 120 図 74 号竪穴 (2) 遺構、75 号竪穴 遺構、76 号竪穴 (2) 遺構	162
.....	162
第 121 図 77 号竪穴 遺構、78 号竪穴 遺構	163
.....	163
第 122 図 79 号竪穴 (1) 遺構、80 号竪穴 (1) 遺構	165
.....	165
第 123 図 79 号竪穴 (2) 遺物、80 号竪穴 (2) 遺物	166
.....	166
第 124 図 80 号竪穴 (3) 遺物	167
.....	167
第 125 図 81 号竪穴 遺構遺物	168
.....	168
第 126 図 82 号竪穴 遺構遺物、85 号竪穴 遺構遺物	170
.....	170
第 127 図 83 号竪穴 遺構、84 号竪穴 遺構遺物	171
.....	171
第 128 図 86 号竪穴 (1) 遺構遺物	172
.....	172
第 129 図 86 号竪穴 (2) 遺物	173
.....	173
第 130 図 87 号竪穴 (1) 遺構	174
.....	174
第 131 図 87 号竪穴 (2) 遺物	175
.....	175
第 132 図 88 号竪穴 (1) 遺構	176
.....	176
第 133 図 88 号竪穴 (2) 遺物	177
.....	177
第 134 図 根田代遺跡調査区と環濠	179
.....	179
第 135 図 A 地点環濠 (1) 遺構	180
.....	180
第 136 図 B 地点環濠 (1) 遺構	181
.....	181
第 137 図 B 地点環濠 (2) 遺構	182
.....	182
第 138 図 A 地点環濠 (2) 遺物	183
.....	183
第 139 図 A 地点環濠 (3) 遺物	184
.....	184
第 140 図 A 地点環濠 (4) 遺物	185
.....	185
第 141 図 A 地点環濠 (5) 遺物	186
.....	186
第 142 図 A 地点環濠 (6) 遺物	187
.....	187
第 143 図 A 地点環濠 (7) 遺物	188
.....	188
第 144 図 A 地点環濠 (8) 遺物	189
.....	189
第 145 図 A 地点環濠 (9) 遺物	190
.....	190

第146図	A 地点環濠(10) 遺物	191	第190図	8号墳(1) 遺構	238
第147図	A 地点環濠(11) 遺物	192	第191図	8号墳(2) 遺構遺物	239
第148図	A 地点環濠(12) 遺物	193	第192図	8号墳(3) 遺物	240
第149図	A 地点環濠(13) 遺物	194	第193図	9号墳 遺構	241
第150図	A 地点環濠(14) 遺物	195	第194図	1号土坑・2号土坑・3号土坑 遺構遺物	244
第151図	A 地点環濠(15) 遺物	196	第195図	4号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑・8号土坑 遺構	245
第152図	A 地点環濠(16) 遺物	197	第196図	9号土坑・12号土坑 遺構	246
第153図	A 地点環濠(17) 遺物	198	第197図	10号土坑・11号土坑 遺構	247
第154図	A 地点環濠(18) 遺物	199	第198図	1号土坑・3号土坑・4号土坑・9号土坑・10号土坑・11号土坑・12号土坑 遺物	248
第155図	A 地点環濠(19) 遺物	200	第199図	1号地下式土坑・2号地下式土坑 遺構遺物	249
第156図	A 地点環濠(20) 遺物	201	第200図	3号地下式土坑・炭窯 遺構	250
第157図	A 地点環濠(21) 遺物	202	第201図	1・2・3・4号粘土採掘坑 遺構	252
第158図	A 地点環濠(22) 遺物	203	第202図	土手 遺構	259
第159図	A 地点環濠(23) 遺物	204	第203図	道路跡 遺構	260
第160図	A 地点環濠(24) 遺物	205	第204図	中世 遺物	261
第161図	A 地点環濠(25) 遺物、B 地点環濠(3) 遺物	206	第205図	中世陶磁器出土組成比率	262
第162図	B 地点環濠(4) 遺物	207	第206図	北面セクションJ7-K7 の重鉱物組成および火山ガラス比	266
第163図	B 地点環濠(5) 遺物	208	第207図	根田代遺跡弥生竪穴住居覆土内貝層貝種組成	270
第164図	B 地点環濠(6) 遺物	209	第208図	根田代遺跡貝層出土ハマグリ・イボキサゴの大きさ	271
第165図	環濠・地点不明出土石器	210	第209図	23号竪穴貝層内出土貝製品	272
第166図	環濠・地点不明出土土製品	211	第210図	根田代遺跡の変遷(1)	277
第167図	1号溝 遺構遺物	212	第211図	根田代遺跡の変遷(2)	278
第168図	2号墳(1) 遺構	214	第212図	根田代遺跡の変遷(3)	279
第169図	2号墳(2) 遺物	215	第213図	根田代遺跡の変遷(4)	280
第170図	3号墳(1) 遺構	216	第214図	根田代遺跡の変遷(5)	281
第171図	3号墳(2) 遺構遺物	217	第215図	環濠出土土器層序別層性比	287
第172図	4号墳 遺構遺物	219	第216図	環濠層位別出土土器(I-P区)	288
第173図	B 地点(5号墳周辺) 地形図	220	第217図	環濠層位別出土土器(Q-X区)	289
第174図	5号墳(1) 遺構	221	第218図	宮ノ台式・久ヶ原1・2式甕形土器変遷	291
第175図	5号墳(2) 遺構	222	第219図	南関東地方環濠集落分布図	294
第176図	5号墳(3) 主体部	223	第220図	根田代遺跡・台遺跡・御林跡遺跡全体図	296
第177図	5号墳(4) 主体部	224	第221図	台遺跡B地点出土土器	297
第178図	5号墳(5) 主体部	225	第222図	向原台遺跡・祇園原貝塚上層全体図	299
第179図	5号墳(6) 主体部	226	第223図	菊間遺跡群・菊間手永遺跡環濠集落群	301
第180図	5号墳(7) 石室内人骨・遺物出土状況	227	第224図	村田川中流域の環濠集落群	303
第181図	5号墳(8) 遺物	228	第225図	大厩遺跡全体図	304
第182図	5号墳(9) 遺物	229	第226図	潤井戸西山遺跡全体図	305
第183図	6号墳(1) 遺構	230			
第184図	6号墳(2) 主体部	231			
第185図	6号墳(3) 遺物	232			
第186図	6号墳(4) 遺物	233			
第187図	根田6・7・8号墳出土ガラス玉法量分布図	234			
第188図	7号墳(1) 遺構	235			
第189図	7号墳(2) 遺物	236			

第227図 草刈遺跡・南総中学遺跡全体図	307	第232図 市原市域集落遺跡群(3)後期山田橋式期	314
第228図 千葉県の環濠集落(1)弥生時代中期	308	第233図 草刈遺跡・草刈六之台遺跡全体図	316
第229図 千葉県の環濠集落(2)弥生時代後期～古墳時代前期	309	第234図 竪穴住居跡規模比較	319
第230図 市原市域集落遺跡群(1)中期	312	第235図 甕形土器の容量変化	320
第231図 市原市域集落遺跡群(2)後期久ヶ原式期	313	第236図 山田橋遺跡群の変遷	321

写真図版目次

- 図版1 市原台地全景(養老川上空付近から北東方向)1978年度撮影 国分寺台全景(市原市庁舎上空付近から北西方)1978年度撮影
- 図版2 根田代遺跡(右上、調査前)、台遺跡C地点(下)、御林跡遺跡(左上)1978年度撮影 根田代遺跡(右上、調査前)、御林跡遺跡 1978年度撮影
- 図版3 根田代遺跡全景
- 図版4 根田代遺跡全景 A地点南側環濠
- 図版5 A地点南西部環濠 A地点環濠L2区断面D
- 図版6 A地点全景 A地点環濠
- 図版7 1号竪穴 2号竪穴 3号竪穴 3号竪穴内土坑 4号竪穴 5号竪穴 5号竪穴遺物出土状況
- 図版8 5号竪穴遺物出土状況 6号竪穴 7号竪穴 7号竪穴貯蔵穴遺物出土状況
- 図版9 7号竪穴貯蔵穴 8・9号竪穴 10号竪穴 11号竪穴 11号竪穴遺物出土状況 12号竪穴 13・14・15号竪穴
- 図版10 18・16号竪穴 19号竪穴 19号竪穴貯蔵穴 19号竪穴貯蔵穴遺物出土状況 20号竪穴・1号粘土採掘坑 21号竪穴・2号粘土採掘坑 22・23・24号竪穴 22・24・25号竪穴
- 図版11 22号竪穴遺物出土状況 25号竪穴 25号竪穴遺物出土状況 26号竪穴 27号竪穴 28号竪穴 29号竪穴 30号竪穴・5～8号土坑
- 図版12 31号竪穴 32号竪穴 32号竪穴遺物出土状況 33号竪穴 34号竪穴 35号竪穴
- 図版13 35号竪穴遺物出土状況 36号竪穴 37号竪穴 38号竪穴・3号粘土採掘坑 37・38号竪穴・3号粘土採掘坑
- 図版14 39号竪穴 40号竪穴 41号竪穴 42・43号竪穴 44号竪穴 45号竪穴 46号竪穴
- 図版15 47号竪穴 48・49号竪穴 50号竪穴 51号竪穴 51号竪穴遺物出土状況
- 図版16 52・53・54号竪穴 55・56号竪穴 57号竪穴 57号竪穴遺物出土状況 58号竪穴 59号竪穴 60号竪穴 61号竪穴
- 図版17 62号竪穴 63号竪穴 64号竪穴 65号竪穴 65号竪穴炉 66号竪穴 68号竪穴 68号竪穴炉内埋設土器
- 図版18 67号竪穴 69号竪穴 70号竪穴 71号竪穴 72・73号竪穴 74号竪穴 75・76号竪穴
- 図版19 77号竪穴 78号竪穴 79号竪穴 80号竪穴 81号竪穴 82号竪穴 83号竪穴
- 図版20 84号竪穴 85号竪穴 86号竪穴 86号竪穴遺物出土状況 86号竪穴貯蔵穴 88号竪穴
- 図版21 1号土坑 1号土坑遺物出土状況 2号土坑 3号土坑
- 図版22 3号土坑 4号土坑 4号土坑人骨出土状況 9号土坑 10号土坑 11号土坑
- 図版23 11号土坑 12号土坑 1号溝 1号溝遺物出土状況 A地点環濠J2区遺物出土状況 A地点環濠L2区断面D
- 図版24 A地点環濠L2区遺物出土状況 A地点環濠N2区 A地点環濠N2区遺物出土状況 A地点環濠R2・3区断面J A地点環濠U3区断面M A地点環濠X3・4区断面P B地点環濠
- 図版25 A地点環濠遠景 B地点環濠 B地点環濠北端部
- 図版26 A地点環濠遠景 A地点環濠I1・2区断面A A地点環濠J2区 2号墳 2号墳周溝内遺物出土状況
- 図版27 2号墳周溝内遺物出土状況 3号墳 3号墳周溝内遺物出土状況 4号墳
- 図版28 5号墳調査前 5号墳 5号墳主体部

- 図版29 5号墳主体部 5号墳主体部人骨出土状況
- 図版30 5号墳主体部 6号墳 6号墳主体部 6号墳主体部遺物出土状況
- 図版31 7号墳 7号墳主体部 7号墳主体部遺物出土状況 8号墳 8号墳主体部
- 図版32 8号墳主体部 8号墳主体部遺物出土状況 9号墳主体部 1号地下式土坑 3号地下式土坑
- 図版33 2号地下式土坑 炭窯 土手 道路遺構中央部
- 図版34 道路遺構東端部 旧石器調査区全景 旧石器調査区東壁断面 旧石器調査区北壁断面 旧石器調査区遺物出土状況 旧石器調査区西壁断面
- 図版35 根田代遺跡出土宮ノ台式・久ヶ原式土器 根田代遺跡出土磨製石斧
- 図版36 根田6号墳出土玉類 根田7・8号墳出土玉類、耳環
- 図版37 玉類 6号墳 7号墳 8号墳
- 図版38 玉類 3号墳 6号墳
- 図版39 玉類 6号墳 7号墳 8号墳
- 図版40 弥生土器 1号豎穴 3号豎穴 4号豎穴 5号豎穴
- 図版41 弥生土器 3号豎穴 5号豎穴
- 図版42 弥生土器 5号豎穴
- 図版43 弥生土器 5号豎穴
- 図版44 弥生土器 5号豎穴 6号豎穴 7号豎穴
- 図版45 弥生土器 8号豎穴 11号豎穴 14号豎穴 15号豎穴
- 図版46 弥生土器 16号豎穴 19号豎穴 20号豎穴 22号豎穴
- 図版47 弥生土器 22号豎穴 23号豎穴 24号豎穴
- 図版48 弥生土器 24号豎穴 26号豎穴 28号豎穴
- 図版49 弥生土器 29号豎穴 31号豎穴 32号豎穴 33号豎穴 35号豎穴
- 図版50 弥生土器 35号豎穴 41号豎穴 45号豎穴
- 図版51 弥生土器 47号豎穴 48号豎穴 51号豎穴
- 図版52 弥生土器 51号豎穴 52号豎穴 53号豎穴
- 図版53 弥生土器 53号豎穴 54号豎穴 57号豎穴 59号豎穴 60号豎穴 65号豎穴 68号豎穴
- 図版54 弥生土器 71号豎穴 72・73号豎穴 76号豎穴 79号豎穴
- 図版55 弥生土器・土師器 79号豎穴 80号豎穴
- 図版56 弥生土器・土師器 80号豎穴 81号豎穴
- 図版57 弥生土器・土師器・土製品 81号豎穴 84号豎穴 86号豎穴 87号豎穴
- 図版58 弥生土器・土師器 87号豎穴 環濠(A地点)B2区
- 図版59 弥生土器 環濠(A地点)A2区 環濠(A地点)B2区 環濠(A地点)C2区 環濠(A地点)J2区
- 図版60 弥生土器 環濠(A地点)J2区 環濠(A地点)K2区
- 図版61 弥生土器 環濠(A地点)K2区 環濠(A地点)L2区
- 図版62 弥生土器 環濠(A地点)L2区 環濠(A地点)M2区
- 図版63 弥生土器 環濠(A地点)N2区
- 図版64 弥生土器 環濠(A地点)N2区 環濠(A地点)P2区 環濠(A地点)Q2区 環濠(A地点)R2・3区
- 図版65 弥生土器 環濠(A地点)S2・3区 環濠(A地点)R2・3区
- 図版66 弥生土器 環濠(A地点)S2・3区 環濠(A地点)T3区 環濠(A地点)U3区
- 図版67 弥生土器 環濠(A地点)U3区 環濠(A地点)V3区 環濠(A地点)W3区
- 図版68 弥生土器 環濠(A地点)W3区 環濠(A地点)X3区
- 図版69 弥生土器 環濠(A地点)X3区 環濠(A地点)Y3・4区 環濠(A地点)b5区 環濠(A地点)d5区 環濠(A地点)e6区
- 図版70 弥生土器 環濠(A地点)e6区 環濠(A地点)e7区 環濠(B地点)D4区 環濠(B地点)E4区 環濠(B地点)E5区
- 図版71 弥生土器・土師器 環濠(B地点)G5区
- 図版72 弥生土器・土師器 環濠(B地点)G5区 1号溝 1号土坑 2号土坑 2号墳

- 図版73 土師器 2号墳 4号墳
- 図版74 土師器・須恵器・カワラケ 3号墳 5号墳 7号墳 8号墳 中世
- 図版75 旧石器時代石器
- 図版76 旧石器時代石器
- 図版77 繩文土器・縄文石器・弥生石器
- 図版78 弥生石器
- 図版79 土製品・5号墳出土遺物
- 図版80 玉類・耳環
- 図版81 5号墳出土鉄器・中世陶磁器他
- 図版82 貝
- 図版83 弥生土器詳細 1号竪穴 2号竪穴 3号竪穴 4号竪穴
- 図版84 弥生土器詳細 4号竪穴 5号竪穴
- 図版85 弥生土器詳細 5号竪穴 6号竪穴 7号竪穴 8号竪穴 11号竪穴
- 図版86 弥生土器詳細 11号竪穴 13号竪穴 13・14号竪穴 14号竪穴 16号竪穴 18号竪穴 19号竪穴
- 図版87 弥生土器詳細 20号竪穴 21号竪穴 22号竪穴
- 図版88 弥生土器詳細 22号竪穴 23号竪穴
- 図版89 弥生土器詳細 23号竪穴 24号竪穴
- 図版90 弥生土器詳細 24号竪穴 25号竪穴 26号竪穴
- 図版91 弥生土器詳細 27号竪穴 28号竪穴 29号竪穴 31号竪穴
- 図版92 弥生土器詳細 31号竪穴 32号竪穴 33号竪穴
- 図版93 弥生土器詳細 33号竪穴 34号竪穴 35号竪穴
- 図版94 弥生土器詳細 35号竪穴 36号竪穴 37号竪穴
- 図版95 弥生土器詳細 38号竪穴 41号竪穴
- 図版96 弥生土器詳細 41号竪穴 42・43号竪穴 45号竪穴 46号竪穴 47号竪穴
- 図版97 弥生土器詳細 47号竪穴 48号竪穴 49号竪穴
- 図版98 弥生土器詳細 49号竪穴 51号竪穴
- 図版99 弥生土器詳細 51号竪穴 52号竪穴 53号竪穴 54号竪穴 55・56号竪穴 57号竪穴 58号竪穴
- 図版100 弥生土器詳細 58号竪穴 59号竪穴 60号竪穴
- 図版101 弥生土器詳細 60号竪穴 61号竪穴 64号竪穴 65号竪穴 67号竪穴 68号竪穴
- 図版102 弥生土器詳細 68号竪穴 69号竪穴 70号竪穴 71号竪穴 72・73号竪穴
- 図版103 弥生土器詳細 72・73号竪穴 74号竪穴 76号竪穴 80号竪穴 82号竪穴
- 図版104 弥生土器詳細 85号竪穴 86号竪穴 88号竪穴 環濠(A地点)A2区 環濠(A地点)B2区 環濠(A地点)I2区
環濠(A地点)J2区
- 図版105 弥生土器詳細 環濠(A地点)J2区 環濠(A地点)K2区 環濠(A地点)L2区
- 図版106 弥生土器詳細 環濠(A地点)M2区 環濠(A地点)N2区
- 図版107 弥生土器詳細 環濠(A地点)N2区 環濠(A地点)O2区 環濠(A地点)P2区
- 図版108 弥生土器詳細 環濠(A地点)P2区 環濠(A地点)Q2区
- 図版109 弥生土器詳細 環濠(A地点)Q2・3区 環濠(A地点)R2・3区 環濠(A地点)S2区 環濠(A地点)S2・3区
- 図版110 弥生土器詳細 環濠(A地点)S3区 環濠(A地点)S2・3区 環濠(A地点)T2区
- 図版111 弥生土器詳細 環濠(A地点)T2区 環濠(A地点)T3区
- 図版112 弥生土器詳細 環濠(A地点)T3区 環濠(A地点)U3区
- 図版113 弥生土器詳細 環濠(A地点)U3区 環濠(A地点)V3区 環濠(A地点)W3区 環濠(A地点)X3区
- 図版114 弥生土器詳細 環濠(A地点)X3区 環濠(A地点)Y3・4区 環濠(A地点)b5区 環濠(A地点)e6区
- 図版115 弥生土器詳細 環濠(A地点)e6区 環濠(A地点)e7区 環濠(B地点)D4区 環濠(B地点)G5区 環濠(B地点)
)H6区
- 図版116 重鉱物・火山ガラス

表 目 次

第1表 旧石器時代調査区母岩別組成表	41
第2表 環濠規模計測値	178
第3表 根田代遺跡遺構一覧	253
第4表 根田代遺跡土坑・埋葬遺構一覧	253
第5表 根田代遺跡竪穴住居跡一覧	254
第6表 根田古墳群一覧	256
第7表 根田代遺跡地下式土坑一覧	256
第8表 根田代遺跡粘土採掘坑一覧	257
第9表 根田代遺跡A地点出土中世実測遺物観察表	263
第10表 不実測中世遺物	263
第11表 北面セクションJ7-K7の重鉱物・火山ガラス比分析結果	266
第12表 根田代遺跡軟体動物組成表	269
第13表 市原台地周辺地域宮ノ台式・久ヶ原式編年基準	285
第14表 A地点環濠地区・層位別土器出土量と時期	286
第15表 千葉県環濠集落(条濠)集落一覧	295
第16表 弥生時代中期から古墳時代前期の集落居住域規模	318
第17表 竪穴住居跡規模比較	318

表目次 (CD-ROM 収録)

第18表 旧石器時代石器観察表 (tab18)
第19表 弥生土器・土師器等観察表 (tab19)
第20表 弥生時代以降石器観察表 (tab20)
第21表 弥生時代以降土製品観察表 (tab21)
第22表 古墳等出土金属器観察表 (tab22)
第23表 古墳出土玉類観察表 (tab23)
第4-2表 根田代遺跡土坑・埋葬遺構一覧 (tab4-2)
第5-2表 根田代遺跡竪穴住居跡一覧 (tab5-2)
第6-2表 根田古墳群一覧 (tab6-2)
第7-2表 根田代遺跡地下式土坑一覧 (tab7-2)
第8-2表 根田代遺跡粘土採掘坑一覧 (tab8-2)

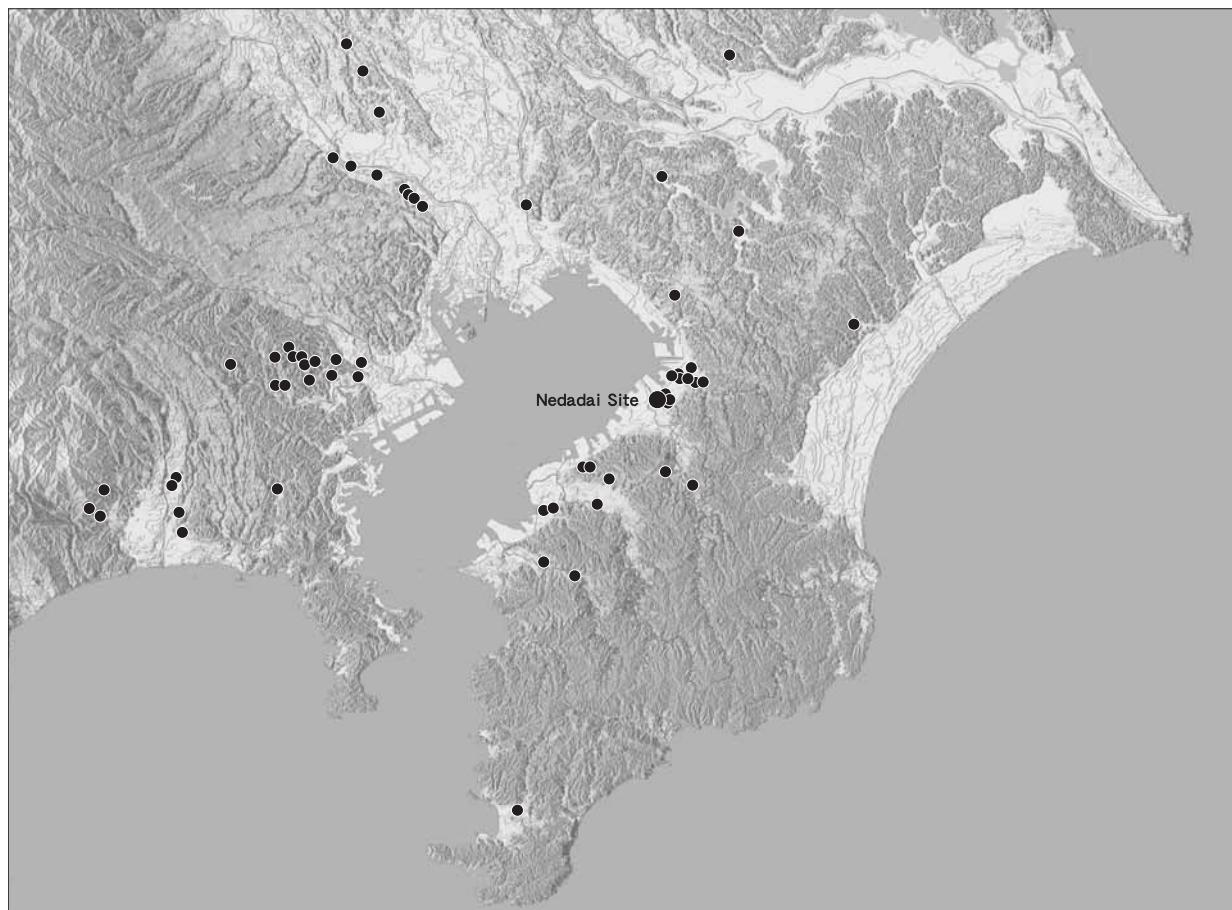
第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査にいたる経緯

昭和30年代後半から昭和40年代前半の高度成長期において、首都圏外縁に位置する市原市では、海岸部の京葉工業地帯とともに、内陸部でも大規模な宅地造成が行われるようになった。こうした状況の中で、現市原市庁舎のある国分寺台地区約380ヘクタールに対する区画整理が計画され、1970(昭和45)年に、市原市国分寺台地区画整理組合が設立された。これに対応する発掘調査体制として、1971(昭和46)年に市原市国分寺埋蔵文化財調査会がつくられ、実際に調査を担当する機関として、上総国分寺台遺跡調査団が結成された。

国分寺台の発掘調査は、当初、1972(昭和47)年から3ヵ年で完了する計画で進められたが、遺跡の把握が不充分であったことなどから大幅に計画が変更され、結果として1988(昭和63)年までの17年間にわたり実施されることとなった。調査遺跡数は、上総国分僧寺・尼寺跡を含む43遺跡、調査面積は、現状集計で537,270m²である。この間、調査団は1985(昭和60)年3月に解散し、その後の業務は、財団法人市原市文化財センターが引き継ぐこととなった。

一方、整理報告作業は、費用負担の問題から一時期進捗をみなかったが、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課の配慮により、補助事業として発掘調査を実施した遺跡を対象とし



第1図 根田代遺跡位置図(1) 南関東地方弥生時代中期環濠集落

て、1994(平成6)年度から補助事業として整理作業が行われることとなり、さらに、1995(平成7)年には、市原市と土地区画整理組合との協議がもたれ、費用負担の問題等が解決され、1997(平成9)年度から本格的に整理作業が開始されることになった。

今回報告する根田代遺跡の発掘調査は、1979(昭和54)年度、1980(昭和55)年度に行われた。本報告では、1979(昭和54)年度に実施した根田1号墳(国分寺台地区130号墳)調査区をのぞく、1980(昭和55)年度調査区を対象としている。1980(昭和55)年度の発掘調査は、上総国分寺台遺跡調査団(団長滝口宏)のもと、当時同調査団副団長であった平野元三郎が代表を務めていた平野考古学研究所が中心となって実施した。今回の整理作業は、財団法人市原市文化財センターが、市原市の委託を受けて行った。

第2節 遺跡の立地と概要

本遺跡は、千葉県市原市根田2丁目1~3、根田3丁目3・6・7他に所在する。調査段階の旧代表地番は根田416番地他であり、根田字代、根田字根田、惣社字辺田が含まれる。

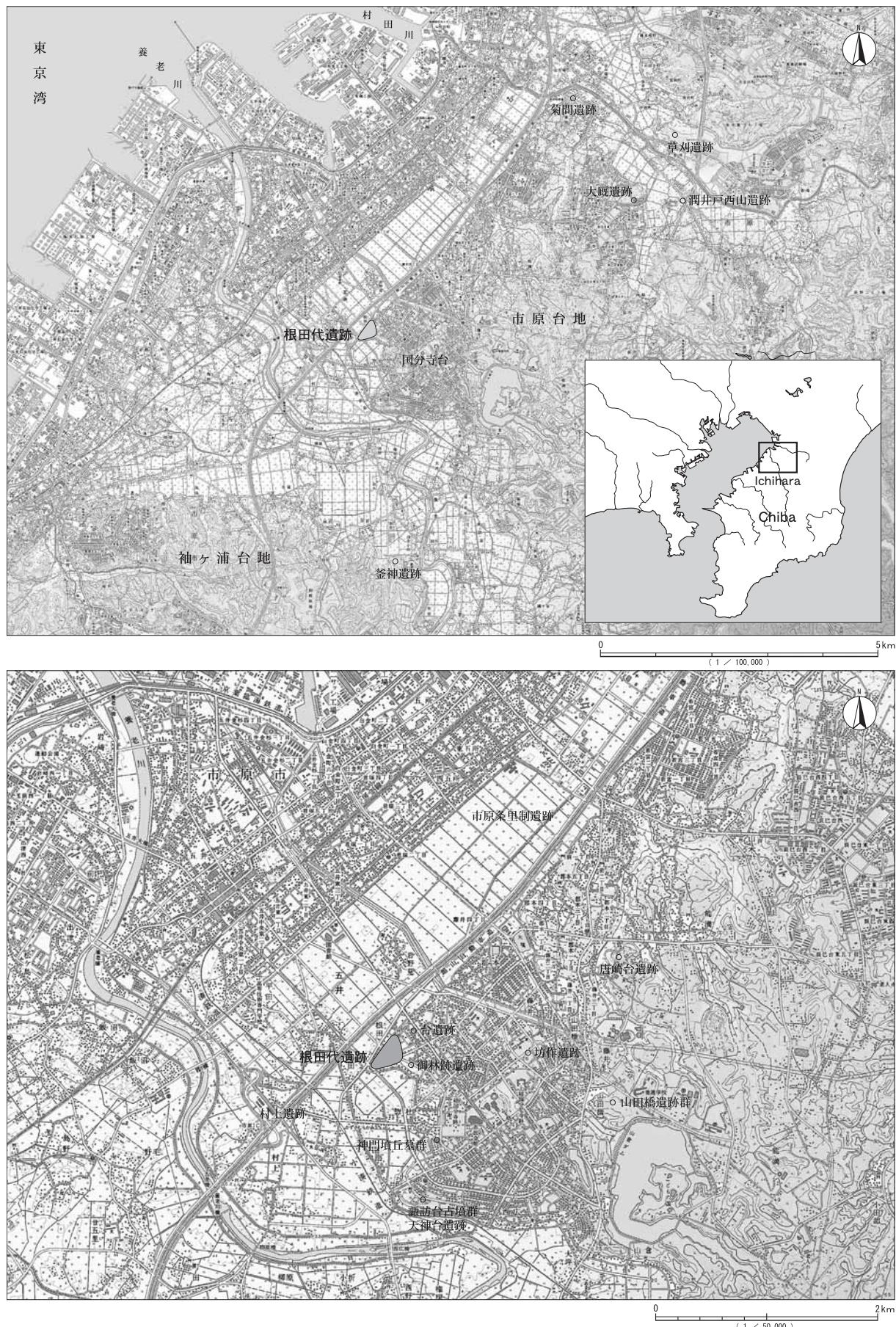
市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地は、養老川流域を境界とし、養老川右岸(東岸)から千葉市域境の村田川までが「市原台地」、養老川左岸(西岸)から袖ヶ浦市小櫃川までが「袖ヶ浦台地」と呼称されている。市原台地は、東京湾岸の低地をのぞむ北東・南西方向の海食崖であるが、台地内部は、養老川、村田川の支流および直接東京湾に流入する小河川によって樹枝状に開析されている。

根田代遺跡は、養老川右岸の市原台地北西端に位置し、北面に東京湾岸低地、西・南に養老川低地を望む。遺跡の立地する台地は、北東・南西方向約300m、北西・南東方向約170mの三角形状の独立丘陵であり、小支谷をはさみ、台遺跡(半田2003)、御林跡遺跡(木對2004)の所在する市原台地本体と対峙する。台地上は、全体に緩傾斜をもち、竪穴住居跡床面標高では、最高所19.77mから15.60mまでの比高がある。おおむね平坦面を形成する部分での標高は17~21mであり、低地面との比高は8~14mを測る。平坦部の面積はおよそ23,500m²である。なお、第12図調査区内確認面等高線については、航空写真測量図をもとにしたものであるが、作成時には、A地点北半部はすでに工事の進捗により削平されており、調査区全域を表現したものではない。

本遺跡は、地形的には独立しているものの、弥生時代の墓域は台遺跡側にもあったとみられ、台遺跡、御林跡遺跡とは有機的な関係が想定される。また、上総国分僧寺跡や神門古墳群(墳丘墓群)などは、いずれも本遺跡から1km圏内に所在するが、周辺遺跡の詳細については、国分寺台地区の報告書も順次刊行されつつあり、本報告において改めて述べることはしない。なお、弥生時代についての周辺遺跡の状況は、第4章第3節に詳述した。

本遺跡は、分布地図上「代遺跡」(遺跡No.713)、「根田古墳群」(遺跡No.714)として登録されている(市原市教育委員会1988、千葉県教育委員会1999)。ただ、遺跡名については若干混乱した状態にある。本遺跡は、概要(浅利1981)等において「根田遺跡」が呼称された経緯から、この遺跡名が一般に流布している。ただ、「根田遺跡」は、1985(昭和60)年度調査の御林跡遺跡においても使用され(米田1986)、混乱を生じている。また、「根田古墳群」についても、辺田古墳群に対して使用されたこ

調査の経緯と概要



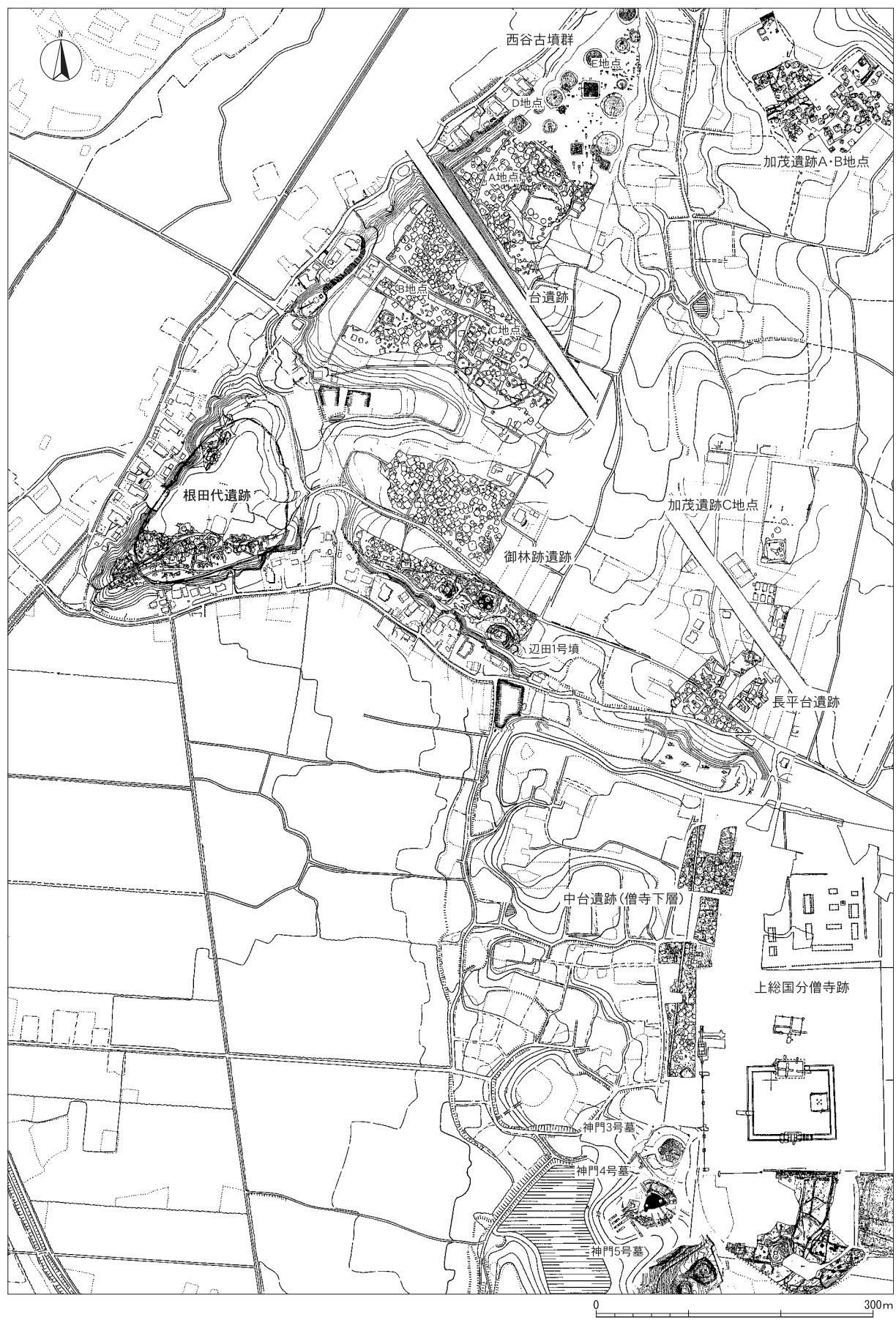
第2図 根田代遺跡位置図(2)

調査の経緯と概要



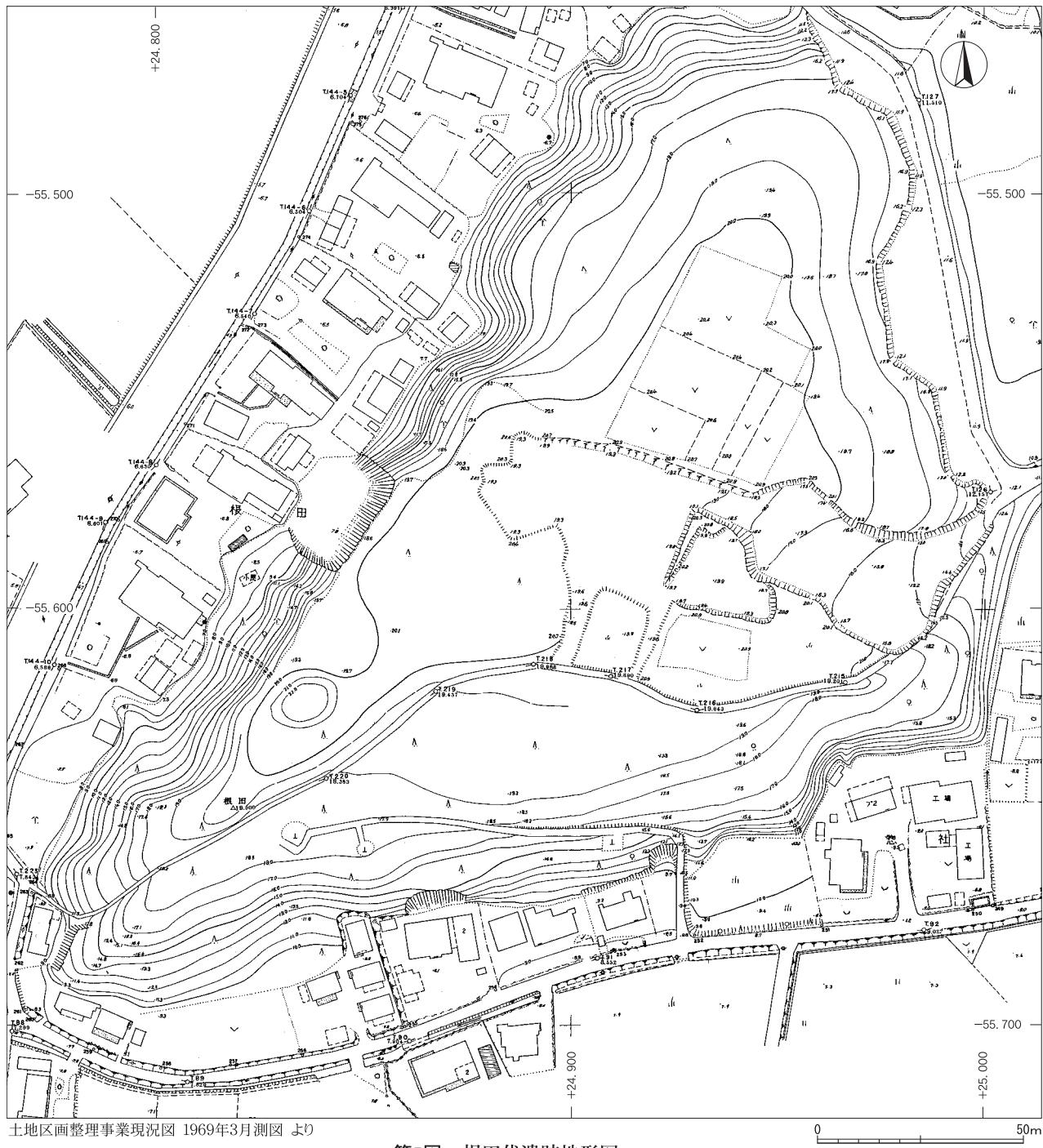
第3図 根田代遺跡と国分寺台遺跡群

調査の経緯と概要



第4図 根田代遺跡と周辺の調査遺跡

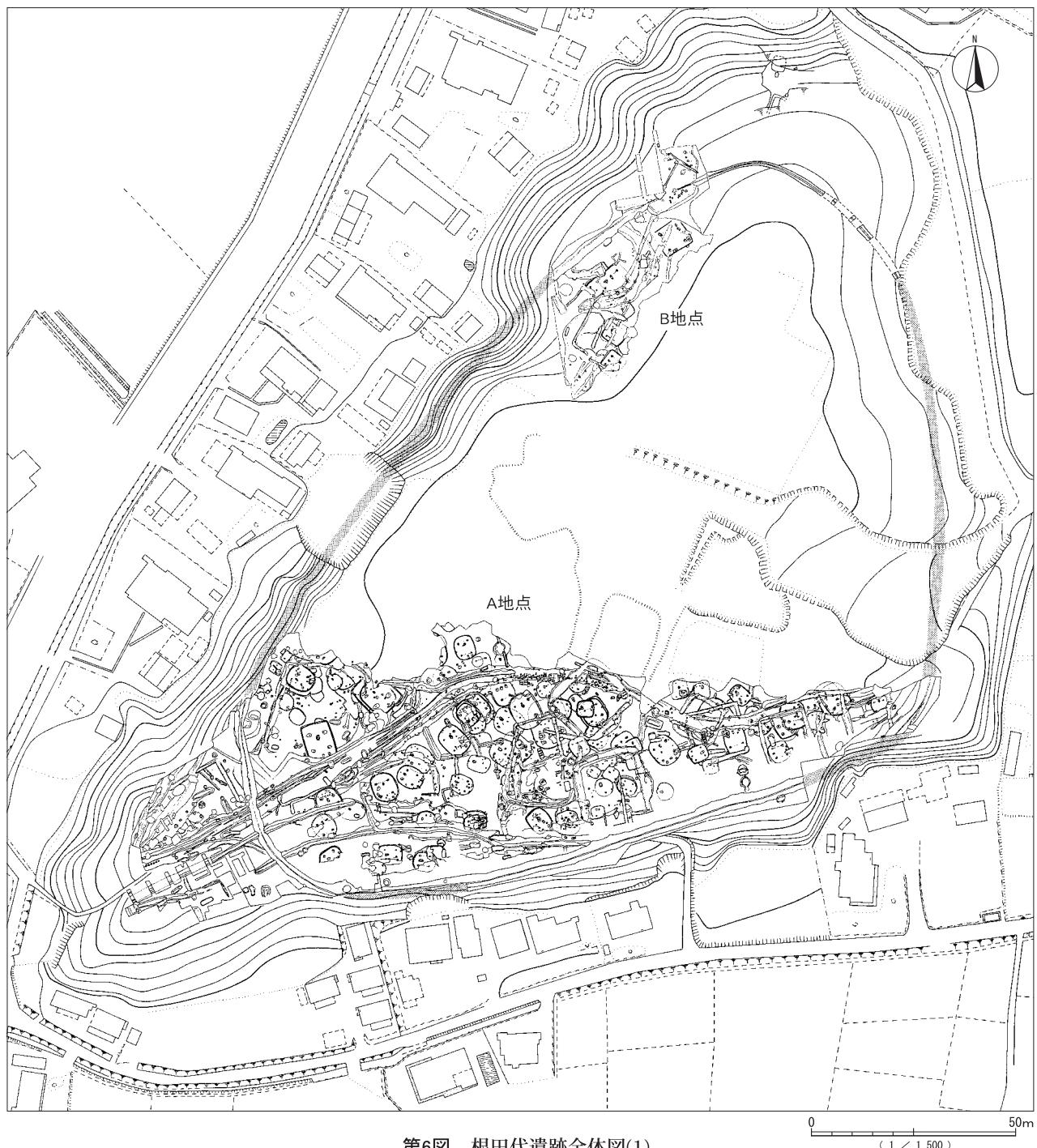
調査の経緯と概要



第5図 根田代遺跡地形図

とがある。ここでは、これらの混乱、誤用を正し、「根田代遺跡」、「根田古墳群」を正式名称とする。「代遺跡」に大字名「根田」を冠したのは、すでに「根田代遺跡」の呼称がみられることと(浅利2003)、隣接する「台遺跡」との混同を避けることによる。また、概要全体図では、A・B地点の呼称が本報告書と逆転している。ただし、概要時の記載は誤植であり、現場調査段階、遺物注記においても、南側調査区をA地点、北側調査区をB地点としており、本報告ではこれに従う。なお、本遺跡は、別に、「根田城跡(根田砦)」(遺跡No.989)として登録されているが、その根拠は明らかではない。少なくとも本報告対象区内に状況からは、その可能性は低いものと思われる(第2章第4節参照)。

遺跡は、区画整理事業開始以前に、中央部が海岸部の埋め立てともなう土砂採取より破壊されて

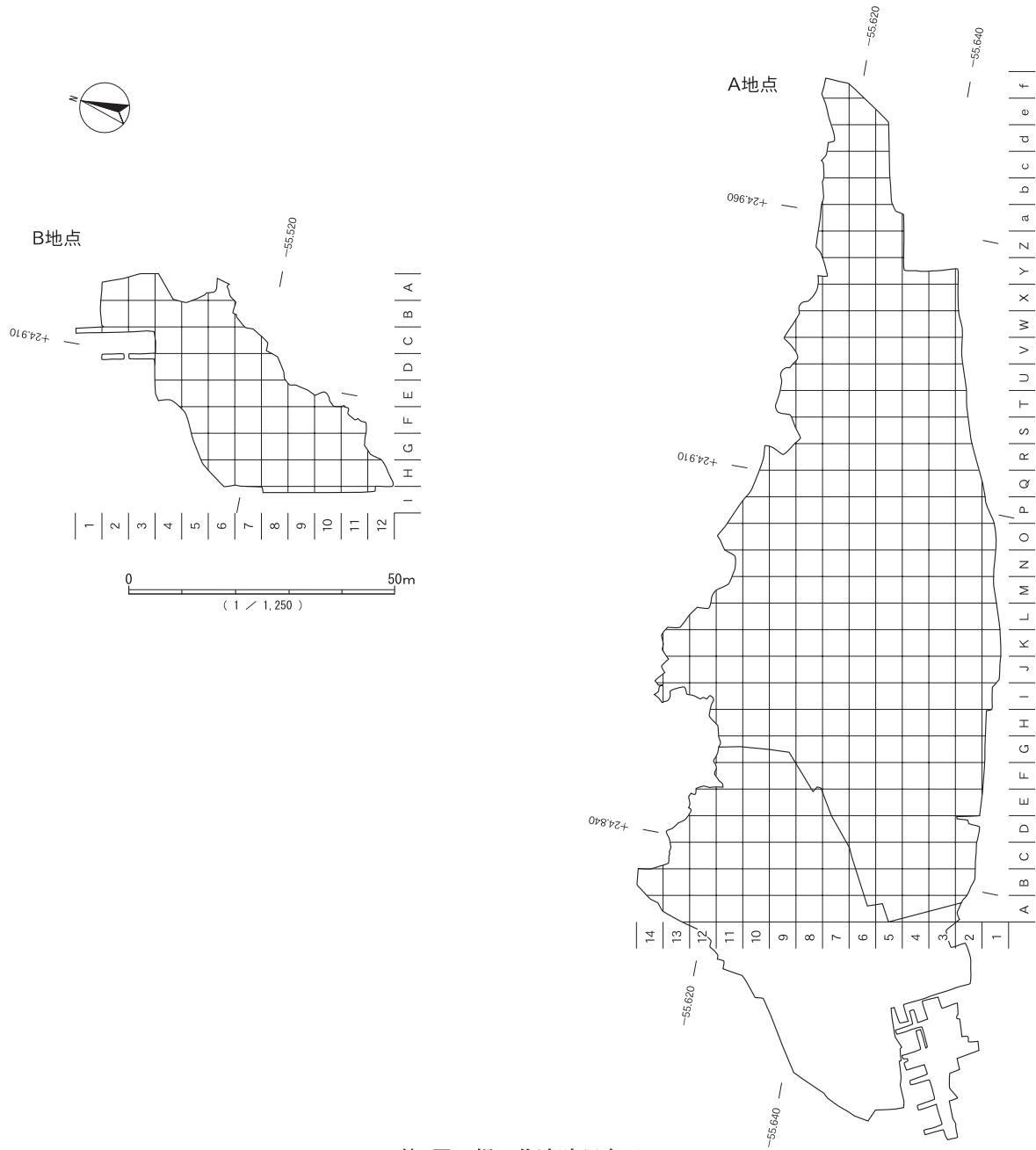


第6図 根田代遺跡全体図(1)

おり、その爪痕は、調査前1978(昭和53)年度の空中写真にみることができる(写真図版2)。1961(昭和36)年の空中写真(写真図版表紙)および、1963(昭和38)年10月測図の市原市基本図1/3,000では、遺跡中央部が畠地として利用されていたことがわかる。なお、周辺林地部分の中で、根田5号墳墳丘上には不動明王の祠がおかれ、その後調査にともない人骨の出土をみたことから、慰靈祭が行われている(p.22)。また、遺跡南東部土手内には、クスの古木が御神木として奉られていたとのことであるが、写真等記録類は存在しない。

第3節 発掘調査・整理作業の方法

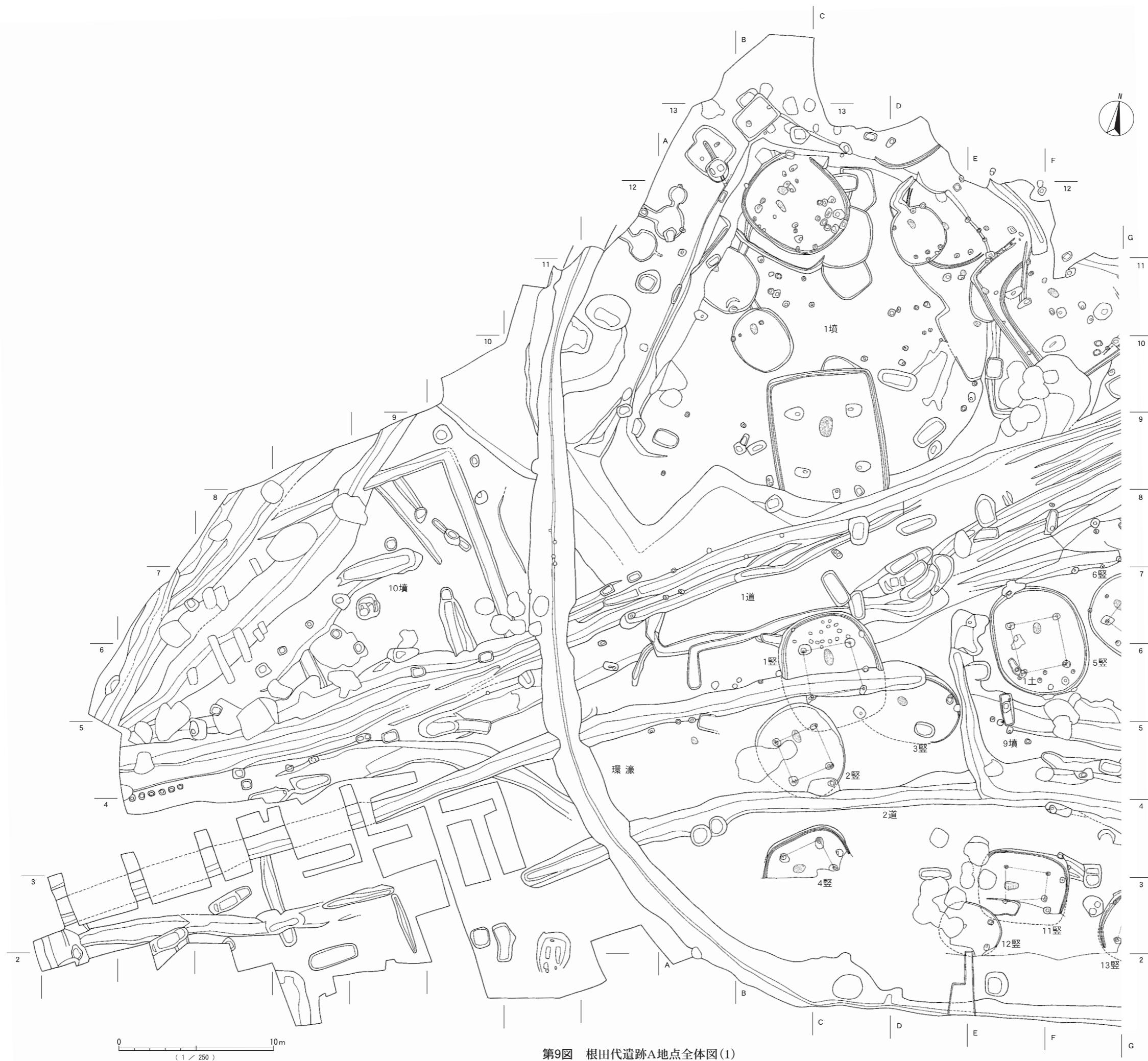
調査区は、5m × 5mの方眼網を設定、これを基本グリッドとした(第7図)。基本グリッドは任意の設定によるが、A地点南側で実施した航空写真測量をもとに、公共座標との整合を図った。基本グリッド南北は、真北方位に対して、11°西に偏している。基本グリッドの配列呼称は、A・B地点で一貫したものとなっていないが、遺物注記等も調査段階の呼称を使用しており、報告書作成にあたっての変更は行わなかった。なお、本報告平面図での各グリッド点の表示は、グリッド呼称の並びにかかわらず、各グリッドの北西隅を基点とした。ただ、竪穴住居跡等の遺構番号については、一部現場段階の混乱もみられたため、今回調査区西側から振り直している。各古墳の番号についても今回変更したが、これは、遺跡分布地図(市原市教育委員会 1988、千葉県教育委員会 1999)および、当地区の古墳群を最も総括的に把握している田中新史氏の呼称に従うこととした(田中 2000)。ただ、竪穴住居



第7図 根田代遺跡調査区



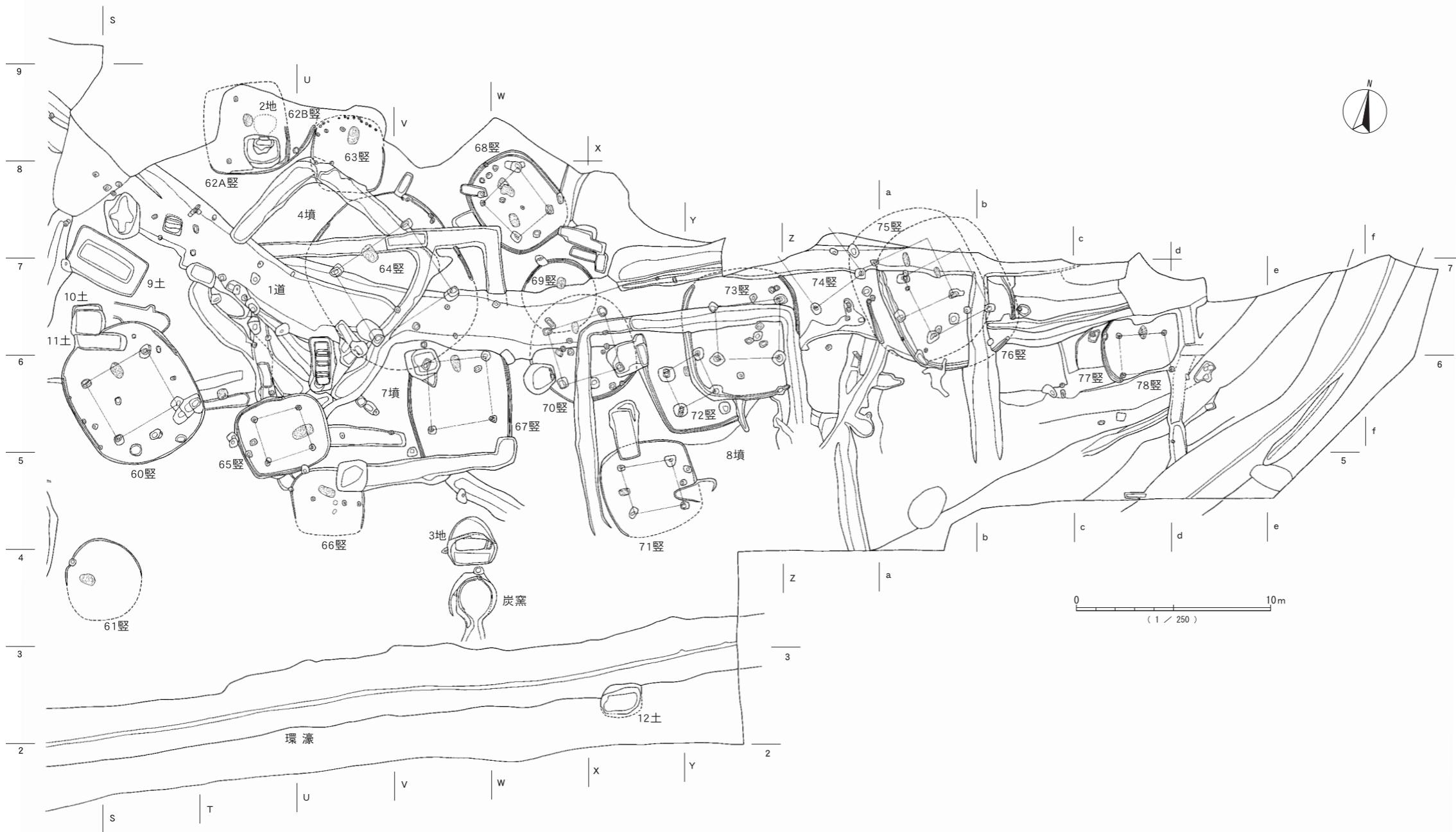
第8図 根田代遺跡全体図(2)



第9図 根田代遺跡A地点全体図(1)



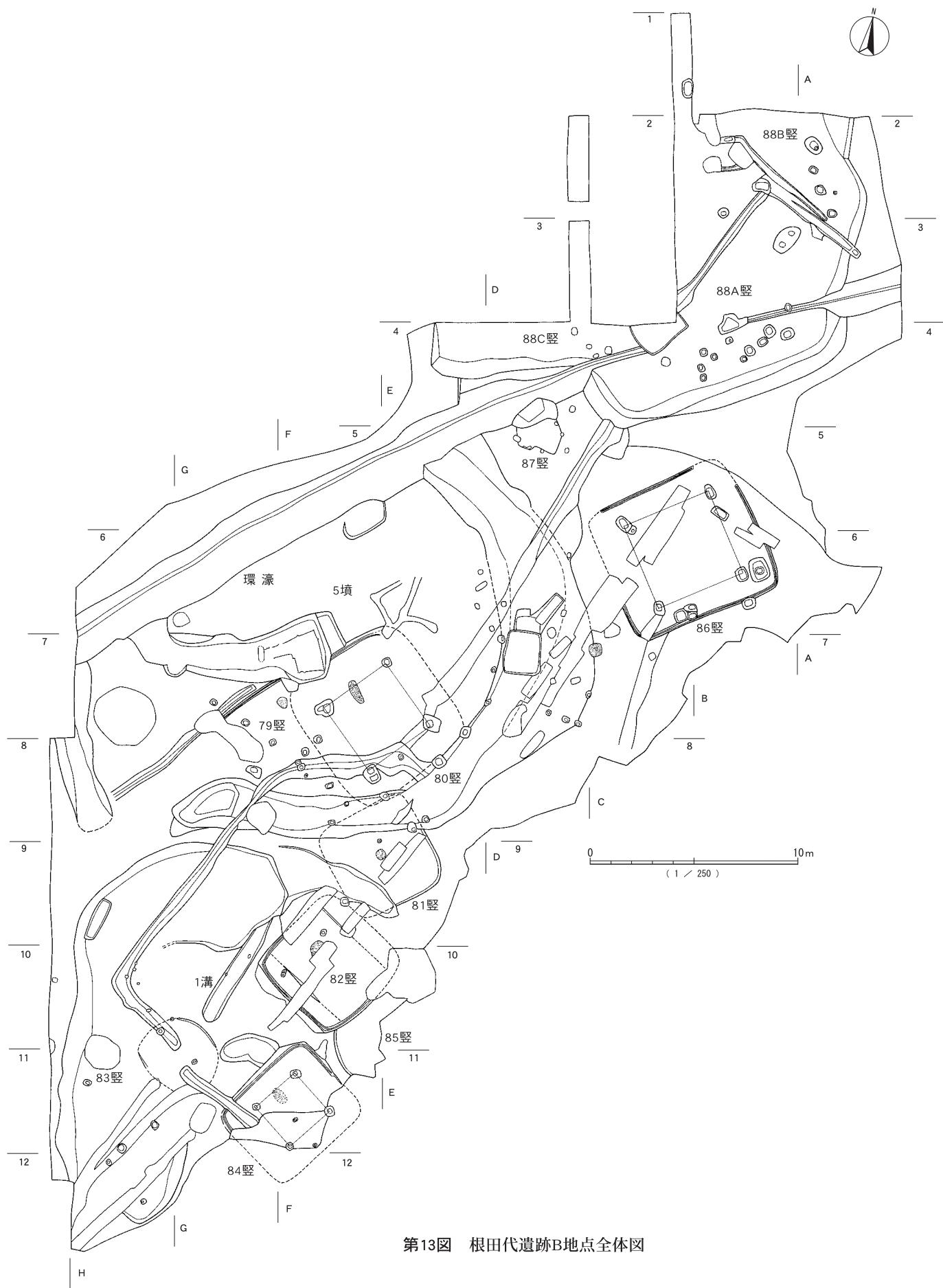
第10図 根田代遺跡A地点全体図(2)



第11図 根田代遺跡A地点全体図(3)



第12図 根田遺跡A地点時期別全体図



第13図 根田代遺跡B地点全体図

跡のA・B・C号の呼称については、結果として調査時の区分を踏襲したものとなった。本来、同位置での建て替え等限定した基準で使用すべきであるが、遺物整理と、遺構図面の整理が別個に行われたため、最終的な判断が遅れてしまい、再度振り直すことが困難となってしまった。

整理作業で最も苦慮したのは、遺構の重複関係についてである。これは、土層断面が、グリッドにもとづき表土から作成されていたため、遺構の重複関係の把握を目的とした場所の選択が行われていないこと、また、おそらく、豎穴の平面的な把握が不十分な段階で作成されたと思われ、断面図から明確な重複関係が読み取ることができなかつたものが多い。また、平面図も掘り上がり状態を基本とし、新旧関係にかかわる発掘過程についての情報が乏しかった。なお、土層断面交差部では、一部不整合を生じている部分もあったが、今回の整理作業では、極力手を加えないこととし、土層注記についても現場での記載をそのまま表化し掲載した。

こういった不明点も、調査後24年を経過した記録・記憶の経年劣化によるところが多いようにも思われる。調査中に造成工事が進む過酷な条件下にあっても、谷島一馬氏は現場での調査記録を残されており、これにもとづく記載も多い。

最低限整理作業での劣化を防ぐ必要から、とくに遺構内出土遺物については、先入観念による選別を行わず、徹底して実測を行うこととした。今回の整理作業は、他事業との担当職員配置の関係で、遺物実測を先行して行うこととなり、その段階では、遺構の把握が不十分なまま行う実測について、効率的ではないとも感じられたが、結局、最大限遺物実測を行い、判断材料を提示することが、本遺跡の状況においては最も有効な方法であったと考える。宮ノ台式の甕形土器胴部などについては、どうしても横走羽状文の選択が多くなってしまうが、その他有文土器については、掲載資料においても、ある程度組成比率を知ることが可能であると思われる。それでも、時間的な制約から、環濠出土土器のうち、層序不明の破片資料はかなりの部分を割愛した。また、記録類の記載にかかわらず、一部の遺物について所在をつかむことができなかつた。不明遺物についての不備は、何らかの機会で公にしていかなければならないと思われる。結果、弥生土器・土師器・須恵器の実測点数は3,614点におよぶこととなり、拓本断面図を含め1/4縮尺としたが、細部の観察、検証が可能な詳細写真(写真図版83~115)をできるだけ多数掲載した。

今回の整理作業は、フルデジタルでの入稿を方針として行った。その方法、仕様などについては、付編に記した。

第4節 根田代遺跡の概要

根田代遺跡は、遺跡面積およそ23,500m²に対して、約40%にあたる9,070m²について発掘調査が行われた。今回報告分は、A地点5,150m²、B地点1,710m²である。残念ながら、遺跡中心部の状況は、未来永劫明らかになることはないが、残された情報の整理、体系化を最大限進めなければならない。

本報告にもとづく検出遺構数は、豎穴(住居)跡95軒(建て替えを含め97軒)、環濠1条、溝1条、円墳1基、方墳7基、計8基の古墳、土坑12基、地下式土坑3基、粘土採掘坑4基、道路2条以上、土手状遺構であり、他に旧石器時代遺物集中地点がある。このうち、旧石器時代の調査は、国分寺台地区では、ほぼ唯一といえる調査事例である。

遺跡は、市原台地先端部の絶好地にあると思われるが、各時代の土地利用は、周辺遺跡と比較して

かならずしも高くはない。とくに縄文時代の使用頻度は意外なほど低く、確実に縄文時代としてとらえられる遺構は本報告対象区内には存在しない。

竪穴住居跡95軒は、いずれも弥生時代から古墳時代前期の所産と推定される。A地点83軒、B地点12軒である。時代別では、弥生時代85軒、弥生時代終末期から古墳時代前期前半が7軒、不明3軒、時期別では、弥生時代中期29~31軒、後期43~45軒、終末期2~4軒、古墳時代前期前半3~5軒、弥生時代不明10軒、不明3軒である。弥生時代と弥生時代終末期から古墳時代前期前半では、居住域の占地が大きく変わり、古墳時代前期には、A地点は墓域化する。

弥生時代中期宮ノ台式期の集落は、環濠によって囲繞される。環濠規模はおおむね復元が可能であり、総面積は19,830m²を測る。他に、宮ノ台式期の方形周溝墓の可能性も考えられる溝が1条検出されているが、対応する他の溝が検出されていない。

根田古墳群は、帆立貝形前方後円墳1基、円墳1基、方墳8基の計10基の古墳からなり、時期的には前期3基、後期2基、終末期5基であることが知られている(田中1981・2000)。このうち、終末期と想定される9号墳、および1号墳西側に想定されている10号墳については、調査段階では確実にはとらえられていなかったようである。本報告では、このうち、1979(昭和54)年度に調査された、前方後円墳1基(1号墳)、終末期方墳1基(10号墳)をのぞく、2号墳から9号墳の計8基の古墳について対象とする。本報告分の地点別内訳は、A地点7基、B地点1基の計8基であり、A地点の7基については、発掘調査時点で既に墳丘が失われており、周溝と主体部のみの調査となった。

土坑は、A地点で12基が検出されている。竪穴住居跡との重複関係および形状から、いずれも弥生時代およびそれ以降と推定されるが、細別時期、性格など詳細が明らかではないものが多い。時期的には、1号土坑が弥生時代後期、9号土坑が、その構造から古墳時代終末期の木棺土坑墓と考えられる。他に2・3・4号土坑で木棺痕跡が確認されており、とくに4号土坑では埋葬人骨が検出されている。ただし、これらの木棺土坑墓は、古墳時代前期の方墳に関連する可能性もあり、また、弥生時代後期には、累積的な墓域を形成せず、竪穴住居跡群内に混在する例がみられることから、時期的な特定は難しい。他の土坑も、規模等から、埋葬遺構の可能性が考えられるが、確証はない。埋葬遺構としては、他に、A地点で3基の地下式土坑が検出されている。いずれも、古墳時代終末期以降奈良時代を中心とする埋葬遺構と考えられる。

他に、発掘調査時点で、弥生時代の粘土採掘を目的とした土坑としてとらえられているものが4基、道路2条以上、土手がある。根田代遺跡では、奈良時代の地下式土坑墓以降、近現代にいたるまで、土地利用の痕跡が認められない。1979年度調査区では、中世の台地整形と推定される区画が認められるものの、台地平坦部については、明確な遺構を残してはいない。

なお、1979年度調査区では、根田1・10号墳の他に、弥生時代環濠、竪穴住居跡25軒、方形周溝墓2基、木棺墓(?)1基、奈良平安時代以降については、方形区画2基、土坑15基以上、中世墓5、中世甕棺1、炭窯などが検出されている(田中2000)。

なお、時期的な遺構の変遷については、第4章第1節に詳述した。

調査の経緯と概要

文 献

- 浅利幸一 1981「根田遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 浅利幸一 2003「市原台遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』
- 千葉県教育委員会 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) 千葉市・市原市・長生地区(改訂版)』
- 木對和紀 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 田中新史 1981「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 田中新史 2000『上総市原台の光芒』市原古墳群調査と上総国分寺豎穴住居跡台遺跡調査団 市原市古墳群刊行会
- 半田堅三 2003『市原市台遺跡B地点』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 米田耕之助 1986「根田遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』



根田5号墳上不動明王の祠と慰靈祭(高橋善松氏ほか、上写真同氏提供)

第2章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

(1) 調査の概要

根田代遺跡では旧石器時代の遺物集中地点の調査が行われた。当時国分寺台地区では旧石器時代の本格的な調査例がなく、遺物も上層遺構の覆土に混入していたものがほとんどであった。帰属層位が明らかであるという点では、本遺跡は唯一といってよい。第2黒色帯上部の資料として、一部はすでに紹介されている(田村・橋本1984)。

調査は、A地点の西側の地区において、上層遺構の調査終了後に行つた。調査地点は、I6・J6・J7・K6・K7・L6・L7区の7つのグリッド分であり、L7だけは5m角のグリッドのうち東側2m分を調査範囲から除いたものの、ほかの6箇所については全掘している。したがって調査総面積は、165m²(第14図)である。

調査は、J7・K7・L7区の北面15mとI6の西面5mの壁際を掘り下げ層位を確認した後、層位ごとに土層を掘り下げ、遺物を検出する作業を続けた。遺物は、平面位置・垂直位置を記録しながら採集し、後に層位別の平面図と垂直分布図を作成した。

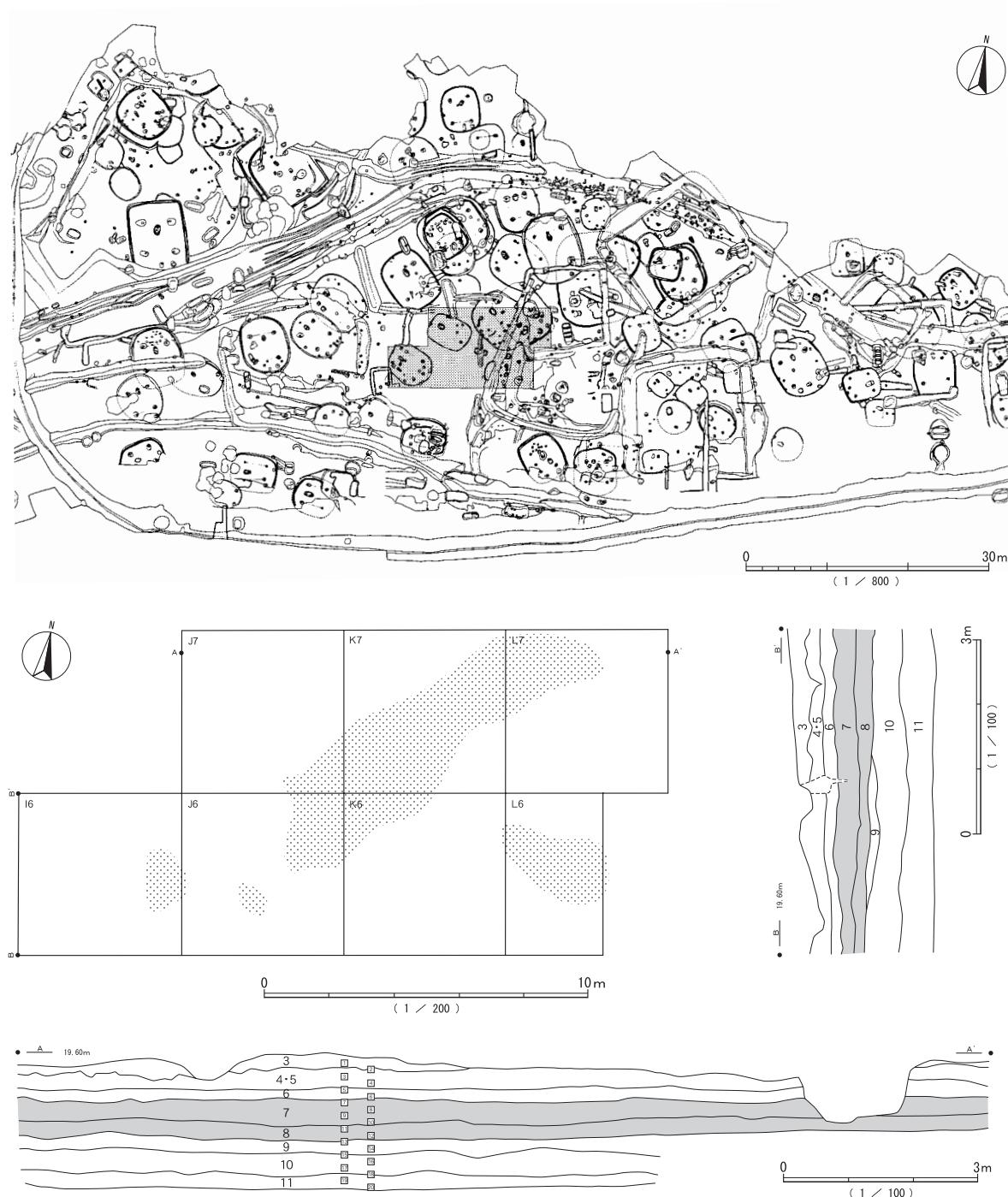
層位は最上層から順に3~11層に分層し、土層の掘り下げおよび層位別の遺物のとり上げ作業は10層までおこなった。ただしこれは相対層位であり、立川ローム層の標準的な層準に帰属させる必要がある。調査時の所見では、6層がAT層、8層が暗色帯であると認識されている。また、採取された土壤サンプルの分析から、7層上部を中心にバルブ型火山ガラスの集中域が観察されている(第3章第1節参照)。以上の点から、6層から7層上部はATを含有する立川ローム第~層、8層は立川ローム第層(第2黒色帯、BB)に相当すると判断される。他の層については記録等から推測するしかないが、3層が第層、4・5層が第層、10層が第層(下部)、11層が武藏野ローム第層にそれぞれ相当すると考えられる。9層についてはカラー写真で見る限り明褐色を呈しており、層上部の可能性が高い。なお、文中では調査による層位()と立川ローム標準層準()を、層()という形で併記する。

整理作業は、図・表によるデータ提示を主眼として進めた。実測資料のうち単体資料については、定型的な石器や意図的な加工が施されたもの及び石核に限定した。接合資料は石核を含むもののみを実測対象とした。石核が未発見のものは接合率が低く、作業工程の復元ができなかつたものがほとんどであった。それらについては実測を省略し、母岩別の分布図で補足することとした(第17・18図)。

(2) 出土状況について

第15図は器種別の水平・垂直分布である。水平分布を見ると、K6を中心として東西16m、南北10mにわたって集中域が広がる。特にI6からL7にかけて帯状に分布する傾向が見られる。また、L6にも小規模な集中域が観察される。上層遺構による搅乱はそれほど受けないとされる。

垂直分布を見ると、7層(層)~10層(層下部)から出土しているが、なかでも8層(層)上面から特に多数出土している。また、グリッドによる出土層位の違いは見られない。出土総数は170点を数え、このうち6層(層)2点、7層(層)上部66点、下部34点、8層(層)46点、7~8層にまた



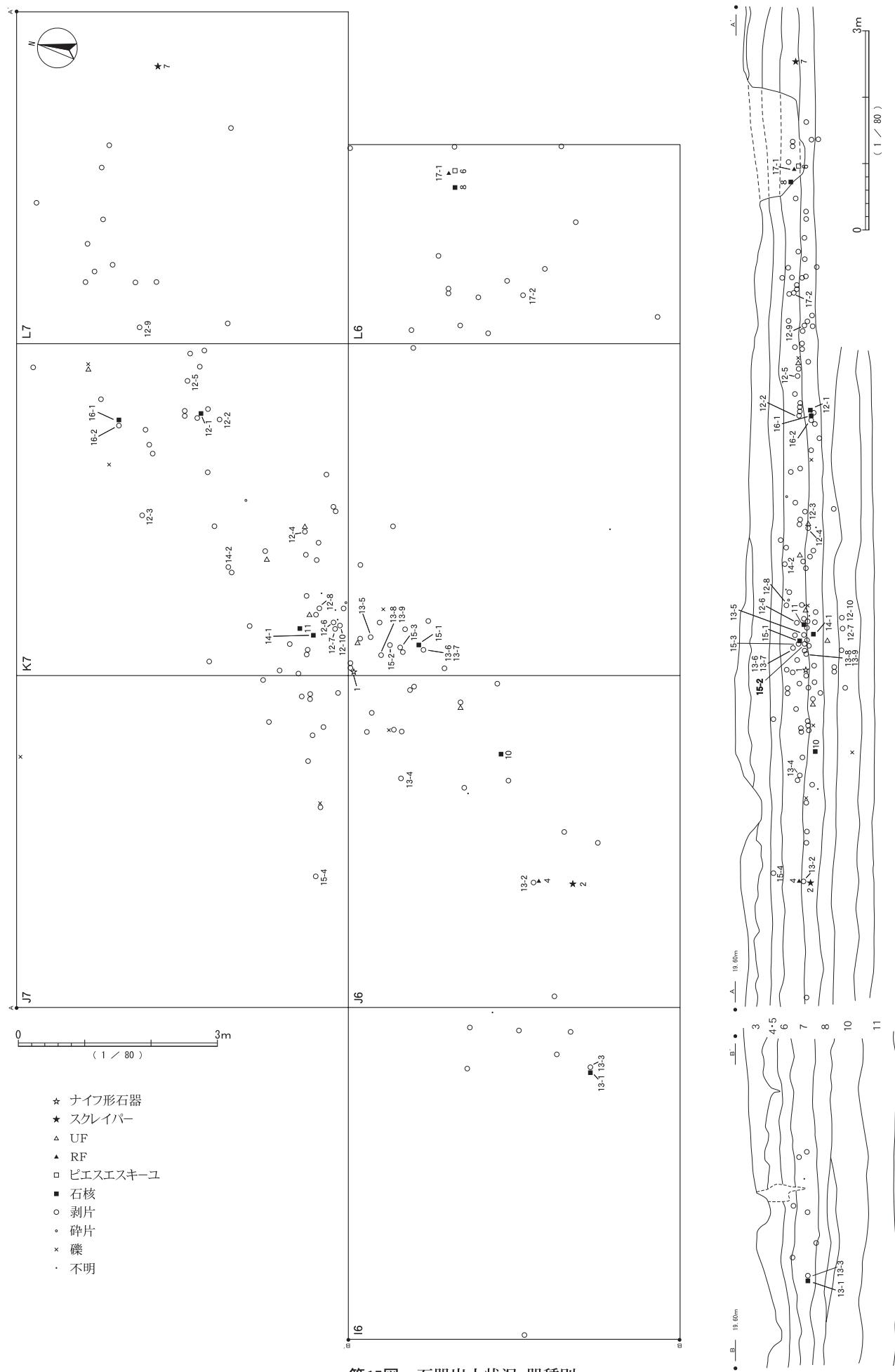
第14図 根田代遺跡下層調査区

がるもの8点、上層遺構内・グリッド3点、不明11点である。

第16図は石材別の出土状況である。デイサイト、無斑晶ガラス質安山岩が大多数であり、調査区全体から出土していることから、当遺跡の中心的な石材であるとみられる。それらを個体分類した分布図が第17・18図で、あわせて接合関係を示した。数字は各石材の個体番号である。同一の石材はある程度小範囲に集中する傾向が見られるが、調査区全体から出土している石材も存在する。また、接合資料の分布を見る限り、製作の場をより狭い範囲に限定するのは難しい。

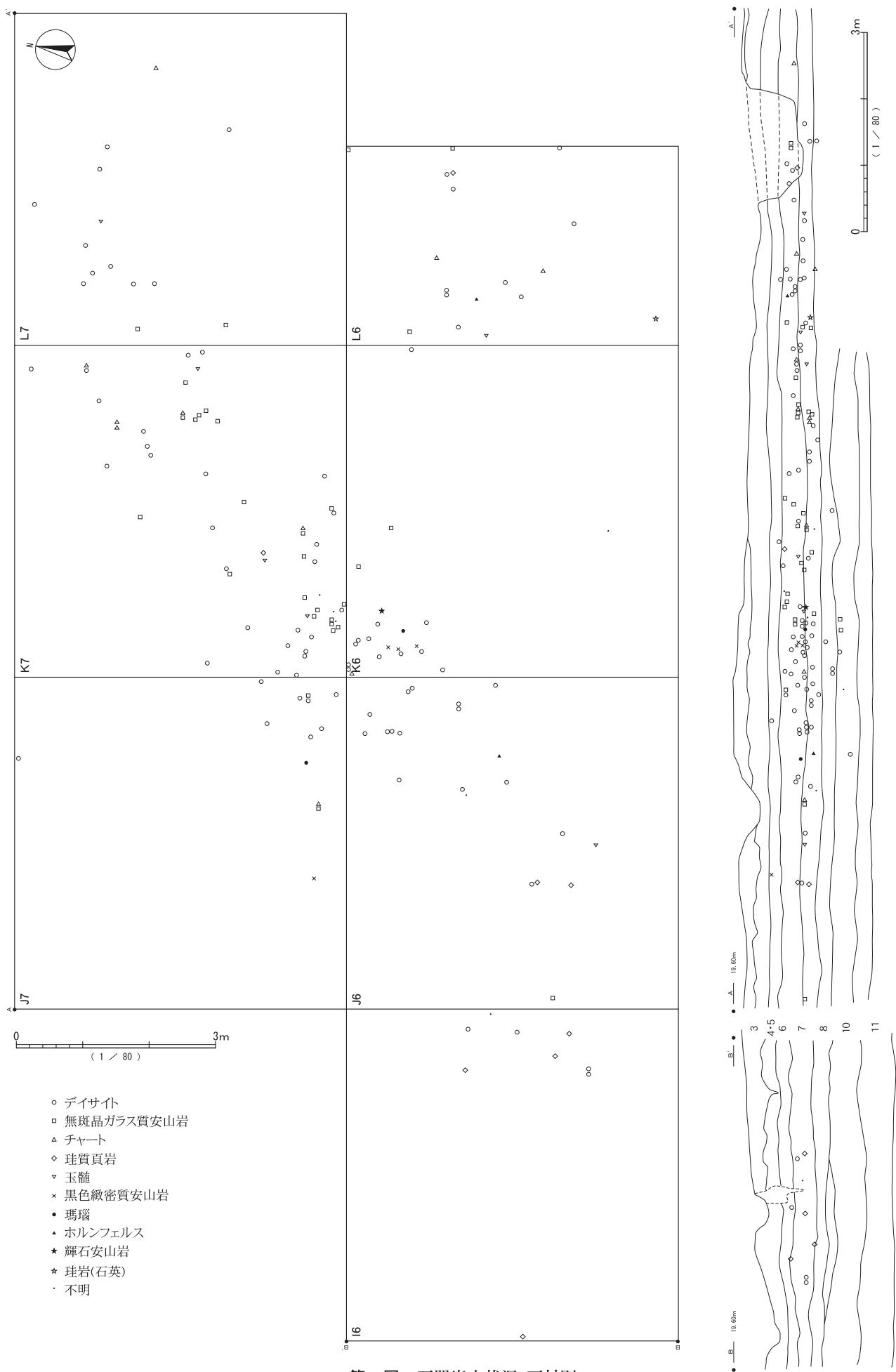
以上まとめると、水平分布ではグリッドによる出土量の疎密が観察されたが、垂直分布や石材別の

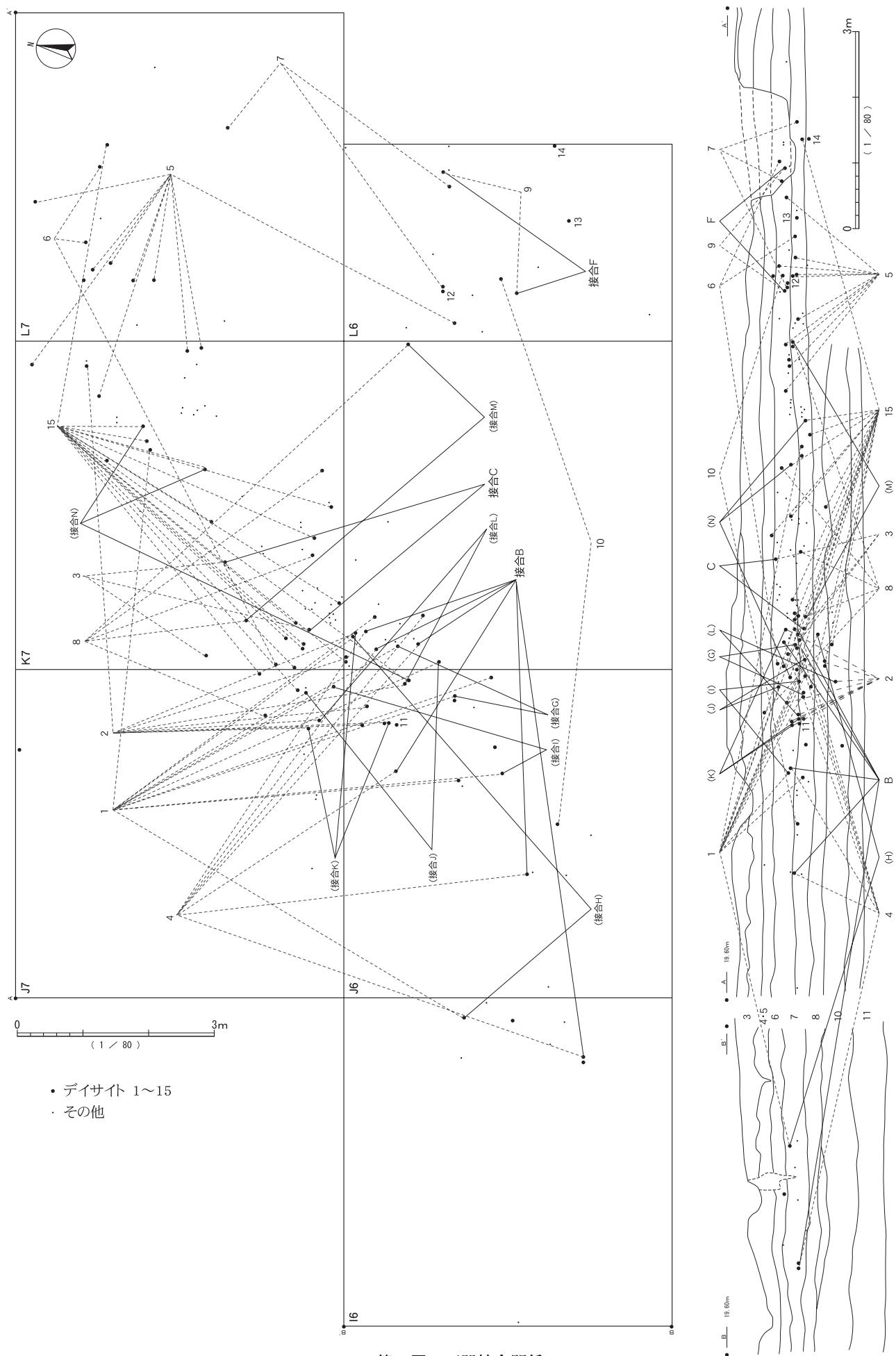
遺構と遺物 旧石器時代



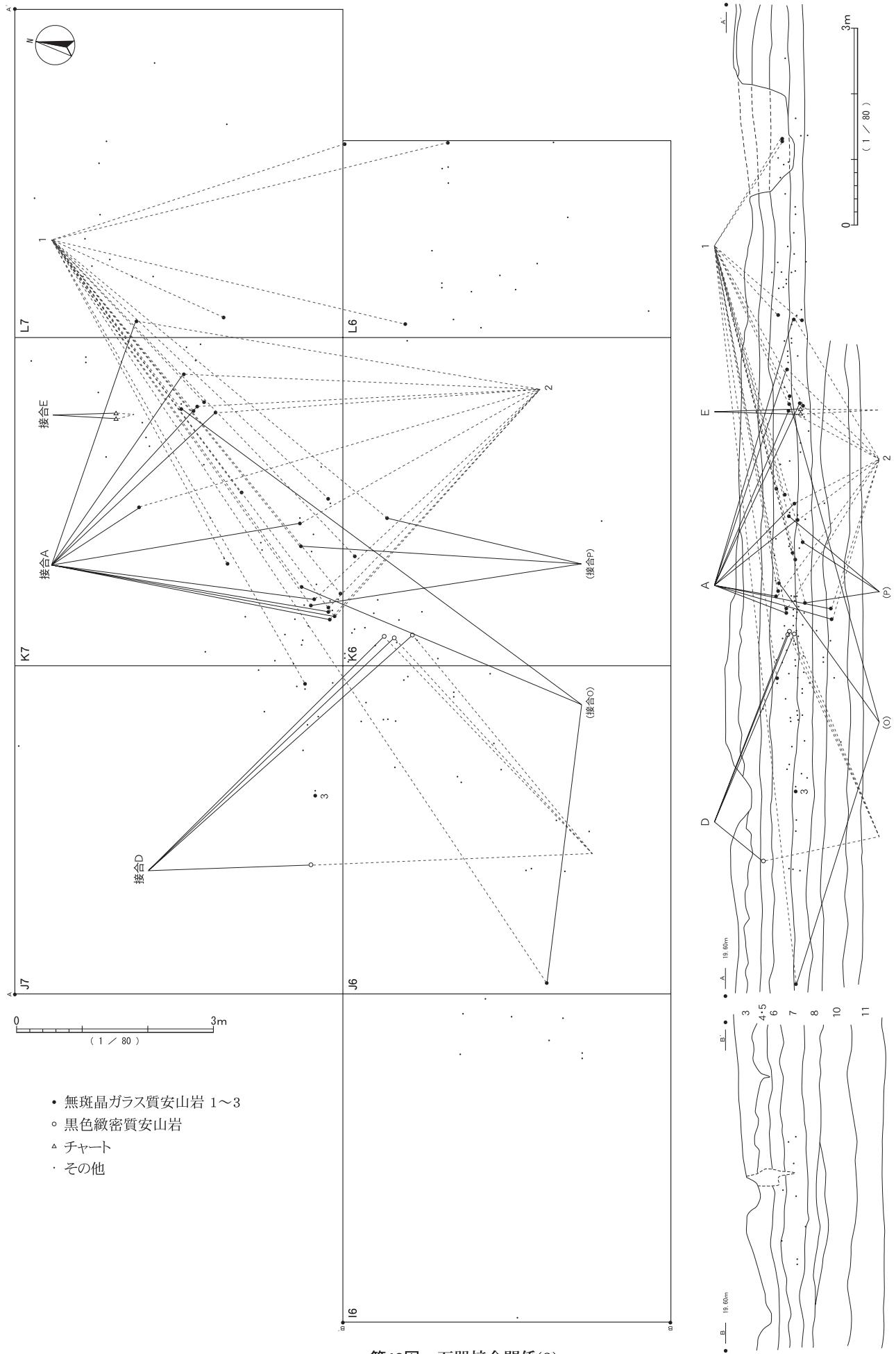
第15図 石器出土状況 器種別

遺構と遺物 旧石器時代

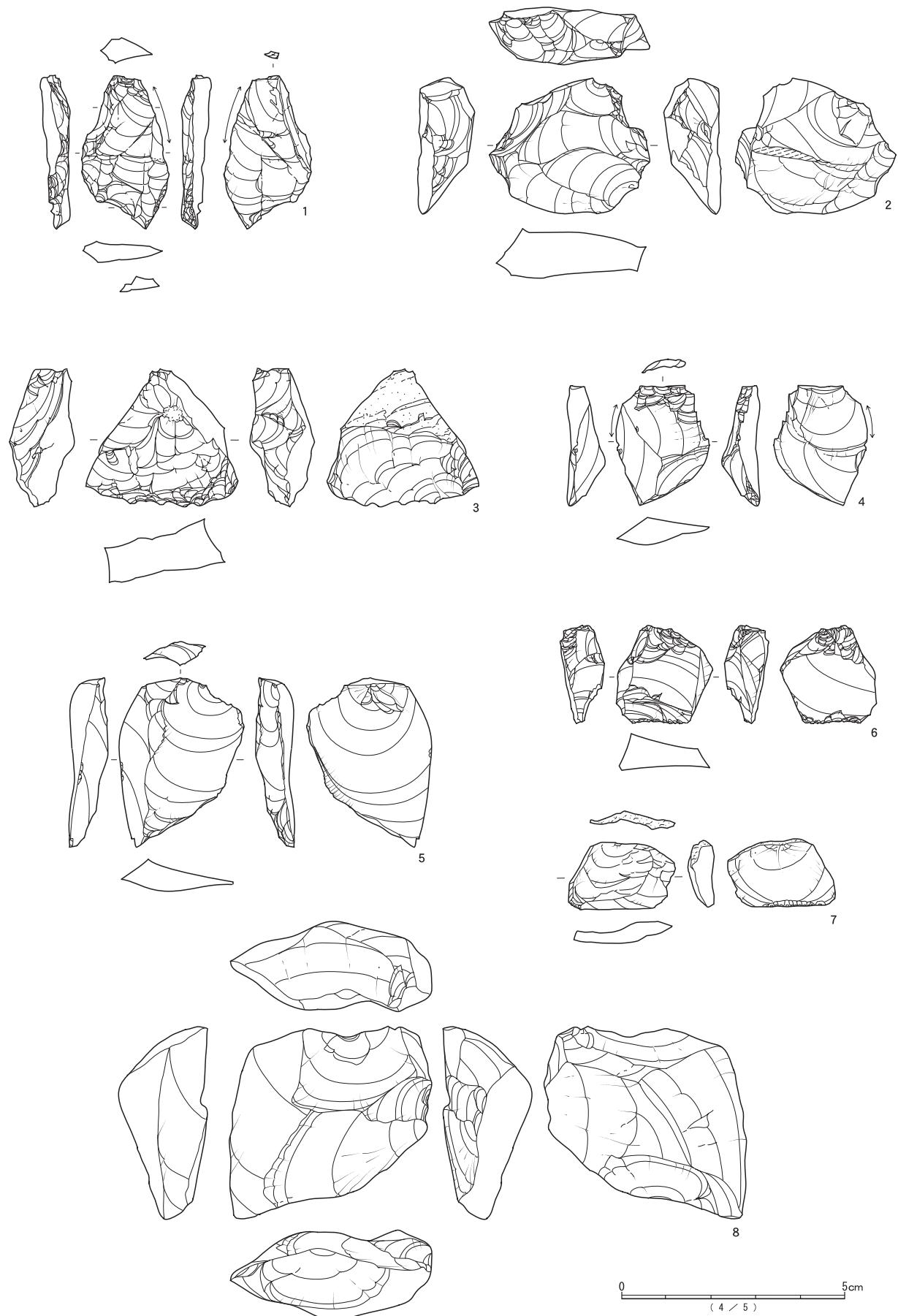




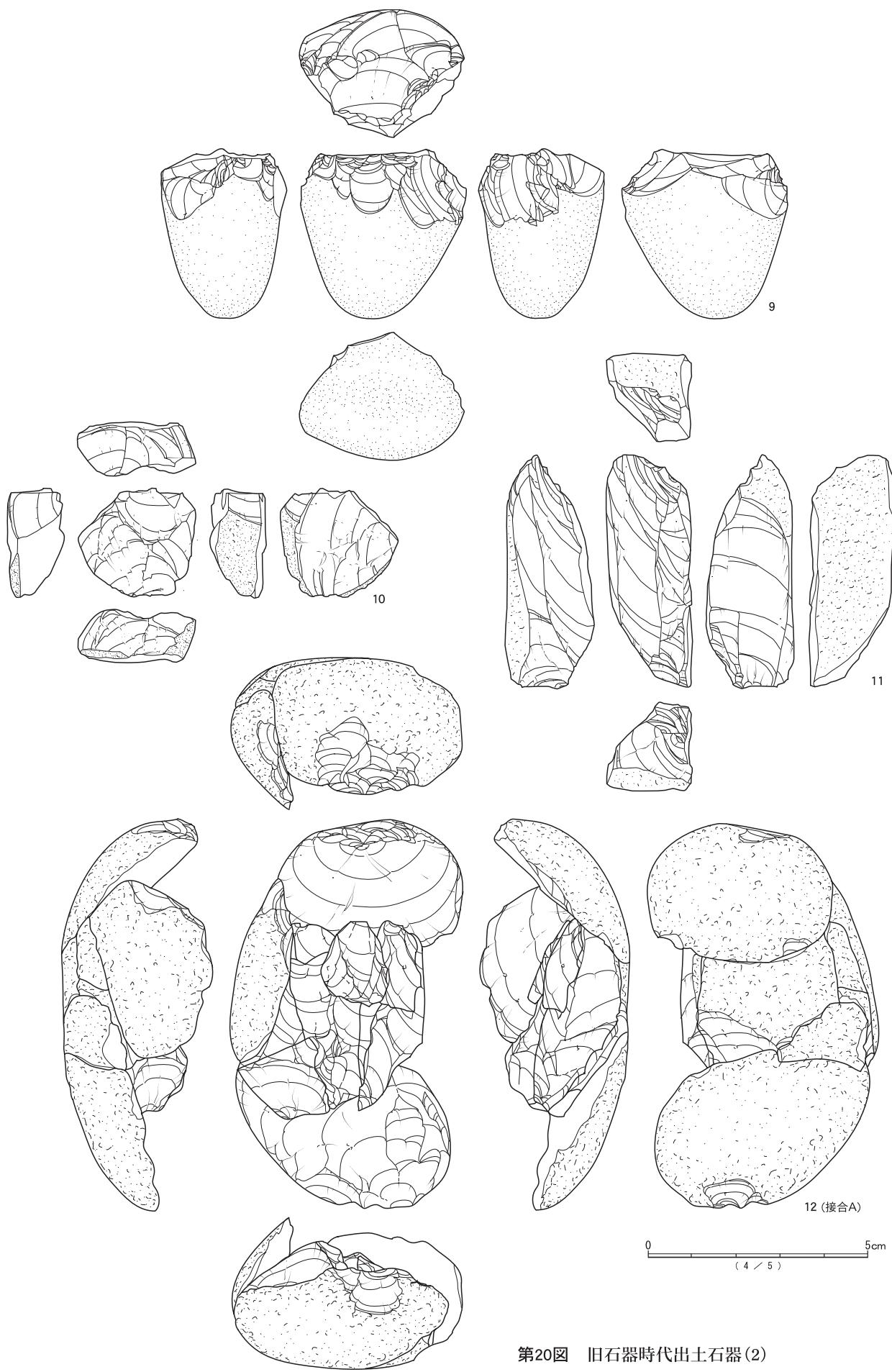
第17図 石器接合関係(1)



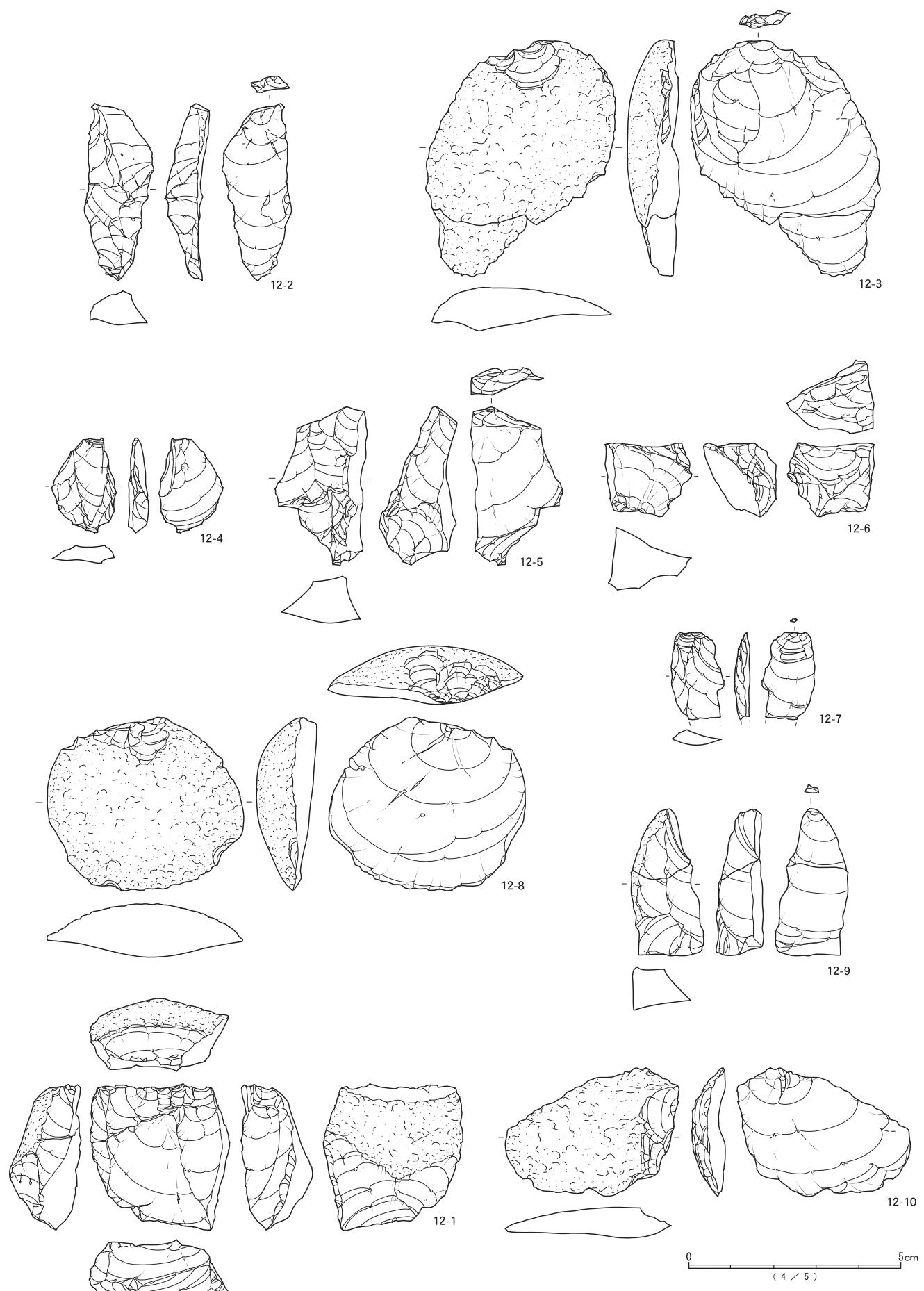
第18図 石器接合関係(2)



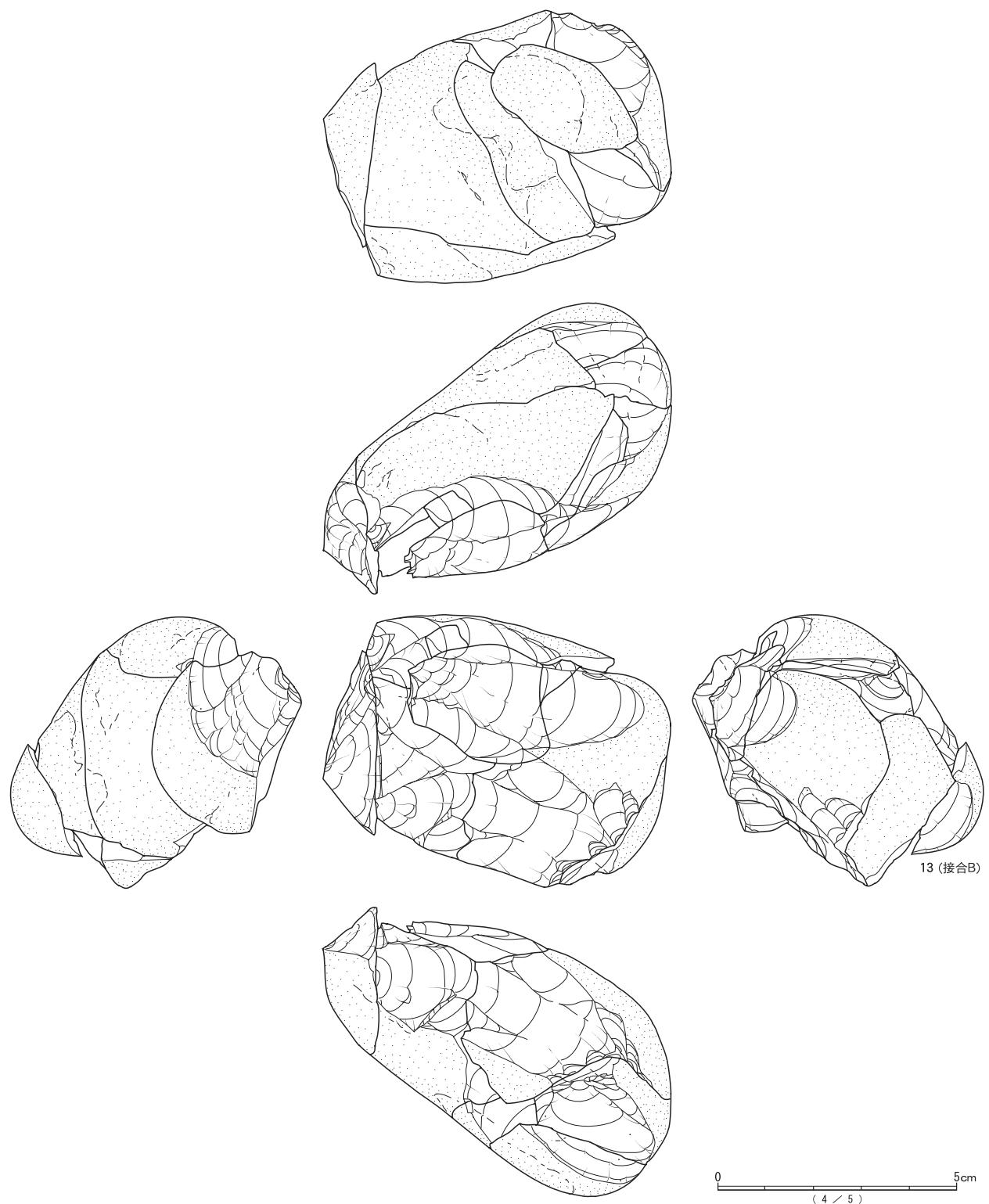
第19図 旧石器時代出土石器(1)



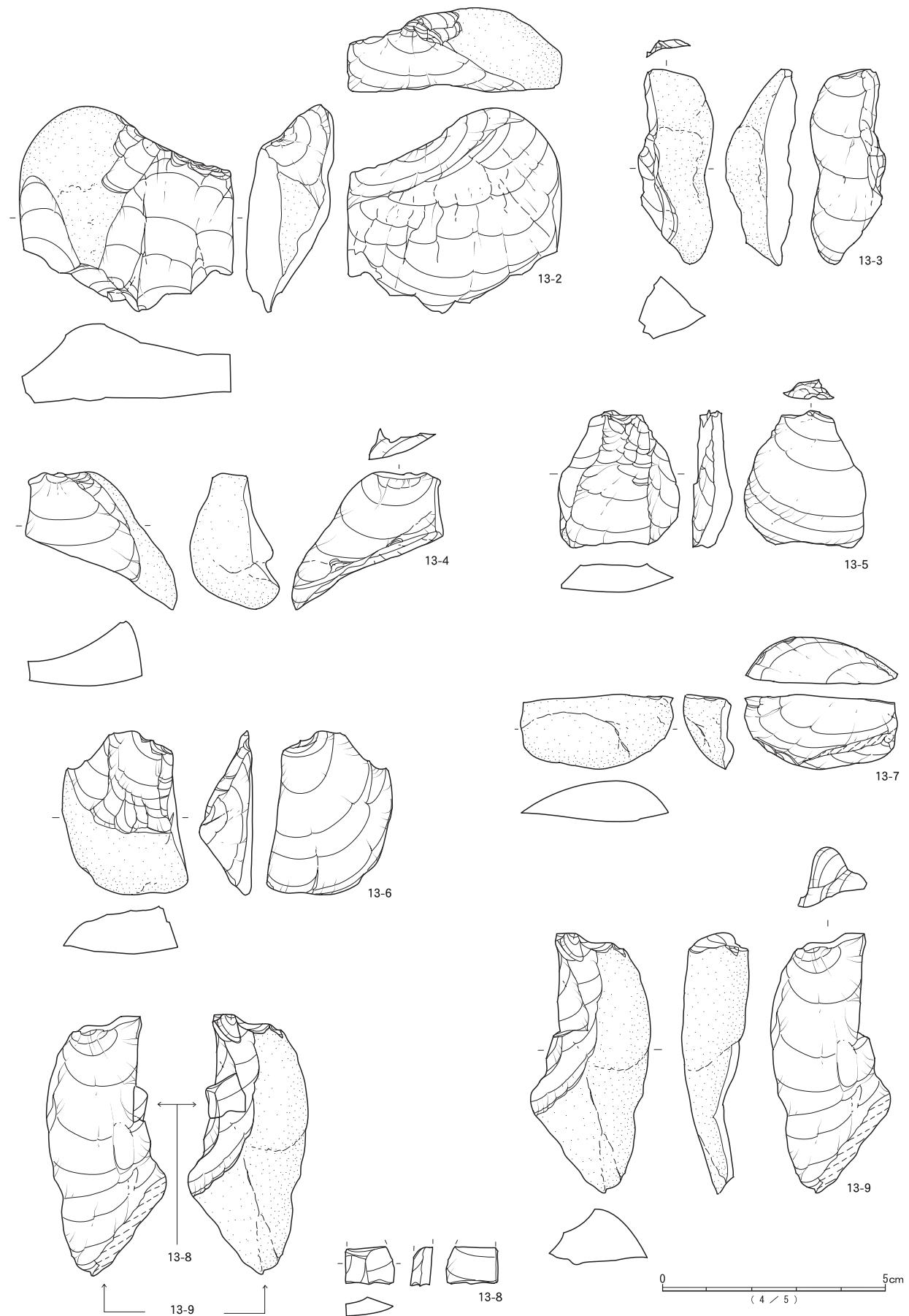
第20図 旧石器時代出土石器(2)



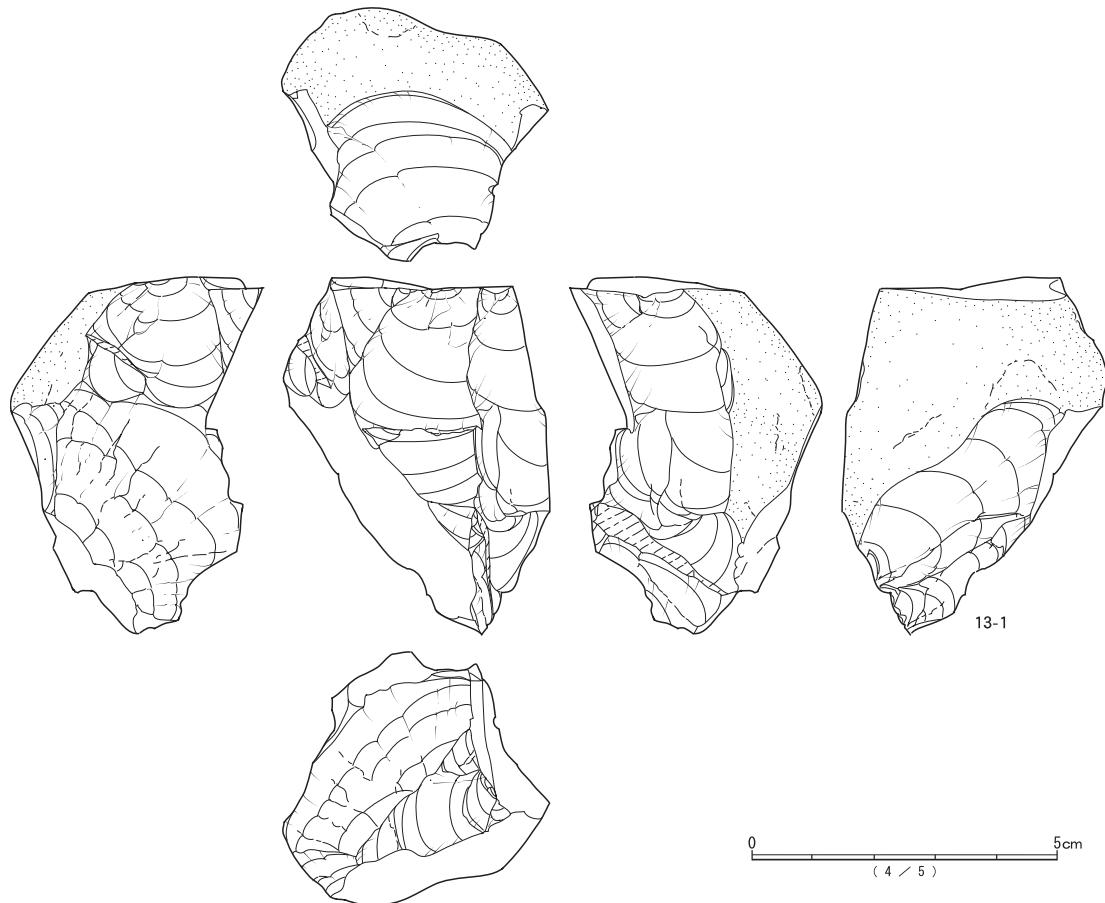
第21図 旧石器時代出土石器(3)



第22図 旧石器時代出土石器(4)



第23図 旧石器時代出土石器(5)



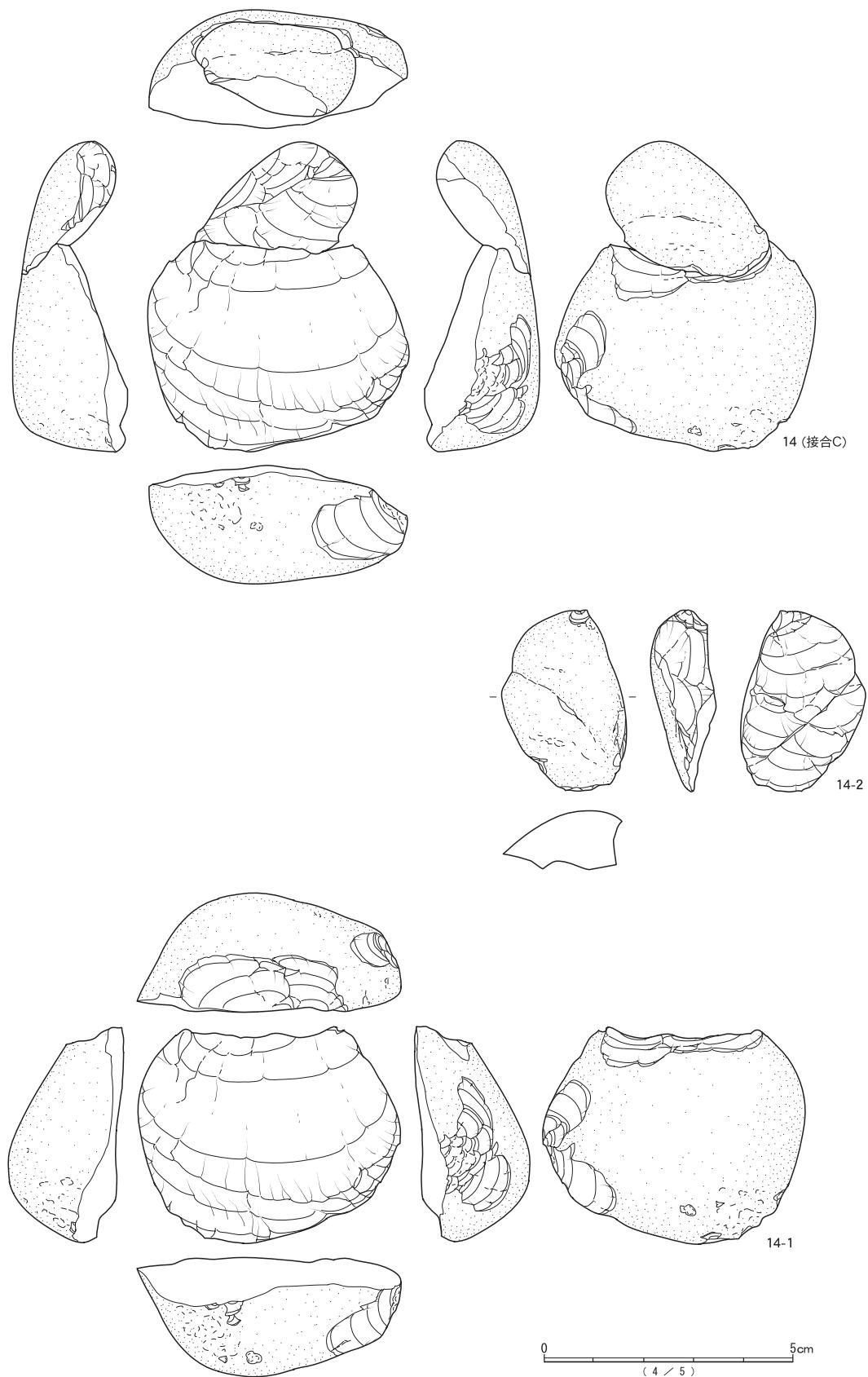
第24図 旧石器時代出土石器(6)

出土状況からは、これらの石器群を峻別する根拠は乏しいと思われる。したがって、この石器集中地點は同一の文化層に属する一つの集中地點であるとみなして話を進めたい。

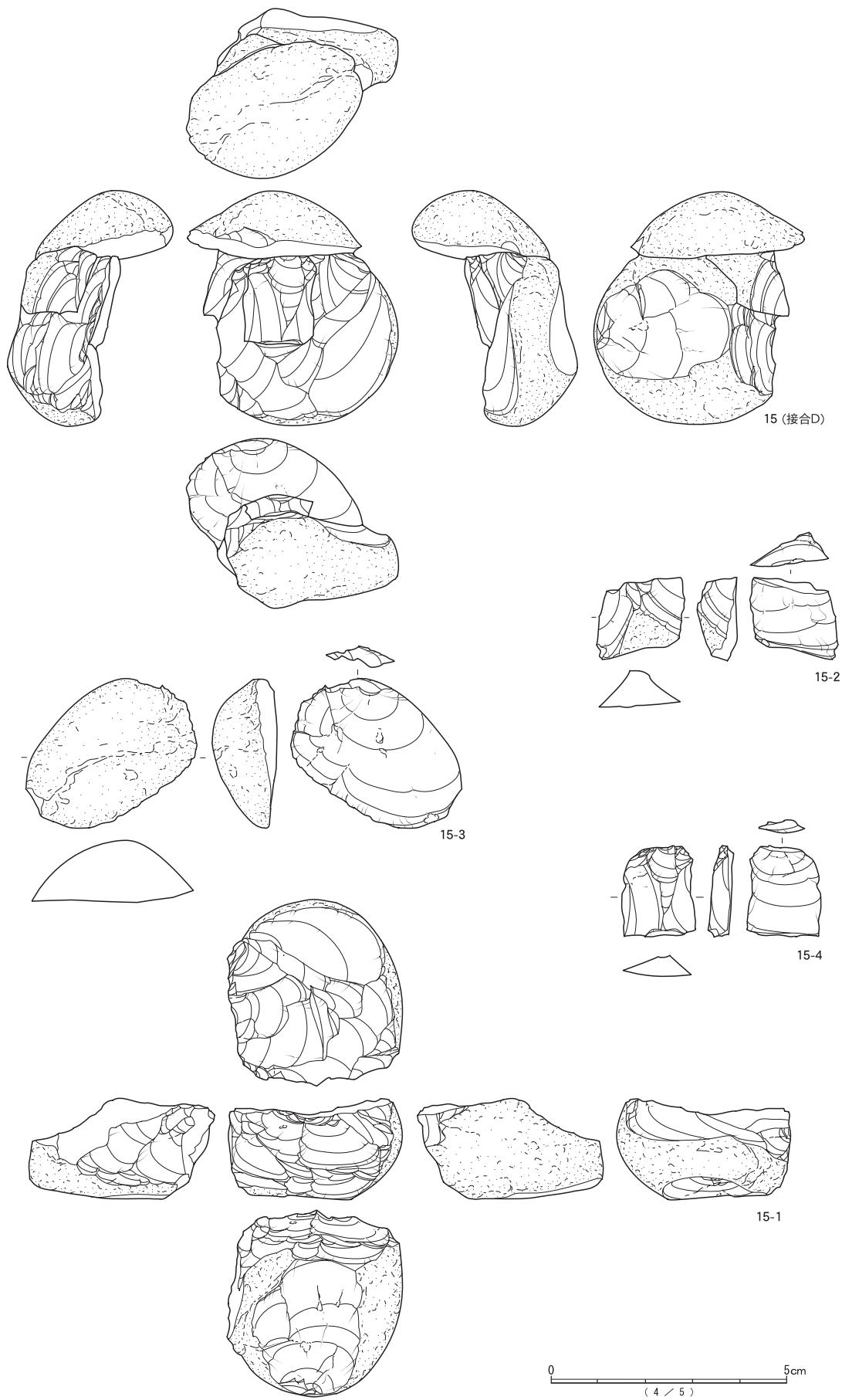
(3) 遺物説明

出土した石器の属性表は、別添CD-ROMに収録している。剥片類がほとんどを占め、定型的な石器は少ない。石核を含め、全体に小型のものが多い。器種別・石材別の組成表を第1表に示した。定型的な石器を構成している石材のうち黒曜石や珪質頁岩などは、数の上では少数であり、接合資料もなく単独出土に近い。それに対し多数を占めるのは、デイサイトや無斑晶ガラス質安山岩などで、接合資料はほとんどこれらの石材である。器種は剥片または石核がほとんどである。

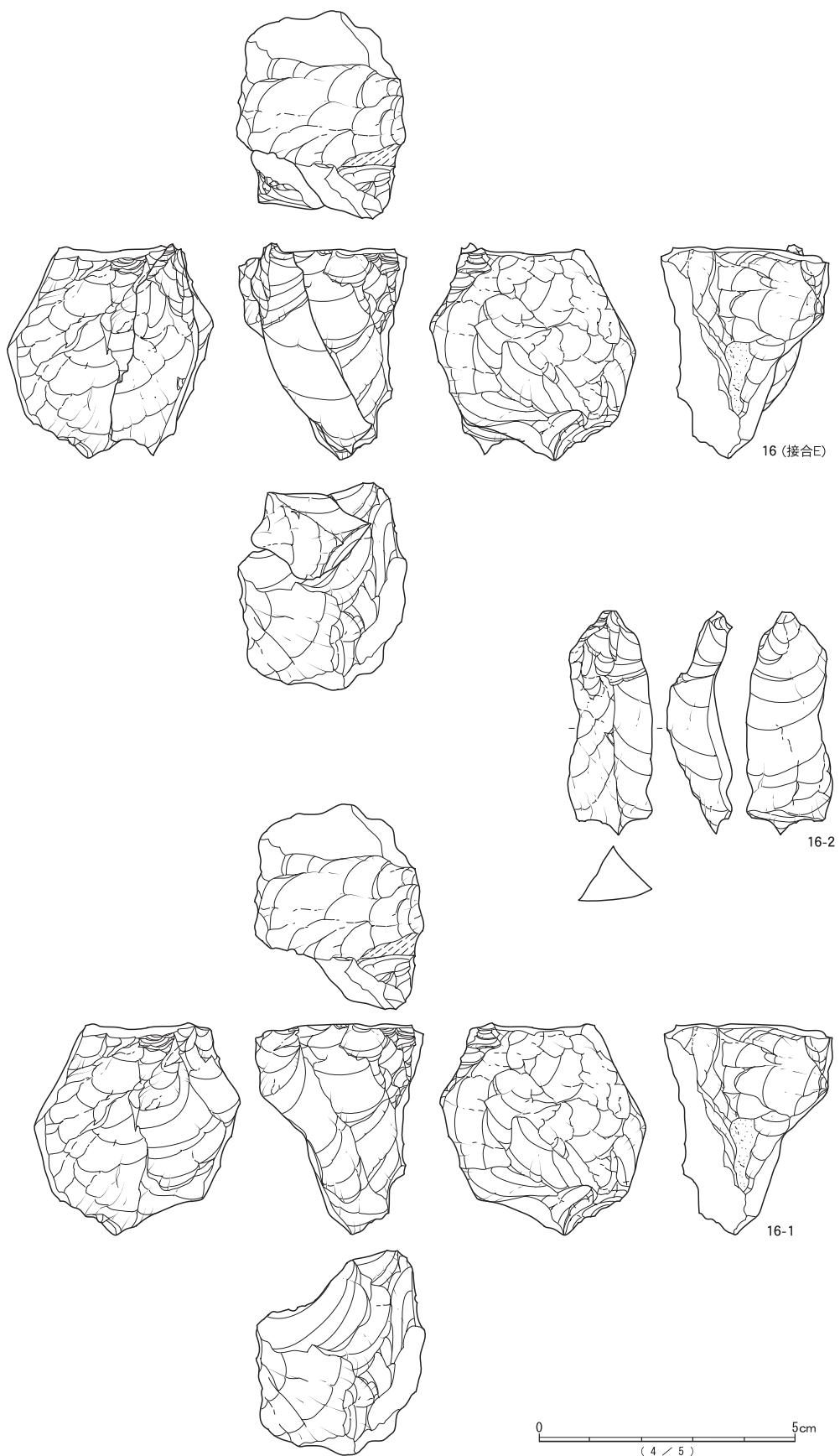
1は暗青灰色のチャート製ナイフ形石器である。ガラス質で半透明である。縦長剥片の先端部両側縁に調整加工を施し、右側縁を刃部としている。加工はやや規模が小さいが、急斜度でかなり精緻である。左側縁は折断されており、打面がかろうじて残存する。刃部には刃こぼれ状の微細な剥離痕が観察される。2、3はスクレイパーである。2は灰色～黄褐色の珪質頁岩製で、やや横長で厚手の剥片の左右両側縁に加工を施している。3は黒曜石製で、不透明で不純物を多く含む。本来は横長であった剥片の左右を折断して、先端部に急斜度の連続加工を施す。なお、この石器は上層遺構から出土しており、当文化層に帰属すると断言できない。4、5は二次加工のある剥片である。4は2と同じ珪質頁岩製で、縦長で断面三角形を呈する剥片の先端側に小規模な加工を施す。左側縁部に微細な剥離痕



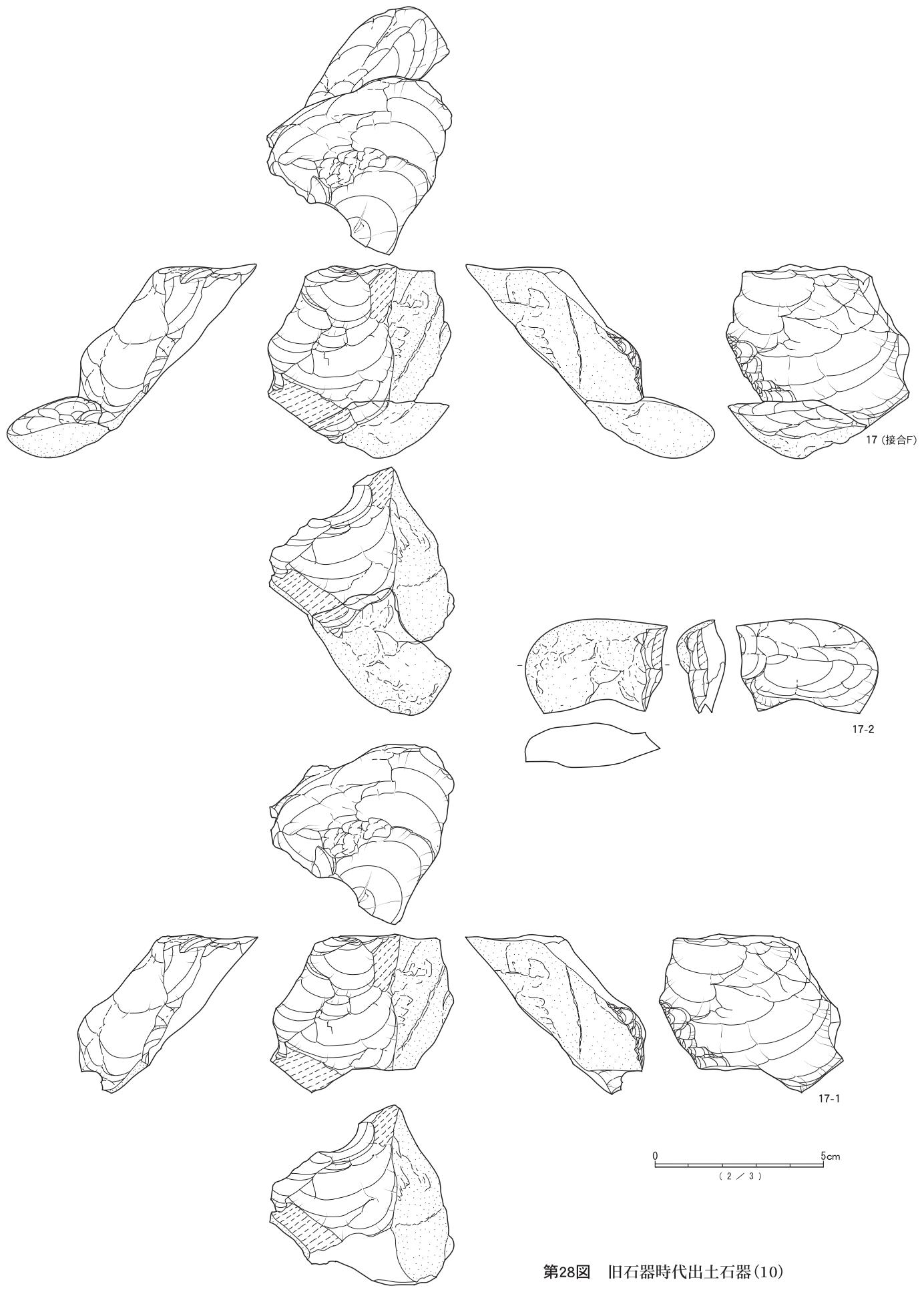
第25図 旧石器時代出土石器(7)



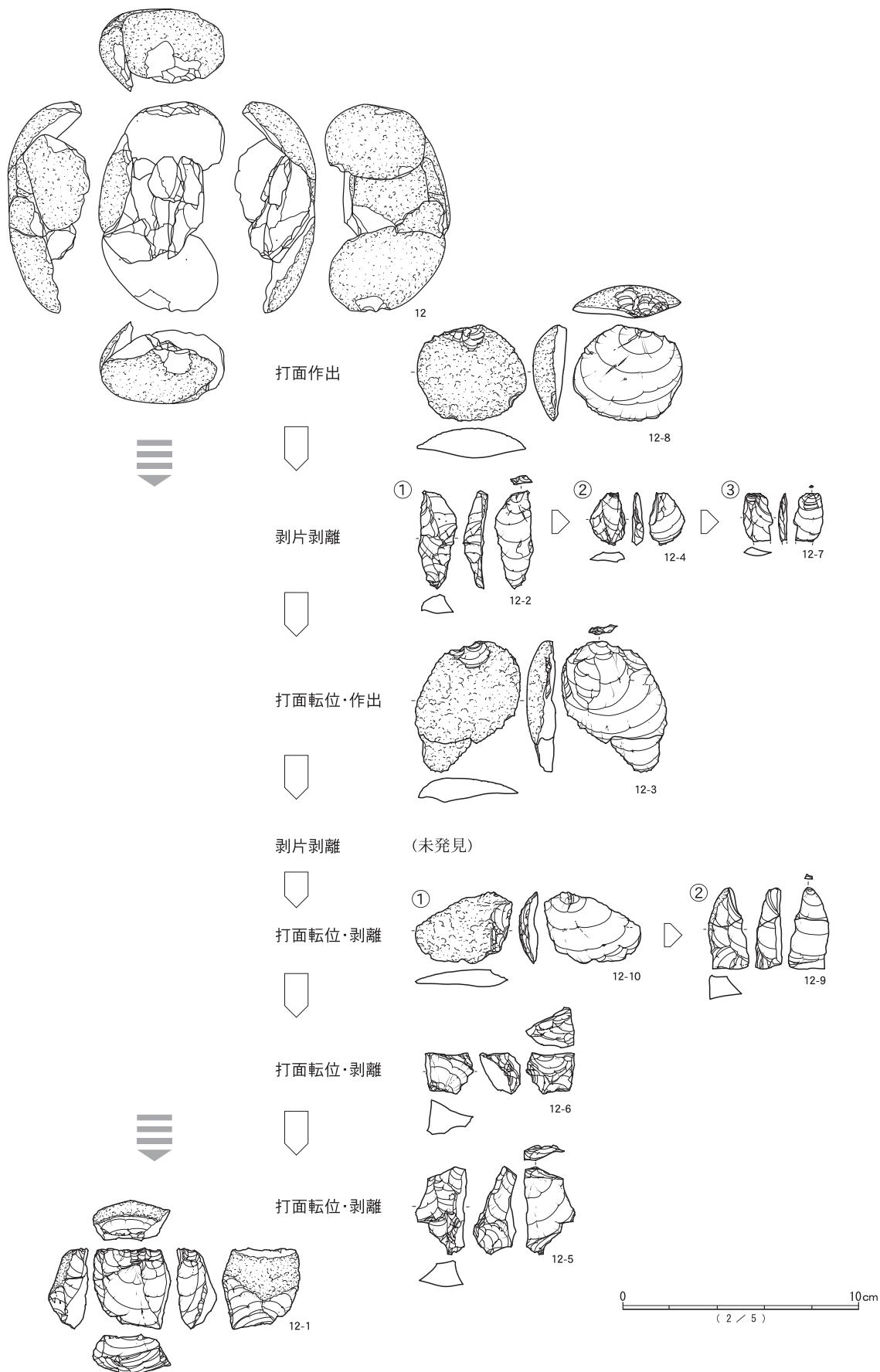
第26図 旧石器時代出土石器(8)



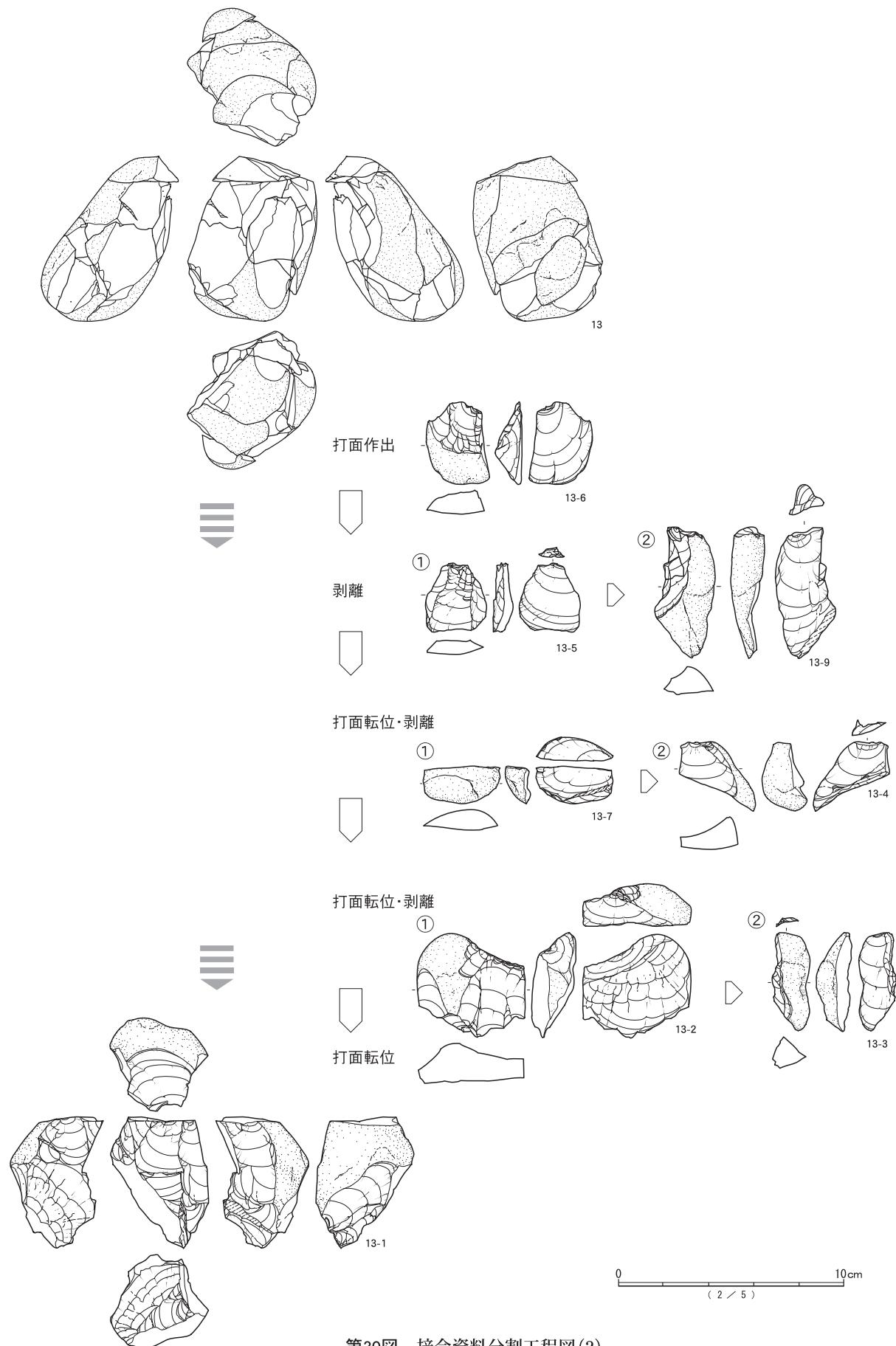
第27図 旧石器時代出土石器(9)



第28図 旧石器時代出土石器(10)



第29図 接合資料分割工程図(1)



第30図 接合資料分割工程図(2)

が観察される。加工の工程は、1のナイフ形石器に類似している。5は褐灰色の珪質頁岩製である。縦長剥片の右側先端部を折断し、尖頭状への成形を意図したような加工を施す。素材、製作技法とも、4に類似する。この石器も上層遺構からの出土であるが、以上の点から当文化層に帰属する可能性が強いと考えられる。6は黒褐色の珪質頁岩製ピエスエスキューである。石刃と思われる素材を折断して、上下両端から細かい調整を施している。5・6は東北地方産とみられる非常に硬質で緻密な石材を用いている。7は暗灰黄色のチャート製スクレイパーである。横長剥片を素材として、打面と平行になるように腹面側に調整加工を施す。8~11は石核である。8はにぶい黄色のデイサイト製で、上下両側から階段状の剥離が観察される。9はにぶい黄色のチャート製で、円礫を半分に割り、割れ面を打面と設定したと考えられる。あまり進行しないうちに作業を終了したようで、自然面をかなり多く残している。この石器は上層遺構から出土しており、当文化層に帰属するか不明。10は暗青灰色のホルンフェルス製で、小型の円礫が素材であると考えられ、上下両端からの剥離が観察される。11は青黒色のデイサイト製で、楕円形の円礫を素材として上下から剥離を行っている。上下両側とも打面は線状を呈しており、縦断面は紡錘形に近い。12~17は接合資料である。12はオリーブ黒色の無斑晶ガラス質安山岩製で、緻密で硬質な石材である。12-1が石核で、他10点は剥片である。作業工程を第29図に示す。まず長楕円形の円礫の上側の自然面を除去し(12-8)、打面を作出する。そして縦長の小剥片を、打点を規則的に移動しながら剥離する(12-2・4・7)。次いで打面を180°転位して、下側に新たに打面を作出する(12-3)。新しい打面から同じく剥片剥離を規則的に行うが、その際の剥片は出土していない。その後は180°の打面転位を繰り返して12-10・9、12-6、12-5を剥離している。13は灰色のデイサイト製で、楕円形の円礫を素材とする。13-1が石核、他10点は剥片である。作業工程を第30図に示す。まず自然面を除去し(13-6)、上側を打面として13-5・9を剥離する。次に打面を左側へ90°転位し、13-7(打面側は同時割れのため欠落)・4を剥離する。さらに打面を正面へ90°転位して13-2(ただしこれは同時割れの可能性が強い)・3を剥離する。最後に打面を上側へ90°転位して数回剥離を行っている(剥片未発見)。12と違って打面転位が複雑かつ頻繁なのは、石質の違いによるものであろう。14は灰色のデイサイト製で、打面が異なる剥片が2点接合する。14-2は打面作出のために剥離されたものであろう。15はオリーブ黒色の黒色緻密質安山岩製で、小型でやや扁平な礫を素材とするものである。15-3を剥離した後、一旦左側を

	ナイフ形石器	スクレイパー	R F	ピエスエスキュー	U F	石核	剥片	碎片	合計
チャート 1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
チャート 2	0	0	0	0	0	1	3	0	4
チャート 3	0	1	0	0	0	0	0	0	1
チャート 4	0	0	0	0	1	0	0	0	1
チャート 5	0	0	0	0	0	0	3	0	3
デイサイト 1	0	0	0	0	2	0	14	0	16
デイサイト 2	0	0	0	0	1	0	8	0	9
デイサイト 3	0	0	0	0	0	1	2	0	3
デイサイト 4	0	0	0	0	0	1	9	0	10
デイサイト 5	0	0	0	0	0	0	11	0	11
デイサイト 6	0	0	0	0	0	0	3	0	3
デイサイト 7	0	0	0	0	0	1	2	0	3
デイサイト 8	0	0	0	0	0	0	5	0	5
デイサイト 9	0	0	1	0	0	0	1	0	2
デイサイト 10	0	0	0	0	0	0	2	0	2
デイサイト 11	0	0	0	0	0	0	1	0	1
デイサイト 12	0	0	0	0	0	0	1	0	1
デイサイト 13	0	0	0	0	0	0	1	0	1
デイサイト 14	0	0	0	0	0	0	1	0	1
デイサイト 15	0	0	0	0	0	1	17	0	18
ホルンフェルス 1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ホルンフェルス 2	0	0	0	0	0	1	0	0	1
玉髓 1	0	0	0	0	1	0	1	0	2
玉髓 2	0	0	0	0	1	0	1	0	2
玉髓 3	0	0	0	0	0	0	1	0	1
玉髓 4	0	0	0	0	0	0	1	0	1
珪質頁岩 1	0	1	1	0	0	0	3	0	5
珪質頁岩 2	0	0	0	1	0	0	0	0	1
珪質頁岩 3	0	0	0	0	0	0	1	0	1
珪質頁岩 4	0	0	0	0	0	0	1	0	1
珪石 1(石英)	0	0	0	0	0	0	1	0	1
黒色緻密質安山岩 1	0	0	0	0	0	1	3	0	4
無斑晶ガラス質安山岩 1	0	0	0	0	0	0	17	2	19
無斑晶ガラス質安山岩 2	0	0	0	0	0	1	10	0	11
無斑晶ガラス質安山岩 3	0	0	0	0	0	0	1	0	1
瑪瑙 1	0	0	0	0	0	0	2	0	2
合 計	1	2	2	1	6	8	128	2	149

第1表 旧石器時代調査区母岩別組成表

打面とした剥片剥離が行われ、打面を90°転位して上側を打面として15-4を剥離している。再び打面を90°左側に転位して背面側から15-2を剥離している。その後数回の剥片剥離が行われているが、採取された剥片はいずれも15-2に似た断面三角形のやや寸詰まりな形状を呈するとみられる。なお、15-2は打面側が折断されている。16は灰オリーブ色～褐色のチャート製で、石核と剥片が接合するものである。割れ方が複雑で分かりにくいが、上側を打面とする剥片剥離が、作業の主体を占めているようである。17は灰色～灰オリーブ色のデイサイト製で、剥片の接合である。17-1は右側縁に加工が観察される。17-2は明確な打点が見つかず、同時割れの可能性が強い。

(4)まとめ

根田代遺跡の旧石器時代について、簡単にまとめておく。ナイフ形石器は、縦長剥片の先端側への精緻な調整加工を特徴とする。同様の特徴を持つRF類が出土していることは注意を要する。また、石刃を素材とするピエスエスキューが伴うこと、特徴のひとつといえる。これらのツール類には東北地方産の良質な珪質頁岩の使用頻度が高く、遺跡内で製作・加工された痕跡がない。

接合資料はいずれも握り拳大の円礫を素材とし、頻繁な打面転位と規則的・連続的な剥片剥離を特徴とする。入手を目的とした剥片は、やや小型で寸詰まりの縦長剥片もしくは横長剥片と想定されるが、こうした剥片の出土量は全体に比して少なく、加工されて消費されたか、別な場所へ搬出されたとみられる。出土量が多いのは背面に自然面を残す剥片類であるが、これらは初期段階の素材成形もしくは打面作出により生じたと考えられる。石材はデイサイトや無斑晶ガラス質安山岩が主で、これらの産地については近隣を含め、より精査する必要がある。

やや資料不足ではあるが、ナイフ形石器の製作技術、東北地方産の珪質頁岩の出現とツールへの積極的な利用、台形様石器や局部磨製石斧が欠落するなど、第2黒色帯上部からAT層直下の特徴を示している。石器製作技法については、いわゆる典型的な石刃技法は見られないが、加工する石材に合わせた多種多様な剥片剥離技術が想定され得る。根田代遺跡でみられる剥片剥離技術も、石材の獲得戦略と一体となった技術体系による所産と捉えるべきであろう。

近隣の事例では、ヤジ山遺跡第2文化層、袖ヶ浦市の台山遺跡第1文化層が、同時期の資料として比定できる。また、やや時期が前後するが、下鈴野遺跡第1文化層や草刈六之台遺跡第3文化層が関連する資料として挙げられる。上総地区における第2黒色帯からAT層間の状況について、まだ資料が揃っているとはいえないが、根田代を含めたこれらの遺跡の資料を検討することによって、特徴と変遷を明らかにしていくことが今後の課題であろう。

文 献

- 田村隆・橋本勝雄 1984『房総考古学ライブラリー1 旧石器時代』財団法人千葉県文化財センター
 島立桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌第35号』財団法人千葉県文化財センター
 島立桂ほか 1994『千原台ニュータウン 草刈六之台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
 豊田秀治ほか 2000『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書5 - 市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山(1)(2)遺跡 -』財団法人千葉県文化財センター
 新田浩三ほか 2002『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書10 - 袖ヶ浦市台山遺跡 -』財団法人千葉県文化財センター
 島立桂ほか 2003『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書 - 市原市下鈴野遺跡 -』財団法人千葉県文化財センター

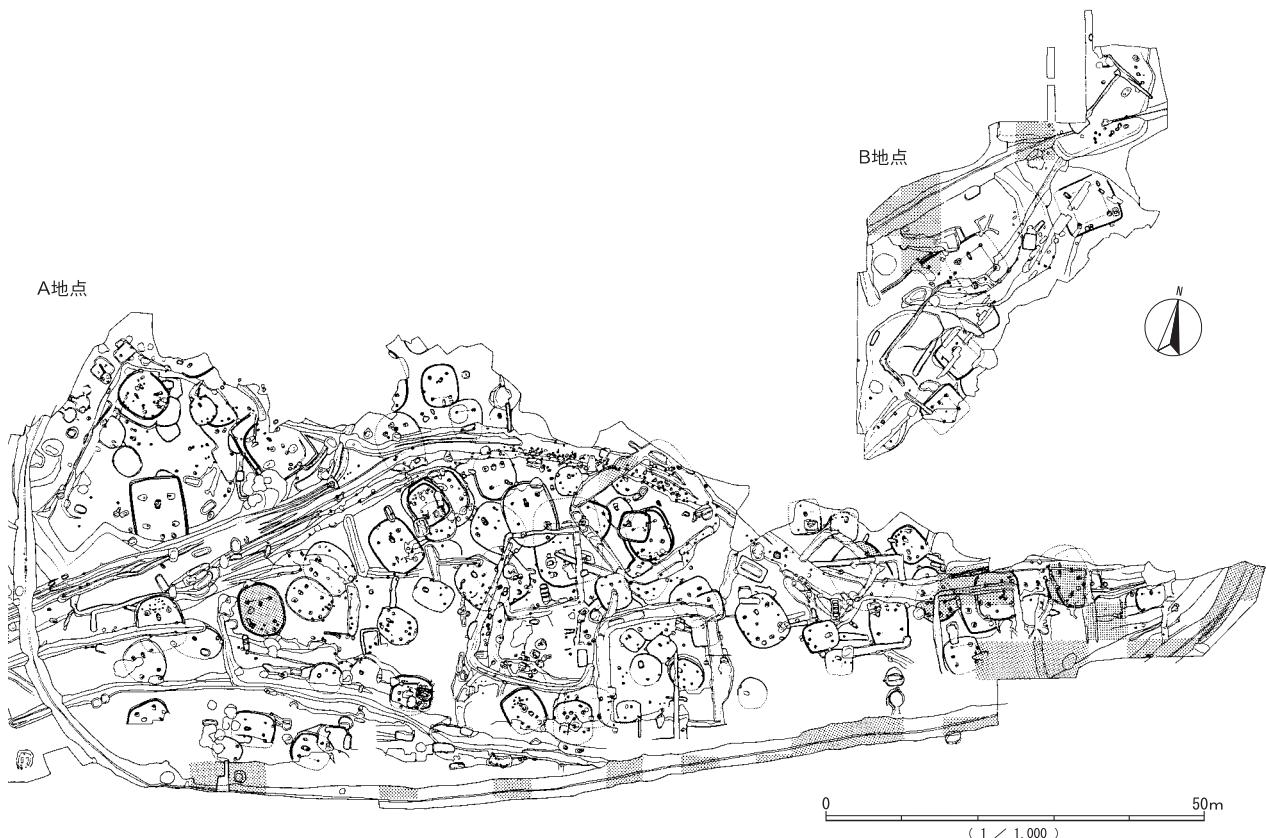
第2節 縄文時代

根田代遺跡では、確実に縄文時代の遺構と考えられるものは存在せず、遺跡全体を通じて、縄文時代の遺物出土量も少ない。弥生時代以降の住居や土坑、環濠の覆土内および、グリッド一括出土資料中に含まれていたものである。第31図によるとその出土状況がわかるように、出土箇所をトーンで示した。

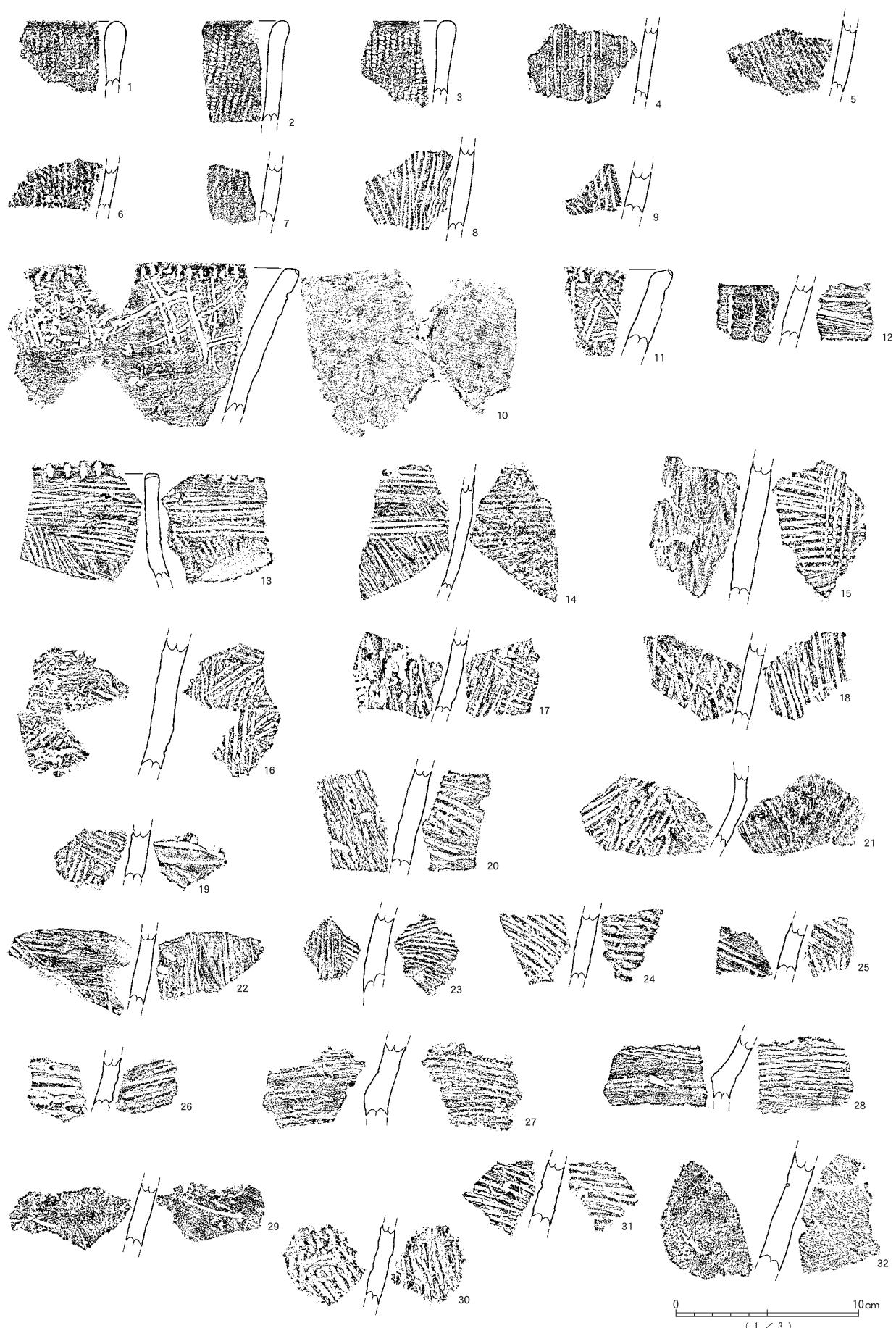
A地点では、調査区の東側および、南側の弥生の環濠内からの出土がやや目立つ。本遺跡では、台地平坦部全域にわたって、弥生時代の住居跡や古墳が展開し、ローム面上に空白部分をあまり残すことなく広がっている。仮に縄文時代の遺構等があったとしても、これらによって失われ、遺物等が周辺に拡散したものとみられる。環濠覆土内にやや多く出土しているのは、台地部にあった遺物が斜面方向に流出し、たまつたものとみられる。東側にやや遺物が集中する状況は、あるいはこの付近に遺物の供給源となる遺構等が存在したことを示しているのかもしれない。B地点でも、やはり北側の斜面よりの環濠付近からの出土が目立つ。A地点の場合と同じ理由が想定できる。

主な出土遺物について、第32～34図に実測図を掲げた。時期的には、縄文早期撫糸文系土器・条痕文系土器、前期の諸磯式、中期の下小野式、阿玉台式、後期の称名寺式、加曾利B式、安行式がみられる。このうち前期から後期の土器はごくわずかで、主体は早期の条痕文系土器である。

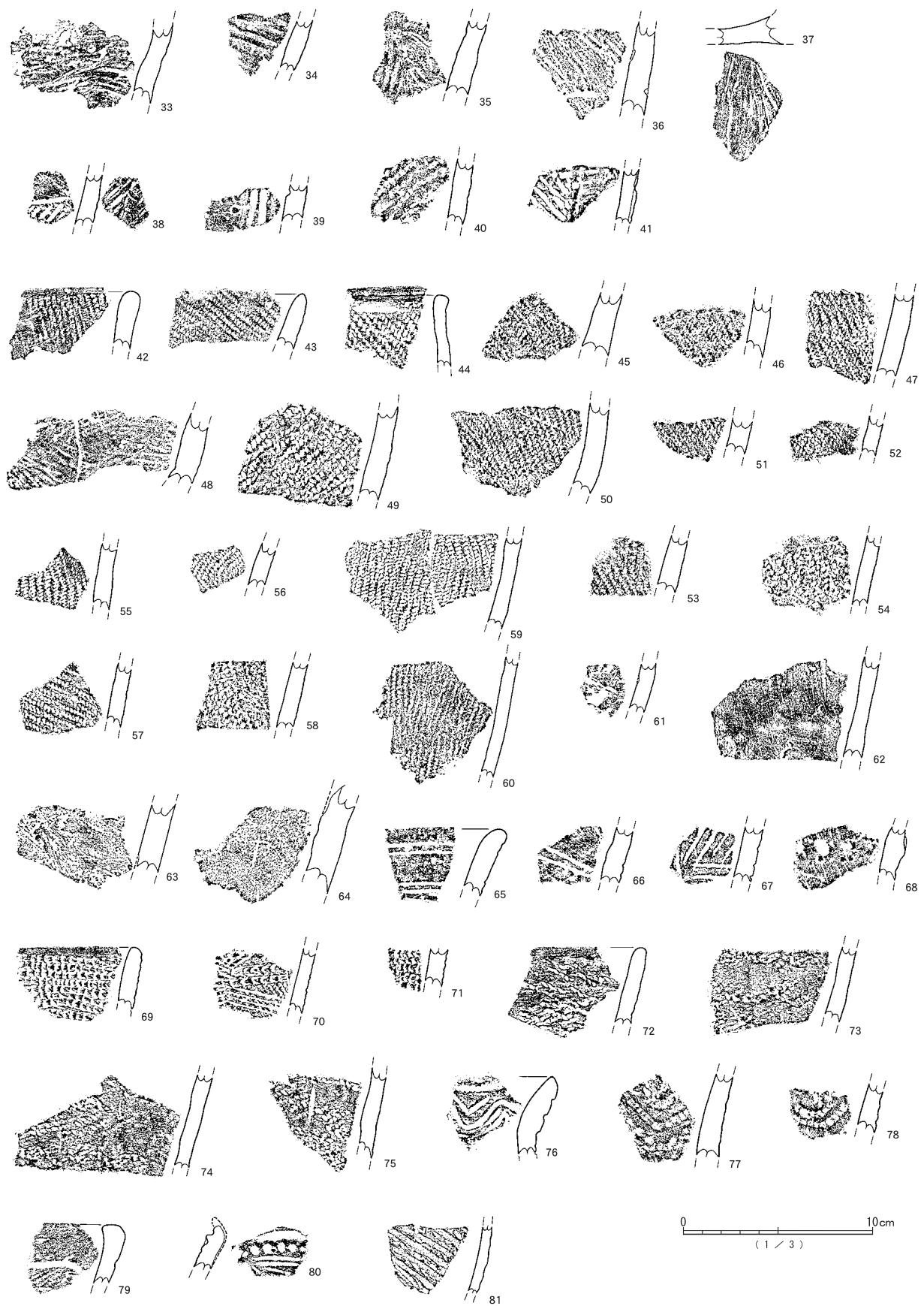
1～9は、撫糸文系土器であり、1～3が口縁部の破片、それ以外は胴部の破片である。8はかなり深く施文され、一見沈線のようにみえる。10～41は、条痕文系土器であり、10・11・13が口縁部破片、37が底部破片、それ以外が胴部破片である。貝殻状工具により横位あるいは斜め方向に施文される。



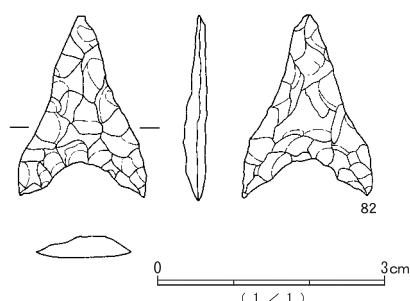
第31図 縄文土器出土分布図



第32図 縄文時代出土遺物(1)



第33図 繩文時代出土遺物(2)



第34図 縄文時代出土遺物(3)

10・11は、表面に竹管状の工具による矩形をモチーフにした沈線文がみられる。口唇部には、等間隔で浅い刻目が施される。12は、縦位にフネガイ科の貝、おそらくサルボウガイとみられる貝殻の腹縁による圧痕文が3条みられる。13では、表裏ともにはっきりとした条痕文が施され、口唇部に等間隔で幅広・深めの刻み目が付される。41は縦位に細目の紐線文が施される。42～60は縄文のみが施された土器で、42～44が口縁部破片、これ以外は胴部破片である。50は、比較的薄手で口縁がやや内傾する器形で、口縁部直下に浅く太めの無文帯がめぐる。61～64は無文の胴部破片、65～67は沈線文の施された土器破片である。65は口縁部破片である。68は、指頭圧痕状の窪みが横位に3箇所みられる。69～71は諸磯a式とみられる土器で、69・71では全面に横方向に竹管文が施される。72～75は下小野式の範疇に入るとみられる土器で、撚糸の側面圧痕が施される。76～78は阿玉台式とみられるもので、77と78には屈曲する複数の結節沈線文がみられる。胎土中には金雲母が含まれる。76は口縁部破片で屈曲する沈線文がみられる。79は、称名寺式の口縁部破片で、沈線による区画内に縄文がみられる。80・81は、加曾利B式である。80は口縁部破片で、外面は表面が剥落する。内面には口縁直下に円形の刺突文が横位にめぐり、その下に横位の沈線文がみられる。81は粗製土器の胴部破片である。



第3節 弥生・古墳・奈良時代

本報告にもとづく根田代遺跡の調査では、弥生時代から奈良時代の遺構として、竪穴(住居)跡95軒、環濠、溝1条、円墳1基・方墳7基、古墳計8基、土坑12基、地下式土坑3基、粘土採掘坑4基が検出されている。これらの遺構の形成過程は、弥生時代中期末から古墳時代前期に居住域としての利用があり、古墳時代前期以降、墓域へと転じる。6世紀後半から7世紀初頭には1・5号墳が、終末期には方墳群が形成され、奈良時代と推定される地下式土坑墓は、終末期の埋葬遺構に連なるものと考えられる。各時代を継起した遺構群の形成が認められるため、本節では、弥生時代から古墳時代、奈良時代を一括して取り上げることとする。

土坑等については、本来時期不明とすべきものもあるが、多くは埋葬遺構と推定され、竪穴住居跡、古墳群に付帯する可能性があるため、本節に含めておく。

本遺跡の時期設定は、以下のとおりとし、詳細は第4章を参照願いたい。ただし、遺構の性格、時期等による出土遺物量の差もあり、細別時期には精粗がある。

根田代1期	弥生時代中期宮ノ台式終末期
根田代2期	弥生時代後期久ヶ原1式期
根田代3期	弥生時代後期久ヶ原2式期
根田代4期	弥生時代後期山田橋1式期
根田代5期	弥生時代後期山田橋2式期
根田代6期	弥生時代終末期
根田代7期	古墳時代前期初頭
根田代8期	古墳時代前期前半
根田代9期	古墳時代後期
根田代10期	古墳時代終末期
根田代11期	奈良時代

(1) 竪 穴

本報告にもとづく根田代遺跡の調査では、95軒(基)の竪穴が検出され、この内23・48号竪穴で1回の拡張をともなう建て替えが認められ、総数97軒を数えることができる。他にも、建て替えの可能性は認められるが、上記2軒以外は総数に含めていない。

竪穴番号は88号竪穴までであり、A・B・C号の呼称を用いているが、これは、遺物の取り上げ状況などから調査時の区分呼称を踏襲したためであり、同位置での建て替えと通常の重複を含む、少々分かりにくい表記となったが容赦願いたい。竪穴No.自体は、A地点調査区西側から振り直している。

95軒は、基本的に竪穴「住居」としてとらえられるが、15号竪穴など、一部に住居としての機能を欠くもの、あるいはB地点88号竪穴など、住居、建物として不確実なものも含んでいる。地点別の竪穴軒数は、A地点83軒、B地点12軒である。

重複竪穴住居跡の新旧関係については、第1章第3節で述べたとおり、遺構検出状況からの把握が難しいもの多かった。本来、遺構の時期決定は、遺構検出状況での新旧関係の判断が優先されるべきであるが、不明なものについては土器を基本とした。ただし、個々の記載のとおり確証が乏しいも

のも含んでいる。

土器については、遺存遺物をもとに決定されることが基本となるが、覆土資料、出土状況詳細が不明なものを判断材料とした。とくに宮ノ台式期は、小範囲での累積的な竪穴の構築が認められ、出土土器の多くは隣接する竪穴住居からの投棄によると推定される。したがって、ここでの所属時期は、炉の埋設土器等をのぞけば、あくまでも廃棄および廃棄後の埋没時期としてとらえなければならない。しかし、その時間的経過は、現状の土器編年にもとづく時期区分の中で、集落の変遷過程に齟齬が生ずるものとは考えない。また、竪穴平面形態についても時期的な傾向を認めることができあり、とくに主柱穴をともなう場合は、柱筋に対する炉位置について分類が可能であり、宮ノ台式期は、柱筋より内側に炉が設置されることが一般的である。時期設定は、これらの点を考慮して最大限行うこととした。

1号竪穴（第35図、図版7・40・83）

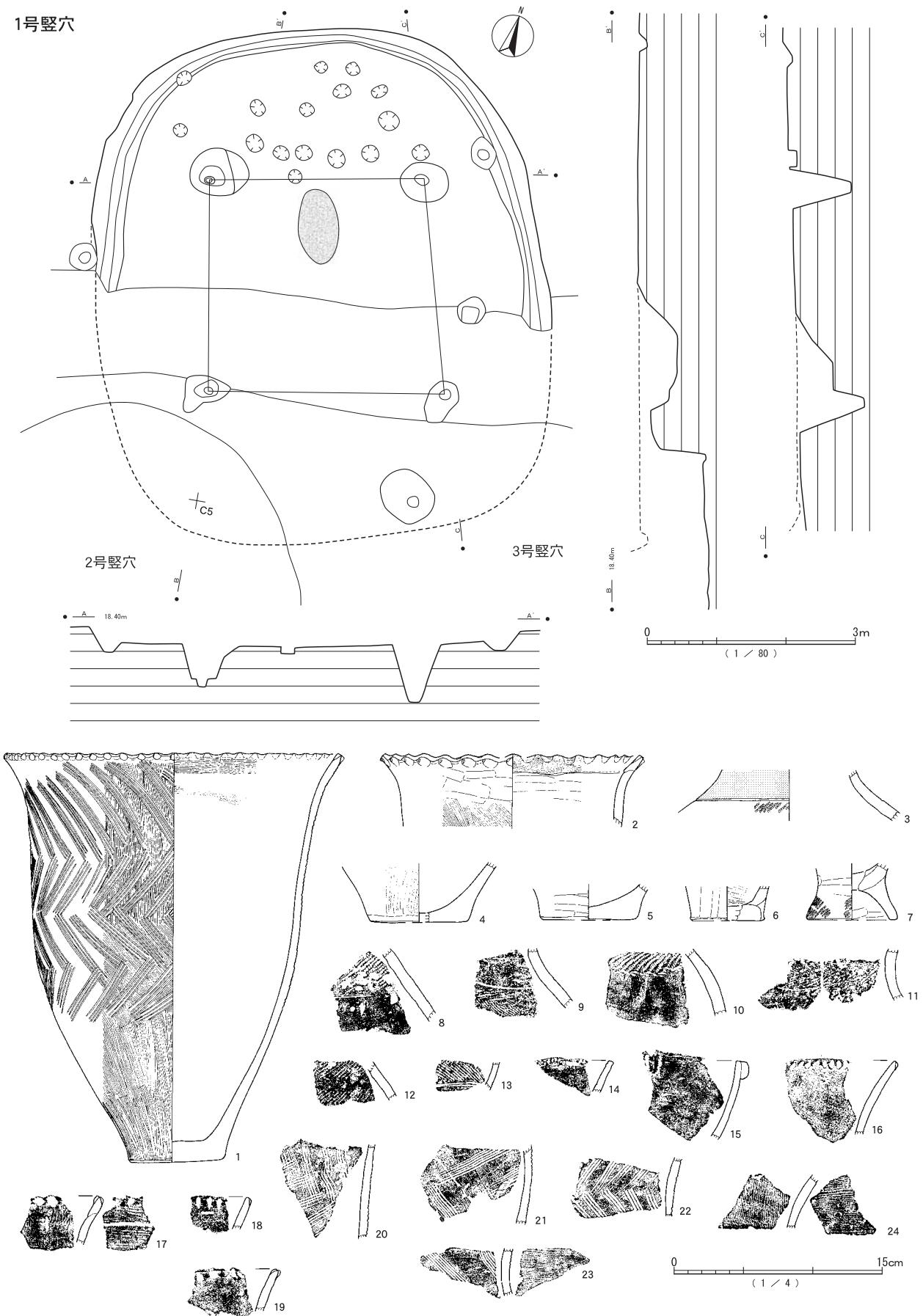
1号竪穴（住居）は、A地点B6・B7・C5・C6・C7区に所在する。北半部が1979年度調査区となる。壁面は北辺のみ残存する。壁の高さは、最大でも20cmほどしか残存していない。中央部は、東西方向に走行する溝によって失われている。また、南西隅部で2号竪穴と重複し、南東隅部も3号竪穴と一部重複するとみられる。これらの竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。竪穴形態は胴張りの隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所、竪穴規模は推定で主軸7.40m×副軸6.68m、主柱穴の柱間は主軸3.10m×副軸3.42mを測り、確認面掘形面積は推定で42.78m²である。主軸方位は、N-23.5°-Wである。炉は、主軸方位北寄りに1箇所認められた。床面は、竪穴中央付近は平滑だが、北側壁寄りは凹凸が激しい。壁溝は全周していたとみられる。

出土遺物は土器のみであり、1・6が南東隅主柱穴から出土している。1は、口縁部を2/3ほど欠損するが、比較的遺存率が高い。出土状況の詳細は明らかではないが、柱抜き取り穴内からの出土であろうか。1を含め、出土土器は宮ノ台式に比定されるものが主体となる。1・2・16～24が甕形土器、3・8～12・14が壺形土器、13・15は椀ないし高杯形土器である。7も高杯形土器であろうか。壺形土器横帯縄文は、3・9・11が沈線区画、16が半裁竹管等、14が無区画であり、16がLR単節斜縄文を2段以上重ねるのに対して、9は羽状化する。15は、端末結節文ではなく、単節縄文を別原体で巻き止めたものであろうか。回転結節文は確認できない。

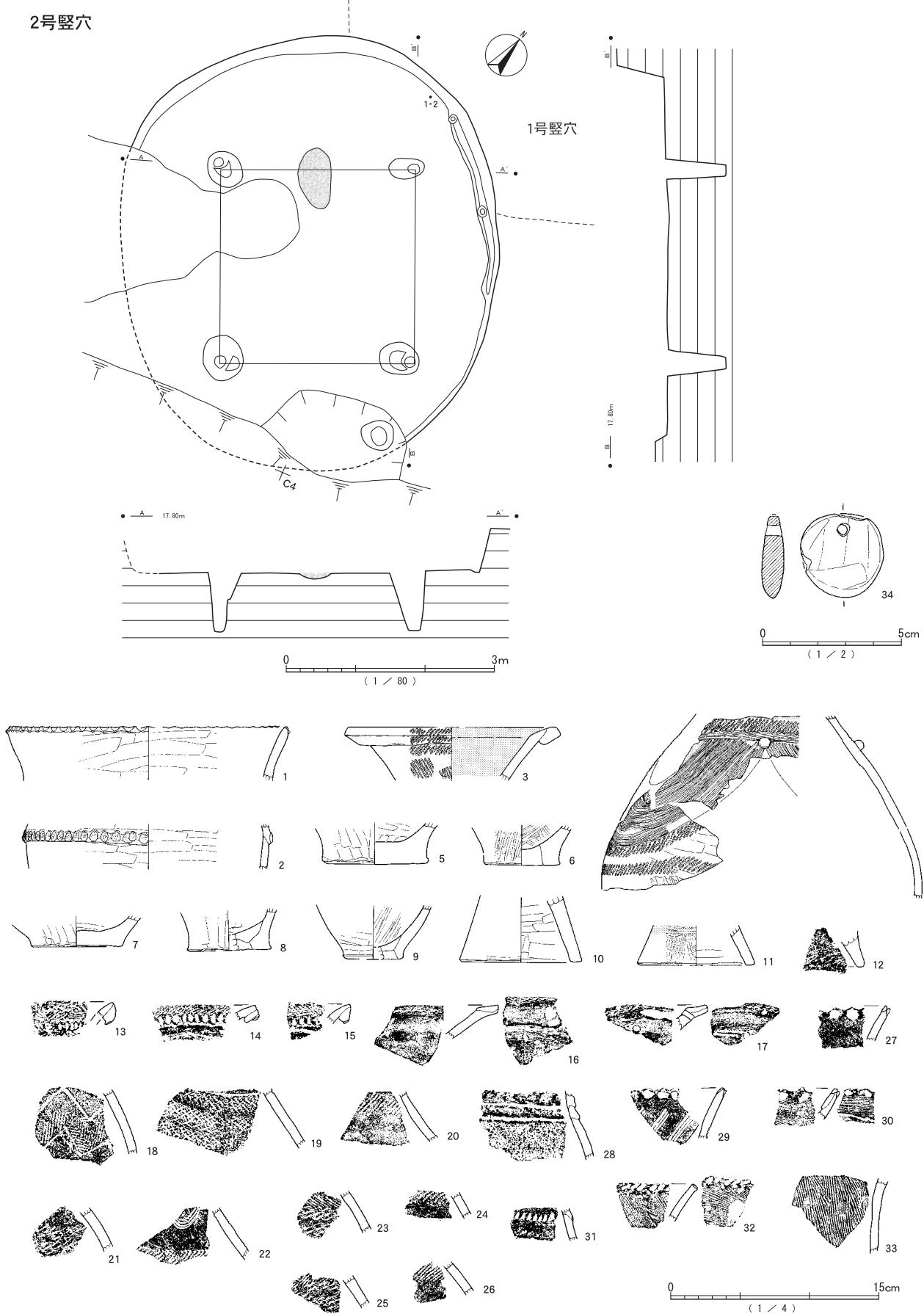
本竪穴の所属時期は、1の甕形土器によって廃棄段階を推定することが可能であり、宮ノ台式期、根田代1期に比定される。出土土器から判断するならば、重複する2・3号竪穴に先行する。

2号竪穴（第36図、図版7・79・83）

2号竪穴（住居）は、A地点B5・B6・C5・C6区に所在する。壁面は北辺から東辺部のみ残存する。壁の高さは最大70cmほど残存しており、南側へいくほど傾斜地形により浅くなる。北東隅部で1号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。床面のレベルは、本竪穴の方が70cmほど低い。南側は東西方向に走る溝（2号道路）によって失われている。また、西側の一部も近現代の墓穴によって破壊されている。竪穴形態は橢円形を呈し、主柱穴は4箇所、竪穴規模は推定で主軸6.30m×副軸5.43m、主柱穴の柱間は主軸2.82m×副軸2.82mを測り、掘形面積は推定で27.39m²である。主軸方位は、N-33°-Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。床面は平滑で比較的硬い。壁溝は北東側で部分的に検出した。



第35図 1号竪穴 遺構遺物



第36図 2号竪穴 遺構遺物

北側壁際床面から1・2が出土している。他に、7・18が床面から、19が炉内から、13・15が覆土から出土している。土器は、宮ノ台式から久ヶ原・山田橋式が混在する。1・2・27～33が甕形土器、10が台付甕形土器、3・4・13～15・18～26が壺形土器、11・12・16・17が高杯形土器である。1・2は、同一個体の可能性が高いが、破片資料のため器形が不確実で、掲載図では径が一致していない。2は胴部1段のみと推定され、段部位置は胴部最大径位置まで下降している。3は、口縁端部から口縁部全体に単節羽状縄文4段以上を重ねる。18は山形縄文帯であり、単節羽状縄文を充填する。19は付加条3種を沈線で区画する。これら床面を中心とする出土遺物は、時期的におおむね対応し、本竪穴の所属時期の根拠となる。4の壺形土器は、頸部にLR単節縄文を施文のち、3本単位の束縫具による直線文、波状文、弧状文を重ねる。21・22は、鍔状の口縁をもつ高杯形土器であり、口縁端部に回転結節文を施文する。これらは、1号竪穴に関連する可能性も考えられる。34は、有孔の土製円板であり、土器片の再利用によるものではない。

本竪穴は、久ヶ原2式、根田代3期に比定される。出土土器から判断するならば、重複する1・3号竪穴に後出する。

3号竪穴 (第37図、図版7・40・41・83)

3号竪穴(住居)は、A地点C5・C6・D5・D6区に所在する。壁面は東側にしか残存せず、南へいくほど浅くなるが、壁高は最大で50cmほどある。北東隅付近では、直下に壁溝を検出している。北側の壁の一部は、東西方向に走る溝によって失われている。また、西側で1号竪穴と重複するとみられるが、この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。床面のレベルはほぼ同じである。竪穴形態は橢円形を呈し、竪穴規模は現存部主軸で5.44m、副軸推定で5.07mを測る。主軸方位は、N - 78.5° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。床面はソフトローム上にあり、やや凹凸が目立つ。平滑で硬化する。壁溝は北東側で部分的にしか検出されていない。主柱穴は存在しないが、南東隅壁際で所謂貯蔵穴が検出された。南東隅付近の橢円形の土坑は、本竪穴との新旧関係等明らかではない。長軸135cm × 短軸95cm、深さ47cmを測る。

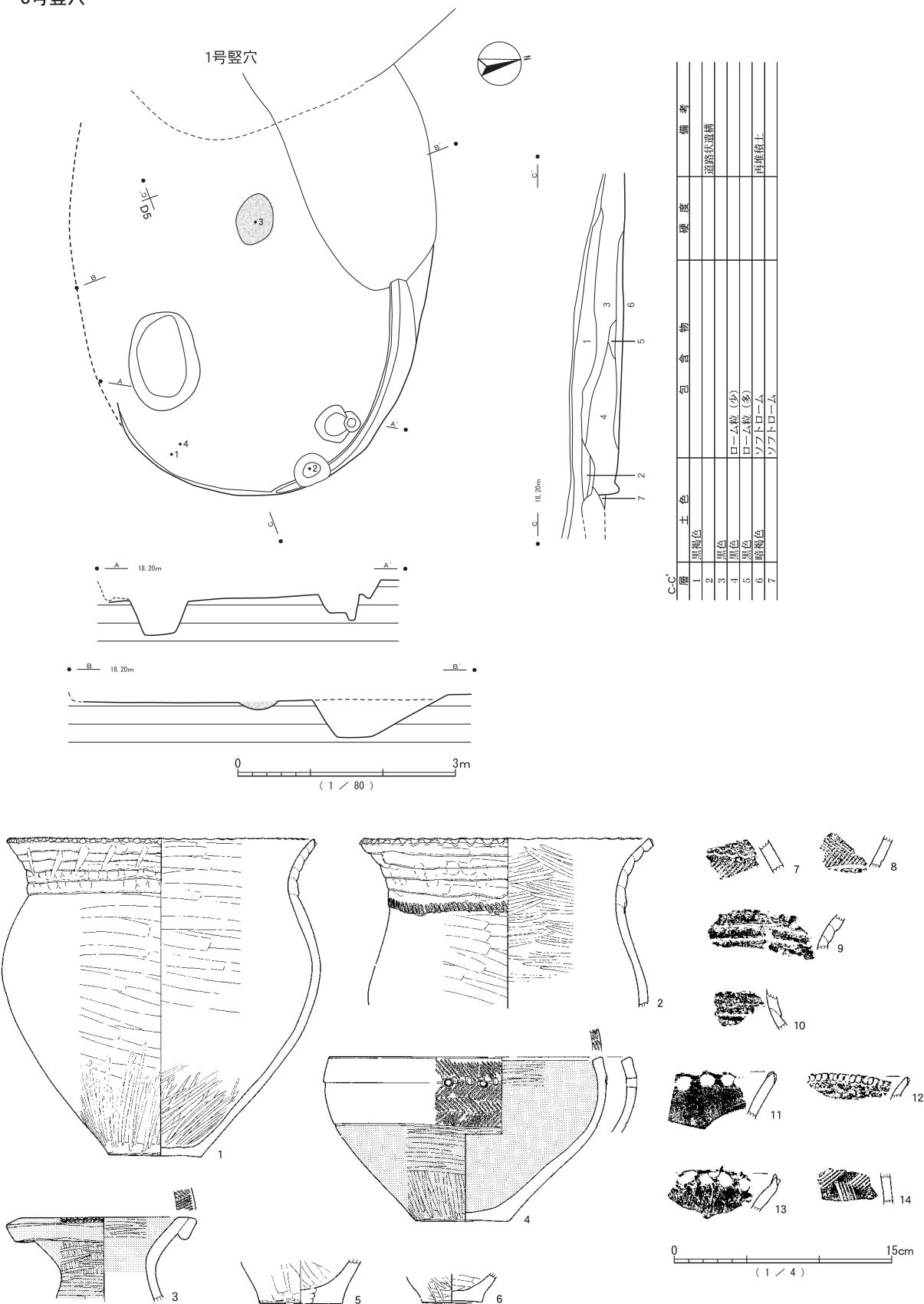
遺物は、1・4が土坑近くの壁際床面直上から、2が貯蔵穴内から、3が炉内から出土している。他に、9が床面上から出土している。出土土器は、1・2・5・9～14が甕形土器、3・7が壺形土器、4・8が椀形土器である。1・2は所謂輪積み甕であり、口頸部に粘土紐積み上げ痕を残す。3・4とともに、久ヶ原式1式の特徴をもつ。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原1式期、根田代2期と考えられる。重複する1・2号竪穴との関係は、出土土器から判断するならば、1号 3号 2号竪穴となる。

4号竪穴 (第38・39図、図版7・35・40・77～79・83・84)

4号竪穴(住居)は、A地点B4・C4区に所在する。壁面は北辺側のみ遺存する。地形の傾斜により南へいくほど浅くなるが、壁高は最大で30cmほどある。壁面残存部では直下に壁溝を検出しているので、本来全周するものとみられる。竪穴形態は橢円形を呈しているが、西辺部形状がやや不自然なことから、本来隅丸長方形であったと推定される。主柱穴は4箇所、竪穴規模は推定で主軸5.85m × 副軸4.42m、主柱穴の柱間は主軸2.60m × 副軸2.05mを測る。掘形面積は推定で22.20m²である。主軸方位は、N - 126° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。本竪穴は、ローム面まで掘り込まれておらず、床面も黒色土上にあるが、比較的硬く踏みしめられている。

3号竪穴



第37図 3号竪穴 遺構遺物

遺物は、1が北東隅付近Pit内から出土している。他は層位等不明。1・2・4・6～14・17～30が壺形土器、3・32～42が甕形土器、15・16・31が鉢形土器である。出土土器は、ほぼ宮ノ台式に限定される。1は、口縁部が有段で、頸部に単節羽状縄文2段の横帯縄文をもつ。横帯縄文は基本的に無区画であるが、上部約1/4周に半裁竹管による押し引き状の刺突列が巡る。また、帯縄文下部に櫛(3本)区画が認められ、連弧文ないし山形縄文帯等が接続するものと推定される。6・7・9・10は、受け口状口縁であり、9・10は同一個体と推定される。横帯縄文は無区画が多いが、25および鉢形土器の31は、帯内に平行沈線文を重ねる。横帯縄文は17が羽状縄文となる。20は、横帯縄文下部に山形縄文帯ないし結紐文が接続する。26も斜行する縄文帯である。27～30は櫛描文である。24も櫛による可能性がある。21・22は回転結節文である。43は、輝緑岩製の扁平片刃石斧である。44・45は砂岩製の砥石、46は、土器片を研磨再利用した円板である。

本竪穴の所属時期は、根田代1期である。

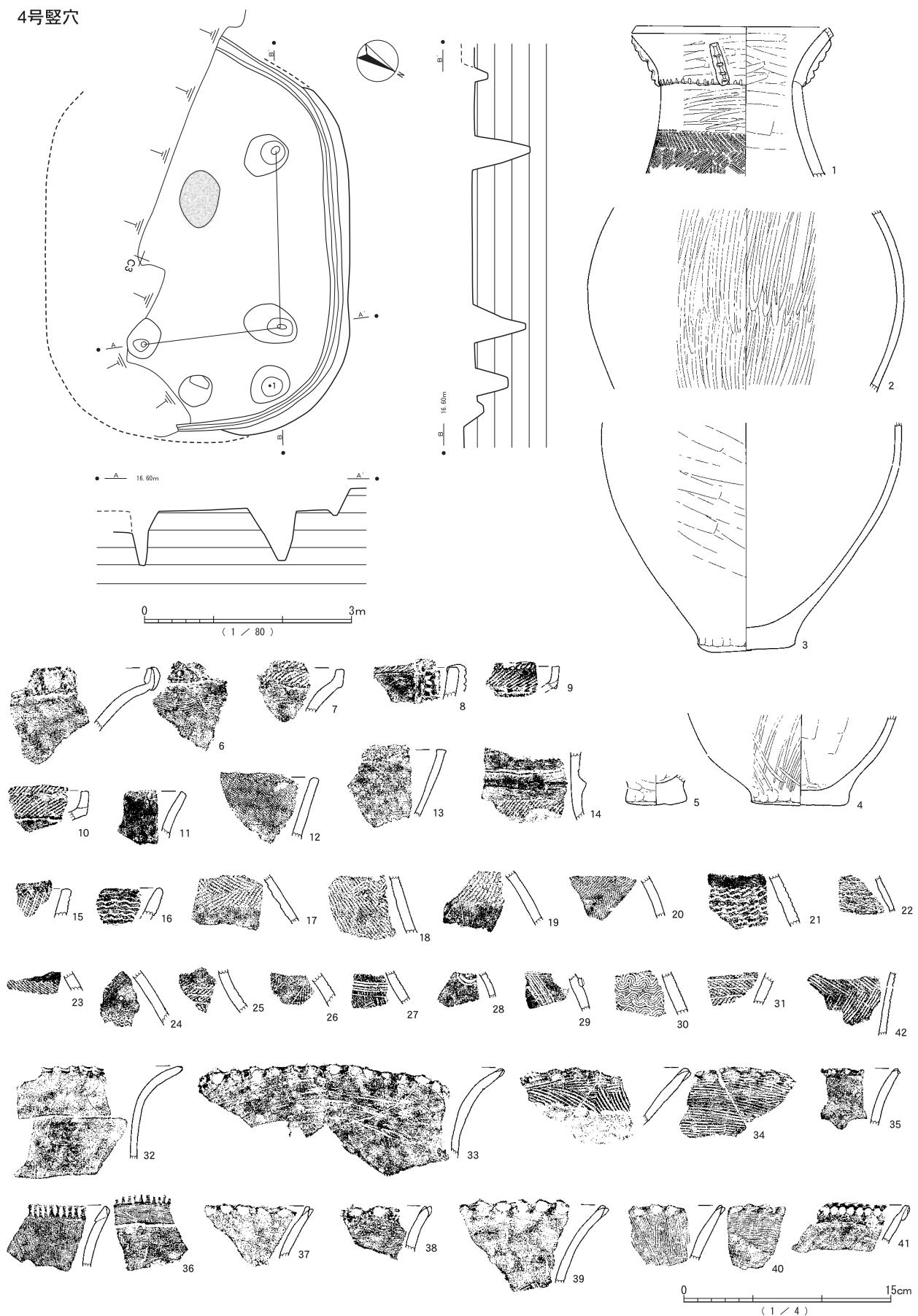
5号竪穴 (第39～44図、図版7・8・40～44・79・84・85)

5号竪穴(住居)は、A地点E6・E7・F6・F7区、9号墳墳丘部内に所在する。壁面はすべて残存するが、南側および西側へいくほど浅くなる。最大で65cmほどを測る。壁溝は全周するが、深さは平均5cm程度である。竪穴形態は楕円形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも南側壁際に数箇所の小Pitがある。竪穴規模は主軸7.18m×副軸6.04m、主柱穴の柱間は主軸3.20m×副軸3.14mを測る。掘形面積は36.96m²である。主軸方位は、N-23°-Wである。炉は主軸線上北寄りに1箇所認められた。床面は、ハードローム上に形成され、平滑で硬化する。南東の主柱穴と重複して1号土坑が検出された。検出状況および出土土器から本竪穴より新しいと判断した。

床面および床面上約20cmの黒土中から多量の土器片が出土した。とくに炉付近に顕著な分布が認められた。また、北辺部壁付近床面直上より、7の大形の壺形土器が出土している(写真図版7)。他に、6・13・17・24・48・59・65・118・119・154・190が床面から出土している。炉周辺覆土からは、1・2・3・5・11・12・18・19・22・23・29・35・36などが出土している。出土土器は、ほぼ宮ノ台式に限定され、床面と覆土出土土器にも明確な段階差は指摘できない。

土器は、1～12・14・15・17・19～21・43・65・70～73・75・77・78・82・83・85～88・90～122・124が壺形土器、13が壺ないし鉢形土器、22～36・84・125～194が甕形土器、37・38・74・76・81・89が鉢形土器、39・123が椀形土器、40が椀ないし高杯形土器、66～68が高杯形土器である。6は、3本単位の束線具による綾杉状文を16区画描く。8は、肩部に櫛描文をもつが、施文は不揃いで浅く、部分的にミガキで消去される。7・9は、2帯の横帯縄文をもち、一方を結節文帯とする。単節縄文はともに羽状化しているが、羽状縄文例は、他に76・92・94・95・96・97・99がある。87・91・100は単節斜縄文1段、90はRL単節縄文を2段以上重ねる。これらは基本的に無区画であるが、9は単節羽状縄文下部を別原体結節文6条以上で区画する。121・122も同例である。4・5は、単節縄文様の擬縄文である。擬縄文は他に88・98・106・108がある。布目圧痕の可能性もあるが、108は刺突による。7・9および110～120等は結節文帯をもつ。原体はSRが目立つものの多様である。102・104・107～109は、横帯縄文下部に意匠文をもつが、全体の構成はいずれも明らかではない。甕形土器は、22・23など頸部外面が有段となるものも認められる。これとは別に、162・164～166は、口唇部外面に段部をもち、外面段部下端と口縁端部内面側に押捺が施される。器形的には、27など胴部下半に張りをもつ

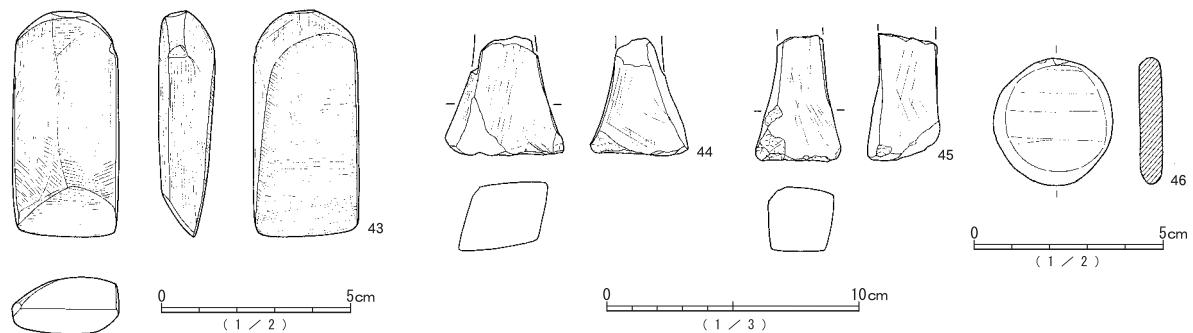
4号竪穴



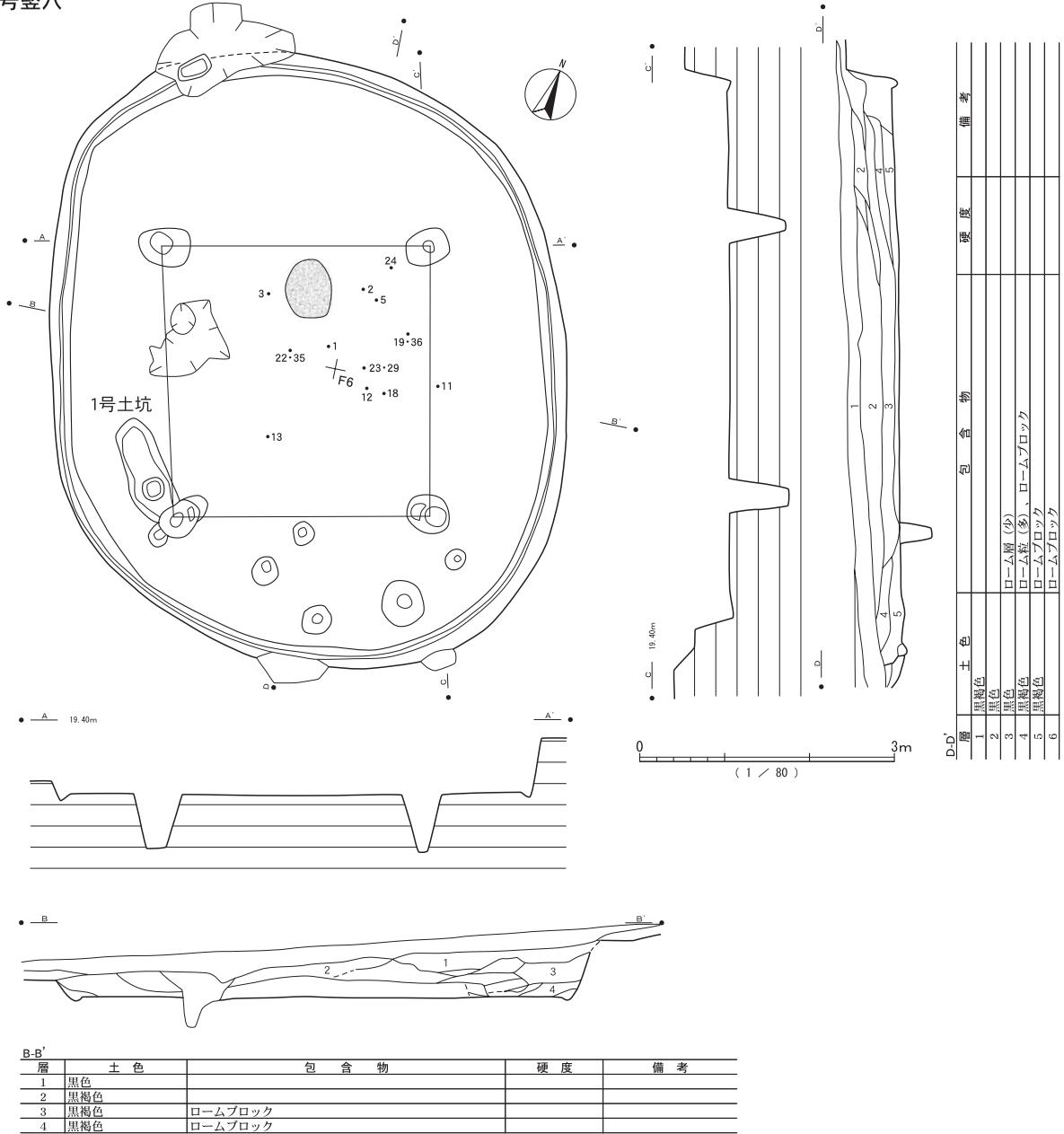
第38図 4号竪穴(1) 遺構遺物

遺構と遺物 竪穴

4号竪穴

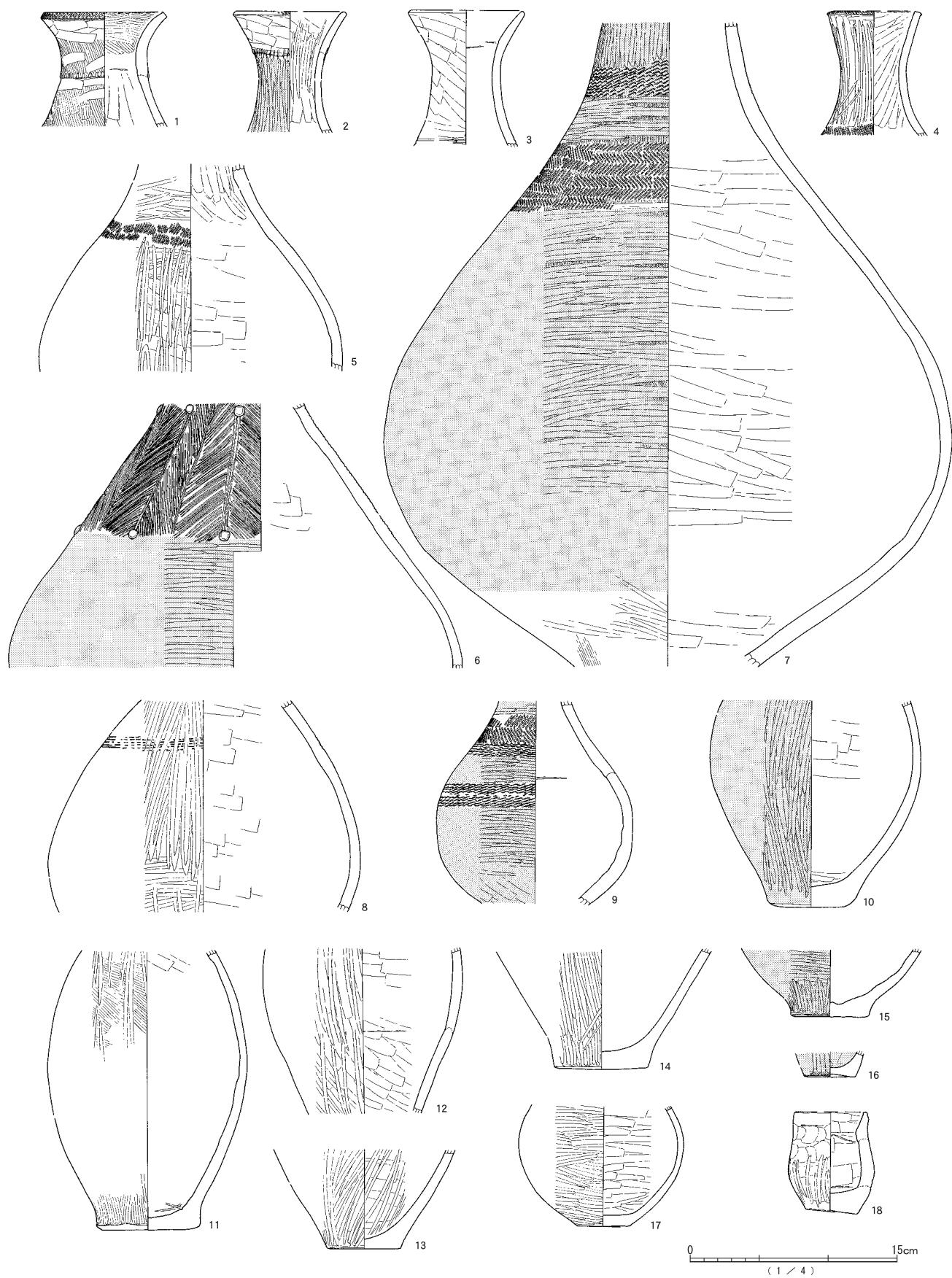


5号竪穴



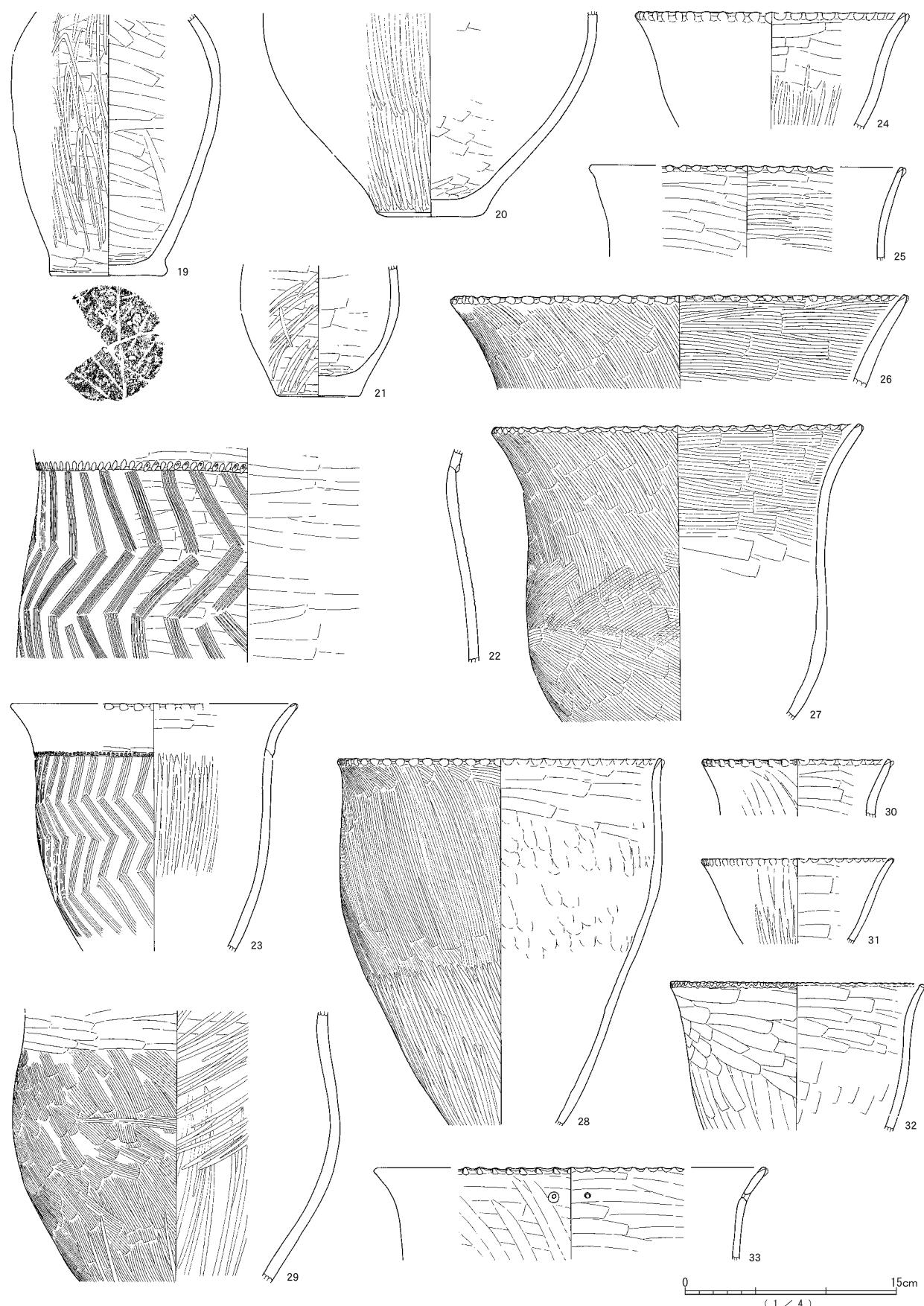
第39図 4号竪穴(2) 遺物、5号竪穴(1) 遺構

5号竪穴



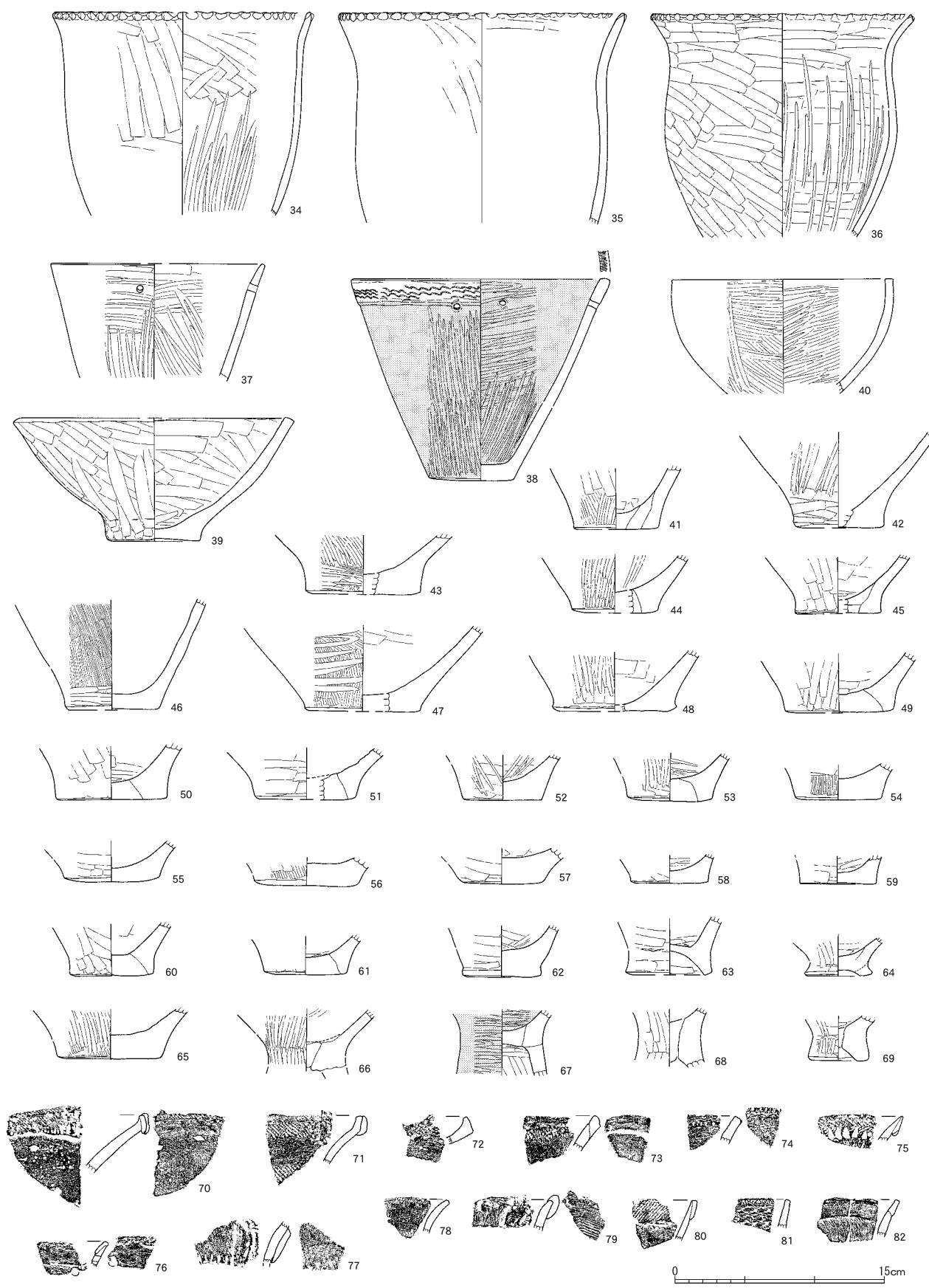
第40図 5号竪穴(2) 遺物

5号竪穴



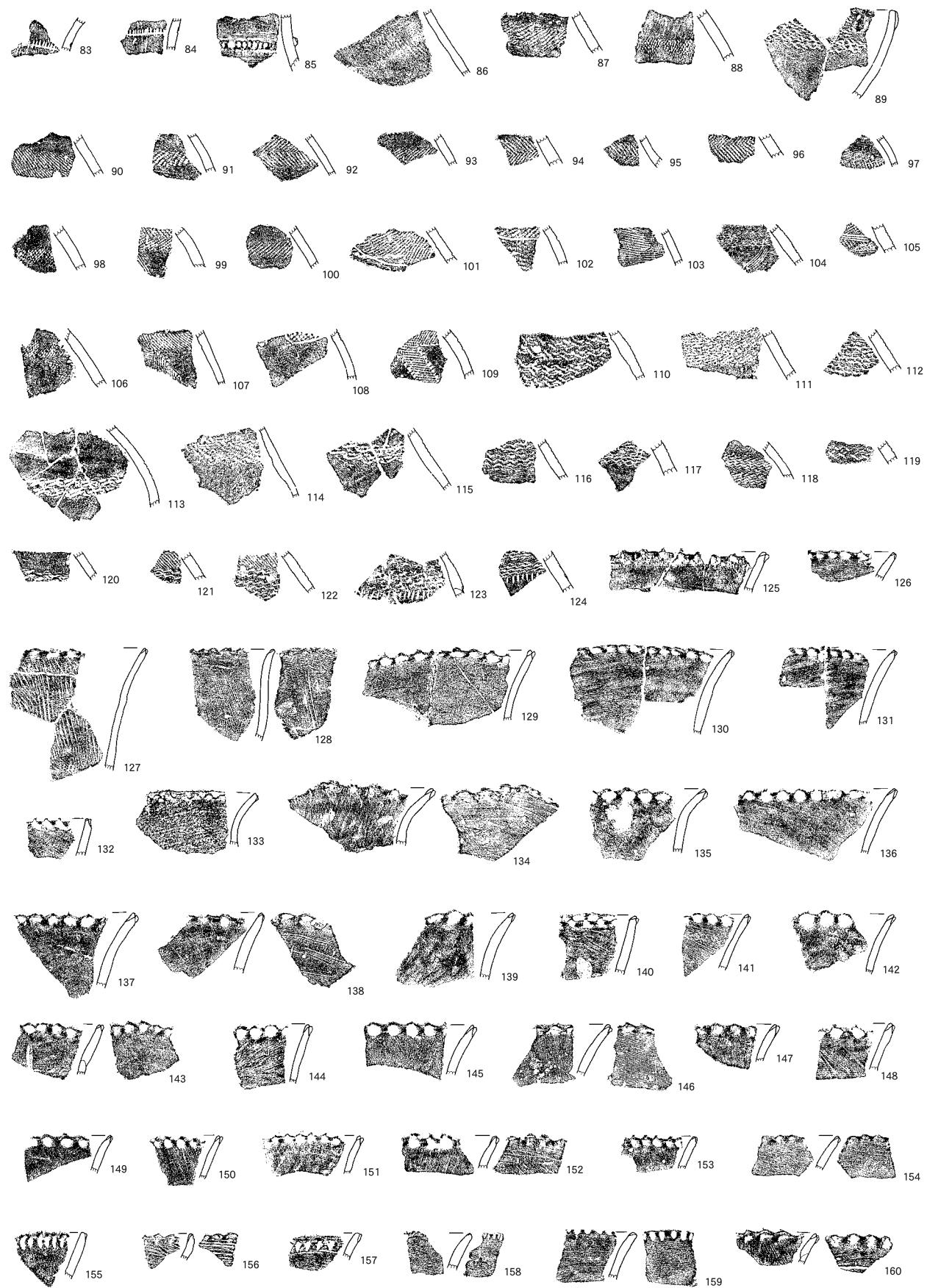
第41図 5号竪穴(3) 遺物

5号竪穴



第42図 5号竪穴(4) 遺物

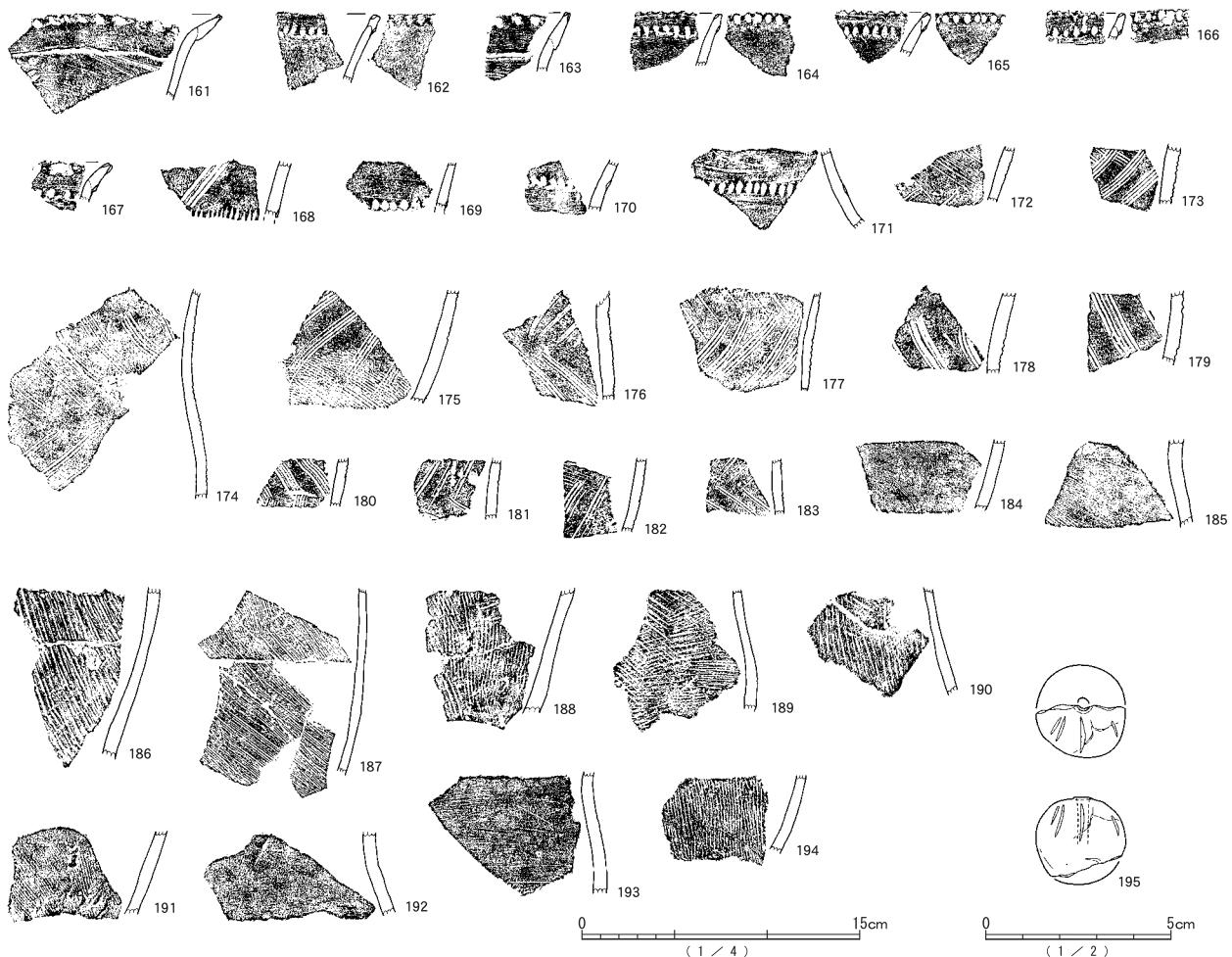
5号壇穴



第43図 5号壇穴(5) 遺物

0 15cm
(1 / 4)

5号竪穴



第44図 5号竪穴(6) 遺物

ものが目立つ。195は、土玉である。

本竪穴の所属時期は、宮ノ台式期、根田代1期と推定される。とくに、回転結節文の区画文への採用、横帶縄文の重畠化、2帯化、有段の甕形土器などが特徴的に認められ、1期後半段階に位置付けることができる。

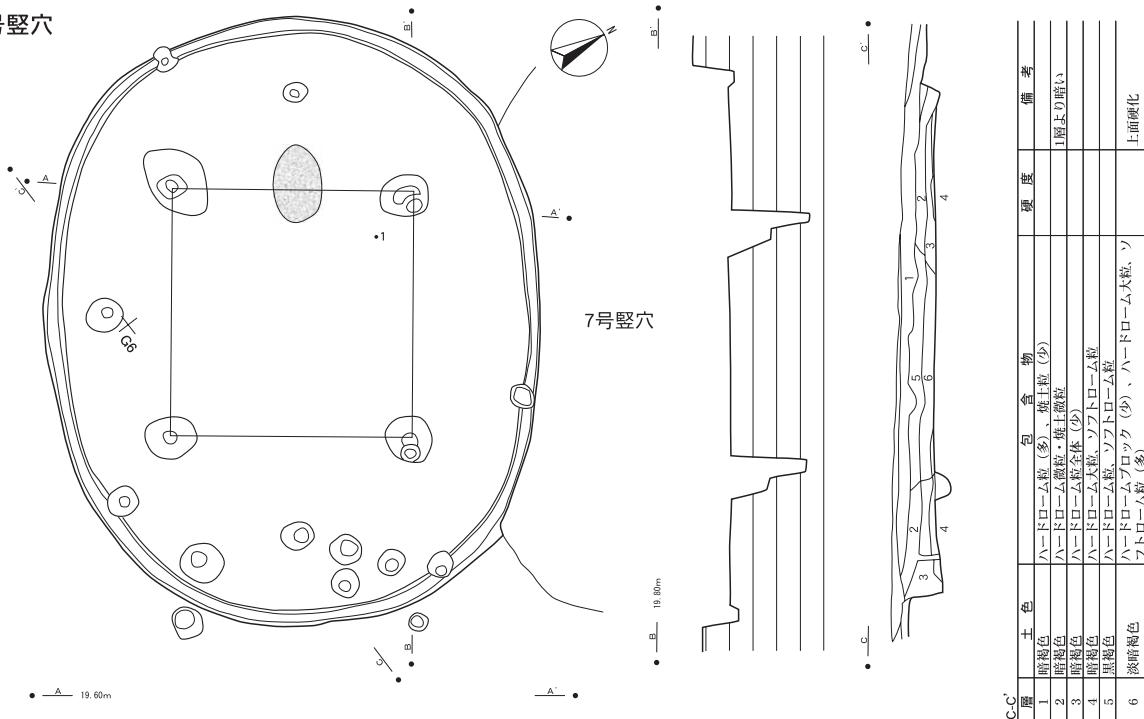
6号竪穴 (第45図、図版8・44・78・85)

6号竪穴(住居)は、A地点F6・F7・G6・G7区、9号墳墳丘部内に所在する。壁面はすべて残存するが、掘り込みは全体的に浅く、壁高は最大で30cmほどである。壁溝は全周するが、深さは平均5cm程度である。北東辺側で7号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が10cmほど低い。竪穴形態は楕円形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも東側壁際に数箇所の小Pitがある。竪穴規模は主軸6.42m×副軸5.22m、主柱穴の柱間は主軸2.60m×副軸2.54mを測り、掘形面積は27.95m²である。主軸方位は、N-61°-Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。床面はソフトローム上に形成され、平滑で硬い。

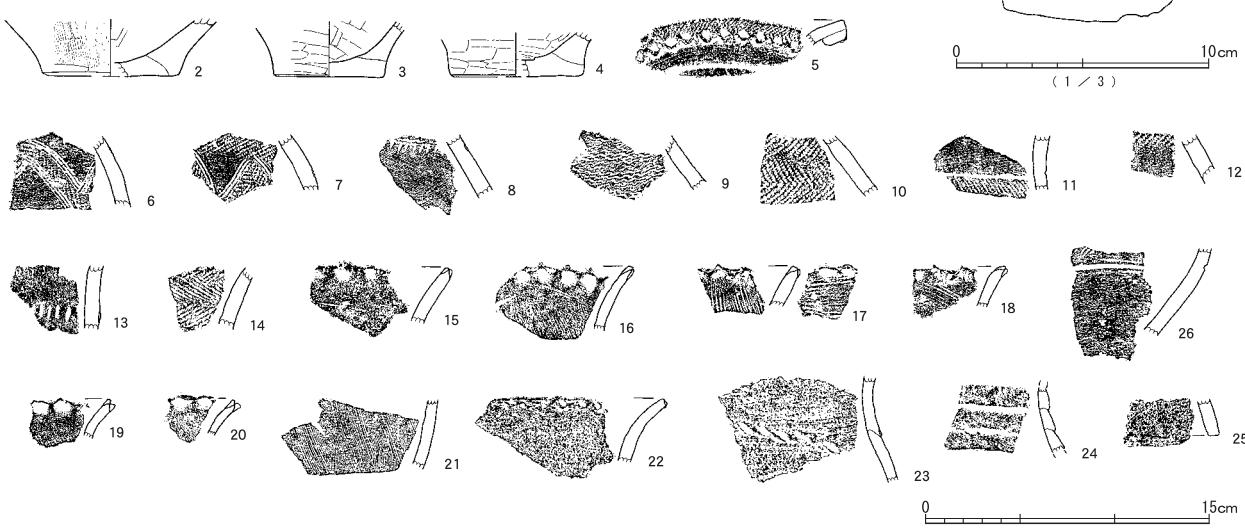
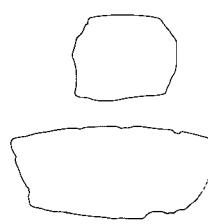
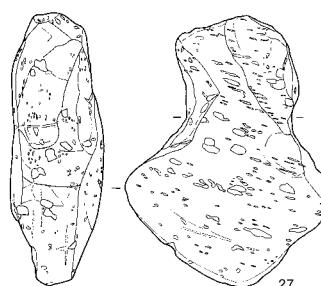
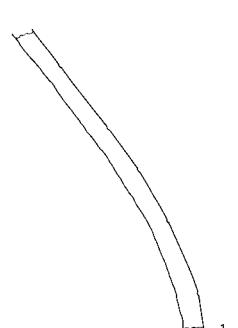
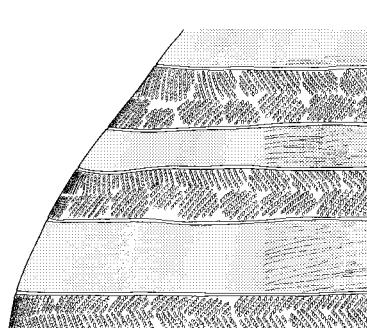
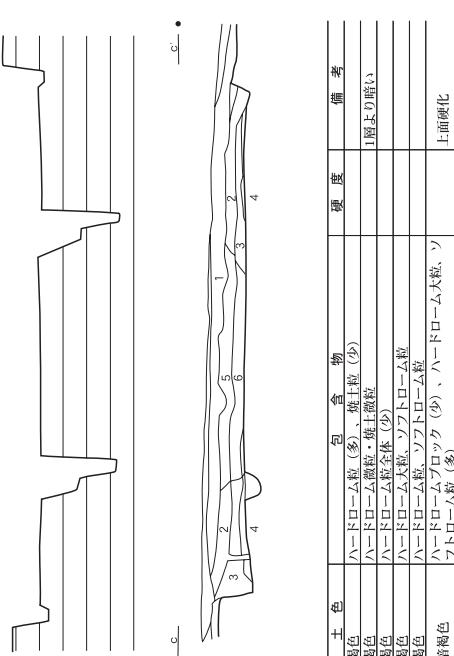
北側柱穴付近床面直上より1が出土している。他に、2が床面から出土している。出土土器は、宮ノ台式、久ヶ原式が混在する。1・5~14が壺形土器、15~24が甕形土器、25が台付甕形土器、26が椀ないし高杯形土器である。1は、単節羽状縄文2段の横帶縄文を3帯以上重ねる。久ヶ原式として

遺構と遺物 竪穴

6号竪穴



7号竪穴



第45図 6号竪穴 遺構遺物

はやや異例ではあるが、縄目も粗く、胎土などからこの段階のものと判断する。これと同段階と推定されるものは、5・21・22・24～26である。23の甕形土器は、胴部1段で、段部に棒状工具腹部等による大振りの押捺を加える。27は軽石である。両側面が抉られるが、縋縛痕は認められない。握りを意図したものであろうか。表面、下左側面がとくに平滑であり、研磨具として使用されたものと推定される。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式期、根田代3期と推定する。本竪穴の所属時期を、竪穴構造から判断すると、平面形態が橢円形を呈すること、また、柱筋に対する炉位置から、宮ノ台式期に遡ることは考えにくい。重複する7号竪穴との関係は、出土土器から判断するならば、本竪穴が新しいと考えられる。

7号竪穴（第46・47図、図版8・9・44・85）

7号竪穴（住居）は、A地点G7・G8・H7・H8区に所在する。壁面は、南側以外残存するが、掘り込みは全体的に浅く、壁高は最大で30cmほどである。壁溝は検出されていない。南側で6号竪穴と一部重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が10cmほど高い。また、本竪穴は、位置関係から9号墳と重複している可能性が高い。ただし、縦断している溝は、1号道路から分岐する道路跡と推定される。竪穴形態は橢円形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも数箇所の小Pitがある。竪穴規模は主軸7.18m、副軸は推定で6.04m、主柱穴の柱間は主軸3.57m×副軸3.28mを測り、掘形面積は推定で37.12m²である。主軸方位は、N-57°-Wである。炉跡は西寄りに1箇所認められた。東側壁際に長軸75cm×短軸50cmの貯蔵穴が認められた。この上部から1の椀形土器が出土している。他に21が貯蔵穴内より出土しているが、層序等は不明。2・3・7は床面から、5は、床面より3cm上から出土している。これらは、遺存遺物の可能性が高い。なお、貯蔵穴内に焼土の堆積が認められた。竪穴覆土では、顯著な焼土層、炭化材は認められないが、火災の可能性も考えられる。

出土土器は、1・3が椀形土器、2・4・25が高杯形土器、5・15・16が椀ないし高杯形土器、21～23が甕形土器、7・17～20・24が壺形土器、14が杯形土器である。このうち、2・15・16は同一個体と推定される。2・3・5は口縁部が有段で、2・3は口縁部帯縄文を沈線で区画する。1は、口縁部に幅広の段部をもち、段部に沈線を重ねている。口縁直下が有段となること、2・4など、厚みのある口縁端部をもつ点は、久ヶ原式・山田橋式の椀・高杯形土器のなかでも古相をしめすものと考えられる。21の甕形土器は、出土状況を含め、これら椀ないし高杯形土器と同段階と推定される。

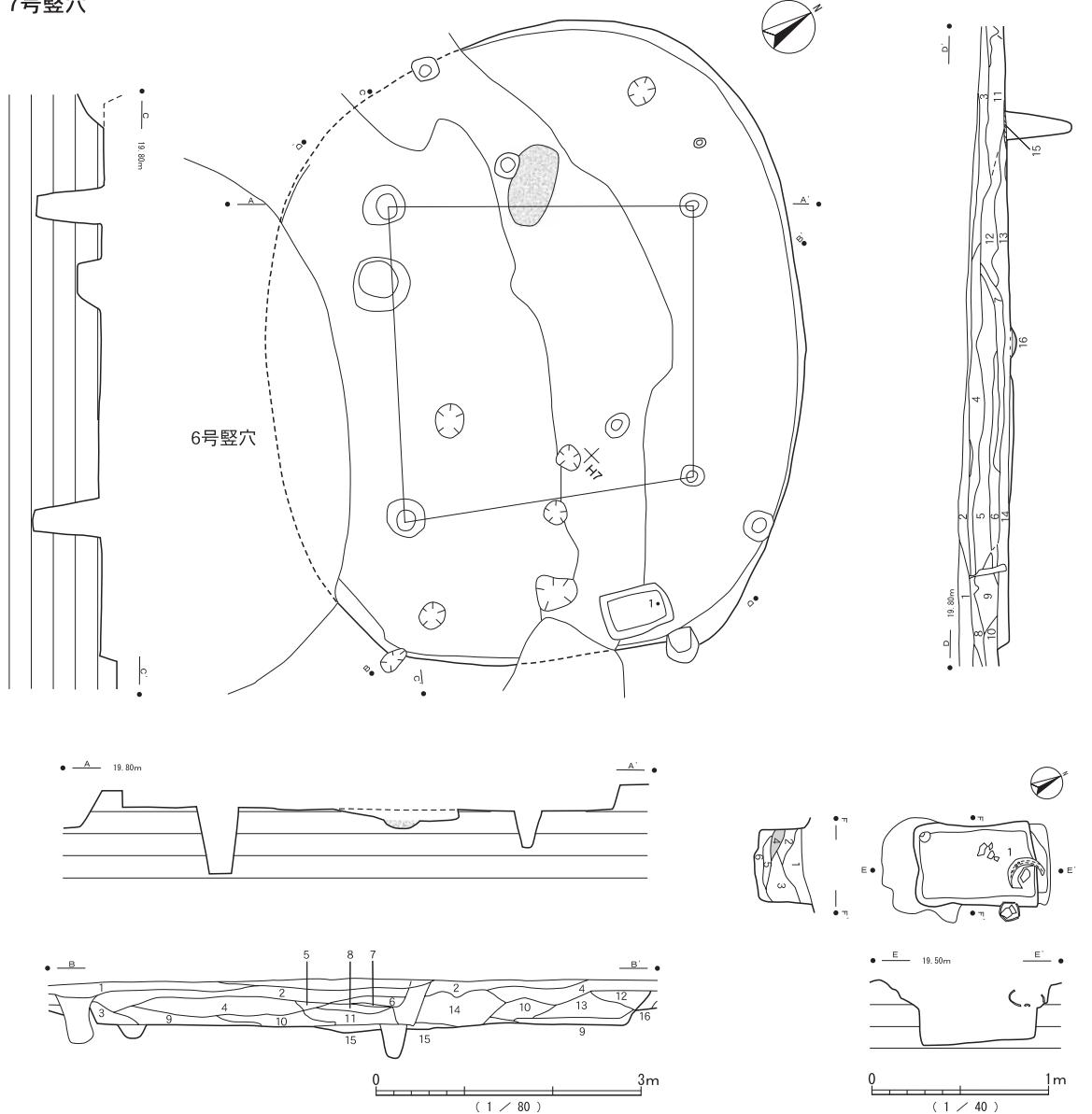
本竪穴の所属時期は、久ヶ原1式期、根田代2期に比定しておく。器種構成が限定されており、椀・高杯形土器については久ヶ原2式まで幅をもって考える必要があるが、ここでは、21の甕形土器を根拠としておく。重複する6号竪穴との関係は、出土土器から判断するならば、本竪穴が古いと考えられる。なお、本竪穴の出土土器構成は、竪穴の主軸方向をそろえる28号竪穴と一致し、土器の作り、とくに高杯形土器2と28号竪穴1の口唇部の形状は酷似する。少なくとも無関係であるとは思われない。

8号竪穴（第47図、図版9・45・85）

8号竪穴（住居）は、A地点G5区に所在する。壁面は北辺部のみ遺存するが、掘り込みは全体的に深い。壁高は最大で約50cmを測り、地形の傾斜にともない、東側へいくほど浅くなる。南側は後世の溝(2

遺構と遺物 竪穴

7号竪穴



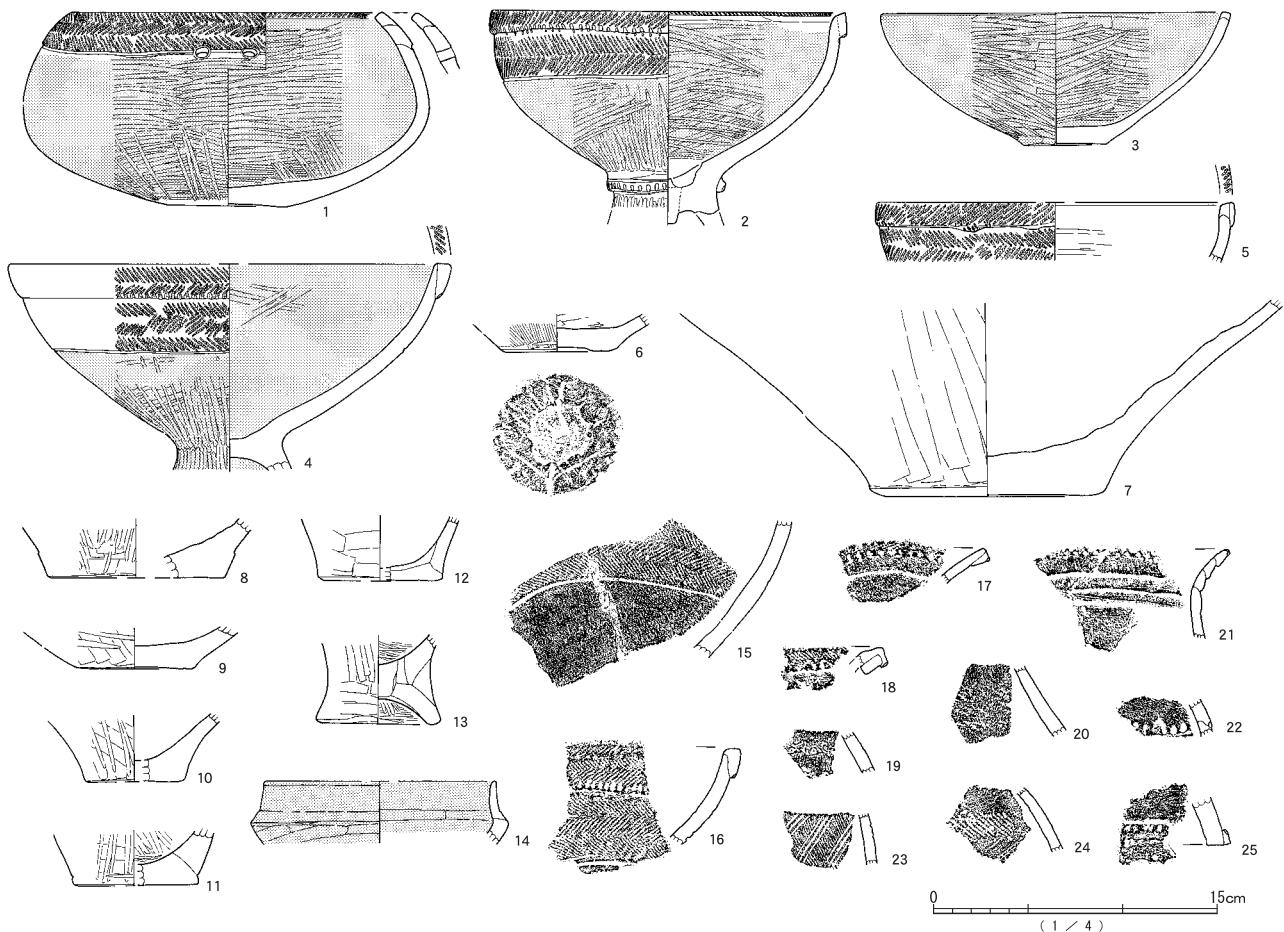
層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	根による搅乱
2	暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	
3	暗褐色	ハードローム粒（多）、焼土粒（少）	硬	
4	黒褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム粒（多）、焼土粒（少）	硬、よくしまる	
5	黒褐色		硬	色調は3層と同系、やや暗い
6	暗褐色	ハードロームブロック（多）		
7	黒褐色	ソフトローム粒、ハードローム粒（少）		
8	褐色	ハードローム大粒の集合体		
9	黒褐色	ハードローム微粒	しまる	
10	黒褐色	ハードローム微粒（やや明るい）	しまる	
11	黒褐色	ハードローム粒、焼土粒	しまる	
12	暗褐色	ハードローム微粒	しまる	
13	暗褐色	ハードローム微粒、焼土粒（多）		
14	黒褐色	暗褐色土との混合、ハードローム大粒（少）、ハードローム粒（少）、焼土粒（少）		
15	暗褐色	ハードローム大粒、焼土粒（少）		
16	暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒（少）	硬	

層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	暗褐色	ハードロームブロック（多）		
2				重機による圧土
3	暗褐色	ハードロームブロック（局部的）、ハードローム微粒（多）		
4	暗褐色	ハードローム粒（多）		溝覆土
5	淡暗褐色	ハードロームブロック（多）		溝覆土
6	暗い暗褐色	ハードローム粒（少）		
7	明褐色	ハードロームブロック、ソフトロームブロック		
8				4層に似る、1層とは別層
9	暗褐色	焼土化粘土（少）、ハードローム粒（多）、ハードローム大粒（多）		溝覆土
10	黒褐色	ハードローム粒（多）		
11	暗褐色			
12	黒褐色			色調は10層に似る、やや暗い
13	明褐色	ハードローム大粒、焼土化粘土、ハードローム粒		やや粗い
14		ハードローム粒（少）、暗褐色土層		
15	黒褐色		硬	貼床状
16	1	焼土層		

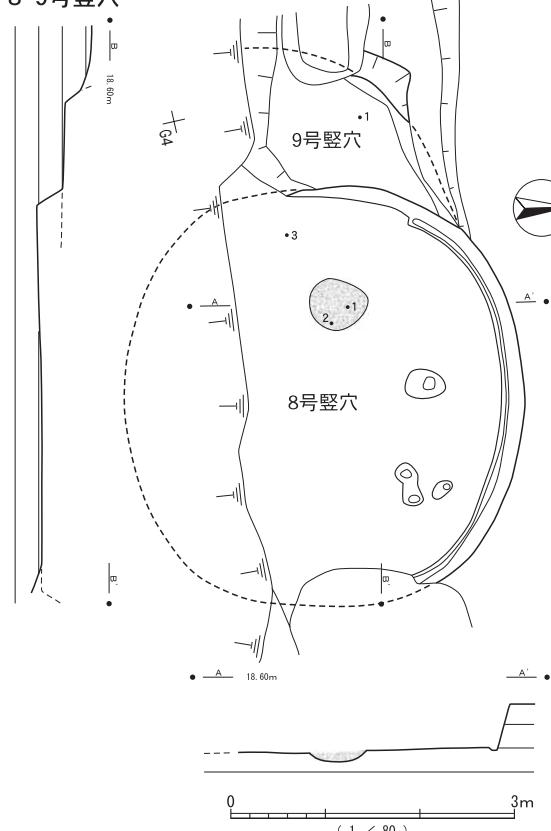
層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	黒褐色	ローク微粒		
2	黒褐色	焼土粒		
3	黒褐色			
4		焼土層、若干の黒褐色土		
5	黒色	焼土粒（少）		
6	暗褐色	褐色土、黒褐色土		

第46図 7号竪穴(1) 遺構

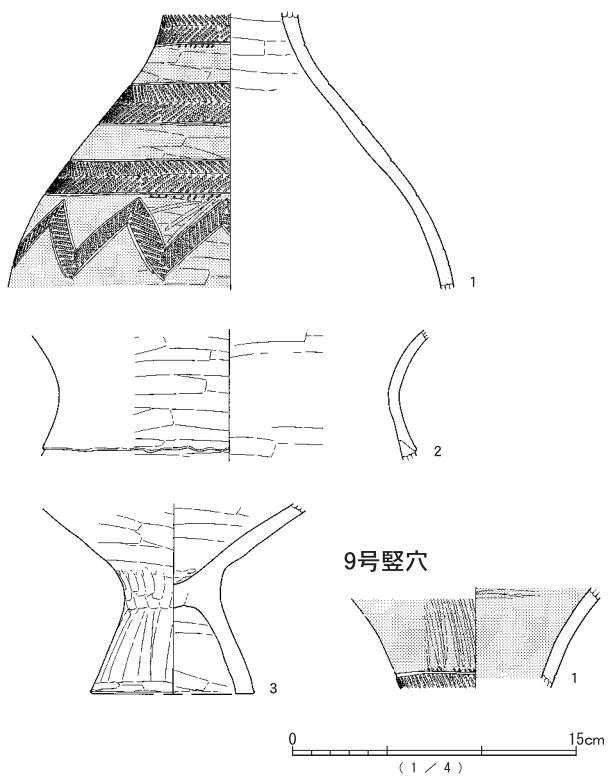
7号竪穴



8・9号竪穴



8号竪穴



第47図 7号竪穴(2) 遺物、8号竪穴 遺構遺物、9号竪穴 遺構遺物

号道路)によって失われている。壁面残存部では直下に壁溝を検出したが、深さは2cmほどと浅い。西側で9号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が25cmほど低い。また、本竪穴は、位置関係から9号墳と重複する。竪穴形態は橍円形を呈するとみられる。主柱穴は明らかでなく、数箇所の小Pitが確認できたにすぎない。竪穴規模は推定で主軸4.52m×副軸4.28mを測る。掘形面積は推定で15.57m²である。主軸方位は、N - 74° - Wである。炉跡は西寄りに1箇所認められた。床面はハードローム上に形成され、全体的に硬い。

出土土器は、炉内から1・2、炉の西側床面直上から3が出土している。1が壺形土器、2が甕形土器、3が台付甕形土器である。1は、横帯縄文3帯に山形縄文帯を重ねる。山形縄文帯は、LR単節縄文を充填する。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式新段階、根田代3期後半と推定される。9号竪穴との新旧関係は、出土土器からも判断できない。

9号竪穴 (第47図、図版9)

9号竪穴(住居)は、A地点F5・G5区に所在する。本竪穴は大部分が8号竪穴と重複し、南側が後世の溝(2号道路)によって破壊されているため、北西辺の壁面と床面の一部が残存しているにすぎない。8号竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が25cmほど高い。壁高は最大で30cm程度である。床面直上から1の壺形土器が出土している。頸部横帯縄文が頸部最小径位置にあることから、久ヶ原2式新段階ないし山田橋1式と推定される。

本竪穴の所属時期は、一応根田代3期後半に比定しておく。8号竪穴との新旧関係を判断することはできない。

10号竪穴 (第48図、図版9)

10号竪穴(住居)は、A地点H5・I5区に所在する。壁面は、北隅の一部のみ残存するが、掘り込みは全体的に深く、壁高は最大で約50cmを測る。南側は、後世の溝(2号道路)によって失われている。壁溝は検出されていない。竪穴形態は、胴張り隅丸方形を呈するとみられる。主柱穴は明らかでなく、壁際に数箇所の小Pitが確認できたにすぎない。竪穴規模は、残存部で主軸3.88m×副軸4.18mを測る。主軸方位は、N - 67.5° - Wである。炉跡は西寄りに1箇所認められた。

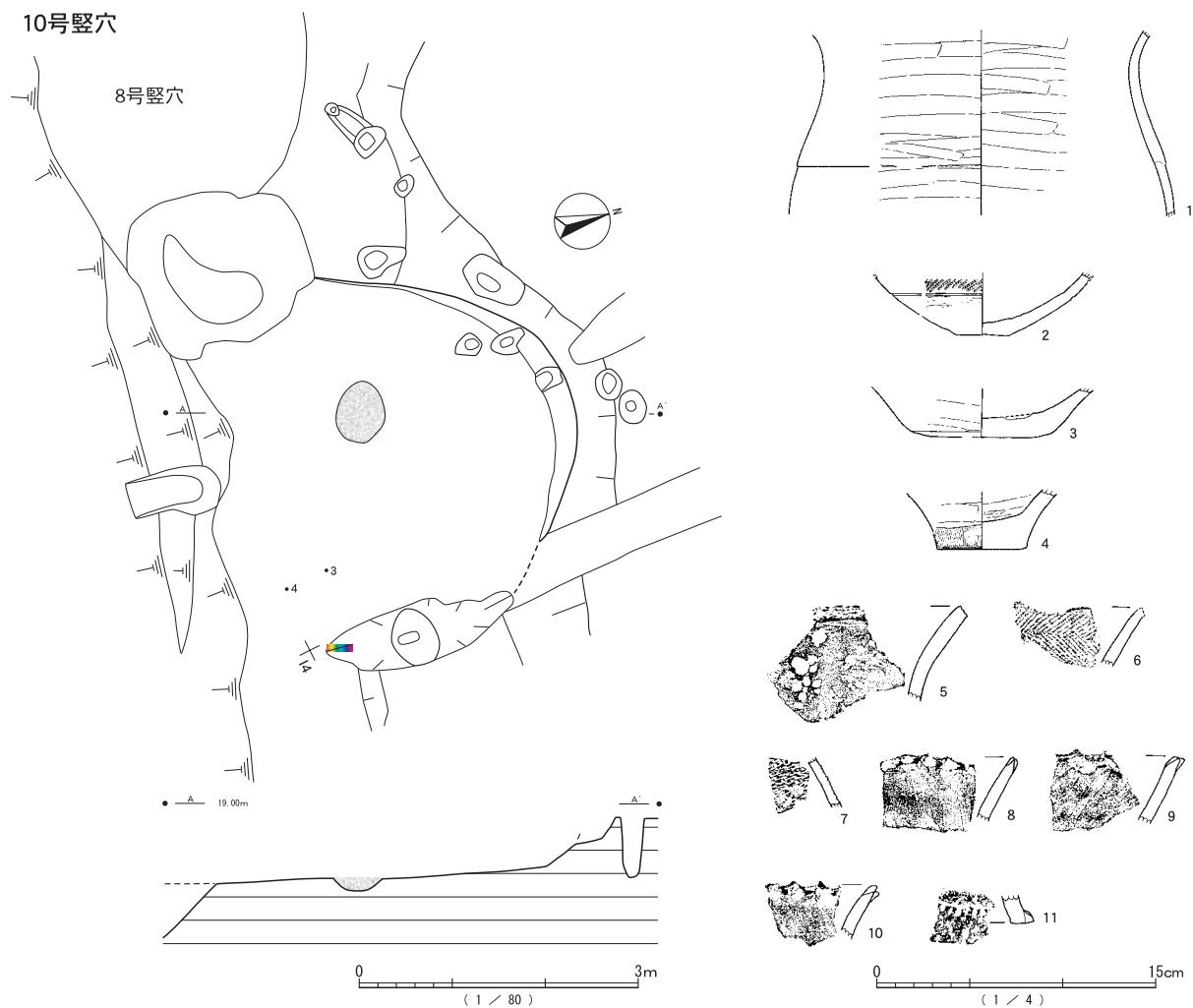
出土土器は、南東部床面上15cmより3・4が出土している。1・4・8～10が甕形土器、2が椀形土器、5～7が壺形土器、11が高杯形土器である。

本竪穴の所属時期は、甕形土器1の器形的特徴、および2の横帯縄文区画を基準とするならば、久ヶ原2式新段階～山田橋1式期、根田代3～4期と推定される。

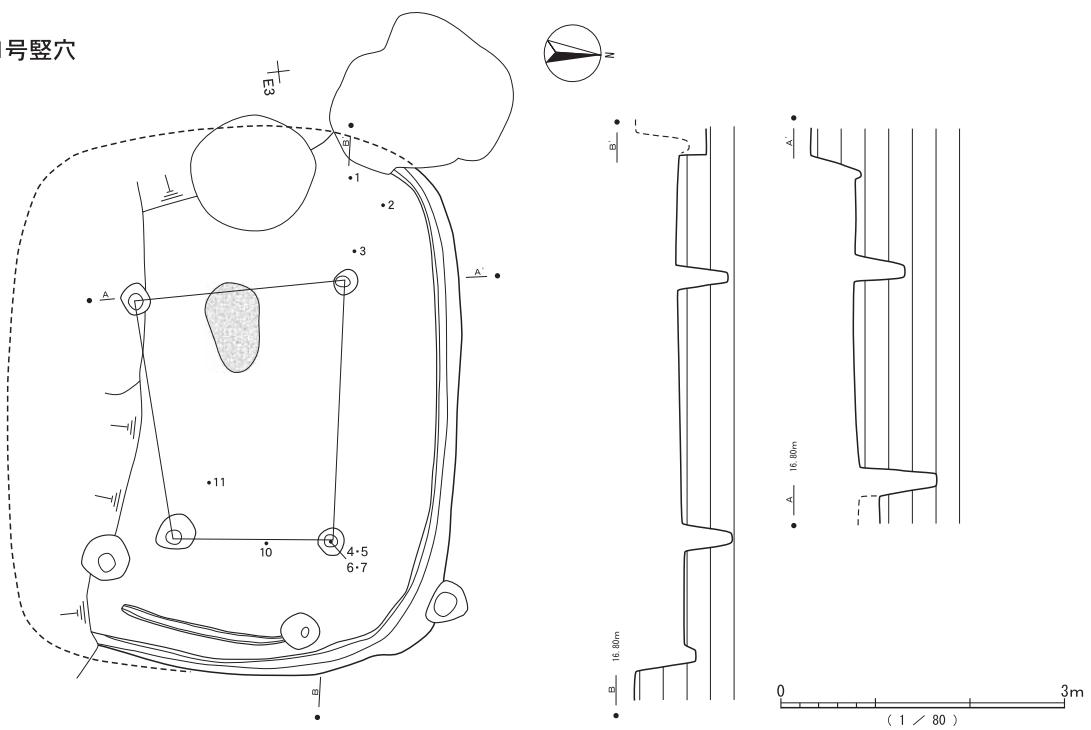
11号竪穴 (第48・49図、図版9・45・78・85・86)

11号竪穴(住居)は、A地点E3・E4・F3・F4区に所在する。壁面は、北半部のみ残存するが、掘り込みは全体的に深く、壁高は最大で約60cmを測る。地形の傾斜にともない、東側へいくほど浅くなる。西側は、後世の墓などによって失われている。壁面残存部では直下に壁溝を検出した。深さは最大10cmほどである。また、東辺部ではもう一条内側に壁溝の痕跡がみられた(写真図版9)。建て替えの可能性もあるが、主柱穴には重複が認められない。南側で12号竪穴と隣接し、おそらく部分的に重複していた可能性がある。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈する。主柱穴は4箇所、竪穴規模は、

10号竪穴

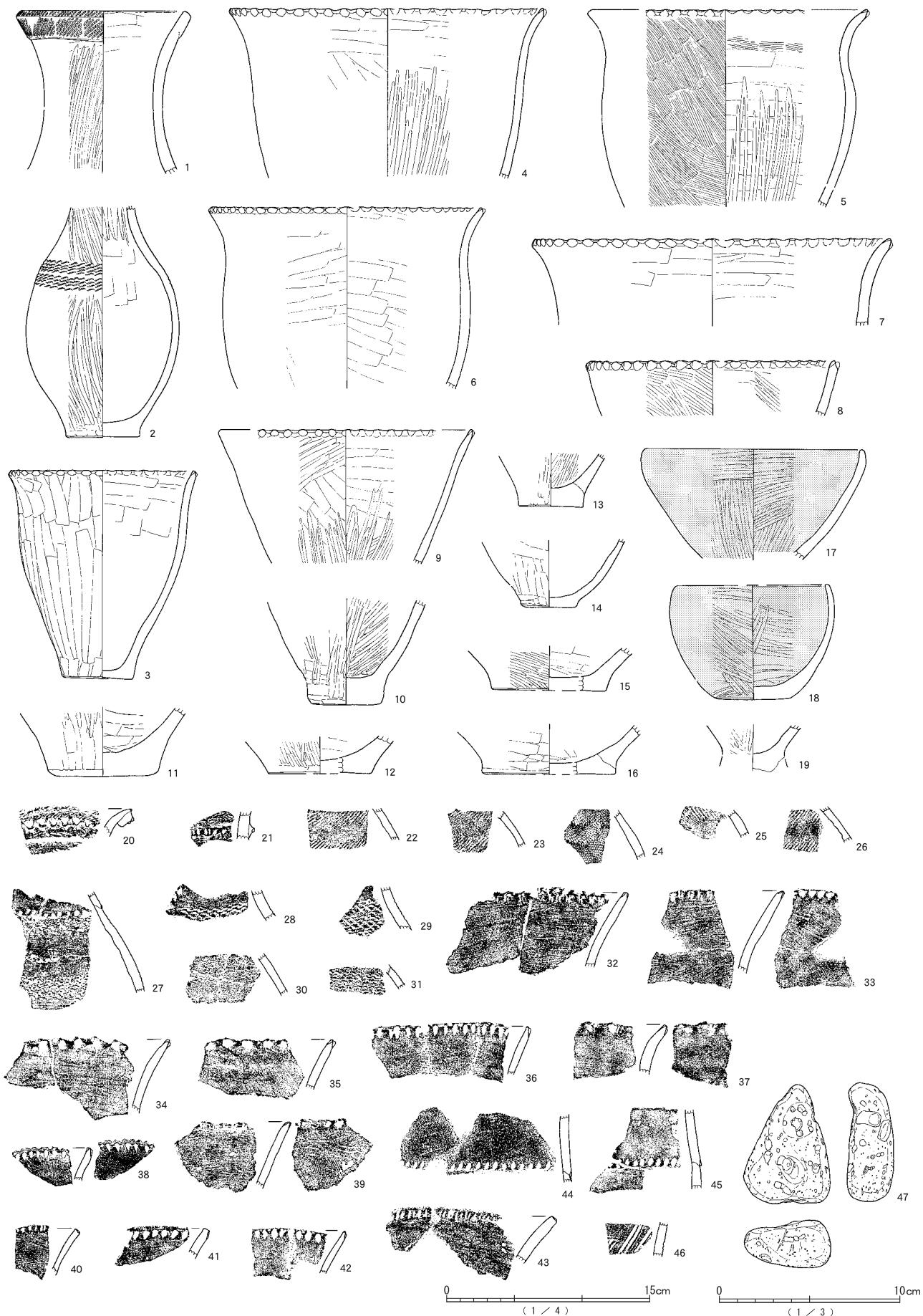


11号竪穴



第48図 10号竪穴 遺構遺物、11号竪穴(1) 遺構

11号竪穴



第49図 11号竪穴(2) 遺物

推定で主軸5.82m×副軸4.78m、主柱穴の柱間は主軸2.76m×副軸2.24mを測り、掘形面積は推定で25.38m²である。主軸方位は、N-93°-Wである。炉跡は、主軸線上西寄りに1箇所認められた。床面は比較的平滑で硬い。

炉の周辺およびその北側壁際、北東部柱穴周辺覆土、床面から15cm程度上より土器がまとまって出土している。平面図に位置表示をした中にも層序が明らかでないものが存在するが、記録上床面付近からの出土は認められない。出土土器は、1・2・15・20～31・43が壺形土器、3～9・13・32～42・44～46が甕形土器、17が椀ないし高杯形土器、18が椀形土器、19が高杯形土器である。これらの中では、20の複合口縁が久ヶ原式と判断される以外宮ノ台式が主体となる。44・45の甕形土器についても、器形的特徴、ヘラ先による段部への押捺など、宮ノ台式段階にともなうと推定される。壺形土器の文様は、2・27～31等結節文が目立つ。23・25は、単節斜縄文無区画の横帯縄文2帯以上を構成する。24は擬縄文である。47は軽石である。全体に研磨され形が整えられている。研磨具として使用されたものであろうか。

本竪穴の所属時期は、覆土資料から判断するならば、宮ノ台式終末段階、根田代1期と推定される。
12号竪穴（第50図、図版9）

12号竪穴（住居）は、A地点D3・E3区に所在する。壁面は、北・東辺部のみ残存するが、掘り込みは比較的深く、壁高は最大で約45cmを測る。地形の傾斜により南西側へいくほど浅くなる。南西側は、近現代の墓坑などによって失われている。11号竪穴と隣接し、おそらく重複していたと推定される。壁溝は検出されていない。竪穴形態は橢円形を呈する。規模は、主軸4.04m×副軸推定3.40mを測る。掘形面積は推定で11.37m²である。主軸方位は、おおむねN-68°-Wとみられる。炉は西寄りにあったとみられるが、後世の墓坑により失われている。床面はソフトローム上に形成され、硬く平滑である。

出土土器は、いずれも小破片であり、層序等は明らかではない。3は鉢形土器であり、口縁端部にLR単節縄文、口縁部に横断面三角形で左下がりに斜行する貼付文をもつ。出土土器はいずれも宮ノ台式であり、本竪穴の所属時期は、一応根田代1期に比定しておく。ただし、環濠にも近接しており、出土土器も本竪穴の所属時期を反映するものであるか、確証はない。

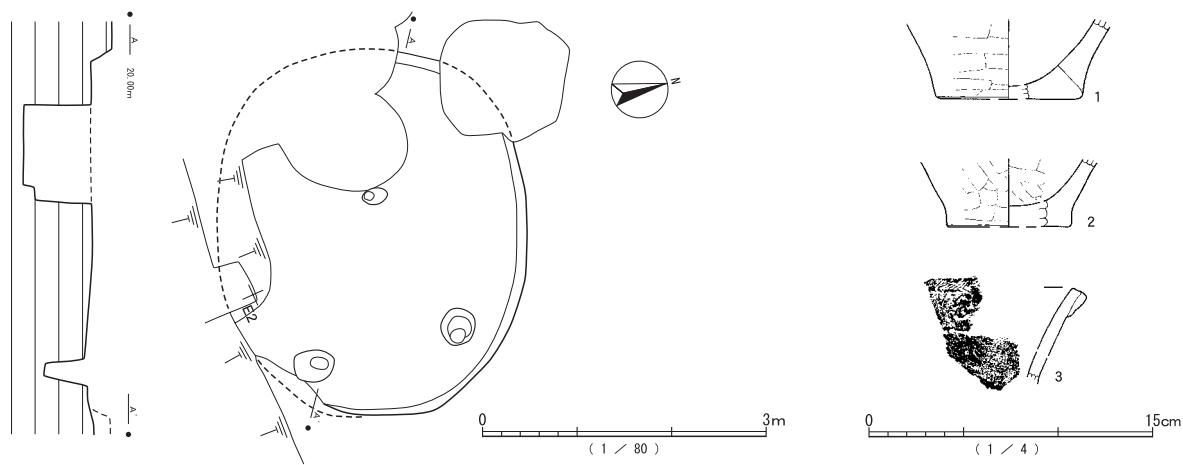
13号竪穴（第50・51図、図版9・78・86）

13号竪穴（住居）は、A地点F2・F3・G2・G3区に所在する。壁面は、北半部のみ残存するが、掘り込みは深く、壁高は最大で約60cmを測る。南側は斜面地形のため失われている。壁面残存部では直下に壁溝を検出している。深さは10cm以上ある。東側で14号竪穴と一部重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が20cmほど低い。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈する。主柱穴は4箇所検出された。竪穴規模は、推定で主軸5.47m×副軸4.74m、主柱穴の柱間は主軸2.68m×副軸2.32mを測り、掘形面積は推定で22.10m²である。主軸方位は、N-86.5°-Wである。炉は主軸線上西寄りに1箇所ある。床面はソフトローム上に形成され比較的硬い。西辺部で約10cmの厚さで焼土の堆積が認められた。火災による可能性もあるが、明確ではない。

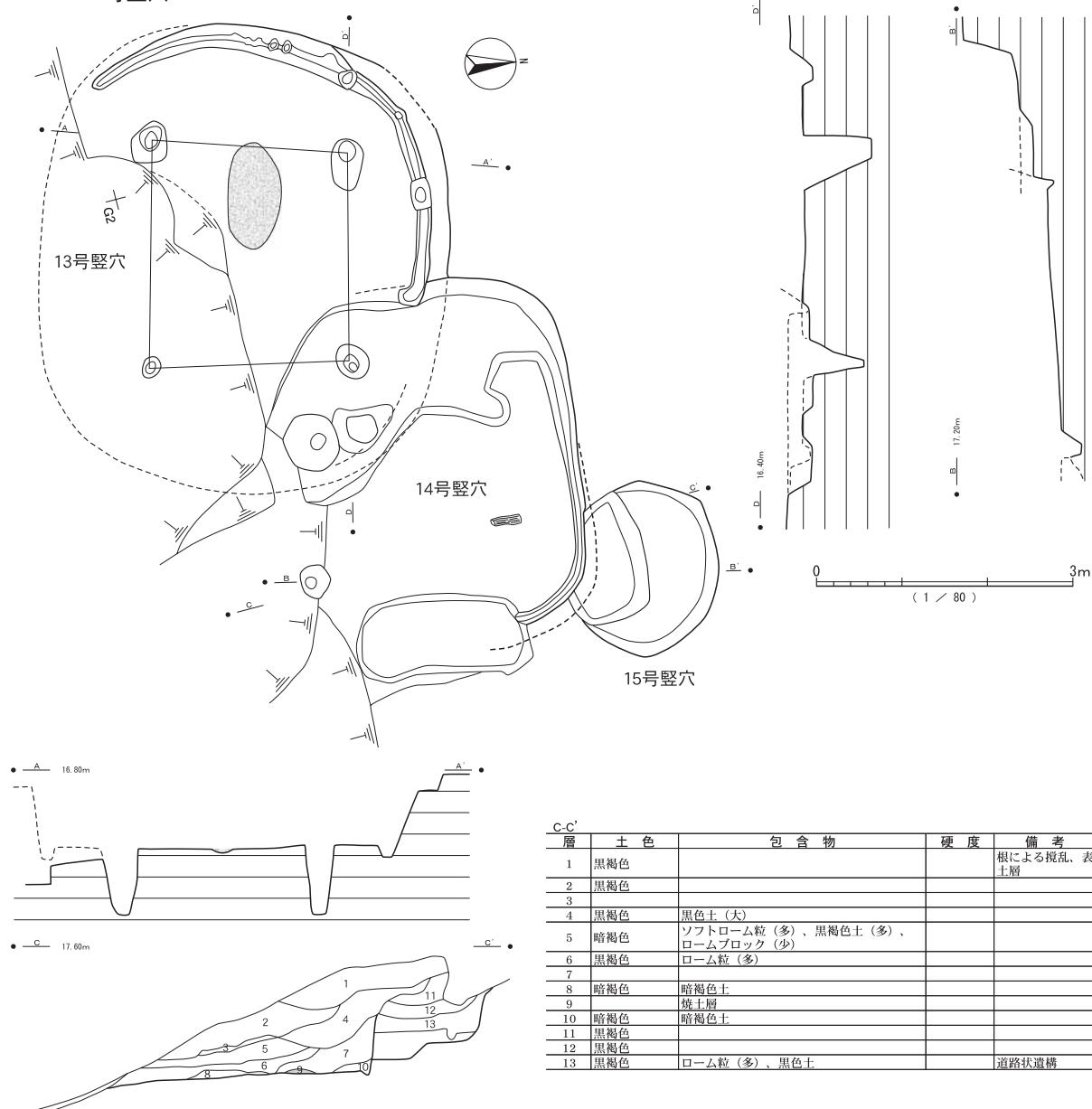
出土土器は、いずれも小破片であり、層序等は明らかではない。1～3・5が甕形土器、7・8が壺形土器である。宮ノ台式が主体となるが、5は口頸部が多段となる輪積み甕である。

遺構と遺物 竪穴

12号竪穴



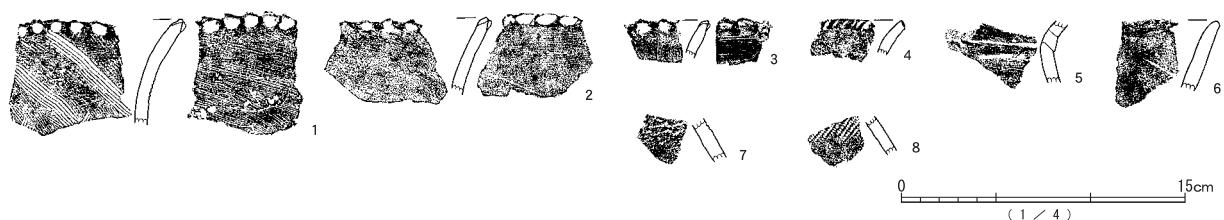
13・14・15号竪穴



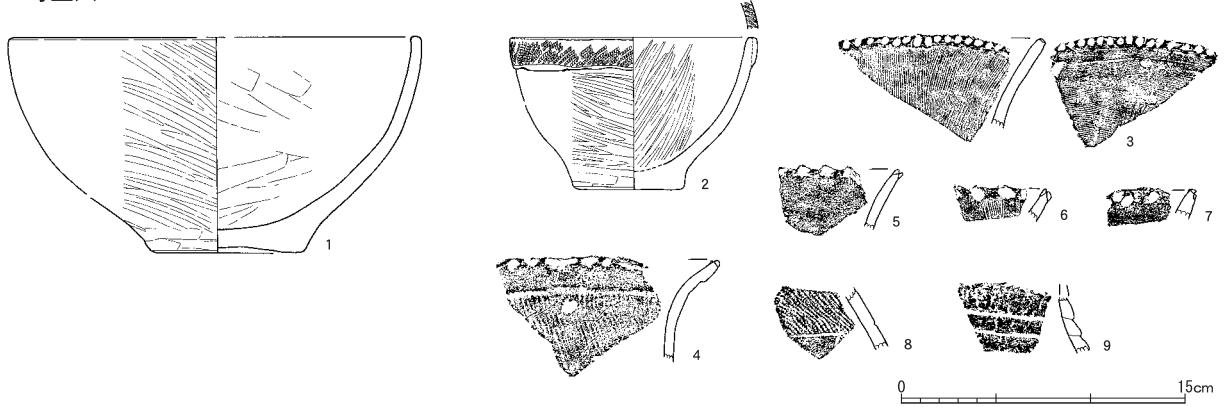
第50図 12号竪穴 遺構遺物、13号竪穴(1) 遺構、14号竪穴(1) 遺構、15号竪穴(1) 遺構

遺構と遺物 竪穴

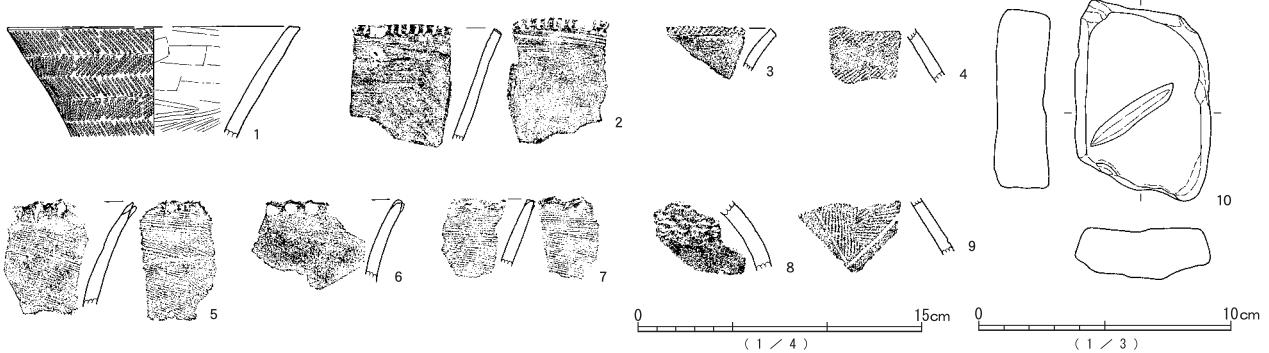
13号竪穴



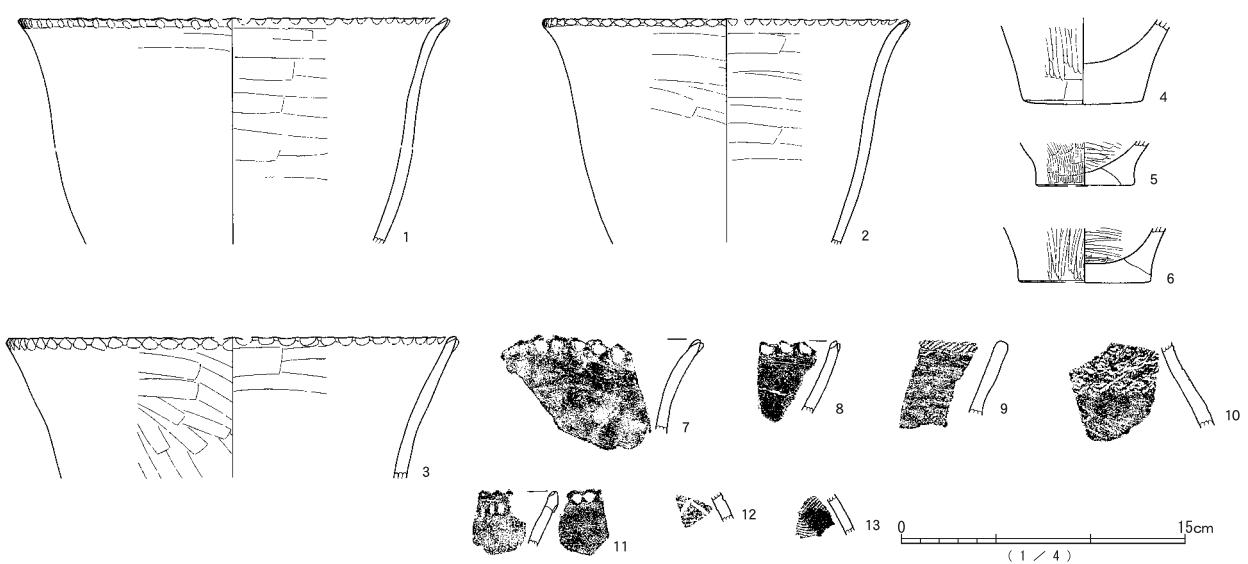
14号竪穴



13・14号竪穴



15号竪穴



第51図 13号竪穴(2) 遺物、14号竪穴(2) 遺物、15号竪穴(2) 遺物

なお、第51図で、13・14号竪穴とした出土遺物は、G3区グリッドから出土したものである。これらも、宮ノ台式から久ヶ原式が混在する。10は、砂岩製の砥石である。磨滅が進み、線条痕等は確認できない。

所属時期を確定する根拠は乏しい。出土土器は、おおむね根田代1～2期に比定することができる。

14号竪穴（第50・51図、図版9・45・78・86）

14号竪穴（住居）は、A地点G3・H3区に所在する。壁面は、北半部のみ遺存するが、掘り込みは比較的深く、壁高は最大で約65cmある。南側は斜面地形のため、南西側は13号竪穴との重複により失われている。また東辺部は、長軸約2mの土坑状の掘り込みが重複する。西辺部の床面は、掘りすぎによるものであろうか。壁遺存部では直下で壁溝が検出された。深さは7cmほどある。西側で13号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が20cmほど高い。また、北東隅部で15号竪穴と重複する。竪穴形態は隅丸長方形を呈する。主柱穴は明らかでないが、数箇所の小Pitがある。竪穴規模は主軸4.36m×副軸残存部3.00mを測る。主軸方位は推定N-87°-Wである。炉は検出されていない。床面はソフトローム上に形成され、比較的平滑であった。北東隅付近で層厚約10cmの焼土の堆積が認められ、炭化材も検出されている。火災による可能性が高い。

出土土器は、1・2が椀形土器、3～7・9が甕形土器、8が壺形土器である。出土状況は明らかではないが、1・2の椀形土器は、ともに体部約1/2を遺存し、定型的な久ヶ原式に先行する特徴が認められる。なお、1の口縁部は、胸部の脱落（擬口縁）による可能性がある。

本竪穴の所属時期は、根田代1期に比定することができる。13号竪穴との新旧関係は、出土遺物においても明確ではない。

15号竪穴（第50・51図、図版9・45）

15号竪穴は、A地点H3・H4区に所在する。平面橢円形を呈する小竪穴状の遺構である。壁高は最大で45cmほどあり、南側はさらに1段深くなる。底面段部の比高は約15cmを測る。南側で14号竪穴と重複するが、底面のレベルは本竪穴の方が30cmほど高く、遺構検出状況によれば14号竪穴が本遺構を掘り込んでいることから、14号竪穴の方が新しいと判断される。長軸2.2m×短軸推定1.9m、掘形面積は推定2.85m²を測る。底面は段状となるが平坦な面をもつ。ただし、柱穴、炉は検出されておらず、住居としての機能を欠く。

出土土器は、1～3・7・8・11が甕形土器、9・10・12・13が壺形土器であり、いずれも宮ノ台式に比定される。出土状況の詳細は明らかではない。1・2は、口唇部押捺の形状、復元径が若干異なるものの同一個体の可能性がある。

本竪穴の所属時期は、宮ノ台式終末段階、根田代1期と推定される。

16号竪穴（第52図、図版10・46・86）

16号竪穴（住居）は、A地点I13・I14・J13・J14区に所在する。北側はすでに破壊され、南側一部のみの検出であった。掘り込みは浅く、壁高は最大で10cmほどある。壁溝は検出されていない。竪穴形態は不明。柱穴、炉も検出されていない。残存部は竪穴全体の1/4程度とみられる。竪穴中央部付近から1が出土している。出土層序は不明であるが、覆土の層厚からみて床面付近と推定される。

1は、胸部中位有段の甕形土器である。縦方向の指ナデにより粘土紐積み上げ痕を消去している。

本竪穴の所属時期は、出土土器から久ヶ原2式期、根田代3期と推定される。

17号竪穴（第53図）

17号竪穴(住居)は、A地点I12・I13区に所在する。西側は土採りにより破壊され、東辺部のみ遺存する。掘り込みは概して浅く、壁高は最大で40cmほど、北へ向かって浅くなる。壁面残存部では直下に壁溝を検出できたが、深さは5cm程度である。竪穴形態は橢円形を呈すると推定されるが明らかではない。主柱穴は4箇所あったとみられるが、南東部の1箇所のみ検出できた。竪穴規模は、残存部で主軸方位8.35mを測る。主軸方位は推定でN-18°-Wである。炉は検出されていない。床面はハドローム上に形成されている。

出土遺物は確認できない。

18号竪穴（第52・53図、図版10・86）

18号竪穴(住居)は、A地点J12・J13・K12・K13区に所在する。南東隅部で20号竪穴と若干重複するが、平面的にはほぼ完存する。壁高は最大で約40cmを測り、北へ向かい若干浅くなる。壁溝は全周するが、深さは平均5cmほどである。20号竪穴との新旧関係は、重複が部分的なこともあります。遺構検出状況からは明らかではない。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。竪穴規模は、主軸5.75m×副軸4.96m、主柱穴の柱間は主軸3.12m×副軸2.37mを測り、掘形面積は24.55m²である。主軸方位はN-19°-Wである。炉は中央やや北寄りで1箇所認められた。厚い硬化面があり、全面的に硬く踏みしめられ平滑であった。ただし、竪穴中央部は、長軸約2.7m×短軸約2.0mの範囲で、深さ5cmほど凹んでおり、炭化物が多数検出された。炭化物の堆積は、壁際全体におよぶことから、本竪穴は火災にあったことが推測される。ただし、被災によるものか、あるいは焼却廃棄によるものかどうかは明らかではない。

出土土器はいずれも小破片で、遺存遺物と推定されるものは存在しないが、南東隅床面直上から45・47が出土している。ただし、45と47は、時期が明らかに異なる。

出土土器は、宮ノ台式を主体とする。9～11・13は同一個体と推定される。口縁端部は若干拡張され、口縁端部および内面に回転結節文を施文する。12は受け口状口縁であり、口縁端部にLR単節縄文、立ち上がり部に回転結節文を施文する。結節文は、他に26・27・31～39で地文となる。26は、結節文帯下に櫛描波状文を重ねる。20はLR単節縄文1段無区画、25はLR単節縄文に沈線を重ねる。これらは、宮ノ台式に比定される。

これに対して、15・16の壺形土器複合口縁、47の甕形土器は、久ヶ原式に比定される。21～24の沈線区画の横帯縄文も、この段階のものと推定される。なお、50の椀ないし高杯形土器の施文は擬縄文である。布目圧痕とは考えにくいが、原体は明らかでない。

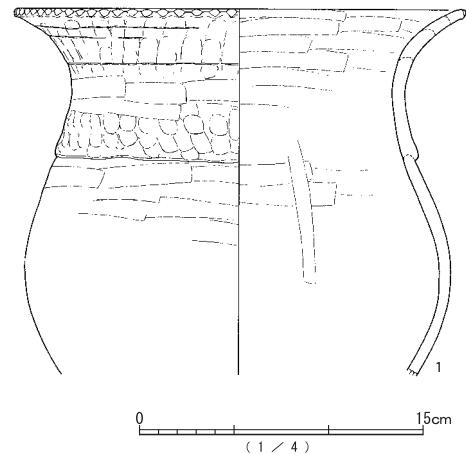
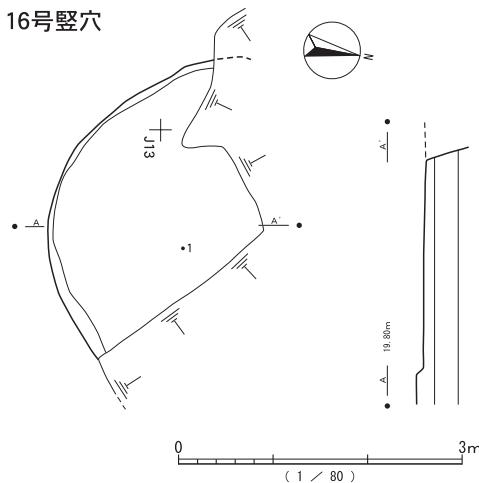
本竪穴の所属時期について、出土土器からみると宮ノ台式終末段階を主体とするが、久ヶ原式も混在する。床面直上の出土土器も時期的に2分されるところから、幅をもって考えざるをえない。ここでは、竪穴平面形態から、主柱穴配置に対する炉位置が宮ノ台式期の特徴をもつことを根拠とし、一応根田代1期に比定しておく。この場合、重複する20号竪穴との関係は、本竪穴が古いくことになる。

19号竪穴（第54・55図、図版10・46・78・86）

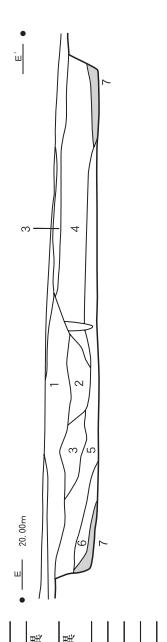
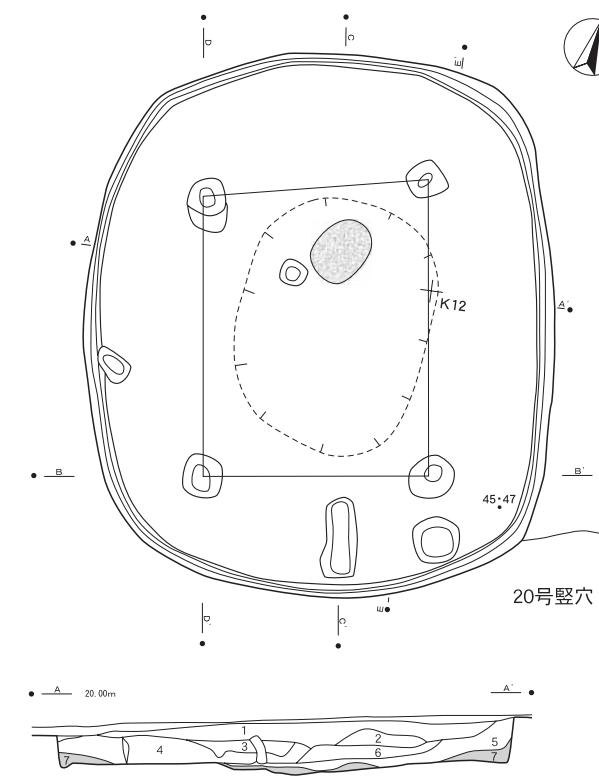
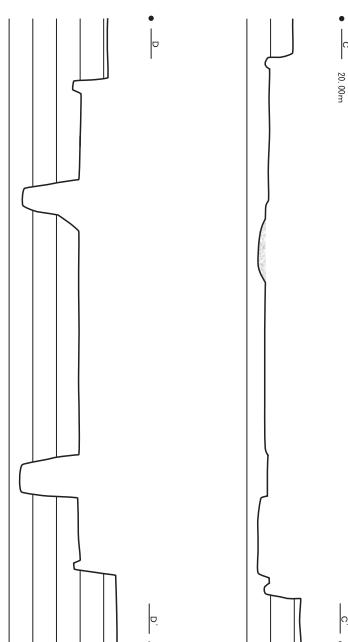
19号竪穴(住居)は、A地点I10・I11・I12・J10・J11区に所在する。竪穴中央部は、東西方向に1号道路が走行し、これにより全体の約1/2が破壊されている。壁面は北辺部、南辺部の一部のみ遺存する。壁高は最大でも40cm、おおむね20cm程度と浅い。壁溝は検出されていない。竪穴形態は橢円形を

遺構と遺物 竪穴

16号竪穴

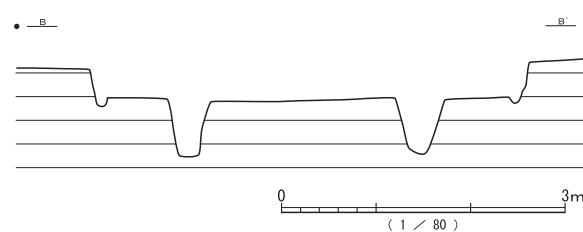


18号竪穴



A-A'

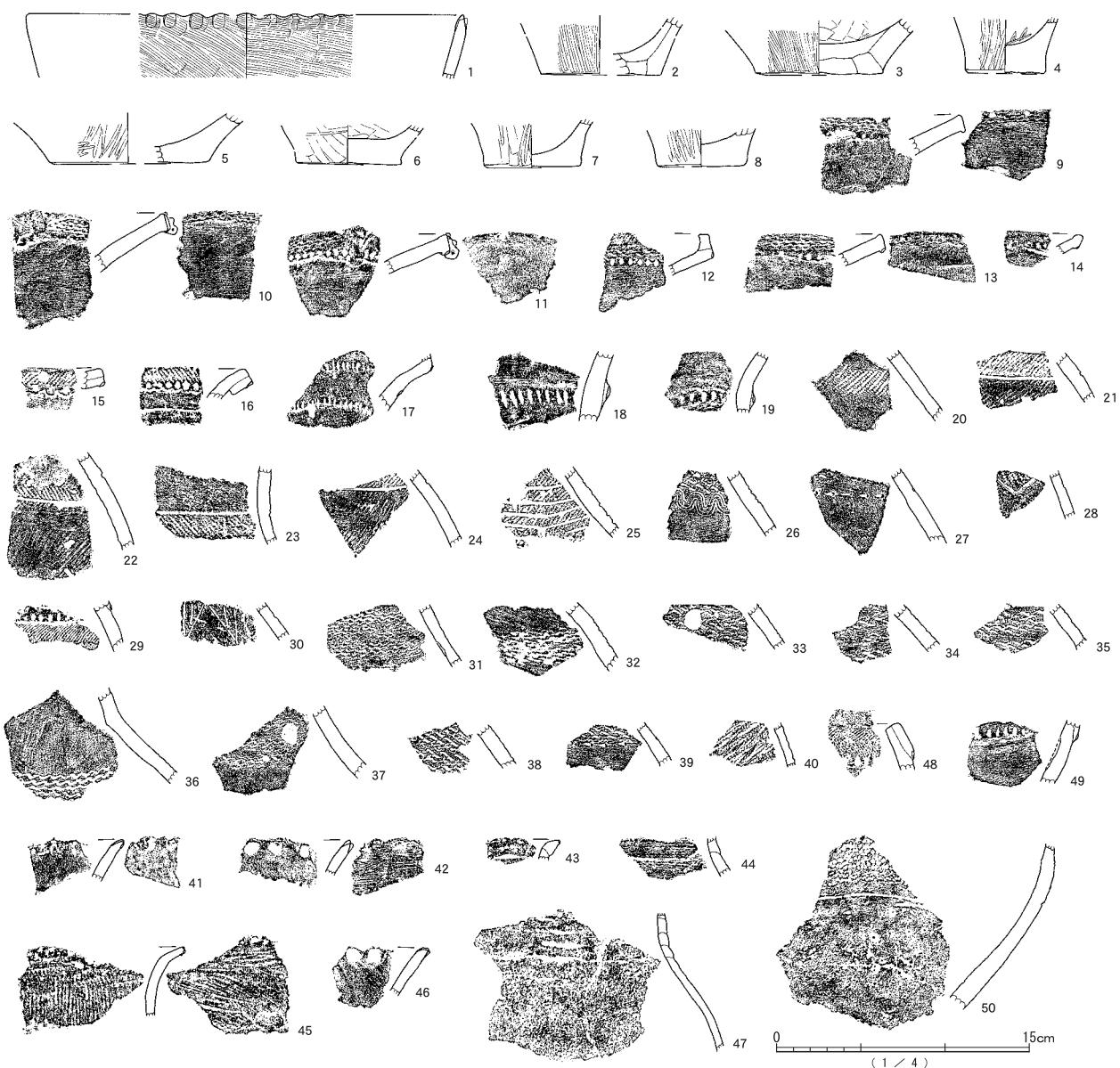
層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	暗褐色	ハードローム粒	硬	
2	やや暗い暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒、焼土化粘土	硬	
3	褐色	ハードローム粒(多)、暗褐色土、焼土粒		
4	暗褐色	ハードローム粒(1層より多)		
5	褐色	ソフトローム粒(主体)		
6	明褐色	ソフトローム粒・ハードローム粒(3:1比)		
7	暗褐色	炭(多)		
8		炭化物粒		



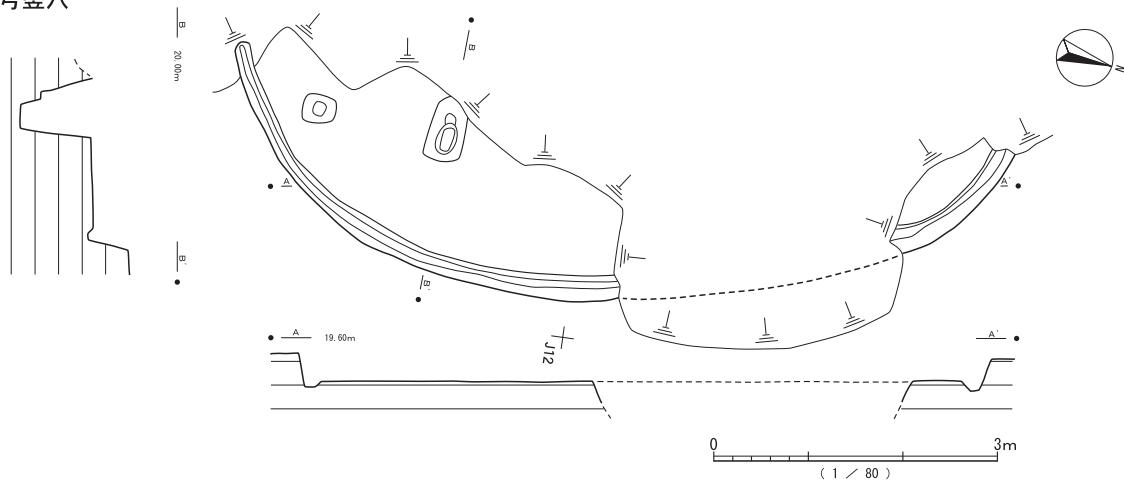
層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	黒色	ハードローム粒、焼土粒(少)		他層と大きくなれる
2	黒色	ソフトローム塊		他層と大きくなれる
3	黒褐色	黒色、脂状物(油)		
4	黒褐色	脂状物(2層より多)		
5	黒褐色	ハードローム粒(少)	硬	
6	黒褐色	ハードローム粒(少)、焼土粒	硬	
7	黒色	ハードローム粒、焼土粒	硬	

第52図 16号竪穴 遺構遺物、18号竪穴(1) 遺構

18号竪穴



17号竪穴



第53図 18号竪穴(2) 遺物、17号竪穴 遺構

呈すとみられ、主柱穴は4箇所、他に南側壁際を中心に小Pitがある。規模は推定で主軸8.00m×副軸6.18m、主柱穴の柱間は主軸3.40m×副軸3.00mを測り、掘形面積は推定で42.14m²である。主軸方位はN-36°-Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。また、南東隅付近に長軸85cm、短軸70cm、深さ30cmほどの隅丸方形Pitがあり、覆土上面から1の鉢形土器が出土している(写真図版10)。貯蔵穴とみられる。

出土土器は、1が鉢形土器、4・6が甕形土器、5が壺形土器であり、いずれも宮ノ台式に比定される。1は、口縁端部にヘラ先等による刺突をもち、器面はミガキ、赤彩が施される。5は、回転結節文をもつ壺形土器であるが、区画文か地文かは不明。7は、砂岩製の砥石ないし台石であり、側面2面他に研磨痕が認められる。また、表面全体には敲打痕を残す。

本竪穴の所属時期は、根田代1期と推定される。

20号竪穴 (第55・56図、図版10・46・78・87)

20号竪穴(住居)は、A地点K11・K12区に所在する。壁面は北辺部、東辺部の一部のみ遺存する。壁高は最大でも約20cmと浅い。北西部で18号竪穴と一部重複する。南半部は東西方向に走る後世の道路跡(1号道路)によって破壊されている。また、北西部には直径約2.5mのすり鉢状の土坑があり(1号粘土採掘坑)、床面を掘り込んでいる。壁溝は検出されていない。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈しているとみられる。主柱穴は4箇所あり、やや台形の配置となる。竪穴規模は、推定で主軸5.56m×副軸4.24m、主柱穴の柱間は主軸2.50m×副軸2.44mを測り、掘形面積は推定で20.35m²である。主軸方位は、N-17°-Wである。炉は、1号粘土採掘坑により破壊されたとみられる。床面はローム上に形成され、比較的平滑である。なお、北西隅部でわずかに18号竪穴と重複するが、遺構検出状況から新旧関係は判断することができない。床面レベルは、18号竪穴の方が25cmほど低い。

出土遺物は、7・22が柱穴内、1・52が床面上5cm、54~56が床面上10cm、5が床面上20cmの覆土から出土している。土器は、1・2・12・33・38~54が甕形土器、3・7・18~32・34~37が壺形土器、4が広口壺形土器、5が椀形土器である。5の椀形土器口唇部は、焼成後の再調整による。ただし、内面が赤彩されていることから、本来椀ないし無頸壺形土器と考えられる。

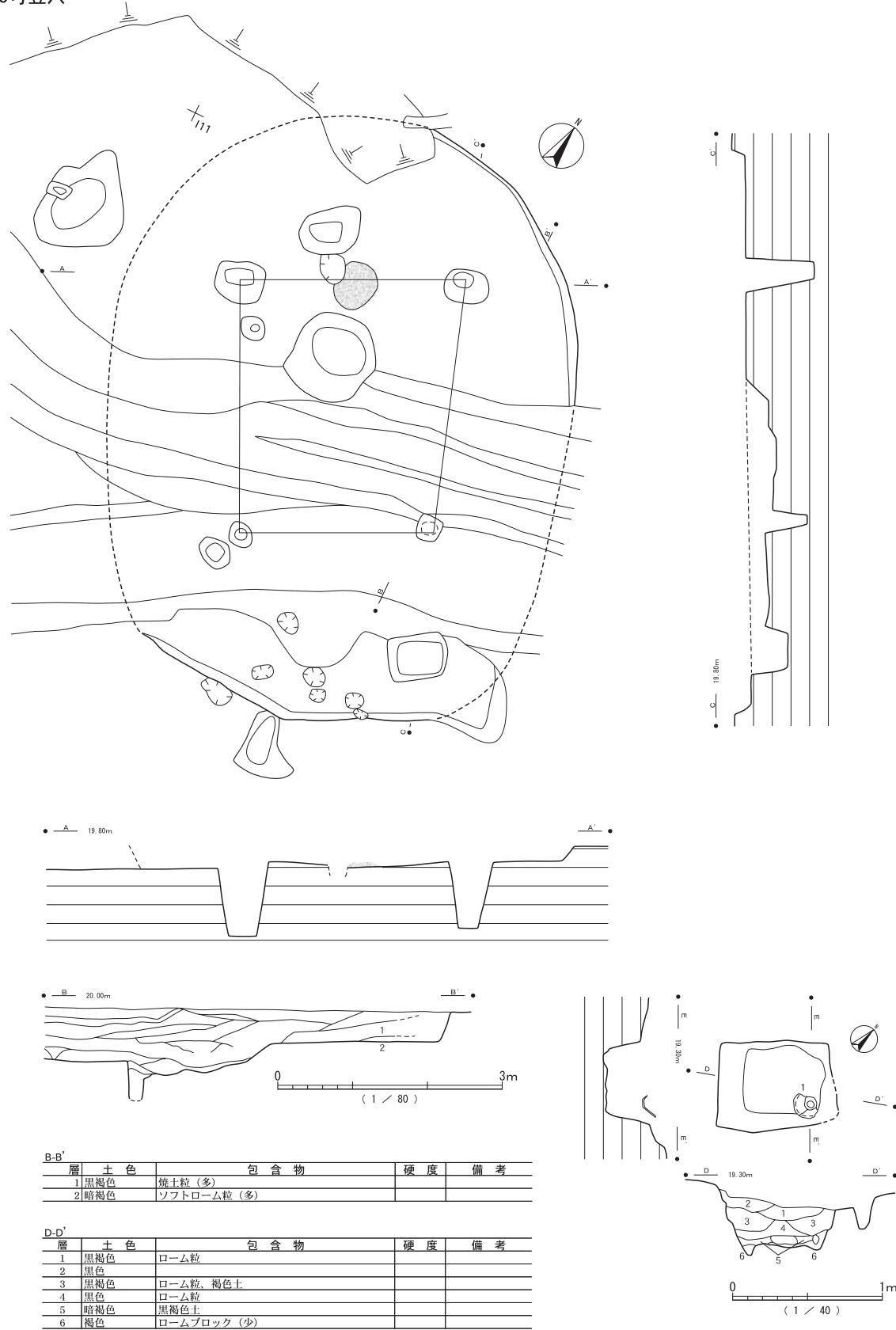
出土土器は、全体に宮ノ台式から久ヶ原式の過渡期的内容が認められる。甕形土器では、1・2・33・38・41・48など、頸部位置に段部をもつものが目立つ。このうち、33・38の口唇部は表裏押捺であるが、2は端部への交互押捺となる。1は内面側端部にのみ棒状工具等による押捺が施される。壺形土器では、21・22・24~26が充填縄文による山形縄文帯である。うち22・24・25は、同一個体の可能性がある。31・32は、回転結節文による山形文である。28は、櫛刺突による羽状文、区画列をもつ菊川式系であり、胎土等から搬入品の可能性がある。55・56は、砥石ないし台石であり、ともに表裏に研磨面をもつ。55は蛇紋岩製、56は砂岩製である。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原1式期、根田代2期と推定される。18号竪穴との新旧関係は、本竪穴が古いと推定される。

21号竪穴 (第57図、図版10・87)

21号竪穴(住居)は、A地点L11・L12区に所在する。壁面は北西隅部分のみ遺存する。この部分での壁高も5cm程度と浅い。南半部は東西方向に走る道路跡(1号道路)によって破壊され、東側も後世の溝によって失われている。また、北側についても、粘土採掘坑(2号)と推定されている不整形のす

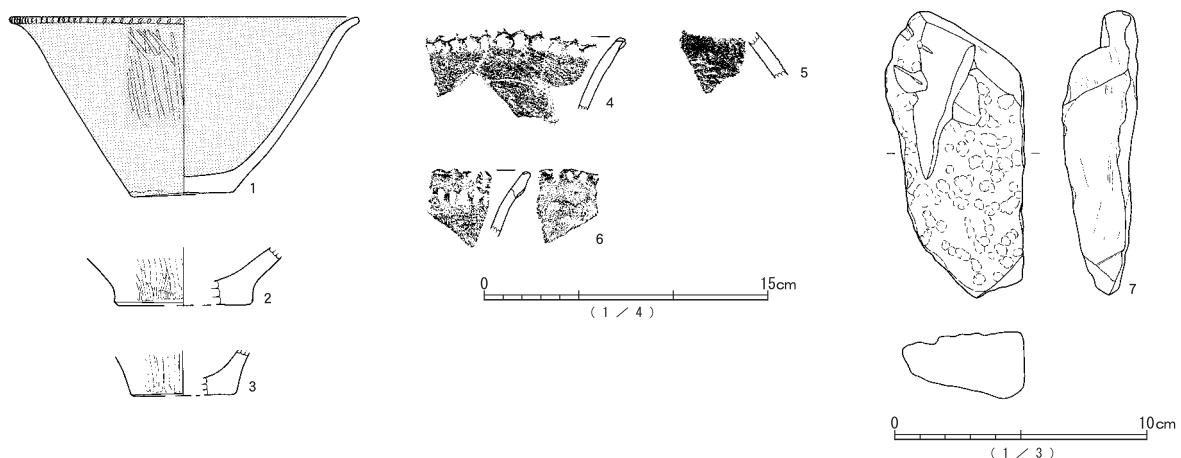
19号竪穴



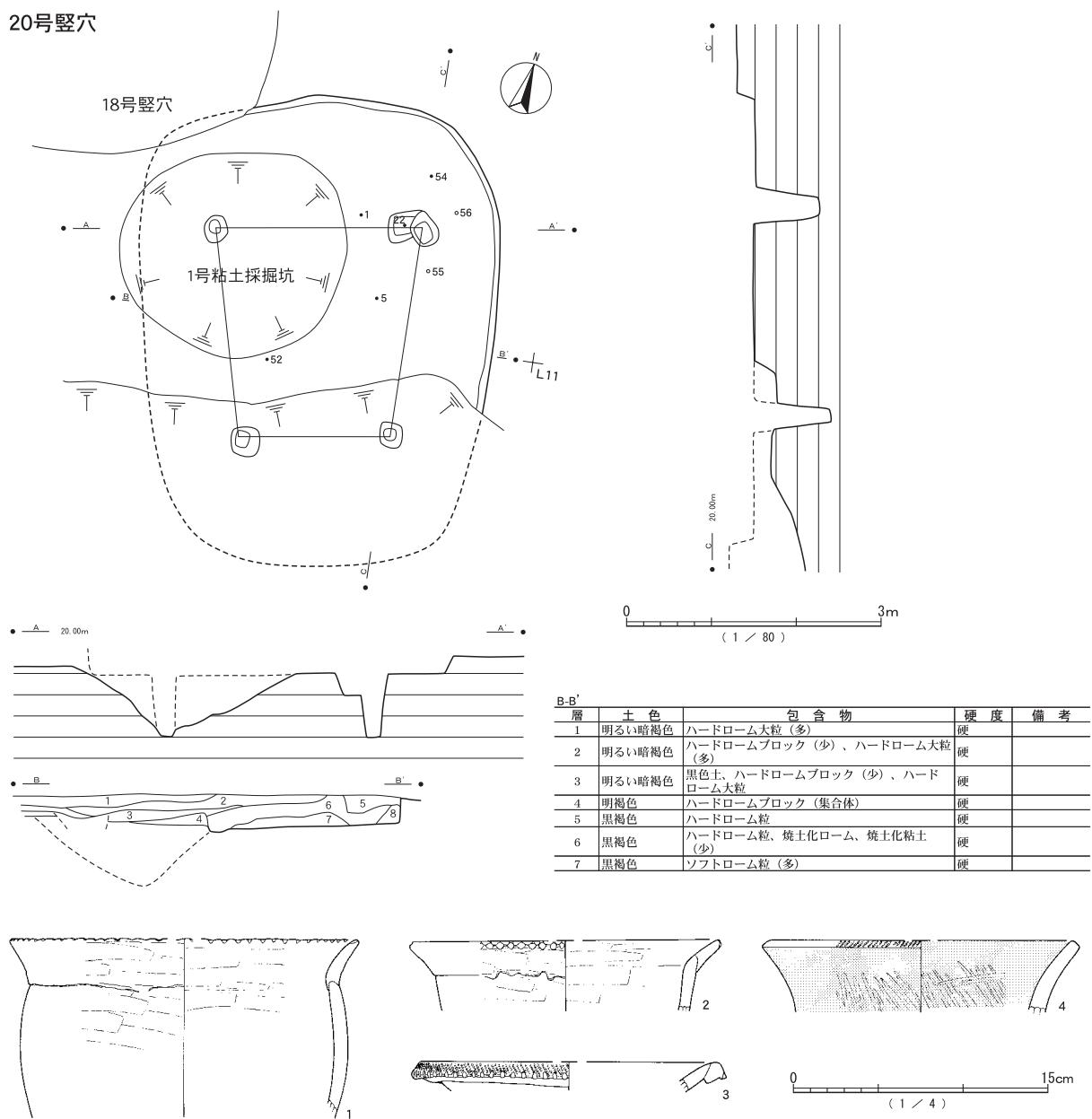
第54図 19号竪穴(1) 遺構

遺構と遺物 竪穴

19号竪穴



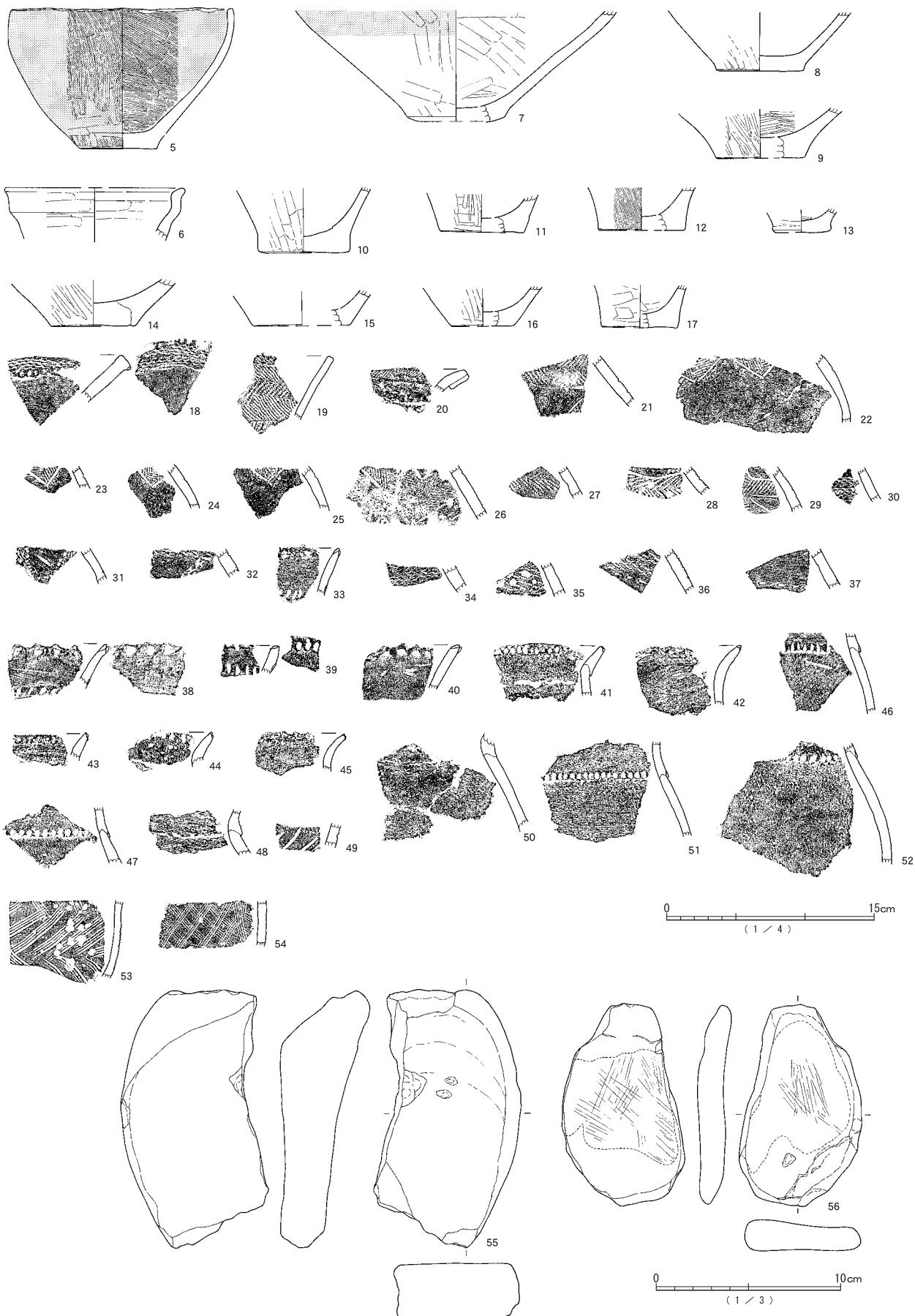
20号竪穴



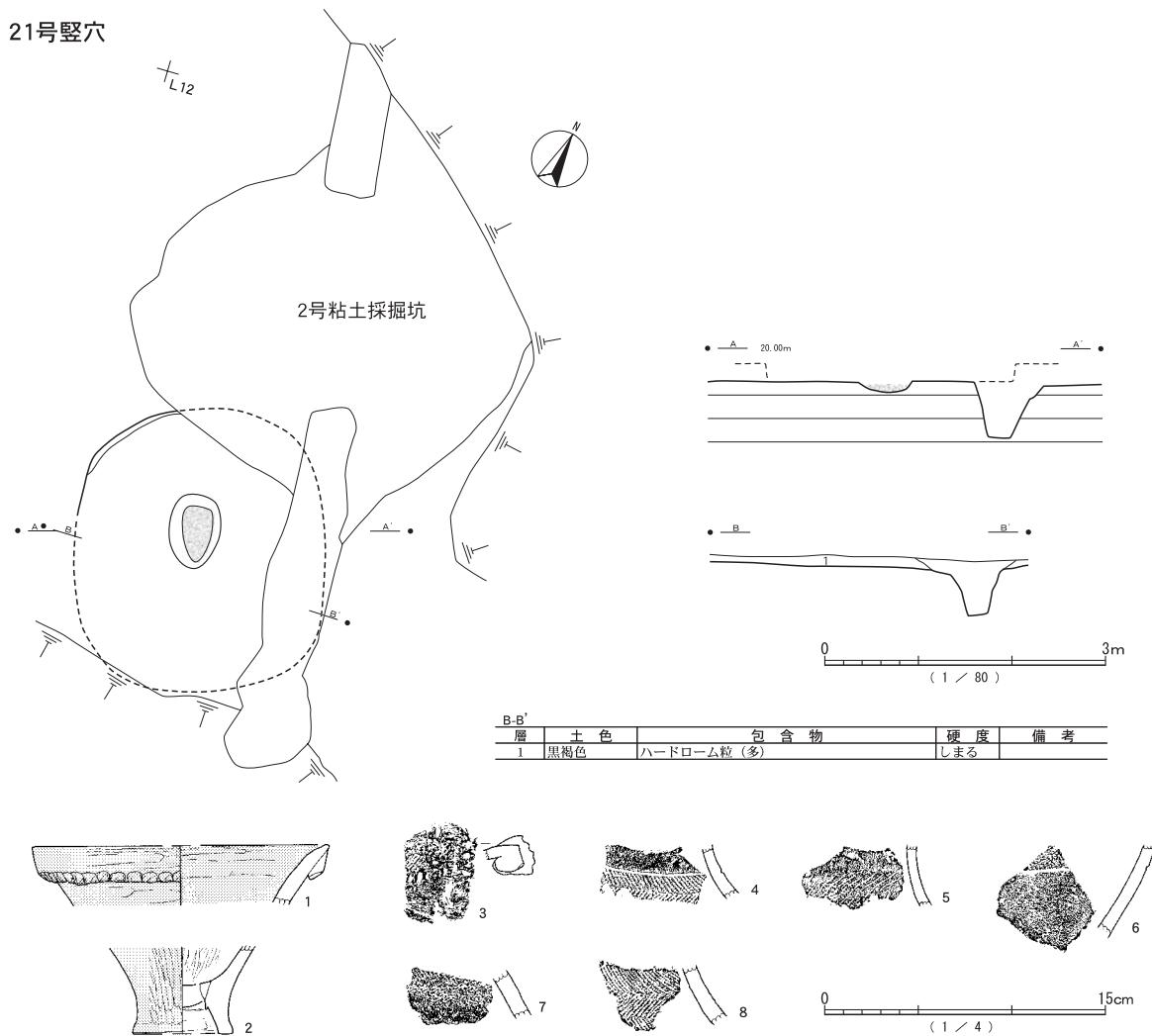
第55図 19号竪穴(2) 遺物、20号竪穴(1) 遺構遺物

遺構と遺物 竪穴

20号竪穴



第56図 20号竪穴(2) 遺物



第57図 21号竪穴 遺構遺物

り鉢状の土坑と重複する。竪穴平面形態は、円形もしくは橢円形と推定される。主柱穴、壁溝は検出されていない。規模は主軸長約3m程度と推定される。主軸方位は、推定N-25.5°-Wである。

出土土器は、1・3~5・7・8が壺形土器、2が台付の鉢形土器、6が梶ないし高杯形土器である。これらはすべてグリッドからの出土であり、本遺構に帰属する確証はないが、時期比定の根拠とする。1の複合口縁複合部は厚みがなく、複合面が内斜すること、横帯縄文区画は沈線区画、別原体結節文が混在することから、一応山田橋1式、根田代4期に比定しておく。

22A・B・C号竪穴 (第58~62図、図版10・11・35・46・47・77・79・88)

22A・B・C号竪穴(住居)は、A地点I9・I10・J9・J10区に所在する。3・4号土坑と重複するが、平面的にはほぼ残存する。ただし、確認面からの掘り込みは総じて浅い。本竪穴は、主軸をほぼ同一にするものが最低3軒分あることが壁面や壁溝、主柱穴から想定される。このうち、A・C号竪穴は、主柱穴、壁面、壁溝との位置関係がほぼ明らかであるが、B号については、主柱穴が検出されていない。

遺物の帰属は、22号竪穴範囲内について出土位置詳細図が作成されており、これをもとに分別した。ただし、後述するように、22号竪穴は23・24号竪穴と重複し、かつ炉の検出状況から22号竪穴が最も古い段階の竪穴であることから、22号竪穴範囲内の遺物には、当然23・24号竪穴の遺物が含まれ

ることになる。覆土の層厚も薄く、出土レベルによる判断が難しいものもあり、これらは、第61・62図にまとめた。また、一括での取り上げ遺物は、22A号(調査時40号)と外縁部のB・C号(同40B号)に2分され、B・C号についての区別がない。これについては、一部の土器型式にもとづく判断を加えている。

A号は、同心円状の重複の中で最も内側に位置するもので、竪穴形態は隅丸胴張り長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。壁の高さは、C号床面との比較では最大20cmほどある。規模は主軸5.52m×副軸4.52m、主柱穴の柱間は主軸2.48m×副軸2.16mを測り、掘形面積は約22.59m²である。主軸方位は、N-59°-Wである。炉は、主柱穴との位置関係から、2基重複する内の南側が本竪穴に帰属するものと推定される。壁溝は全周し、深さは最大10cmほどある。

C号は、同心円の最も外側に位置するもので、竪穴形態は隅丸胴張り長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。壁の高さは最大25cmほどである。規模は長軸6.37m、短軸は推定で5.46m、主柱穴の柱間は主軸3.02m×副軸2.96mを測り、掘形面積は約30.59m²である。主軸方位はA号とほぼ同一である。炉は、主柱穴との位置関係から、2基重複する内の北側が本竪穴に帰属する。炉内には埋設土器が認められた。壁溝は北東側で一部検出したが、壁面が最もよく残存していた西側では検出されていない。南東側では、壁面・壁溝はA・C号ともに共有するとみられる。A号とC号の床面の高さは、C号の方が20cmほど高く、A号の覆土上に硬化した床面が認められた。平面的には、A号からC号に拡張されたようにもみえるが、A号覆土が埋め戻しと判断できること、また、A号覆土に遺物が比較的多数認められたことから、少なくとも連続した同心円状の建て替えによるものとは考えにくい。

B号は、このA・C号2軒の間、やや北東側にずれた位置に壁面、壁溝、床面の一部を検出している。竪穴形態は隅丸胴張り長方形を呈するものとみられる。床面の高さはA・C号のほぼ中間に位置する。炉が未検出であることから、最も古いと考えることもできるが、22B号竪穴1の出土状況は、B号床面から同レベルでA号範囲内におよぶ。したがってここでは、22号竪穴の新旧関係をA号 B号 C号の順でとらえておく。ただし、A号覆土上の床硬化面を、B号、C号に区分することはできない。なお、炉の東脇から貝プロックが検出されているが、重複関係および出土レベルから判断するならば、23号竪穴覆土にともなうものと推定される。

A号の出土土器は、1が広口壺形土器、6・8~19が壺形土器、7・20~26が甕形土器、3が鉢形土器、4が浅鉢形土器、5が椀・高杯形土器である。このうち、2~4・9・16・18が床面から、7が炉内からの出土である。1については層序が不確実であり、新旧関係によっては、22B号に帰属する可能性も否定できない。壺形土器等の文様構成は結節文が目立つ。このうち、1・3・13・14の結節はSR、11・12はZLである。27は、はんれい岩製の抉入柱状片刃石斧である。完品であり、全体に丁寧に研磨され自然面を残さない。基部周縁に若干敲打痕が認められる。

第62図83・84の石斧については、出土No.が土器と重複し、出土位置を確定することができない。うち1点については、現場での調査記録から24号竪穴の炉の北側から出土していることがわかるが、最も竪穴が重複する地点であるため判断できない。時期的には、22A号竪穴に帰属する可能性が高いと思われが、一応別にしておく。83はホルンフェルス製の扁平片刃石斧、84は董青石ホルンフェルス製の細形蛤刃石斧である。

B号の出土土器は、1が広口壺形土器、2~4が甕形土器である。1は床面、2も北側周溝上床面レベルから出土しているが、別破片は、24号竪穴炉付近から出土している。1は、口縁端部から口縁部にLR単節縄文、また胴部に3段のLR単節縄文を施文する。口縁部内面が有段となり、段部には棒状工具等による刺突列をもつ。

C号の出土土器は、1・11・12が椀・高杯形土器、2・3・15~21が甕形土器、6・8・10が壺形土器、9が広口壺形土器、7が鉢形土器、13・14が椀形土器である。このうち、3は炉内に埋設されていた。2は明確な出土位置が不明であり、B号に帰属する可能性も否定できないが、3と同段階であるとの判断から本遺構にともなうものとした。2は交互押捺による口縁部をもち、頸部に段をつくる。段部押捺は、3が布目痕、2は押捺が浅く不明瞭である。2は、底部と対向方向の胴部最大径位置に黒斑が認められ、覆焼き焼成と推定される。5は土製の紡錘車である。

22号竪穴の所属時期は、A・B号が根田代1期、C号が根田代2期と推定される。

23A・B号竪穴（第58・59・63・64図、図版10・47・88・89）

23A・B号竪穴（住居）は、A地点J9・J10・K9・K10区に所在する。壁面は、北側の一部と東側から南東隅部が検出されたが、これ以外の部分は22号竪穴と24号竪穴と重複するため明確にできなかつた。壁高は最大でも約10cmと浅い。本竪穴は、主軸をほぼ同一にするものが2軒分あることが壁面や壁溝の存在から明らかである。

A号は、同心円状の重複の中で内側に位置するもので、竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。壁の高さは最大でも3cmほどである。竪穴規模は推定で主軸6.10m×副軸5.12m、主柱穴の柱間は主軸3.13m×副軸2.92mを測り、掘形面積は推定27.66m²である。主軸方位は、N-45°-Wである。炉は北西寄りに1箇所認められた。壁溝は東側で検出され、深さは最大15cmほどある。

B号は、外側に位置するものであり、竪穴形態は橢円形を呈するものとみられる。壁の高さは最大10cmほどである。規模は推定で主軸8.10mを測り、A号よりもひと回り大きい。主軸方位は、ほぼA号と同一である。壁溝は検出されていない。

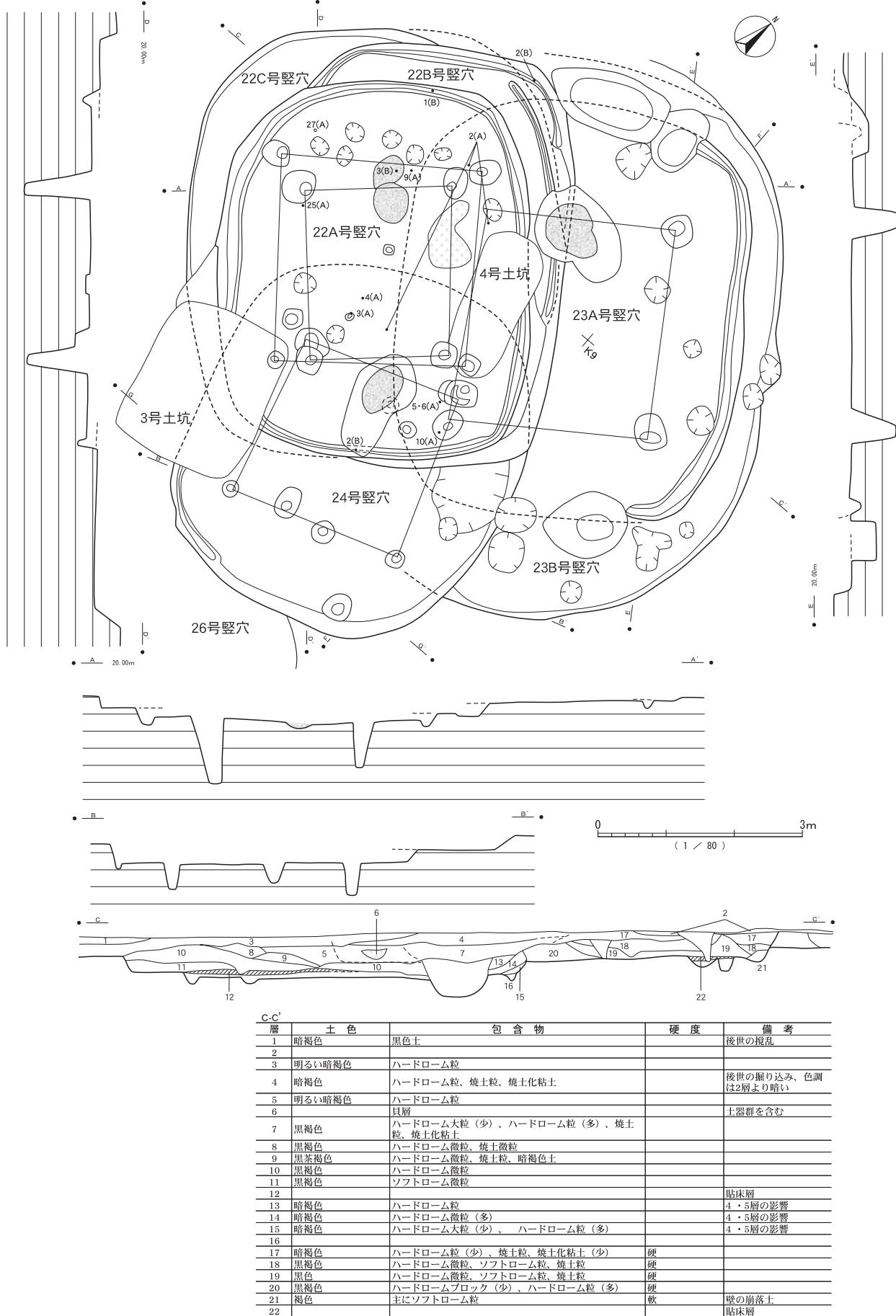
A号とB号の床面レベルはほぼ同一であり、土層断面の観察でも、A号を後から掘り込んだ形跡がないことから、A号からB号に拡張されたものと推定できる。ただ、炉については、A・B号ほぼ同位置での重複を考えることもできるが、B号の主柱穴が検出されていない点は不自然であり、あるいは床硬化面の除去が不充分であった可能性もある。23号竪穴は、重複する22A号竪穴に対して床面レベルが約30cm高く、炉も22号竪穴の覆土上から検出されていることから、22号竪穴より新しいと判断した。

22号竪穴内の貝ブロックについては、重複関係から判断して、本遺構埋没時に投棄されたものと推定される。なお、貝層内より、貝殻内面に赤色顔料の痕跡のあるハマグリが出土している。これについては、別稿に掲載した（第3章第2節）。

出土土器は、1~4・47~67が甕形土器、7・8・11・23~39が壺形土器、5・18・40・43が椀形土器、6が椀ないし高杯形土器、9が高杯形土器、10・42・44・45が鉢形土器である。全体として宮ノ台式から久ヶ原式が混在するが、出土状況に対する記録がない。現場での調査記録によるならば、炉は埋設土器をともなうが、出土土器から特定することはできない。遺存部位からは、2の甕形土器等が

遺構と遺物 竪穴

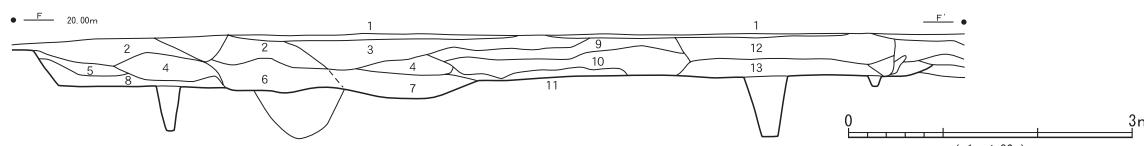
22・23・24号竪穴



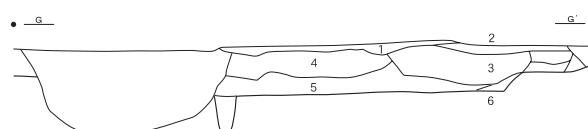
第58図 22号竪穴(1) 遺構、23号竪穴(1) 遺構、24号竪穴(1) 遺構

遺構と遺物 竪穴

22・23・24号竪穴

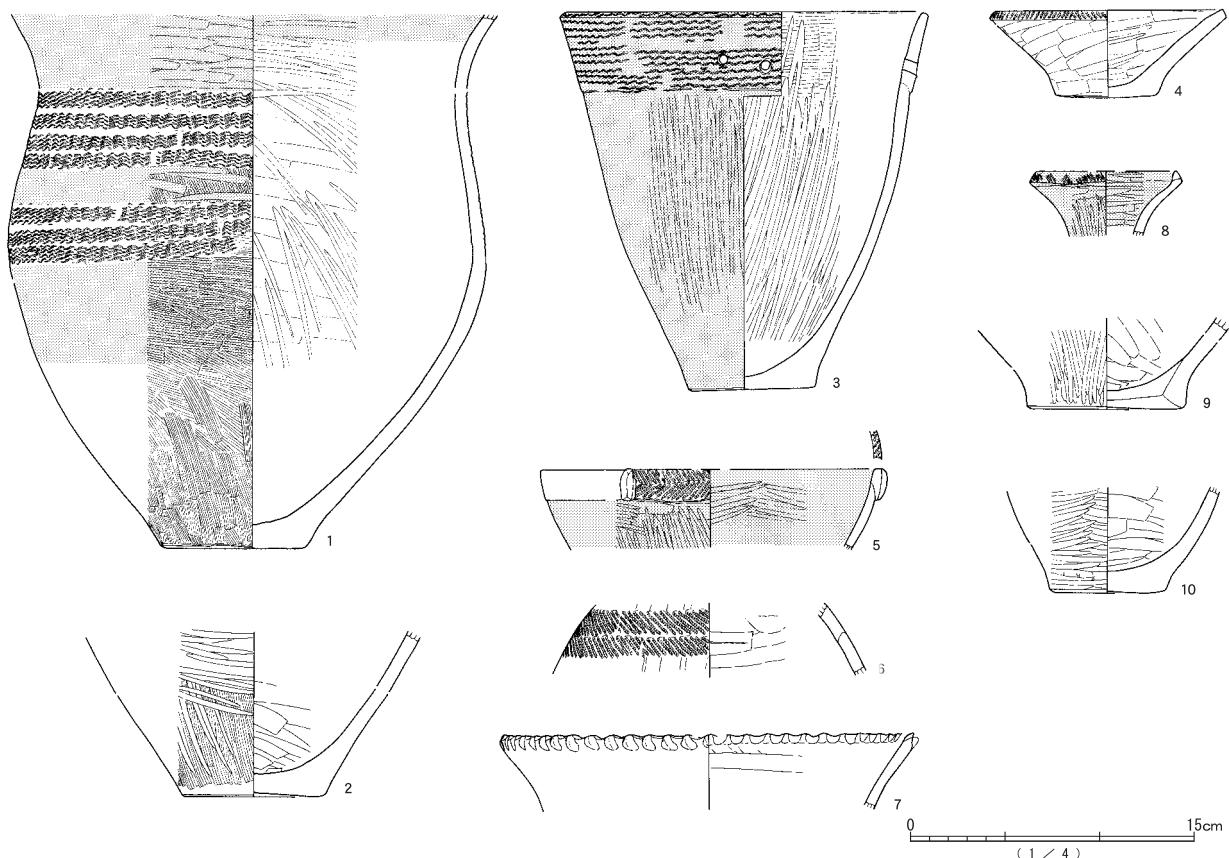


層	土色	包含物	硬度	備考
1				不安定な土層
2	黒褐色	ハードローム大粒(少)、ハードローム粒(多)	硬	
3	黒色	ハードローム粒(少)	硬	
4	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒(多)	硬	
5	黒褐色	ハードローム大粒(少)、焼土粒(極少)、ソフトローム粒(少)、ハードロームブロック	硬	
6	黒褐色	ハードローム大粒(少)、ソフトローム粒(少)、焼土粒(極少)	硬	
7	黒色	ハードローム微粒		
8	暗褐色	ハードローム粒(多)、焼土粒(少)	硬	
9	黒褐色	ハードローム大粒(多)	硬	
10	暗褐色	ハードロームブロック(多)	硬	
11	黒褐色	ハードローム粒(多)	硬	
12	黒褐色	ハードローム大粒(少)、ハードローム粒(多)	硬	
13	黒褐色	ハードローム大粒(少)、ソフトローム粒(少)、焼土粒(極少)	硬	



層	土色	包含物	硬度	備考
1				不安定な土層
2	黒褐色	ハードローム大粒(少)、ハードローム粒(多)	硬	
3	黒褐色	ハードロームブロック下位に集中、ハードローム粒、焼土粒	硬	異質な層
4	暗褐色	ハードローム粒		
5	暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒		
6	暗褐色	ソフトローム粒(多)	硬	

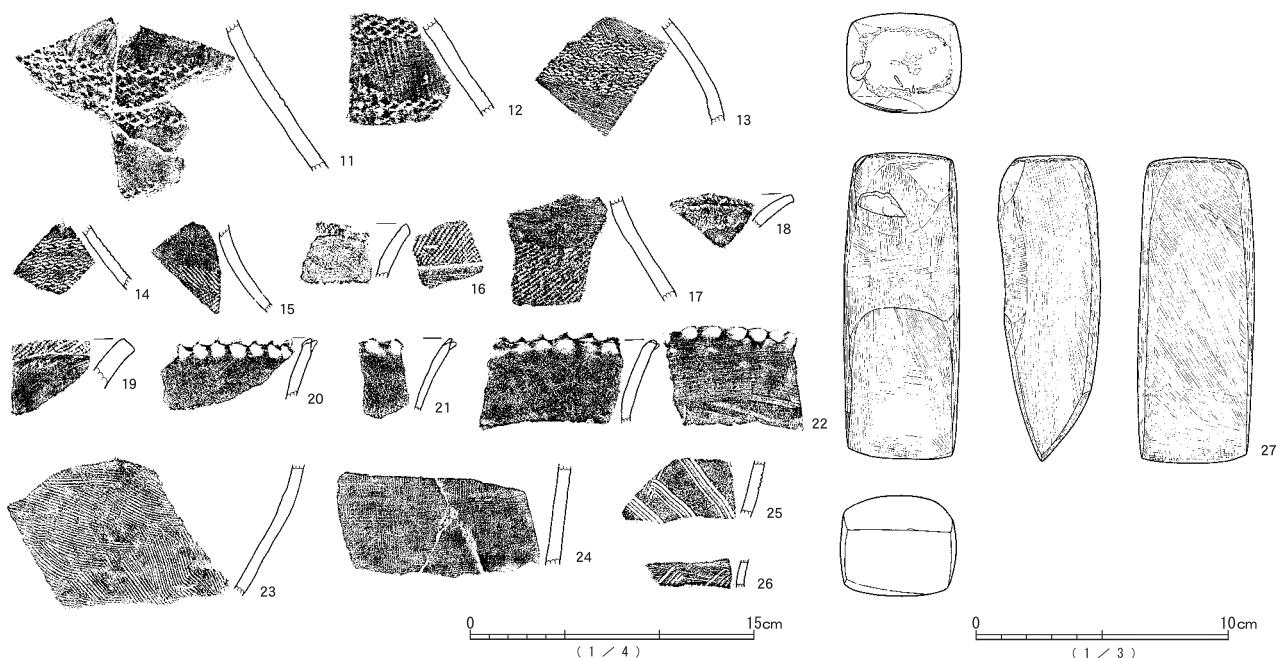
22A号竪穴



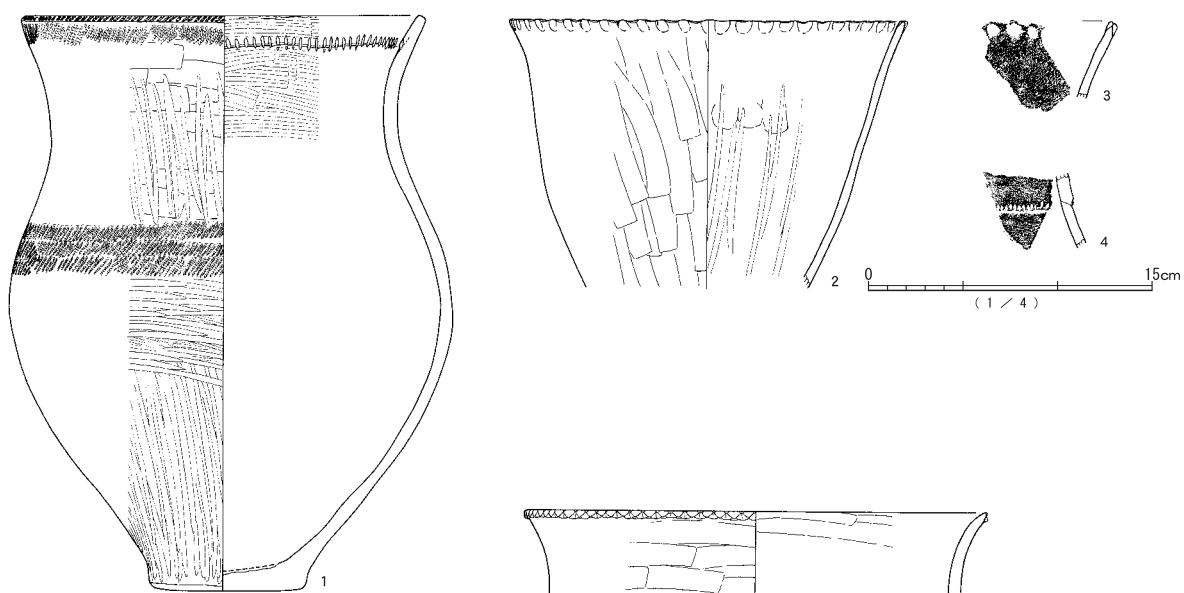
第59図 22号竪穴(2) 遺構遺物、23号竪穴(2) 遺構、24号竪穴(2) 遺構

遺構と遺物 竪穴

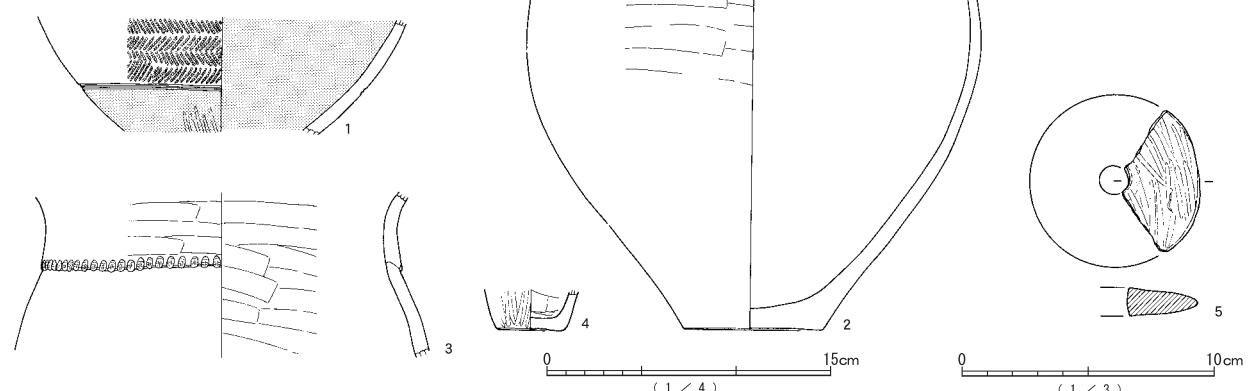
22A号竪穴



22B号竪穴



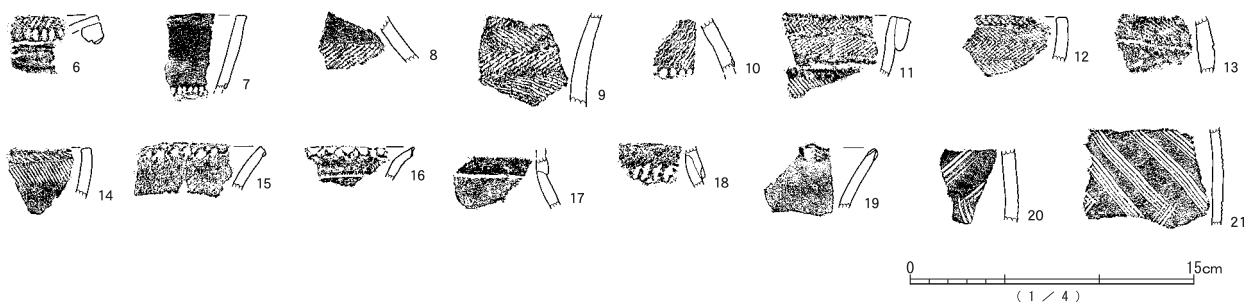
22C号竪穴



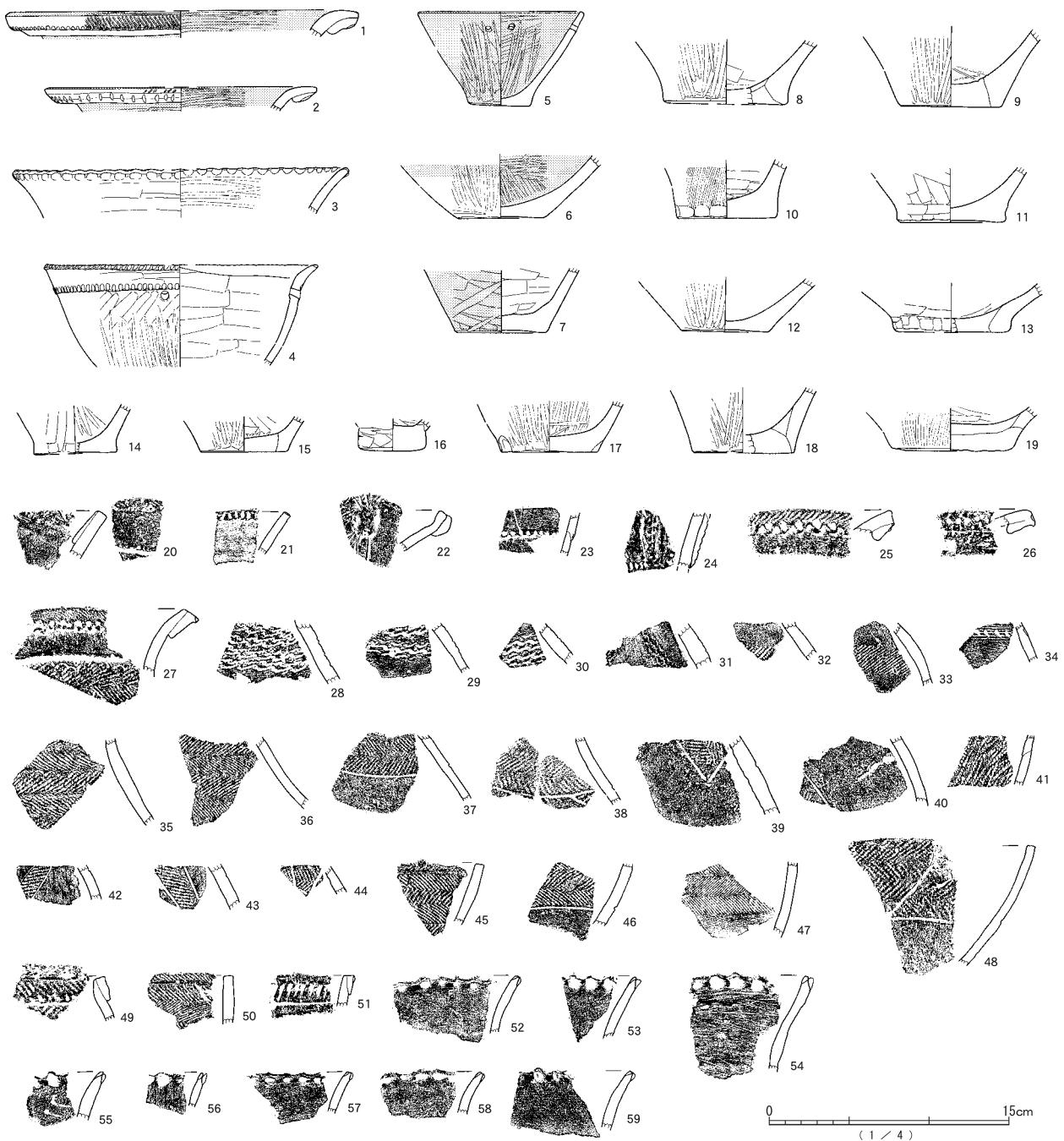
第60図 22号竪穴(3) 遺物

遺構と遺物 竪穴

22C号竪穴

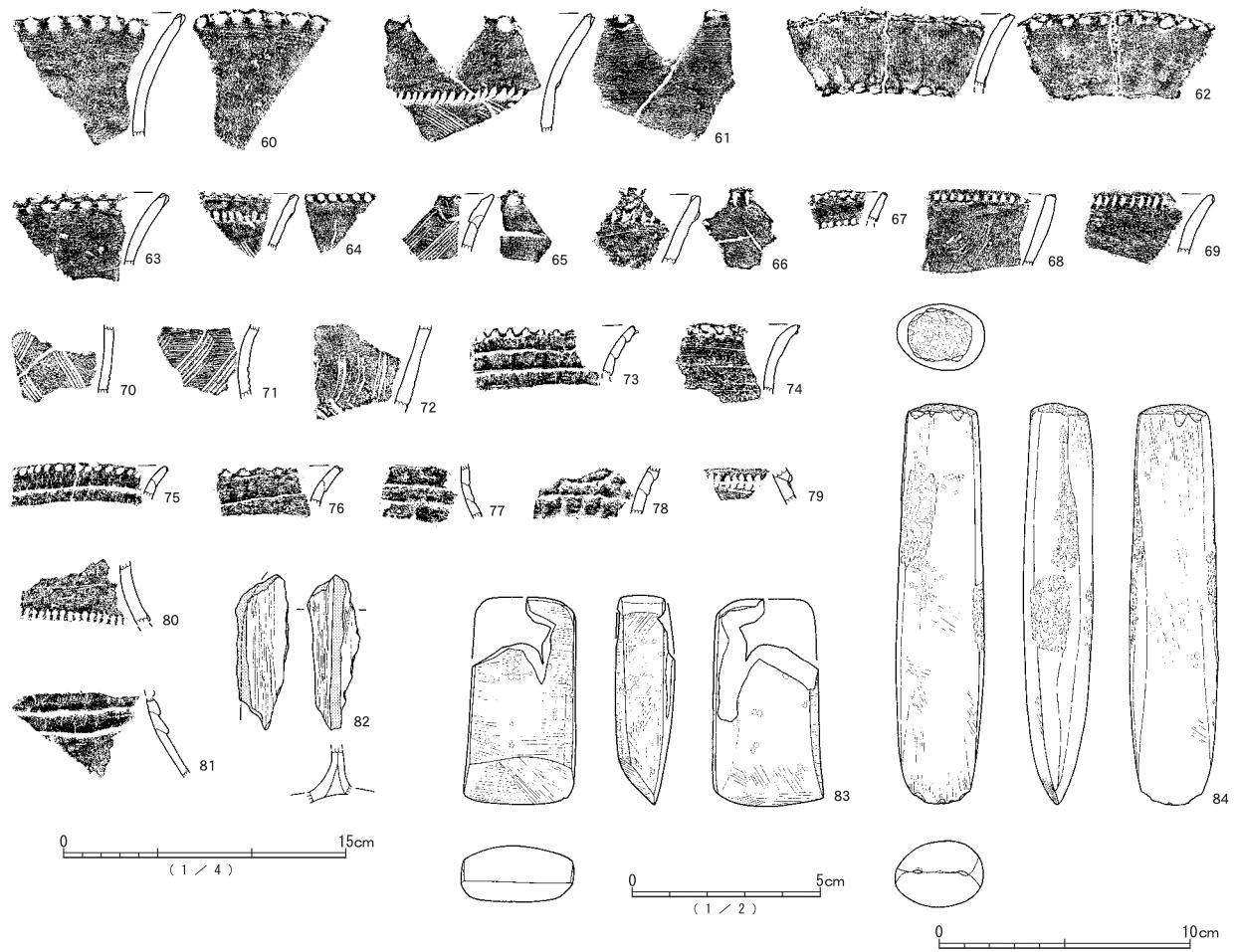


22号竪穴 (23・24号竪穴)



第61図 22号竪穴(4) 遺物

22号竪穴(23・24号竪穴)



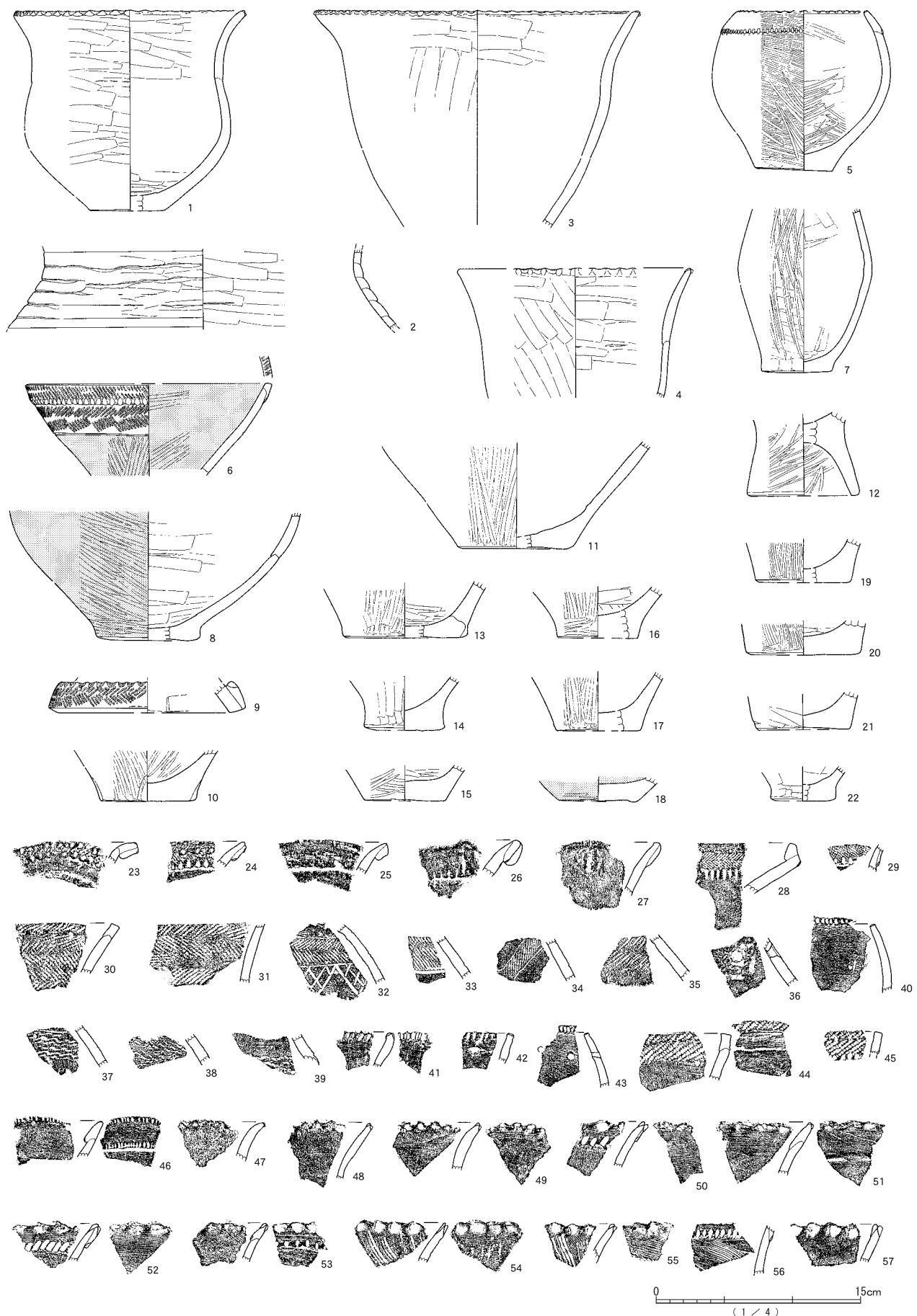
第62図 22号竪穴(5) 遺物

候補となるが、2次的な被熱痕が明確ではない。ただ、22号竪穴との新旧関係から判断するならば、1・2・6・8・9等が本遺構に関連する可能性が高い。3の、口縁端部交互押捺の深鉢形を呈する甕形土器は久ヶ原1式、5の、椀ないし無頸壺形土器は宮ノ台式最終末から久ヶ原1式に比定され、可能性としては22C号竪穴に接点をもつ。ただし、1・2・6・8・9等を、24号竪穴に関連付けることも可能であり、本竪穴の所属時期については、久ヶ原1式～2式古段階、根田代2～3期の間に幅をとって考えておく必要がある。

24号竪穴 (第58・59・64～66図、図版10・47・48・89・90)

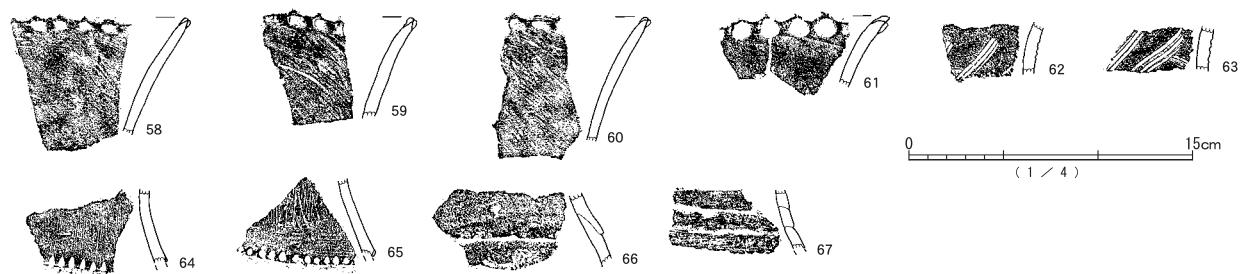
24号竪穴(住居)は、A地点J8・J9・K8・K9区に所在する。壁面は南半部で検出したが、これ以外の部分は22号竪穴、23号竪穴、3号土坑と重複するため明確ではない。また、南側で26号竪穴と重複する。壁高は南辺部で最大約30cmを測る。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈するものとみられ、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。竪穴規模は推定で主軸5.35m×副軸4.78m、主柱穴の柱間は主軸2.44m×副軸2.61mを測り、掘形面積は推定で21.78m²程度である。主軸方位は、N - 30° - Wである。炉は北西寄りに1箇所認められた。壁溝は南東隅で一部を検出した。深さは7cmほどある。24号竪穴は、22号竪穴より床面が15cmほど高く、炉も22号竪穴の上から検出されていることから、22号竪穴より新しい。また、23号竪穴より床面が15cmほど低いが、24号竪穴内に23号竪穴の床硬化面が確認されていないことから、23号竪穴より新しいと判断した。したがって、3軒の竪穴の新旧

23号竪穴

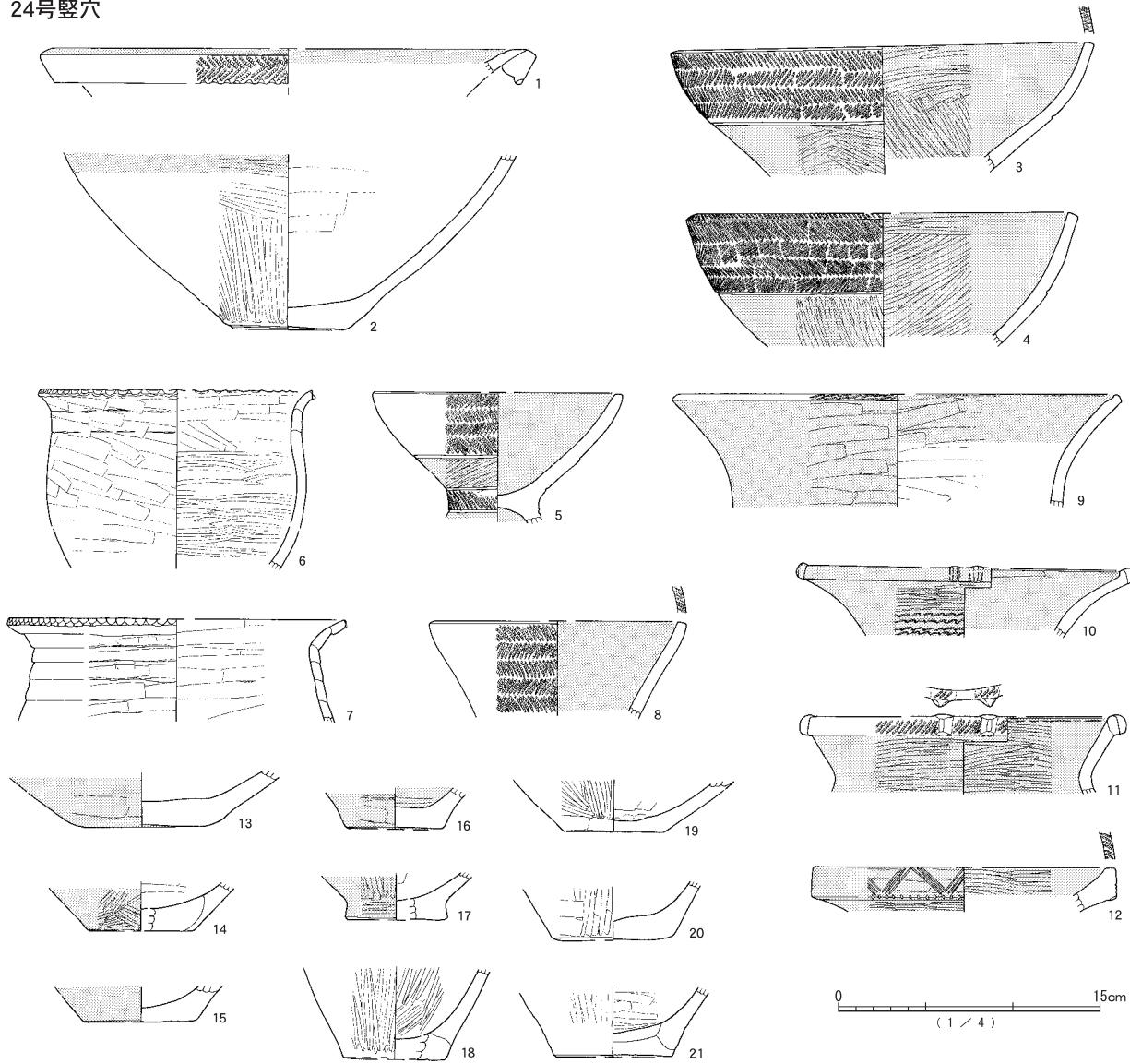


第63図 23号竪穴(3) 遺物

23号竪穴



24号竪穴

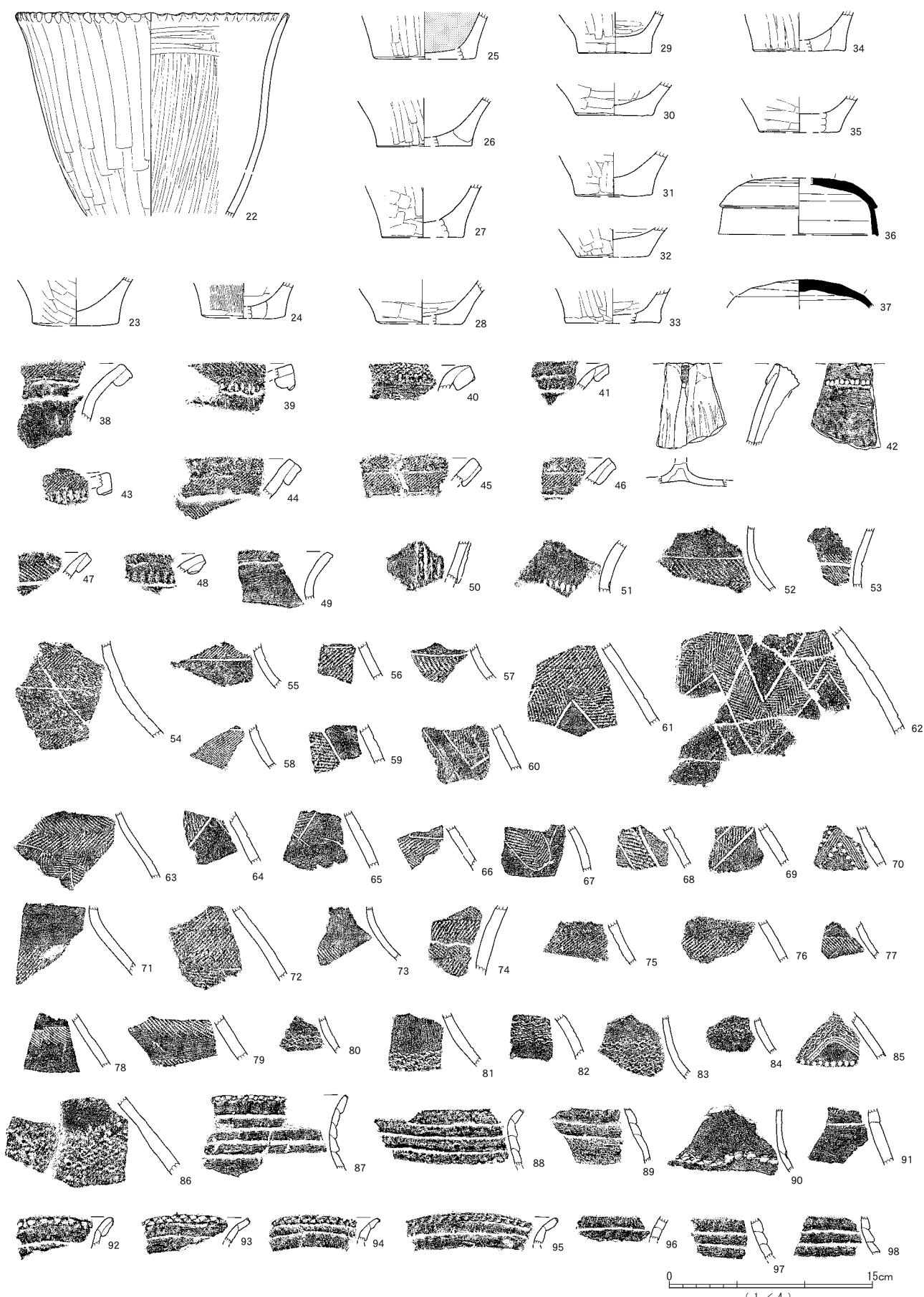


第64図 23号竪穴(4) 遺物、24号竪穴(3) 遺物

関係は、古い順に22号 23号 24号となる。3号土坑はこれら竪穴住居跡より新しい。また、26号竪穴との関係は、遺構検出状況からは明らかではない。

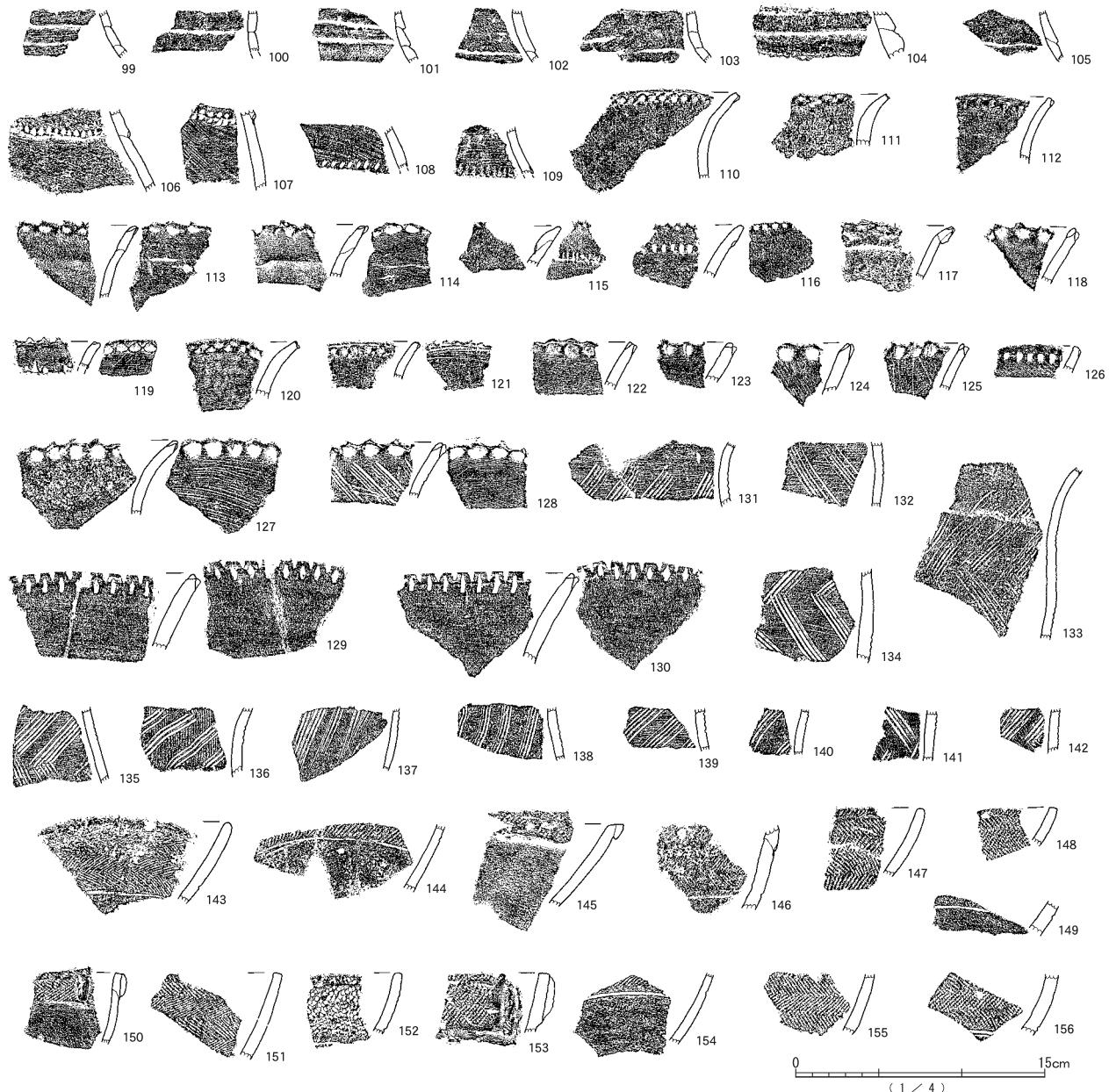
土器は、1・2・8・10～15・17・21・38～41・43～86・115が壺形土器であり、6・7・22・24・87～114・116～142が甕形土器、3・4・143～149・151・152・154～156が椀ないし高杯形土器、5が高杯

24号竪穴



第65図 24号竪穴(4) 遺物

24号竪穴



第66図 24号竪穴(5) 遺物

形土器、9が広口壺形土器、16が椀形土器、25・42・150・153が鉢形土器、36・37が須恵器杯蓋である。出土状況は明らかではない。ただし、出土土器には、ある程度の時期的なまとまりが認められる。3~5の椀・高杯形土器は、いずれも単節羽状縄文を沈線で区画する。6・7の輪積み甕形土器は、段部下位置が胴部側へ下降し、短く屈曲する口縁部をもつ。

本竪穴の所属時期は、根田代3期と推定される。

25号竪穴 (第67・68図、図版10・11・90)

25号竪穴(住居)は、A地点H8・H9・I7・I8・I9・J8区に所在する。北隅部が2号土坑、南隅部が後世の溝により失われていることをのぞけば、平面的にはほぼ完存する。ただし、掘り込みは比較的浅く、壁高は最大25cmほどである。壁溝は全周するが、深さは平均10cm程度である。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitがある。東隅付近では、直径60cm、深さ

70cmの貯蔵穴を検出した。竪穴規模は、主軸7.62m×副軸5.82m、主柱穴の柱間は主軸3.45m×副軸3.03mを測り、掘形面積は40.11m²である。主軸方位は、N-45°-Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。床面は、全体的に踏み固められていて、比較的平滑である。とくに中央部は硬化していた。焼土が竪穴全体に10~20cmほどの厚さで堆積し、炭化材も検出されている。焼土の堆積は、とくに南隅部側で顕著であった。焼失家屋とみられる。遺存遺物は少なく、遺物出土状況からは、上屋破棄後の焼却による可能性が推定される。

出土土器は、1・16・17・19~26・28~31・33~37・43・56が壺形土器、4・9・39・45~55・57~65が甕形土器、18・27・32が鉢形土器、40・42が椀ないし高杯形土器、41が椀ないし鉢形土器、44が台付甕形土器である。確実に床面から出土した遺物は存在しない。覆土から出土した土器は、1・4・5・15・18・23~25・28・32・41・52・53・60である。このうち、15・18・24・32・60が床面から5cm程度上、5・23・28・53が13~14cm程度上から出土している。17の壺形土器複合口縁、19・55等をのぞくと、基本的には宮ノ台式が占める。28・33の結紐文も認められるが、地文は結節文が主体的であり、23など、単節羽状縄文を地文とするものも認められる。

本竪穴の所属時期は、宮ノ台式終末段階、根田代1期と推定される。

26号竪穴（第69図、図版11・48・90）

26号竪穴（住居）は、A地点J8・K8区に所在する。壁面は北東隅の一部のみ残存する。竪穴中央部は、後世の溝によって破壊されている。北西隅部で24号竪穴と重複するが、新旧関係は遺構検出状況からは明らかでない。床面のレベルは本竪穴の方が35cmほど高い。また、周囲に25・27・37号竪穴があり、本竪穴の規模範囲は明らかではないが、これら竪穴住居とも重複している可能性がある。壁の高さは最大でも8cmほどと浅い。主柱穴、炉は検出されておらず、全体規模は明らかではないが、小形の竪穴であると思われる。床は平滑であるが、あまり踏み固められていない。なお、覆土断面図は、土層注記の記載がみられなかったため、分層図のみ提示した。

遺構の遺存状態は不良であるが、東側壁際を中心に、床面直上より1・2・4・5~7・10・12・14~17が出土している。出土土器は、1~4・15・23・24が甕形土器、5が広口壺形土器、9・13・14・18~22が壺形土器、7・8が椀形土器、6・16・17が椀ないし高杯形土器である。1・2は口頸部多段の輪積み甕形土器である。1は頸部に段部下段位置をおき、2はこれより降下する。3は頸部有段で、口縁部高の拡張が認められる。4は小形の甕形土器であるが、深鉢形状をとる。これらの口縁端部の施文は、交互押捺を基本とし、指頭等による表裏押捺は認められない。6の椀形土器は、口縁部径が収縮し、無頸壺形をとる。遺存遺物が大半を占めると推定される。出土土器には、宮ノ台式の要素もみられるが、段階としては、久ヶ原1式の範疇でとらえることができる。

本竪穴の所属時期は、根田代2期であり、24号竪穴との新旧関係は、出土土器から本竪穴が古いと推定される。

27号竪穴（第68・70図、図版11・91）

27号竪穴（住居）は、A地点J6・J7・K7区に所在する。壁面は、南東隅、南西隅部分をのぞけばほぼすべて遺存するが、掘り込みは浅く、壁高は最大で20cmほどである。壁溝は検出されていない。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈する。主柱穴は未検出だが、数箇所の不規則な小Pitがある。竪穴規模は主軸5.32m×副軸3.90mを測り、掘形面積は推定で18.45m²である。主軸方位は、N-76°-W

である。炉は北寄りに1箇所認められた。炉内主軸方向竪穴中央部側で土器片の埋設が検出された(写真図版11)。床は、ハードローム上に形成され全体的に硬い。現場写真によれば、炉の西端、西壁付近などから遺物が出土している。

出土土器は、4~7・9~12が甕形土器、8・13~18・24が壺形土器、3が椀形土器、20~23が椀ないし高杯形土器、19が鉢形土器である。8については高杯形土器脚部の可能性もある。遺物は小破片を中心で、出土状況の詳細は明らかでない。炉内の埋設土器も特定できない。宮ノ台式が主体となるが、10・11の輪積み甕形土器は、段部下位置から久ヶ原式と考えられる。21~23は同一個体と推定されるが、これも久ヶ原式に帰属する可能性が高い。

本竪穴の所属時期は、宮ノ台式終末段階から久ヶ原式期の間に幅をとって考えておく必要がある。なお、竪穴主軸方位は、6・7・28号竪穴とほぼ一致し、6・7号竪穴は重複するものの、一群を形成する。
28号竪穴 (第70・71図、図版11・48・91)

28号竪穴(住居)は、A地点I6・I7・J6区に所在する。壁面は、ほぼすべて遺存するが、掘り込みは浅く、壁高は最大で約30cmにすぎない。地形の傾斜により、南側へいくほど浅くなる。壁溝は検出されていない。竪穴形態は橢円形を呈する。主柱穴は4箇所、この他にもPitが多数検出されているが、組み合わせは認められない。竪穴規模は、主軸5.62m×副軸4.62m、主柱穴の柱間は主軸2.42m×副軸2.54mを測り、掘形面積は21.54m²である。主軸方位は、N-71°-Wである。炉は、主軸線上北西寄りに1箇所認められた。床は、ソフトローム上に形成され平滑。炉の西側壁際を中心に遺物が出土している。1・3・5・6・39・45が床面からの出土である。

出土土器は、1・44が高杯形土器、2~6・38~43が椀ないし高杯形土器、9・15~22が壺形土器、23~37が甕形土器である。6については、受け口状口縁の壺形土器の可能性もある。久ヶ原式の椀ないし高杯形土器がまとまって出土している。帯縄文区画は、1が無区画である他、2~5・42・43はいずれも沈線区画である。甕形土器は、26~28など頸部の段部ないし横沈線部に押捺を加えるものもみられるが、これらを含め口唇部は表裏押捺を主体とする。共伴する可能性も否定できない。

本竪穴の出土土器構成は、竪穴の主軸方向をそろえる7号竪穴と一致し、土器の作り、とくに高杯形土器2と28号竪穴1の口唇部の形状は酷似する。少なくとも無関係であるとは思われない。本竪穴の所属時期は、根田代2期と推定しておく。

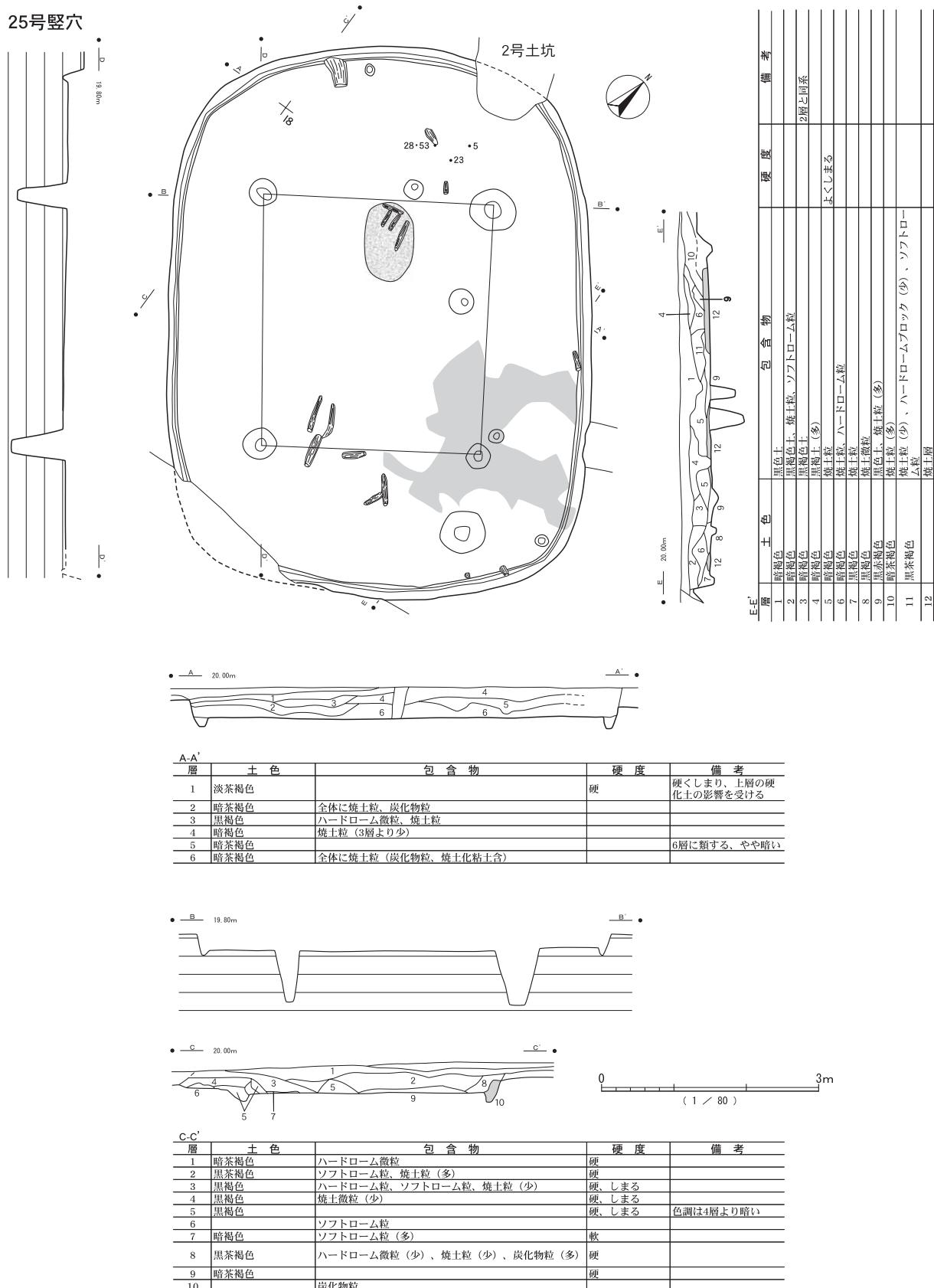
29A・B号竪穴 (第72・73図、図版11・49・78・91)

29号竪穴(住居)は、A地点I4・I5・J4・J5区に所在する。竪穴の掘り込みは深く、壁高は最大で約65cmを測り、地形の傾斜により南側へいくほど浅くなる。南辺部は、2号道路によって失われている。本竪穴の範囲内に1号地下式土坑があり、この地下式土坑により東側床面の一部が失われている。A・B号竪穴の関係は、A号の床面レベルが最大で10cmほど高いが、遺構検出状況、土層断面の観察結果によれば、A号床面がB号の覆土上に構築されたとみられるため、両者の新旧関係は、A号の方が新しい。A・B号は、建て替えによる重複ではない。なお、覆土断面図は、土層注記の記載がなかったため、分層図のみ提示した。

A号の竪穴形態は、隅丸長方形を呈するとみられる。壁面残存部では直下で壁溝を検出した。壁高の深さは10cmほどである。主柱穴は3箇所確認している。残りの1箇所は重複する1号地下式土坑により失われている。この他、数箇所の小Pitを検出した。竪穴規模は、主軸5.62m×副軸推定4.80m、

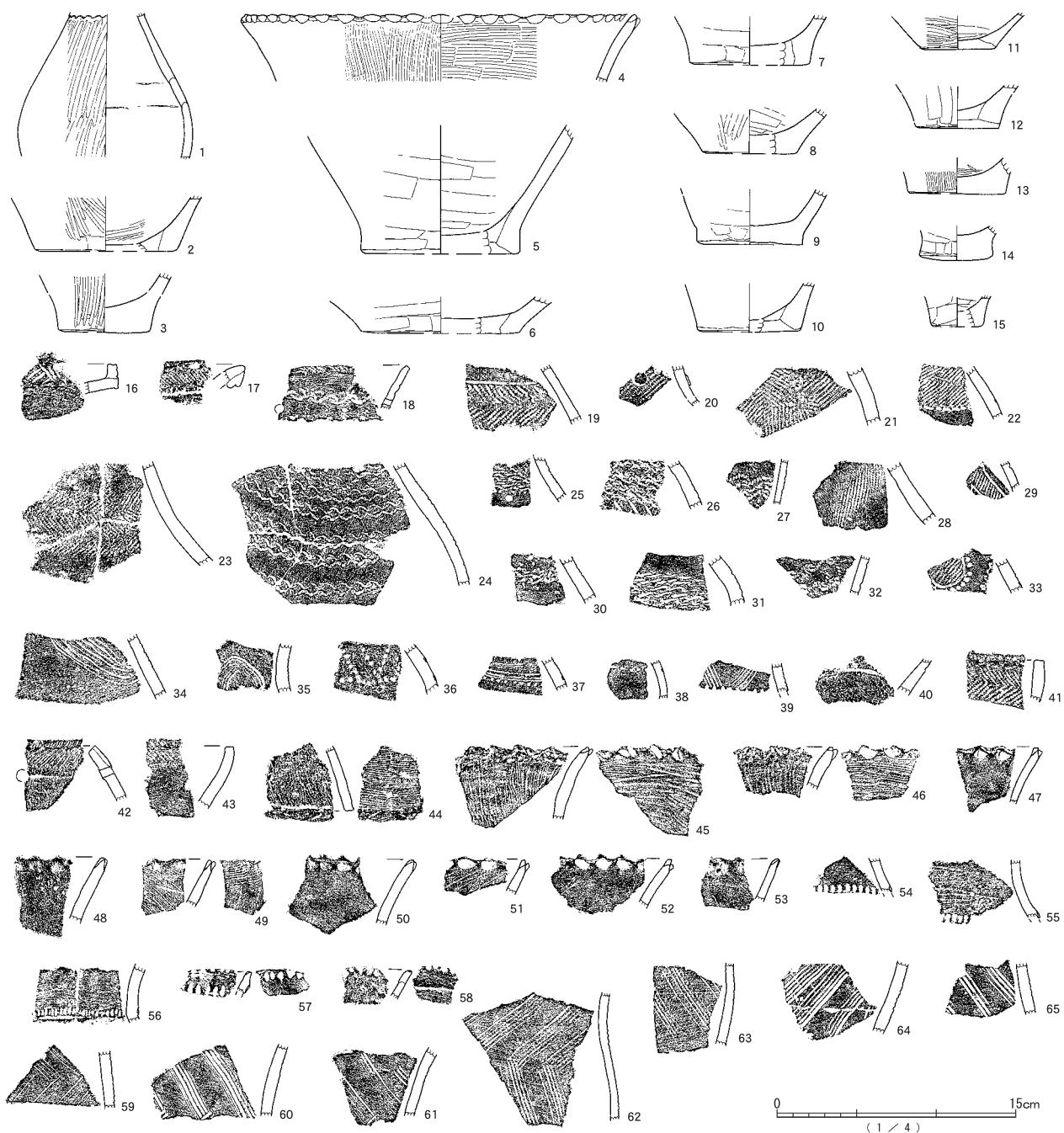
遺構と遺物 穴(1)

25号竪穴

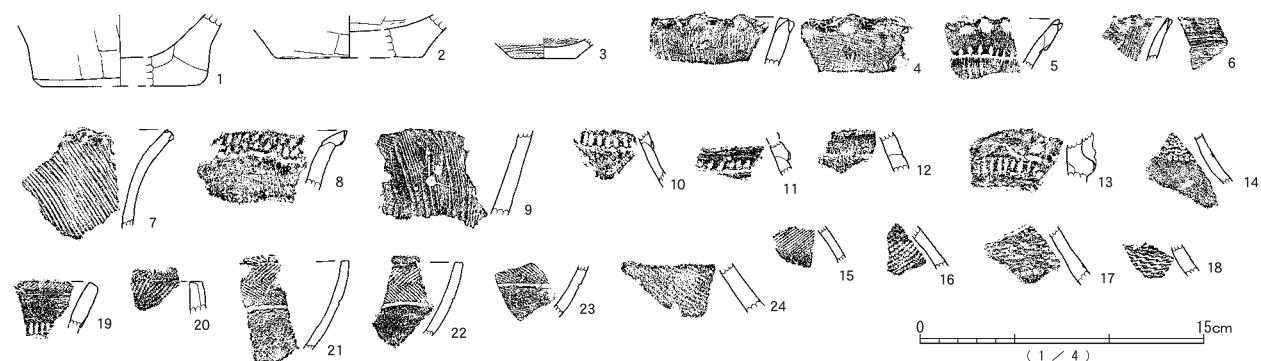


第67図 25号竪穴(1) 遺構

25号壺穴

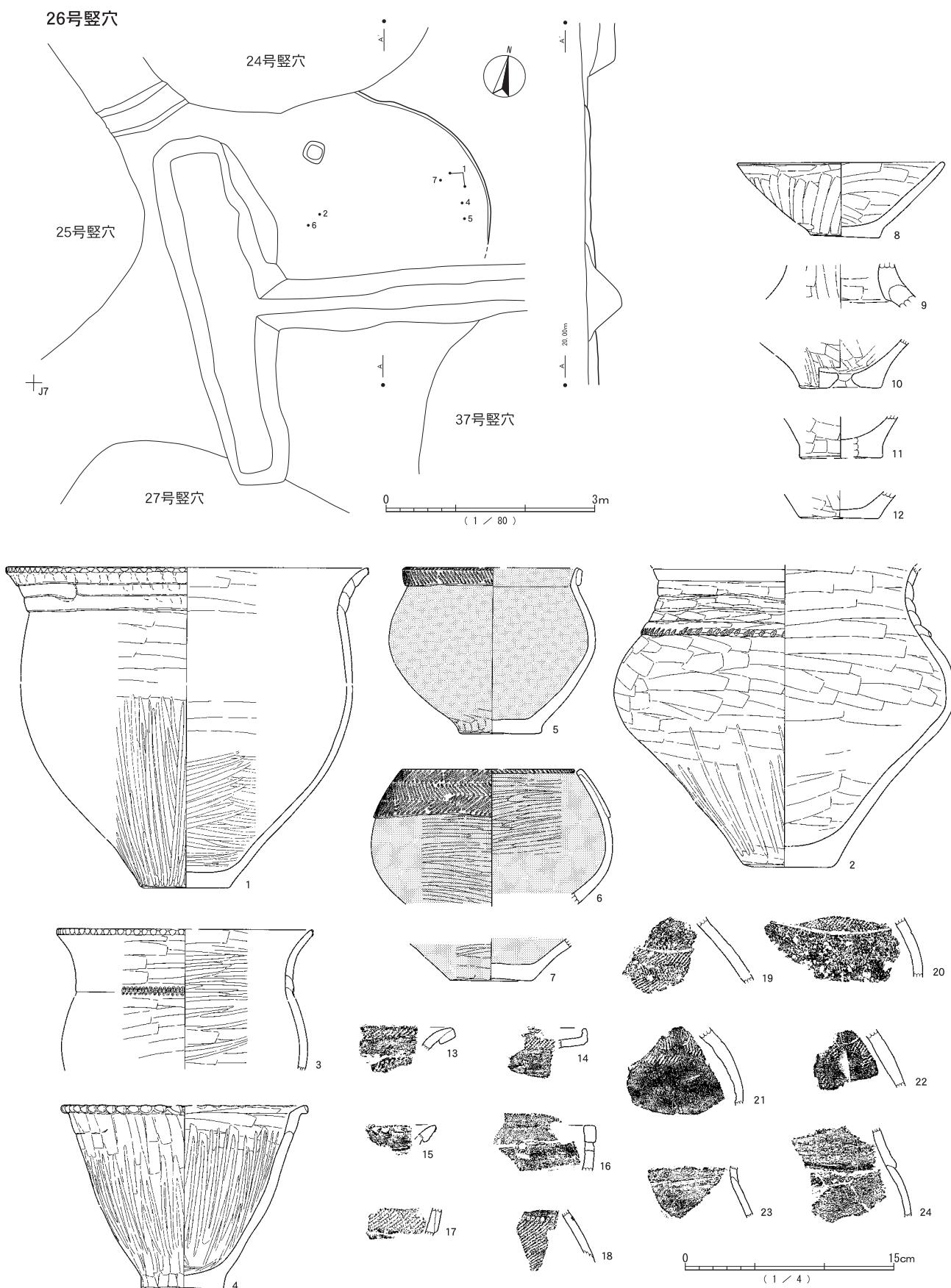


27号壺穴



第68図 25号壺穴(2) 遺物、27号壺穴(1) 遺物

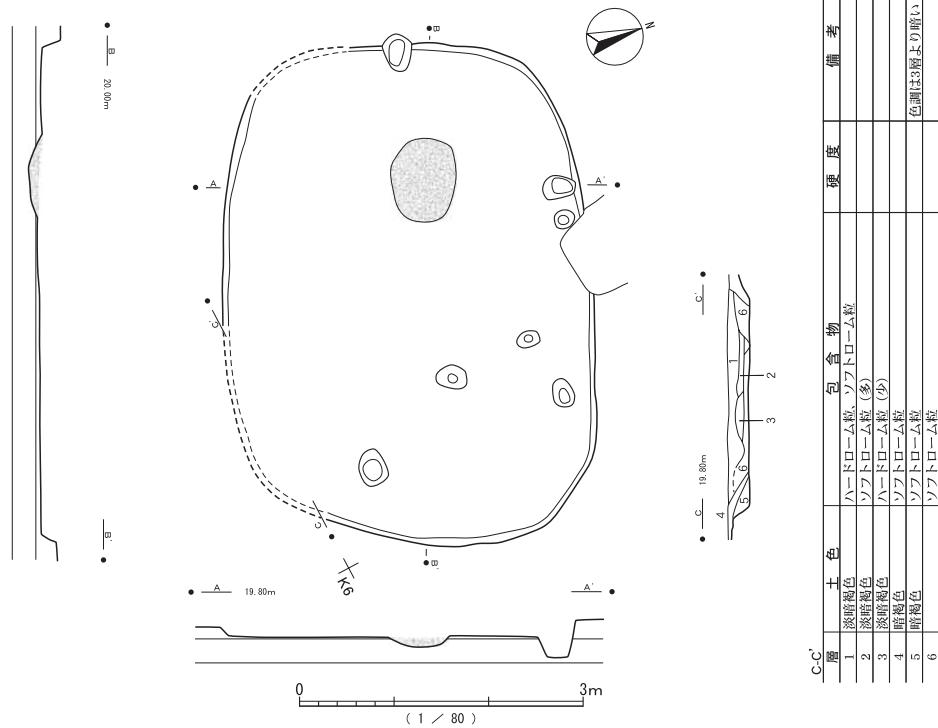
遺構と遺物 竪穴



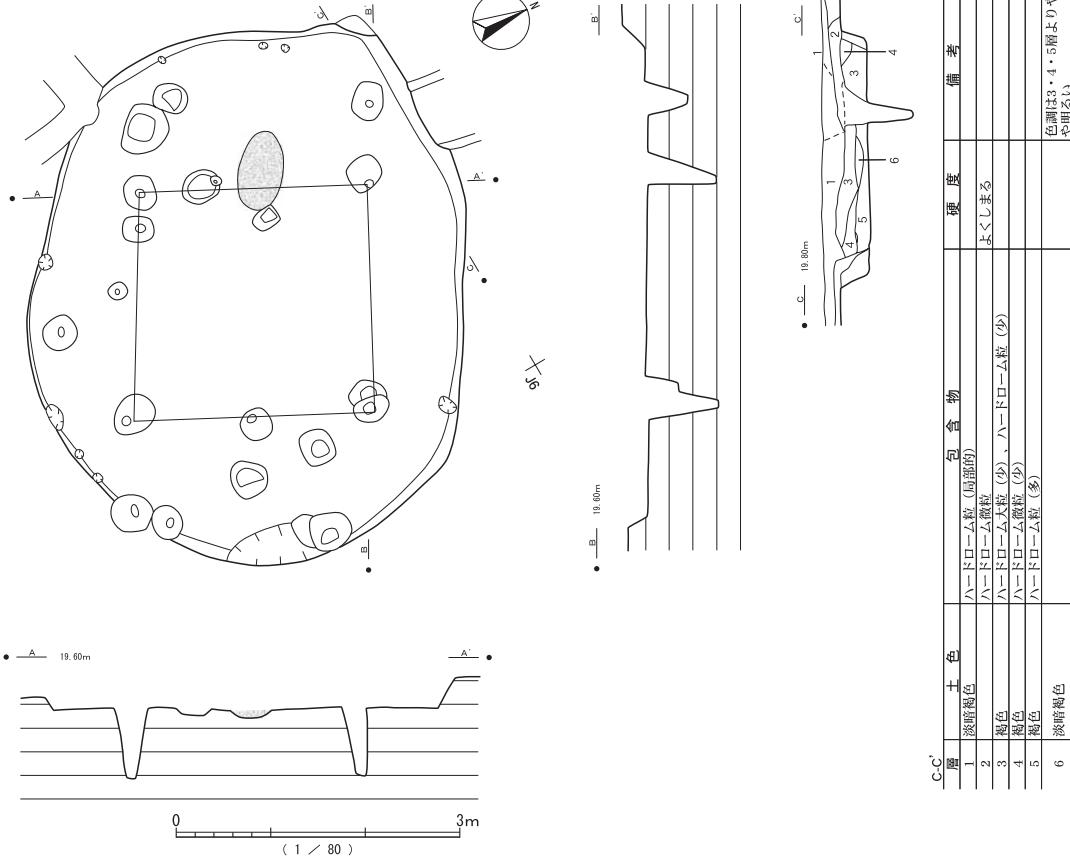
第69図 26号竪穴 遺構遺物

遺構と遺物 穴

27号竪穴

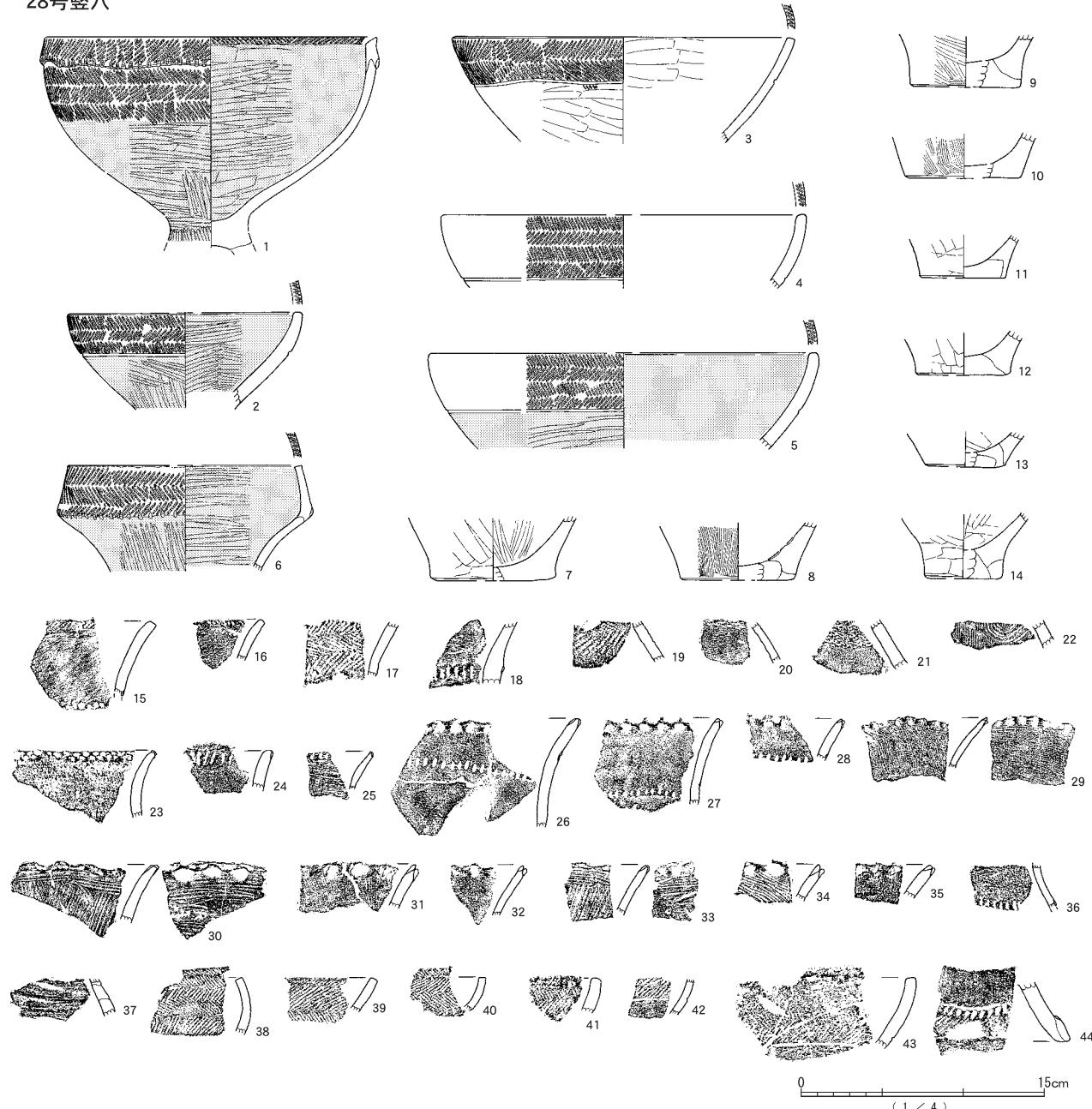


28号竪穴

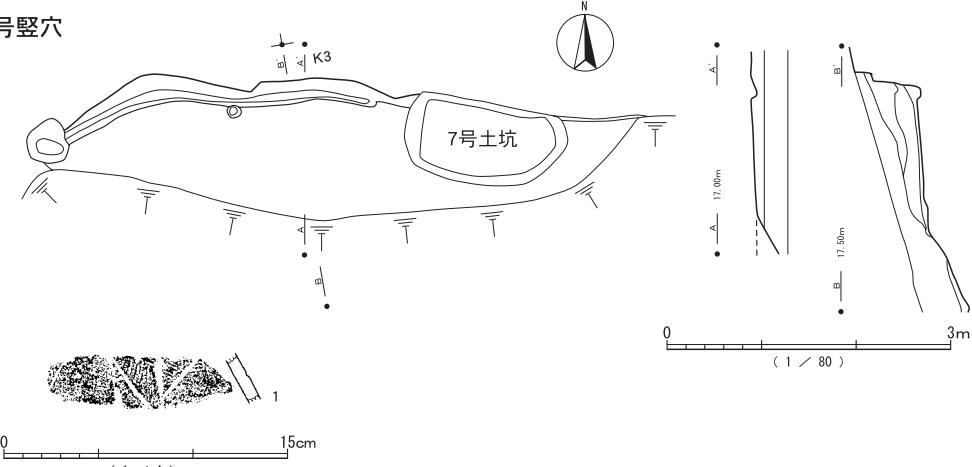


第70図 27号竪穴(2) 遺構、28号竪穴(1) 遺構

28号竪穴



30号竪穴



第71図 28号竪穴(2) 遺物、30号竪穴 遺構遺物

主柱穴の柱間は主軸2.55m × 副軸2.32mを測り、掘形面積は推定24.41m²である。主軸方位は、N - 96° - Wである。炉は、中央付近B号覆土上で1箇所認められた。床面は平滑であるが、北辺部付近は凹凸がみられる。

B号の竪穴形態は、胴張り隅丸長方形を呈するとみられる。壁面残存部では直下で壁溝を検出した。深さは5cmほどと浅い。主柱穴は4箇所、他に数箇所の小Pitを検出した。竪穴規模は、推定で主軸4.28m × 副軸4.36m、主柱穴の柱間は主軸1.98m × 副軸2.18mを測り、掘形面積は推定で17.10m²である。炉は北寄りに1箇所認められたが、主軸位置からやややすれる。主軸方位は、N - 13° - Wである。

出土遺物は、A・B号竪穴が一括で取り上げられており、それぞれの帰属は明らかではない。また、12・16・17・19・20・24・28・42～45・48・49については、重複する1号地下式土坑から弥生土器を抽出したものである。出土土器は、1・33～47が甕形土器、2・5・12～32・53が壺形土器、11が高杯形土器、48～52が椀ないし高杯形土器である。出土土器は、宮ノ台式および久ヶ原式が全体として混在した状況にある。壺形土器は、2・12・14・18・20～28が宮ノ台式に、13・15～17・19・29～32が久ヶ原式に分離される。宮ノ台式の施文は、回転結節文と20・22・24等の単節縄文様の擬縄文が目立つ。久ヶ原式については、44・45などの甕形土器器形等も勘案すると、ほぼ久ヶ原2式に中心を置くと判断される。54は、ひん岩製の磨石であり、両端部を磨り面とする。端部剥離は刃部の作り出しを意図した可能性があり、削器的な使用も想定される。

本竪穴の所属時期については、竪穴平面形態を参考にしておく。2軒のうち後出するA号の炉位置は、主柱穴の柱筋内側、竪穴のほぼ中央部寄りにあり、弥生時代後期とは考えにくい。したがって、A・B号とも根田代1期に比定しておく。

30号竪穴（第71図、図版11）

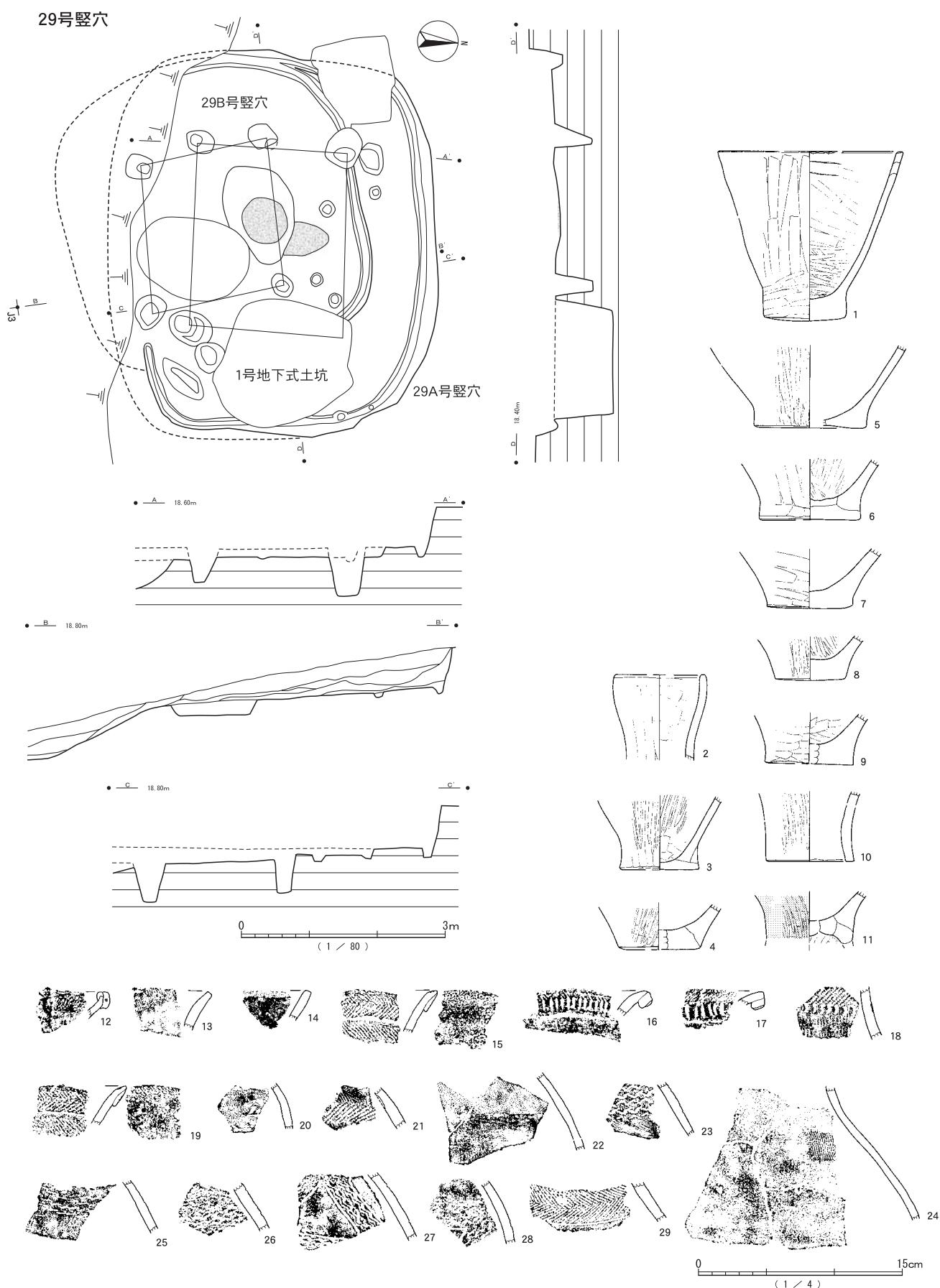
30号竪穴（住居）は、A地点J3・K3区に所在する。北辺部のみ遺存する。壁高は、最大で40cmほど残存している。南側は、東西方向に走る2号道路によって失われている。7号土坑と重複するが、新旧関係は明確ではない。主柱穴、炉も検出されていないため、竪穴規模、主軸方位は明らかでない。壁面残存部では直下に壁溝を検出したが、深さは最大5cmほどである。なお、覆土断面図は、土層注記の記載がなかったため、分層図のみ提示した。

実測可能土器は1のみであり、充填山形縄文帯の壺形土器である。これをもとに所属時期を判断するならば、根田代2・3期と推定される。

31号竪穴（第73・74図、図版12・49・91・92）

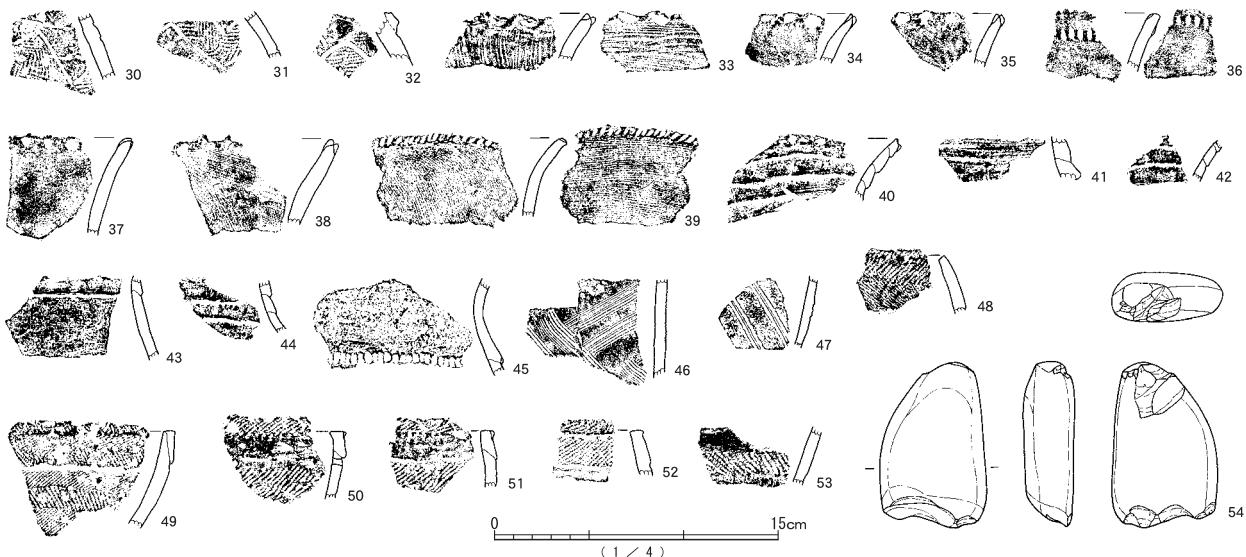
31号竪穴（住居）は、A地点K9・K10・L9・L10区に所在する。壁面は西辺部と東辺部で遺存する。北側は、東西方向に走る1号道路により、南東隅部は33号竪穴と重複し、壁面が失われている。33号竪穴との関係は、床面レベルで本竪穴の方が15cmほど高いが、土層断面B-B'の観察所見によれば、33号竪穴の覆土を一部掘り込んでおり、本竪穴の方が新しいと判断できる。壁高は最大20cmほど残存している。竪穴形態は橢円形を呈し、主柱穴は4箇所、竪穴規模は主軸推定6.50m × 副軸5.45m、主柱穴の柱間は主軸2.78m × 副軸2.42mを測り、掘形面積は推定で30.53m²である。主軸方位は、N - 29° - Wである。炉は主軸線上北寄りに1箇所認められた。壁溝は西辺部の一部でしか検出していない。床はソフトローム上に形成され、全体的に硬く踏みしめられるが、凹凸が若干目立つ。

13・30は炉から出土し、5は埋設されていた。南西隅付近壁際覆土より、3の壺形土器底部破片が

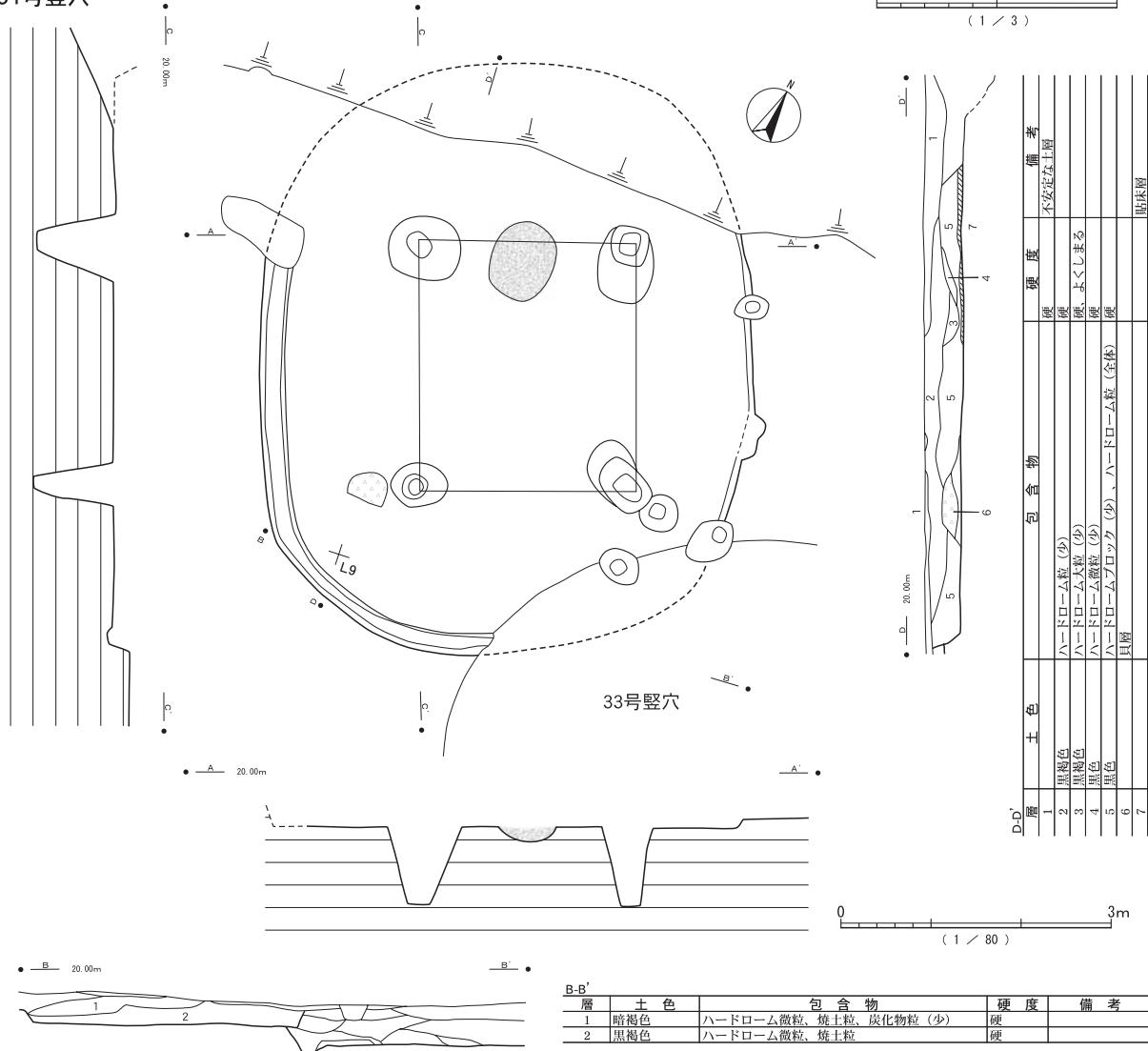


第72図 29号竪穴(1) 遺構遺物

29号壺穴

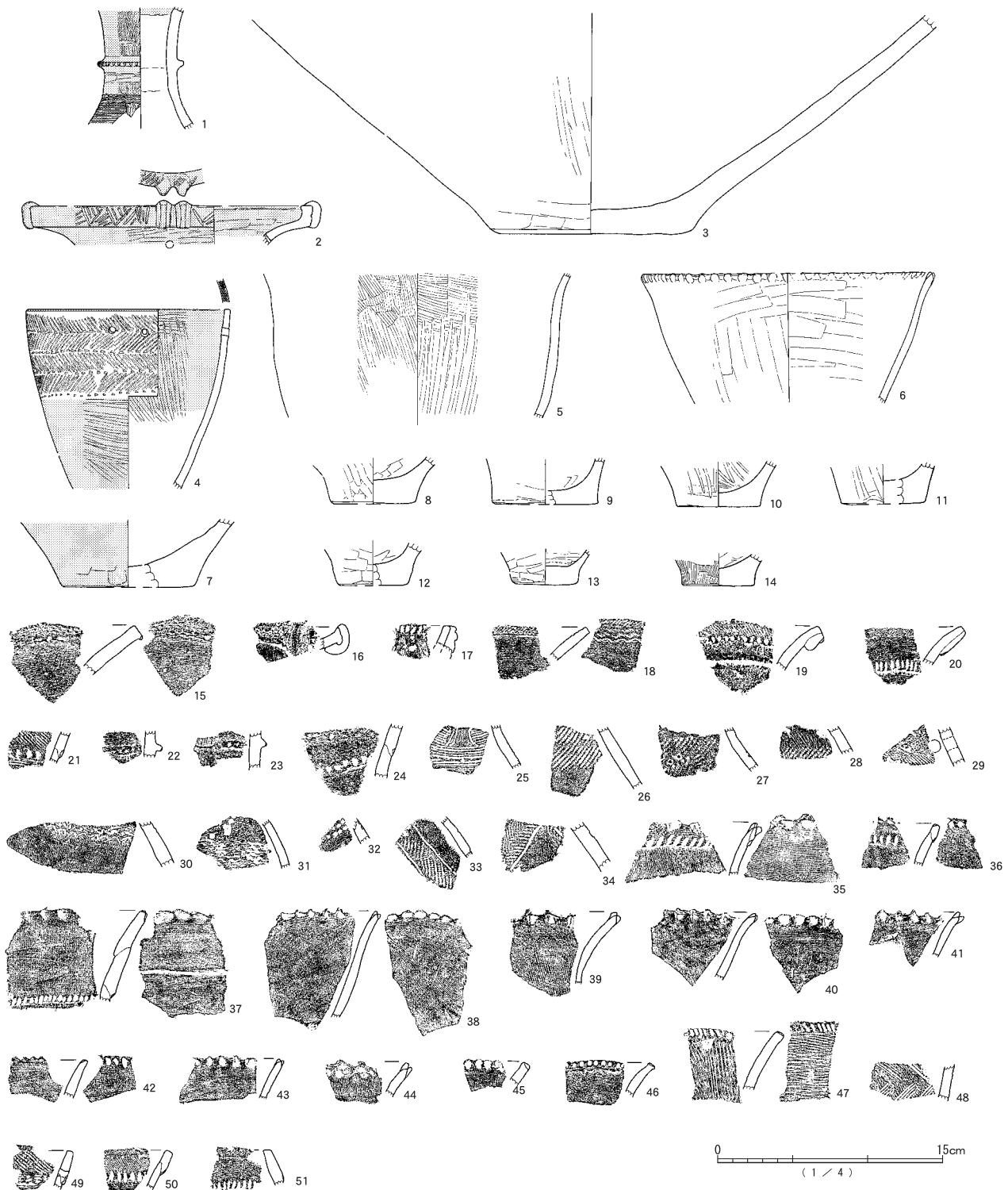


31号壺穴



第73図 29号壺穴(2) 遺物、31号壺穴(1) 遺構

31号竪穴



第74図 31号竪穴(2) 遺物

出土している(写真図版12)。他に、南西の柱穴付近で貝ブロックが検出されている。

出土土器は、5・6・14・21・35～49が甕形土器、1・2・7・15～20・22～34が壺形土器、4・50が鉢形土器、51が椀形土器である。19・20の複合口縁壺形土器等をのぞくと、基本的には宮ノ台式を主体とする。同一個体と推定される1・25は、櫛による平行線文に沈線による弧状文を加え、その間をミガキで磨

消して擬似流水文とする。ただし、これも赤彩が施され、他の出土土器をみても積極的に宮ノ台式後半期以前に遡る要素は認めにくい。2・16は受け口状口縁の壺形土器であり、16は下方向にも拡張が認められる。15は口縁端部が肥厚する壺形土器であり、口縁端部、内面に回転結節文を施す。4の鉢形土器は、単節羽状縄文を施し、段間を押し引き状の刺突列で区画する。33・34は、結紐文ないし山形縄文帯であり、34は単節羽状縄文を充填する。甕形土器では、35・36・37が口縁部に段部をつくる。37は内外面有段となる。36は、外面段部下端、内面口縁端部に布目痕等を残す押捺を加える。

本竪穴の所属時期は、5の炉埋設土器が基準となる。これについて時期詳細を検討することはできないが、根田代1期に比定することは可能であろう。

32号竪穴（第75図、図版12・49・92）

32号竪穴（住居）は、A地点K8・K9・L8・L9区に所在する。壁面は西半部のみ遺存し、壁高は最大で約25cmを測る。東辺部で33号竪穴、6号墳と重複する。33号竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。ただ、33号竪穴土層断面B-B'3層は、本竪穴の床硬化面の可能性がある。床面のレベルは本竪穴の方が15cmほど高い。竪穴形態は橈円形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitが検出された。平面規模は、主軸7.52m、副軸は推定で5.97m、主柱穴の柱間は主軸4.00m×副軸4.14mを測り、掘形面積は推定で38.61m²である。主軸方位は、N-67°-Wである。炉は主軸線上西寄りで1箇所検出された。壁溝は認められなかった。床面は、ソフトローム上に形成され、全体的に硬く踏みしめられ平滑であった。西辺部壁際床面直上より、1・3の土器が出土している（写真図版12）。また、2は東辺部壁際床面上3cmから出土している。他に、炉覆土中から5が出土している。なお、調査時の記録によれば、炉の東端では、数片の土器片が組み合わされ、直立した状態で埋設されていたという。ただし、今回土器を特定することはできなかった。

出土土器は、1・3が高杯形土器、7が椀形土器、2・5・16が壺形土器、9～15が甕形土器、8が鉢ないし広口壺形土器である。1は短脚であるが、破損等による2次的なものではない。口縁部は有段となり、単節羽状縄文を沈線で区画する。

本竪穴の所属時期は、根田代3期に推定しておく。

33号竪穴（第76・77図、図版12・49・92・93）

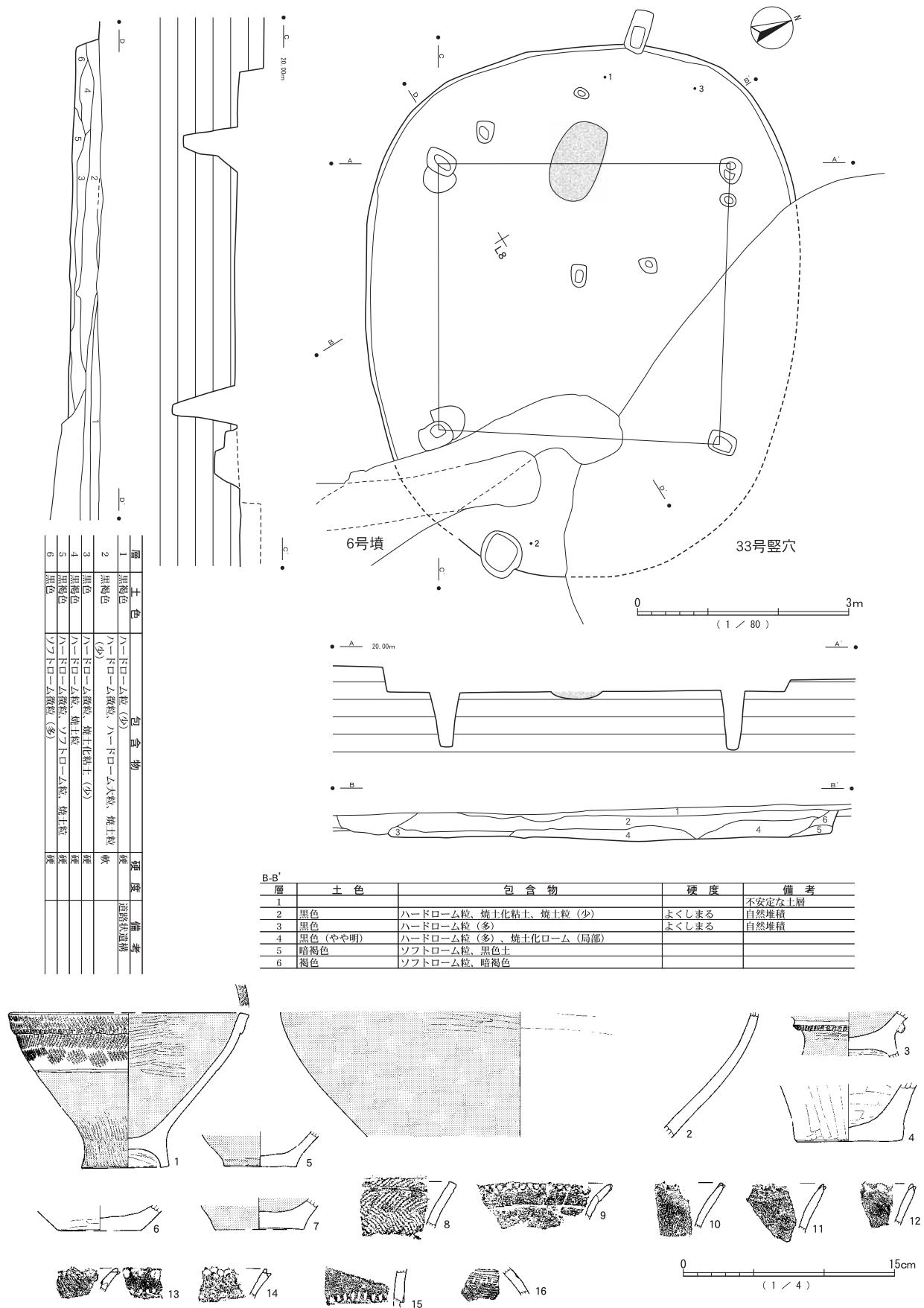
33号竪穴（住居）は、A地点L8・L9・L10・M8・M9・M10区に所在する。壁面はほぼすべて残存するが、南側で6号墳周溝が横断する。また、北東隅部分で長軸1.7m、深さ約80cmを測る土坑が重複する。土坑の時期、性格は不明。壁高は、最大25cmほど残存している。竪穴住居跡は、西側で31号竪穴、南西側で32号竪穴、東側で35号竪穴と重複する。31号竪穴との新旧関係は、本竪穴の方が古い。土層断面B-B'3層は32号竪穴の床硬化面の可能性があり、この場合32号竪穴に対して本竪穴が古い。35号竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかではない。

竪穴形態は橈円形を呈し、主柱穴は4箇所、竪穴規模は主軸8.78m×副軸6.92m、主柱穴の柱間は主軸4.54m×副軸3.50mを測り、掘形面積は53.03m²である。主軸方位は、N-31°-Wである。炉は、主軸線上北寄りに1箇所認められた。壁溝は東側、北側で検出され、深さは最大10cmほどである。床面は全体的に硬く踏みしめられ、やや凹凸はあるがおおむね平滑である。北側壁際に焼土の堆積がみられた。火災の可能性がある。

出土土器は、1・7・9・54～81が甕形土器、2・15・18～20・23～45が壺形土器、3・22・46～53が椀

遺構と遺物 竪穴

32号竪穴



第75図 32号竪穴 遺構遺物

ないし高杯形土器、8が高杯形土器、10・12が椀形土器、17が鉢形土器、21が広口壺形土器である。出土状況はいずれも明らかではない。全体として時期的な混乱が認められる。1の甕形土器は、弥生時代終末期ないし古墳時代前期初頭と推定され、18～22の複合口縁の壺形土器、27～39の沈線区画を基本とする横帯縄文の壺形土器、46～53の有段ないし沈線区画の椀・高杯形土器、54～57・71～78の甕形土器等は久ヶ原式に比定される。久ヶ原式も2式を主体とするが、56など1式に比定されるものも散見できる。

本竪穴の所属時期を、遺構の検出状況から判断するならば、宮ノ台式終末段階、根田代1期の31号竪穴に先行することとなる。土層断面の設定位置が、重複竪穴の壁際に近く、やや不確実であるようにもみえるが、上記のとおり考えておきたい。宮ノ台式については、41・42等の櫛描文も認められるが、赤彩され、回転結節文との組み合わせをもつ。確証は得られないが、31号竪穴に対して大きく遡る時期は想定できない。量的に主体となる久ヶ原式については、32・35号竪穴に関連する可能性が高い。

34号竪穴（第78図、図版12・93）

34号竪穴（住居）は、A地点M10・N10区に所在する。南東隅部で3号墳と重複し、周溝によって部分的に壁面と床面が失われている。また、南側の35号竪穴に隣接し、一部重複する可能性があるが、この竪穴との新旧関係は明らかでない。床面のレベルの比較では、本竪穴の方が10cmほど高い。壁高は最大でも15cmほどと浅い。竪穴形態は橢円形を呈し、主柱穴位置に3箇所のPitが検出されたが、残る1箇所はとらえられていない。この他にも、小Pit数箇所が検出されている。竪穴規模は主軸3.95m×副軸推定3.64m、主柱穴の柱間は主軸1.28m×副軸1.28mを測り、掘形面積は推定で12.39m²である。主軸方位は、N-14°-Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。壁溝は検出されていない。床面は、ソフトローム上に形成され、全体的に硬く踏みしめられているが、小さな凹凸が全面的にみられた。

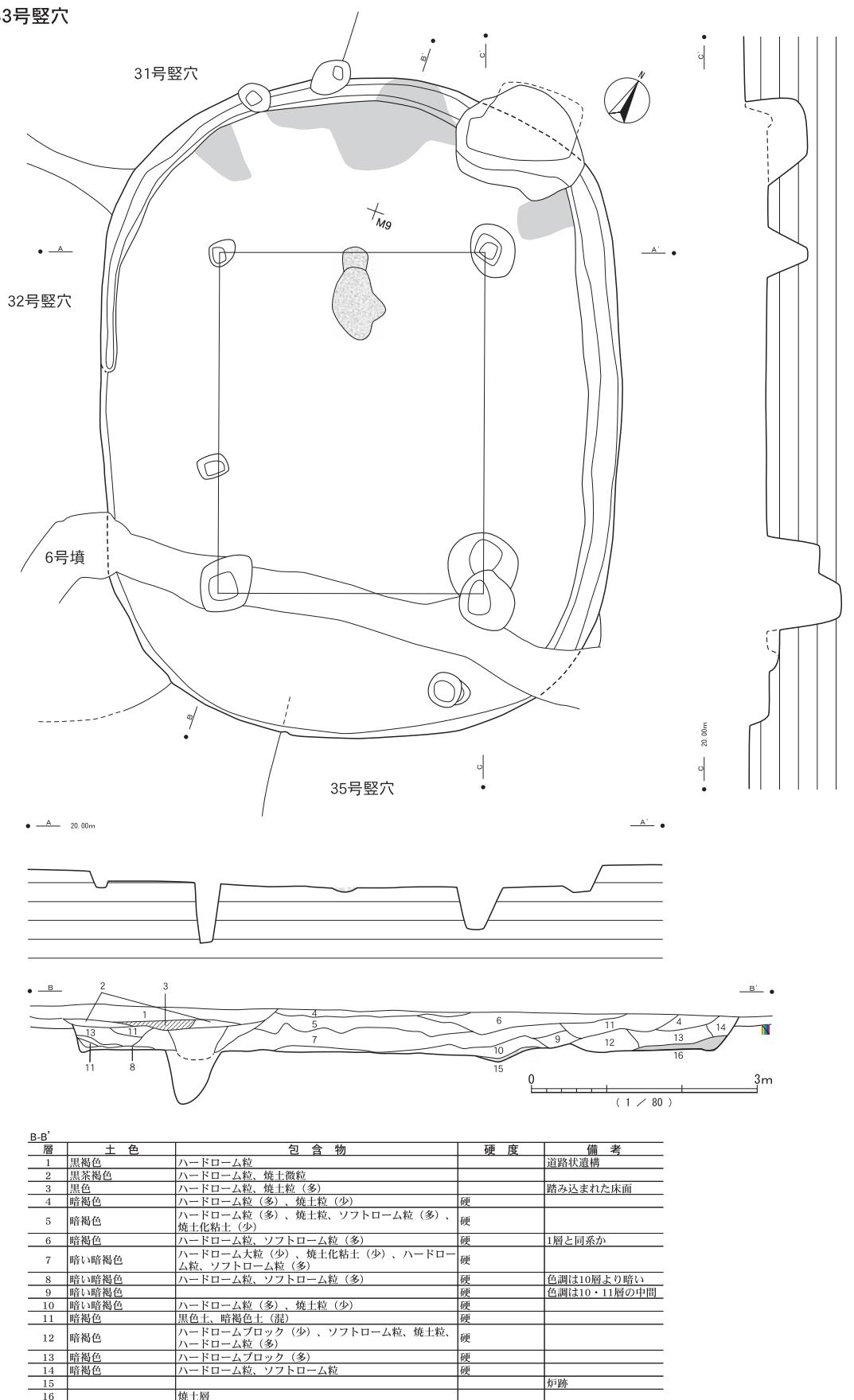
出土土器は、いずれも小破片であり、出土状況も明らかではない。1・13が椀形土器、3～5・9～12・16が壺形土器、7・8・14・15が甕形土器、6が高杯形土器であろうか。5の単口縁の壺形土器、6の屈曲口縁の高杯形土器、10の回転結節文の壺形土器、15・16等は宮ノ台式に比定されるものであるが、3・4の複合口縁の壺形土器、9・12の横帯縄文沈線区画、山形縄文帯の壺形土器、8の口頸部多段、14の胴部有段の甕形土器、1・13の椀形土器は久ヶ原式に比定される。このうち、3・4・14などの特徴は久ヶ原2式と考えられる。主柱穴を欠く小形竪穴である点も考慮し、本竪穴の所属時期は、根田代3期と推定しておく。

35号竪穴（第79～81図、図版12・13・49・50・78・79・93・94）

35号竪穴（住居）は、A地点M7・M8・M9・N7・N8・N9区に所在する。壁面は南西隅部分のみ検出された。この部分での壁の高さは、最大15cmほどである。壁面残存部では直下に壁溝が検出されている。北西側および北東側は、33号・36号竪穴との重複により失われている。これらの竪穴住居との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルでは33号竪穴より本竪穴の方が20cmほど高く、36号竪穴とはほぼ同レベルにある。北側の34号竪穴とも重複ないしは接している。さらに、3・6号墳の周溝が縦横断する。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈するものとみられ、主柱穴は4箇所あり、この他にも小Pit数箇所が検出されている。北西部主柱穴には重複が認められるが、あるいは抜き取

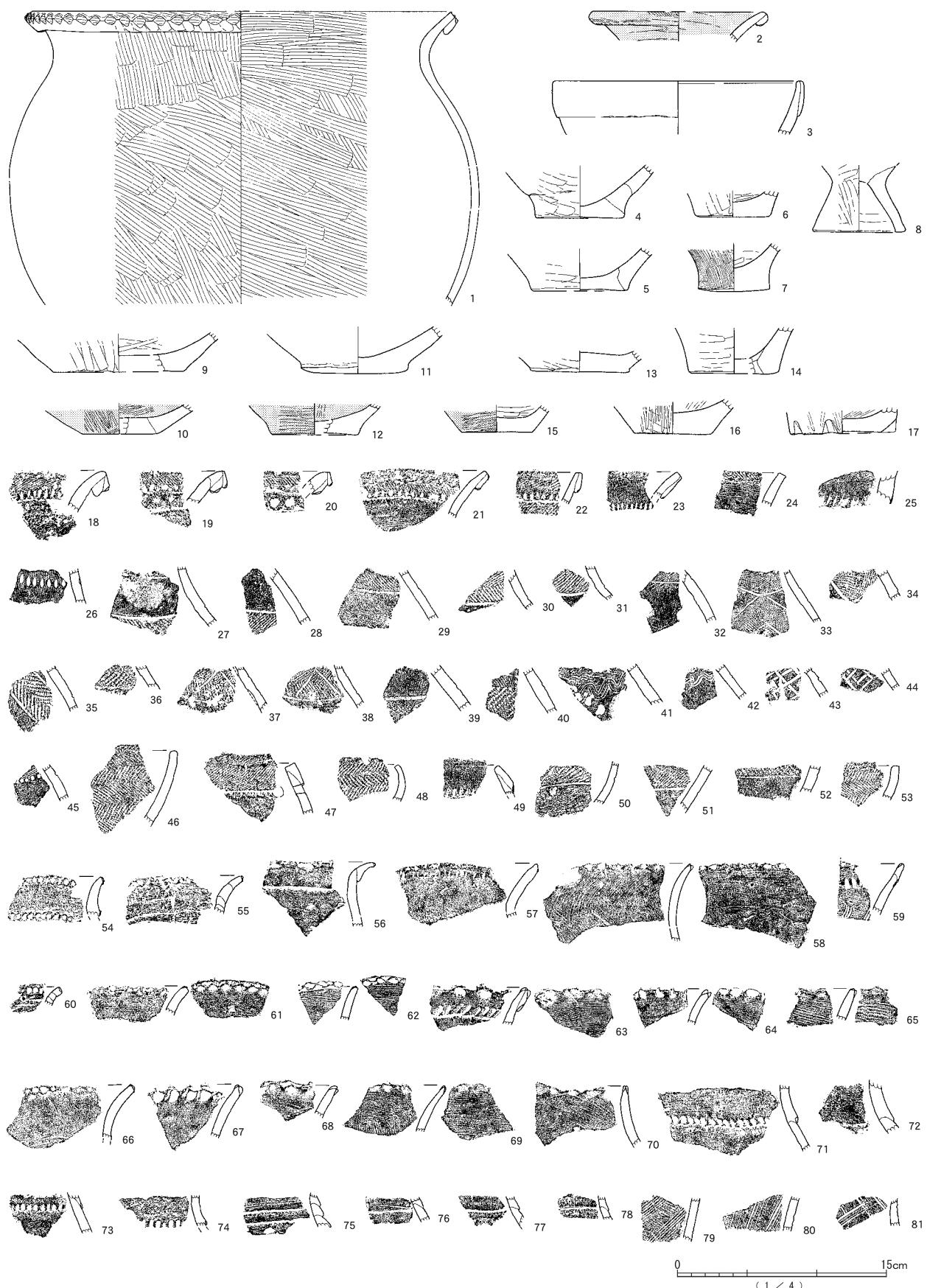
遺構と遺物 竪穴

33号竪穴



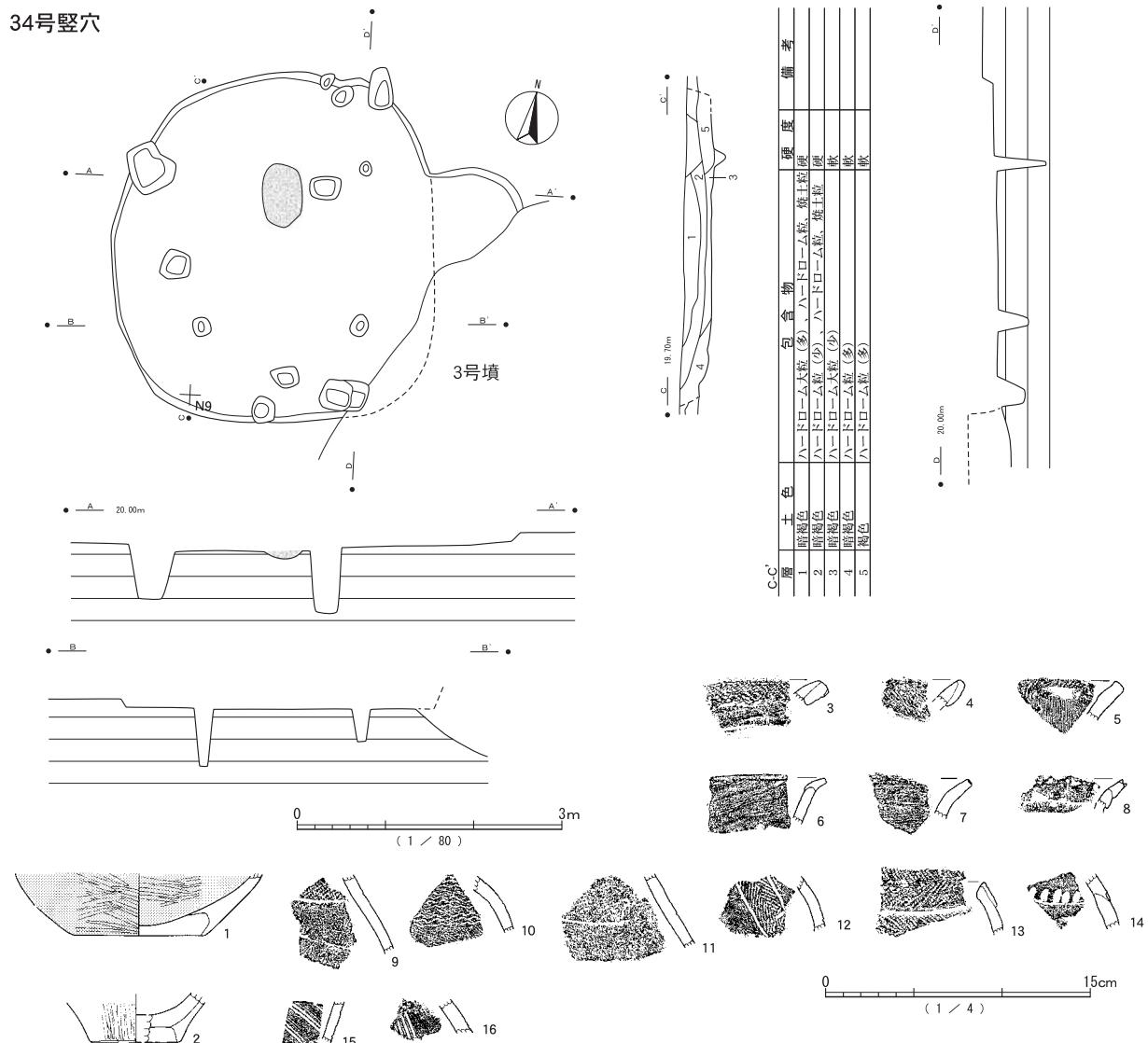
第76図 33号竪穴(1) 遺構

33号竪穴



第77図 33号竪穴(2) 遺物

34号竪穴

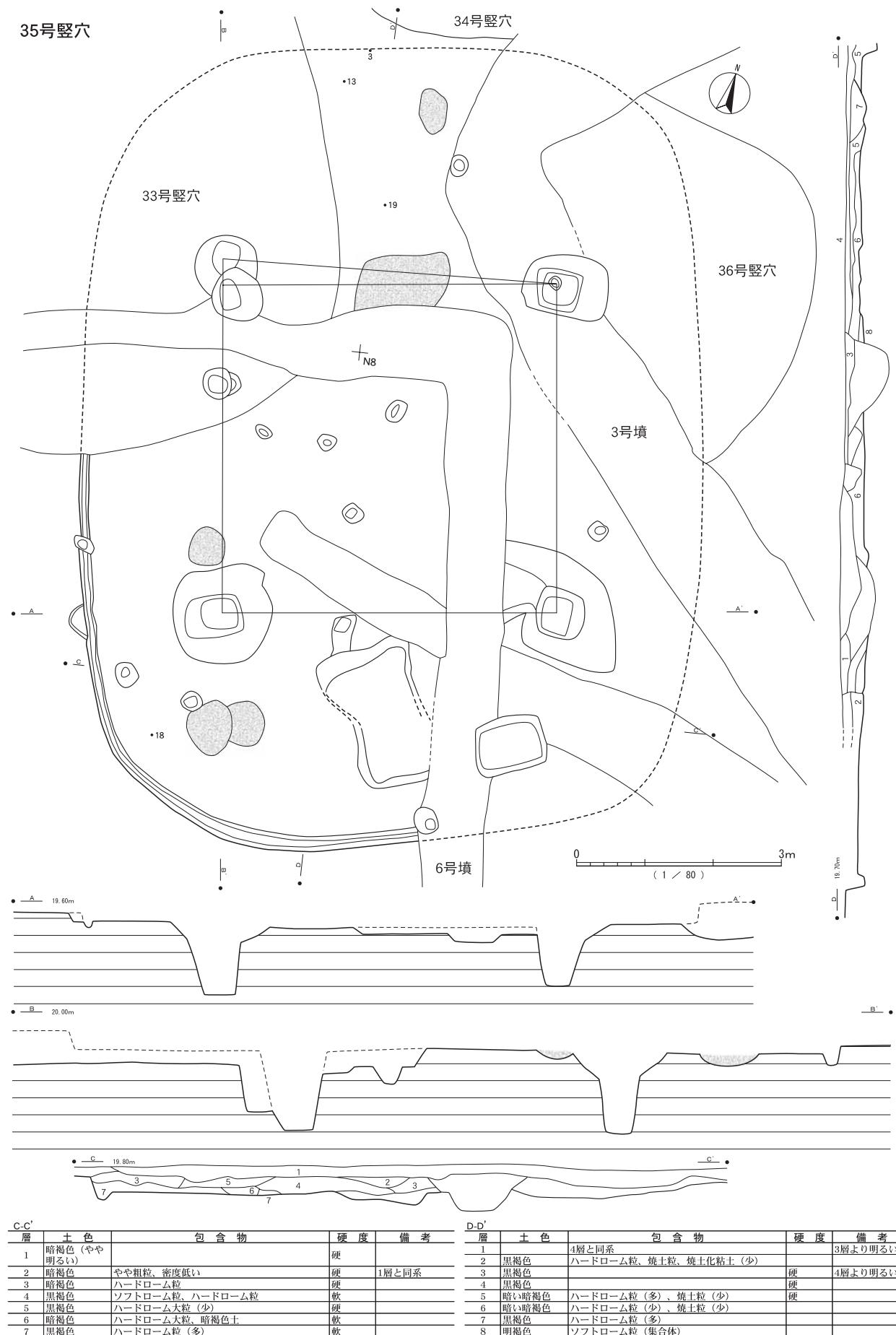


第78図 34号竪穴 遺構遺物

り穴の可能性もある。竪穴規模は、推定で主軸 11.63m × 副軸 9.10m、主柱穴の柱間は主軸 4.78m × 副軸 4.87m を測り、掘形面積は推定で 95.87 m²である。今回の報告範囲では、最も大形の竪穴建物である。主軸方位は、N - 17° - W である。炉火床面は、北寄りに 2箇所、南西の主柱穴付近に 3箇所が認められた。床面は、ソフトローム上に形成され、全体的にやや凹凸が目立つ。

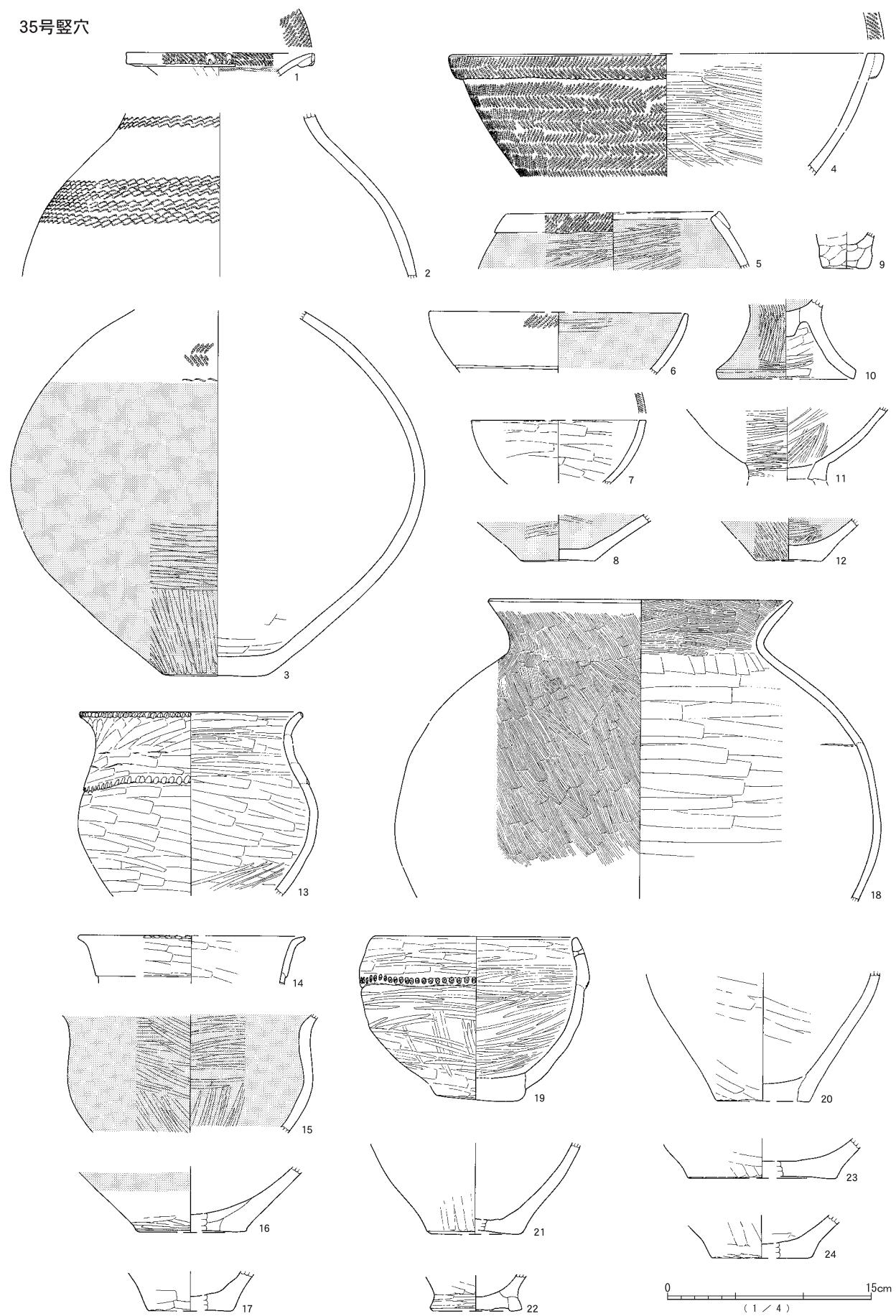
出土土器は、3・13・16・18・19・41・83が床面から、15・89が炉内、97が床および炉内から出土している。1・3・16・26・27・29～33・35・37～56が壺形土器、4・6・57～66・68～72が椀なしし高杯形土器、5・7・8・12・19・67が椀形土器、10・11が高杯形土器、13・14・18・28・73～108が甕形土器、15が広口壺形土器なしし高杯形土器、34・36が鉢形土器である。出土土器は、時期的に混在する。18は五領式の甕形土器であり、床面から出土しているが、竪穴形態等からみて本竪穴の遺存遺物とは考えにくい。3の結節区画の壺形土器についても、器形から判断して弥生時代終末期なしし五領式段階と想定される。本竪穴に対応すると考えられるものは、13・15・19・41・83・89・97の床面なしし炉内出土土器であり、1・25～32の複合口縁壺形土器、40・43・49～55の沈線区画横帯縄文、充填山形縄文帯の壺形土器、4～6の帯縄文沈線区画の椀なしし高杯形土器、95・96・98～103の口頸部多段、

遺構と遺物 竪穴



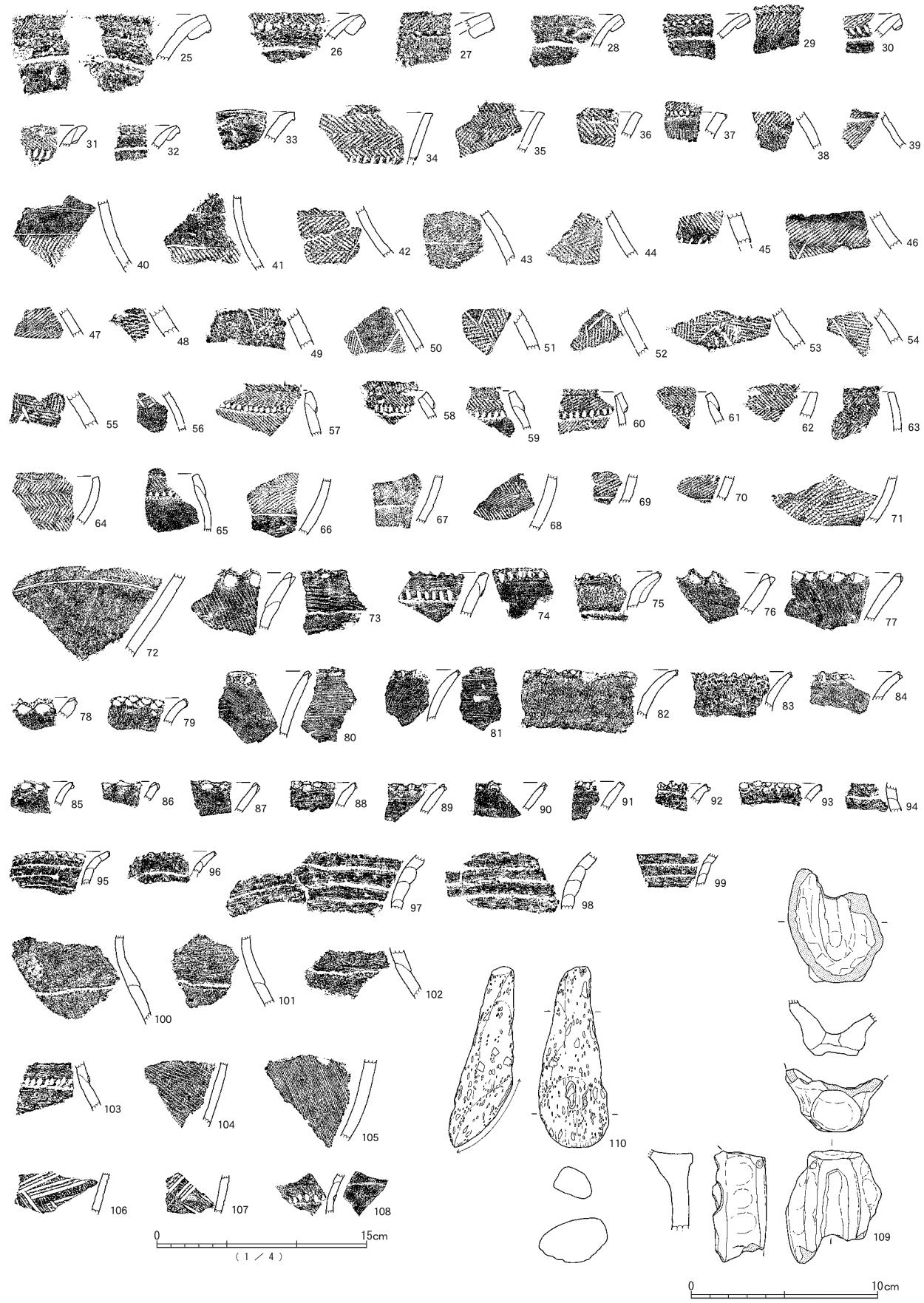
第79図 35号竖穴(1) 遺構

35号竪穴



第80図 35号竪穴(2) 遺物

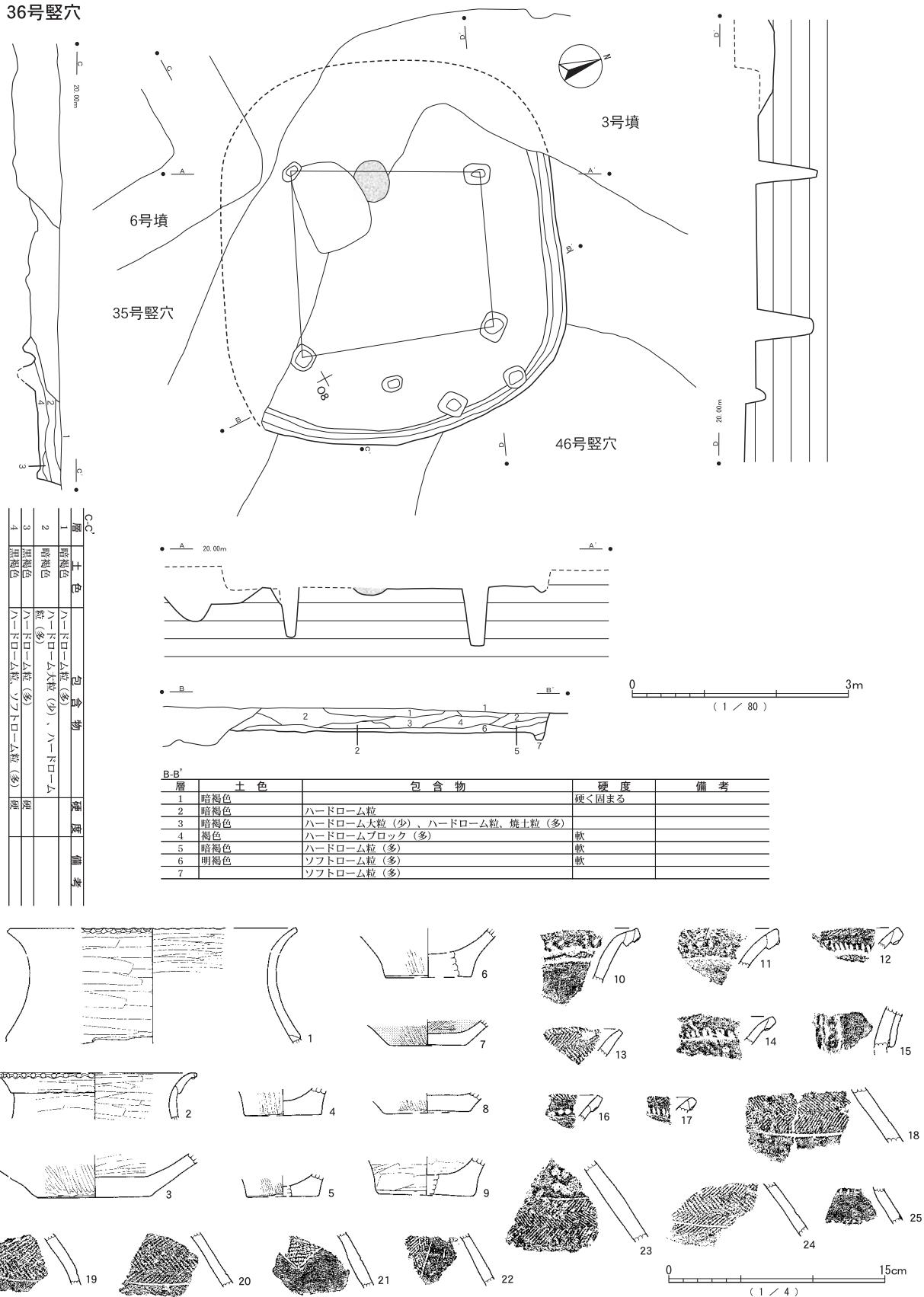
35号竪穴



第81図 35号竪穴(3) 遺物

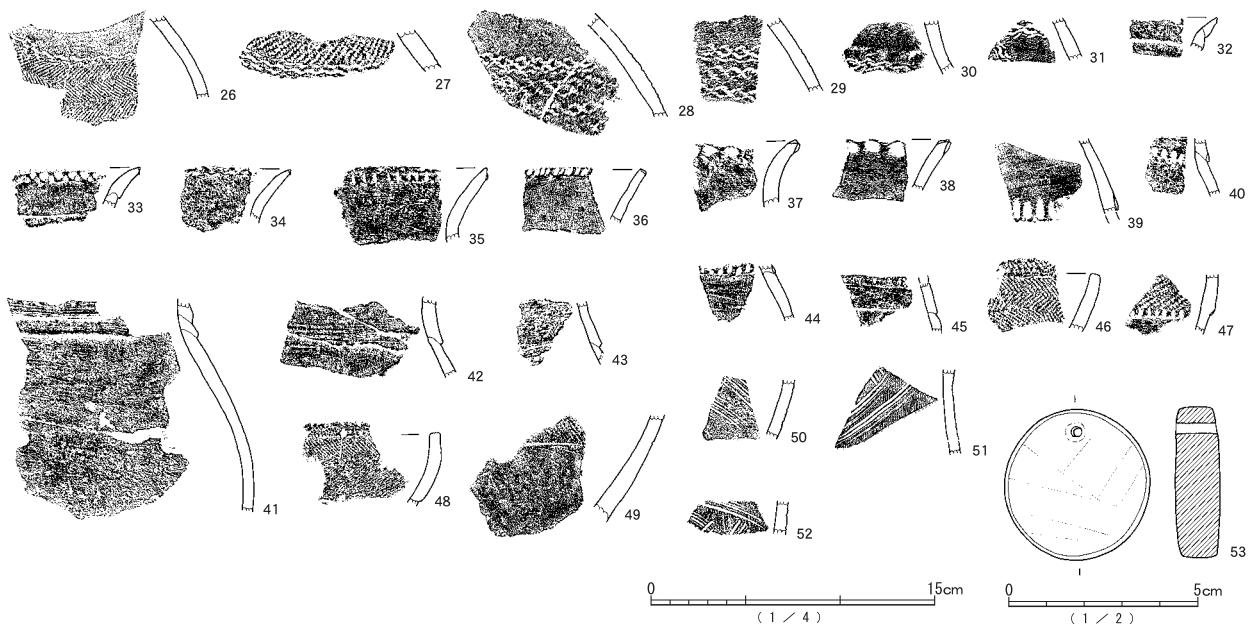
遺構と遺物 竪穴

36号竪穴



第82図 36号竪穴(1) 遺構遺物

36号竪穴



第83図 36号竪穴(2) 遺物

胴部有段の甕形土器などがあおむね同時期と推定される。110は、こて状の軽石製品であり、磨石として使用されたものと推定される。109は、現存部で船状器形をとる不明土製品である。土器の可能性もあるが、部位は特定できない。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式段階、根田代3期に比定される。33号竪穴との新旧関係は、33号竪穴覆土上に本竪穴の床硬化面が記録されていないものの、出土土器から判断して33号竪穴より新しいと推定される。36号竪穴との関係は明らかにできない。

36号竪穴 (第82・83図、図版13・79・94)

36号竪穴(住居)は、A地点N9・O8・O9区に所在する。西側部分は3号墳によって大半が破壊され、壁面は東辺部、南辺部のみ検出された。この部分での壁高は最大約35cmである。また、痕跡は明確ではないが、35号竪穴と西側相当部分が重複する。新旧関係は明らかではなく、本竪穴の出土遺物の帰属には留意が必要である。また、東隅部では46号竪穴と重複する。46号竪穴との新旧関係は、床面レベルで本竪穴の方が15cmほど低く、遺構検出状況から46号竪穴の一部を掘り込んでいることが明らかであり、本竪穴の方が新しい。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈するとみられ、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitが検出されている。竪穴規模は、推定で主軸5.40m×副軸4.71m、主柱穴の柱間は主軸2.60m×副軸2.68mを測り、掘形面積は推定で21.95m²である。主軸方位は、N - 79.5° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。壁面残存部では直下に壁溝が検出されている。床面は、全体的に硬く踏みしめられ平滑である。

出土土器は、10～31が壺形土器、1・2・32～38・40～43・45・50～52が甕形土器、7が椀形土器、46～49が椀ないし高杯形土器、39・44が広口壺形土器である。出土状況はいずれも明らかではない。重複する35号竪穴とは、床レベルがほとんど変わらないことから、新旧関係の如何によっては、本来35号竪穴に帰属する土器を含む可能性がある。出土土器は、久ヶ原式を主体とする。ただし、1・2の甕形土器の段部位置、18・20・23・24の横帯縄文沈線区画と、26・27の別原体結節文区画等、

久ヶ原1式から山田橋式段階までの幅が認められる。さらに、宮ノ台式と考えられる28~31の回転結節文を含む。53は、土製の有孔円板である。土器片の再利用ではなく、穿孔も焼成前による。

本竪穴の所属時期については、現状において確証が得られない。

37号竪穴（第84・86図、図版13・94）

37号竪穴（住居）は、A地点K7・K8・L7・L8区に所在する。6号墳周溝および南北に走る後世の溝により、東側約1/3が破壊されている。壁高は、最大25cmほど残存している。また、東側で38号竪穴と重複する。床面レベルは本竪穴の方が15cmほど低い。新旧関係は、土層断面C-C'、および38号竪穴の炉の検出状況から、本竪穴が古いと判断しておく。北西側では、26号竪穴と重複する可能性がある。竪穴平面形態は橢円形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも小Pitが検出された。竪穴規模は主軸推定7.58m×副軸6.20m、主柱穴の柱間は主軸3.98m×副軸2.97mを測り、掘形面積は推定で39.15m²である。主軸方位は、N - 54.5° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。壁溝は検出されていない。床面は部分的に貼床が施され、硬く踏みしめられていた。炉内には、主軸線上南東側に土器が直立した状態で埋設されていた。ただし、この土器は、整理段階で特定できなかった。他も土器は小破片が中心で、出土状況は明らかではない。38号竪穴との重複関係から、38号竪穴の遺物を含む可能性がある。

出土土器は、1・36~41・43~54が甕形土器、7・18~33が壺形土器、2が椀ないし高杯形土器、12・34が高杯形土器、13~15・42が鉢形土器、35が椀形土器である。宮ノ台式を中心とし、甕形土器は櫛による横走羽状文をもつものが比較的目立つ。13~17の所謂折返し口縁は、壺形土器ではなく、鉢形土器等と推定され、13・14・17は施文部を含め赤彩される。16・17は、布目圧痕とも推定される単節縄文様の擬縄文である。39~41の甕形土器は、口縁部外面が有段となり、41は、段部下端、内面側口縁端部に布目痕を残す押捺をもつ。壺形土器胴部横帯縄文は、22が単斜縄文を重ねるのに対して、23~25は単節羽状縄文であり、22・23・25および21・26は無区画である。29は別原体回転結節文による区画をもつ。

本竪穴の所属時期は、根田代1期に推定しておく。

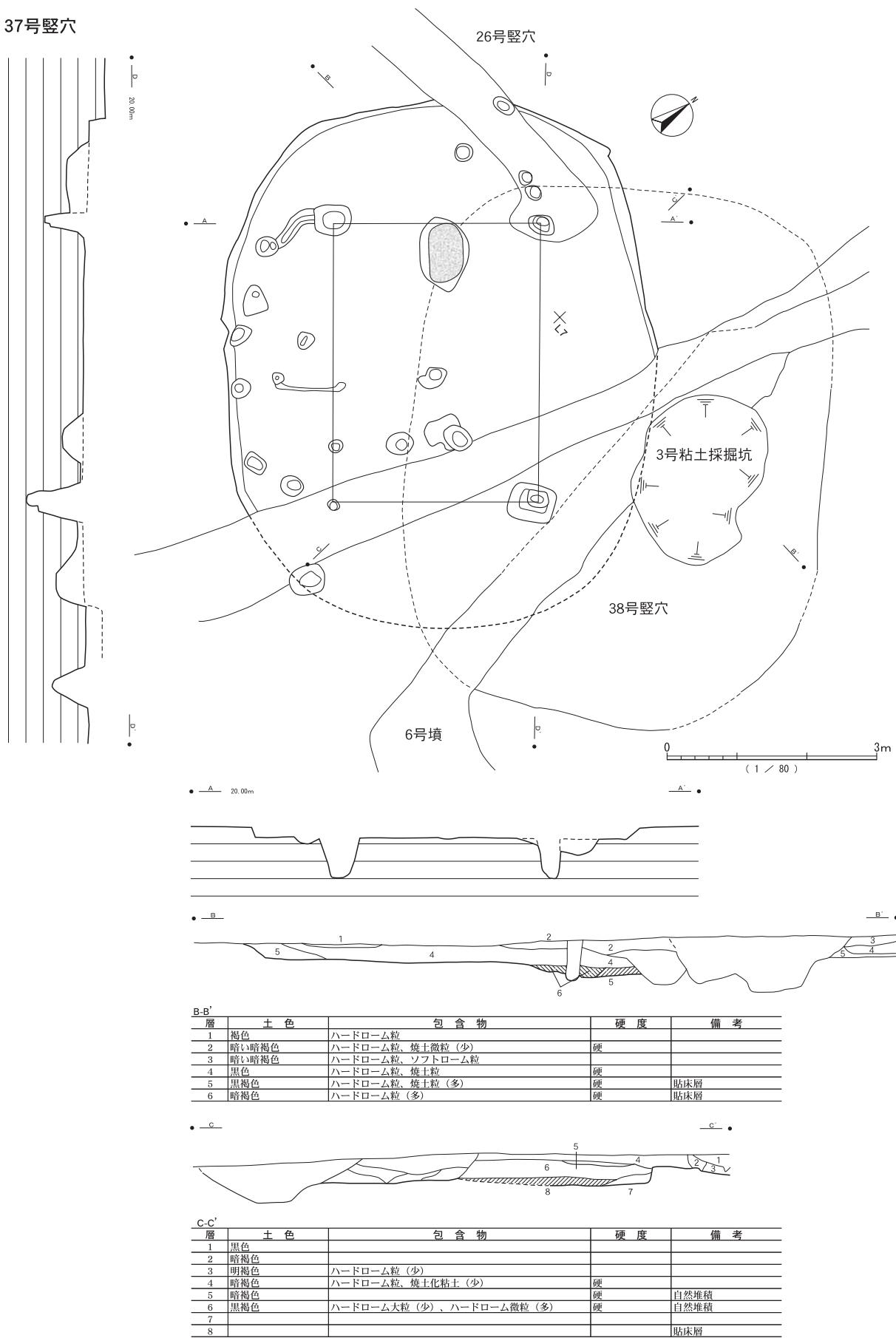
38号竪穴（第85・86図、図版13・78・95）

38号竪穴（住居）は、A地点K7・K8・L7・L8・M7区に所在する。壁面は東辺部側の一部のみ残存する。壁高は最大25cmほど残存している。竪穴中央部は、6号墳周溝が縦断する。また、西側で37号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況によれば本竪穴の方が新しいとみられる。床面のレベルは本竪穴の方が15cmほど高い。炉の東脇に長軸2.5mほどの橢円形の竪穴があり、本竪穴床面を掘り込んでいる。中からは粘土塊が出土していることなどから、現場所見では、粘土採掘坑（3号）と推定されている。なお、東隅部では、別の炉跡が検出されている。さらに重複する竪穴住居跡が存在した可能性がある。

竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所であるが、この他にも小Pitが検出された。竪穴規模は、推定で主軸7.56m×副軸5.92m、主柱穴の柱間は主軸3.47m×副軸3.12mを測り、掘形面積は推定で40.27m²である。主軸方位は、N - 51° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。壁溝は南東辺部で検出されている。深さは約10cm程度である。床面は貼床状に硬く、踏みしめられていた。

遺構と遺物 竪穴

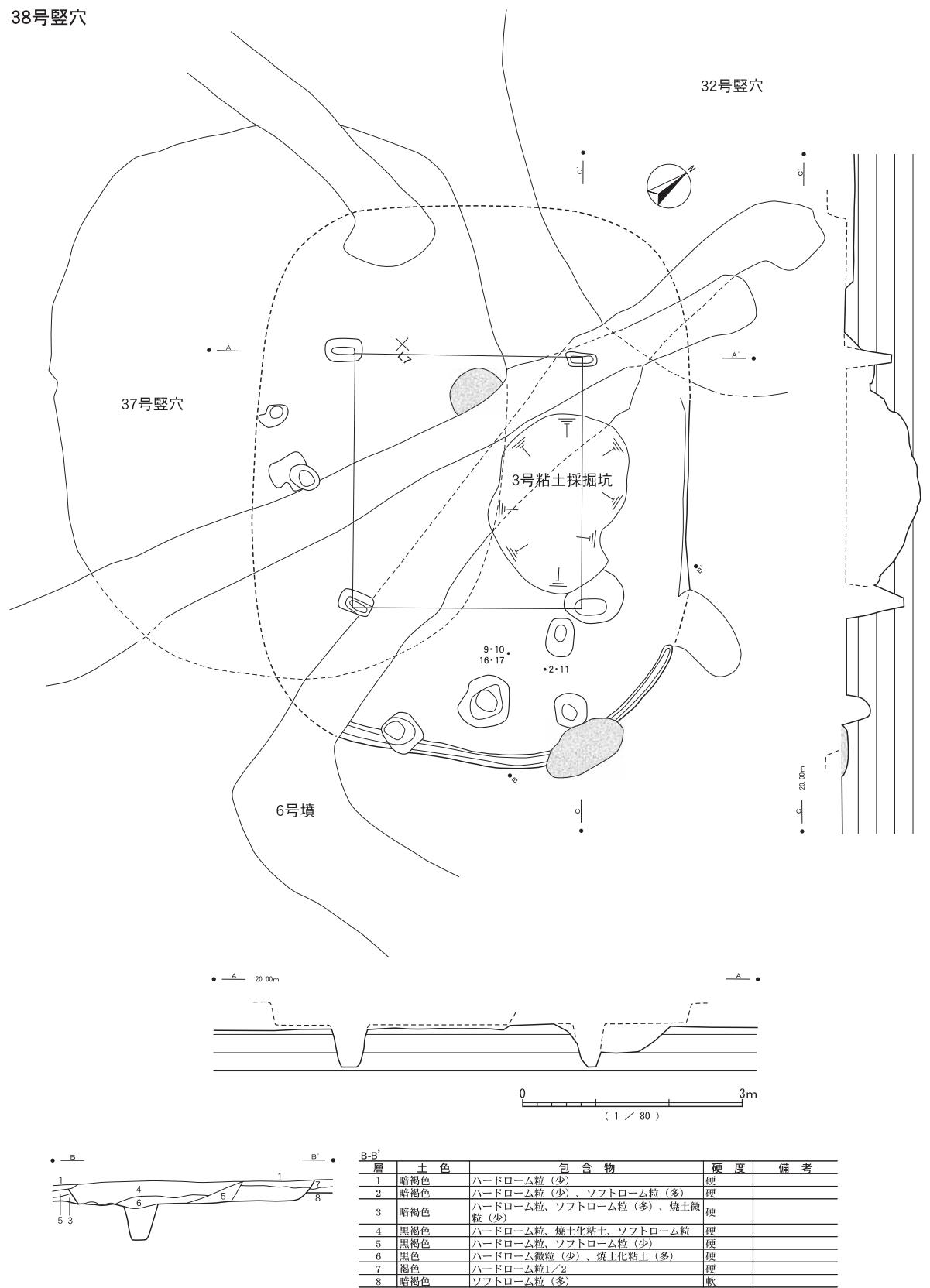
37号竪穴



第84図 37号竪穴(1) 遺構

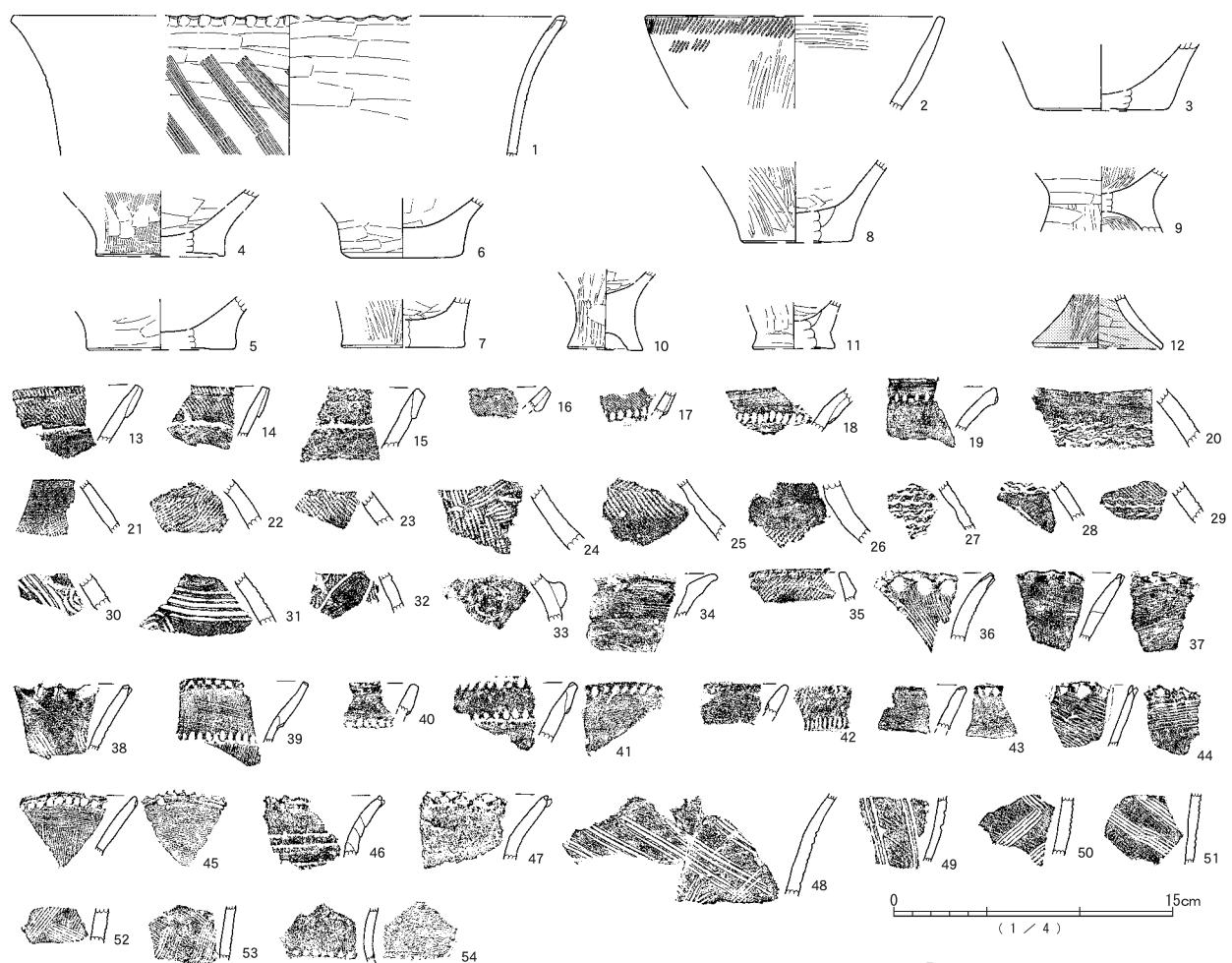
遺構と遺物 竪穴

38号竪穴

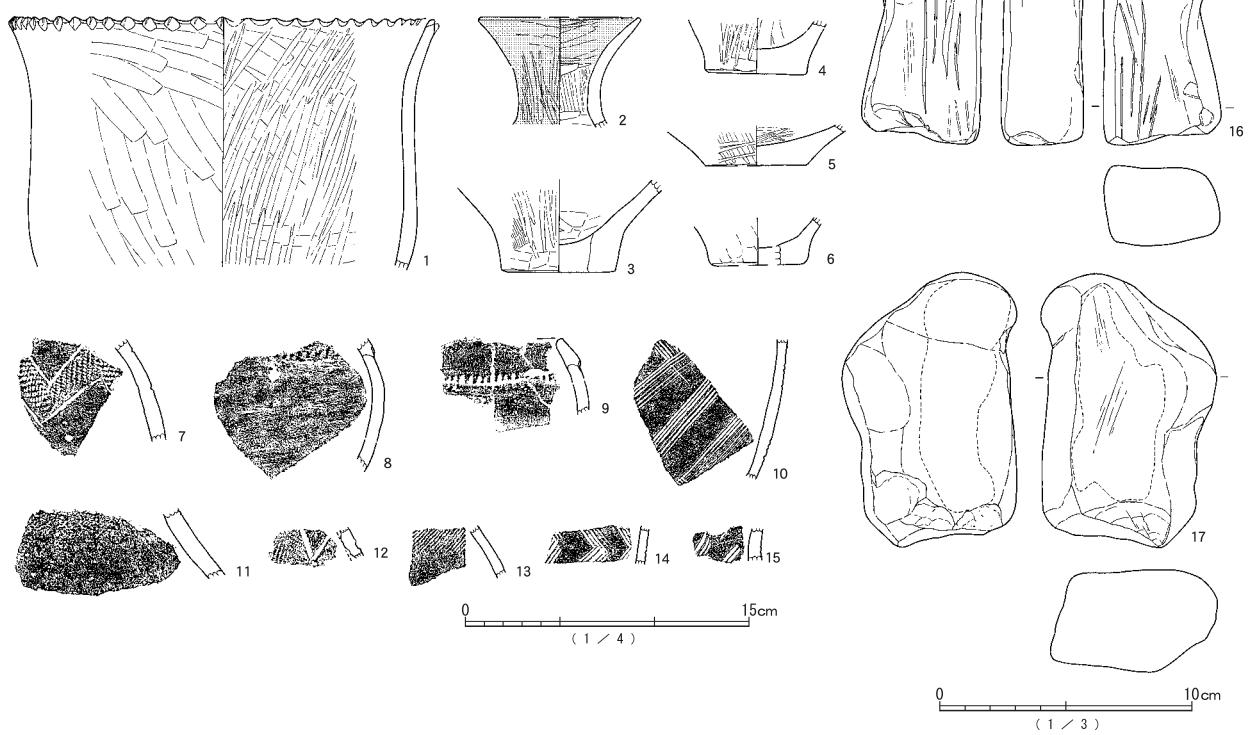


第85図 38号竪穴(1) 遺構

37号竪穴

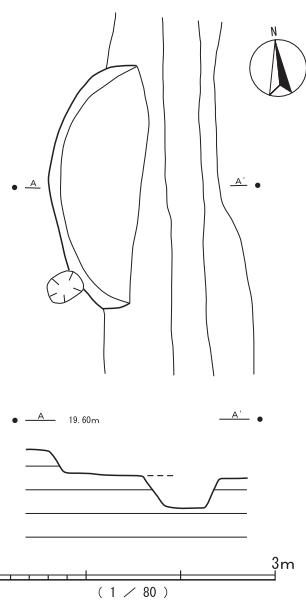


38号竪穴

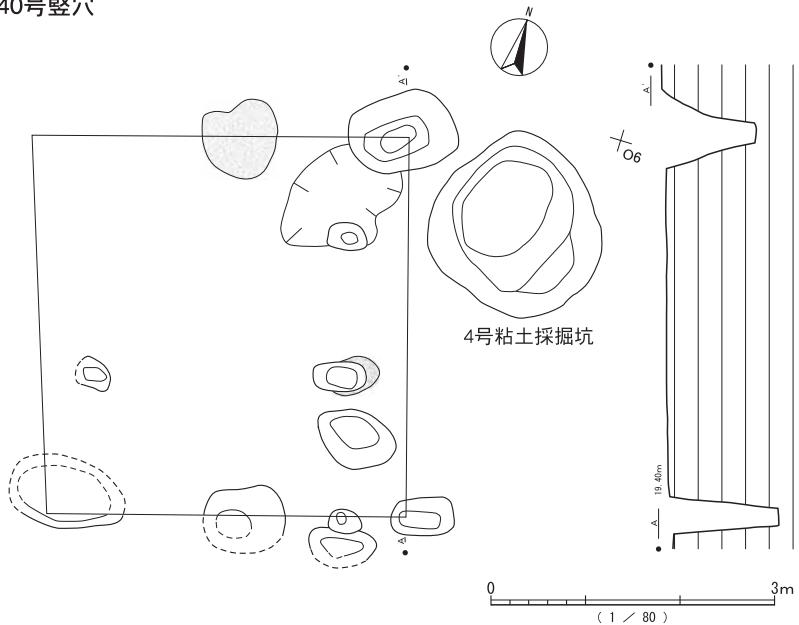


第86図 37号竪穴(2) 遺物、38号竪穴(2) 遺物

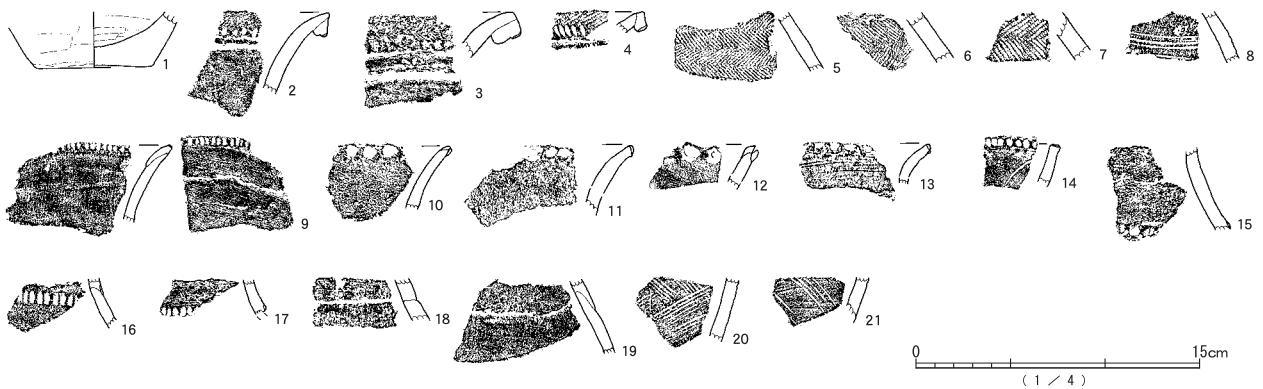
39号竪穴



40号竪穴



40号竪穴



第87図 39号竪穴 遺構、40号竪穴 遺構遺物

出土土器は、1・10・14・15が甕形土器、2・7・11～13が壺形土器、5・8・9が椀形土器である。2・9・10・11・16・17が床面からやや浮いた状態で出土している。出土土器は、宮ノ台式を中心とする。一括の遺存遺物ではないが、7の山形縄文帯、8・9の口縁部有段の椀形土器についても、同時期の可能性がある。16・17は、砂岩製の砥石と推定され、16は、表裏面に深い線条痕を残している。

本竪穴の所属時期は、根田代1期に比定される。

39号竪穴 (第87図、図版14)

39号竪穴は、A地点K6区に所在する。壁面は西側の一部のみ残存する。壁面は高さ最大20cmほど残存している。東側は、南北方向に走る後世の溝によって失われている。竪穴形態は明らかでない。柱穴、炉等も検出されていない。壁際から土器が出土しているが(写真図版14)、整理作業では確認できなかった。したがって、所属時期を明らかにすることはできない。

40号竪穴 (第87図、図版14)

40号竪穴(住居)は、A地点M6・N6区に所在する。遺構実測図が部分的で、詳細を明らかにすることはできない。写真類を参考にすると(写真図版14)、壁面は西辺部が残存し、壁高は約30cmを測る

と推定される。北側は6号墳と、東側は2号墳と重複し、この部分で壁面と床面の一部を失っている。また、中央部付近も南北に走る後世の溝が重複する。東辺部に直径1.7mほどの円形の竪穴があり、本竪穴床面を掘り込んでいる。粘土採掘坑(4号)と推定されている。

竪穴形態は楕円形ないし胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所検出されている。規模は、主柱穴の柱間で主軸4.00m×副軸3.80mを測る。主軸方位はN-28°-Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。

出土遺物はいずれも小破片であり、宮ノ台式、久ヶ原式が混在する。本竪穴の所属時期を決定することはできない。

41号竪穴 (第88・89図、図版14・50・78・79・95・96)

41号竪穴(住居)はA地点L3・L4・M3・M4区に所在する。壁高は北辺部で最大75cmを測り、地形の傾斜により南側へいくほど浅くなる。南辺部は壁面、床の一部が消失している。壁溝は全周し、深さは平均10cmほどである。竪穴形態は隅丸胴張り長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他、炉の北西側を中心に小Pitがある。竪穴平面規模は、主軸推定5.90m×副軸5.17m、主柱穴の柱間は主軸2.64m×副軸2.20mを測り、掘形面積は推定で26.86m²である。主軸方位は、N-39.5°-Wである。炉は、主柱穴内中央部に2箇所あり、1箇所は床面を火床面とする。西側の炉内から54が出土しており、埋設されていた可能性がある。他は、出土状況が明らかではない。

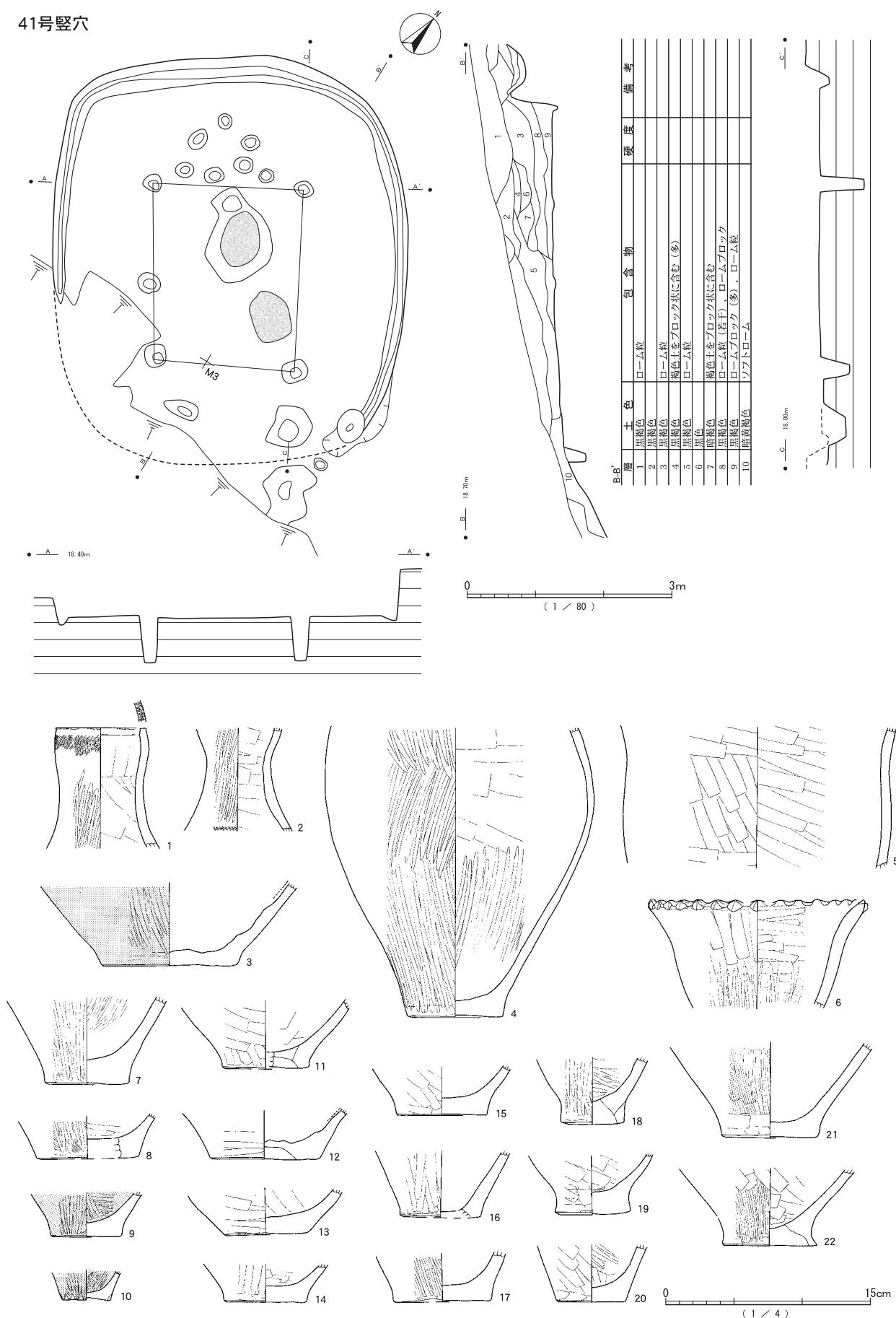
出土土器は、1~4・23~27・29~32・36~64・67が壺形土器、5・70~89が甕形土器、7・9・10・68・69が鉢形土器、28が広口壺形土器、33~35が椀ないし高杯形土器である。竪穴伴出土器は、炉内出土の54および同一個体と推定される52・53・57である。52~54・57は、回転結節文による横帯文、結紐文によって構成される。41~44の横帯縄文沈線区画のうち、少なくとも羽状縄文のものは29~32の複合口縁壺形土器と対応する可能性が高い。これらをのぞく45~51・60の横帯縄文は、無区画単斜縄文を基本とする。60・64・68・69は、半裁竹管による刺突列をもつ。61~63は、単位不明の束線具による平行線文を充填し、竹管による刺突列、無文帯による縦区画によって分割される。施文部下端は有段となり、段部にヘラ先等による刺突が加えられる。壺形土器口縁部には、1・24・25・27など内向ないし受け口状口縁になるものと、23・37・38など段部をもつものがある。甕形土器では、81・85が口縁部内面に段部をもつ。88・89は頸部に押捺列を巡らすが、段部をつくらない。90は、沈線区画の壺形土器片を利用した円盤である。91は加工礫であり、握り部分を作り出している可能性がある。両端部に研磨、敲打痕をもつ。

本竪穴の所属時期は、根田代1期である。

42A・B号竪穴 (第90・92図、図版14・96)

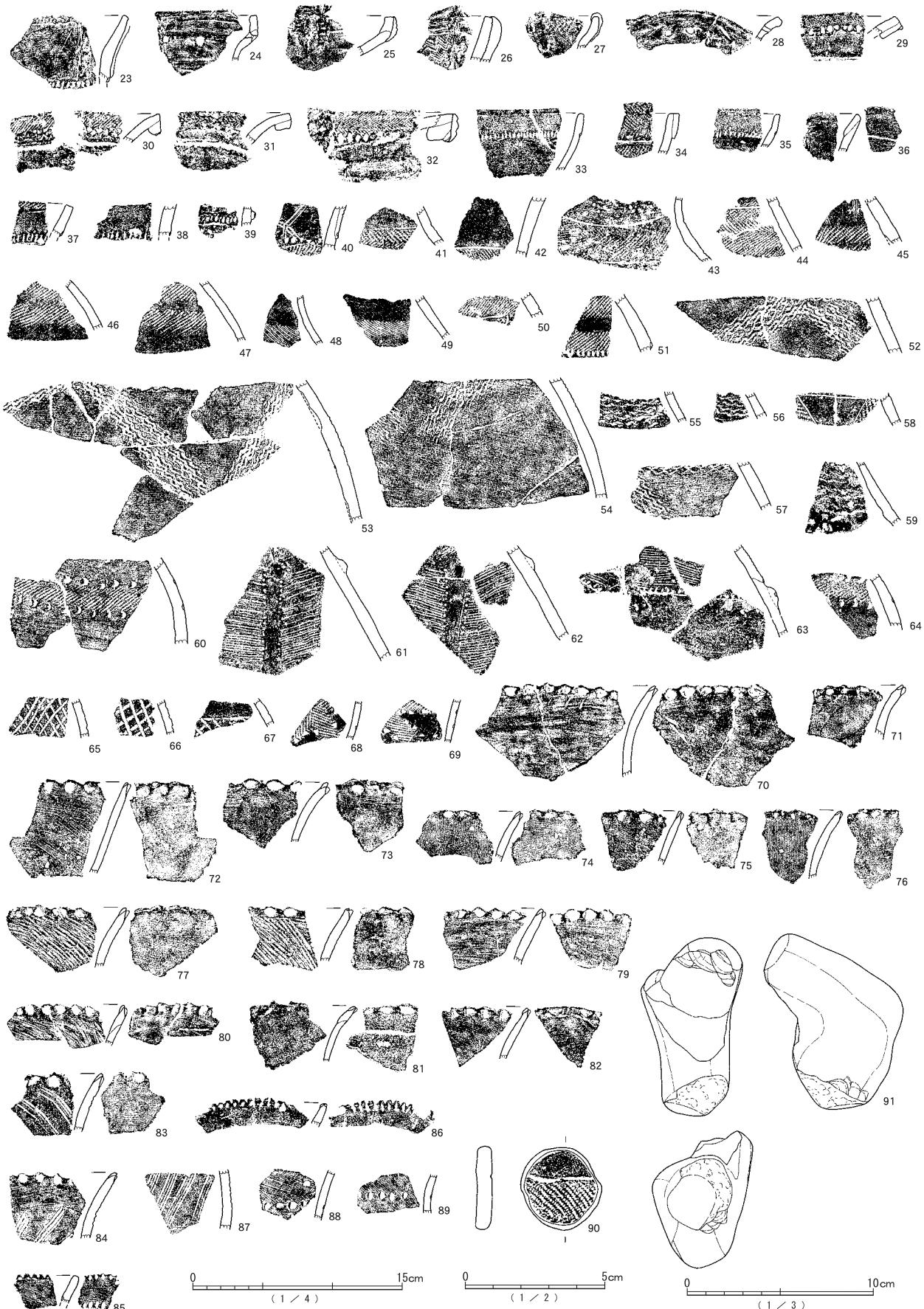
42A・B号竪穴(住居)は、A地点M4・N3・N4・O4区に所在する。壁面は、西辺、北辺の一部のみ残存するが、掘り込みは10cmほどと浅い。東側は2号墳周溝により、北側も東西に走る後世の溝により壁面が失われている。また、南西部で43号竪穴と重複する。床面のレベルは本竪穴(B号)の方が10cm程度高く、43号竪穴土層断面B-B'を参照するならば、本竪穴が古い。本竪穴は、主軸を同一にするものが最低2軒分あることが壁面と柱穴の存在から明らかとなった。東側をA号、西側に偏するものをB号と呼称する。いずれも竪穴形態は楕円形ないし胴張り隅丸長方形を呈するとみられる。竪穴平面規模は、A号が推定で主軸6.25m×副軸5.50m、主柱穴の柱間は主軸3.22m×副軸2.48m、

41号竪穴



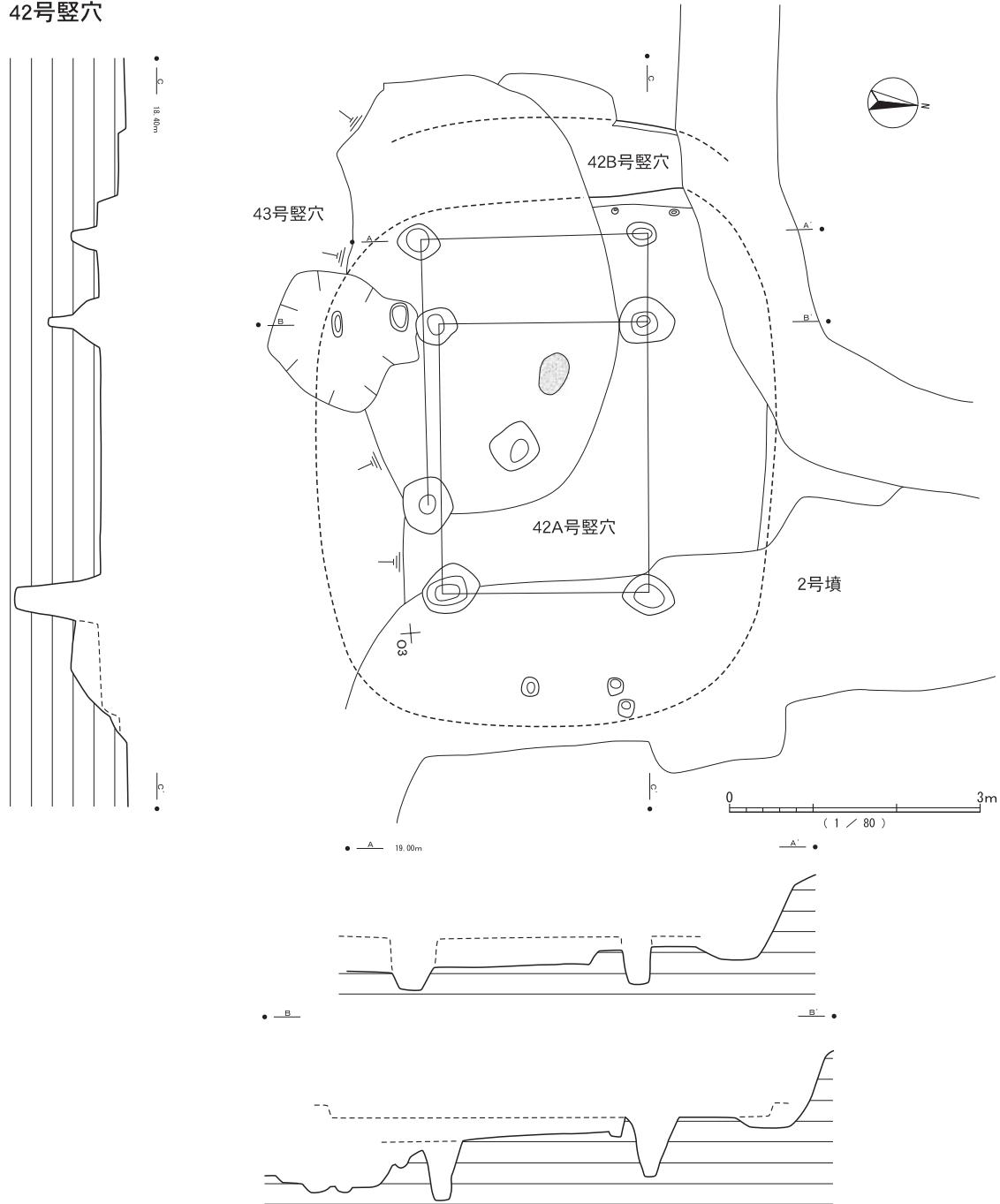
第88図 41号竪穴(1) 遺構遺物

41号壺穴



第89図 41号壺穴(2) 遺物

42号竪穴



第90図 42号竪穴(1) 遺構

掘形面積は推定で 30.96 m^2 を測る。主軸方位は、N - 98° - Wである。B号は、主柱穴の柱間で主軸 $3.18\text{ m} \times$ 副軸 2.70 m を測る。A・B号の新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルがA号の方が 10 cm ほど低い。主柱穴はそれぞれ4箇所あったとみられるが、B号の南東主柱穴は未検出である。炉は、A号に対応すると想定される火床面が43号竪穴床面で検出された。床面はソフトローム上に形成される。A・B号はほぼ同規模と推定され、東西方向にずれてつくられている。床面レベルも異なり、建て替えによるものとは考えにくい。

遺物は、重複する43号竪穴を含め一括で取り上げられており、A・B号の区別も明らかではない。1・2・5・24～34は甕形土器、3が椀形土器、4・13～23が壺形土器、8が台付甕形土器、9・12が鉢

形土器である。1は、横方向のヘラナデのち櫛(4本)による横走羽状文をもつ。2は、口縁端部に布ないしは縄文原体等による押捺、頸部に粘土紐積み上げ痕を2段残す。3は口縁部有段の椀形土器であり、RL単節縄文と櫛描波状文が施される。波状文は上下に基点をもつコンパス文状となる。14・16・20・21・23は壺形土器横帯縄文であるが、14・16・20が羽状縄文であるのに対して、21は単斜縄文2段、23は附加条3種が施される。

出土土器は、おおむね久ヶ原1式を下限とする。本竪穴および43号竪穴の所属時期を示唆する可能性もあるが、竪穴ごとに特定することはできない。

本竪穴の所属時期について、A号は、柱筋に対する炉位置から判断するならば、根田代1期と推定される。

43号竪穴 (第91・92図、図版14・96)

43号竪穴(住居)は、A地点M3・M4・N3・N4区に所在する。壁面は北側のみ残存し、壁高は20cm程度である。南側は斜面地形のため失われている。竪穴形態は胴張り隅丸方形を呈するものとみられ、主柱穴は4箇所ある。竪穴規模は、主軸5.20m×副軸推定5.97m、主柱穴の柱間は主軸2.54m×副軸2.54mを測り、掘形面積は推定で27.51m²である。主軸方位は、N-106°-Wである。炉は確認されていない。北東隅部を中心に深さ7cmほどの壁溝が検出されている。床面はソフトローム上に形成される。北側で42号竪穴と重複するが、本竪穴の方が新しいとみられる。

遺物は、前述のとおり重複する42号竪穴と一緒に取り上げられており、帰属は明らかではない。

本竪穴の所属時期は、出土土器の中で最も新しい久ヶ原1式を取り上げ、根田代2期に推定しておく。

44号竪穴 (第92図、図版14)

44号竪穴(住居)は、A地点O4区、2号墳墳丘部内に所在する。壁面は、斜面側にあたる南側以外は残存する。壁高は最大約65cmを測る。竪穴形態は胴張り隅丸方形を呈し、主柱穴はないが、南側に3箇所のPitが不規則に並ぶ。竪穴規模は、主軸推定2.98m×副軸3.25mを測り、掘形面積は推定で8.57m²である。主軸方位は、N-17.5°-Wである。炉は北寄りに1箇所、その西側にも火床面が認められた。壁溝は検出されていない。

出土土器は、1~3・6~9・15が壺形土器、10~14が甕形土器である。1は、口縁端部を拡張し、頸部に断面三角形の凸帯を巡らす。6~9は壺形土器胴部帶縄文であり、いずれも無区画で、6~8は羽状縄文である。

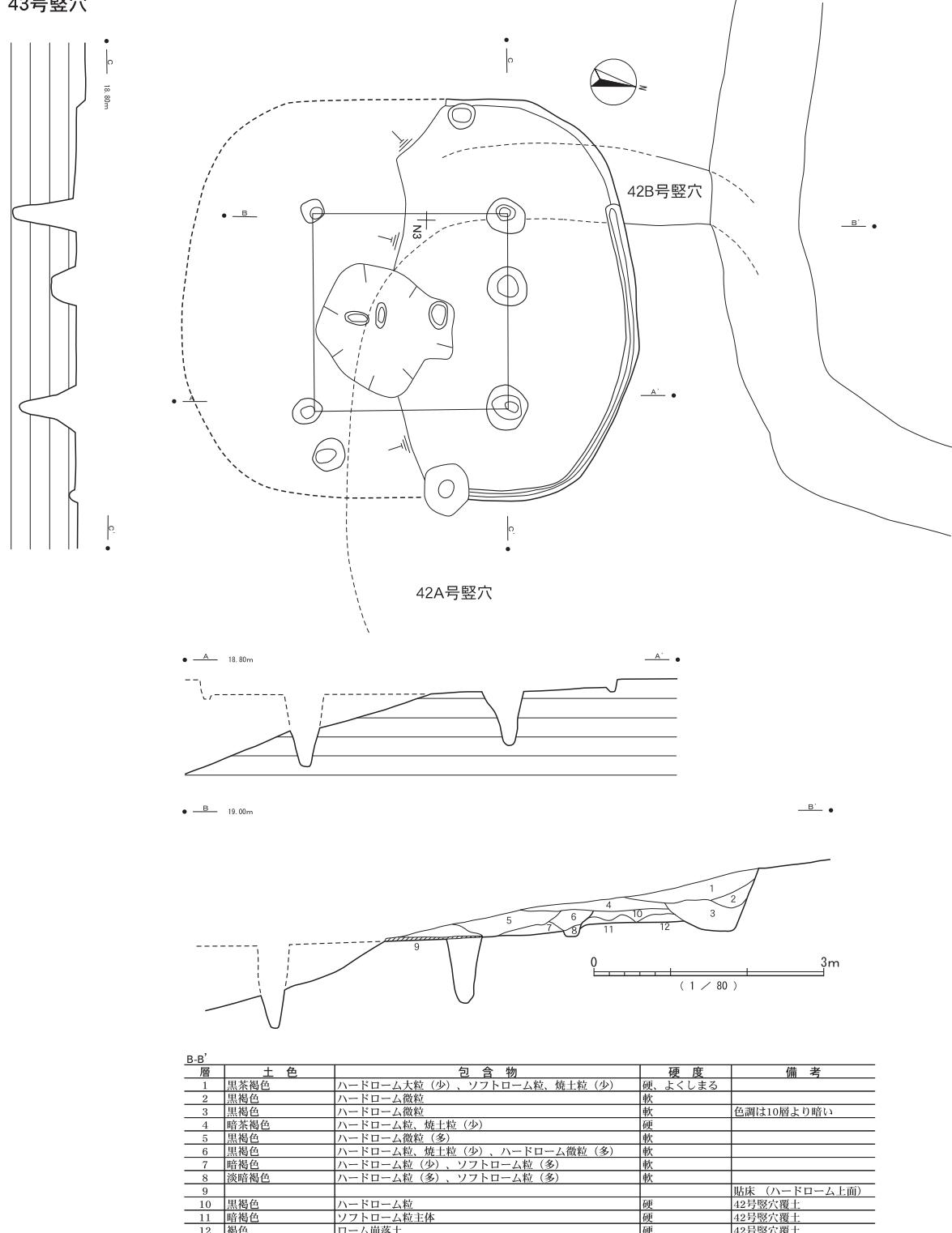
出土土器はいずれも小破片で、出土状況は明らかではないが、出土土器から本竪穴の所属時期を判断するならば、根田代1期と考えられる。

45号竪穴 (第93図、図版14・50・78・96)

45号竪穴(住居)は、A地点O9・O10区、3号墳内に所在する。壁面は南辺部のみ遺存し、壁高は約20cmを測る。西側は3号墳周溝、北側は1号道路により破壊されている。竪穴形態は明らかではない。主柱穴も不明。不規則に並ぶ小Pitがあり、3号墳の周溝底面や後世の溝底面にも同様のPitが認められるが、本竪穴にともなうものかどうか明確ではないため図示していない(写真図版14)。

遺物は、床面直上より4が、床面やや上より7が出土している。出土土器は、1・2・9・10が甕形土器、3・8が壺形土器、4が椀形土器、5が高杯形土器である。1は、胴部有段の甕形土器であり、最大径位置を胴部にもつ。3は、複合口縁の壺形土器であり、複合部は上下に拡張される。横帯縄文区画

43号竪穴



第91図 43号竪穴(1) 遺構

は4の椀形土器とともに別原体の回転結節文による。11は、砂岩製の砥石であり、線条痕は明瞭ではないが、側3面に研磨痕を残す。

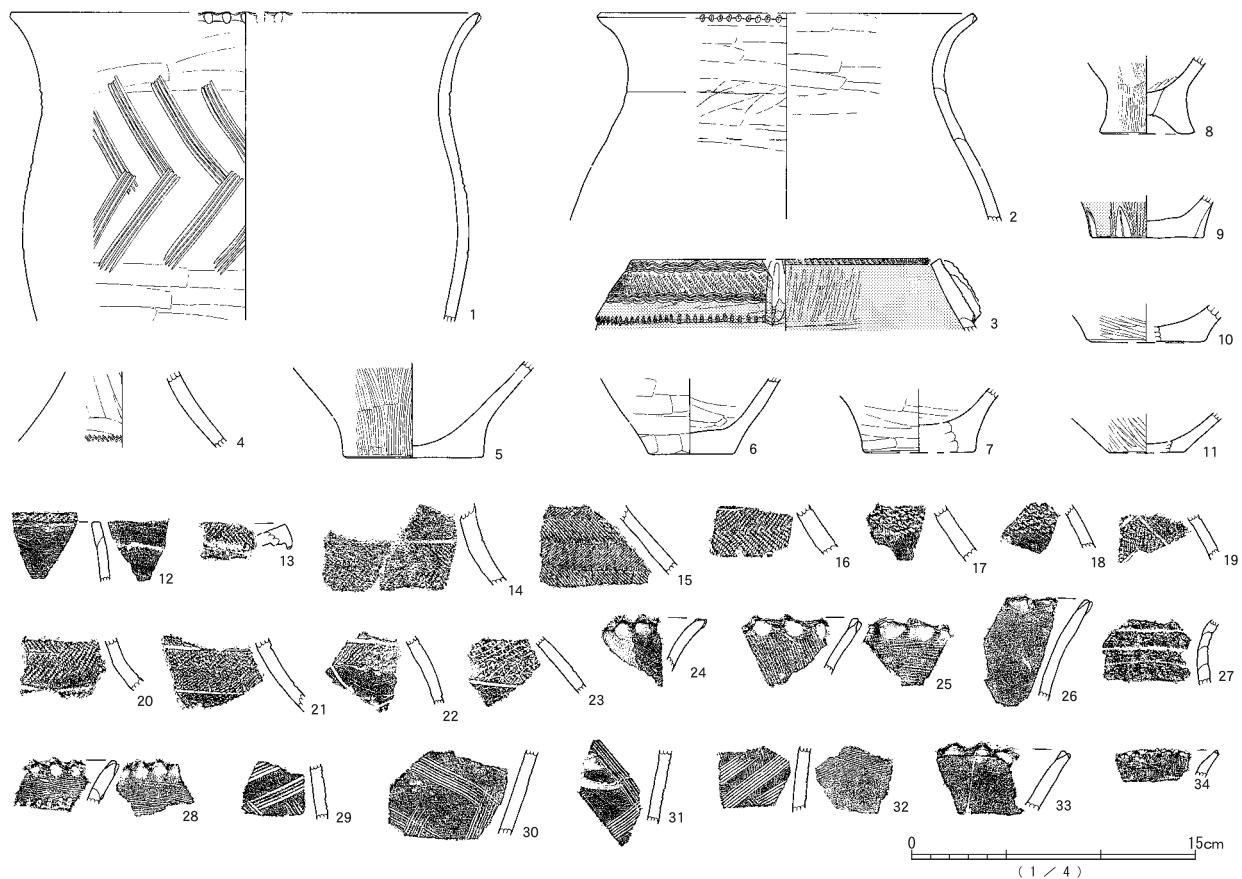
本竪穴の所属時期は、山田橋2式期、根田代5期と考えられる。

46号竪穴 (第94図、図版14・96)

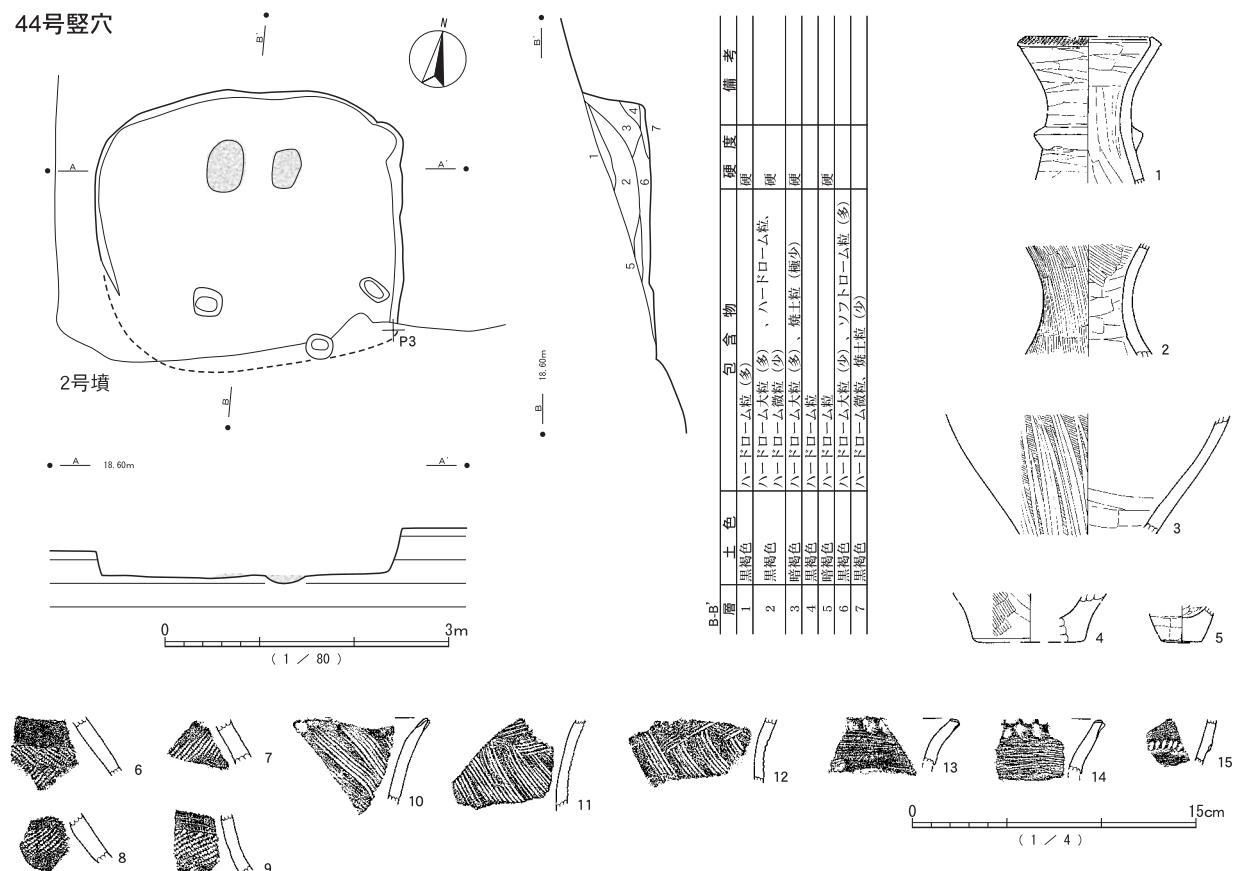
46号竪穴(住居)は、A地点O9区、3号墳墳丘部内に所在する。壁面は北側と南側の一部のみ残存する。

遺構と遺物 壇穴

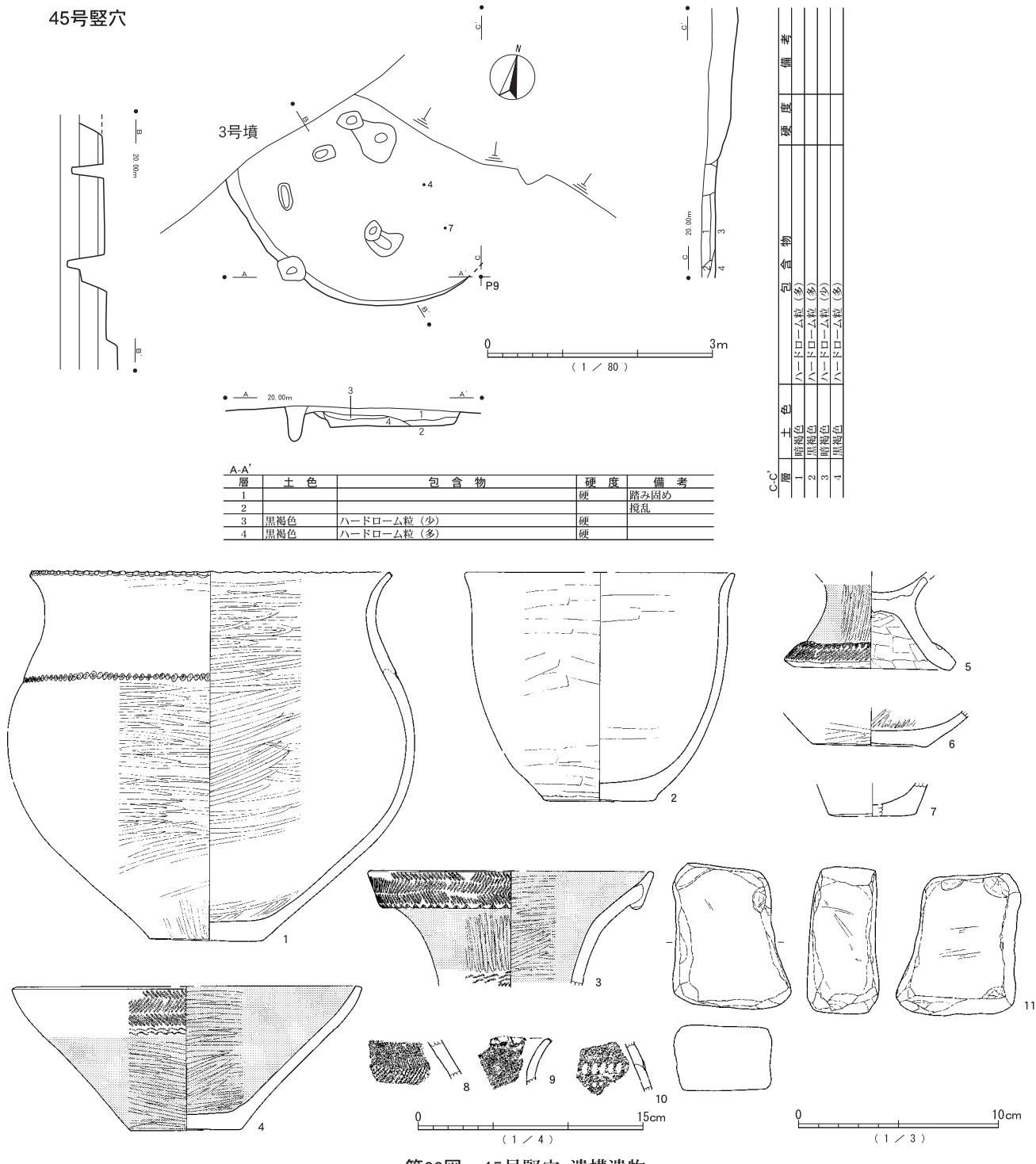
42・43号壇穴



44号壇穴



第92図 42号壇穴(2) 遺物、43号壇穴(2) 遺物、44号壇穴 遺構遺物



壁高は最大で20cmほどである。西側で36号竪穴と、東側で47・48号竪穴と重複する。36号竪穴の床面レベルは本竪穴より20cmほど低く、遺構検出状況から本竪穴を掘り込んでいることが明らかである。また、47号竪穴の床面レベルも本竪穴より20cmほど低く、47号竪穴の覆土中に本竪穴の床面がつくられている。したがって、遺構検出状況からみるこれら竪穴住居の新旧関係は、古い方から47 46 36号竪穴の順となる。竪穴形態は、胴張り隅丸方形を呈するが、主柱穴は検出されていない。竪穴規模は、主軸推定3.78m×副軸3.52mを測る。掘形面積は推定で11.96m²である。主軸方位は、

N - 48° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。床は、全体的に硬く踏みしめられ平滑である。出土土器は、1・10・11が壺形土器、5～9が甕形土器である。出土状況はいずれも明らかではない。本竪穴の所属時期は、根田代1期と考えられる。

47号竪穴 (第94～97図、図版15・51・78・96・97)

47号竪穴(住居)は、A地点O8・O9・P8・P9区、3号墳墳丘部内に所在する。壁面はすべて残存し、壁高は最大で約45cmを測る。48号竪穴内にあり、西側で46号竪穴と重複する。46号竪穴の床面レベルは本竪穴より20cmほど高く、本竪穴の覆土上に床面を形成していることが明らかとなっている。また、48号竪穴の床面レベルは、本竪穴より20cmほど高く、本竪穴が48号竪穴の床面を掘り込んでいる。したがって、これらの竪穴住居跡の新旧関係は、古い方から48号 47号 46号の順となる。竪穴形態は隅丸方形を呈する。主柱穴は検出されていないが、東側壁際に小Pitが不規則に並ぶ。竪穴規模は、主軸4.18m × 副軸3.62mを測る。掘形面積は15.73m²である。主軸方位はN - 92° - Wである。炉は西寄りに2箇所認められた。壁溝は全周し、深さは最大14cmを測る。

遺物は、西壁付近床面直上から11、炉付近床面上約10cmから6・7・9・10・12、床面上5cmから30が、東壁付近床面上約10cmから23が出土している。他に、14・18・19・21・22・27・29・36がやはり床面上10cm程度から出土している。これらは、基本的に投棄によるものと考えられる。土器群とともに、貝ブロックも検出されている。

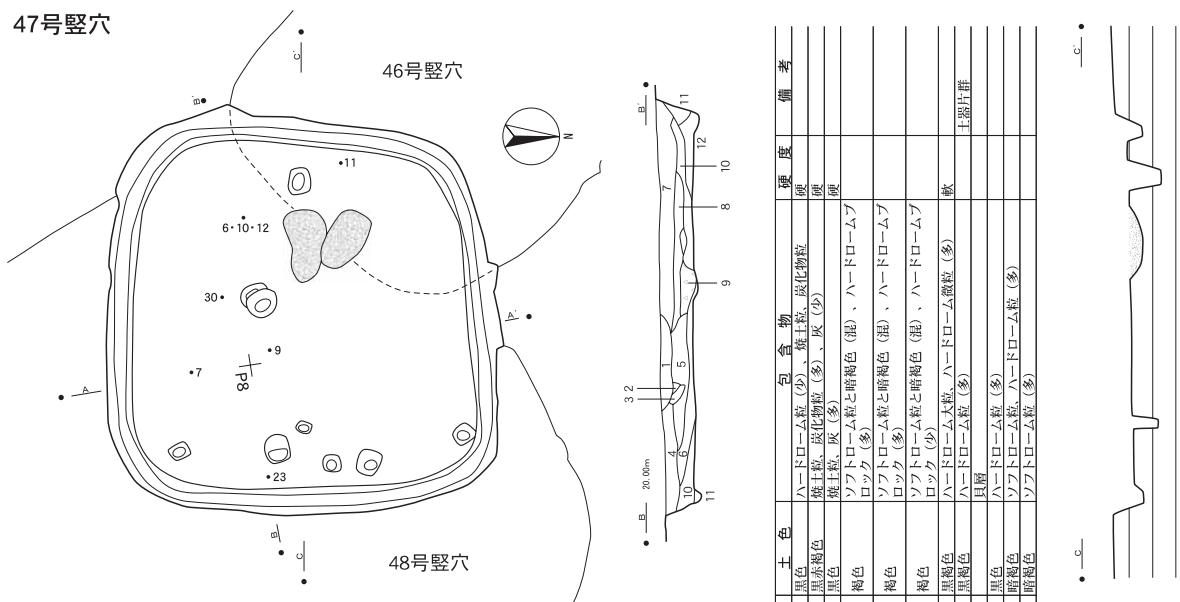
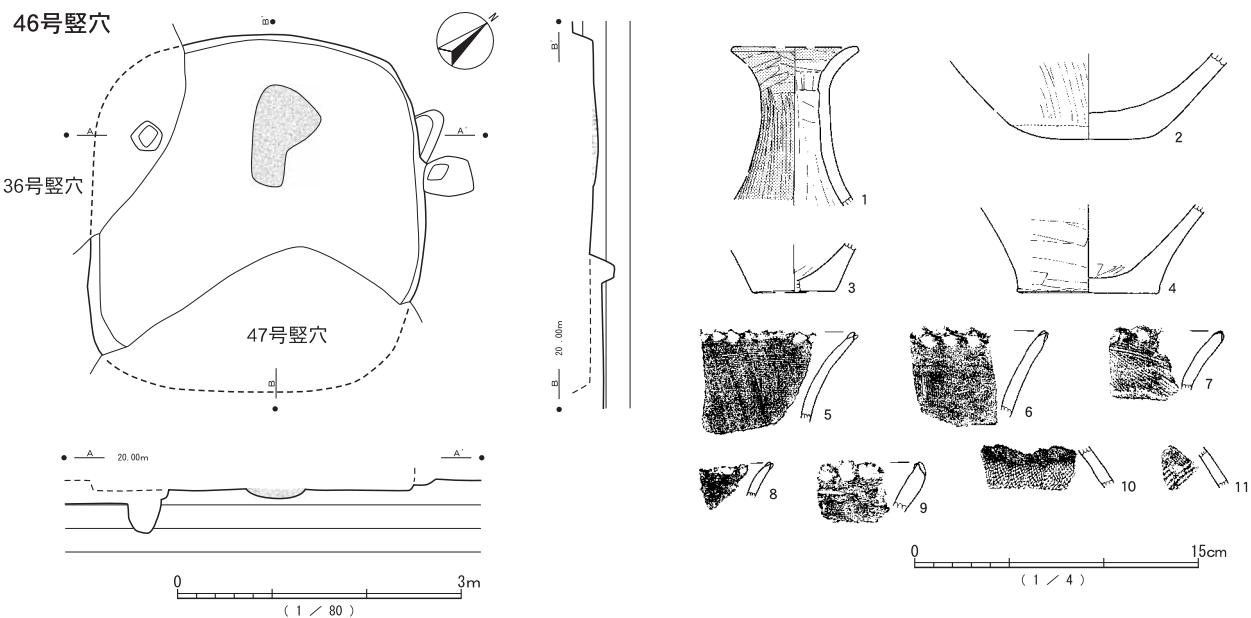
出土土器は、1～12・22・23・27・78～114・116～133が甕形土器、13～15・33・34・36・41～48・50～54・56～76が壺形土器、17・38が高杯形土器、18・37が椀形土器、16が椀ないし高杯形土器、49・55が鉢形土器である。基本的に宮ノ台式を主体とする。甕形土器のうち、5・112～114は、口縁部外面が有段となり、口縁端部に棒状工具ないし布目圧痕をともなう押捺が加えられる。106・107・111は口縁部内面側に段部をもつ。頸部ないし胴上半部が有段となる131～133も、段部押捺はハケ工具ないしヘラ先等によるものであり、宮ノ台式段階と推定される。口縁端部が施文される51～54は、広口壺形土器ないし鉢形土器であろうか。壺形土器頸胴部文様帶は、無区画の単節斜縄文、回転結節文が目立つ。14は、横帯縄文下に櫛描連弧文を重ねる。63・68は単節縄文様の擬縄文、53の口縁端部は、ハケ工具等の刺突による擬縄文と推定される。115は砂岩製の加工礫であり、両端に敲打痕、側1面に研磨痕が認められる。

本竪穴の所属時期は、根田代1期と考えられる。

48A・B号竪穴 (第97・98図、図版15・51・97)

48A・B号竪穴(住居)は、A地点O8・P8・P9区に所在する。3号墳墳丘部内にあり、46・47・49・50号竪穴と重複する。壁面は、北西隅部および南西隅の一部が47号・50号竪穴と重複するため失われている。本竪穴は、壁溝、主柱穴の重複から最低2軒分存在する。内側に位置するものをA号、外側に拡張されたものをB号として区分する。床レベルもほぼ同一であり、同位置での建て替えによると推定される。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、竪穴規模は、A号が主軸6.66m × 副軸5.48m、主柱穴の柱間は主軸3.04m × 副軸3.00mを測り、掘形面積は推定で32.0m²である。主軸方位は、N - 36.5° - Wである。B号は、主軸6.88m × 副軸6.48mを測り、主軸方位はほぼ同一である。壁面は南東部で共有される。壁面の高さは東側で最大20cmほどである。壁溝はほぼ全周し、深さは最大で約10cm程度である。主柱穴は4箇所であり、A・B号に対応する重複が認められるが、ほぼ同位置に埋

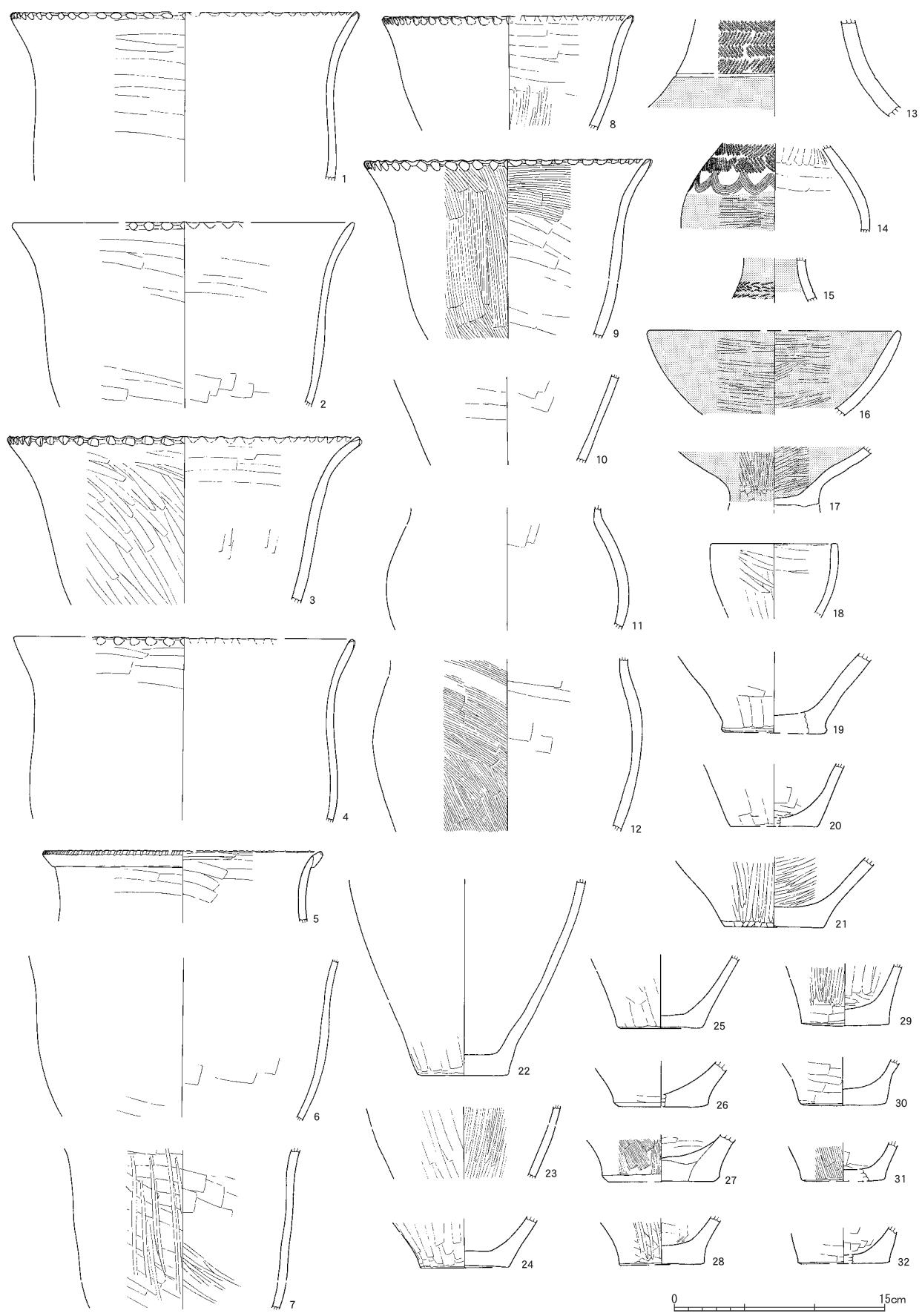
遺構と遺物 竪穴



層	土色	包含物	硬度	備考
1	暗茶褐色	ハードローム粒、焼土粒、灰粒	硬	局部的に貝層
2	暗茶褐色	ハードローム、焼土、灰粒、焼土化粘土、ソフトローム粒	硬	
3		貝層		
4		灰混じり貝層		
5	明るい暗茶褐色	ハードローム粒、焼土化粘土(少)	硬	
6	暗茶褐色			5層に類する
7	褐色			
8	褐色	ハードローム粒(多)、ハードロームブロック塊(多)	硬	
9	褐色	ハードロームブロック(多)、貝、灰粒	硬	
10		貝層		
11	灰層			
12	暗褐色	ハードローム粒、ハードローム粒(多)	硬	
13	褐色	ハードローム塊、ハードローム大粒(多)	硬	
14	褐色	ハードロームブロック集合体		
15	暗褐色	ハードローム大粒(多)	硬	
16	明褐色	ソフトローム粒、ソフトロームブロック	軟	
17	暗褐色	ハードローム粒(多)、焼土粒(少)	軟	
18	暗褐色	ハードローム微粒	硬	
19	暗褐色	ハードローム塊、ハードローム粒	硬	
20	黒褐色	ハードローム微粒(少)	軟	

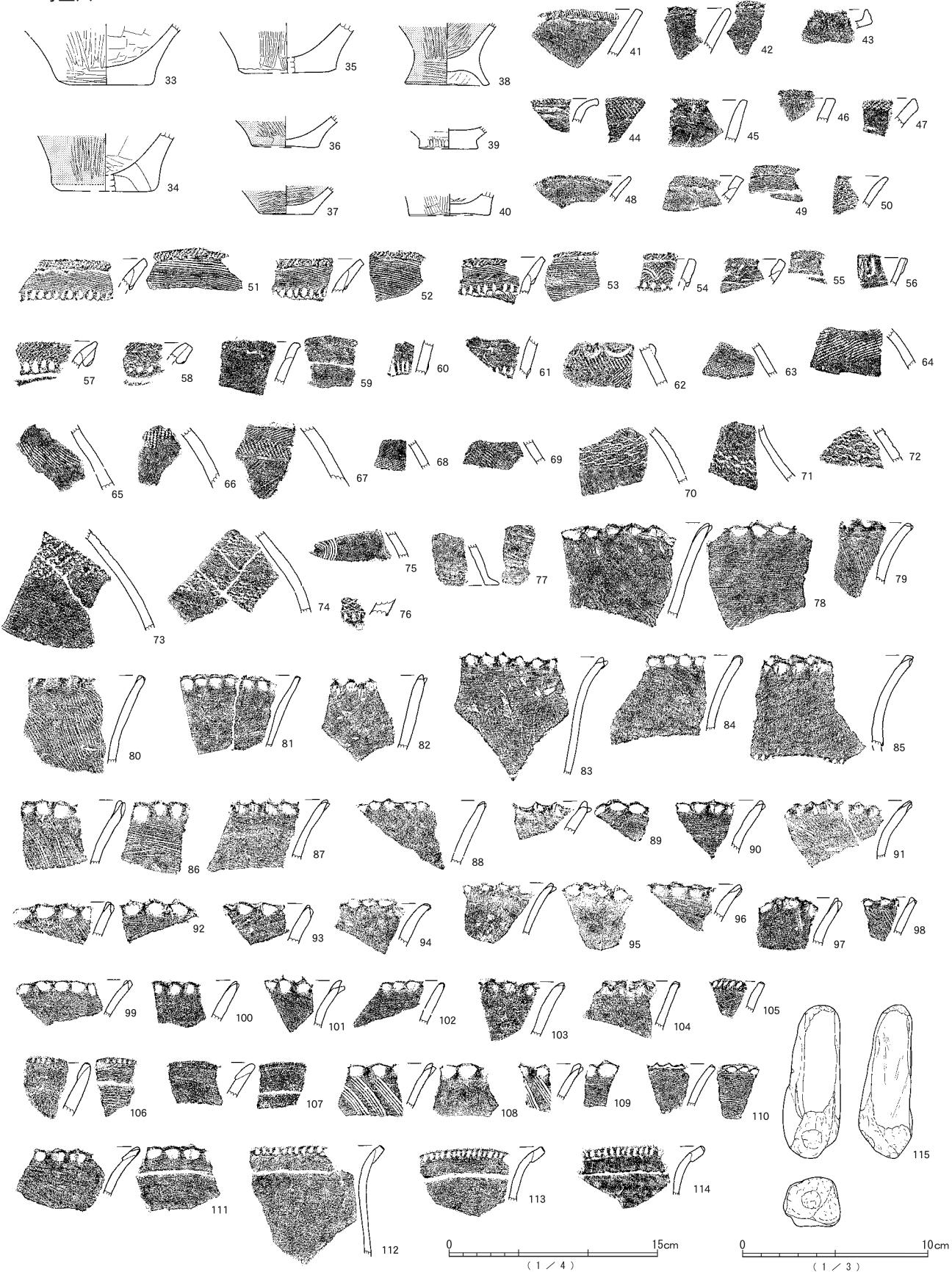
第94図 46号竪穴 遺構遺物、47号竪穴(1) 遺構

47号竪穴



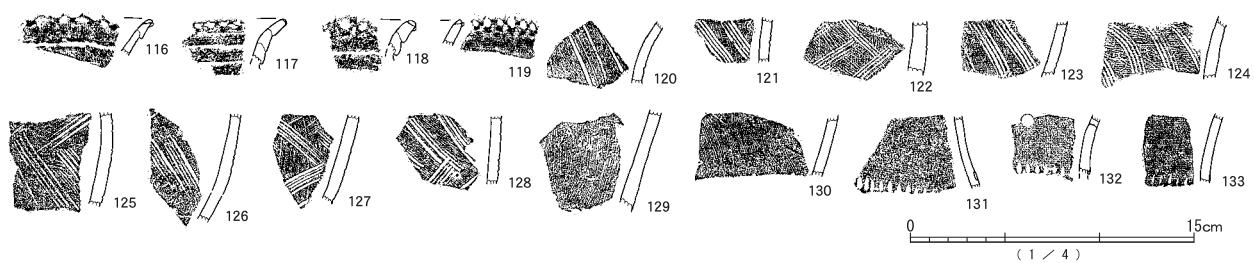
第95図 47号竪穴(2) 遺物

47号竪穴

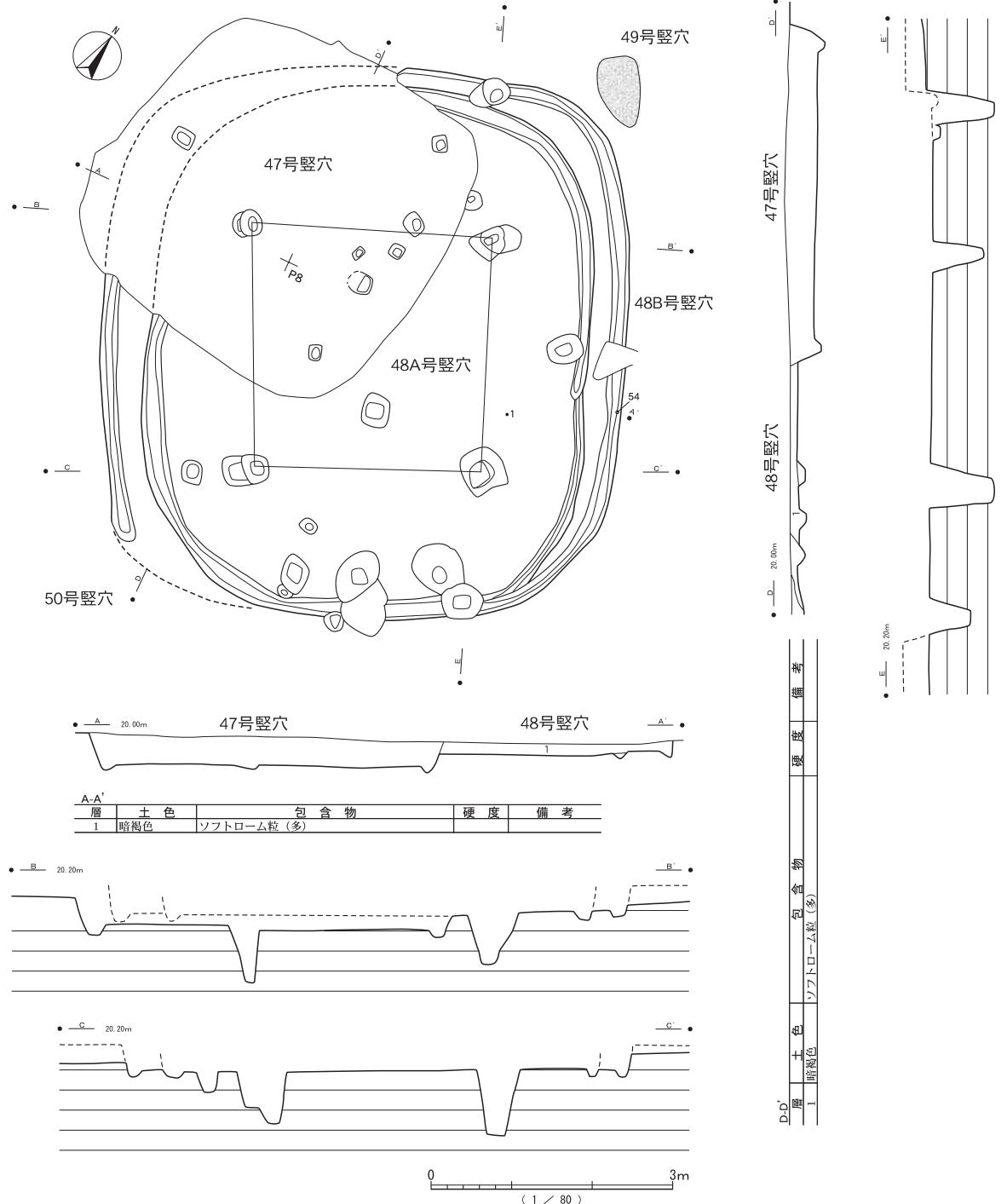


第96図 47号竪穴(3) 遺物

47号竪穴

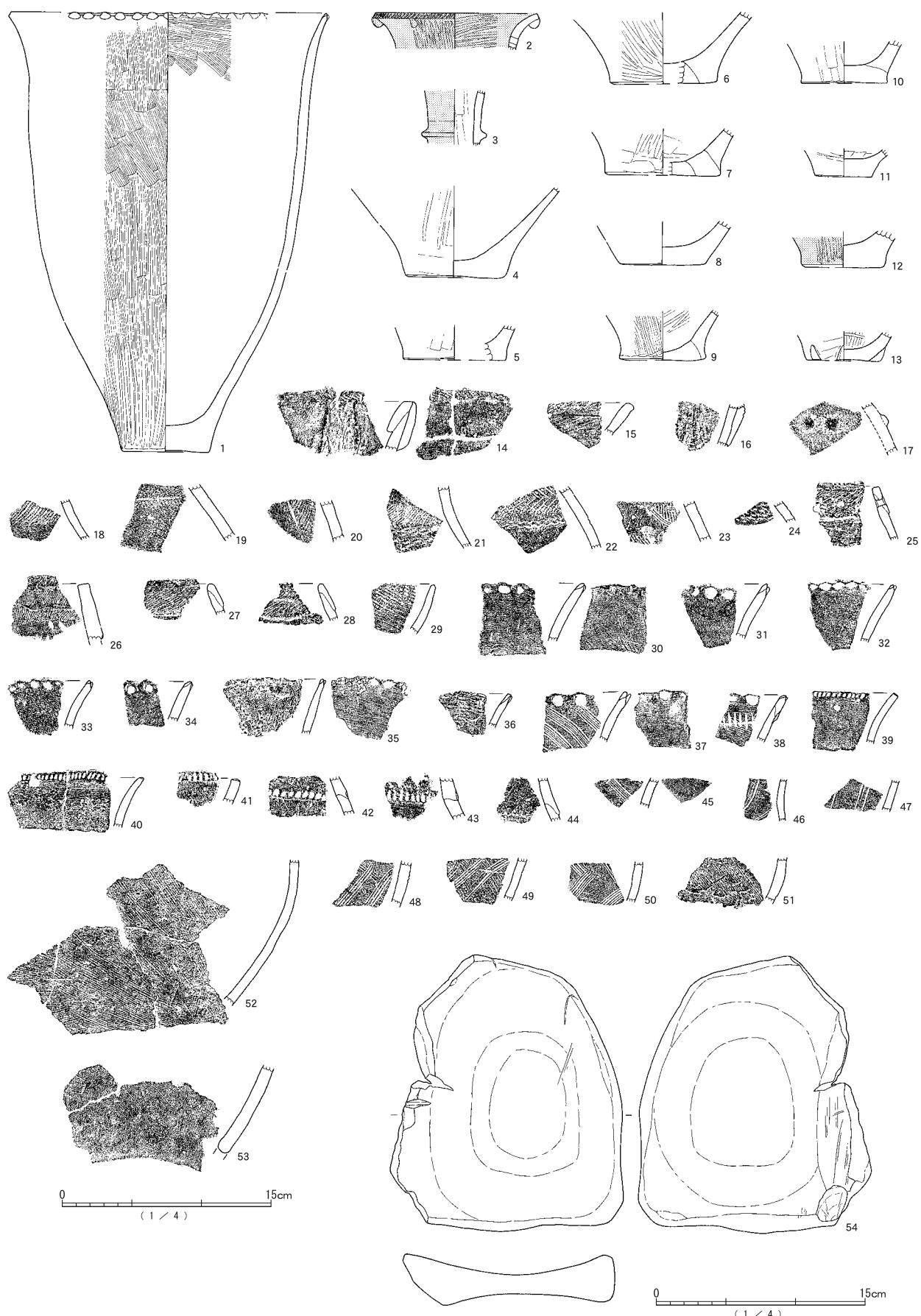


48・49号竪穴



第97図 47号竪穴(4) 遺物、48号竪穴(1) 遺構、49号竪穴(1) 遺構

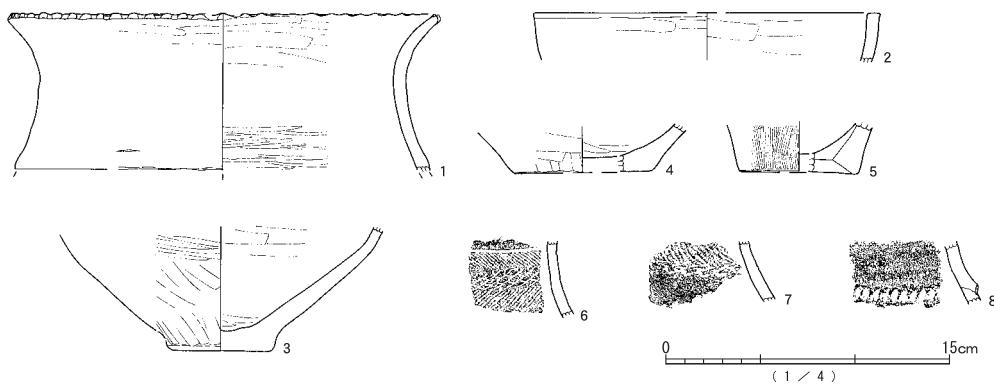
48号竪穴



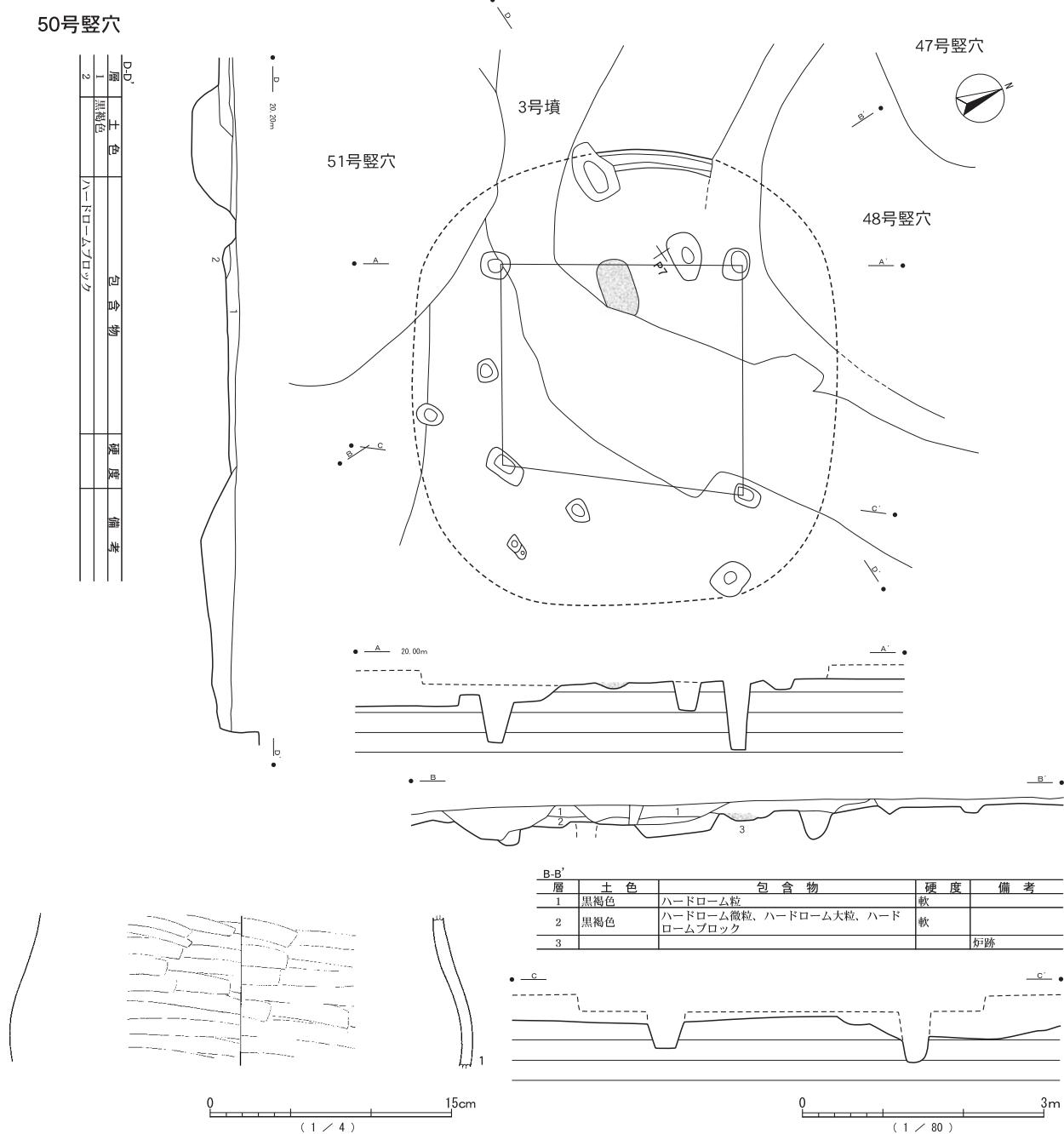
第98図 48号竪穴(2) 遺物

遺構と遺物 竪穴

49号豎穴



50号豎穴



第99図 49号竪穴(2) 遺物、50号竪穴 遺構遺物

設される。この他小Pitがいくつかみられる。床面は全体的に硬く踏みしめられるが、細かい凹凸がある。

北西側隅部で47号竪穴と重複するが、床面のレベルは本竪穴の方が20cmほど高く、遺構検出状況では47号竪穴が本竪穴を掘り込んでいることが明らかとなっている。本竪穴の炉はこの部分で失われている。49・50号竪穴との新旧関係については、遺構検出状況からは明らかでない。なお、46号竪穴との新旧は、47号竪穴との関係から、本竪穴が最も古いと推定される。

出土遺物は、床面直上より1の甕が、東側壁際より55の台石が出土している。出土土器は、1・30～38・42～53が甕形土器、2・3・14～24が壺形土器、13が鉢形土器、25～29が椀ないし高杯形土器である。宮ノ台式を主体とする。21の壺形土器横帯縄文は上部無区画のLR単節縄文および結節文から構成される。22は、付加条1種、附加条3種、別原体結節文の組み合わせと推定される。25・27・28の椀形土器段部施文も、附加条ないし撚糸文である。55は砂岩製の台石である。

本竪穴の所属時期は、根田代1期である。49・50号竪穴との新旧関係は、出土土器から判断するならば、本竪穴が最も古い。

49号竪穴（第97・99図、図版15・97・98）

49号竪穴は、A地点P9区に所在する。3号墳墳丘部内にあり、48号竪穴の北側に隣接して炉とその周囲に床硬化面の一部が検出できたにすぎない。北側の大半は1号道路跡、南側は48号竪穴と重複し、壁面、柱穴は明らかにできなかった。床面レベルは、48号竪穴より10cmほど高い。炉内には、1の甕形土器口縁部が埋設されていた。

出土土器は、1・5・8が甕形土器、6・7が壺形土器、2が椀ないし高杯形土器である。6の壺形土器横帯縄文は、RL単節縄文、付加条3種、LR単節縄文の3段を地文として沈線で区画する。7は、別原体の回転結節文による区画をもつ。

1の甕形土器は、山田橋式に比定される。出土土器から判断するならば、48号竪穴に対して本竪穴が新しいと考えられる。本竪穴の所属時期は、根田代4期に比定しておく。

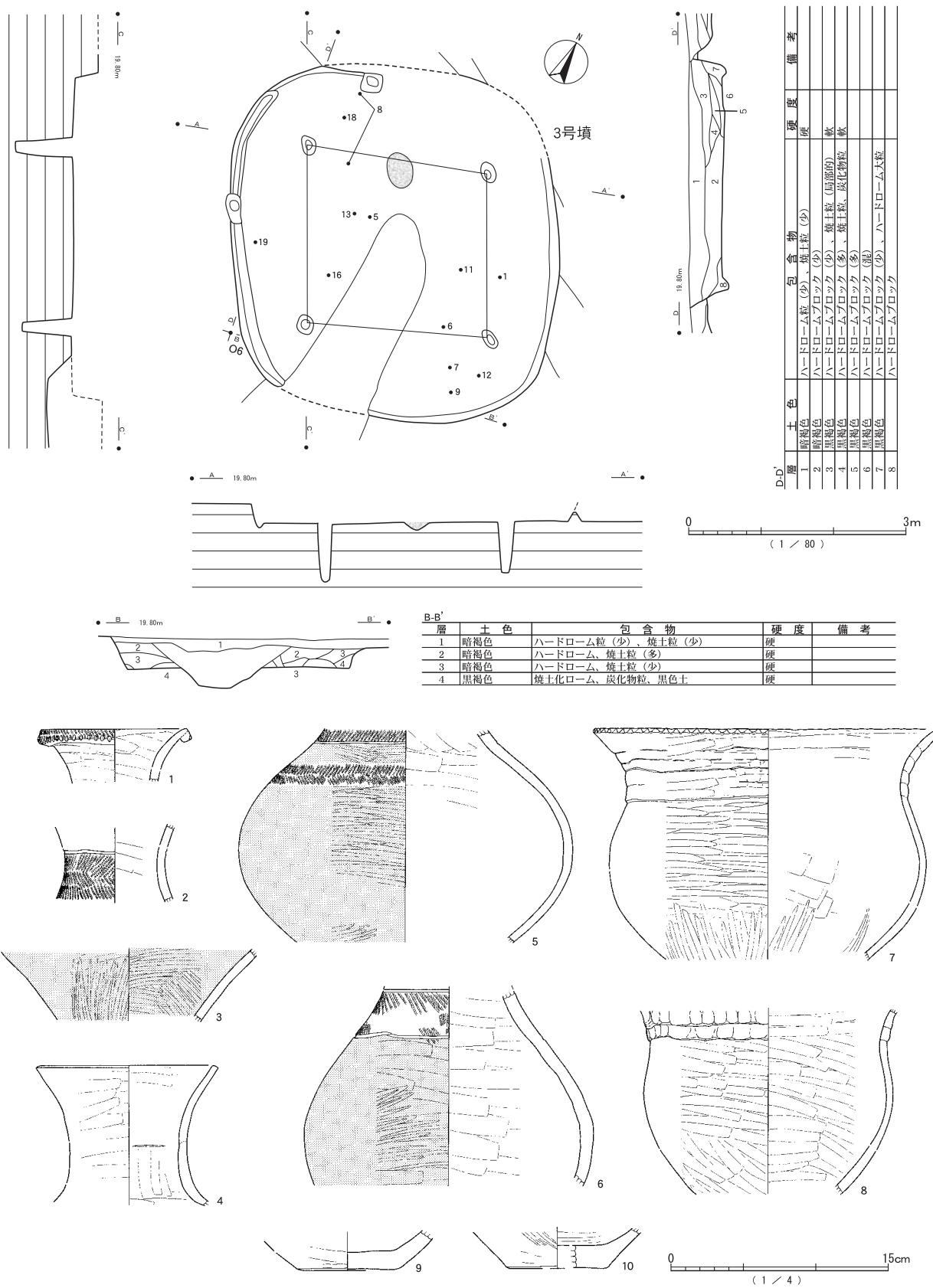
50号竪穴（第99図、図版15）

50号竪穴（住居）は、A地点O7・O8・P7・P8区に所在する。壁面は西辺の一部のみ検出された。この部分での壁高は約10cmである。北東側部分で48号竪穴と、西側部分で51号竪穴と重複し、中央部は3号墳周溝が縦横断する。南西側には東西方向に走る後世の溝があり、床面とくに壁面の大半に失われている。48・51号竪穴との関係は、床面レベルで本竪穴の方が3cmほど低い。全体に遺存状況が悪く、遺構検出状況から新旧関係を明らかにすることはできない。竪穴形態は胴張り隅丸長方形ないし橢円形を呈するものとみられ、主柱穴は4箇所検出された。この他にも小Pit数箇所が検出されているが、本竪穴にともなうものかどうかは不明。竪穴規模は、推定で主軸5.72m×副軸5.28m、主柱穴の柱間は主軸2.87m×副軸3.00mを測り、掘形面積は推定25.90m²である。主軸方位は、N-68°-Wである。炉は1箇所認められた。壁面残存部では直下に壁溝が検出されている。深さは4cmほどである。床面は、全体的に硬く踏みしめられ平滑であった。

出土土器は、1の甕形土器のみである。久ヶ原2式ないし山田橋式と推定される。出土状況は明らかではなく、本竪穴にともなう確証はないが、これを基準とするならば、48号竪穴に対して本竪穴が新しいと考えられる。

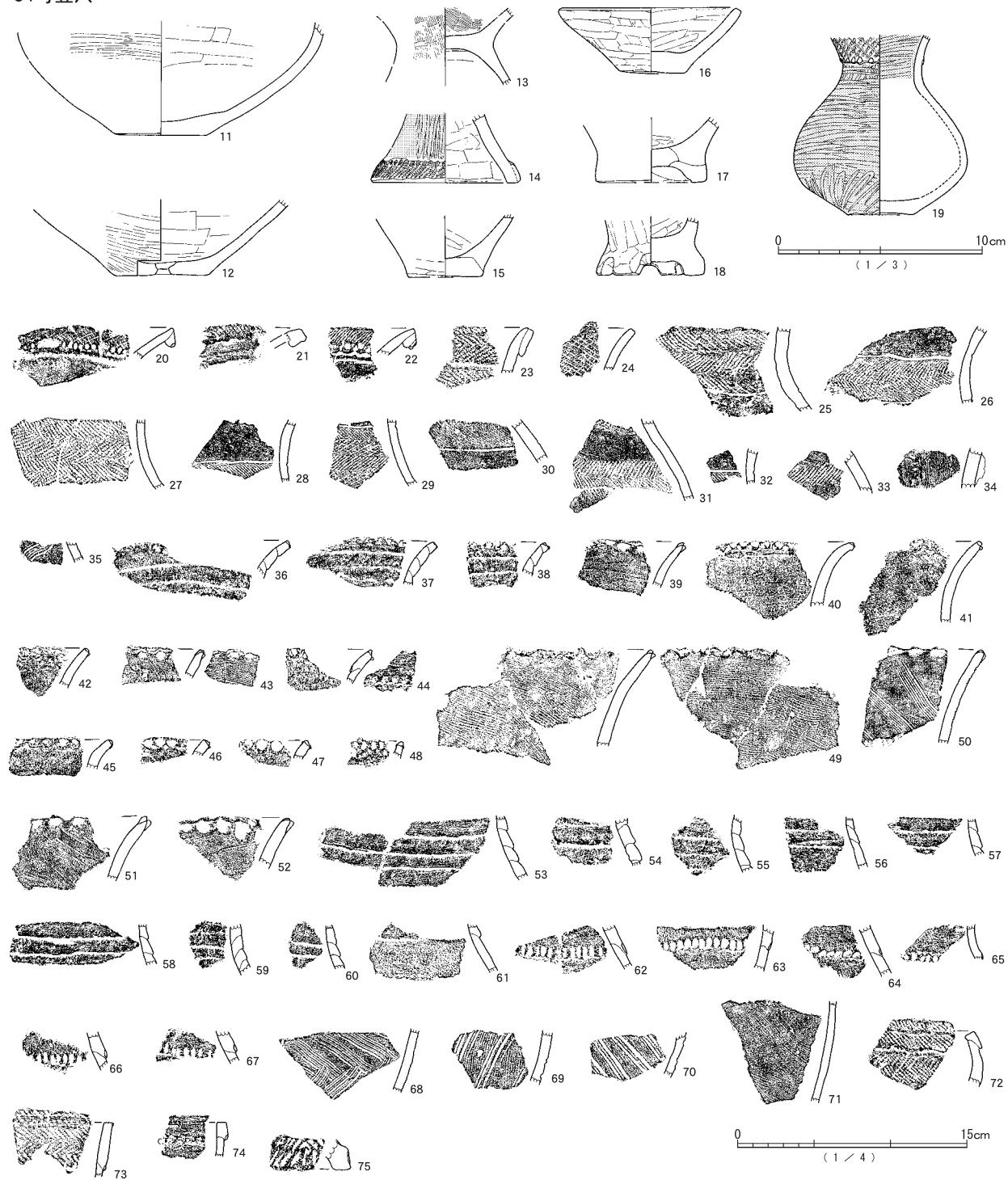
遺構と遺物 竪穴

51号竪穴



第100図 51号竪穴(1) 遺構遺物

51号竪穴



第101図 51号竪穴(2) 遺物

51号竪穴 (第100・101図、図版15・51・52・98・99)

51号竪穴(住居)は、A地点N7・O6・O7区に所在する。壁面は、北辺と南辺の一部が3号墳の周溝や後世の溝により失われている他はほぼ遺存している。壁高は最大30cmほどある。東側で50号竪穴と一部重複するとみられるが、50号竪穴の残存状況が悪く、新旧関係は遺構検出状況からは明らかでない。床面のレベルは本竪穴の方が45cmほど低い。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴

は4箇所、竪穴規模は、主軸が推定で4.88m × 副軸4.52m、主柱穴の柱間は主軸2.26m × 副軸2.52mを測り、掘形面積は推定19.36m²である。主軸方位はN - 29.5° - Wである。炉は、主軸線上北西寄りに1箇所認められた。壁溝は西辺部で検出され、深さは約5cmである。床面は全体的に硬く踏みしめられているが、中央はやや凹凸が目立つ。

出土遺物は、西辺部の壁際床面直上より19の小形壺が(写真図版15)、北側の壁付近床面上5cmから8が、その南床面上20cmから18が、炉の南床面直上から5・13・16が、中央やや東側床面直上より11が、その東床面上10cmより1が、その南床面直上より6が、南東隅付近床面直上より7・12が、床面上12cmより9がそれぞれ出土している。他に、3・4・14・15・17・19が床面より出土している。出土土器は、1・2・4～6・12・19～35が壺形土器、7・8・36～71が甕形土器、16が椀形土器、14・75が高杯形土器、3・72・74が椀ないし高杯形土器、13が台付甕形土器、73が鉢形土器である。久ヶ原式が主体となる。7・8の甕形土器にみられるように、段部最下段位置の胴部への降下は明確ではないものの、全体器形は短胴化が認められる。口頸部は多段になるものが多い。壺形土器横帶縄文は、6が1帯のみ、5は2帯以上となるが、下帯は無区画である。施文は、単節羽状縄文を基本とするが、附加条等が散見される。19の小形壺形土器口縁部は付加条2種(LR+0段1条)、20・24・29は附加条3種である。75の高杯形土器脚端部は、有段となりヘラによる刺突列を2段以上もつ。菊川式系の可能性が考えられる。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式古段階、根田代3期と考えられる。

52号竪穴 (第102図、図版16・52・99)

52号竪穴(住居)は、A地点P7・Q6・Q7区に所在する。壁面は北半部と南隅の一部が残存する。壁高は最大で約40cmを測る。竪穴中央を2号墳周溝が縦断し、東側で53号竪穴と、南側で54号竪穴と重複する。床面レベルは3軒ともほぼ同じであり、これら竪穴住居跡との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。現場での発掘所見によれば、52号竪穴より53号竪穴が新しいとみなされているが、その根拠は明らかではない。竪穴形態は隅丸方形を呈し、竪穴規模は、推定で主軸6.10m × 副軸5.84m、主柱穴の柱間は主軸2.82m × 副軸3.34mを測り、掘形面積は推定で31.83m²である。主軸方位は、N - 42° - Wである。主柱穴は4箇所検出され、建て替えあるいは抜き取り穴が重複する。炉は、主軸線上西寄りに1箇所認められた。壁溝は検出されていない。床面は、全体的に硬く踏みしめられおおむね平滑であるが、中央部は若干高くなる。

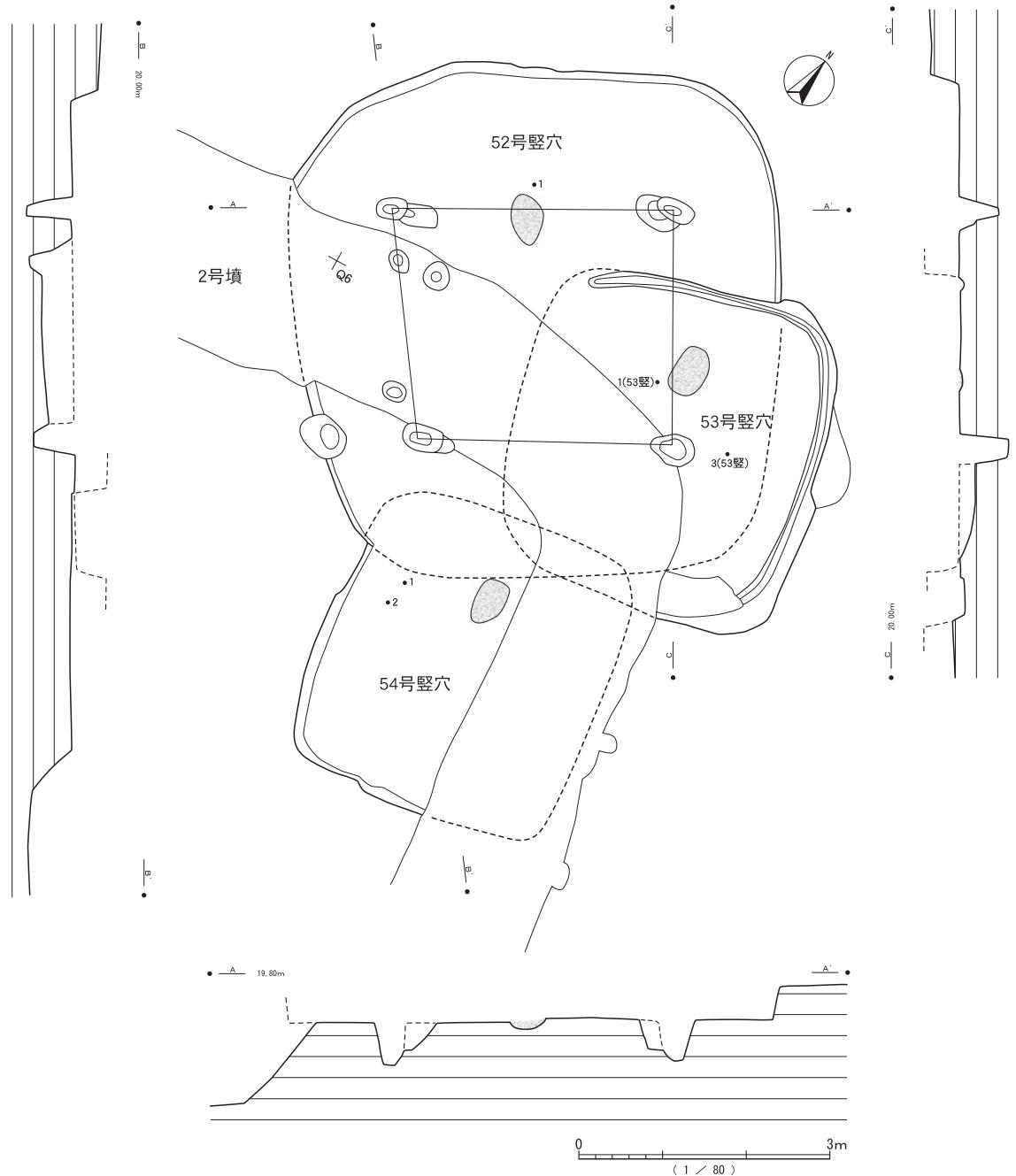
出土遺物は、炉の脇床面直上から1の壺形土器が出土している。3・4・6も床面からの出土である。出土土器は、1・5が壺形土器、2・4が甕形土器、3が椀形土器、6が椀ないし高杯形土器である。1は壺形土器であり、径の収縮の進む頸部に単節羽状縄文2段以上、別原体結節文RS3条による区画をもつ。

本竪穴の所属時期は、山田橋1式期、根田代4期と考えられる。竪穴の重複関係については、出土土器を基準にするならば、54号 52・53号竪穴の順が想定できる。

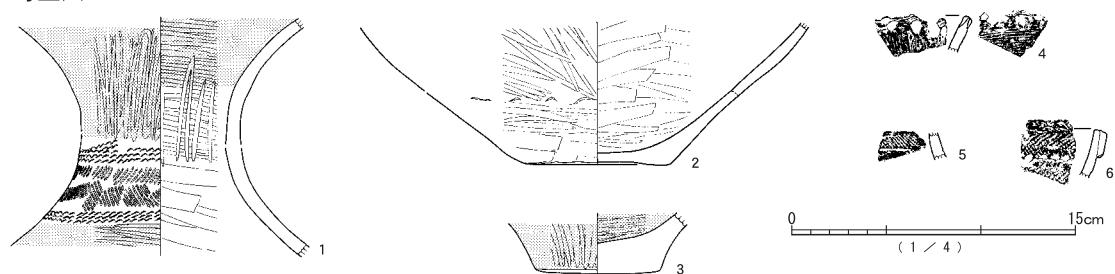
53号竪穴 (第102・103図、図版16・52・53・99)

53号竪穴(住居)は、A地点Q7・R6・R7区に所在する。壁面は東側のみ残存し、最大で約40cmを測る。南東隅部を中心に約1/4が2号墳周溝によって破壊される。西側で52号竪穴と、南側で54号竪穴と重複する。床面のレベルは3軒ともほぼ同じである。竪穴形態は隅丸方形を呈するが、主柱穴はない。竪穴規模は主軸4.08m × 副軸推定3.76mを測り、掘形面積は推定で13.54m²である。主軸方位は、N

52・53・54号竪穴

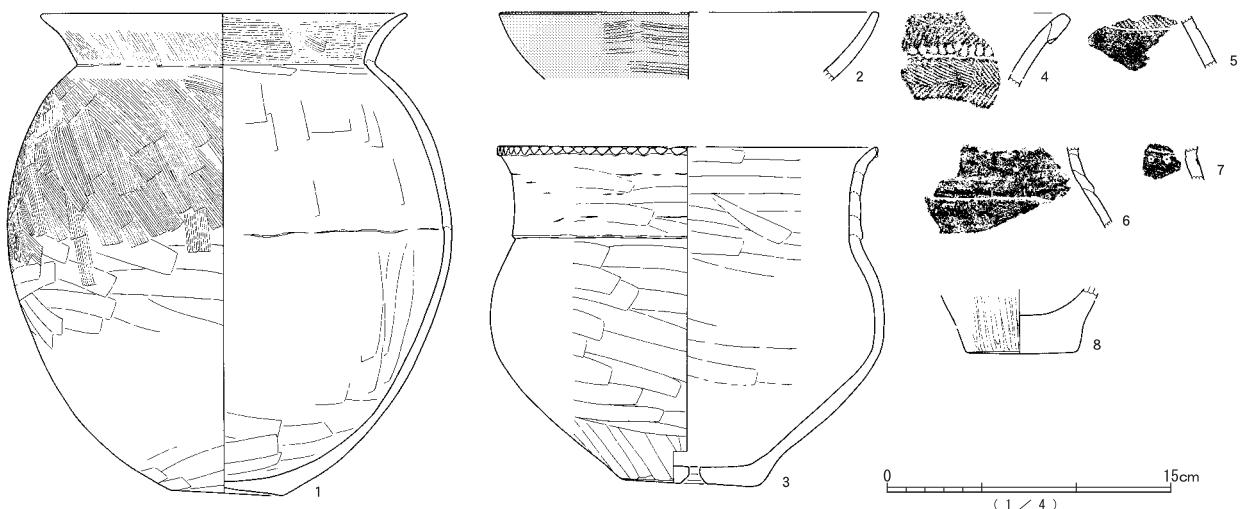


52号竪穴

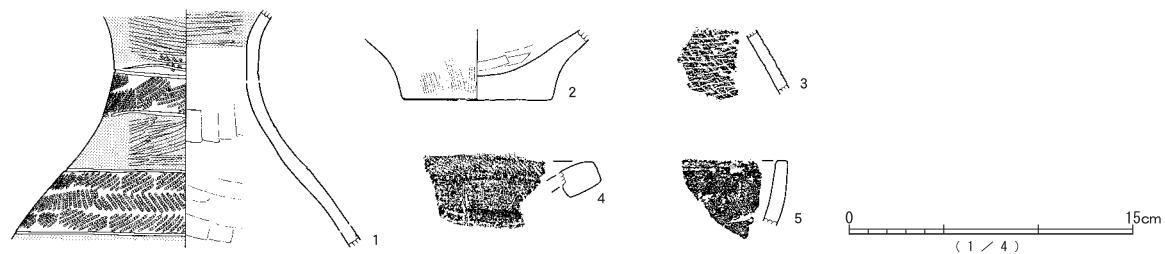


第102図 52号竪穴 遺構遺物、53号竪穴(1) 遺構、54号竪穴(1) 遺構

53号竪穴



54号竪穴



第103図 53号竪穴(2) 遺物、54号竪穴(2) 遺物

- 33° - Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。壁溝は北側と東側で検出され、深さ約5cmを測る。床面は、全体的に硬く踏みしめられ平滑である。

炉のすぐ脇、床面直上から1が、やや南東床面直上で3が出土している。出土土器は、1・3・6が甕形土器、4・5が壺形土器、2が高杯形土器である。1・3は、他と明らかに時期を異にする。ともに床面直上から出土しており、いずれを本竪穴にともなうものとみるかによって、本竪穴の所属時期は変更される。1は、明確に屈曲する頸部からゆるやかに外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くなる。胴部はやや長く、隣接する2号墳出土土器よりやや新しい要素が認められる。ただ、可能性として2号墳に関連することを想定しておきたい。調査段階の所見として、本竪穴は52号竪穴より新しいとされているが、その判断が1によるのであれば検討の必要がある。3についても、竪穴の新旧関係によっては52号竪穴に帰属することになる。3は、その器形的特徴から、久ヶ原2式～山田橋1式と考えられ、52号竪穴に対して積極的に新しいとはいえない。したがって、3の甕形土器は、52号竪穴に帰属するか、あるいは、53号竪穴も根田代4期の所産かという選択になる。ただし、その判断は難しい。

54号竪穴 (第102・103図、図版16・53・99)

54号竪穴(住居)は、A地点Q5・Q6区に所在する。壁面は高さ最大約40cmを測るが、南西隅部周辺のみ残存し、2号墳周溝と52号・53号竪穴によって全体の約2/3が破壊されている。竪穴住居跡との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。床面のレベルは3軒ともほぼ同じである。竪

穴形態は隅丸方形を呈する。主柱穴は検出されていない。竪穴平面規模は、主軸推定3.72m×副軸3.40m、掘形面積は推定で11.88m²を測る。主軸方位は、N-15°-Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。南壁付近床面上に10cmほどの厚さで焼土が堆積していた(写真図版16)。これは火災によるものと推定される。

出土土器は、炉の西側床面上から1・2が出土している。1・3・4が壺形土器、5が椀ないし高杯形土器である。1は、沈線区画の横帶縄文2帯をもつ。下帯は単節羽状縄文3段からなるが、上帯は施文がやや不揃いの単斜縄文2段で構成される。3の施文は、網目状撲糸文ないし附加条3種である。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式期、根田代3期と考えられる。竪穴の重複関係については、出土土器を基準にするならば、54号 52・53号の順が想定できる。

55号竪穴 (第104・105図、図版16・99)

55号竪穴(住居)は、A地点P6区に所在する。壁面は南辺、東辺の一部のみ残存し、壁高は最大10cmほどである。2号墳墳丘部内にあり、2号墳周溝と重複するため、北半部の壁面と床面が失われている。また南側で56号・57号竪穴と重複する。これらとの新旧関係は、遺構検出状況からは明らかではないが、床面のレベルは本竪穴の方が他の2軒より20cmほど高い。別に、50・52号竪穴と部分的に重複している可能性がある。竪穴形態は橢円形を呈していたとみられる。主柱穴は2箇所のみ検出された。主軸方位は、N-96°-WないしN-6°-Wと推定されるが、南北方向を主軸とした場合は、2号墳周溝外に主柱穴が遺存すると考えられることから、ここでは東西方向を主軸と推定しておきたい。竪穴規模は、推定で主軸5.85m強、副軸残存部2.61m、主柱穴の柱間は主軸方向3.55mを測る。壁溝は検出されていない。床面は保存状態が悪い。

遺物は、56号竪穴と一括して取り上げられており、本竪穴に帰属する土器を特定することができない。56号竪穴は、別記のとおり山田橋式期と推定されるが、他の土器はいずれも小破片で、宮ノ台式から久ヶ原式、山田橋式が混在する。

56号竪穴 (第104・105図、図版16・99)

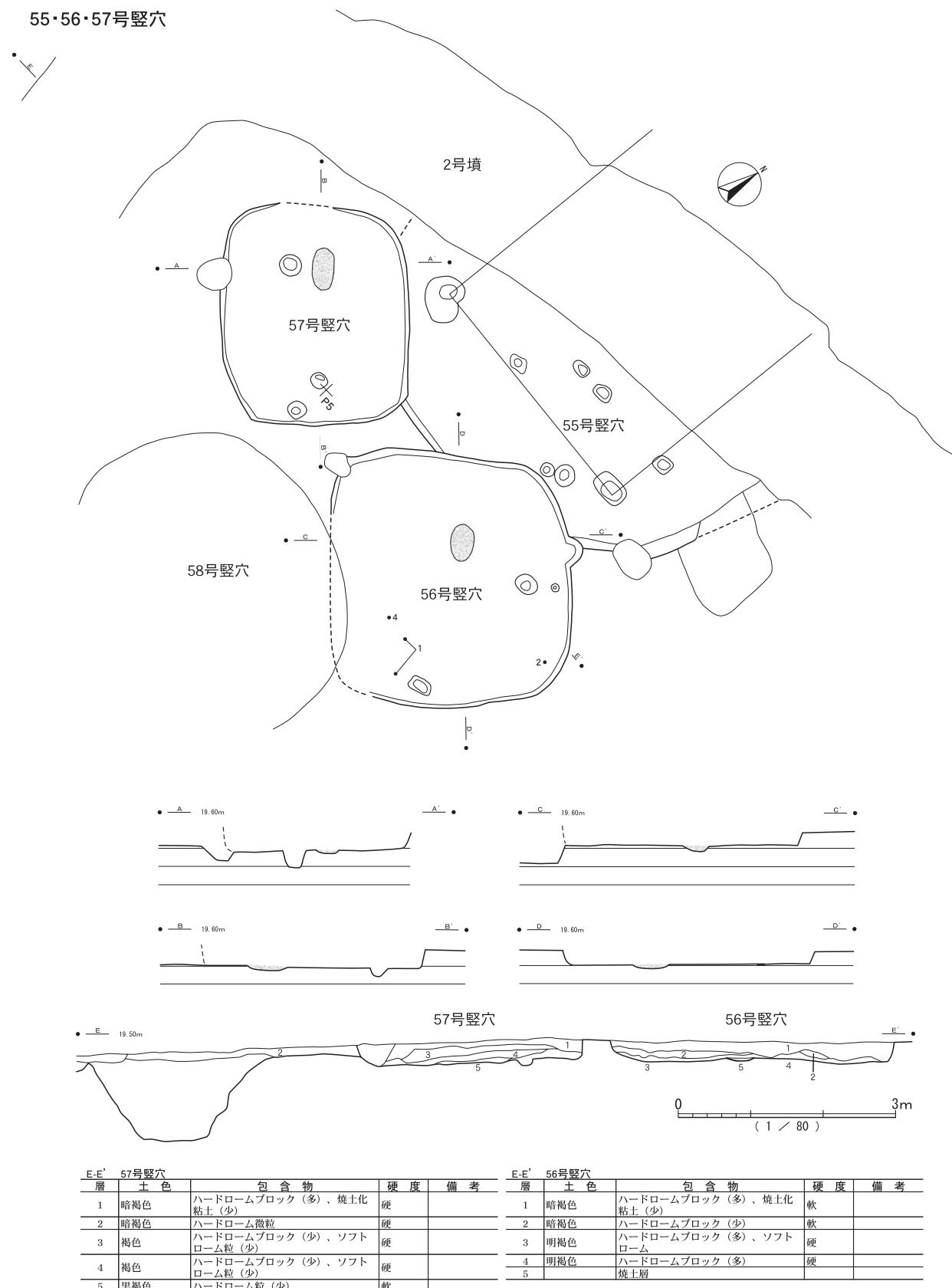
56号竪穴(住居)は、A地点P5・P6区に所在する。壁面は南隅の一部を欠く以外は残存し、壁高は最大35cmほどである。2号墳墳丘部内にあり、北側で55号と、南側で58号竪穴と重複する。これらとの新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面レベルは本竪穴の方が55号竪穴より20cmほど低く、58号竪穴より約20cm高い。竪穴形態は胴張りの隅丸方形を呈する。主柱穴は検出されていない。竪穴平面規模は、主軸3.44m×副軸推定3.36mを測り、掘形面積は推定で10.69m²である。主軸方位はN-56°-Wである。壁溝は検出されていない。炉は西寄りに1箇所認められた。

出土土器は、東辺部床面上5cmから1・4が、北東隅部床面上15cmから2が出土している。遺物の多くは、55号竪穴と一括で取り上げられているが、出土位置が判明している1・2・4は本竪穴に帰属する。1の壺形土器は、横帶縄文2帯と山形縄文帯により構成される。地文は、附加条2種と推定され、別原体結節文LS2条で区画される。ただし、下帯下部は無区画となる。

本竪穴の所属時期は、山田橋2式期、根田代5期と考えられる。58号竪穴との新旧関係は、本竪穴が新しい。

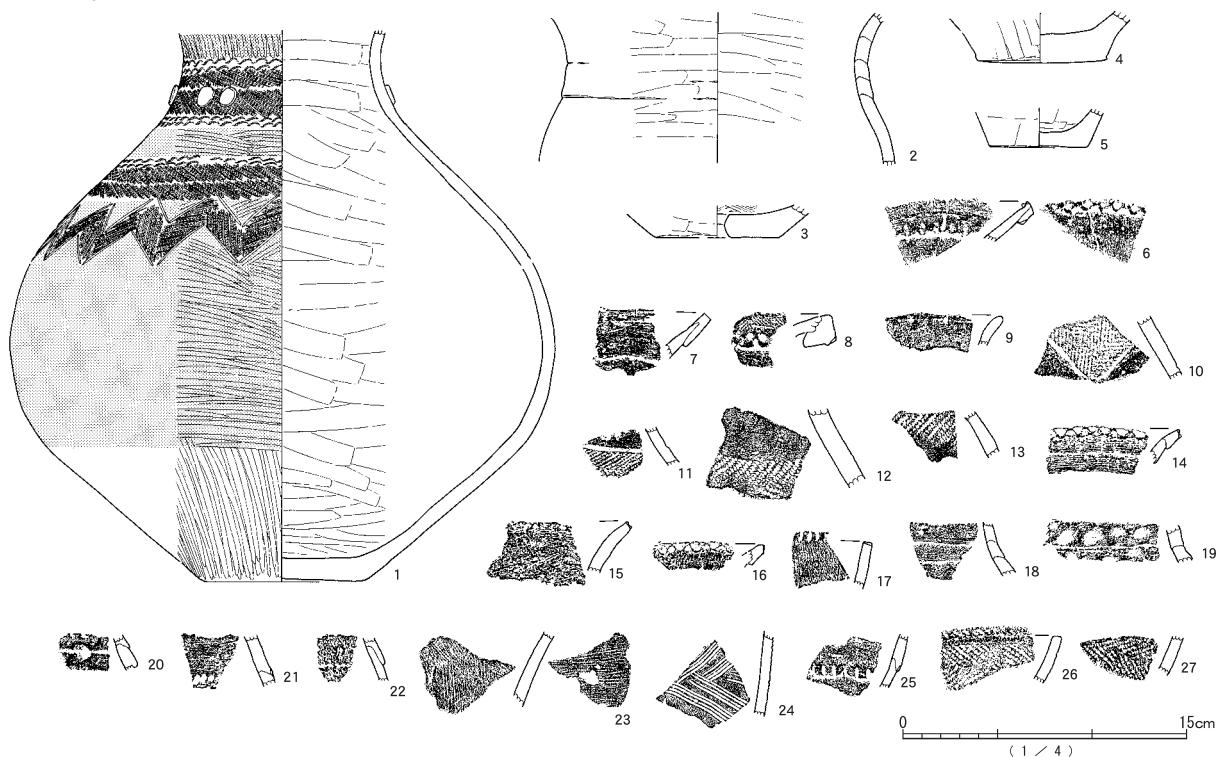
57号竪穴 (第104・105図、図版16・53・79・99)

57号竪穴(住居)は、A地点O5・O6・P5・P6区に所在する。壁面はほぼ全周しており、壁面の高さ

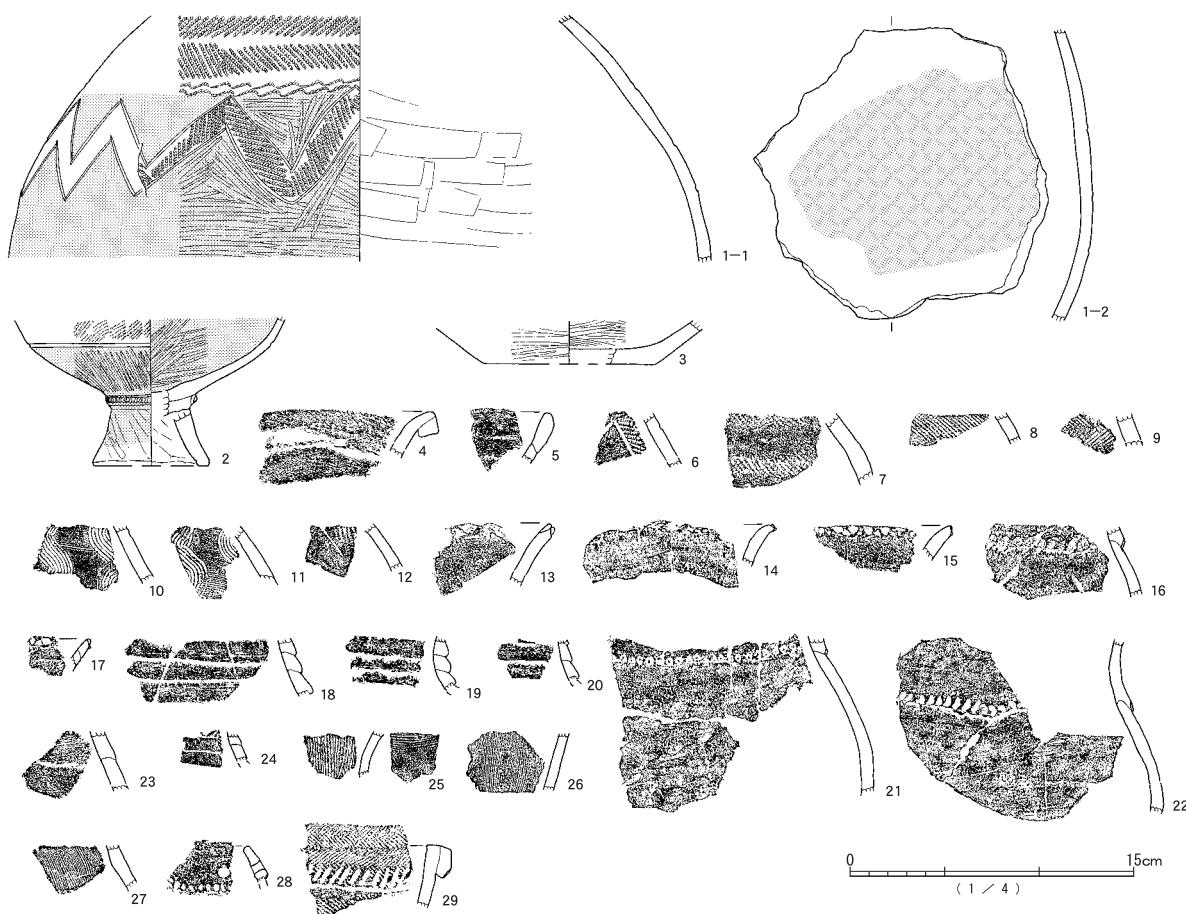


第104図 55号竪穴(1) 遺構、56号竪穴(1) 遺構、57号竪穴(1) 遺構

55・56号竪穴



57号竪穴



第105図 55号竪穴(2) 遺物、56号竪穴(2) 遺物、57号竪穴(2) 遺物

は最大20cmほどである。2号墳墳丘部内にあり、北東側で55号竪穴と重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が20cmほど低い。竪穴形態は隅丸長方形を呈する。主柱穴は検出されていない。竪穴規模は、主軸3.02m×副軸2.96mを測り、掘形面積は7.18m²である。主軸方位で、N - 58.5° - Wである。壁溝は検出されていない。炉は西寄りに1箇所認められた。

出土土器は、北側隅壁付近、床面よりやや浮いた状態で1が出土している(写真図版16)。1・4・6～12が壺形土器、2が高杯形土器、3が椀形土器、13～27が甕形土器、28・29が椀ないし高杯形土器である。1をのぞき出土状況の詳細は明らかでない。おおむね、久ヶ原式から山田橋式を主体とする。1の壺形土器は、別原体結節文RS2条区画の横帯縄文に、単斜縄文充填の山形縄文帯を重ねる。内面に、酸化鉄と推定される赤色顔料粉の付着が認められ、皿状の容器ないし作業台としての再利用が想定される。2の高杯形土器帯縄文が沈線区画である点、29の高杯形土器が口縁部有段で口縁端部が幅広である点などは、山田橋式においても古相をしめす。

本竪穴の所属時期は、根田代4期に比定しておきたい。

58号竪穴 (第106図、図版16・99・100)

58号竪穴(住居)は、A地点O5・P4・P5区に所在する。壁面は斜面地形のため南側を欠くが、北辺部では壁面が最大約40cmを測る。2号墳墳丘部中央にあり、北側で56号竪穴と一部重複する。この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでないが、床面のレベルは本竪穴の方が20cmほど低い。竪穴形態は円形を呈するものとみられる。主柱穴は検出されていないが、東辺部に出入り口施設と推定されるPitがある。竪穴規模は、主軸4.32m×副軸推定4.29mを測り、掘形面積は推定で16.76m²である。主軸方位はN - 72.5° - Wである。壁溝は検出されていない。炉は西寄りに1箇所認められた。床面はソフトローム上に形成され、全体的に硬く踏みしめられるが、やや凹凸が目立つ。

北側壁際床面付近より遺物が出土しているが特定できない(写真図版16)。出土土器は、2・5・6が壺形土器、3が広口壺形土器、1・4・7～11が甕形土器である。久ヶ原式を主体とすると考えられるが、いずれも小破片である。ここでは、所属時期を、一応根田代3期に比定しておく。この場合、56号竪穴との新旧関係は、本竪穴が古い。

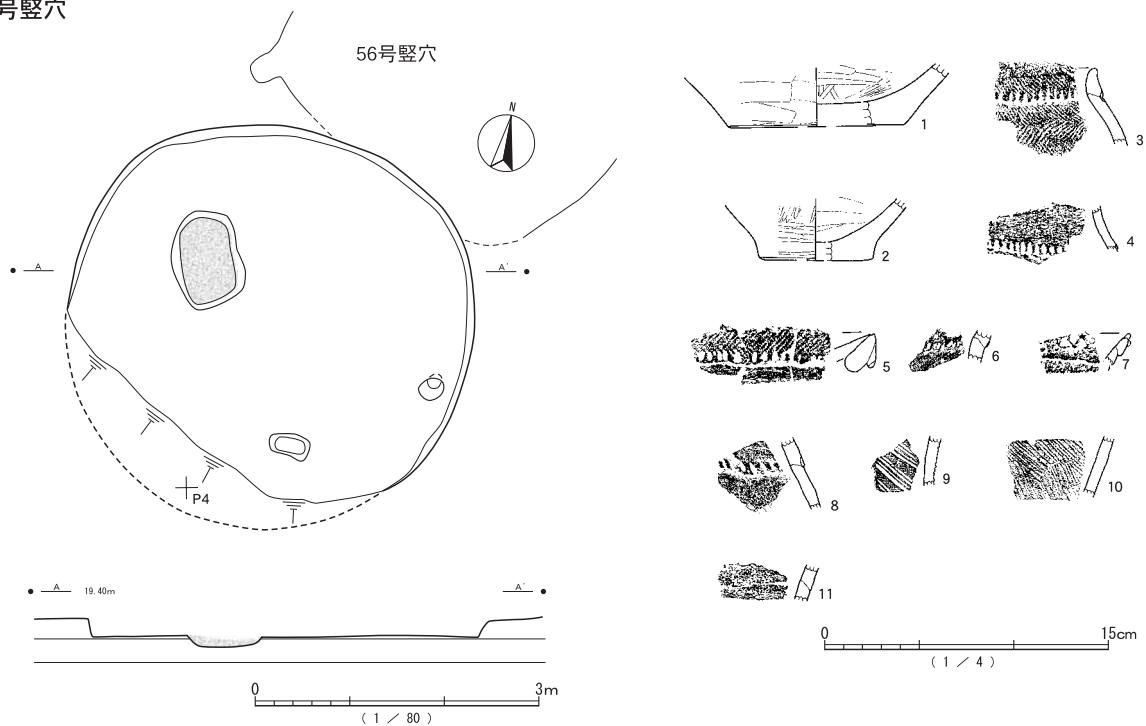
59号竪穴 (第106・107図、図版16・53・100)

59号竪穴(住居)は、A地点P5・Q4・Q5区、2号墳墳丘部内に所在する。壁面は斜面地形のため南側を欠くが、北側では壁面が最大65cmほどある。竪穴形態は橢円形を呈する。主柱穴は4箇所で検出された。竪穴平面規模は、主軸4.95m×副軸推定4.08m、主柱穴の柱間は主軸1.98m×副軸1.86mを測り、掘形面積は推定で16.43m²である。主軸方位はN - 77° - Wである。壁面残存部直下では壁溝が検出されている。炉は西寄りに1箇所認められた。床面は硬く踏みしめられ平滑である。

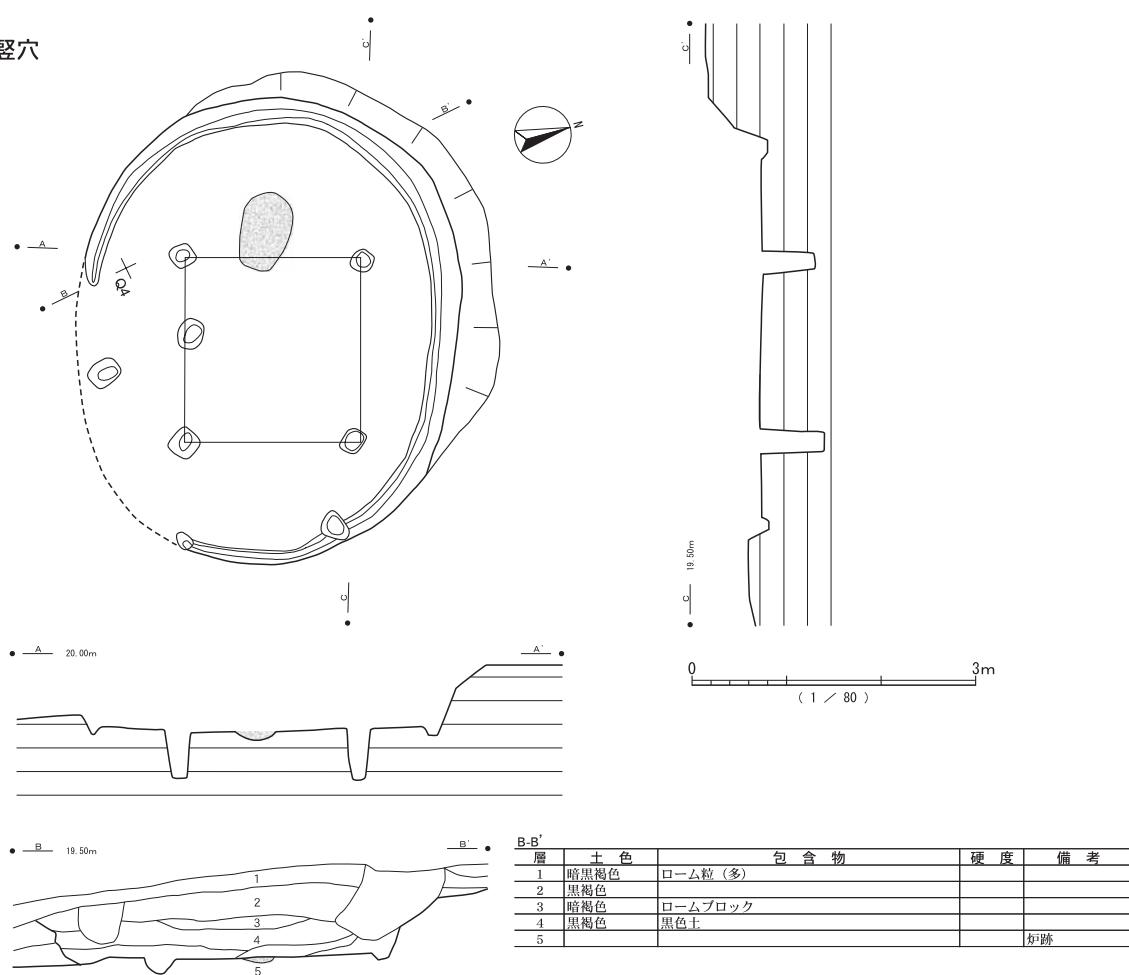
出土土器は、1・4・18・24～30が甕形土器、3・5・7～9・14～17・19・20・22・23が壺形土器、6が高杯形土器、21が椀ないし高杯形土器である。出土状況は明らかではない。1の甕形土器は、口縁端部が交互押捺で、平坦で厚みをもたない粘土紐積み上げ痕を多段に残す。2は、口縁部が有段となる。ともに頸部の収縮が弱く、深鉢状の器形をとる。久ヶ原1式に比定され、14～17なども同時期と推定される。ただ、この段階は宮ノ台式の要素が混在する時期であり、5なども対応する可能性がある。

本竪穴は、覆土の厚みもあり、1・2を所属時期の根拠とすることの確証はないが、一応、根田代2

58号竪穴

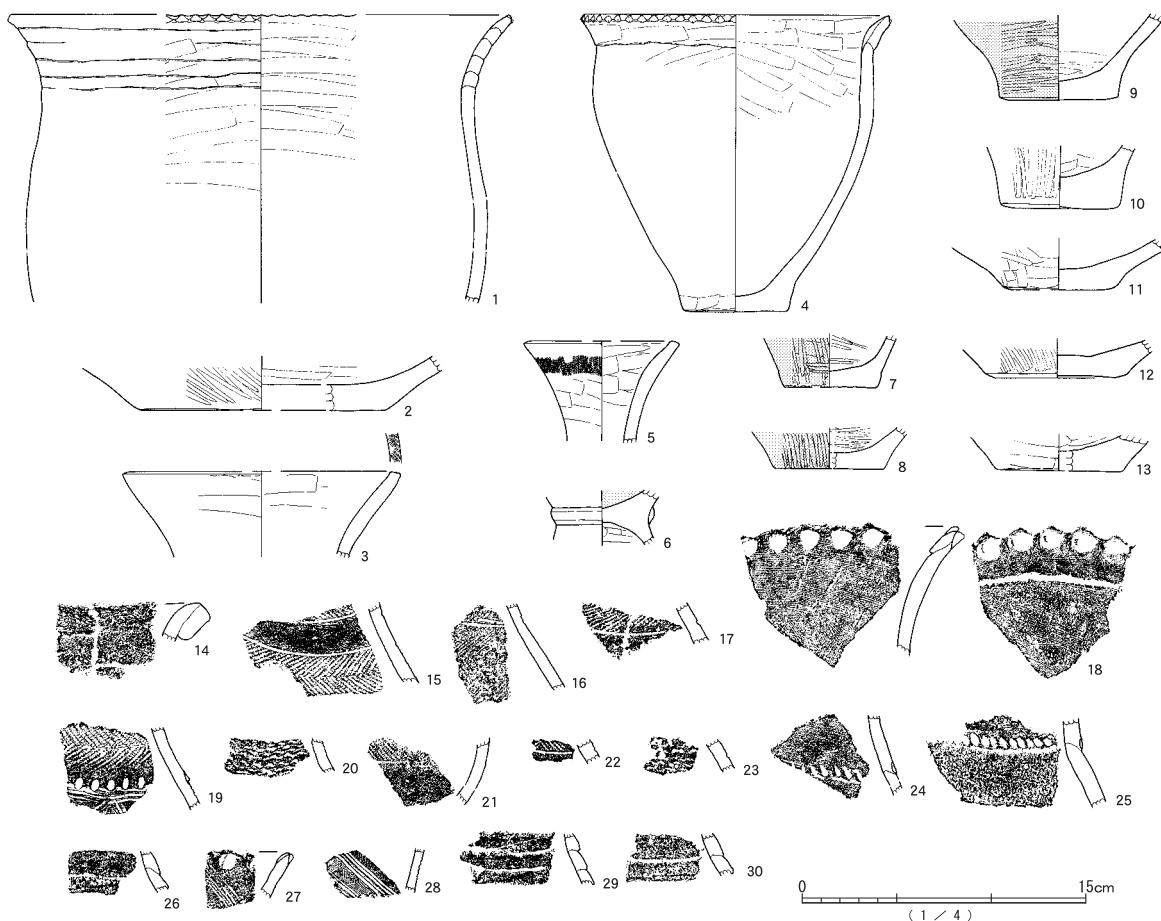


59号竪穴



第106図 58号竪穴 遺構遺物、59号竪穴(1) 遺構

59号壇穴



第107図 59号壇穴(2) 遺物

期に推定しておきたい。

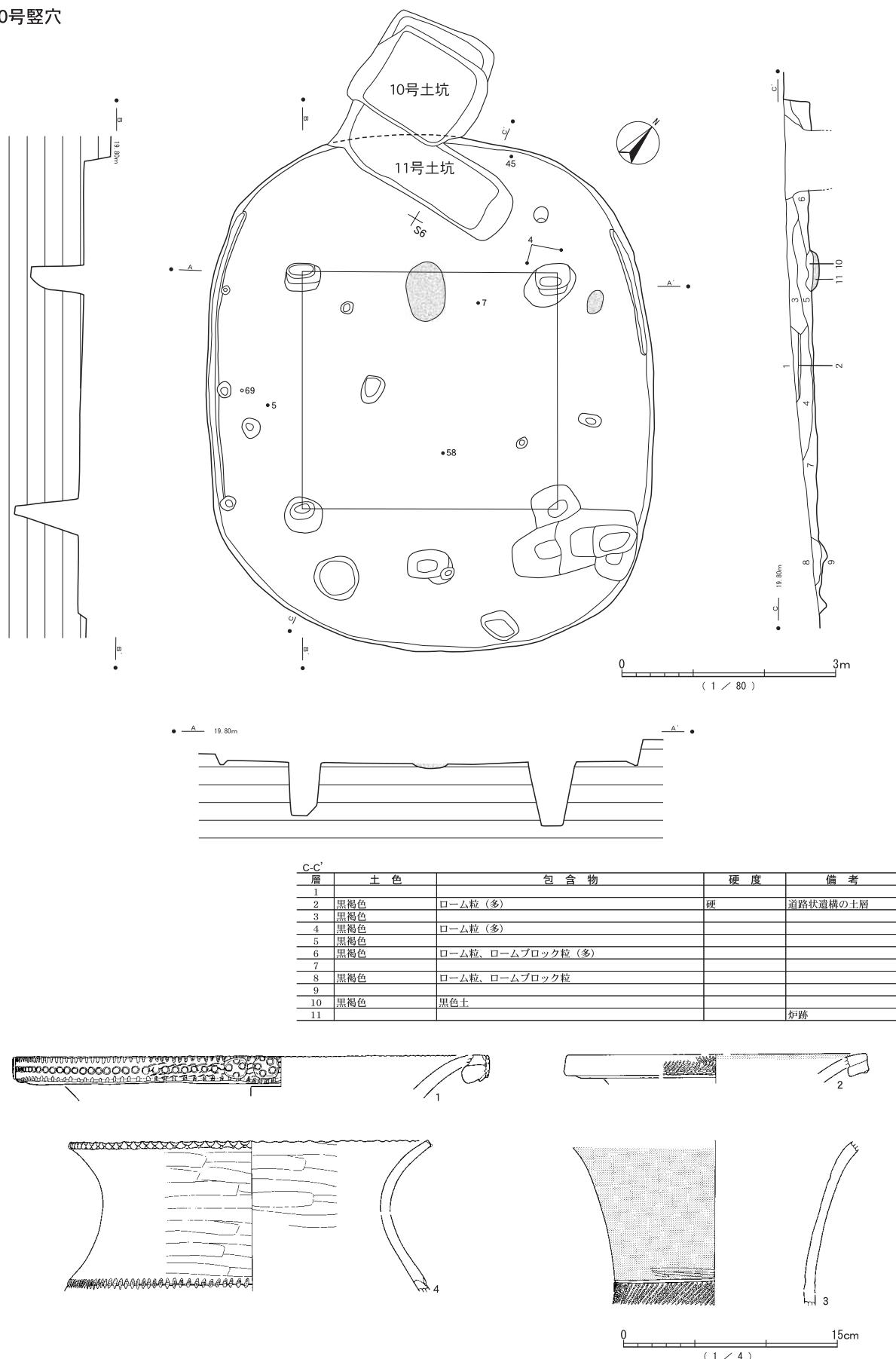
60号壇穴 (第108・109図、図版16・53・78・100・101)

60号壇穴(住居)は、A地点R5・R6・R7・S5・S6・S7区に所在する。壁面はほぼ全周するが、壁高は最大でも約35cmと浅い。北辺部で10号・11号土坑と重複するが、壇穴住居跡、古墳との重複はない。土坑との新旧関係は、遺構検出状況から本壇穴が古い。壇穴形態は胴張り隅丸長方形を呈する。主柱穴は4箇所、他に南側を中心として複数の小Pitが検出されている。壇穴規模は、主軸方向推定7.26m×副軸6.26m、主柱穴の柱間は主軸3.32m×副軸3.56mを測り、掘形面積は39.31m²である。主軸方位は推定でN-49°-Wである。壁溝は部分的に検出されている。炉は主軸線上北寄りに1箇所認められた。床面は、全体的に硬く踏みしめられ平滑である。

遺物は、中央床面直上から58が、西辺部床面直上から69が、床面上3cmから5が、炉東側床面上5cmから7が、北東主柱穴付近床面上4.5cmから4が出土している。他に、21・23・45が床面上5cm程度、47・48・64は層序不明であるが覆土から出土している。1~3・21~45・66が壺形土器、4・10・12・51~65・67・68が甕形土器、6が高杯形土器、5・46~49が椀なし高杯形土器、50が椀形土器である。1・2は、幅広の口縁端部をもつ複合口縁(折返し口縁)の壺形土器である。1は、結節文を地文とする口縁端部に竹管文を重ね、2個を単位とする円形貼付文を付加する。端部上下は布目痕を残す押捺が加えられる。43の壺形土器複合口縁は、端部平坦面にLR単節縄文をもつが、施文部を含め赤彩され

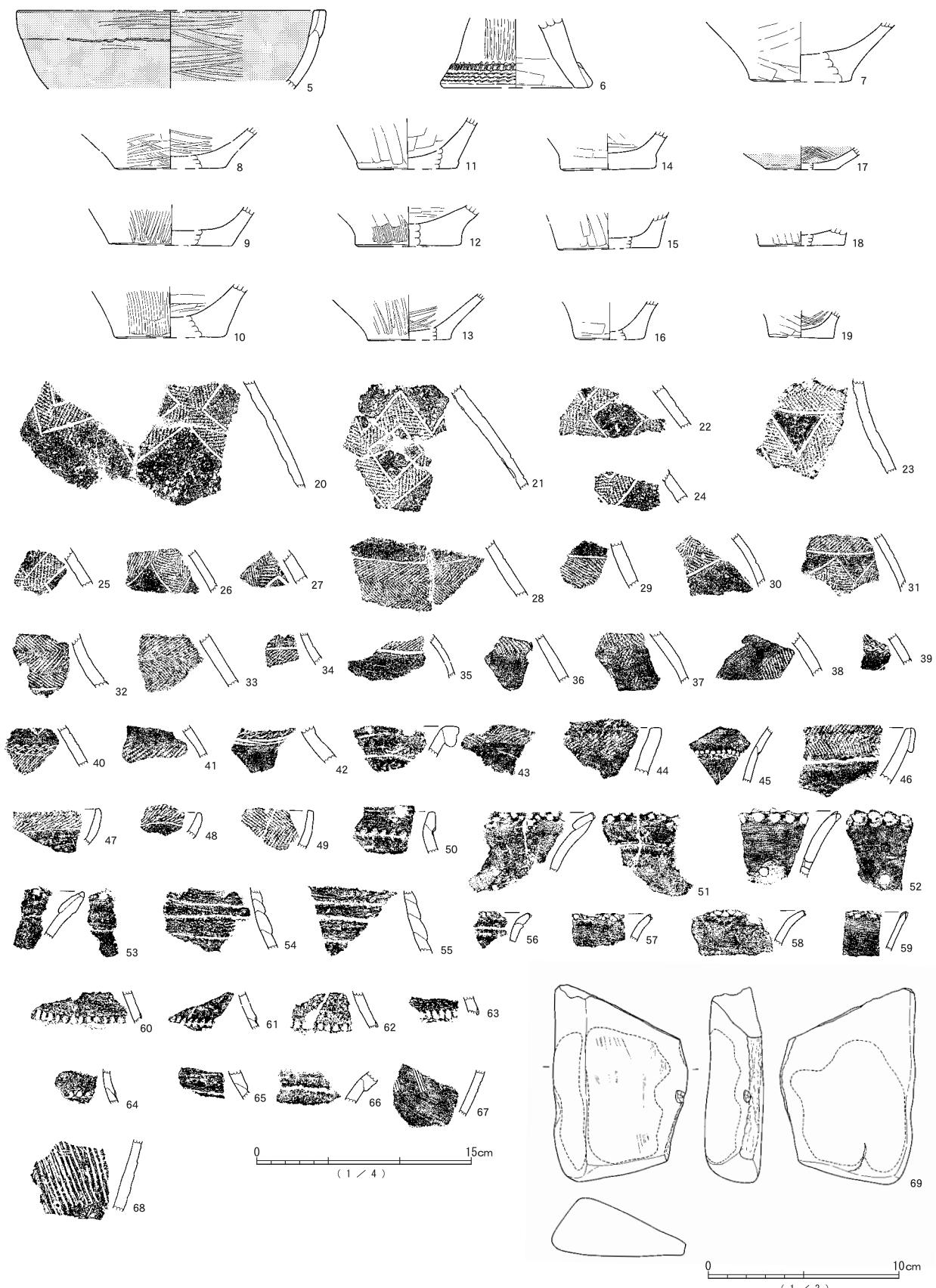
遺構と遺物 竪穴

60号竪穴

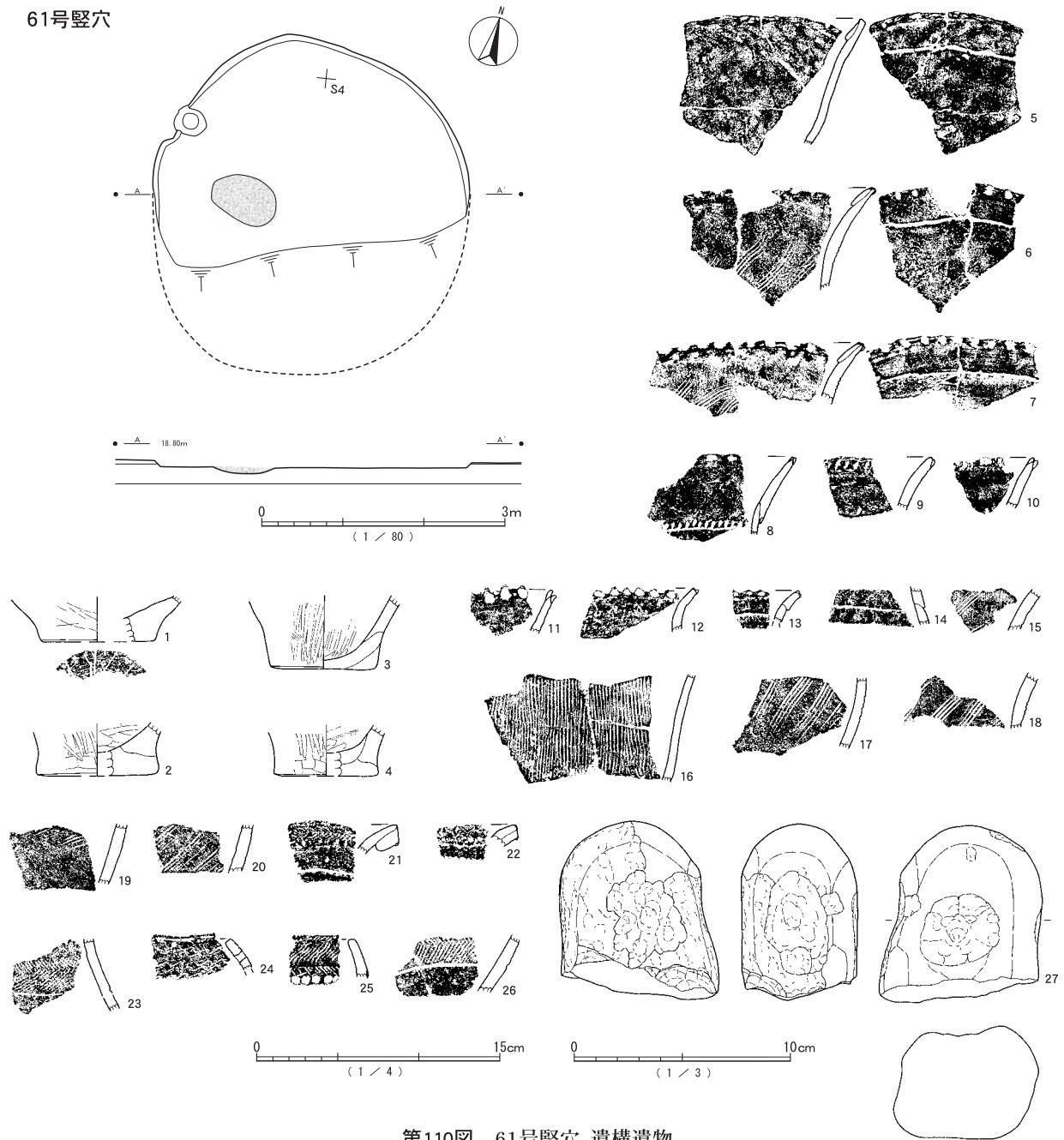


第108図 60号竪穴(1) 遺構遺物

60号竪穴



第109図 60号竪穴(2) 遺物



第110図 61号竪穴 遺構遺物

る。おそらく久ヶ原1式と考えられる。壺形土器胴部横帯縄文は沈線区画を主体とする。20~25は同一個体と推定され、沈線区画の横帯縄文下に、山形縄文帯の上下連繋による菱形縄文帯を配置する。39・40は別原体の回転結節文の区画をもつ。結節文は、6の高杯形土器脚裾部および42で地文としてもちいられる。4の甕形土器は、段部位置が降下し、頸部の収縮、胴部の張りが強い器形をとる。69は、砂岩製の砥石と考えられるが、側縁に敲打痕をもつ。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式新段階から山田橋1式、ここでは根田代4期に推定しておく。

61号竪穴 (第110図、図版16・78・101)

61号竪穴(住居)は、A地点R4・R5・S4・S5区に所在する。壁面は斜面地形のため南側を欠くが、北側では壁高最大約40cmを測る。竪穴形態は円形を呈するものとみられる。主柱穴は検出されてい

ない。竪穴規模は、推定で主軸3.92m × 副軸4.13mを測る。主軸方位は推定でN - 91° - Wである。壁溝は検出されていない。炉は西寄りに1箇所認められた。床面はソフトローム上に形成され、平滑で比較的硬い。

遺物の出土状況は不明。5~20が甕形土器、21~23が壺形土器、24・25が椀形土器、26が椀ないし高杯形土器である。宮ノ台式を主体とする。5~7は、口縁部内面が有段となる甕形土器であり、6・7は同一個体と推定される。5の口唇部押捺は内面のみであり、6・7も外面側の押捺が浅い。4本を単位とする櫛による横走羽状文をもつ。8は、口縁部外面が有段となる甕形土器であり、段部にはヘラ先等による刺突が施される。

27は、砂岩製の凹石であり、表裏両側面に敲打による凹部をもつ。敲打痕はその周辺におよぶ。

本竪穴の所属時期は、根田代1期に比定される。

62A・B号竪穴（第111図、図版17）

62号竪穴（住居）は、A地点T8・T9・U9区に所在する。壁面は北側が土採りにより消滅、南側のみ残存するが、壁高は最大20cm程度である。南側壁際で2号地下式土坑と重複する。また、63号竪穴と隣接し、一部重複する可能性もある。竪穴形態は隅丸方形を呈するとみられる。残存する深さ5cmほどの壁溝によれば、この外側に規模を異にする竪穴が存在した可能性があるため、隅丸方形に復元したものをA号、東側のものをB号とする。床面レベルはほぼ同一で、南辺部周溝を共有することから建て替えの可能性もあるが、竪穴平面形態はまったく異なる。別竪穴と判断しておく。A・B号とも主柱穴は検出されていない。A号の規模は、推定で副軸4.25mを測る。主軸方位はN - 21° - Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。炉内に土器片の埋設が認められたようであるが、現状で土器を特定することはできない。

整理作業で、本竪穴の遺物を確認することができなかった。図示したものはすべて2号地下式土坑から弥生土器を抽出したものである。1・3~5が壺形土器、6・7が甕形土器、2が椀形土器である。1の複合口縁複合部は厚みがなく、また、3・4の横帶縄文は結節区画による。これらの特徴から、本竪穴を根田代5期に比定しておく。ただし、A・B号間の関係も明確ではないし、時期比定の根拠も乏しい。

63号竪穴（第111図、図版17）

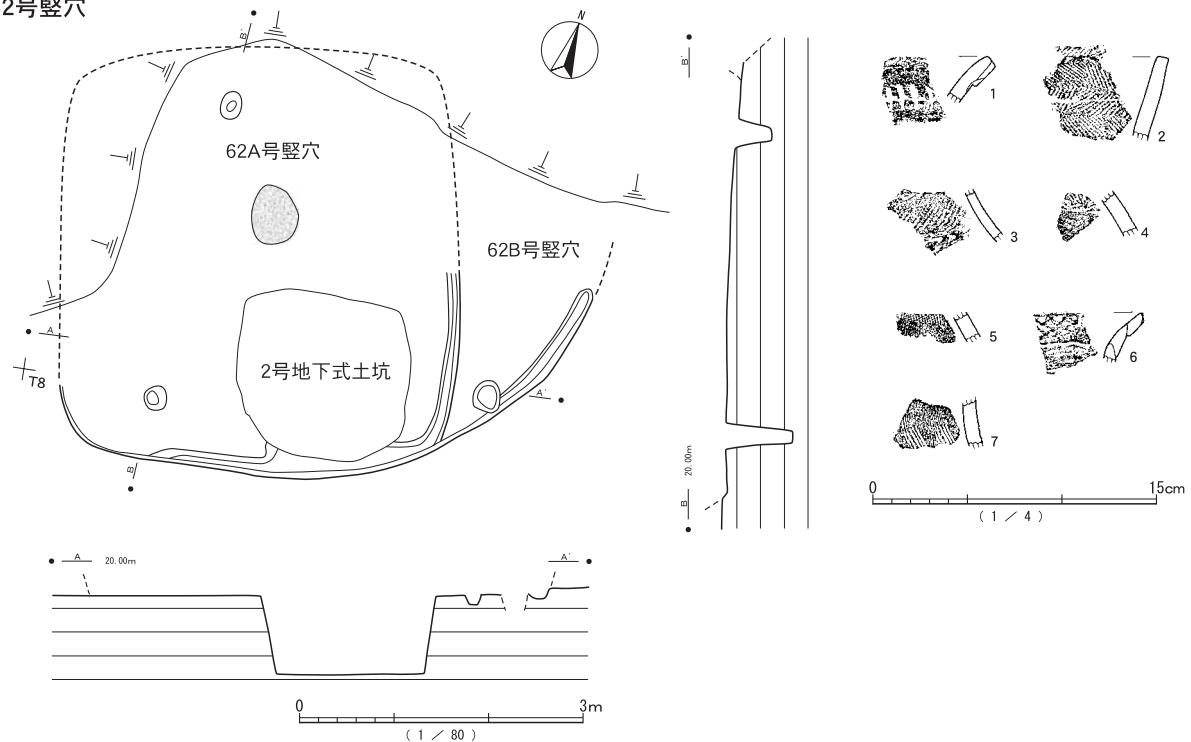
63号竪穴（住居）は、A地点U8・U9区に所在する。壁面は西辺の一部と南東隅付近のみ残存し、壁高は最大でも約30cmである。南西隅部で4号墳周溝と重複する。また、西側では62B号竪穴と隣接し、一部重複する可能性がある。竪穴形態は胴張り隅丸方形を呈する。主柱穴は検出されていないが、北辺部壁際を中心に小Pitが多数みられる。壁柱穴の可能性がある。竪穴規模は、主軸推定3.88m × 副軸3.80mを測り、掘形面積は推定で13.17m²である。主軸方位は、N - 9.5° - Wである。炉は北寄りに1箇所認められた。

出土土器は、2・3・12~16が甕形土器、4~9が壺形土器、10・11が椀ないし高杯形土器である。出土状況は明らかではない。4・7は、単節羽状縄文を沈線で区画する。5は複合口縁の壺形土器であり、複合部は下方へ拡張される。8は結節文RS、RZを地文とする。山形縄文帯は沈線区画内充填、横帶縄文は無区画である。

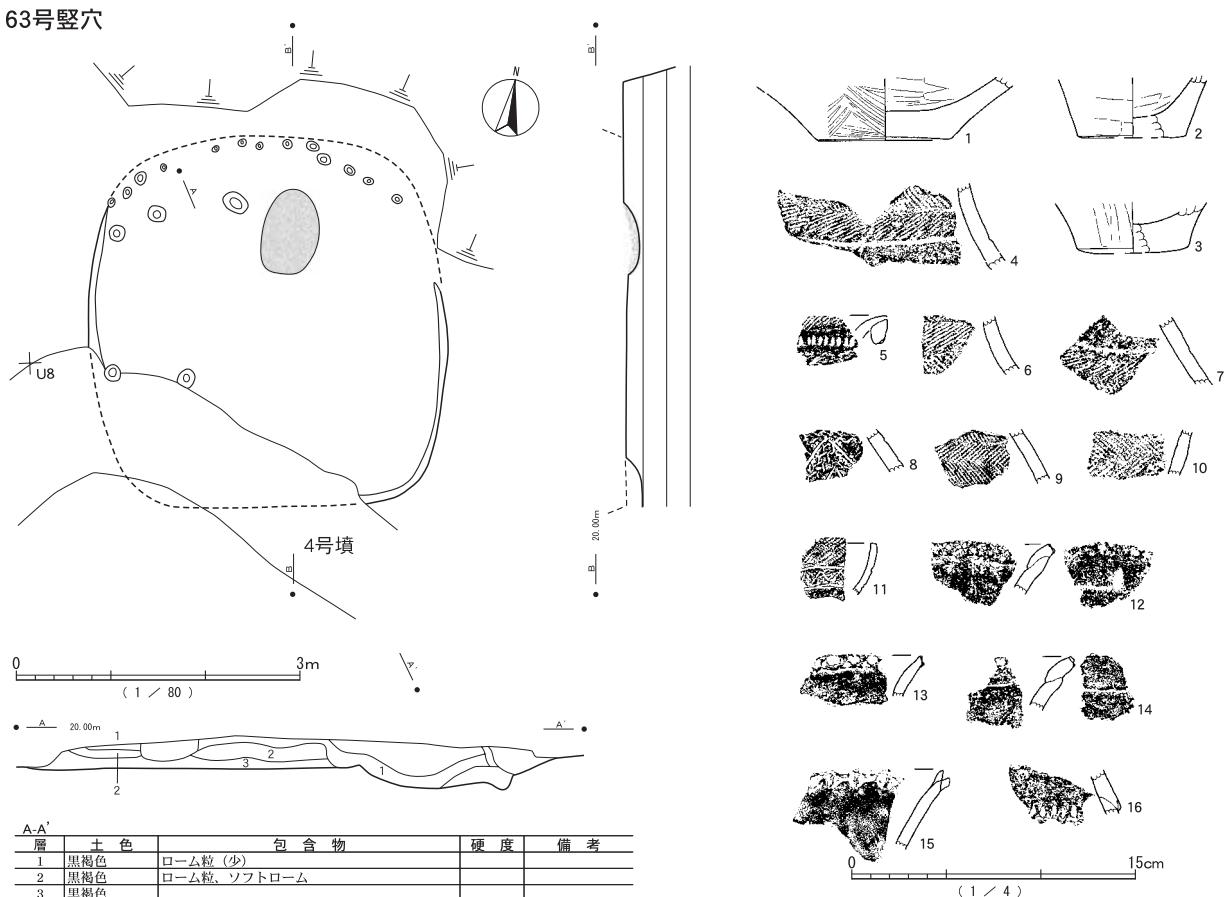
本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式新段階から山田橋1式、ここでは根田代4期に推定しておく。

遺構と遺物 竪穴

62号竪穴



63号竪穴



A-A'	層	土色	包含物	硬度	備考
1	1	黒褐色	ローム粒 (少)		
2	2	黒褐色	ローム粒、ソフトローム		
3	3	黒褐色			

第111図 62号竪穴 遺構遺物、63号竪穴 遺構遺物

64号竪穴（第112図、図版17・101）

64号竪穴（住居）は、A地点U6・U7・U8・V6・V7・V8区に所在する。壁面は北側部分のみ残存し、壁面は最大15cmほどである。南半部は1号道路によって主柱穴以外ほぼ全損し、北半部も4号墳と7号墳が縦横断する。また、南東部で67号竪穴と一部重複関係にあるとみられるが、遺構検出状況では新旧関係は明らかでない。床面レベルは、本竪穴の方が35cmほど高い。竪穴形態は橢円形と推定されるが不確実である。主柱穴は4箇所検出されている。この他にも壁際を中心に数箇所の小Pitがみられる。竪穴平面規模は、推定で主軸9.10m×副軸7.62m、主柱穴の柱間は主軸4.20m×副軸4.62mを測る。掘形面積は推定で59.09m²である。主軸方位はN-46°-Wである。炉は西寄りに1箇所認められた。炉覆土内から1が出土しており、埋設土器と推定される。

出土土器は、1・4・5が壺形土器、2・3が甕形土器、6～8が椀ないし高杯形土器である。2・3以外は、久ヶ原式に比定される。1の壺形土器は、振幅のあまり広くない充填单節羽状縄文の山形縄文帯をもつ。椀ないし高杯形土器のうち、7は口縁部が有段となり、幅広の口縁端部をもつ。8の横帯縄文は沈線区画である。

本竪穴の所属時期は、久ヶ原2式新段階、根田代3期と推定される。67号竪穴との新旧関係は、本竪穴が古いと判断しておきたい。

65号竪穴（第113図、図版17・53・79・101）

65号竪穴（住居）は、A地点T5・T6・U5・U6区に所在する。壁面はほぼ全周するが、壁高は北辺部で最大約40cmを測り、南へ向かって浅くなる。北東隅で4号墳と重複し、7号墳周溝が南北に縦断する。ただし、4・7号墳とも周溝底は床面に達していない（写真図版17）。南側に隣接して66号竪穴が所在する。竪穴形態は隅丸長方形を呈する。主柱穴は4箇所で検出されている。竪穴規模は、主軸4.67m×副軸4.30m、主柱穴の柱間は主軸2.44m×副軸2.27mを測る。掘形面積は16.62m²である。主軸方位は推定で、N-55°-Eであり、他の竪穴とは明らかに異なる方位をとる。壁溝はほぼ全周し、最大10cmほどの深さである。

出土遺物は、竪穴西辺部壁際を中心として床面直上より、1～4・6・45が出土している。1・34・36～39が壺形土器、2が浅鉢形土器、3～5が椀形土器、40～44が椀ないし高杯形土器、6・7・16～30・32・35が甕形土器、31が広口壺形土器である。1は、幾何学文様帯もつ壺形土器である。破片上端に回転結節文が認められ、横帯縄文の区画文の可能性がある。下部文様帯は、山形縄文帯の分断による斜行文帯からなり、羽状無節縄文、さらに沈線が充填される。八字状斜行文間は山形縄文帯で連結される。この部分の縄文施文は横回転で、無文部は磨消される。他に、椀形土器が目立つが、器形的には外反する口縁をもち、浅鉢状を呈す。基本的に無文であるが、2は口縁端部に押捺をもつ可能性がある。40の椀ないし高杯形土器は、付加条3種を地文とする。33は、撲糸文が施文される。付加条の可能性もあるが、軸縄は確認できない。類例は60号竪穴（第68図）にあり、常総系の可能性がある。45は、紡錘車と推定される有孔の土製円盤である。穿孔は焼成前による。

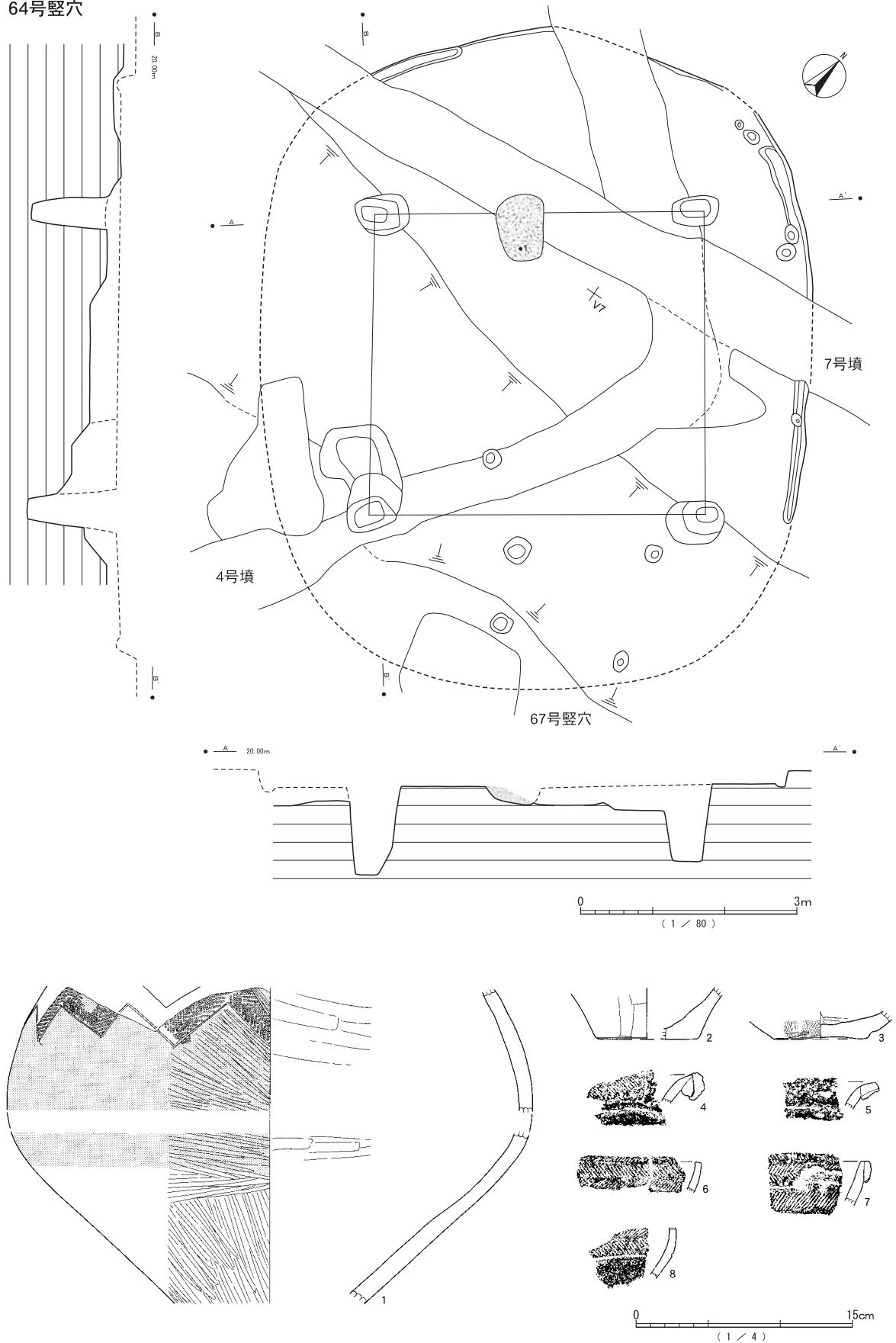
本竪穴の所属時期は、床面出土土器から、山田橋2式期、根田代5期と考えられる。

66号竪穴（第114図、図版17）

66号竪穴（住居）は、A地点T5・U5区に所在する。壁面は、斜面地形のため南辺部が失われている。壁高は最大30cmほどある。7号墳周溝と重複し、周溝底が部分的に床面まで達している。竪穴形態

遺構と遺物 竪穴

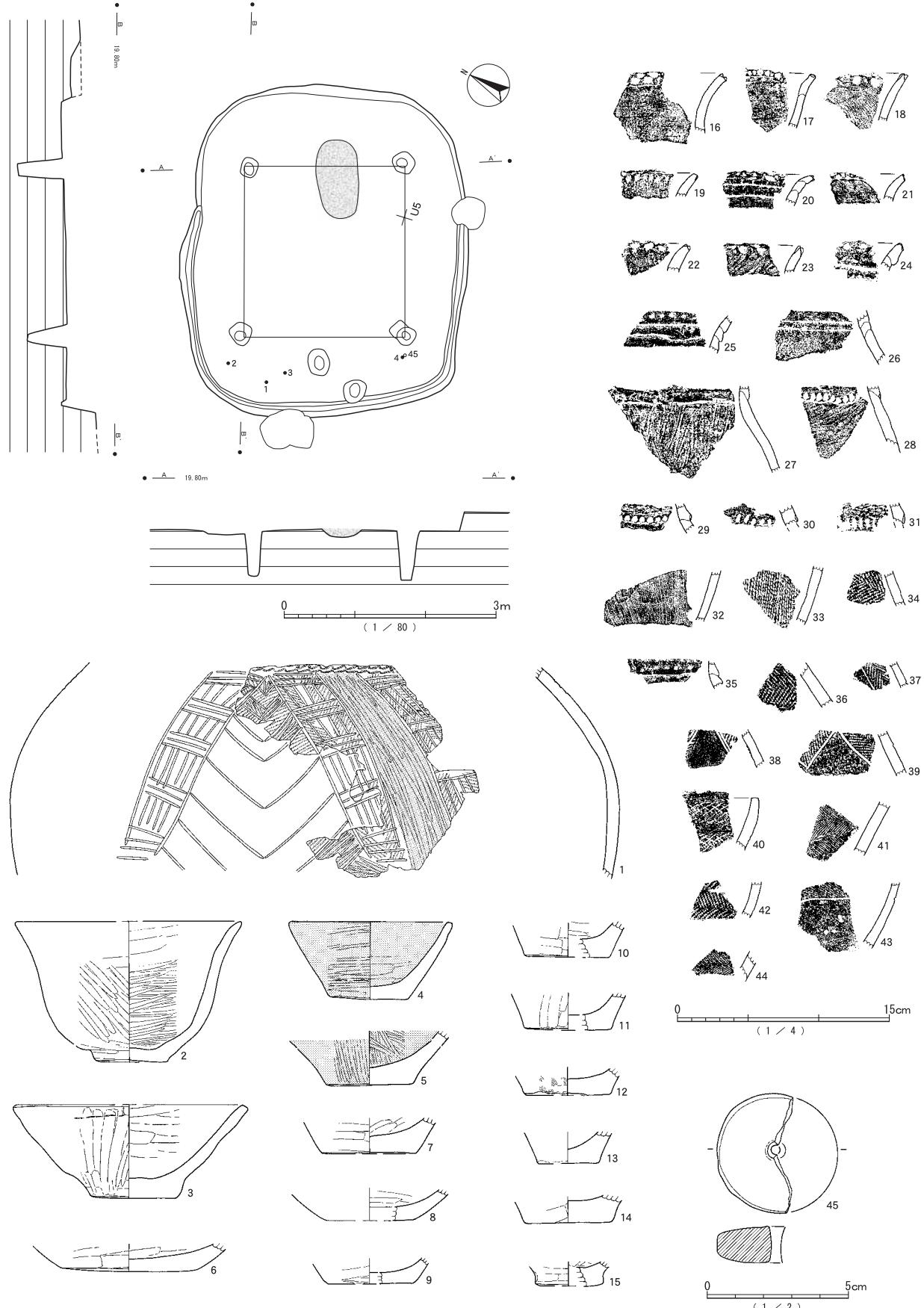
64号竪穴



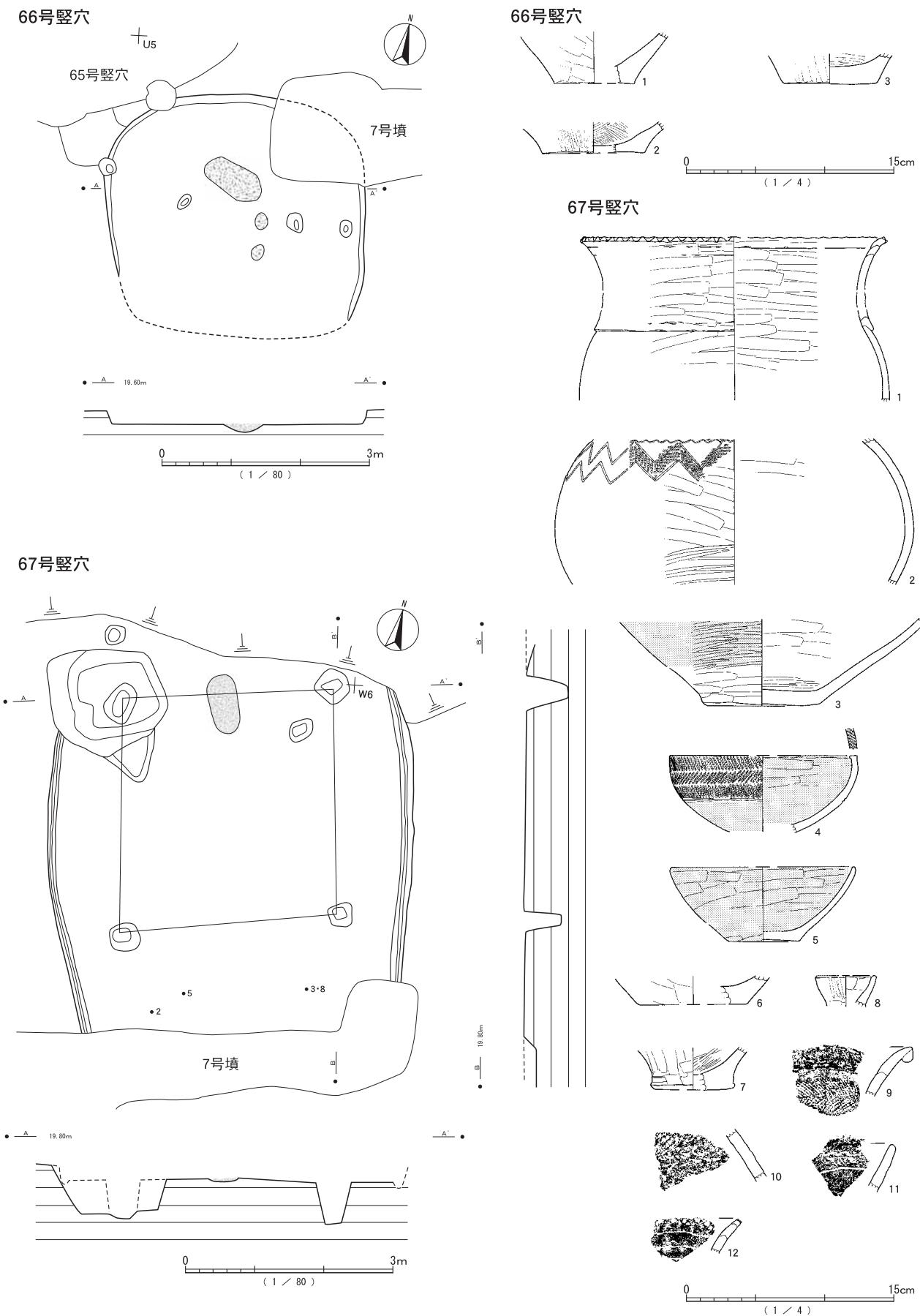
第112図 64号竪穴 遺構遺物

遺構と遺物 竪穴

65号竪穴



第113図 65号竪穴 遺構遺物



第114図 66号竪穴 遺構遺物、67号竪穴 遺構遺物

は胴張り隅丸方形を呈する。主柱穴は検出されないが、不規則に並ぶ数箇所の小Pitが検出されている。竪穴規模は、主軸推定3.50m×副軸は3.77mを測り、掘形面積は推定で11.77m²である。主軸方位は、N-13.5°-Eである。壁溝は検出されていない。床面は硬く踏みしめられており、東側でやや凹凸がみられる。

出土土器は、いずれも底部のみであり、時期的な特定ができない。

67号竪穴（第114図、図版18・101）

67号竪穴（住居）は、A地点V5・V6・V7・W6区に所在する。壁面は東西両辺部のみ残存し、壁高は最大20cmほどである。7号墳墳丘部内にあり、南、東辺部壁際に周溝が巡るが、東辺部は周溝底が床面に達していない。北辺部は1号道路によって破壊される。また、64号竪穴と一部重複している可能性がある。竪穴形態は、胴張り隅丸長方形を呈するとみられる。主柱穴は4箇所で検出された。竪穴規模は、主軸方向が残存部で5.48m、副軸は5.32m、主柱穴の柱間は主軸3.40m×副軸3.64mを測る。掘形面積は推定で19.0m²である。主軸方位は、N-19.5°-Wである。壁面残存部では直下に壁溝が検出されている。北西部主柱穴の周囲で、一辺約1.3mの方形土坑が検出されているが、性格、時期は明らかではない。深さは本竪穴の柱穴底面とほぼ同じである。

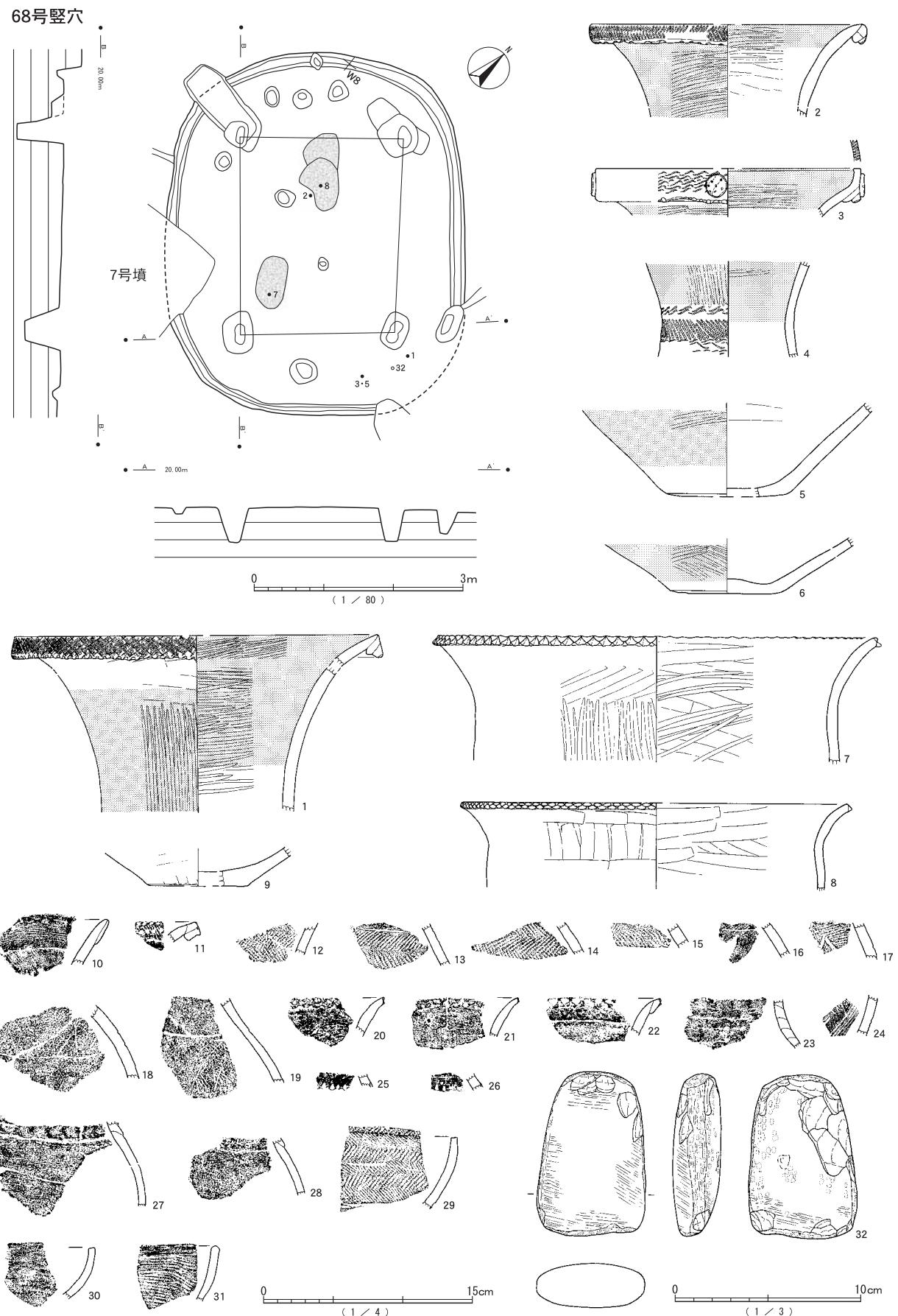
出土遺物は、南側床面直上より2・3・5・8が出土している。出土土器は、1・7・12が甕形土器、2・3・9・10が壺形土器、5が椀形土器、4・11が椀ないし高杯形土器である。8は小形の壺形土器であろうか。2は山形縄文帯をもつ壺形土器である。山形縄文帯は振幅、波長とも収縮し、沈線区画内に単斜縄文が充填される。山形文帯上部に回転結節文が認められる。10の横帯縄文も結節区画となるが、4は沈線区画である。1の甕形土器は、口縁部が有段となるが、頸部の収縮が弱く、段部位置の降下がみられる。

本竪穴の所属時期は、山田橋1式期、根田代4期と考えられる。64号竪穴との新旧関係は、本竪穴が新しい。

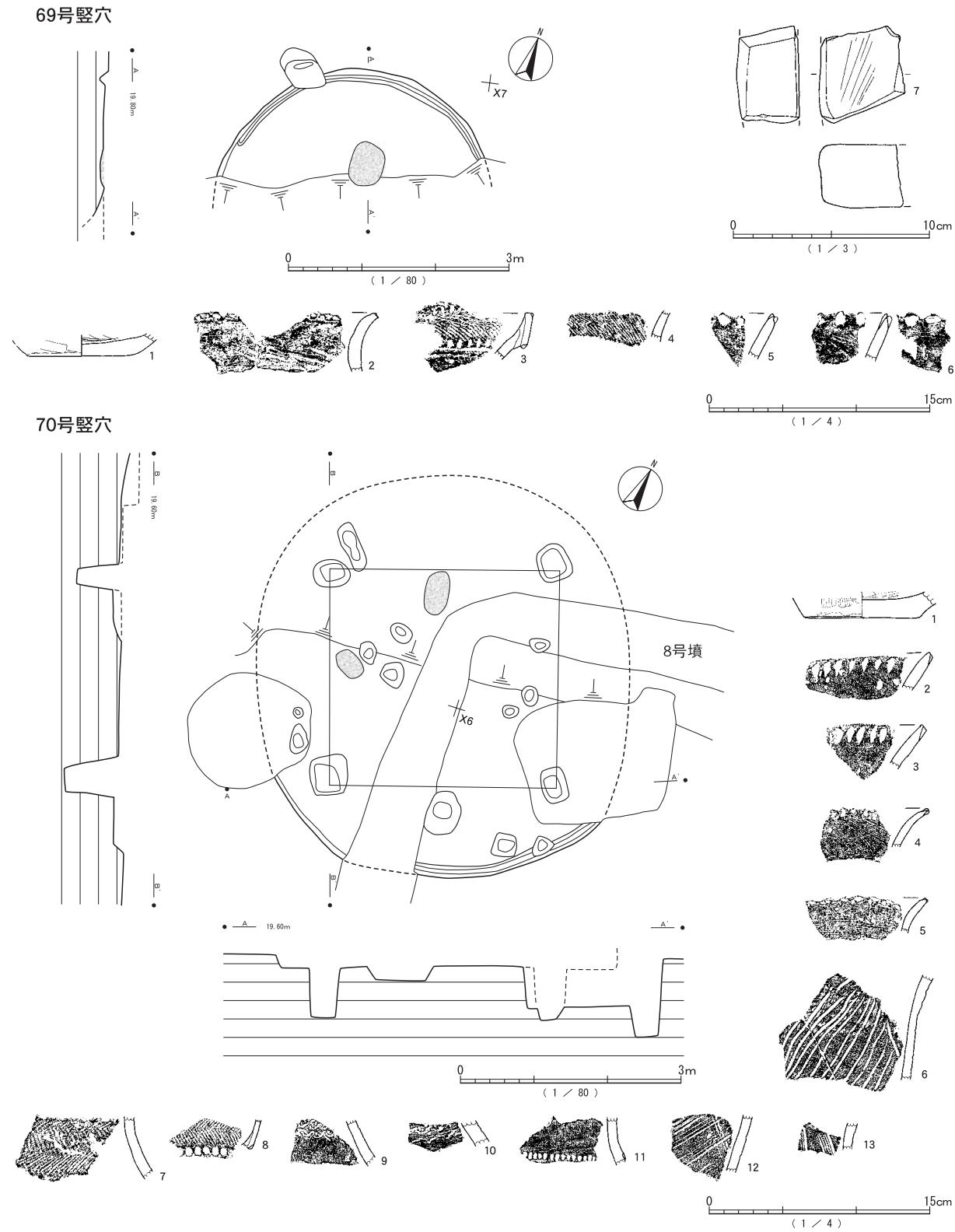
68号竪穴（第115図、図版17・53・77・101・102）

68号竪穴（住居）は、A地点V8・V9・W8・W9区に所在する。壁面はほぼ全周するが、壁高は最大でも20cmほどと浅い。南西側で7号墳周溝と一部重複する。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈する。主柱穴は4箇所、他に、北辺部壁際に複数の小Pitが検出されている。竪穴規模は、主軸5.22m×副軸推定4.28m、主柱穴の柱間は主軸2.78m×副軸2.60mを測り、掘形面積は19.56m²である。主軸方位は、N-50°-Wである。壁溝は、壁面検出部分では直下に検出されている。炉は北寄りに1箇所、南西主柱穴寄りに1箇所認められた。南側の炉内には、7の土器が埋設された状態で検出されている（写真図版17）。他に、炉内から1・8・24・28が出土している。床面からの出土遺物は、2・3・5・13・15・19・25・26・29・32である。1・3・5など南東隅付近にまとまりが認められる。

出土土器は、1～6・10～19が壺形土器、7・8・20～28が甕形土器、29～31が椀ないし高杯形土器である。1・2の壺形土器口縁部は、多段に粘土を貼り付け、断面が三角形状の厚みのある複合部をつくる。3の複合口縁は、複合部が直立し受け口状となる。施文は、2が単節羽状縄文であるが、1は附加条3種、3は回転結節文である。4の頸部横帯縄文は、単斜縄文上下を回転結節文で区画する。下部結節文は、羽状縄文段間への施文の可能性がある。18・19の横帯縄文は、沈線による区画内を斜格子沈線で充填する。縄文施文は認められるが、器面状態が不良で原体は明らかではない。7・8の甕形

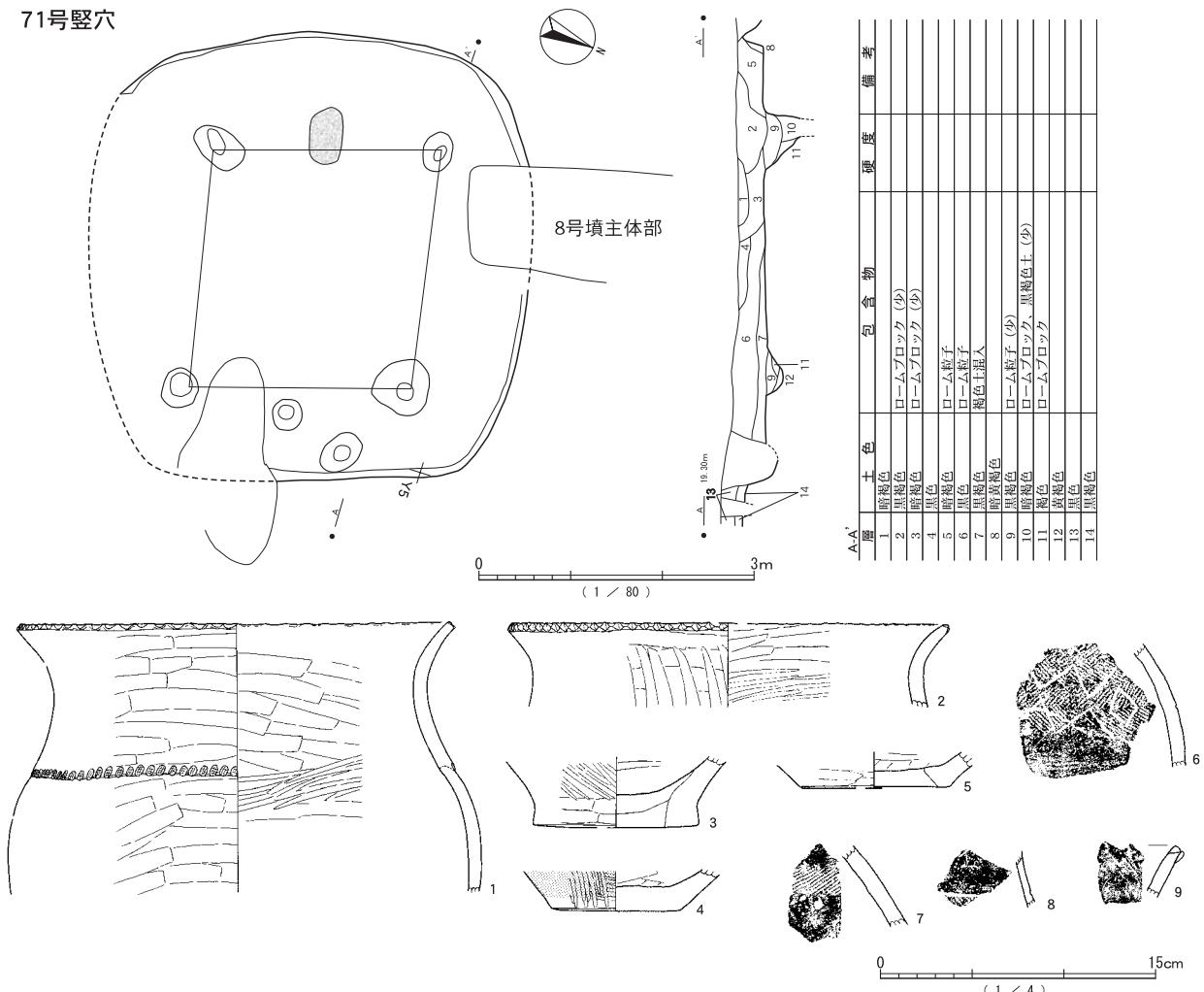


第115図 68号竪穴 遺構遺物



第116図 69号竪穴 遺構遺物、70号竪穴 遺構遺物

土器は、深い交互押捺の口縁端部に、胴部の張りの弱い器形をとる。22は口縁部が有段となる。32は敲打器であろうか。自然面を残すと思われるが、部分的に研磨による整形痕が認められる。形状は石斧に似るが、刃部の作り出しが明確ではない。側縁全体に敲打痕および研磨痕がみられ、これを使用痕と考えるならば、敲石、磨石としての利用が想定できる。



第117図 71号竖穴 遺構遺物

本竪穴の出土土器は、甕形土器の器形などに、山田橋式前段の特徴が認められるものの、ここでは、山田橋1式期、根田代4期に比定しておく。

69号竪穴 (住居) (第116図、図版18・78・102)

69号竪穴(住居)は、A地点W7区に所在する。壁面は北辺の一部が遺存するのみであり、壁高も最大で15cmほどと浅い。南半部はすべて1号道路によって失われている。またこの部分で、70号竪穴と重複していたと推定されるが、重複部分が破壊されているため、新旧関係は不明である。残存部の床面レベルは、本竪穴の方が30cmほど高い。竪穴形態は橢円形を呈していたとみられる。主柱穴は検出されていない。竪穴規模は、残存部で主軸1.58m×副軸3.40mを測る。主軸方位は推定で、N-33°-Wである。

出土土器は、2・4~6が甕形土器、3が壺形土器である。出土状況の詳細は明らかではない。3は、複合口縁の壺形土器であり、やや外斜する複合部をもつ。7は、砂岩製の砥石である。研磨は側3面で認められ、ミガキ状の光沢線を残す。

出土土器は、時期的に混在しているが、3の壺形土器を根拠とするならば、根田代5期に比定される。

70号竪穴 (住居) (第116図、図版18・102)

70号竪穴(住居)は、A地点W6・W7・X6・X7区に所在する。壁面は南側の一部が残存するのみで

あり、壁高は最大で約10cmと浅い。北半部はすべて1号道路によって破壊され、残存する南側も中央部を8号墳の周溝が縦横断する。また、後世の土坑とも重複する。竪穴形態は橢円形を呈していたとみられる。主柱穴は4箇所、この他にも数箇所の小Pitが検出されている。竪穴規模は、推定で主軸5.48m×副軸5.30m、主柱穴の柱間は主軸2.96m×副軸3.12mを測り、掘形面積は推定で23.27m²である。主軸方位は、N-33°-Wである。南東側の壁面残存部で一部壁溝を検出している。炉は北寄りに1箇所、その南西側に1箇所認められた。床面は、残存部では全体的に硬く踏みしめられている。

出土土器は、2~6・11~13が甕形土器、7・9・10が壺形土器、8が椀ないし高杯形土器である。出土状況の詳細は明らかではない。2・3は同一個体と考えられる甕形土器であり、口縁端部にハケ工具による刻みが施される。6は甕形土器であり、沈線による横走羽状文であろうか。9・10は回転結節文であるが、区画によるものかどうかは不明。

これらの出土土器は、時期的に混在しており、本竪穴の所属時期を推定することは難しい。ただ、主柱穴柱筋に対する炉位置からみると、根田代1期の可能性がある。これが妥当であるならば、69号竪穴が新しい。

71号竪穴（第117図、図版18・54・102）

71号竪穴（住居）は、A地点X5・X6・Y5区に所在する。壁面は南側以外ほぼ残存し、壁高は北辺部で最大40cmを測る。斜面地形のため南側は遺存していない。8号墳墳丘部内に位置し、北壁の一部は、8号墳主体部によって失われている。竪穴形態は、胴張り隅丸方形を呈する。主柱穴は4箇所、竪穴規模は主軸4.86m×副軸推定4.82m、主柱穴の柱間は主軸2.64m×副軸2.48mを測り、掘形面積は推定で20.67m²である。主軸方位は、N-116°-Wである。壁溝は検出されていない。床面はソフトローム上に形成され、平滑だが全体に軟弱である。

出土土器は、1・2・5・9が甕形土器、3・4・6~8が壺形土器である。出土状況の詳細は明らかではない。1は、胴部有段の甕形土器であり、胴部上半2/3を遺存することから、一応本竪穴にともなう可能性を想定しておきたい。6の壺形土器は、横回転の単節羽状縄文4段以上に沈線菱形文を重ねる。沈線区画外は部分的に磨消される。

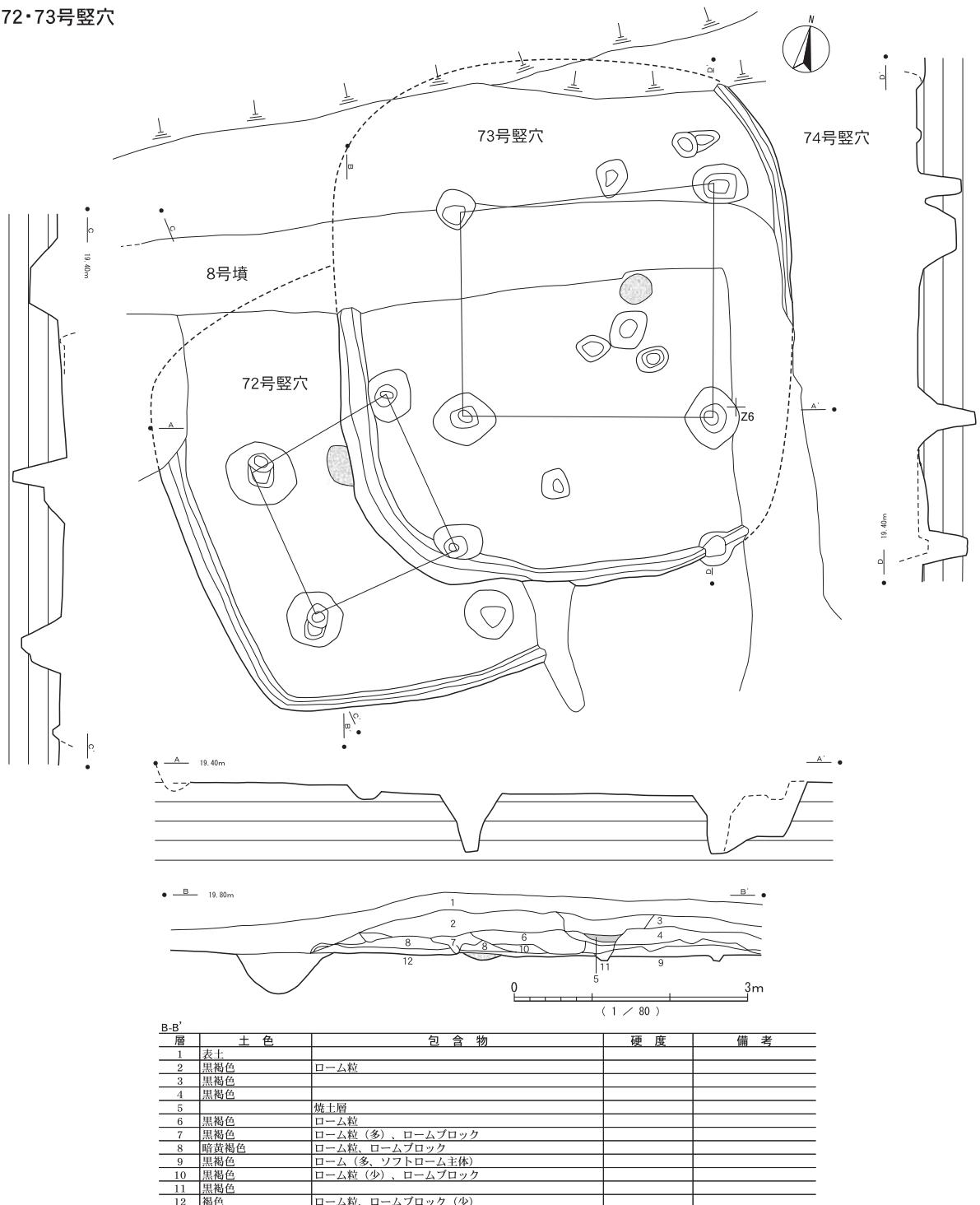
本竪穴の所属時期は、山田橋2式期、根田代5期と推定しておきたい。

72号竪穴（第118・119図、図版18・54・102・103）

72号竪穴（住居）は、A地点X6・X7・Y6・Y7区、8号墳墳丘部内に所在する。壁面は南西側の一部のみ残存するが、壁高は最大でも15cmほどと浅い。壁面残存部では直下に深さ最大15cmほどの壁溝が認められる。北側で8号墳周溝と重複し、東側大半は73号竪穴によって破壊される。床面レベルは本竪穴の方が10cmほど高い。竪穴形態は隅丸方形を呈するとみられ、主柱穴は4箇所で検出された。炉は中央北寄りに1箇所認められた。竪穴規模は推定で、主軸5.60m×副軸4.34m、主柱穴の柱間は主軸2.18m×副軸1.98mを測り、掘形面積は推定22.01m²である。主軸方位は、N-33.5°-Wである。72号竪穴との新旧関係は、覆土断面図などから判断することはできないが、本竪穴の炉が73号竪穴に切られている可能性があり、この場合本竪穴が古いことになる。

遺物は、73号竪穴と一緒に取り上げられており、出土位置、帰属は明らかではない。土器は、宮ノ台式と山田橋式におおむね区分することができるが、後述するように、山田橋式については、74号竪穴に帰属する可能性がある。本竪穴は、宮ノ台式期、根田代1期と推定しておきたい。炉位置な

72・73号竪穴



第118図 72号竪穴(1) 遺構、73号竪穴(1) 遺構

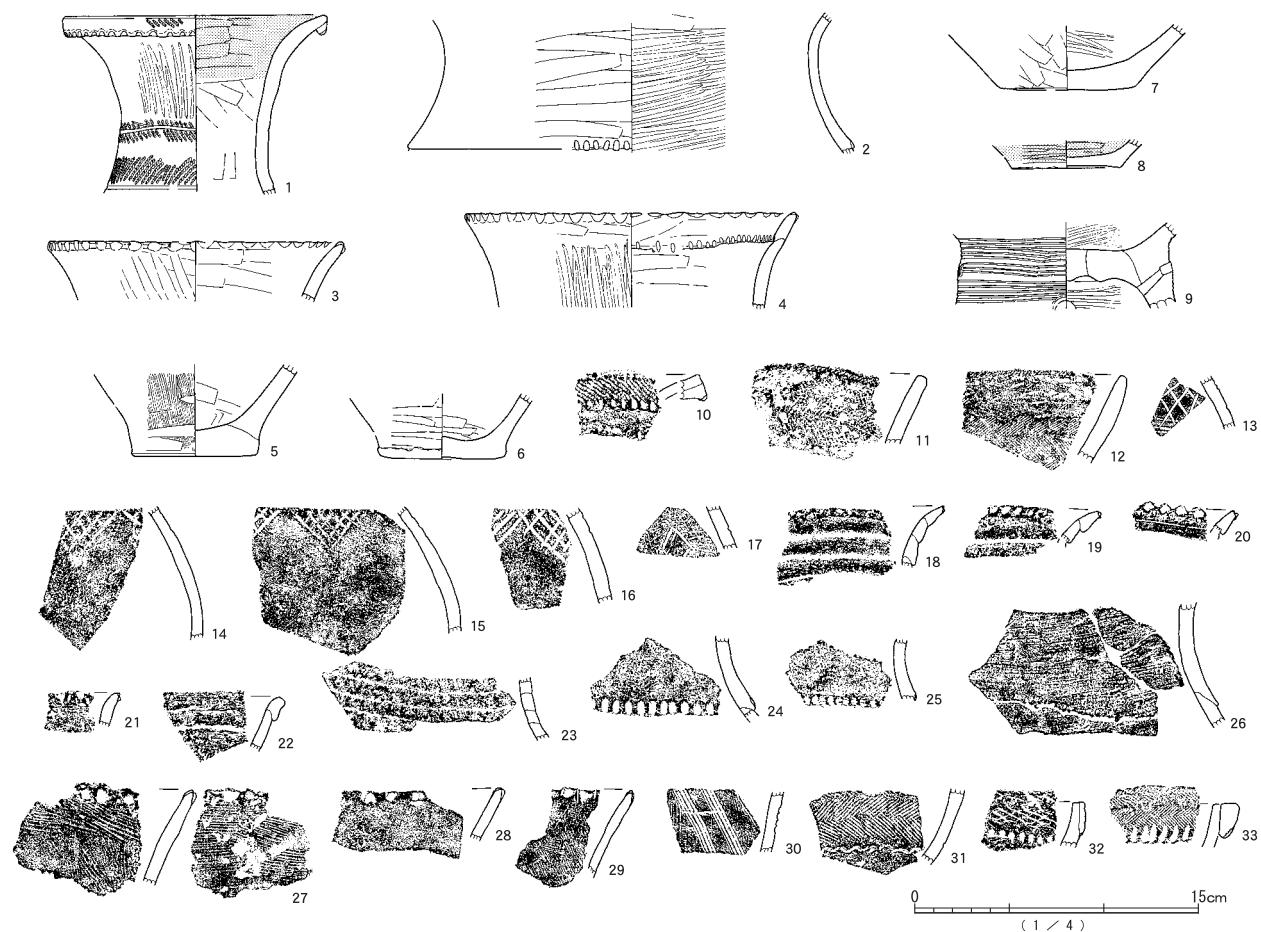
ど竪穴形態も矛盾しない。この場合、3・4・9・14～16・27～30が本竪穴および73号竪穴に帰属する可能性がある。14～16は沈線充填の鋸歯文であり、無文部は赤彩される。地文は認められない。

73号竪穴 (第118・119図、図版18・54・102・103)

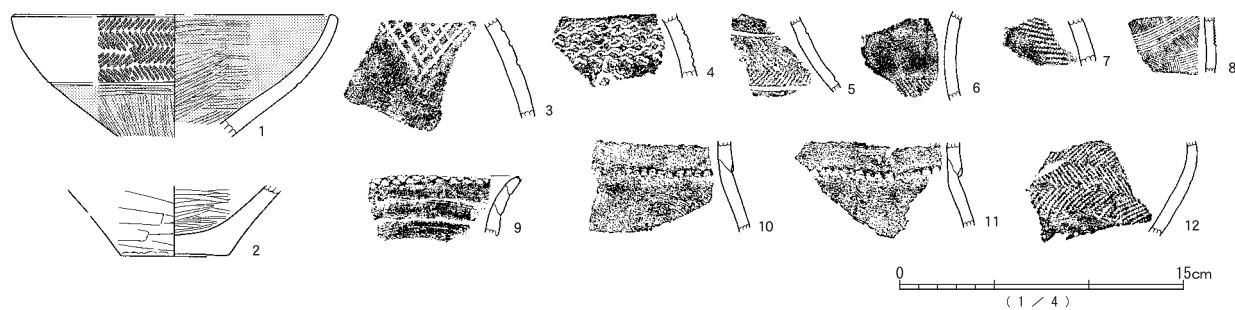
73号竪穴(住居)は、A地点Y6・Y7・Z7区に所在する。壁面は東辺の一部と南西側の一部のみ残存し、壁高は5cmほどと浅い。壁面残存部では直下に深さ最大10cmほどの壁溝が認められた。北辺部は1号道路によって破壊され、8号墳周溝が縦横断する。また、上部には土壘状の土手が築かれていた。

遺構と遺物 竪穴

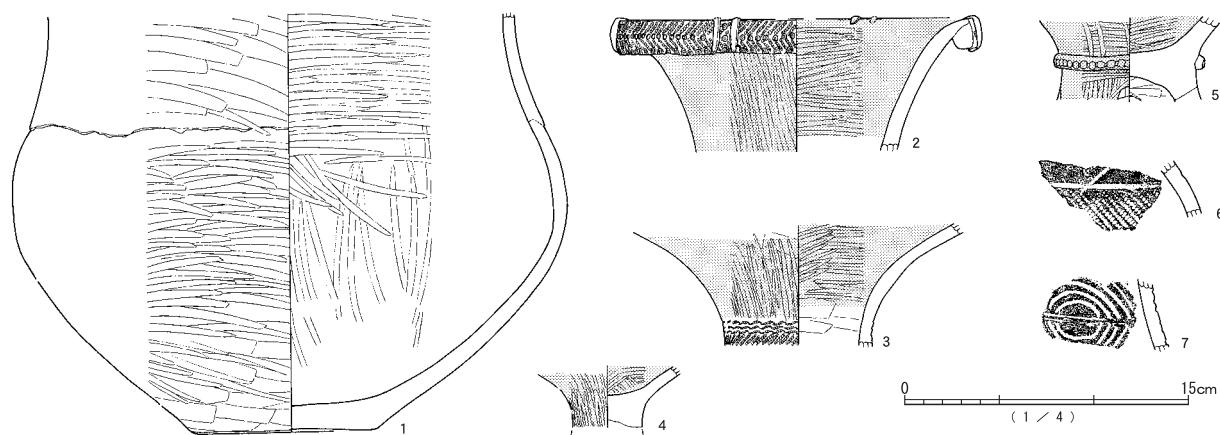
72・73号竪穴



74号竪穴



76号竪穴



第119図 72号竪穴(2) 遺物、73号竪穴(2) 遺物、74号竪穴(1) 遺物、76号竪穴(1) 遺物

72・74号竪穴と重複する。新旧関係は不確実であるが、72号竪穴については本竪穴が新しい可能性がある。床面レベルは本竪穴の方が10cmほど低い。竪穴形態は胴張り隅丸長方形を呈し、主柱穴は4箇所、この他にも数箇所の小Pitが検出されている。炉は北寄りに1箇所認められたが、本来の炉は、8号墳周溝によって破壊されたと推定される。竪穴規模は、主軸推定6.70m×副軸5.80m、主柱穴の柱間は主軸3.00m×副軸3.27mを測り、掘形面積は推定で35.22m²である。主軸方位は、N-12°-Wである。

遺物は、72号竪穴と一緒に取り上げられており、出土位置、帰属は明らかではない。ただ、前述したとおり、土器は、宮ノ台式と山田橋式におおむね区分することが可能であり、新旧関係から、少なくとも72号は宮ノ台式期に比定される。しかし、本竪穴の竪穴形態も宮ノ台式期の可能性がある。74号竪穴との新旧関係は、掘り上がり状況からは本竪穴が掘り込んでいるようにみえるが、74号竪穴出土土器から判断すると、本竪穴覆土上に74号が存在していた可能性がある。その場合、72・73号として取り上げられた土器には、本来74号に帰属すべき土器が含まれることとなる。ここでは、本竪穴の所属時期を、根田代1期と考えておく。なお、1の壺形土器は、筒状の頸部に沈線区画の横帯縄文を配置する。11・12は、口縁部に単節羽状縄文を施文する壺形土器である。12は、口縁段部が剥落しており、椀形土器の可能性もある。31～33は、椀ないし高杯形土器であり、32・33は口縁部が有段となる。32は、附加条3種の施文による。

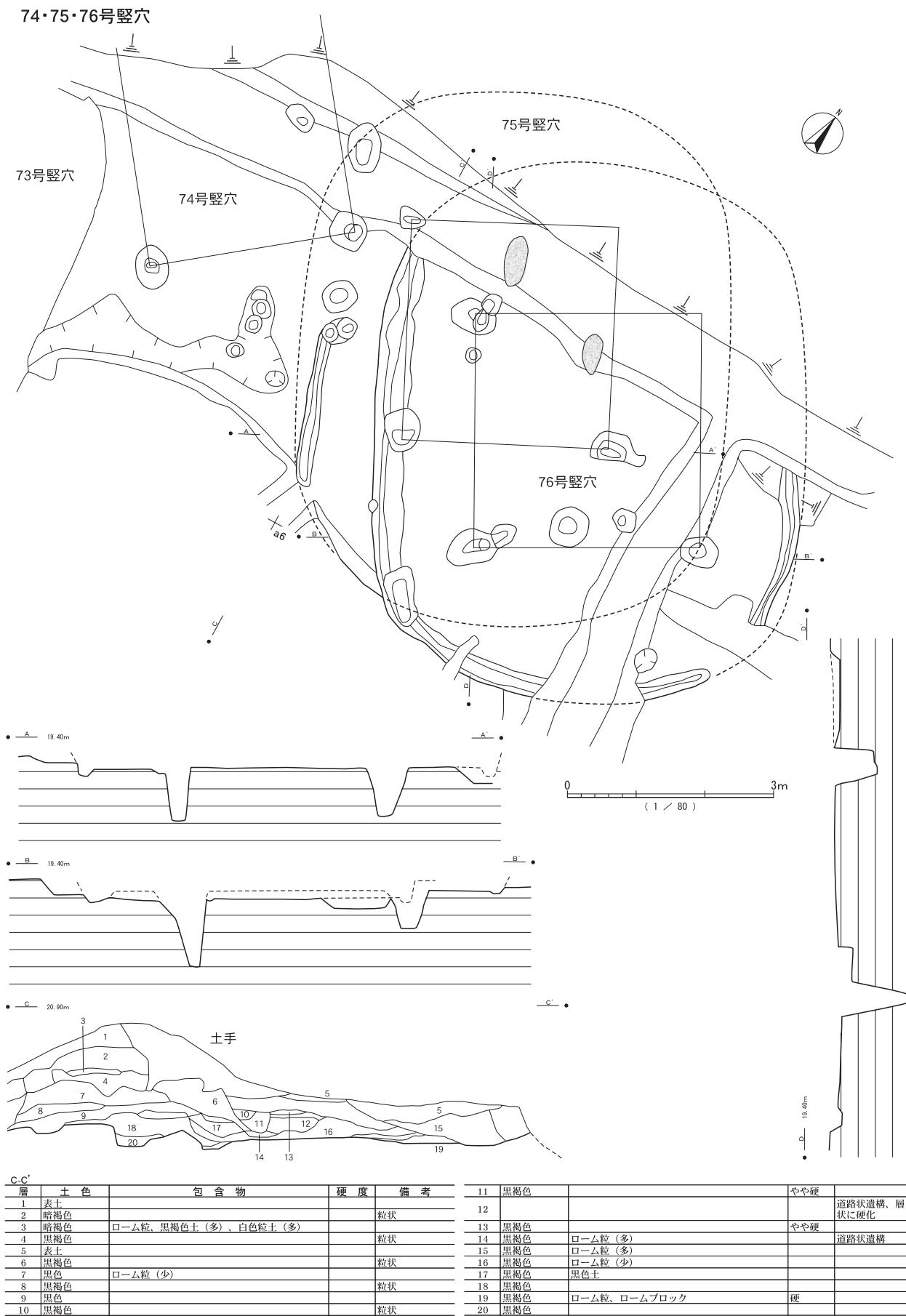
74号竪穴（第119・120図、図版18・103）

74号竪穴（住居）は、A地点Z7区に所在する。北側は土採り、1号道路によって失われ、また上部には、1号道路に関連すると推定される土手が築かれ、保存状態は極めて悪い。現状では、主柱穴、貯蔵穴および床面の一部、土器の出土から竪穴住居跡と判断できるにすぎない。75号竪穴および73号、76号竪穴、8号墳とも重複する。新旧関係は、遺構の検出状況からは明らかではない。竪穴規模については不明。主軸方位は推定でN-49°-Wと考えられる。

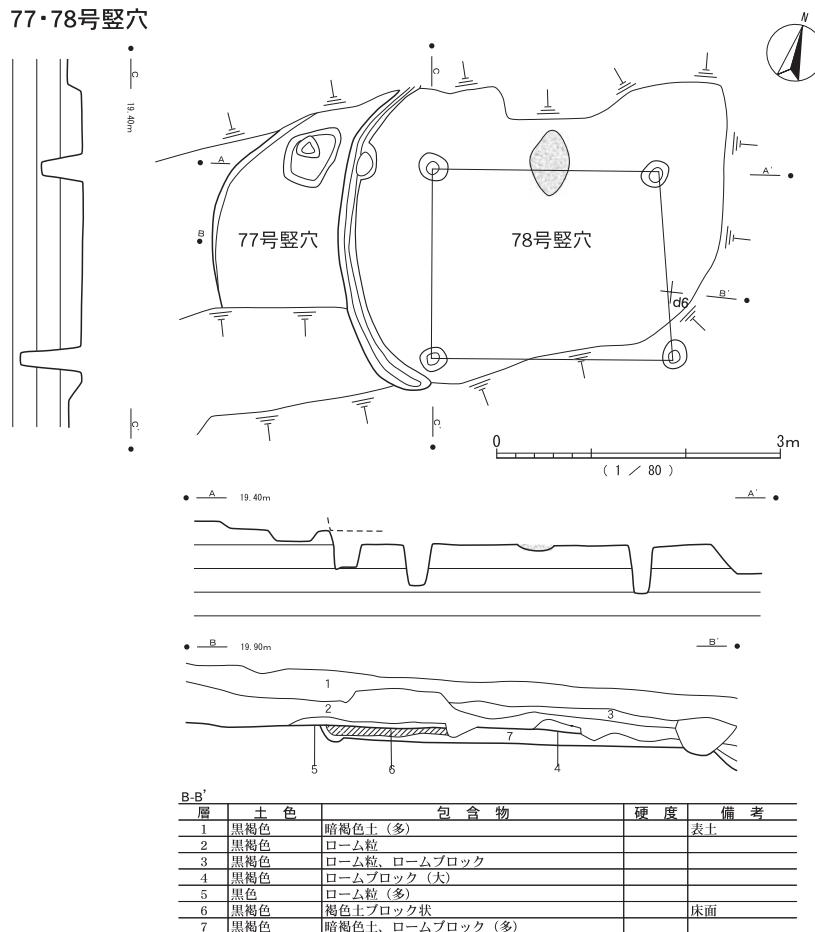
遺物出土状況の詳細は明らかでない。1・12が椀ないし高杯形土器、3～7が壺形土器、8～11が甕形土器である。3の鋸歯文は、72・73号竪穴の14～16と同一個体と推定される。1は、口縁部に沈線区画の単節羽状縄文4段を施文する。12の横帯縄文は無区画である。10・11は、胴部有段の甕形土器であり、段部に布目圧痕を残す押捺を加える。これらは、久ヶ原2式古段階から山田橋1式と推定される。前述のとおり、72・73号竪穴出土土器の一部も本竪穴に帰属する可能性が高く、ここでは、所属時期を根田代4期に比定しておく。

75号竪穴（第120図、図版18）

75号竪穴（住居）は、74号竪穴の東、A地点Z7・a7区に所在する。北側は後世の土採りや1号道路によって失われていた。また、西側で74号竪穴と、東側大部分が76号竪穴と重複しており、壁面は南側でその一部が確認できたにすぎない。この部分での壁面の高さは最大25cmほどであった。西側一部で深さ5cm程度の壁溝を検出している。竪穴形態は楕円形ないし胴張り隅丸長方形、主柱穴は4箇所あったとみられるが、北東側の1箇所は後世の土採りによって失われていた。炉は北寄り1箇所で火床面の一部が残存していた。竪穴規模は、推定で主軸7.80m×副軸6.26m、主柱穴の柱間は主軸3.19m×副軸3.00mを測り、掘形面積は推定で42.65m²である。主軸方位は、推定でN-38°-Wである。なお、南東部主柱穴南側に、貯蔵穴と推定されるPitが検出されている。主柱穴配置と竪穴南隅部の



第120図 74号竪穴(2) 遺構、75号竪穴 遺構、76号竪穴(2) 遺構



第121図 77号竪穴 遺構、78号竪穴 遺構

壁面、壁溝との関係はやや不自然であり、竪穴規模は一回り小さくなる可能性もある。

遺物は、検出されていない。したがって、本竪穴の所属時期も確定できない。

76号竪穴 (第119・120図、図版18・54・103)

76号竪穴(住居)は、75号竪穴の東、A地点a6・a7・b7区に所在する。北側は後世の土採りや1号道路によって失われていた。壁面は南側の一部のみ残存し、壁高は最大で30cmほどである。東西辺部では壁面は失われていたが、深さ最大10cmほどの壁溝が残存していた。本竪穴は大部分が75号竪穴と重複している。遺構検出状況では、この竪穴との新旧関係は明らかではない。また、北東部で74号竪穴と接している。主柱穴は4箇所あったとみられるが、北東側の1箇所は後世の土採りによって失われていた。竪穴形態は橢円形を呈していたとみられ、炉は主軸線上北寄りに火床面の一部が残存していた。竪穴規模は、推定で主軸7.78m×副軸6.22m、主柱穴の柱間は主軸3.40m×副軸3.28mを測り、掘形面積は推定で42.67m²である。主軸方位は、N-38°-Wと推定され、75号とほぼ同方向である。

出土土器は、1が甕形土器、2・3・6・7が壺形土器、4・5が高杯形土器である。出土状況の詳細は明らかではない。2の壺形土器は、厚みがありほぼ直立する口縁複合部をもつ。単節羽状縄文を地文とし、棒状の貼付文は2列6単位と推定される。3は、収縮した頸部に結節区画の横帯縄文をもつ。5の高杯形土器は、脚部に三角形と推定される透かし孔が穿たれる。

本竪穴の所属時期は、根田代4期に比定される。

77号竪穴（第121図、図版19）

77号竪穴（住居）は、A地点c7区に所在する。北側は後世の土採りや道路跡によって失われ、南側も斜面地形のため遺存していなかった。壁面は西辺の一部のみで検出され、高さは最大10cmほどであった。本竪穴は大部分が78号竪穴と重複しているが、遺構の検出状況によれば、本竪穴床面の方が20cmほど高いものの、78号竪穴の覆土上に床面を形成していることから、新旧関係は本竪穴が新しい。主柱穴と考えられるものは検出されていない。また、炉や壁溝も検出できなかった。

遺物は、検出されていない。したがって、本竪穴の所属時期も確定できない。

78号竪穴（第121図、図版19）

78号竪穴（住居）は、A地点c6・c7区に所在する。北側は後世の土採りや道路跡によって失われ、南東側も斜面地形のため検出できなかった。77号竪穴と重複するが、本竪穴覆土上で77号竪穴の床硬化面が検出されていることから、本竪穴が古い。壁面は西辺の一部のみ残存し、壁高は最大で20cmほどである。主柱穴は4箇所あり、残存している壁面直下には、深さ5cmほどの壁溝が検出された。炉は北寄りに1箇所ある。竪穴規模は、残存部で主軸方向2.48m×副軸4.05m、主柱穴の柱間は主軸2.00m×副軸2.54mを測る。主軸方位は、推定でN-17°-Wである。

西壁付近床面直上から土器が出土しているが（写真図版19）、整理作業において、本竪穴の出土遺物は確認できなかった。炉位置などから、おそらく後期と推定されるが、所属時期は確定できない。

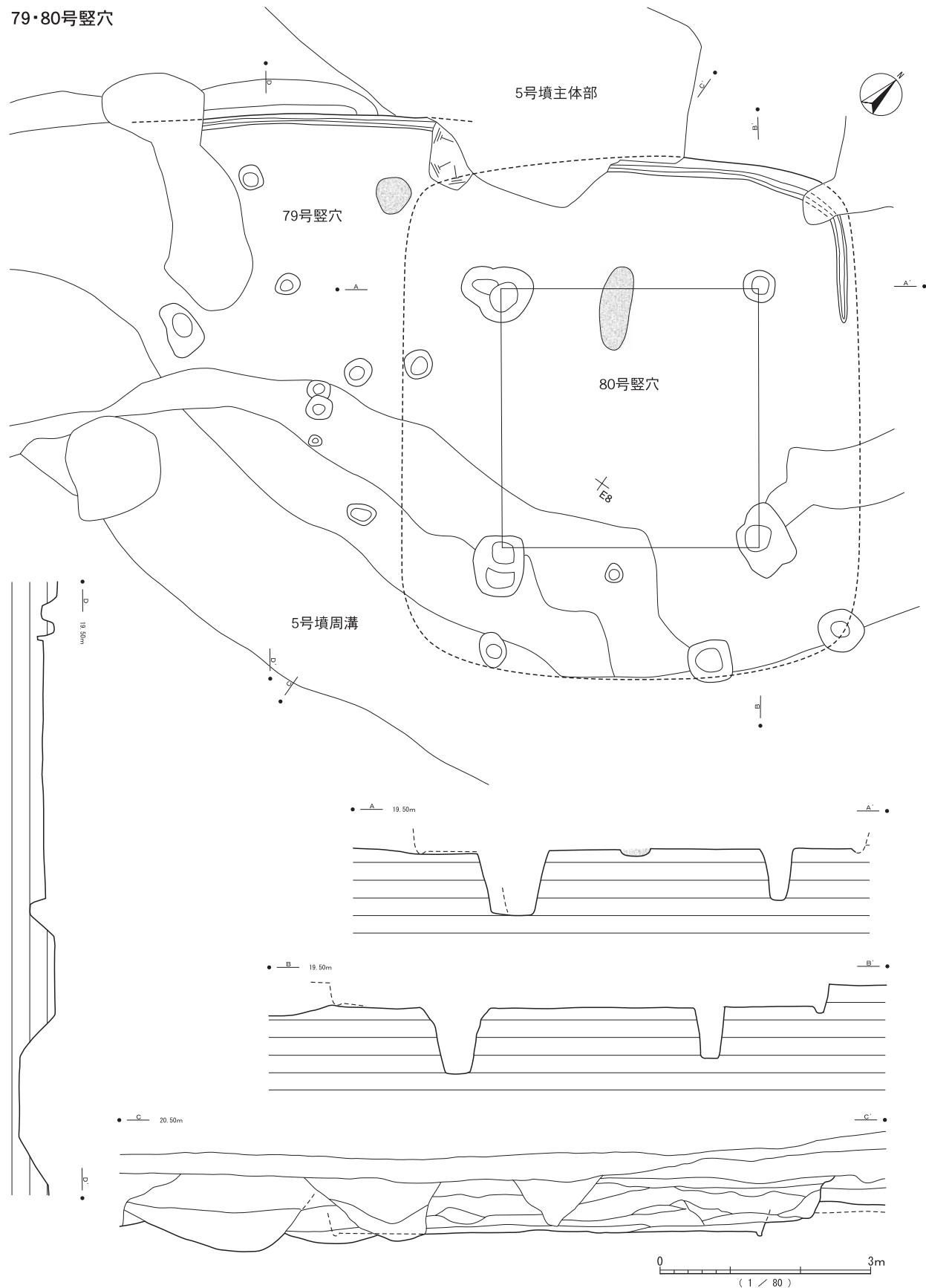
79号竪穴（第122・123図、図版19・54・55）

79号竪穴（住居）は、B地点F7・F8・G7・G8区に所在し、5号墳の墳丘下から検出された。南半部は、周溝によって失われており、壁面は、北辺部の一部が検出されたにすぎない。残存する壁面の高さはおよそ20cmである。壁下には、部分的に深さ5cmほどの壁溝が検出された。炉は遺存部北東寄りに1箇所検出された。主柱穴は検出されていないが、数箇所の小Pitはある。東側で80号竪穴と重複するが、この竪穴との新旧関係は、遺構検出状況からは明らかでない。床面レベルはほぼ同一である。主軸方位はN-46°-Wと推定される。

出土土器は、1が広口壺形土器、2・3が甕形土器、4・5が壺形土器である。1が床面直上より出土している。1・2にみられるように、頸部の屈曲が明確な稜線をもっていない点から、弥生時代終末期段階、根田代6期に比定することができる。重複する80号竪穴出土土器と同時期と判断されることから、79・80号竪穴出土土器の帰属には、若干の疑義がある。

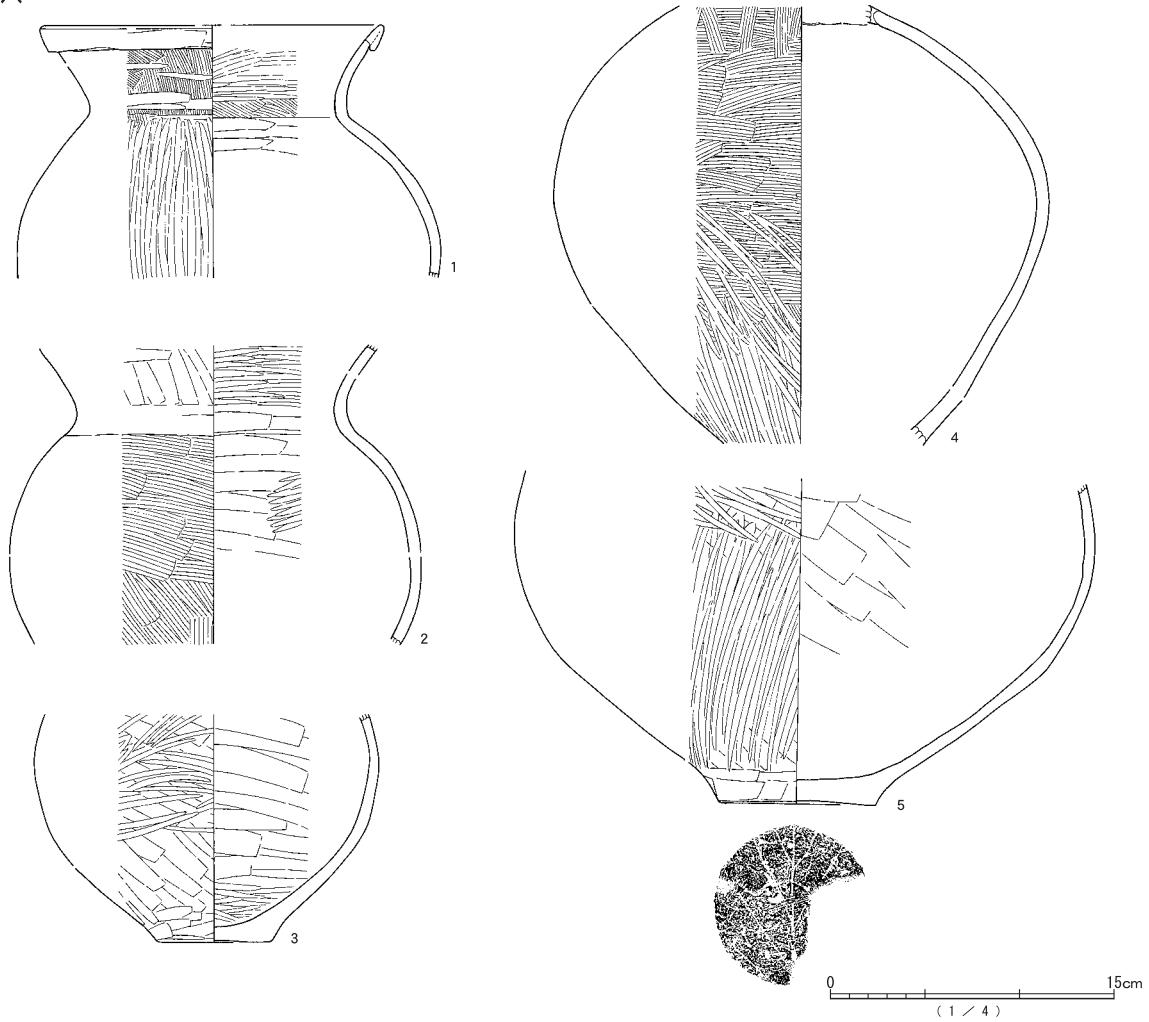
80号竪穴（第122～124図、図版19・55・56・103）

80号竪穴（住居）は、B地点E7・E8・F7・F8区に所在し、5号墳の墳丘下から検出された。南半部は、周溝によって失われており、壁面は、北東隅部周辺で検出されたにすぎない。残存する壁面の高さはおよそ30cmである。壁面遺存部では、深さ10cmほどの壁溝が検出されている。竪穴形態は隅丸長方形を呈していたとみられ、炉は主軸線上北寄りに1箇所、主柱穴は4箇所で検出された。主柱穴は重複が認められるが、抜き取り穴の可能性もある。南東辺の主軸線からやや北側へ寄って貯蔵穴がつくられている。西側で79号竪穴と重複し、南側で81号竪穴と接する。竪穴規模は、推定で主軸7.46m×副軸6.50m、主柱穴の柱間は主軸3.70m×副軸3.68mを測り、掘形面積は推定で45.87m²である。主軸方位は、N-46°-Wである。なお、覆土断面図は、土層注記の記載がみられなかったため、分

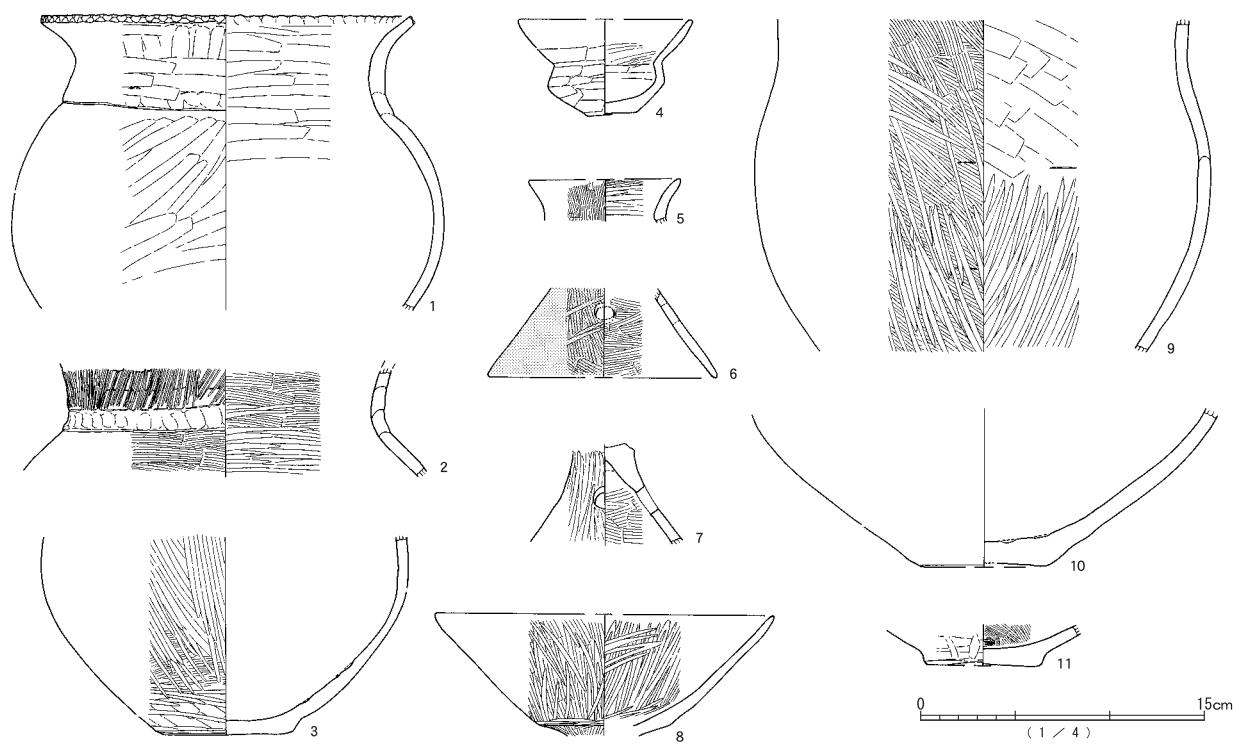


第122図 79号竪穴(1) 遺構、80号竪穴(1) 遺構

79号竪穴

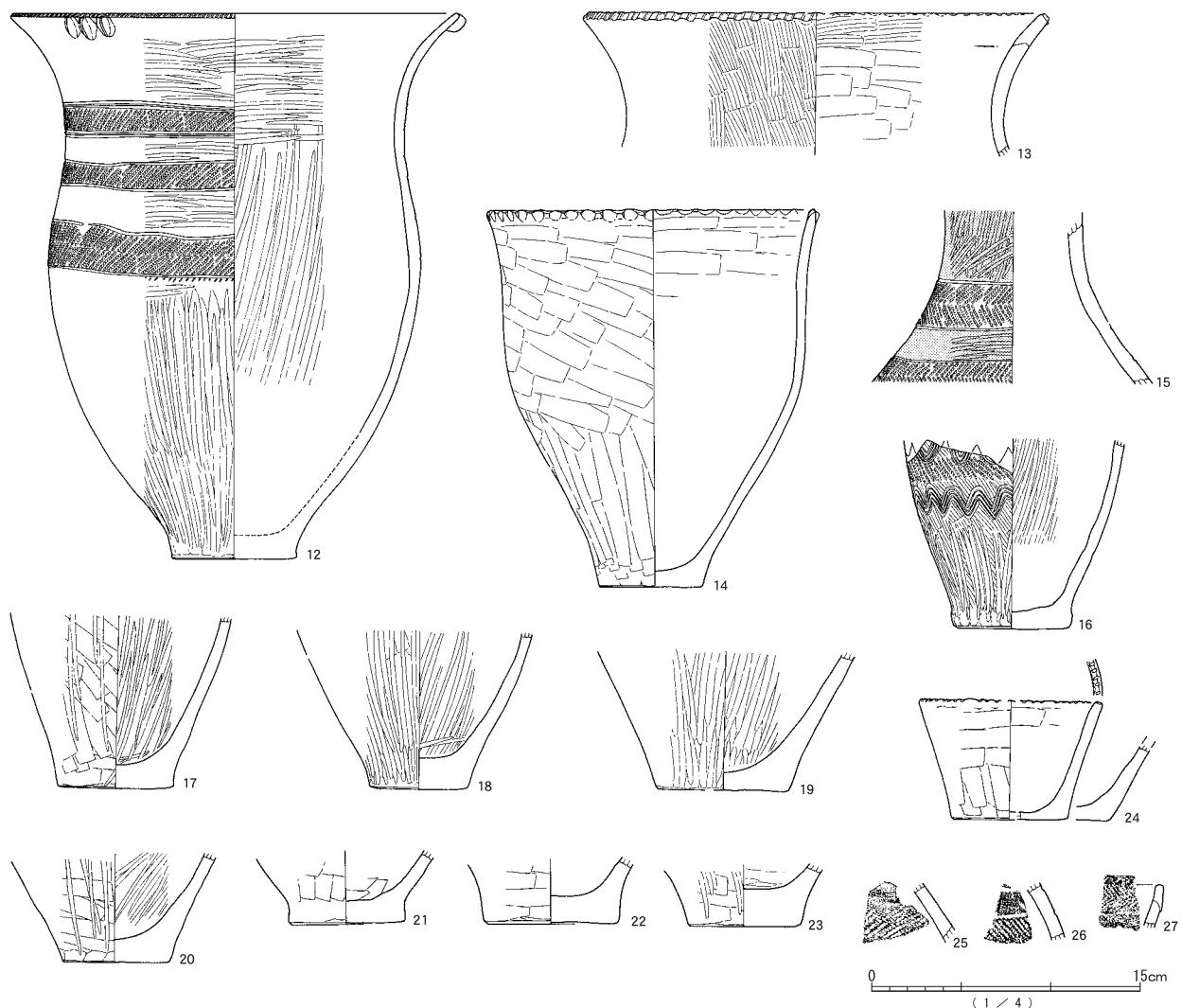


80号竪穴



第123図 79号竪穴(2) 遺物、80号竪穴(2) 遺物

80号竪穴



第124図 80号竪穴(3) 遺物

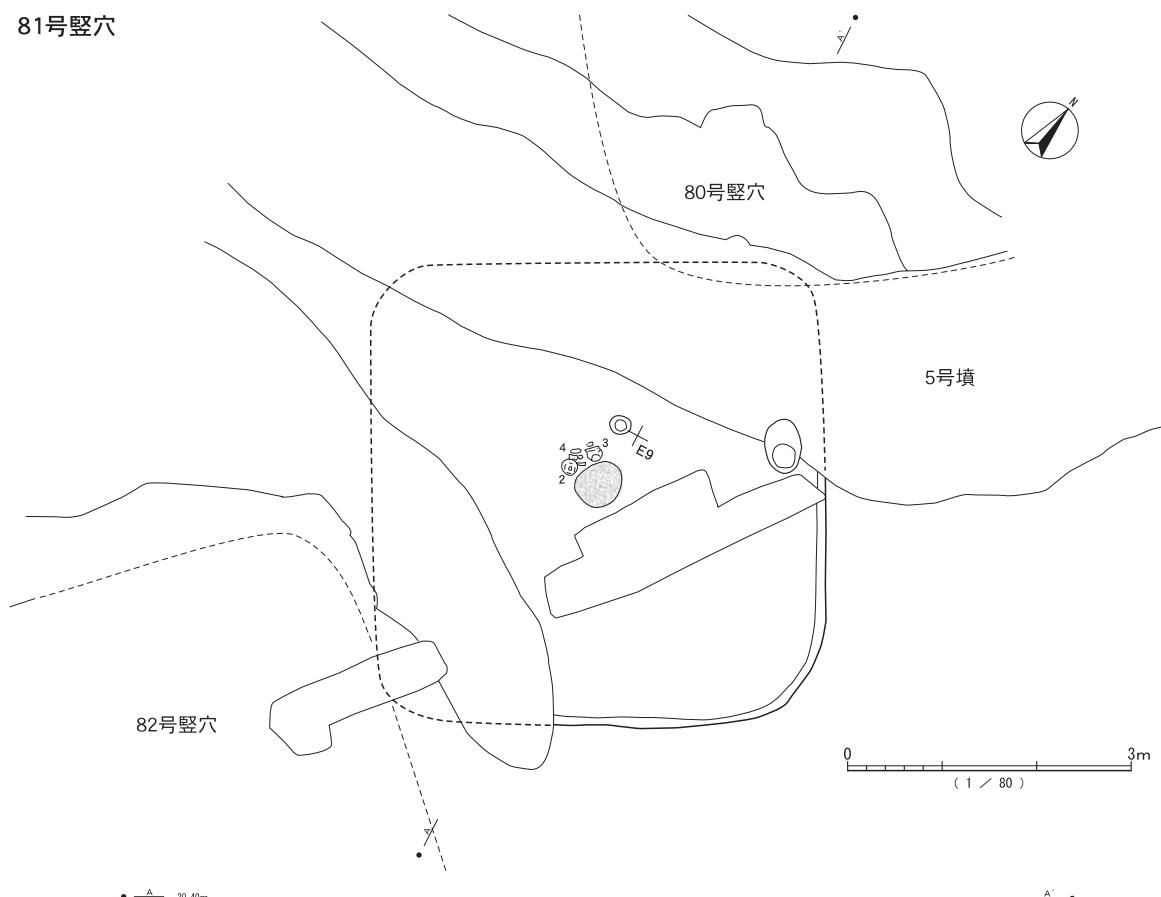
層図のみ提示した。

第123・124図に、本竪穴出土土器として図示したものには、B地点環濠H6区の出土土器を含む可能性が高い。本竪穴の調査時の遺構No.も「H6」であり、他に記載情報もないことから、現状において両者を区分することができない。時期的には混在した状況にあり、おそらくB地点環濠H6区、本竪穴、および本竪穴上の5号墳盛土内出土の土器を含むものと推定される。第164図環濠出土土器H6区は、袋単位でまとまり、ビニール袋に環濠の記載があったが、すでに復元作業が行われていたものについては、注記以外の情報がなく、これらはすべて第123・124図に掲載した。

1～11は、弥生時代終末期に比定されるものである。1・2の甕形土器は、収縮が進んだ頸部に段部を残す。2は、頸部に粘土紐積み上げ痕を多段に残し、縦方向の沈線を加える。沈線は2本以上の単位をもつ。最下段は指頭痕を明瞭に残す。9も、胴部最大径位置やや上に、段部を痕跡として残している。4の小形壺形土器は、所謂小形丸底鉢の系譜とは異なる可能性が高い。15および26・27は、久ヶ原式に比定される。他は宮ノ台式であり、12の単斜縄文沈線区画など、本遺跡出土の宮ノ台式としては、やや古い要素が認められる。

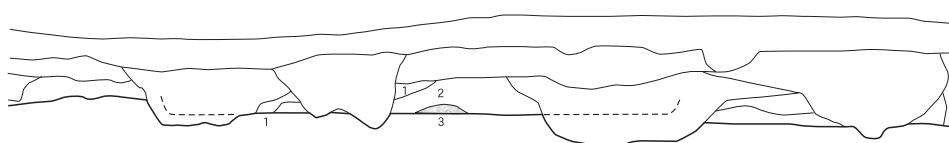
遺構と遺物 竪穴

81号竪穴

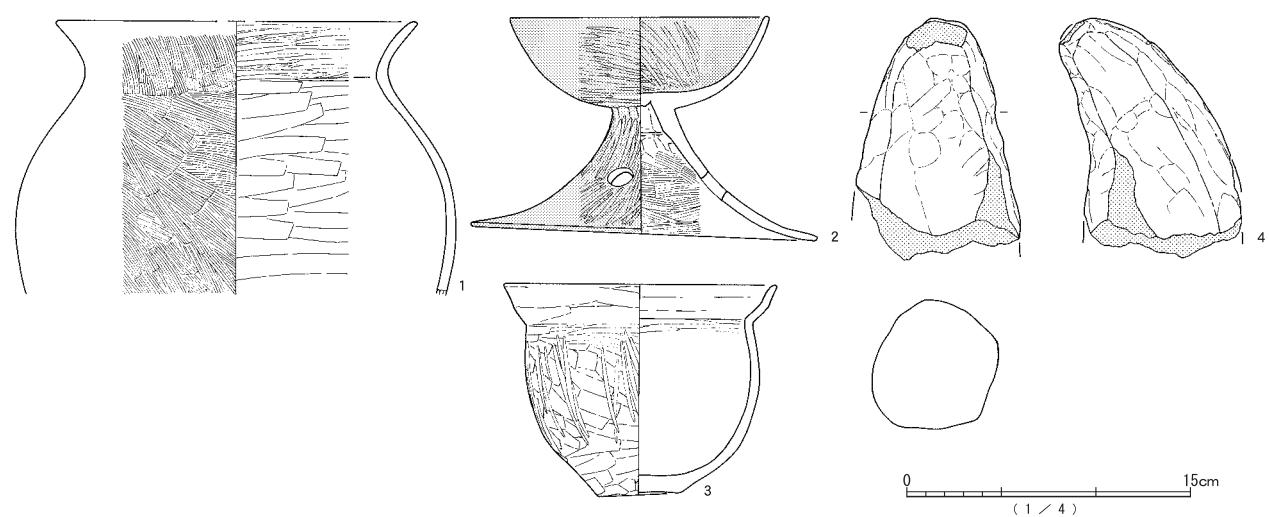


● — A — 20.40m

— A' ●



層	土色	包含物	硬 度	備 考
1	黒褐色	ハードローム粒 (多)		
2	黒褐色	黒色土 (多)、ハードローム粒 (少)		
3	焼土			



第125図 81号竪穴 遺構遺物

隅丸長方形を呈する竪穴の平面形態は、宮ノ台式期、弥生時代終末期に認められるが、主柱穴線上に炉があること、および貯蔵穴の位置などから、本竪穴は、弥生時代終末期、根田代6期の所産である可能性が高い。その場合、1~11が、本竪穴に帰属するものと考えられる。

81号竪穴（第125図、図版19・56・57）

81号竪穴(住居)は、B地点F8・F9・E8・E9区に所在する。北半部は5号墳の周溝によって失われており、壁面は南東隅部のみ検出されている。北側で80号竪穴と、南側で82号竪穴と接しているが、重複関係は明らかではない。竪穴形態は隅丸方形を呈していたとみられ、炉は中央部に1箇所、主柱穴は検出されていない。規模は推定で、主軸4.92m×副軸4.78mを測り、掘形面積は推定で22.78m²である。主軸方位は、N-39°-Wである。炉の脇床面直上から2~4がまとまって出土している。

出土土器は、1・3が甕形土器、2が高杯形土器である。1は、口縁端部がヨコナデにより丸くおさまるが、頸部は屈曲が明確ではない。2は開脚の高杯形土器である。3は、小形の底部に受け口状の口縁部をもつ。北陸系の影響をうけている可能性がある。4は土製支脚である。とくに基部付近は、2次被熱により脆弱化している。

本竪穴の所属時期は、弥生時代終末期ないし前期初頭、根田代6~7期と考えられる。80・82号竪穴との新旧関係は、甕形土器口頸部の形状で変遷をみることが可能であり、79・80 81 82号竪穴の順が想定できる。

82号竪穴（第126図、図版19・57・103）

82号竪穴(住居)は、B地点F9・F10・G10区に所在する。壁面は西半部のみ検出された。北側で81号竪穴と接し、南東辺で85号竪穴と重複する。85号竪穴との新旧関係は、遺構の検出状況からは明らかではないが、竪穴形態から、本竪穴が新しいことが想定できる。壁面の高さはおよそ20cmである。竪穴形態は隅丸方形を呈していたとみられ、炉は北寄りに1箇所、主柱穴は検出されていない。残存する壁下には深さ10cmほどの壁溝が検出されている。北東辺および南西辺の壁側に、およそ80cmの幅で10cmほどの高まりが認められた。所謂ベッド状の区画施設である。竪穴規模は、主軸が5.30m、副軸が推定で5.26mを測り、掘形面積は推定で26.60m²である。主軸方位はN-57.5°-Wである。

出土土器は、1・2・9・10・13が甕形土器、3・4が広口壺形土器、6が椀形土器、5・11・12が壺形土器、7が台付甕形土器である。このうち、1が床面より出土している。1の甕形土器は、口縁端部がヨコナデにより丸くおさまり、頸部は明確に屈曲する。5は混入と考えられる弥生土器の壺形土器である。頸部に櫛(3本以上)による直線文をもつ。当該地域外の系統をもつと推定される。

本竪穴の所属時期は、古墳時代前期初頭、根田代7期と考えられる。81号竪穴との新旧関係は、本竪穴が新しいと推定される。

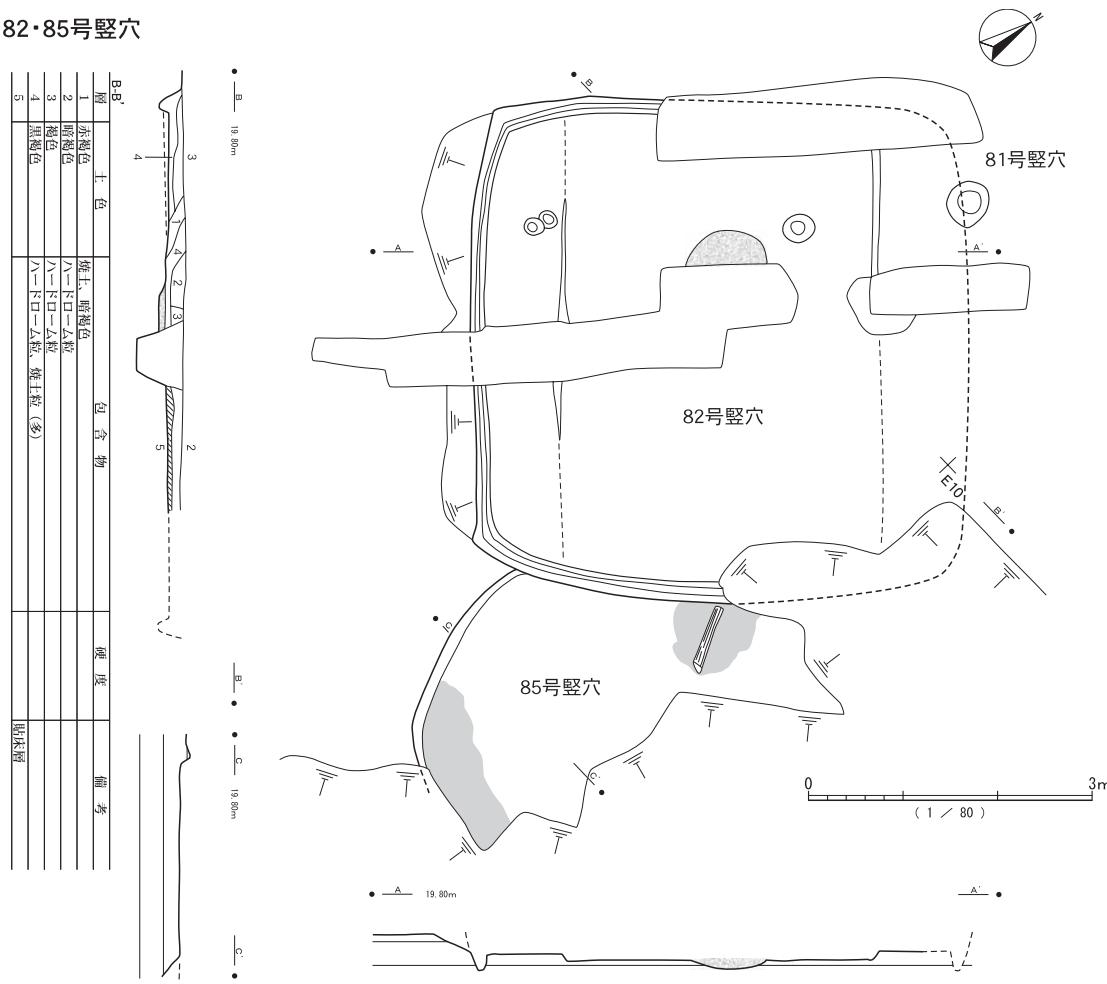
83号竪穴（第127図、図版19）

83号竪穴(住居)は、B地点G10・G11・H10・H11区に所在する。壁面は北東側と南西側の一部のみで検出している。壁面の高さはおよそ20cmである。竪穴形態は橢円形を呈するとみられるが、炉、主柱穴、壁溝は検出されていない。竪穴規模は、推定で主軸3.80m×副軸3.30mを測り、掘形面積は推定で10.35m²である。

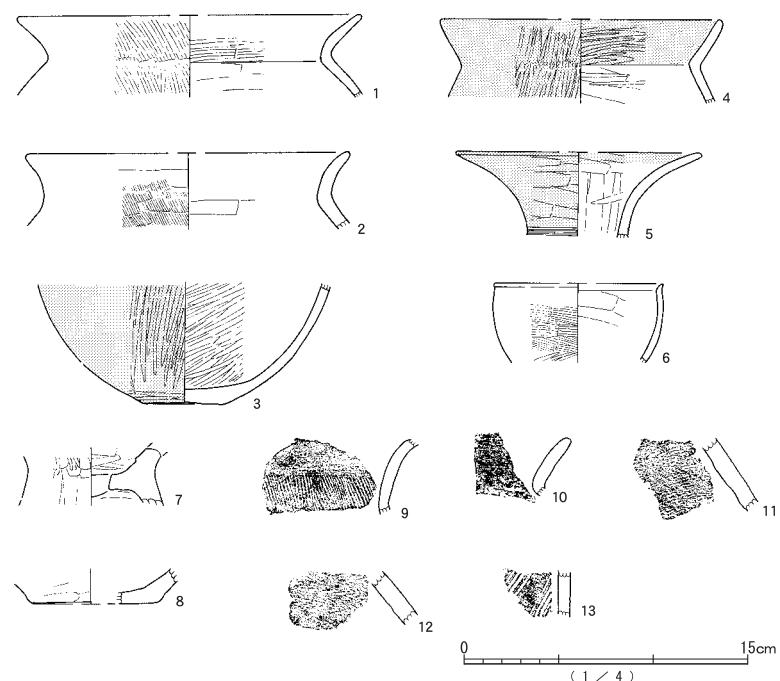
遺物の出土は確認できない。竪穴平面形態から弥生時代の所産と推定されるが、細別時期を判断す

遺構と遺物 竪穴

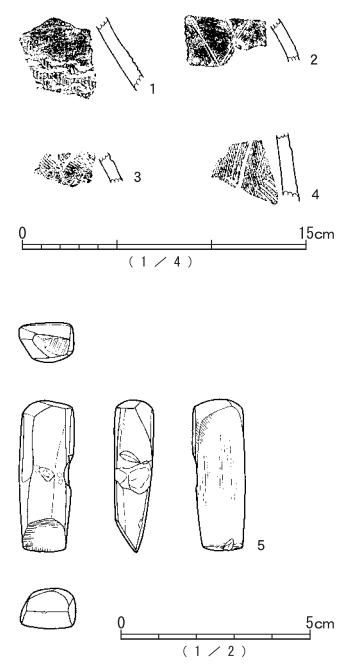
82・85号竪穴



82号竪穴



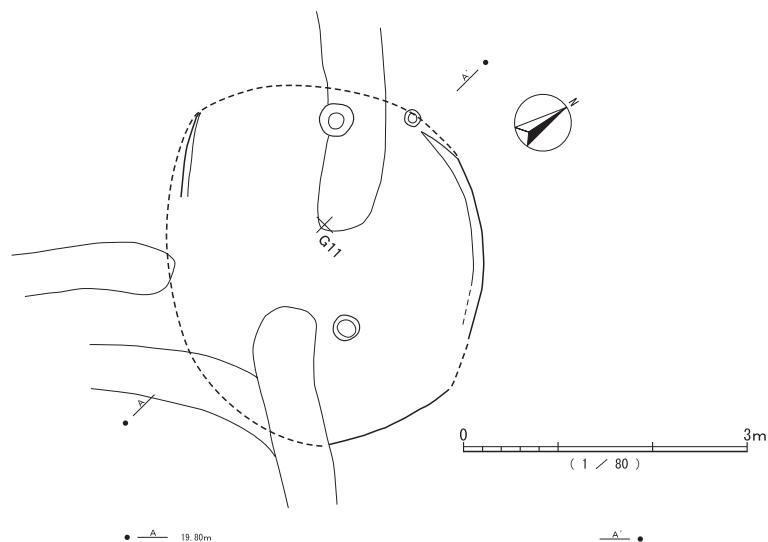
85号竪穴



第126図 82号竪穴 遺構遺物、85号竪穴 遺構遺物

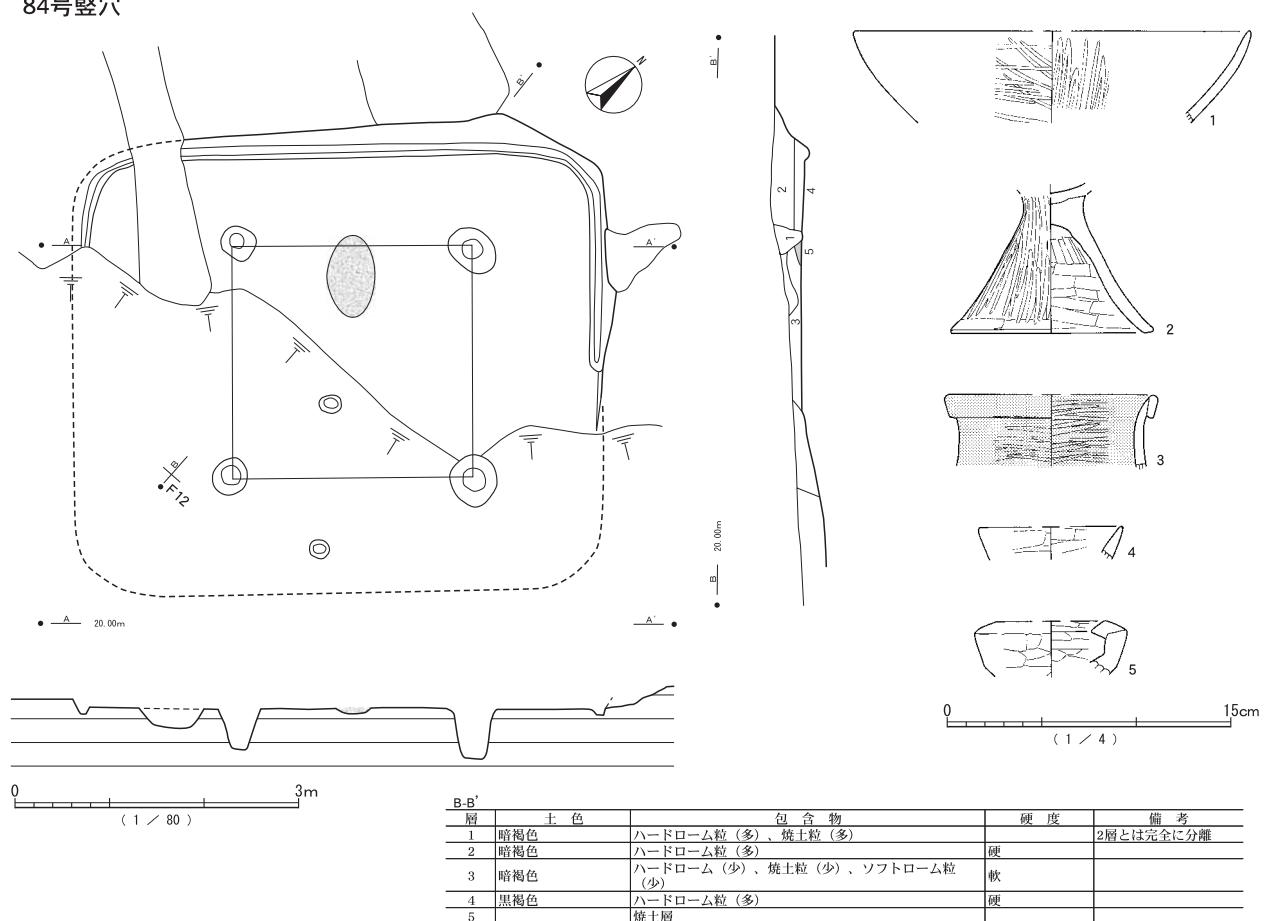
遺構と遺物 竪穴

83号竪穴



層	土色	包含物	硬度	備考
1	黒褐色	ハードローム大粒(多)	硬	
2	黒茶褐色	ソフトローム粒(多)、ハードローム粒(多)		
3	黒色	ソフトローム粒、ハードローム粒	硬	

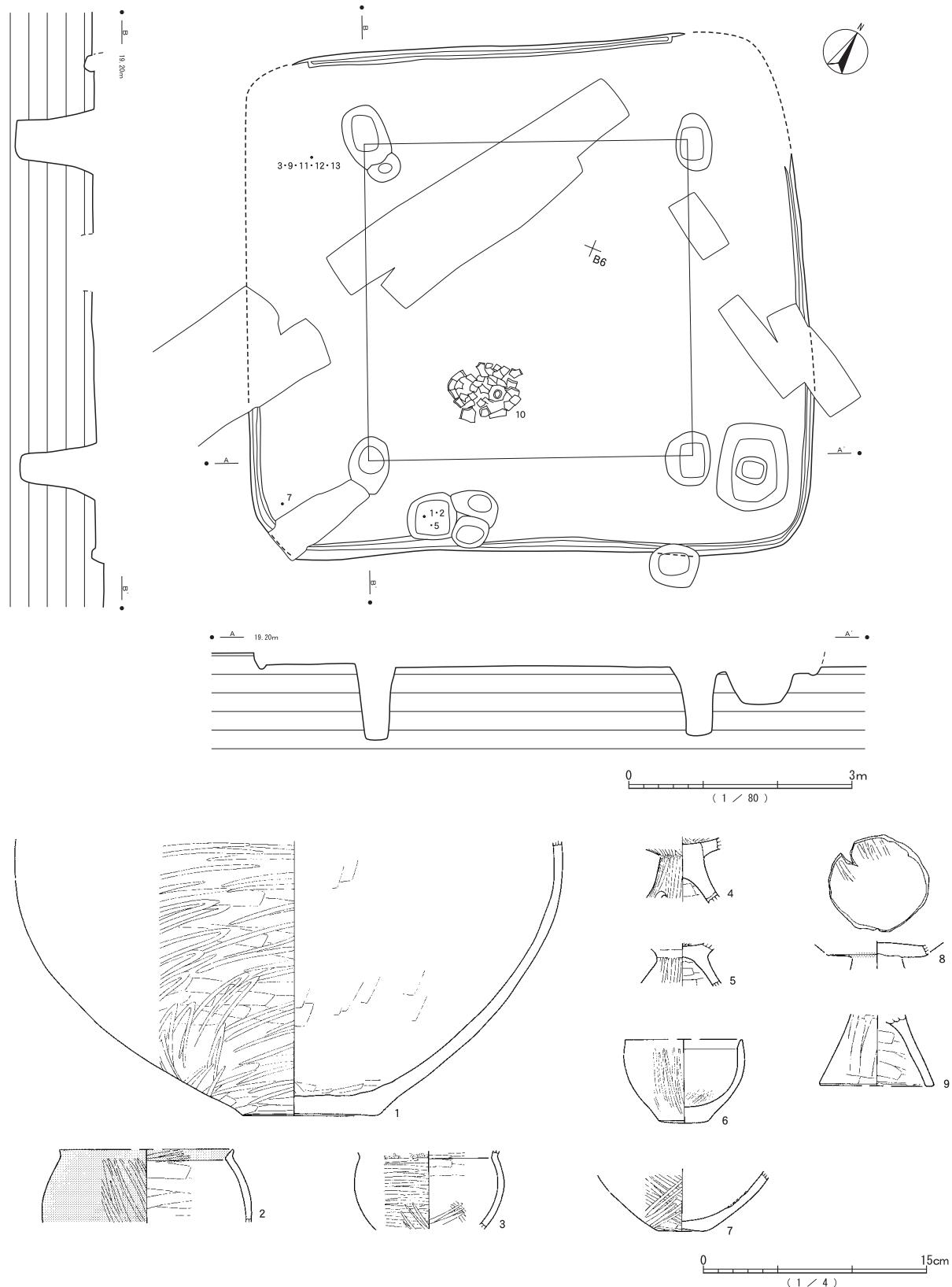
84号竪穴



第127図 83号竪穴 遺構、84号竪穴 遺構遺物

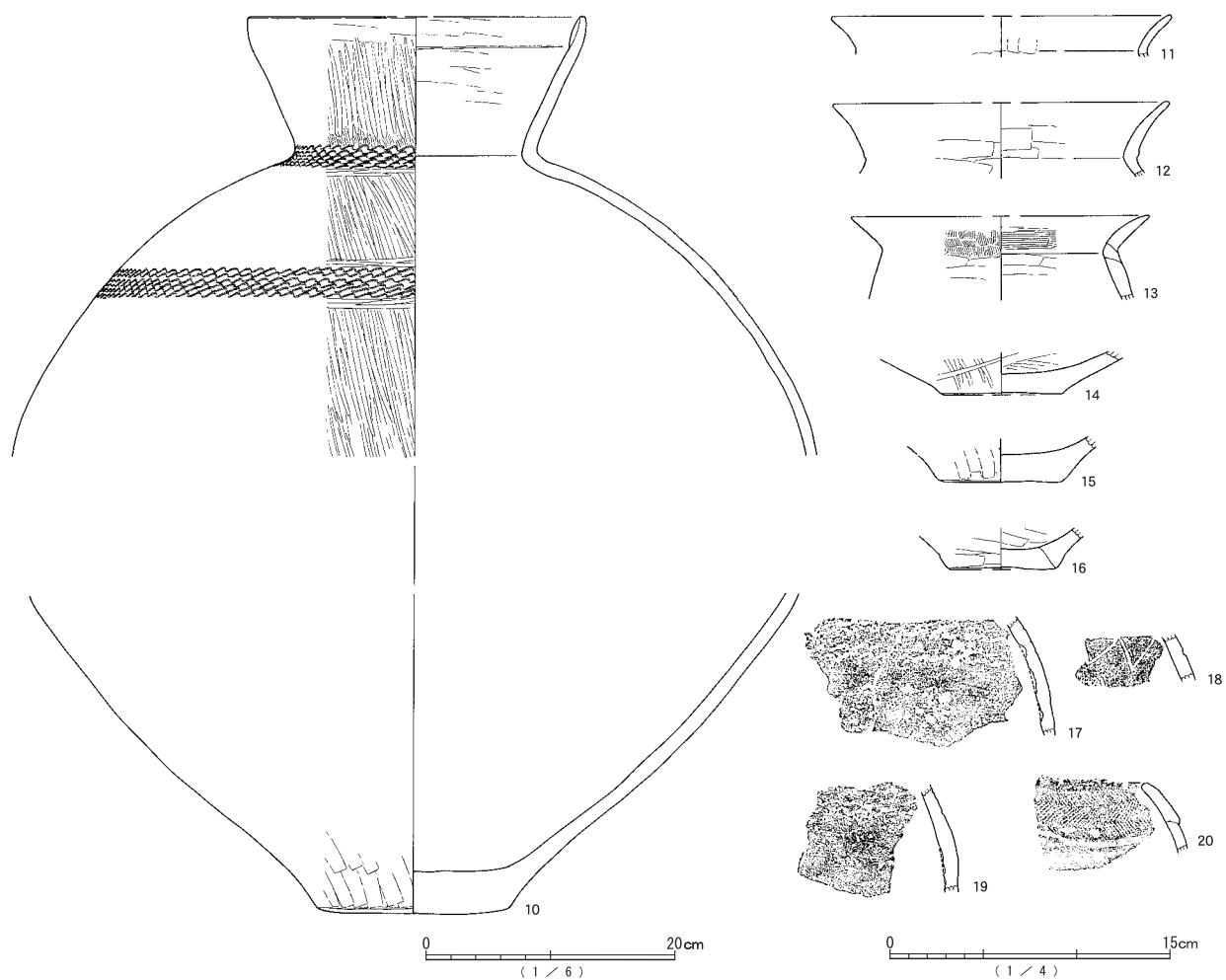
遺構と遺物 竪穴

86号竪穴



第128図 86号竪穴(1) 遺構遺物

86号竪穴



第129図 86号竪穴(2) 遺物

ることはできない。

84号竪穴 (第127図、図版20・57)

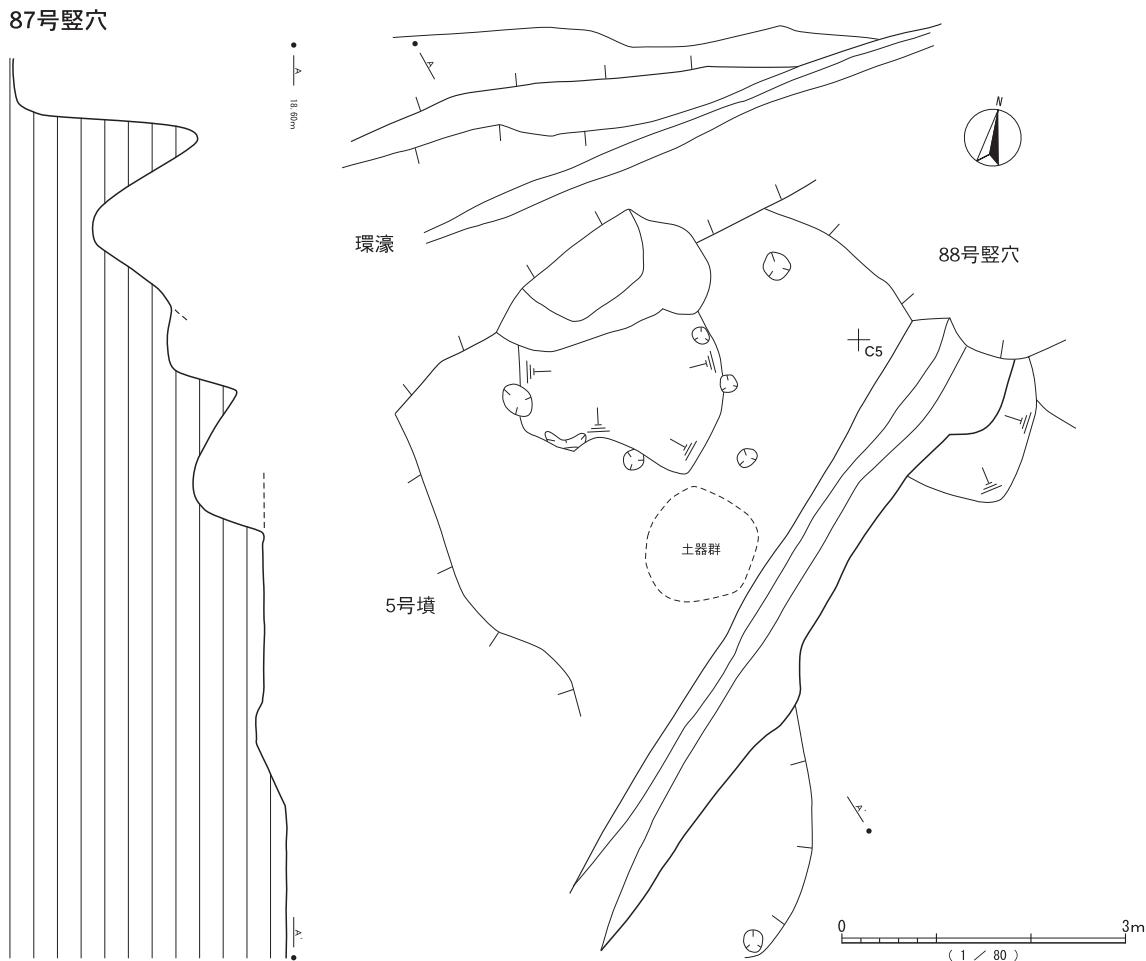
84号竪穴(住居)は、B地点F11・G11区に所在する。壁面は北半部のみ検出している。壁面の高さはおよそ10cmである。南半部は土採りによって失われていた。残存する壁下には深さ5cmほどの壁溝が検出された。竪穴形態は隅丸方形を呈していたとみられ、炉は主軸線上北寄りに1箇所、主柱穴は4本検出された。竪穴規模は、推定で主軸4.92m×副軸5.68m、主柱穴の柱間は主軸2.44m×副軸2.54mを測り、掘形面積は推定で27.01m²である。主軸方位はN - 54° - Wである。

出土土器は、1が高杯形土器、2が高杯ないし器台形土器、3が広口壺形土器、4が壺形土器、5が支脚形土器である。1が床面より出土している。

本竪穴の所属時期は、弥生時代終末期ないし前期初頭、根田代6~7期と考えられる。

85号竪穴 (第126図、図版20・35・77・104)

85号竪穴(住居)は、B地点F10・F11区に所在する。壁面は西側のみ検出された。壁面の高さはおよそ10cmである。東半部は土採りによって失われていた。北側で82号竪穴と重複するが、この竪穴との新旧関係は、竪穴平面形態、焼土分布から、本竪穴が古いと考えられる。床面のレベルはほぼ同



第130図 87号竪穴(1) 遺構

じである。竪穴形態は不明であるが、おそらく橢円形を呈すると推定される。炉、主柱穴、壁溝は検出されていない。南北辺の壁際を中心に焼土および炭化材の堆積が認められた。おそらく火災によるものであろう。

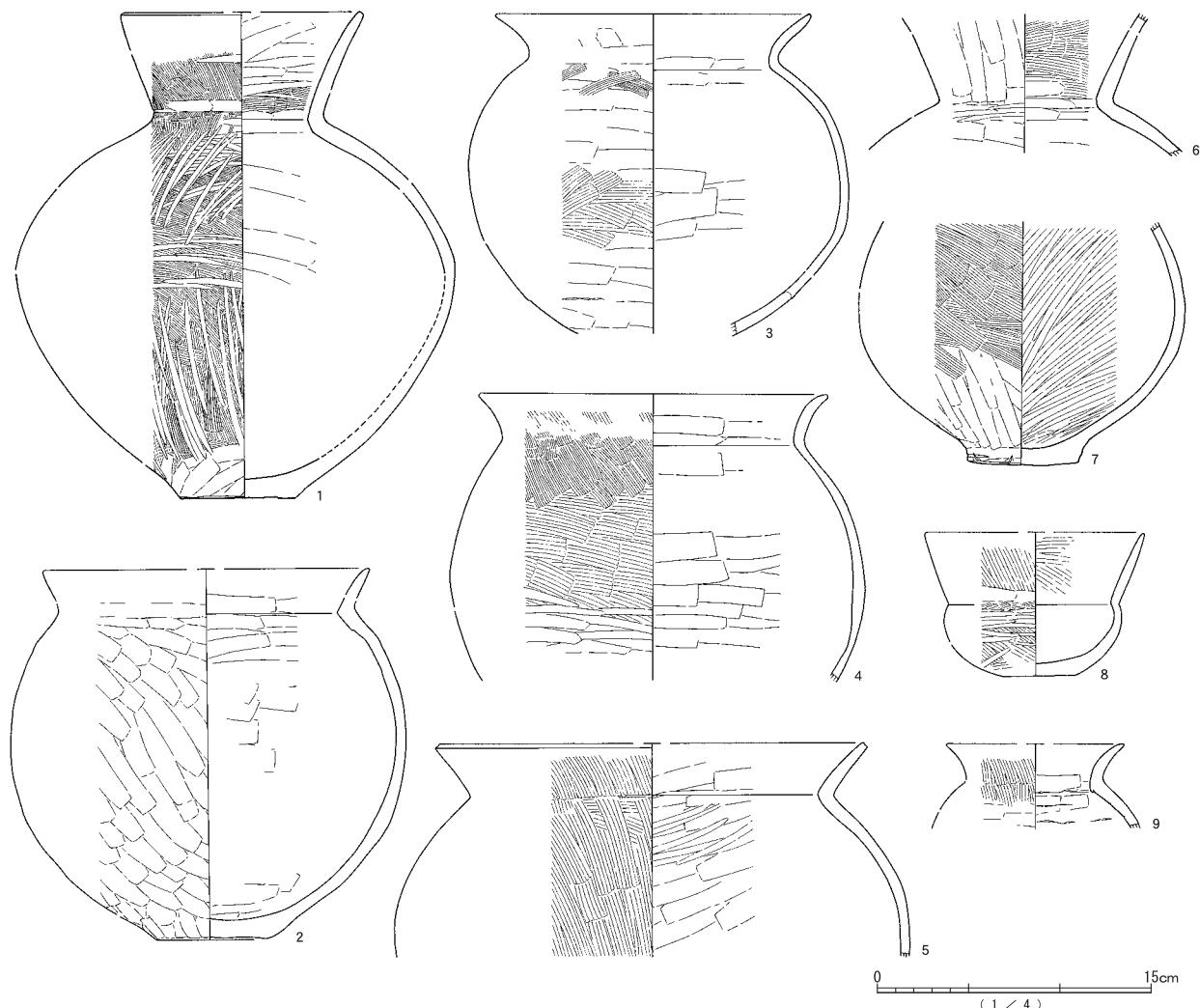
出土土器は、小破片のみであり、出土状況の詳細は明らかではない。1・4は宮ノ台式であり、ハケのうち回転結節文RSが施文される。4は縦方向のハケのうち櫛による横走羽状文をもつ。2・3は鋸歯文が描かれる。3は、RL単節縄文に沈線鋸歯文を重ね、区画交互に赤彩される。3は、山田橋式ないし弥生時代終末期と考えられる。5は、黒曜石製の小形柱状片刃石斧である。丁寧に研磨され、自然面、剥離面を残していない。

本竪穴は、竪穴平面形態から弥生時代の所産と推定されるが、細別時期の判断は難しい。ここでは、一応根田代1期に比定しておく。

86号竪穴 (第128・129図、図版20・57・104)

86号竪穴(住居)は、5号墳の東、B地点B5・B6・C5・C6区に所在する。壁面は南西辺部、北隅の一部が失われていた他はほぼ全周する。壁面の高さは最大で15cmほどと浅い。竪穴形態は隅丸方形を呈し、炉は主軸線上北寄り所在したとみられるが、後世の攪乱によって失われている。主柱穴は4箇所、東隅部には貯蔵穴が認められた。竪穴規模は、主軸が6.80m、副軸が推定で7.52m、主柱穴の柱間は主軸4.24m×副軸4.35mを測り、掘形面積は推定で50.50m²である。主軸方位はN - 32.5° - W

87号竪穴



第131図 87号竪穴(2) 遺物

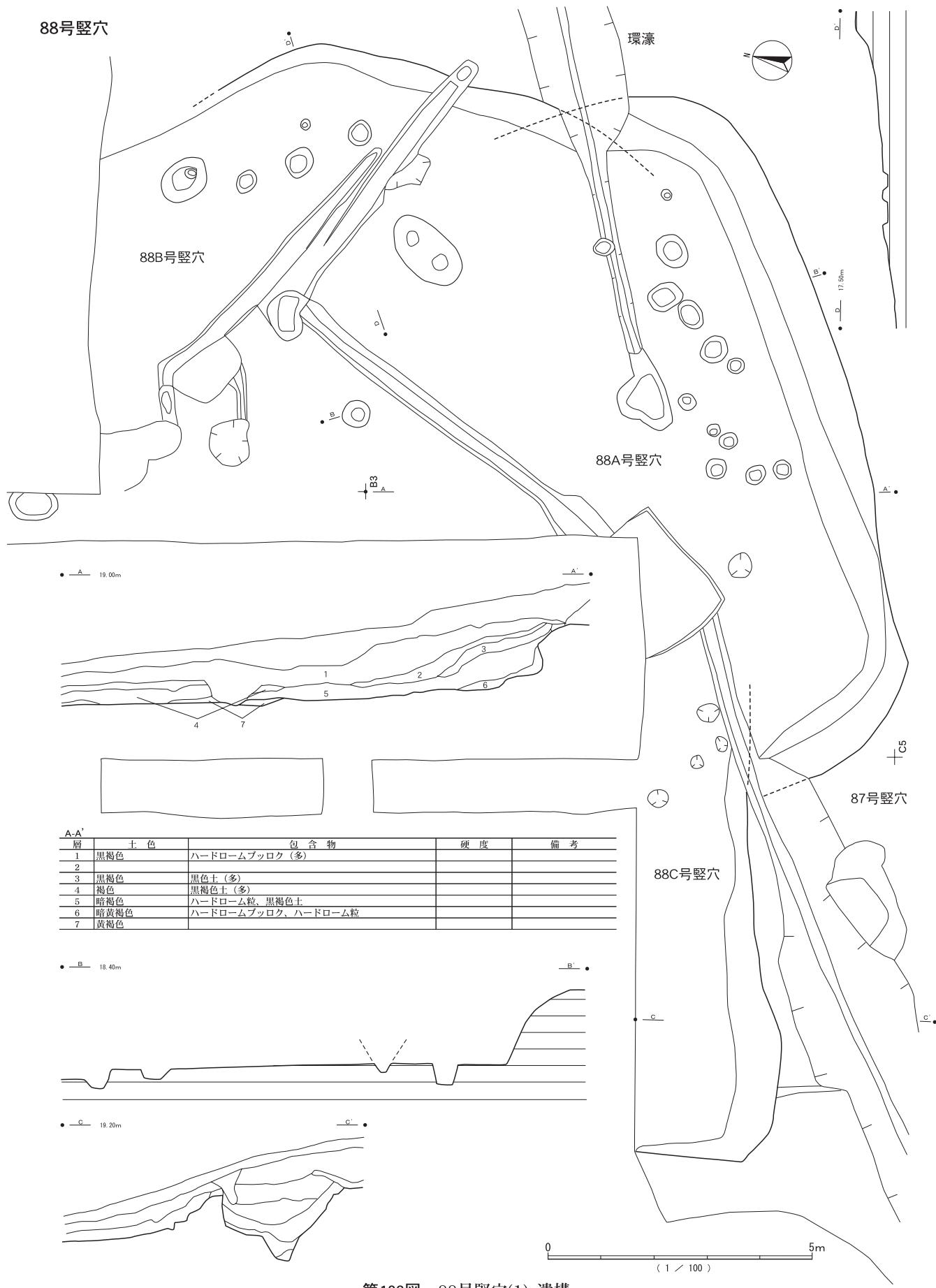
である。

中央付近床面直上から10の壺形土器が、南側貯蔵穴から1が出土している。他に、2・5～9・11～13・17～20が床面ないし貯蔵穴より出土している。出土土器は、1・3・10・17～19が壺形土器、2・6・20が椀形土器、11～13が甕形土器、9が台付甕形土器、4・5・8が高杯形土器である。10は、胴部最大径が約64cmを測る大形の壺形土器である。口縁部はやや内湾し、口縁部内面が有段となる。頸部および胴部に2帯回転結節文が施される。11～13の甕形土器は、口縁端部が丸くつくられ、頸部内面は稜をもち屈曲する。高杯形土器のうち、8は底部が平坦化している。土製円盤として利用された可能性がある。2・6は椀形土器であるが、3は小形の壺形土器である。所謂小形丸底壺ないし短口縁の鉢形になると考えられる。

本竪穴の所属時期は、古墳時代前期、根田代7～8期と考えられる。

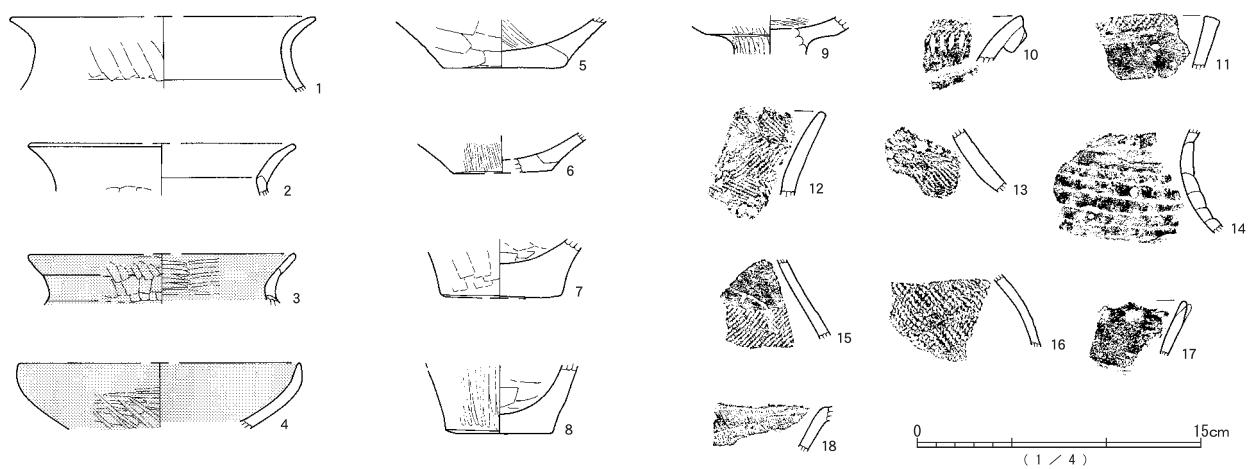
87号竪穴 (第130・131図、図版57・58)

87号竪穴は、5号墳の東側、B地点D4・D5区に所在する。西側は5号墳周溝、北側は環濠と重複する。壁面、炉、床面など、竪穴住居とみなしうる痕跡はとらえられていないが、この箇所に遺物の集



第132図 88号竖穴(1) 遺構

88号竪穴



第133図 88号竪穴(2) 遺物

中がみられたことから、竪穴住居等の遺構の存在を推定した。

出土土器は、1・6が壺形土器、2~5・7が甕形土器、8・9が小形壺形土器である。これらは、ほぼ同時期の所産と考えられ、古墳時代前期、根田代8期に比定される。

88A・B・C号竪穴 (第132・133図、図版20・104)

88号竪穴は、5号墳の北東、B地点E4・D4・C4・C3・B2・A2・B3・A3・B4・A4区に所在する。南半部では東西方向に環濠が横断する。環濠との新旧関係は、土層断面の観察結果から、本遺構が新しいと判断される。本遺構は、遺跡北端にかかる緩斜面部を掘り込んでテラス状に整地したものであり、調査段階ではテラス状遺構(注記は「落ち込み」として扱っていたものである。傾斜面に対する掘り込みの深さはA号で最大で130cm、B号部分で50cm、C号部分で80cmを測る。A・B・C号底面は段差なく連続するが、A号はほぼ平坦であるのに対して、B号は西へ向かって、C号は南へ向かって若干傾斜している。底面には小Pitが不規則に散在するが、主柱穴状のものは確認できない。また、炉も未検出である。ただ、底面はほぼ水平で、壁面の立ち上がりも明確で、A号の平面形態は胴張り隅丸方形を呈する。また、図面には反映されていないが、写真記録では、壁下に浅い壁溝状の掘り込みが確認できる(写真図版20)。これらの点から、竪穴住居の可能性があると判断した。B号についても、B地点の他の竪穴と主軸方位をそろえているようにもみえる。他に、中世の台地整形区画なども可能性として想定できるが、この時期の遺物は検出されていない。また、方形竪穴、地下式坑といった関連遺構も存在しない。それぞれの規模については、残存最大長で、A号が13.4m、B号が6.1m、C号が6.9mを測る。

遺物は、ほとんど出土していない。第133図は、区画内グリッド出土土器から、時期的な判断が可能と思われるものを抽出したが、これらも小破片である。時期的には明らかに混在しており、これらから時期を明らかにすることはできない。

(2) 溝（環濠）

環濠（第135・138～161・165・166図、図版4～6・23～26・35・59・61・65・66・68～70・77～79・104～115）

根田代遺跡は、今回調査した南側のA地点と北側のB地点の間が、調査前に土採りを目的とした掘削により破壊され、集落の全容を明らかにすることはできなかった。ただ、立地するおおむね三角形状の独立丘の周囲を、V字溝が囲繞する環濠集落としてとらえることができる。

A地点環濠は、東西方向にA3区からf7区まで、南北方向にA4区からB14区まで調査が行われているが、部分的に調査対象範囲から外れる箇所もあり、今回報告の調査区で溝の全体形状が把握できたのは、全長およそ85m、I1・I2・J1・J2・K1・K2・L1・L2・M2・N2・O2・P2・P3・Q2・Q3・R2・R3・S2・S3・T3・U3・V3・W3・W4・X3・X4・Y3・Y4区である。この部分ではグリッドごとに南北方向の土層断面を設定し、層序を確認した上で各層ごとに遺物を取り上げている。

B地点で環濠を検出したのは、H7・H6・G6・G5・F6・F5・E5・E4・D4区である。この範囲では、5号墳の周溝と一部重複し、また、88号竪穴により緩斜面部をテラス状に削平され、保存状況はかならずしも良好ではなかった。また、B地点の東側については、溝の走行を把握するための部分的な調査が行われている。すでに上面は削平されていたが、これによって、環濠が南側に向きを変える、北端頂部周辺を把握することができた。

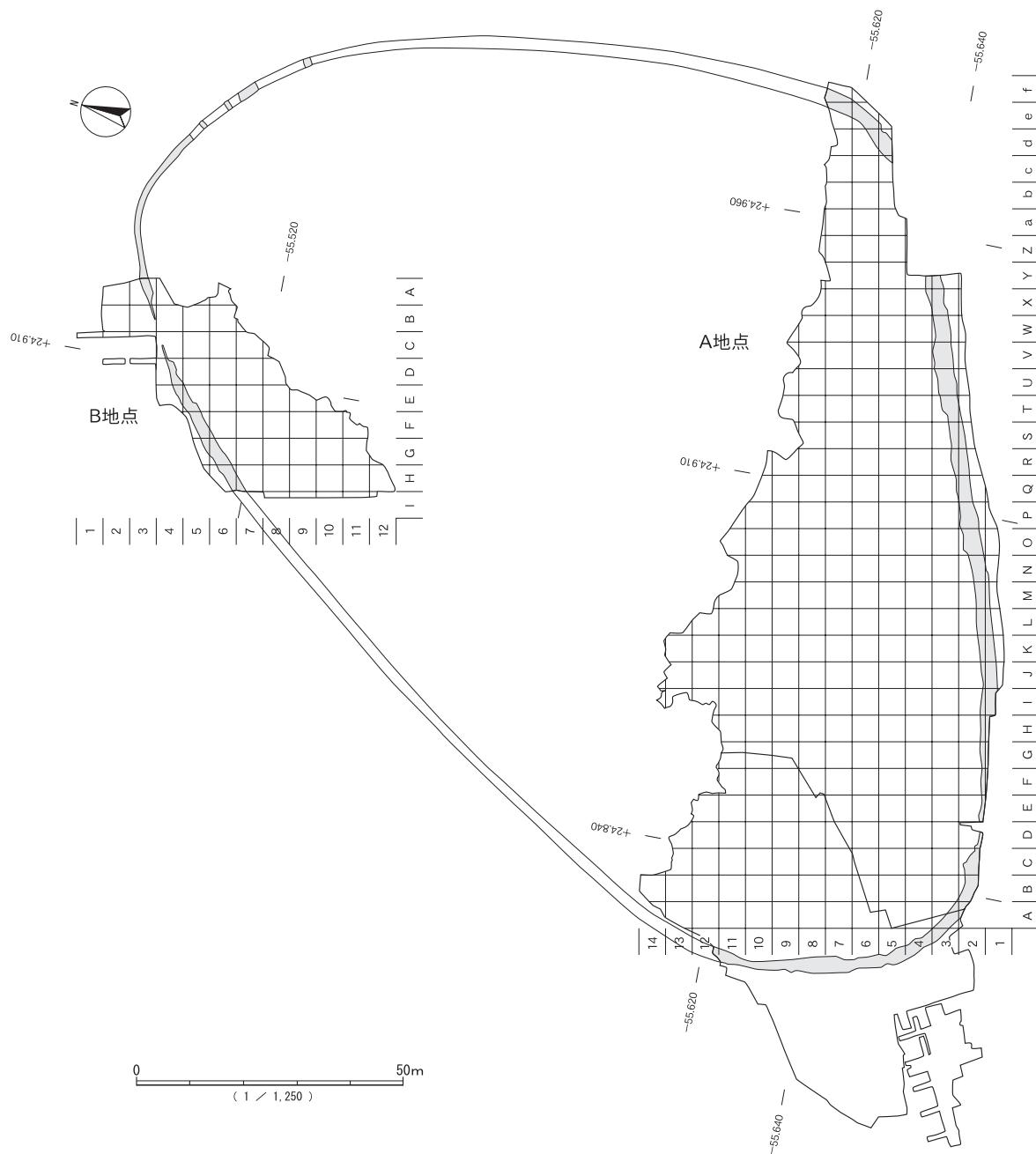
環濠規模は、北東 - 南西方向の長軸長外径で203.5m、内径199m、北西 - 南東方向の短軸長が推定で約133mを測る。環濠区画総面積は、推定19,830m²、濠内で18,650m²を測る。溝上面幅は、確認面の状況によって異なるが、A地点平均で2.96m（上端幅水平距離）、底面幅は最大でも30cm程度で、10cmに満たない箇所もある。「V字溝」の名称どおりの形状を呈している。環濠内側確認面上端からの深さは、A地点平均で2.08m、最大は約3mを測る。斜面地に掘削されていることもあり、本来は、幅5m、深さ4mに達していたものと推定される。溝延長距離は、約540mであり、総土量は、北辺部がやや浅くなるが、およそ3,500m³に達する可能性もある。底面の標高は、北端部B地点で16.5m程度、南西部A地点断面が12.4mであり、比高差は約4mある。各断面での上端幅（水平距離）、環濠内側確認面上端からの深さ、環濠底標高は、第2表のとおりである。なお、環濠の掘り直しについては、現場段階の所見では、A地点断面B、6・7層間で可能性が指摘されている。ただし、全体の掘り上がり形状から判断する限り、大規模な再掘削は想定できない。

A地点の南縁部については、第135図に示すとおり17箇所の断面図を作成して層序を把握した。この部分については、基本的な堆積状況に一致が認められたため、以下の基本層順を設定し、遺物の

(m)														
地点	断面	上端幅	深さ	標高	地点	断面	上端幅	深さ	標高	地点	断面	上端幅	深さ	標高
A	A	4.62	2.84	12.40	A	M	3.28	2.08	15.28	B	H	0.50	0.26	16.36
A	B	2.70	1.94	12.52	A	N	3.06	2.10	15.20	B	I	0.80	0.52	16.58
A	C	2.56	2.10	12.52	A	O	2.90	1.98	15.16	B	J	0.80	0.54	16.34
A	D	2.82	2.40	12.70	A	P	2.80	1.58	15.30	B	K	0.87	0.78	16.38
A	E	2.78	2.28	12.82	A	Q	3.48	2.20	15.16	B	L	1.68	1.10	16.98
A	F	2.86	2.30	12.86	B	A	1.55	1.02	16.54	B	M	1.66	1.20	16.38
A	G	2.72	2.20	12.94	B	B	1.68	1.00	16.52	B	N	2.22	1.72	16.50
A	H	2.68	2.00	13.64	B	C	1.33	0.84	16.72	B	O	2.28	1.40	16.60
A	I	2.66	1.90	14.04	B	D	1.00	0.67	16.74	B	P	2.58	2.18	16.29
A	J	3.38	2.04	14.24	B	E	1.52	0.80	16.58	B	Q	2.68	2.24	16.40
A	K	2.86	1.96	14.50	B	F	0.91	0.48	16.68	B	R	2.28	1.82	16.50
A	L	2.22	1.40	14.92	B	G	0.76	0.49	16.50	B	S	2.98	1.48	16.68

上端幅は水平距離値、深さは環濠内側確認面上端からの計測値、標高は環濠底

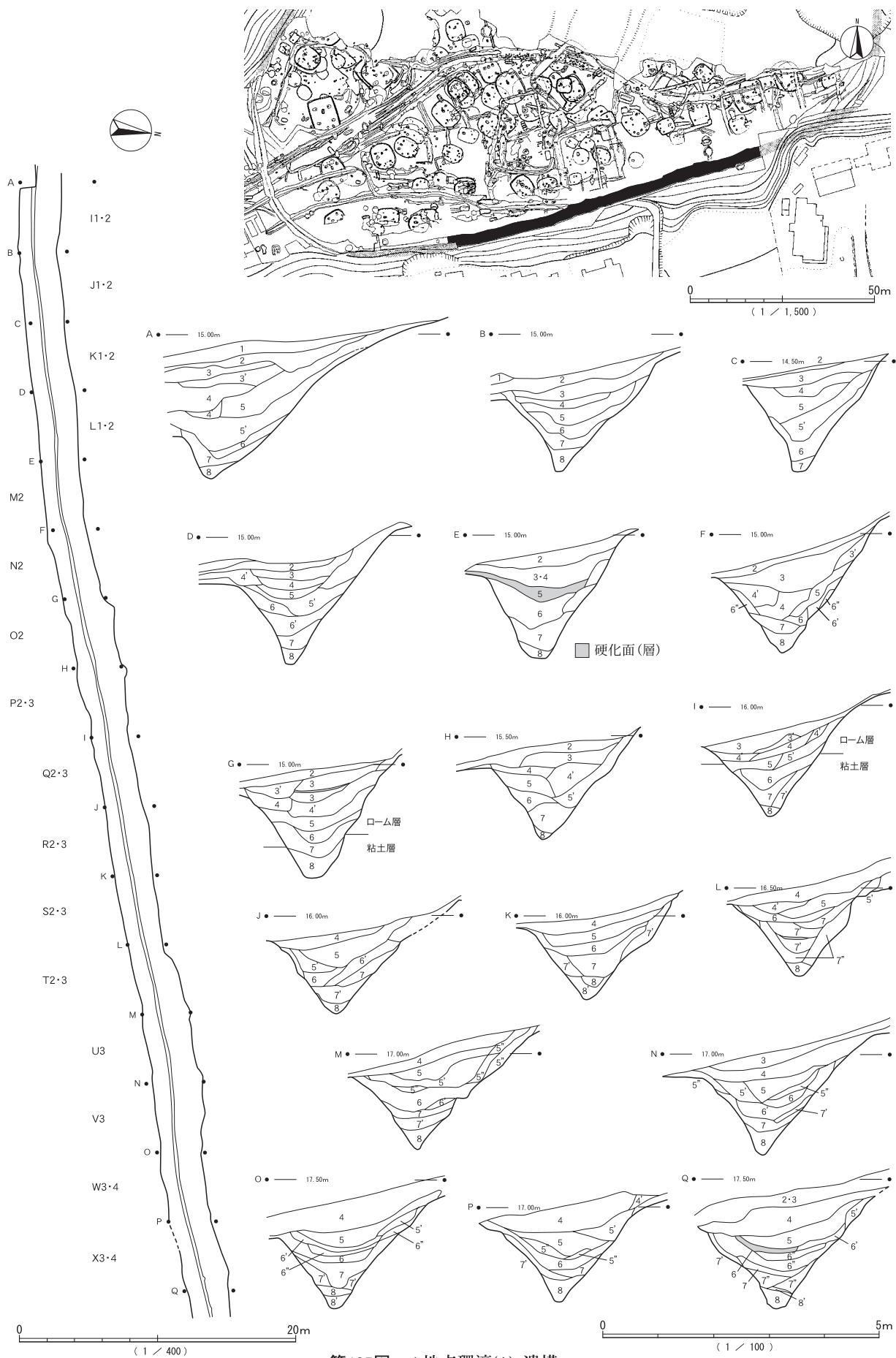
第2表 環濠規模計測値



第134図 根田代遺跡調査区と環濠

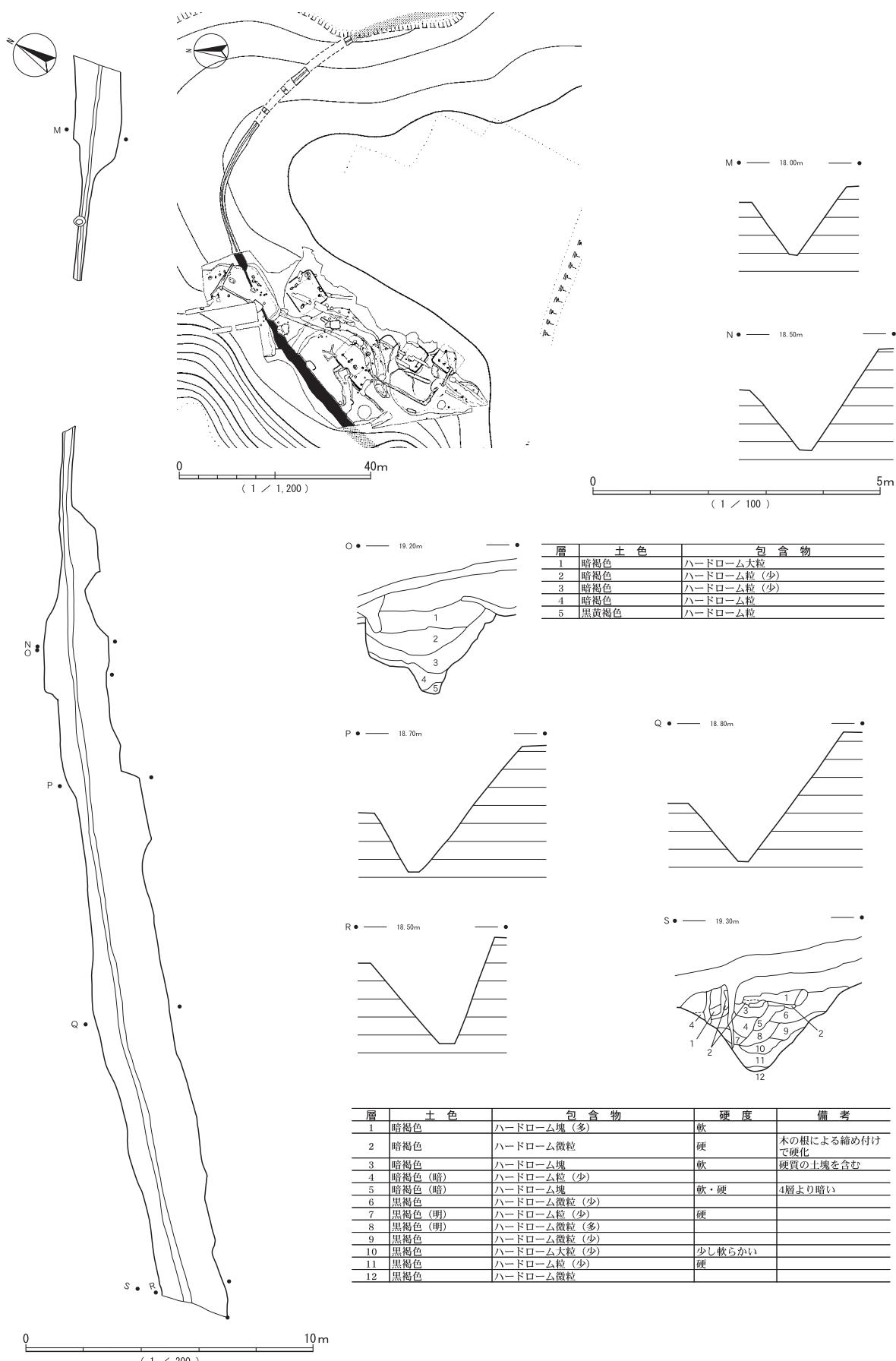
取り上げについてもこの層序に基づいて行われている。基本層位は、表土にあたる1層をのぞき、2層から8層までの7枚の層からなる。

- 2層 黒色土層であり、黒褐色土ブロックを若干含む。
- 3層 黒色土層であり、黒褐色土、暗褐色粘土粒を若干含む。
- 4層 黒色土層であり、暗褐色粘土粒、ローム粒を若干含む。
- 5層 黒褐色土層であり、暗褐色粘土、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
- 6層 暗褐色土層であり、暗褐色粘土、白色粘土、ロームを多量に含む。
- 7層 黒褐色土層であり、ローム粒を多量に含む。
- 8層 黒褐色土層であり、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。

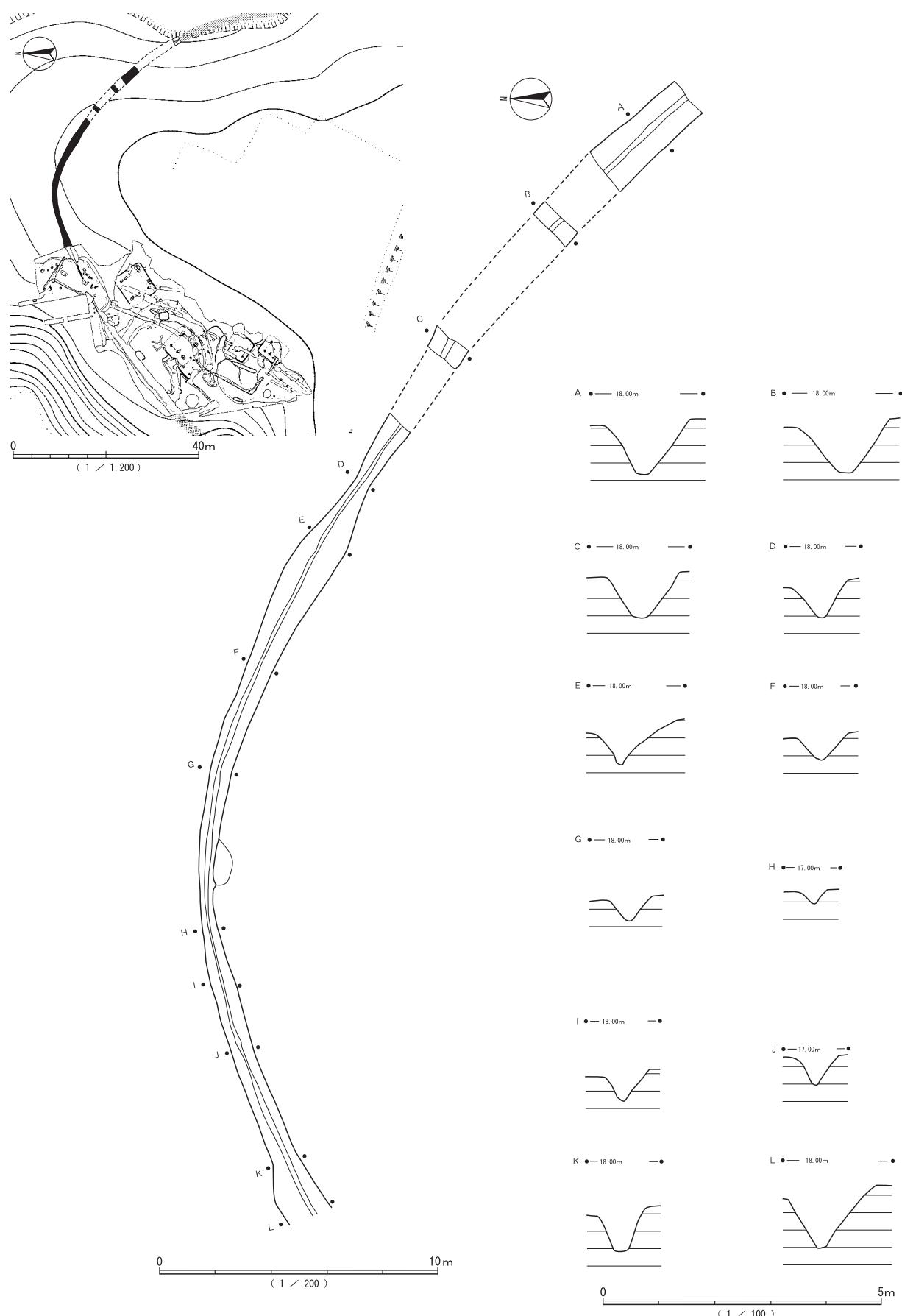


第135図 A地点環濠(1) 遺構

遺構と遺物 環濠・溝

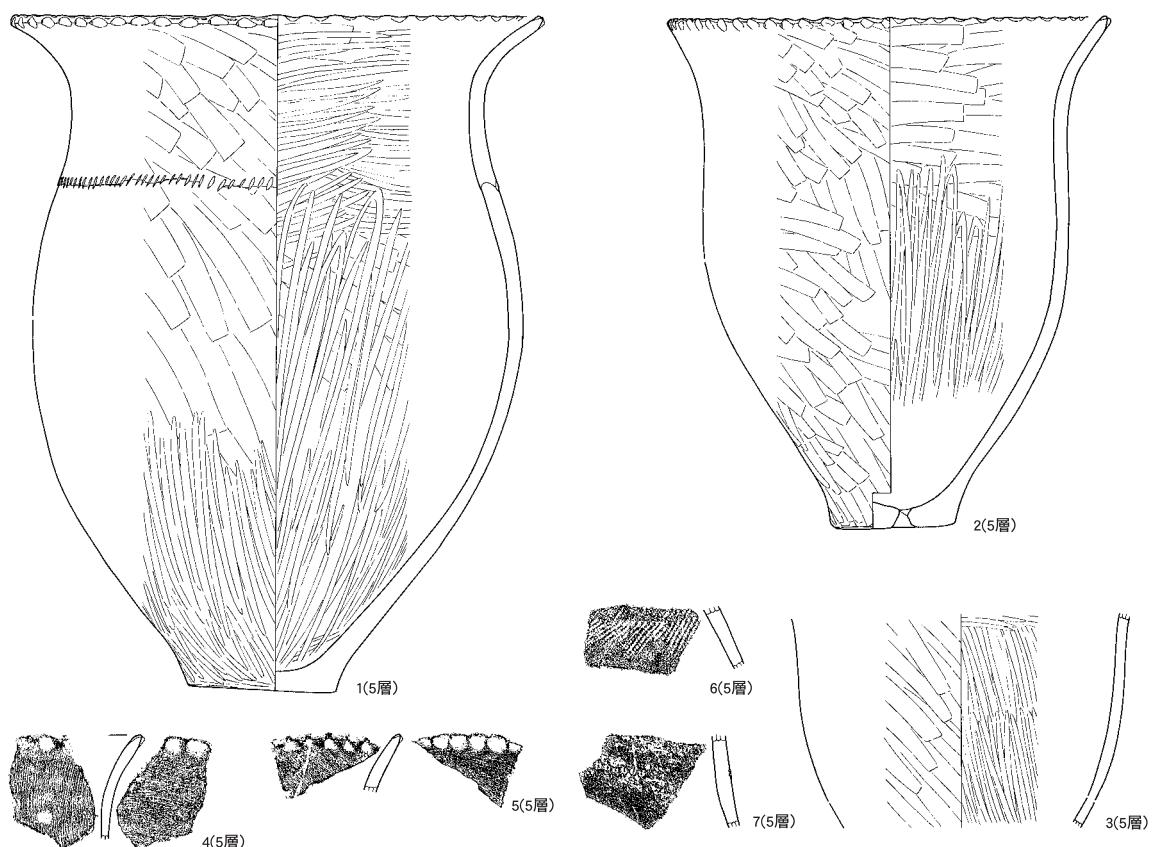


第136図 B地点環濠(1) 遺構

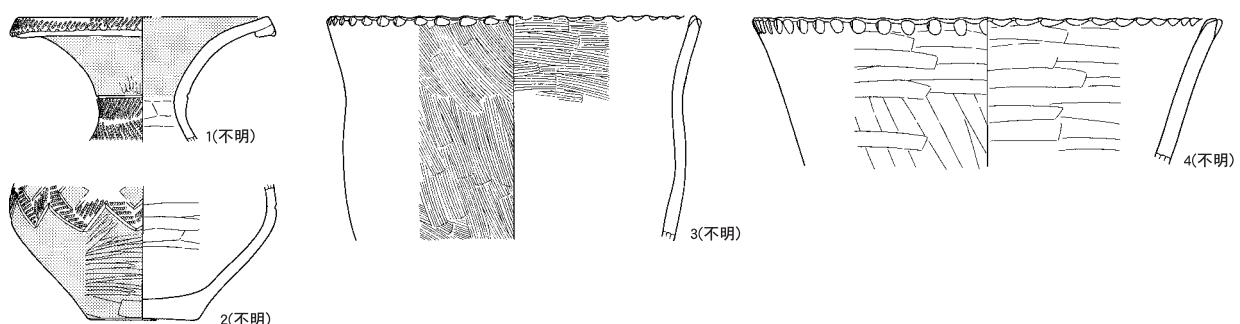


第137図 B地点環濠(2) 遺構

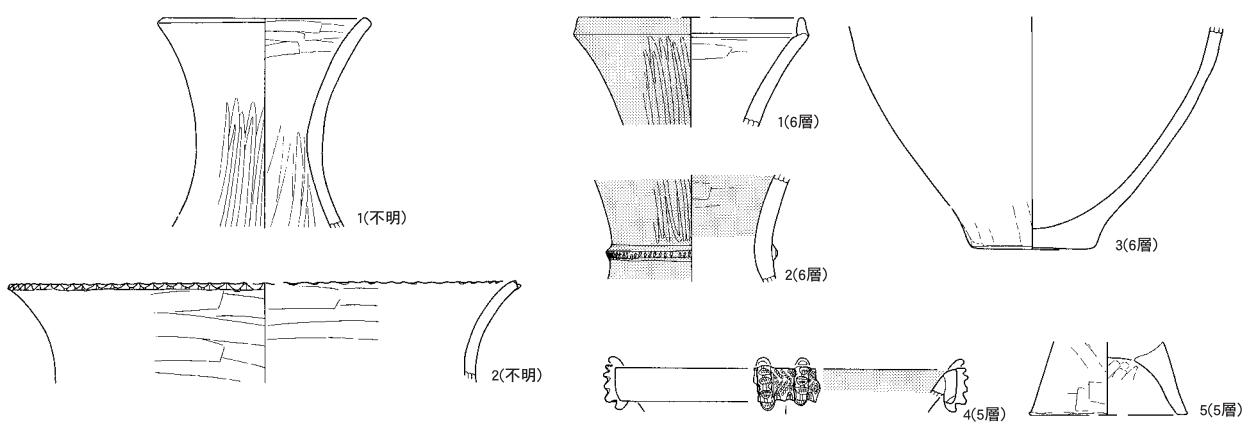
A2区



B2区



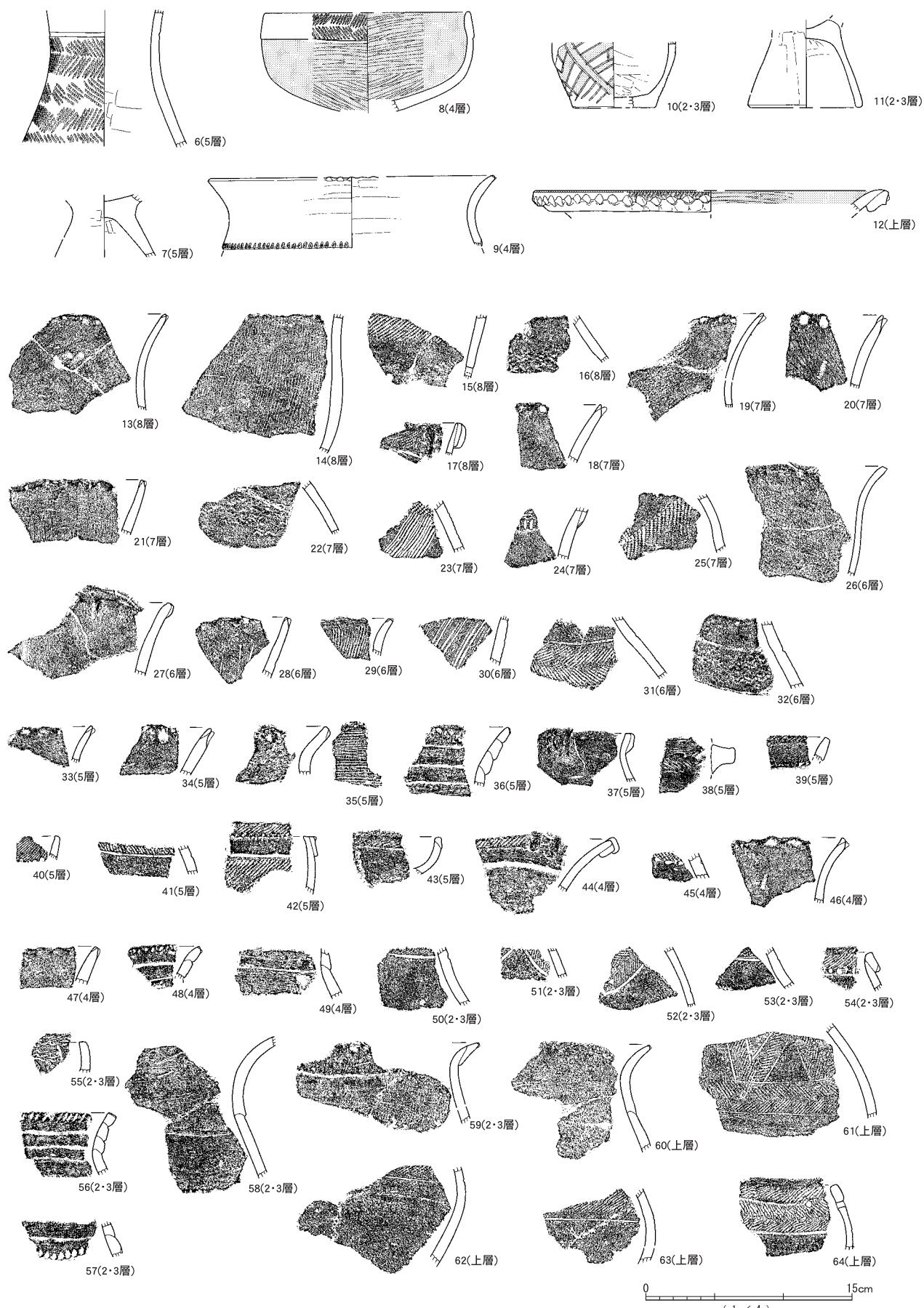
C2区



0 15cm
(1 / 4)

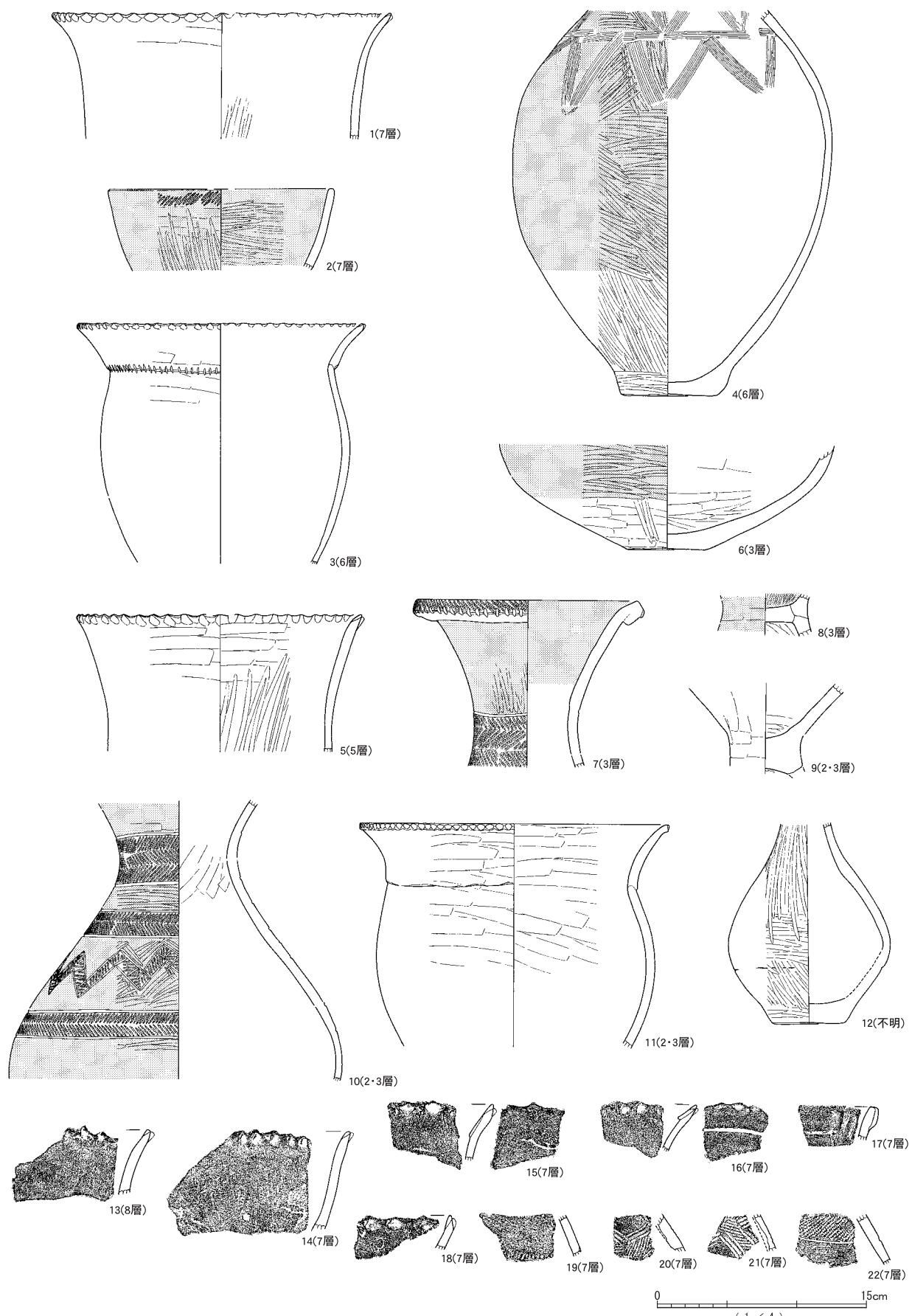
第138図 A地点環濠(2) 遺物

12区



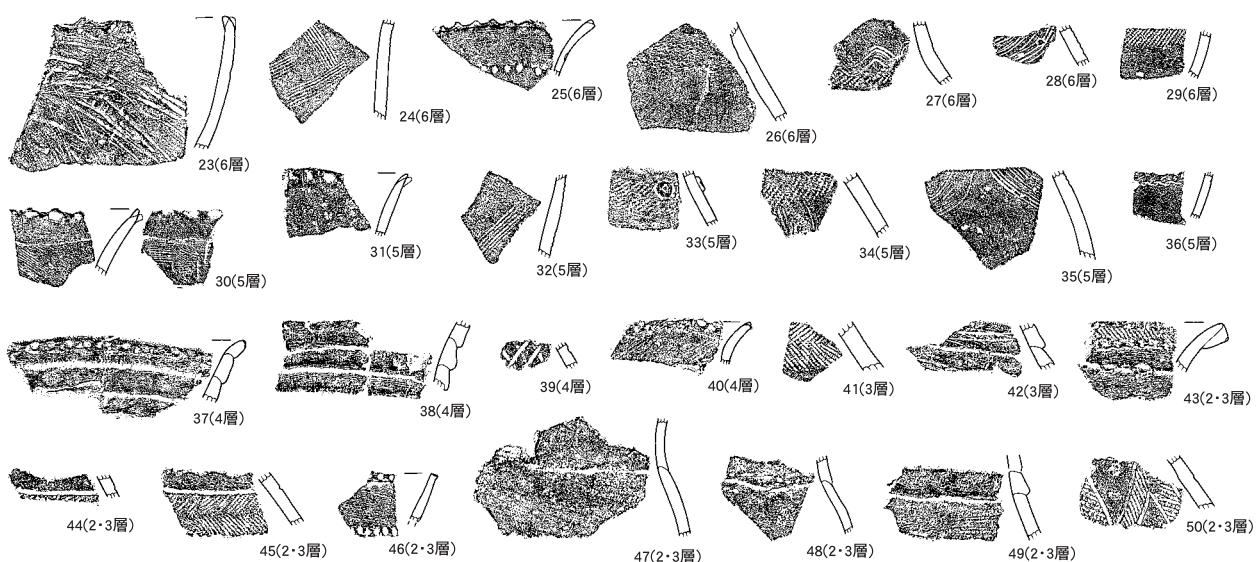
第139図 A地点環濠(3) 遺物

J2区

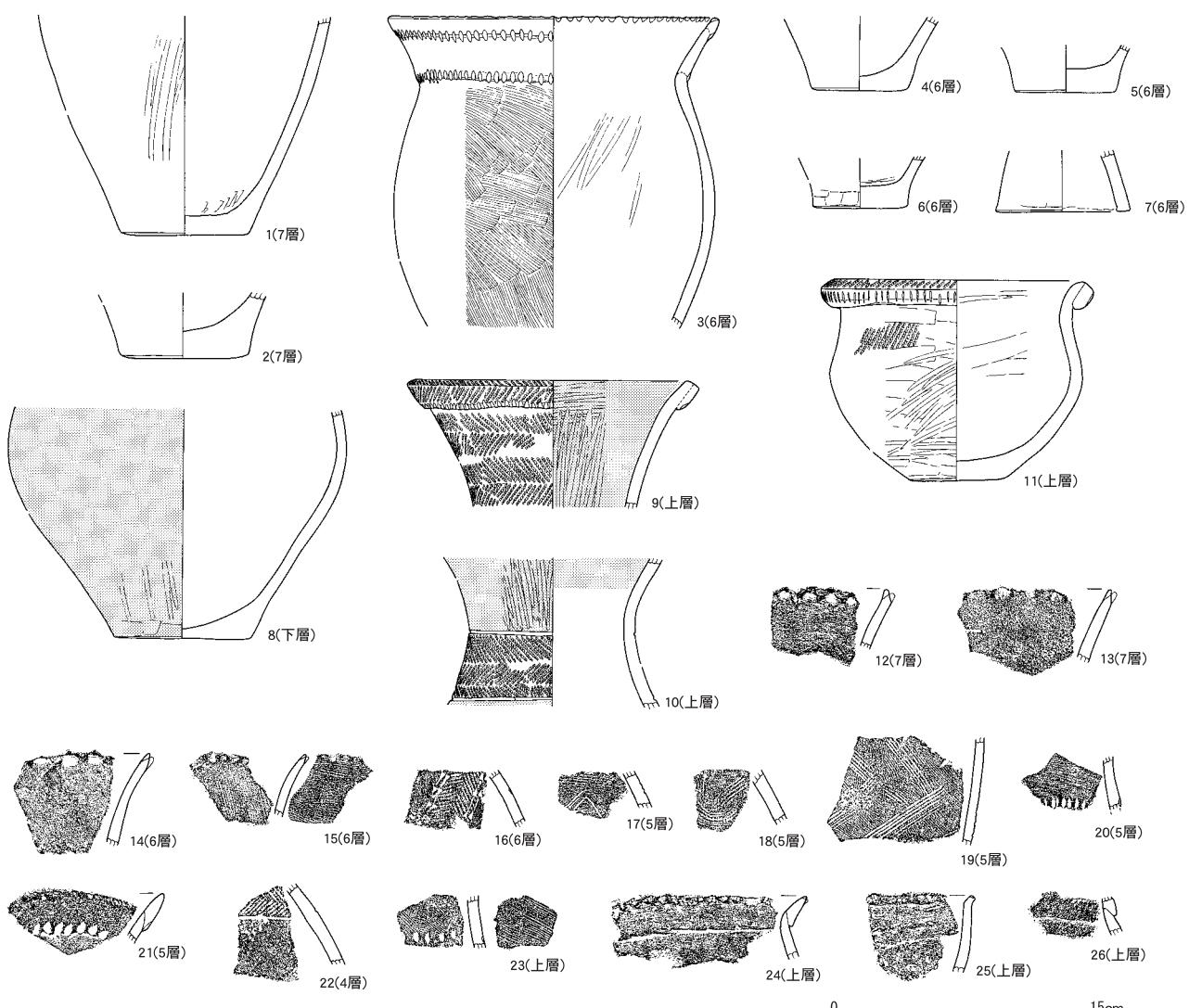


第140図 A地点環濠(4) 遺物

J2区



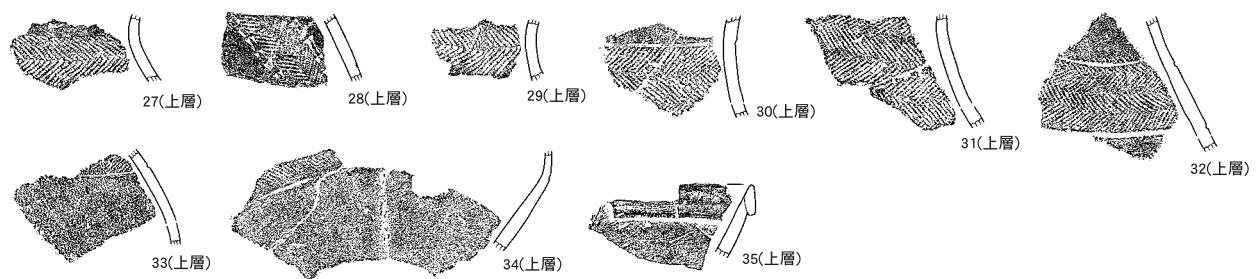
K2区



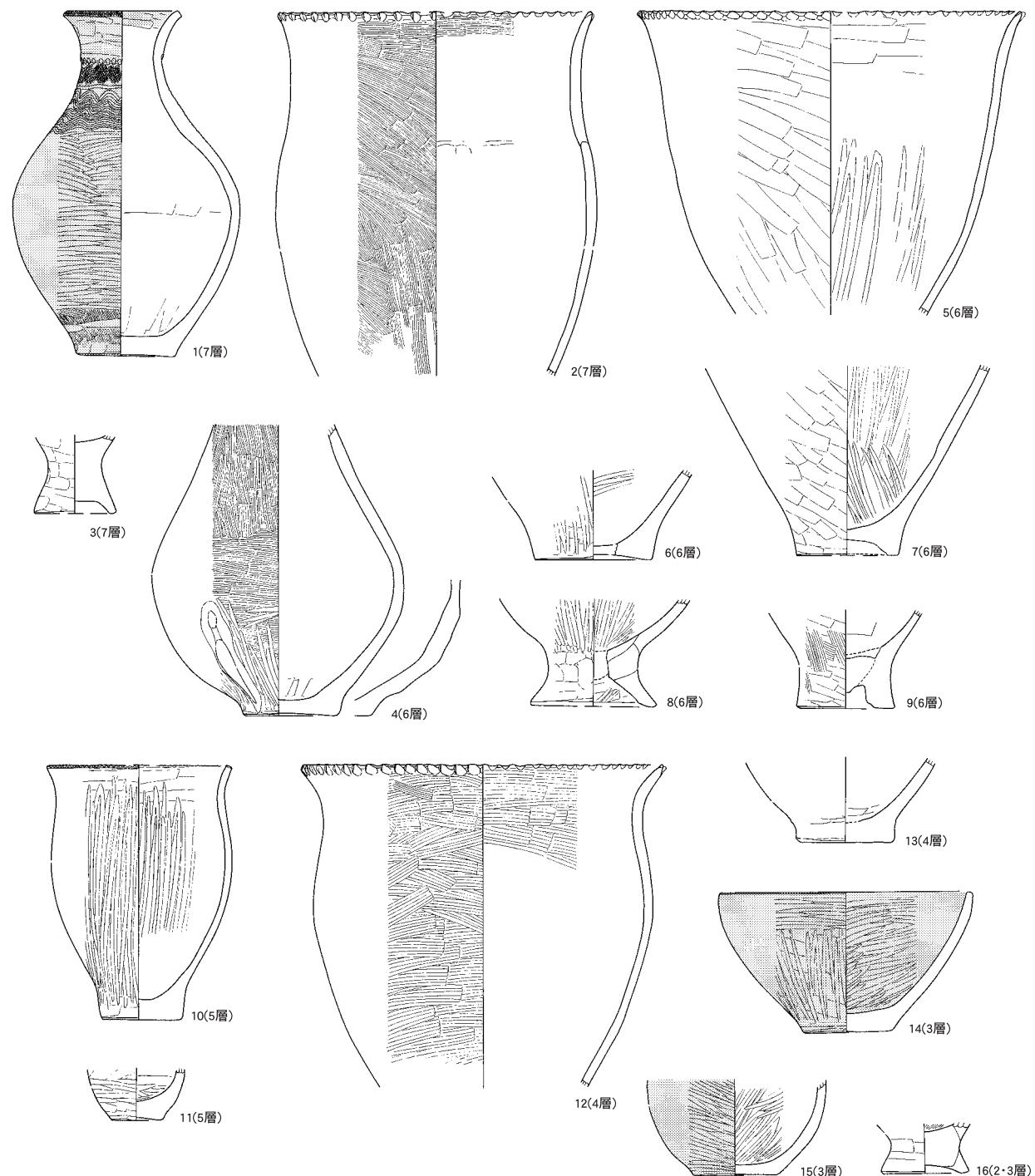
第141図 A地点環濠(5) 遺物

遺構と遺物 環濠・溝

K2区



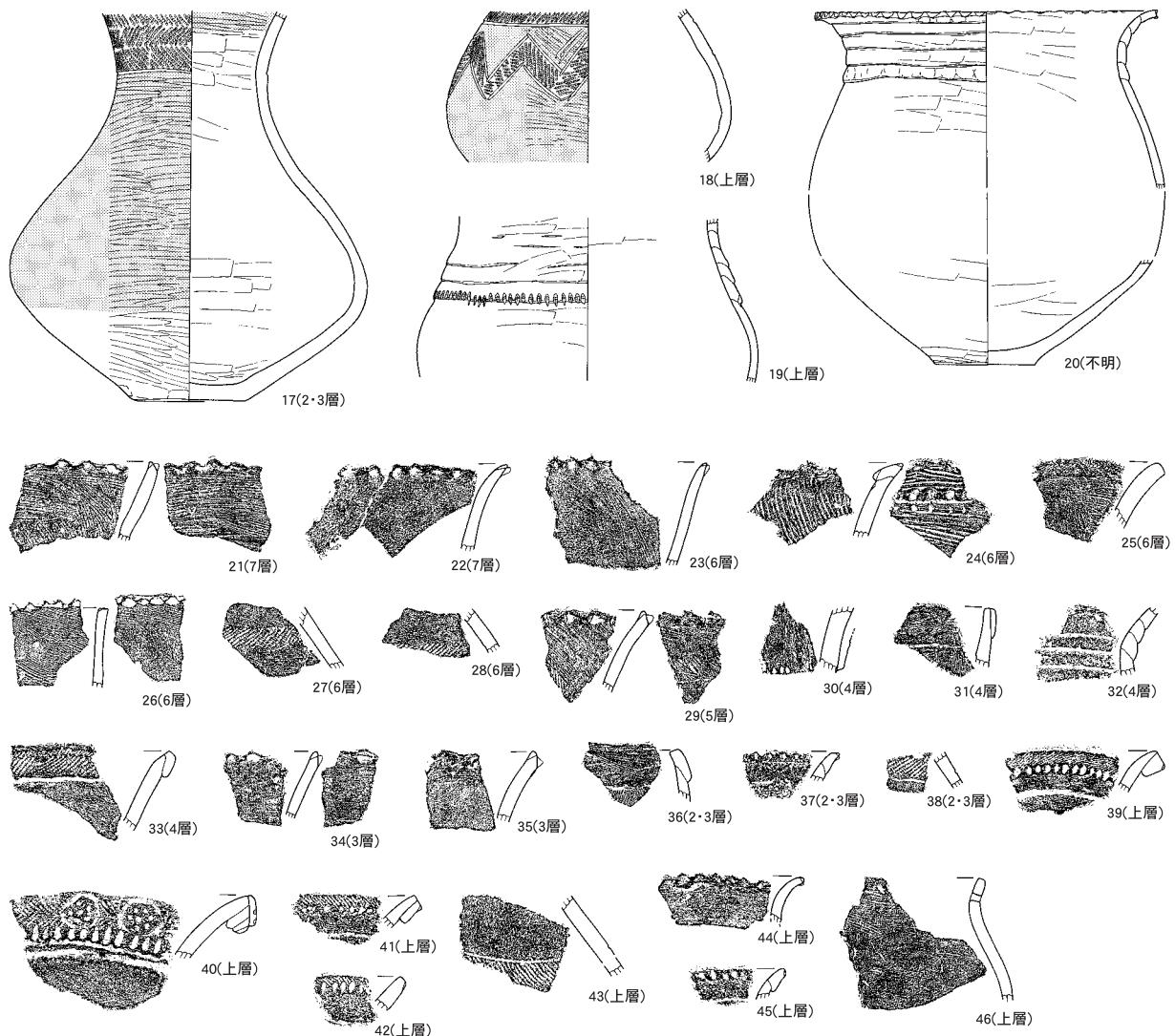
L2区



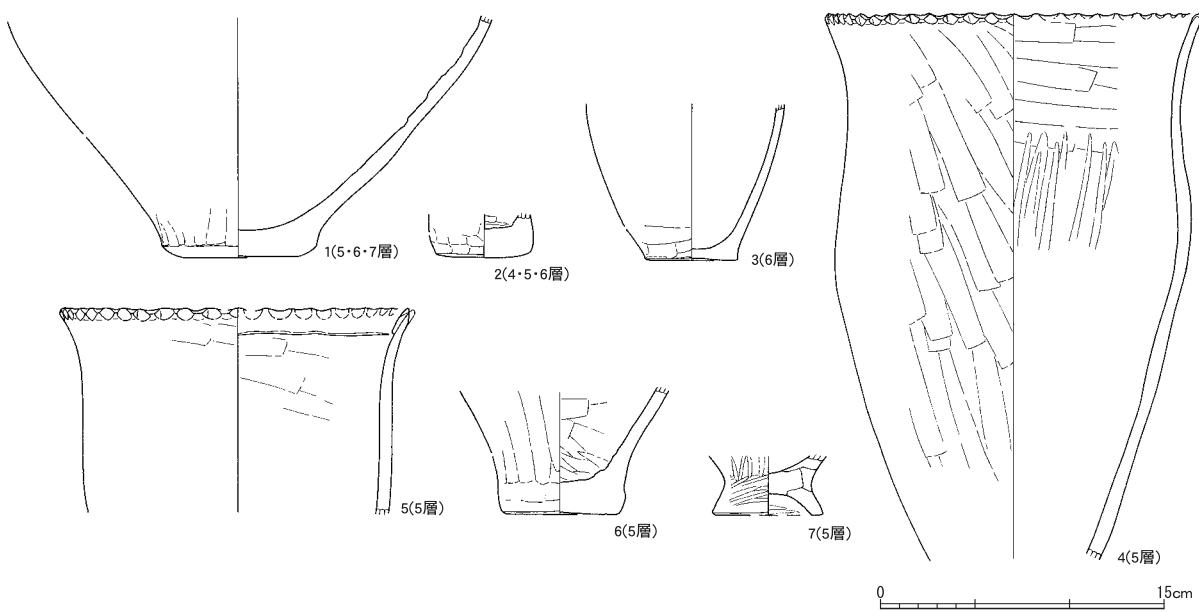
0 15cm

第142図 A地点環濠(6) 遺物

L2区

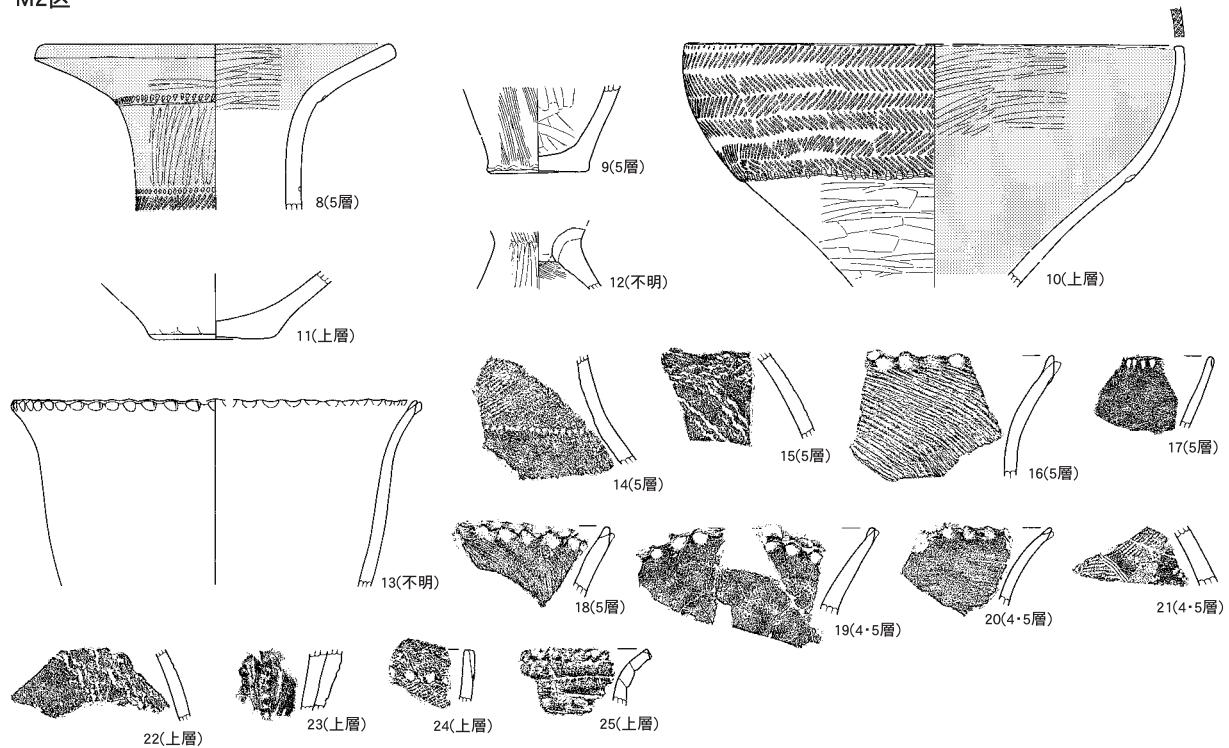


M2区

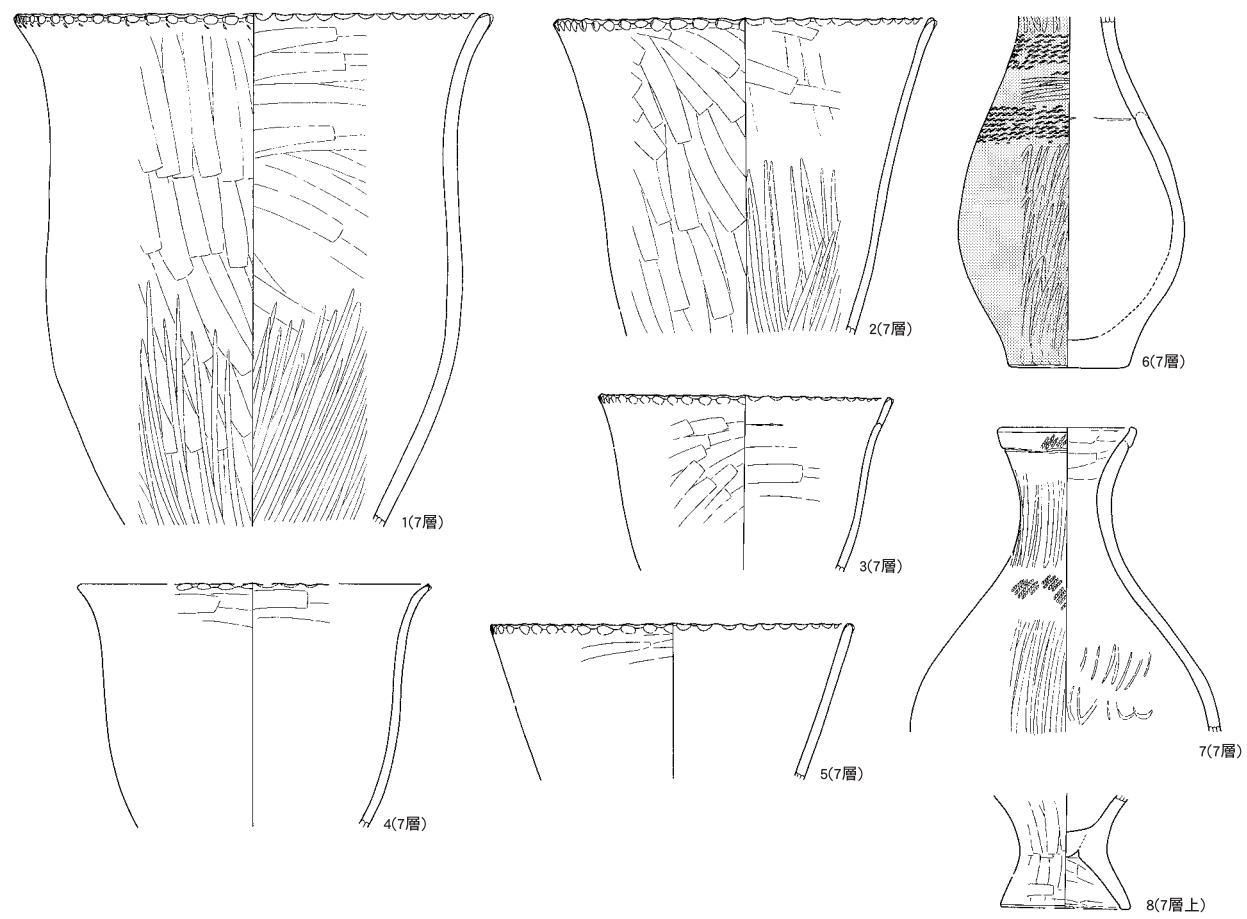


第143図 A地点環濠(7) 遺物

M2区

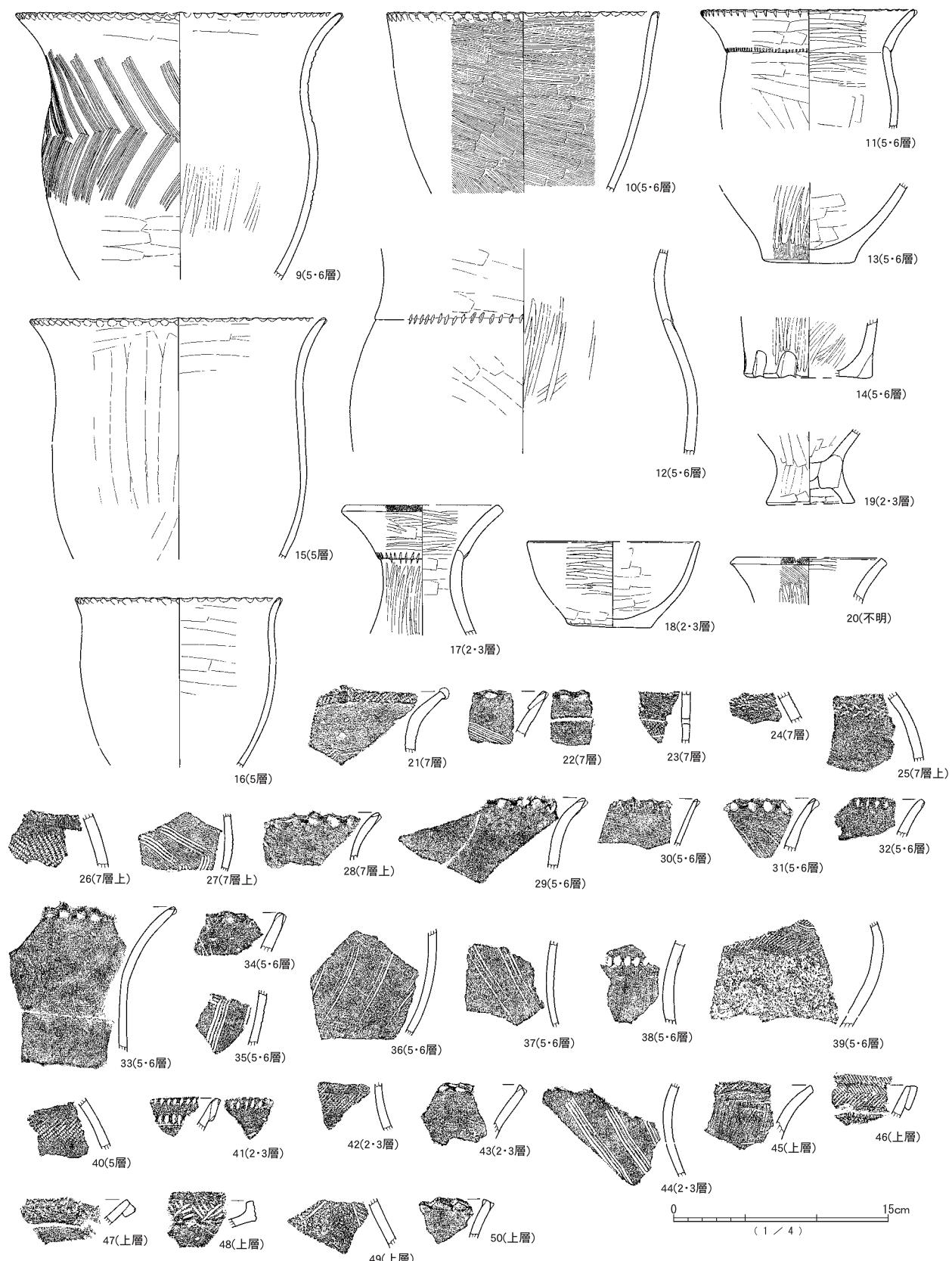


N2区



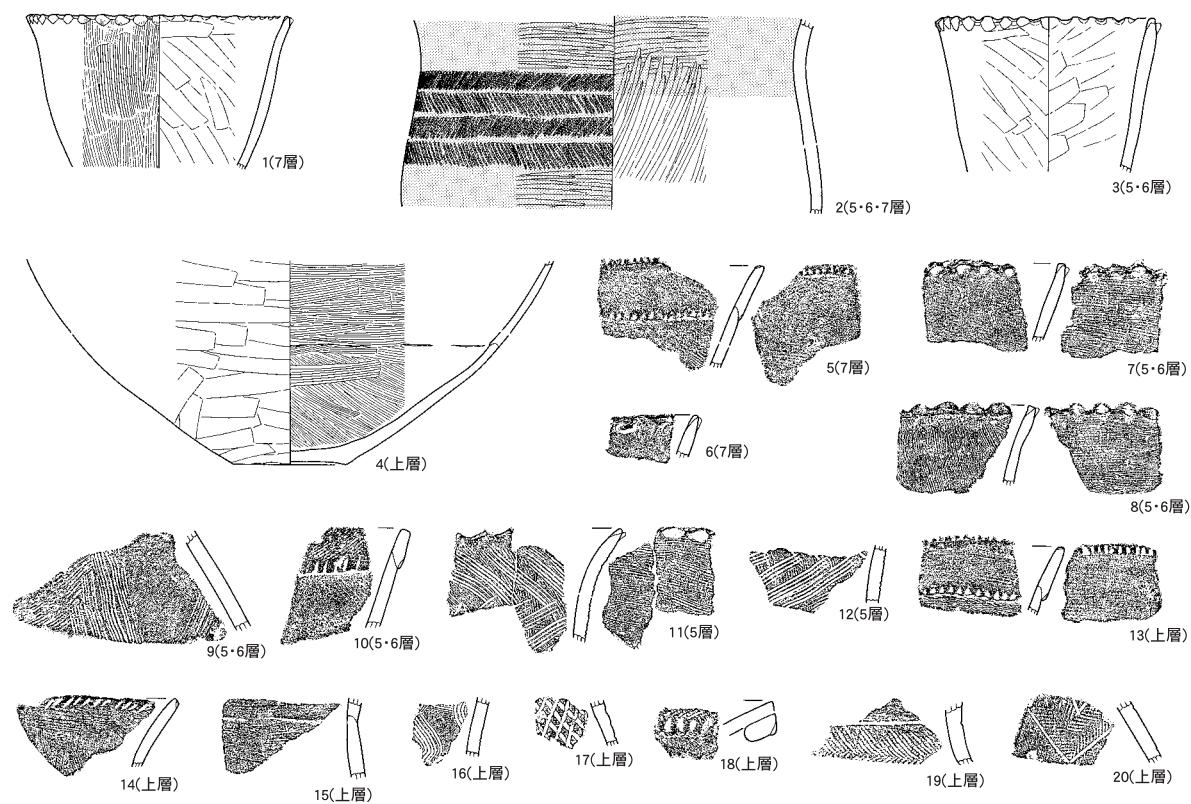
第144図 A地点環濠(8) 遺物

N2区

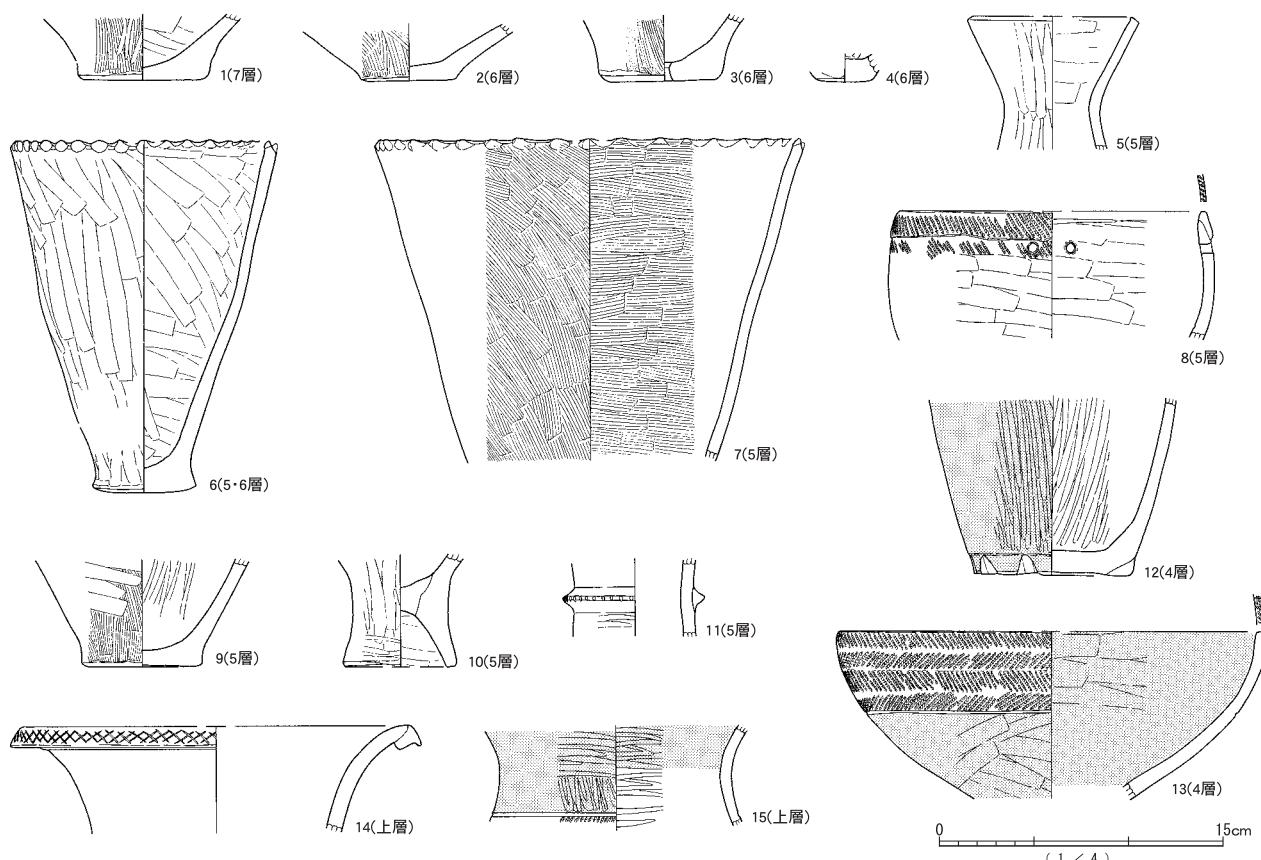


第145図 A地点環濠(9) 遺物

O2区

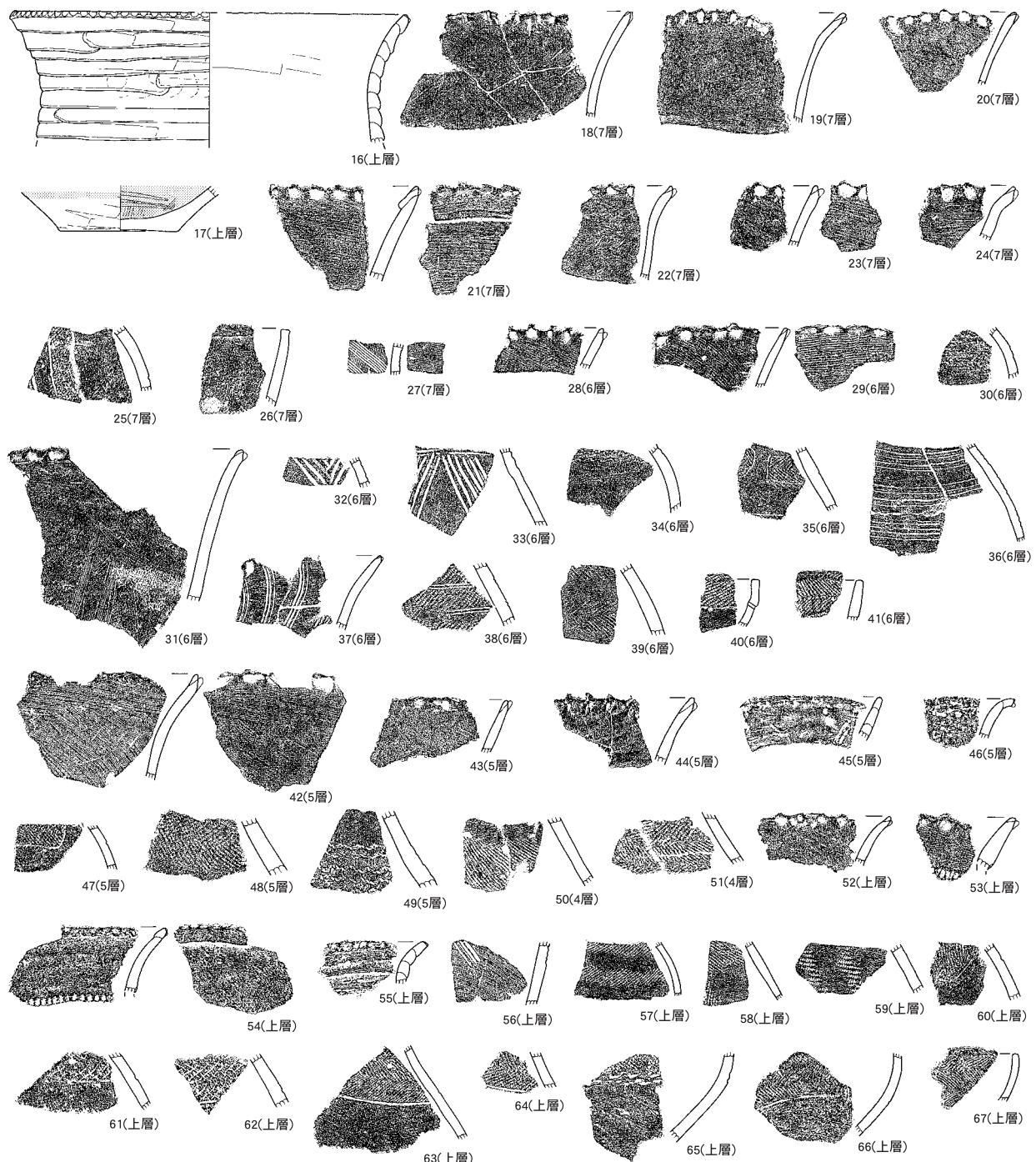


P2区

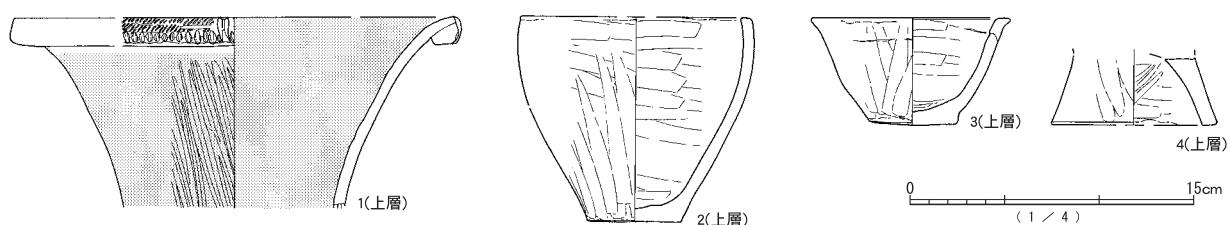


第146図 A地点環濠(10) 遺物

P2区



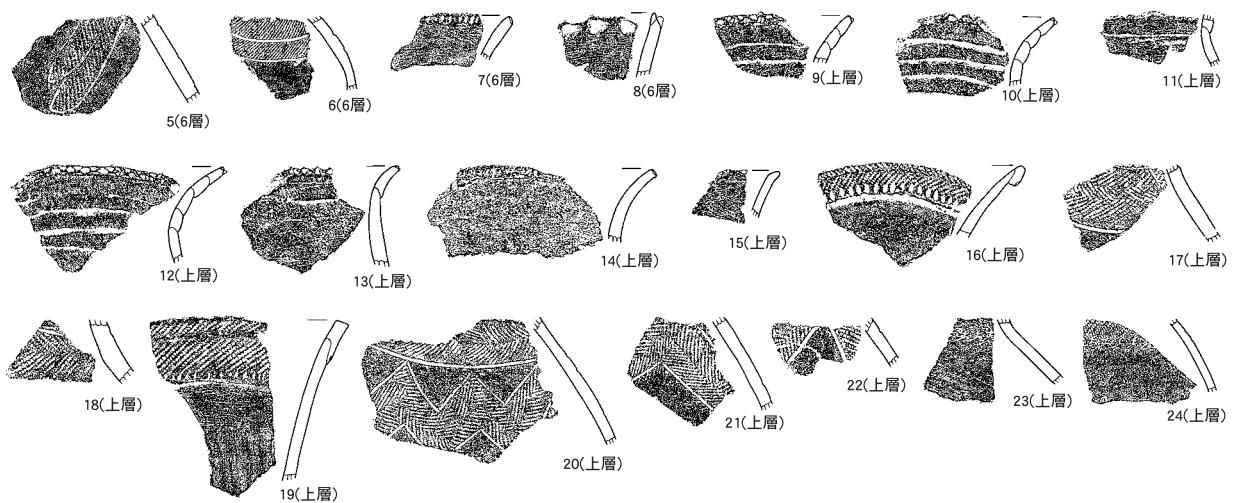
Q2区



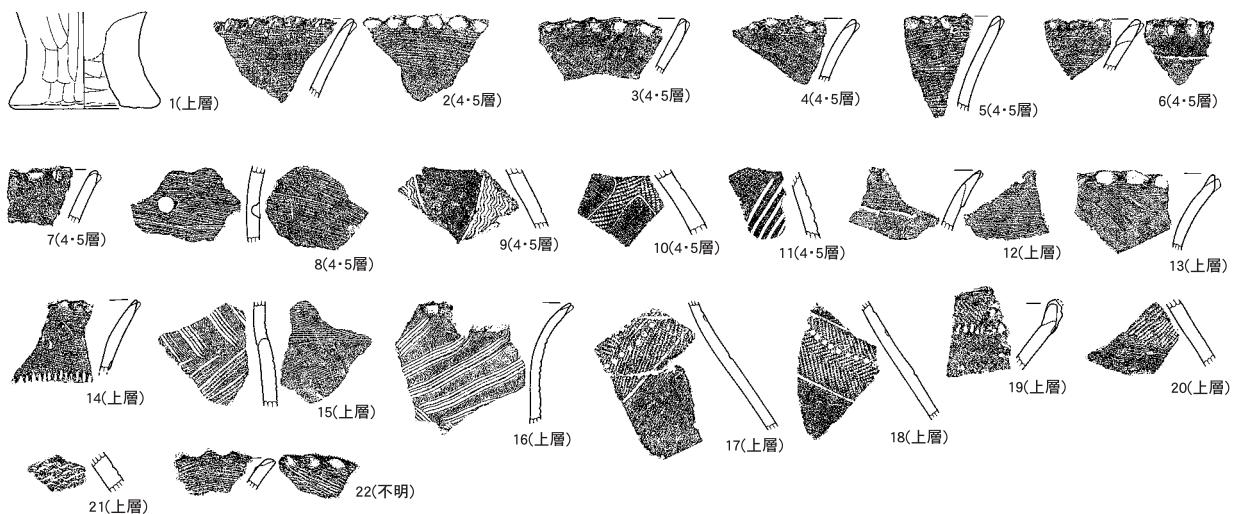
第147図 A地点環濠(11) 遺物

遺構と遺物 環濠・溝

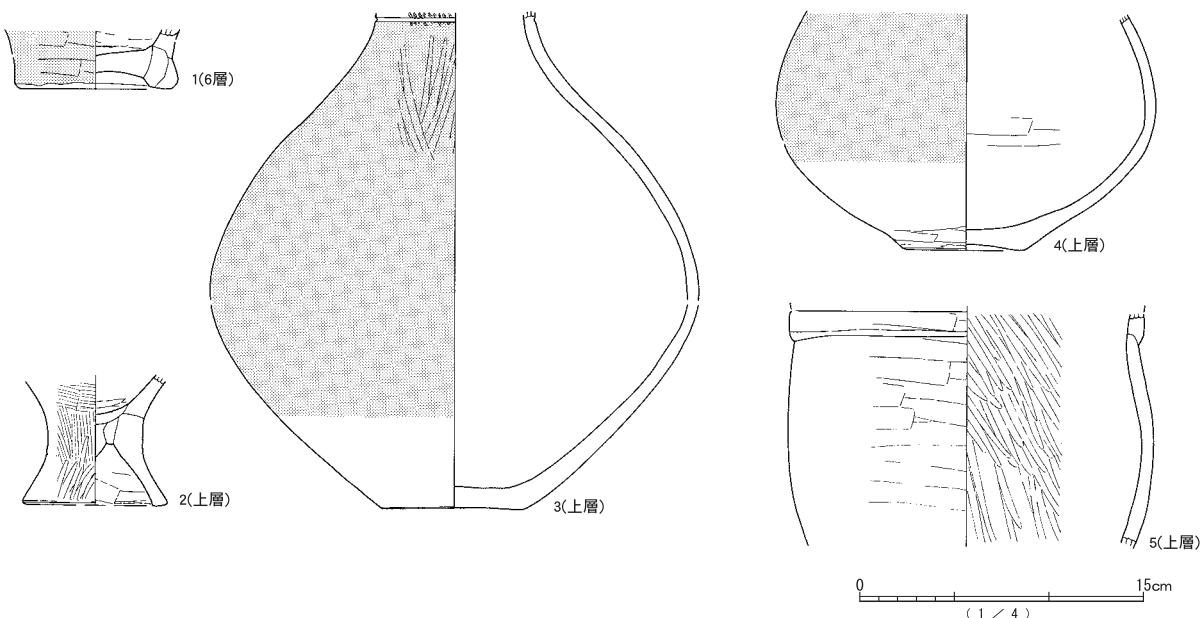
Q2区



Q2・3区

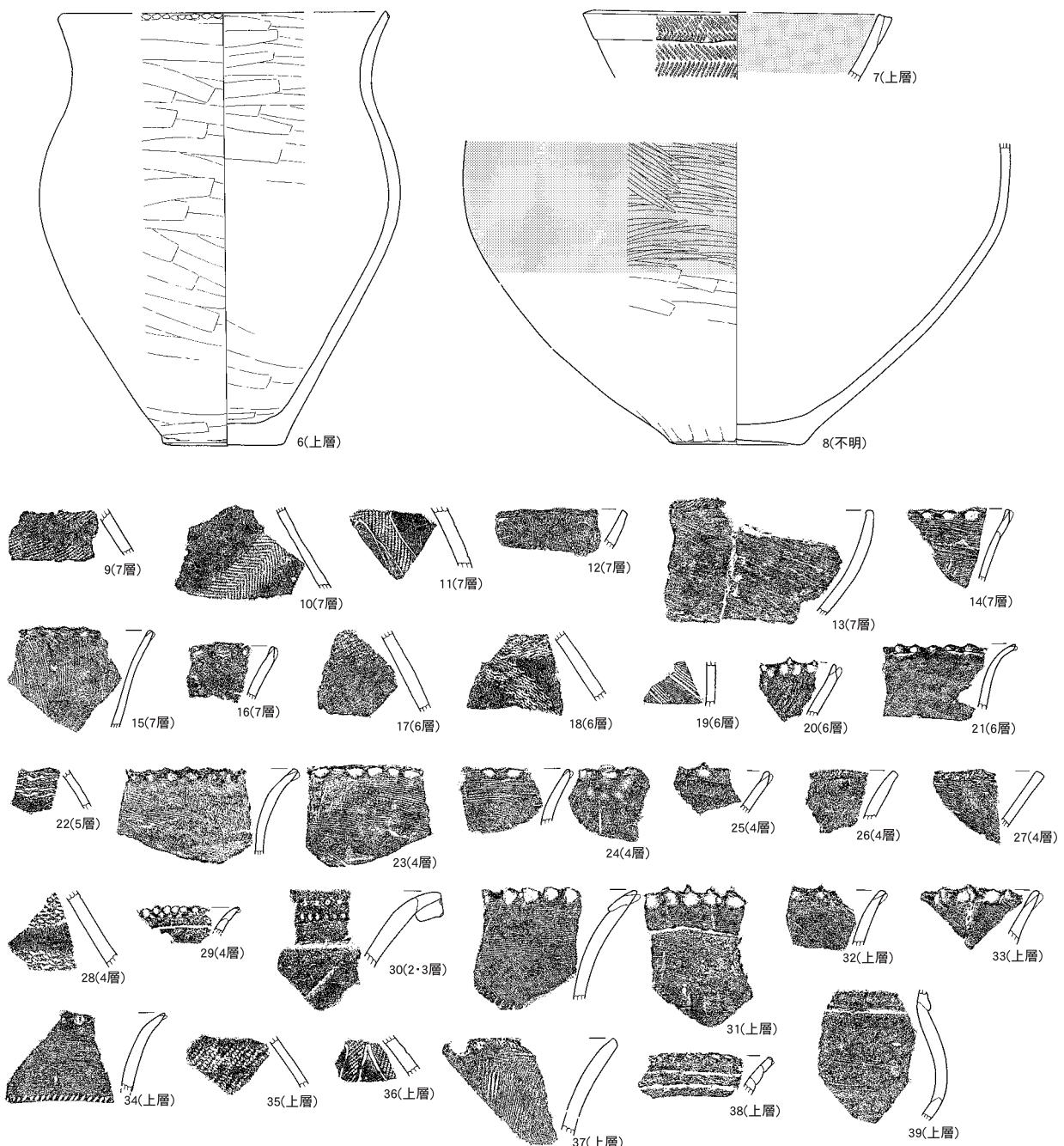


R2・3区

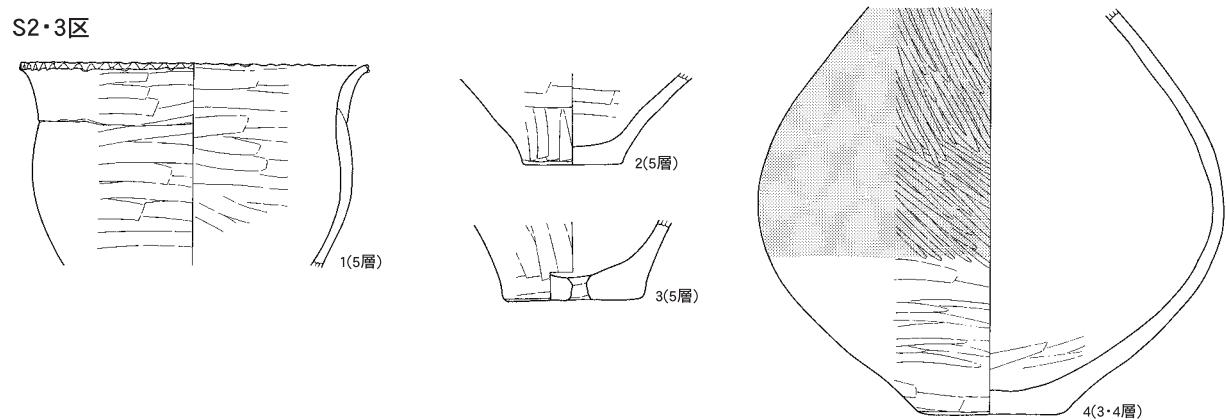


第148図 A地点環濠(12) 遺物

R2・3区



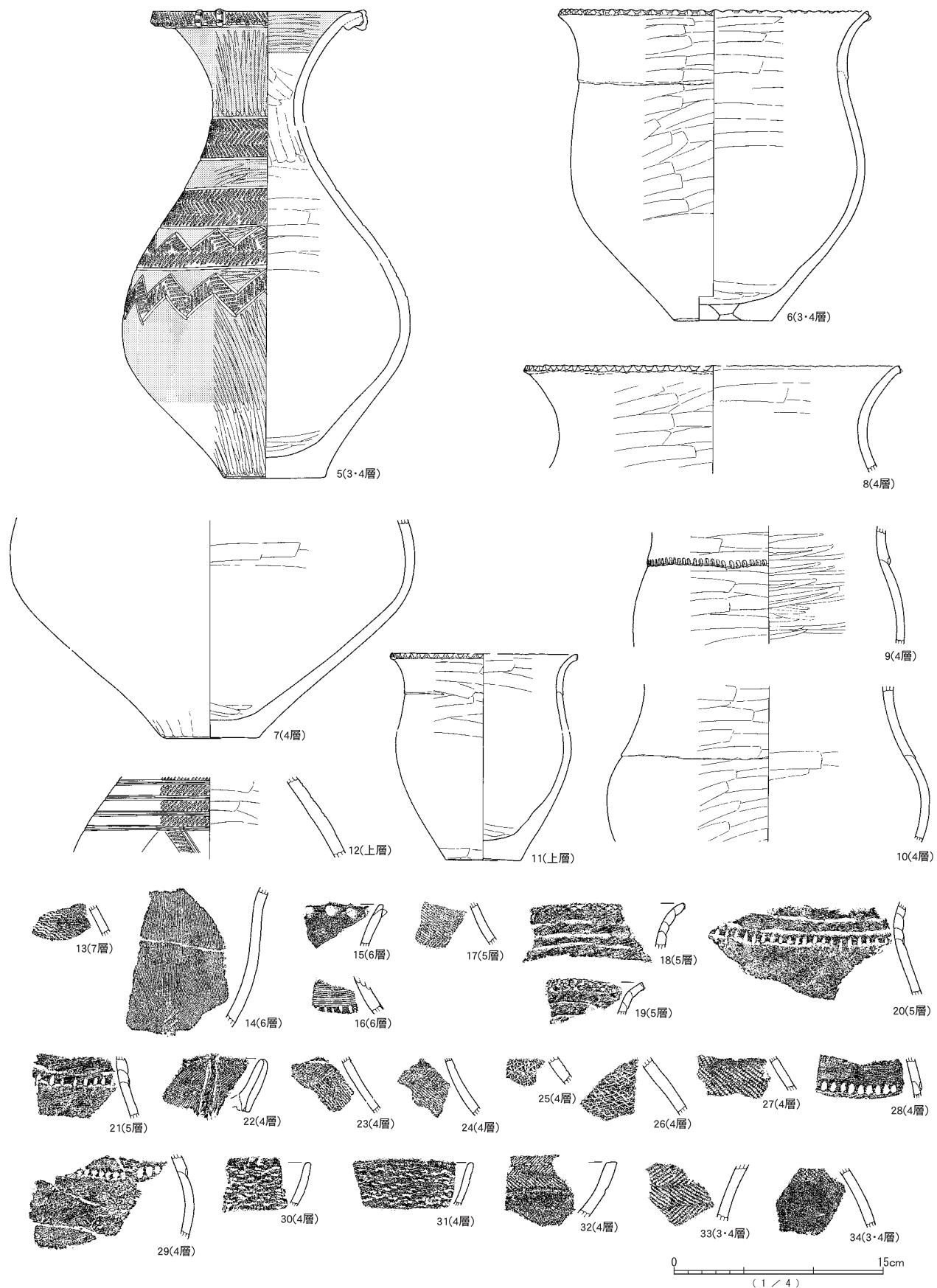
S2・3区



第149図 A地点環濠(13) 遺物

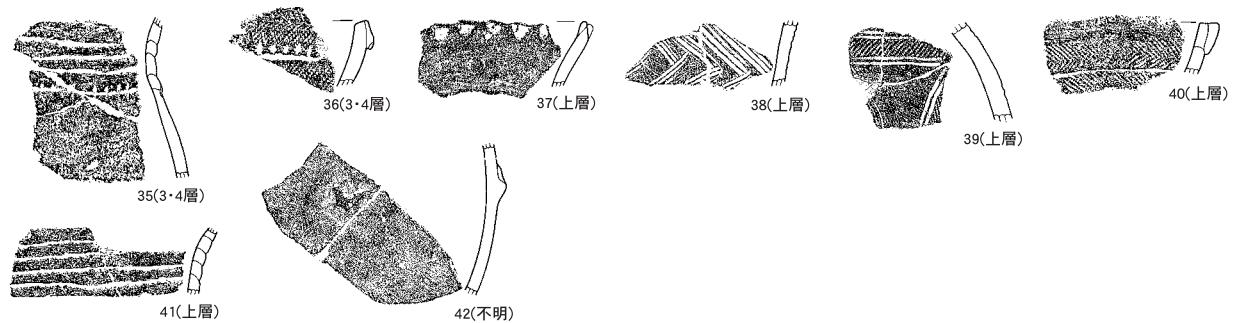
0 15cm
(1 / 4)

S2・3区

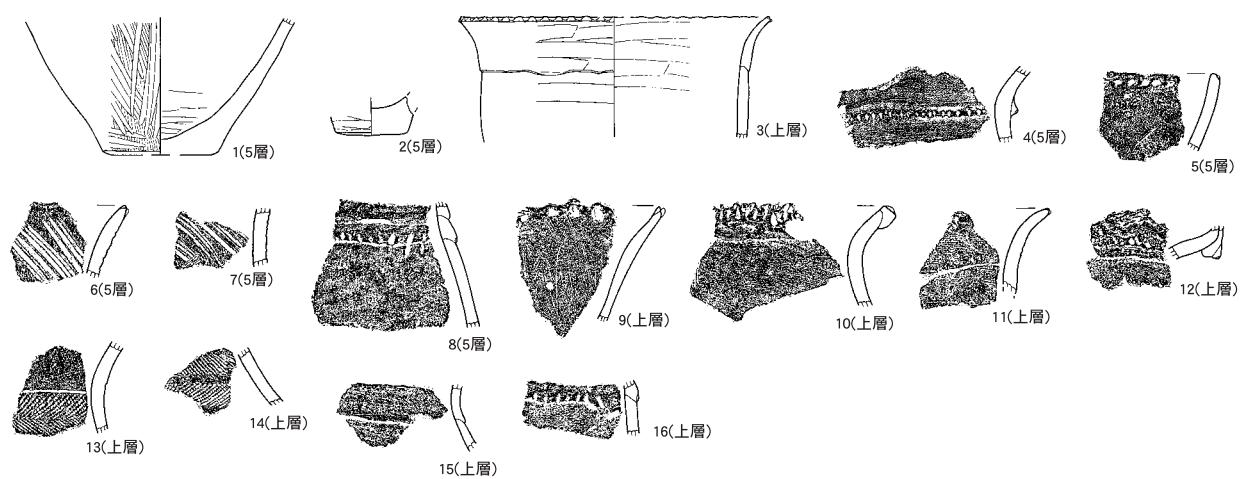


第150図 A地点環濠(14) 遺物

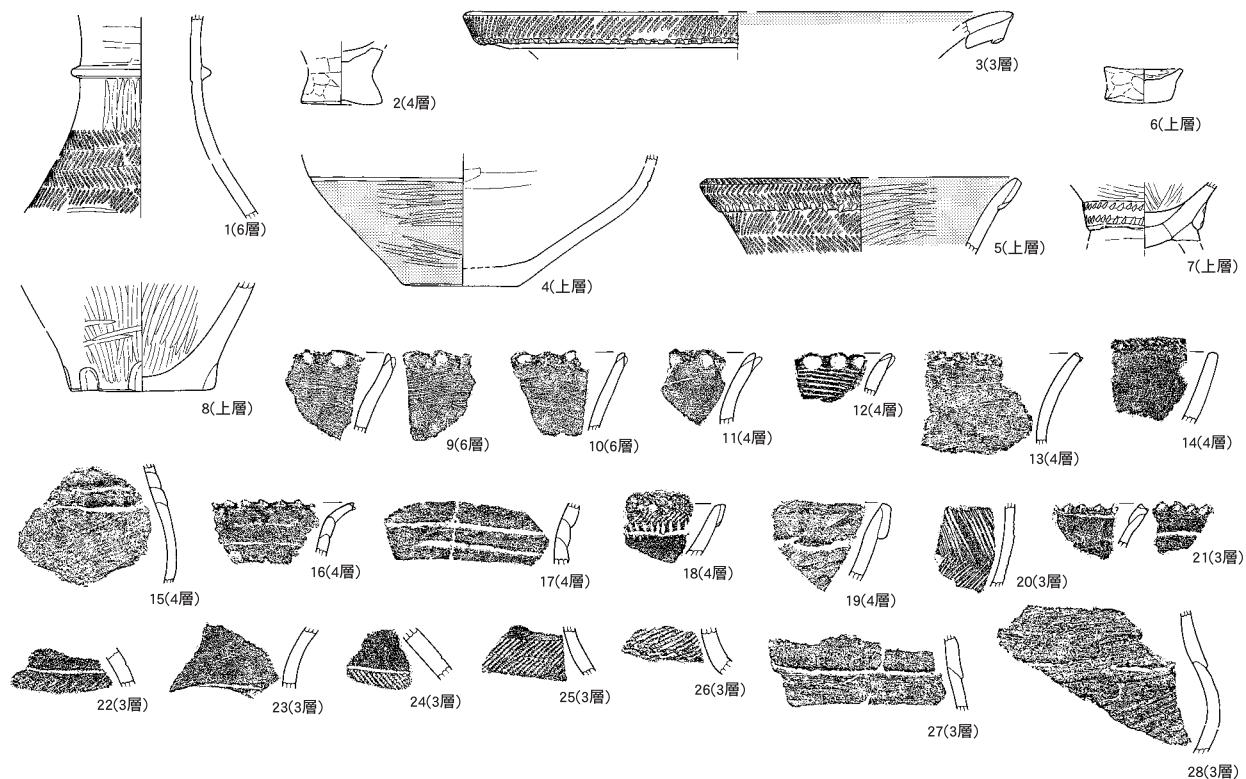
S2・3区



S3区



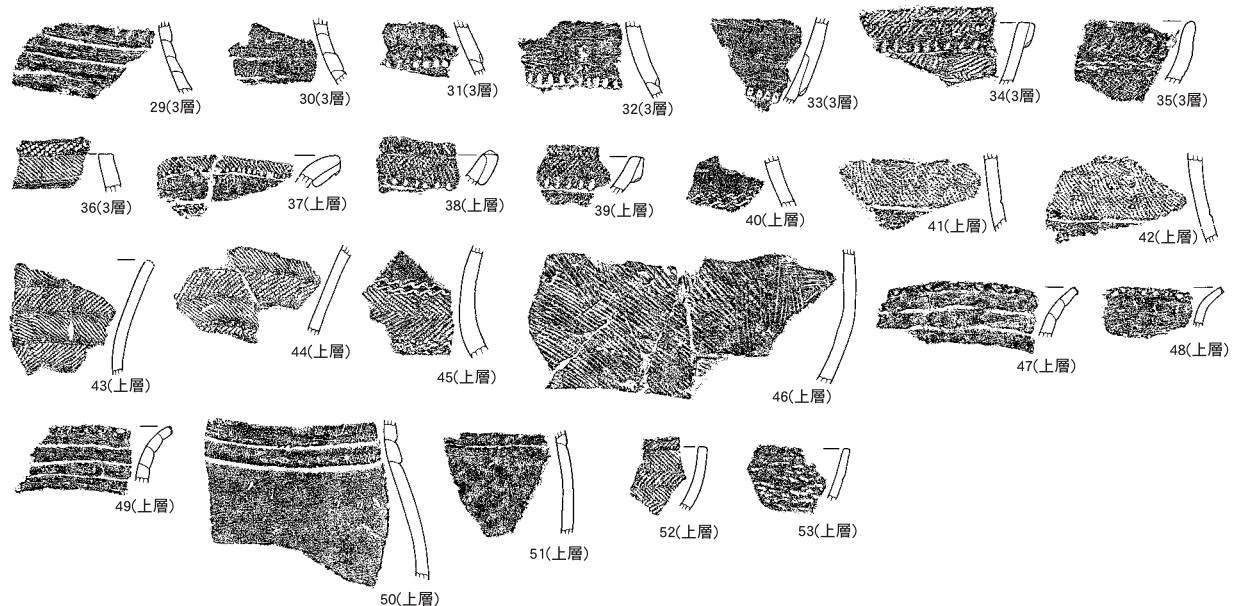
T2区



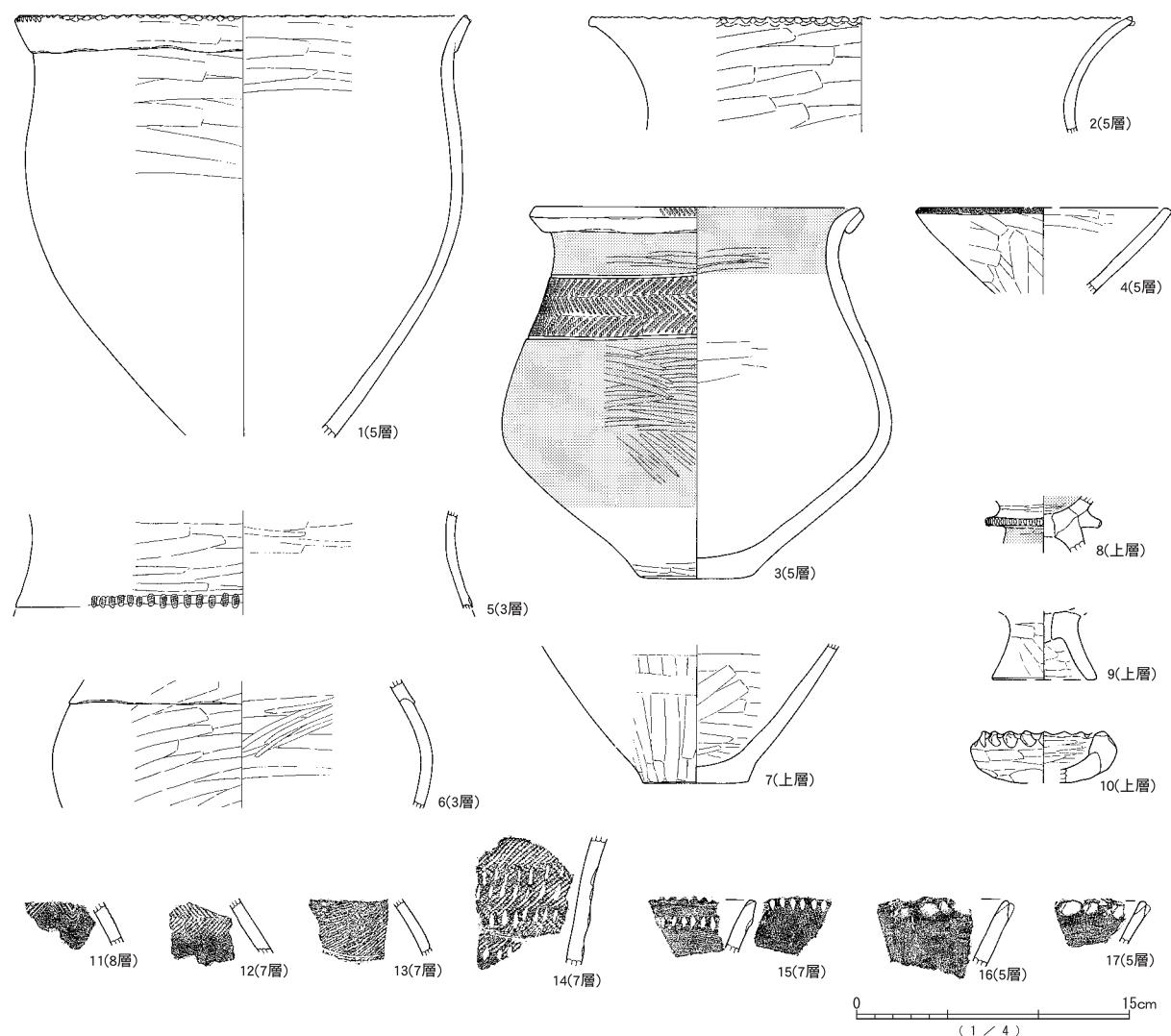
第151図 A地点環濠(15) 遺物

0 15cm
(1 / 4)

T2区

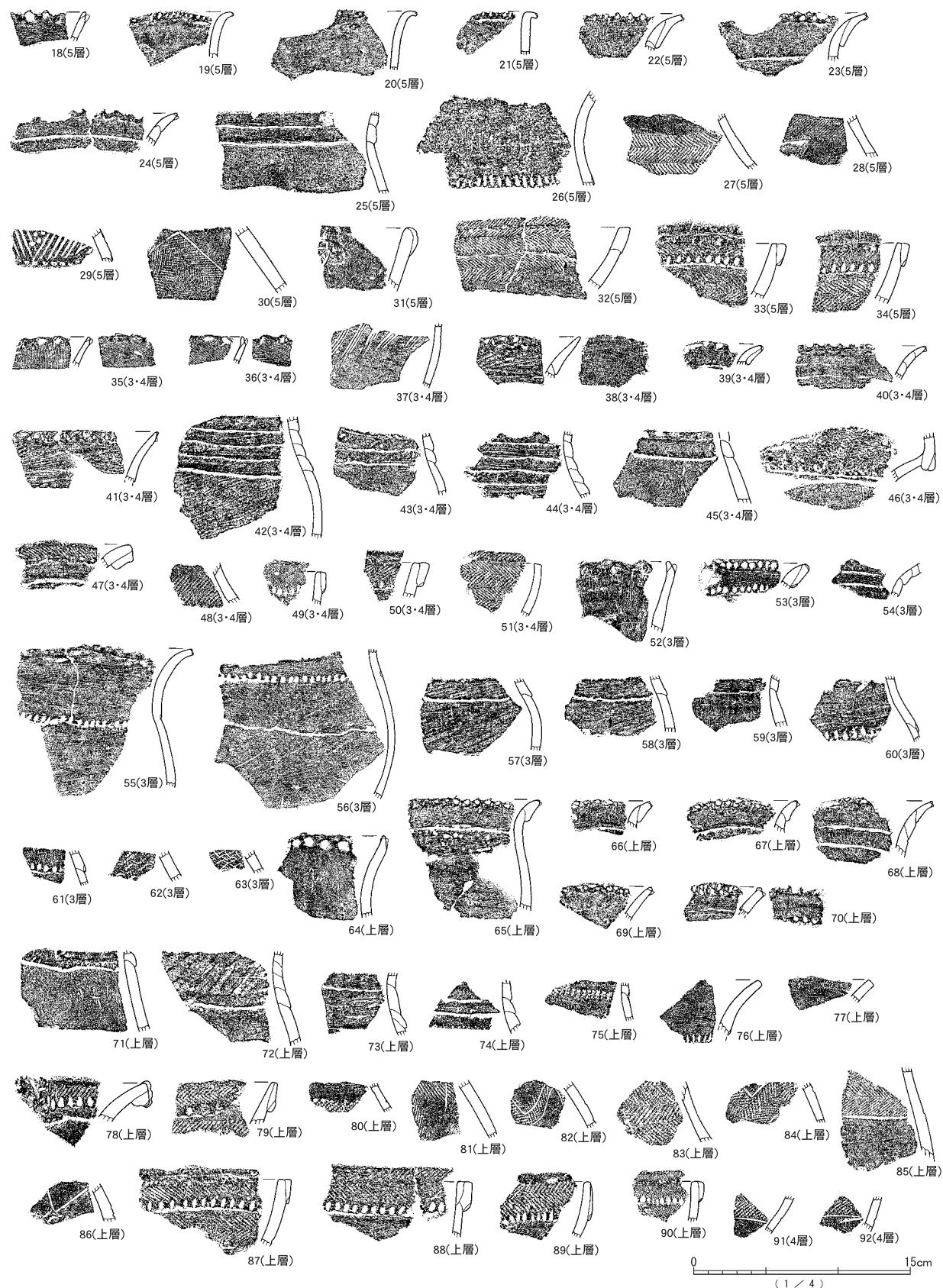


T3区



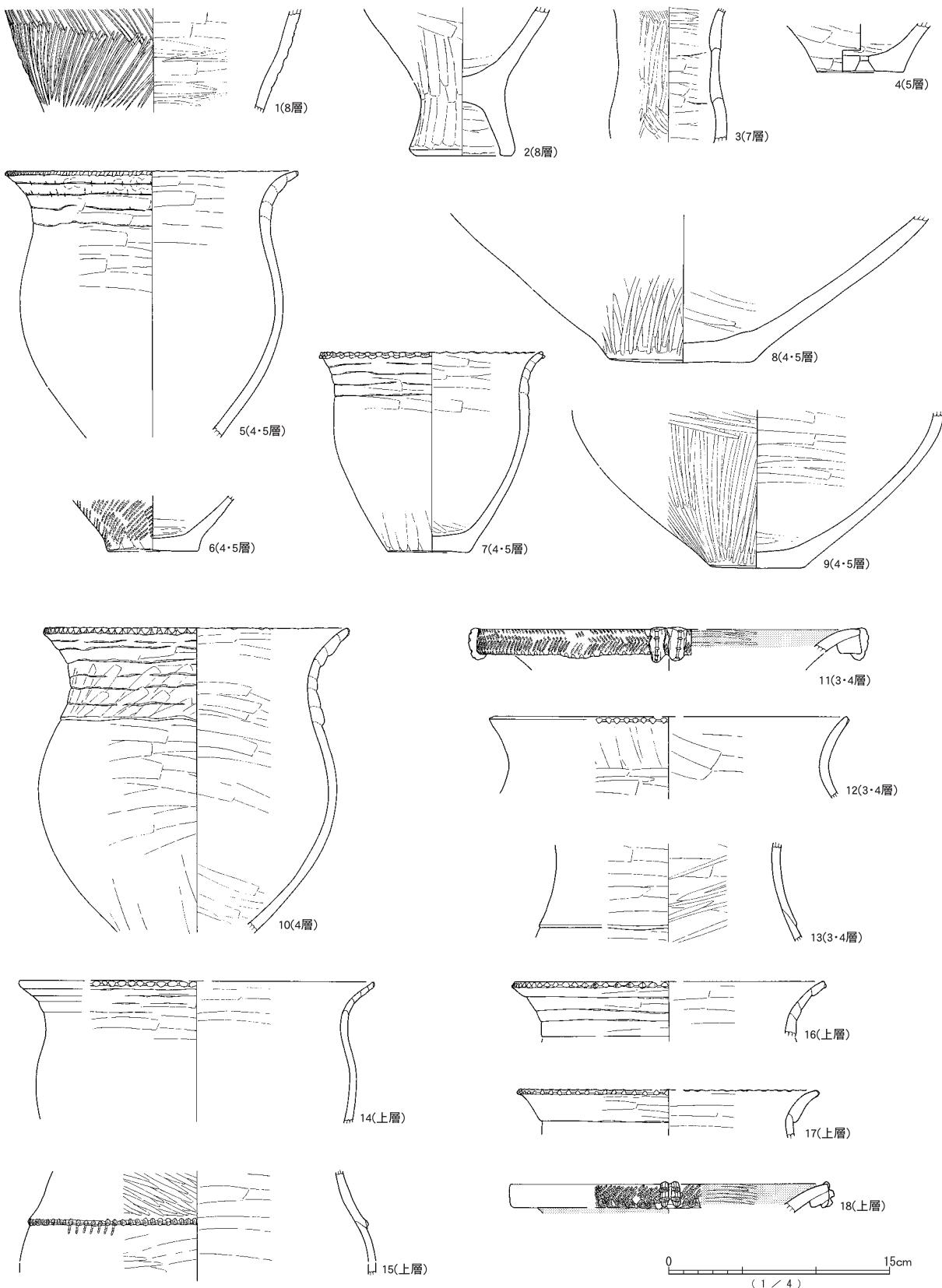
第152図 A地点環濠(16) 遺物

T3区



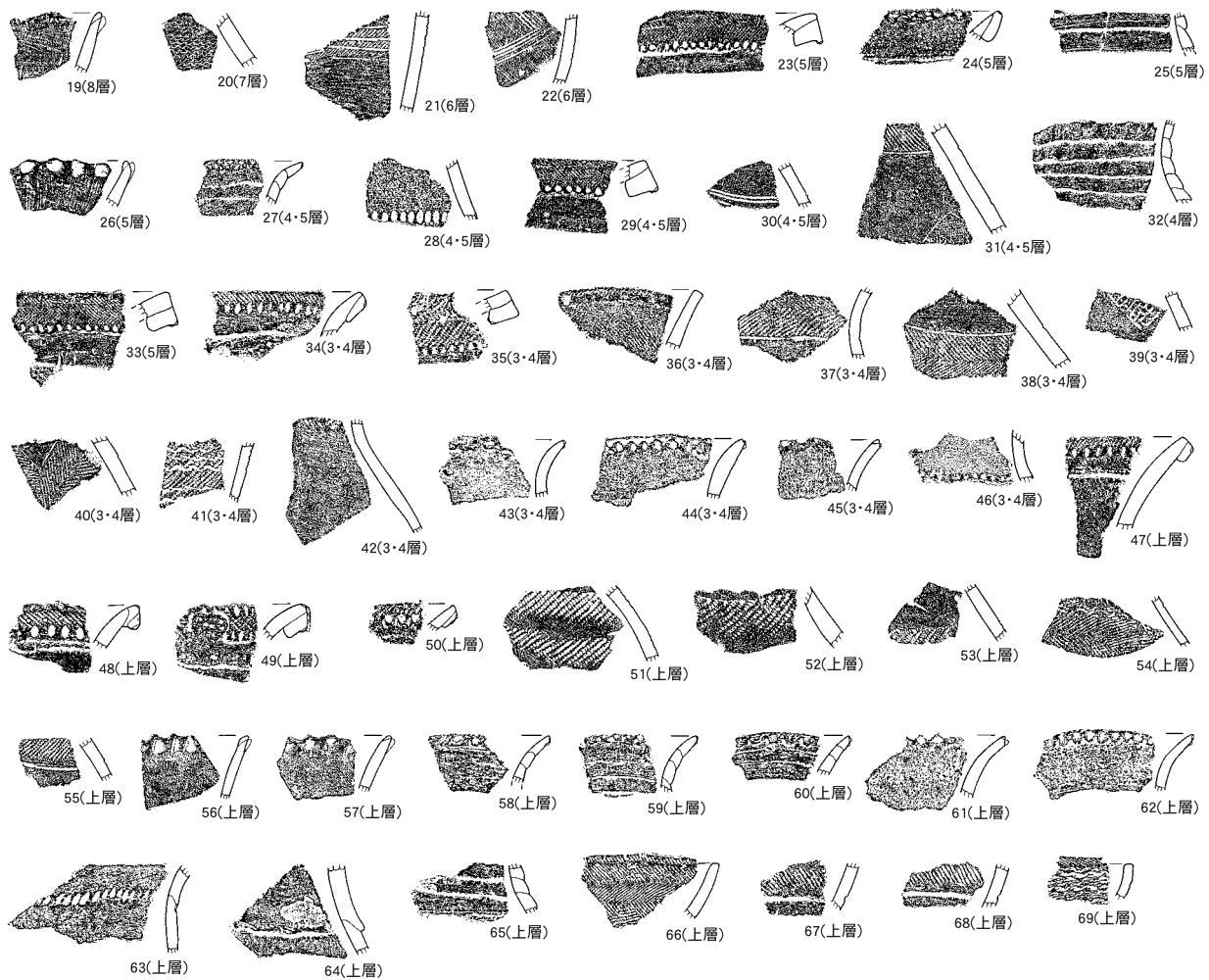
第153図 A地点環濠(17) 遺物

U3区

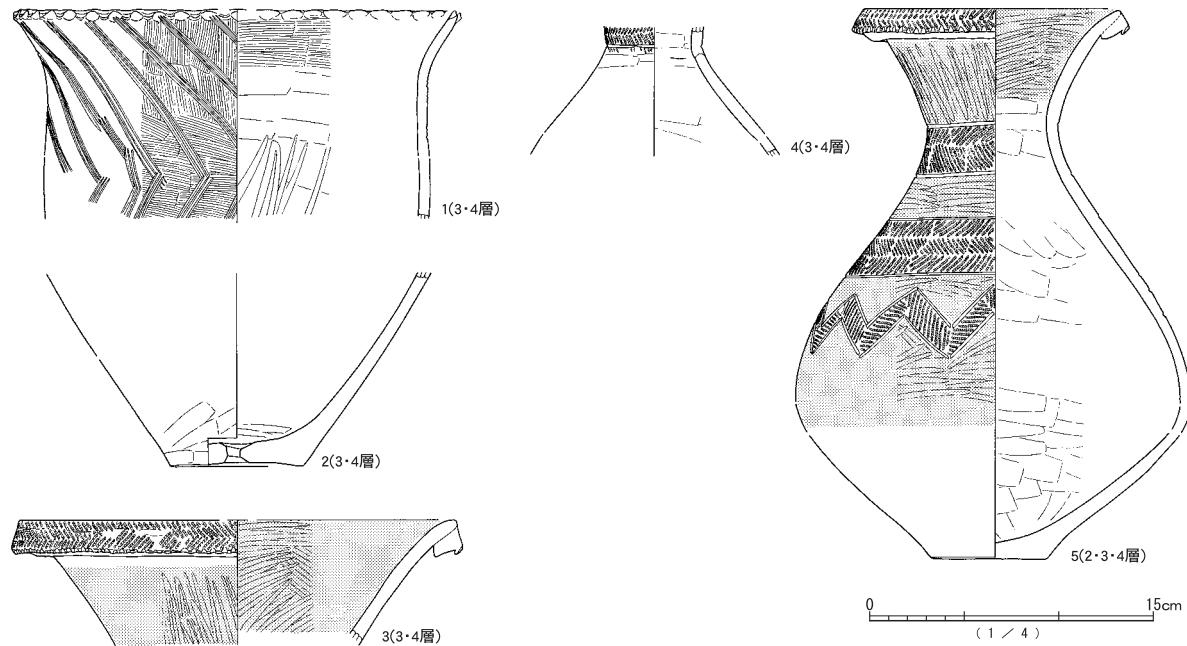


第154図 A地点環濠(18) 遺物

U3区

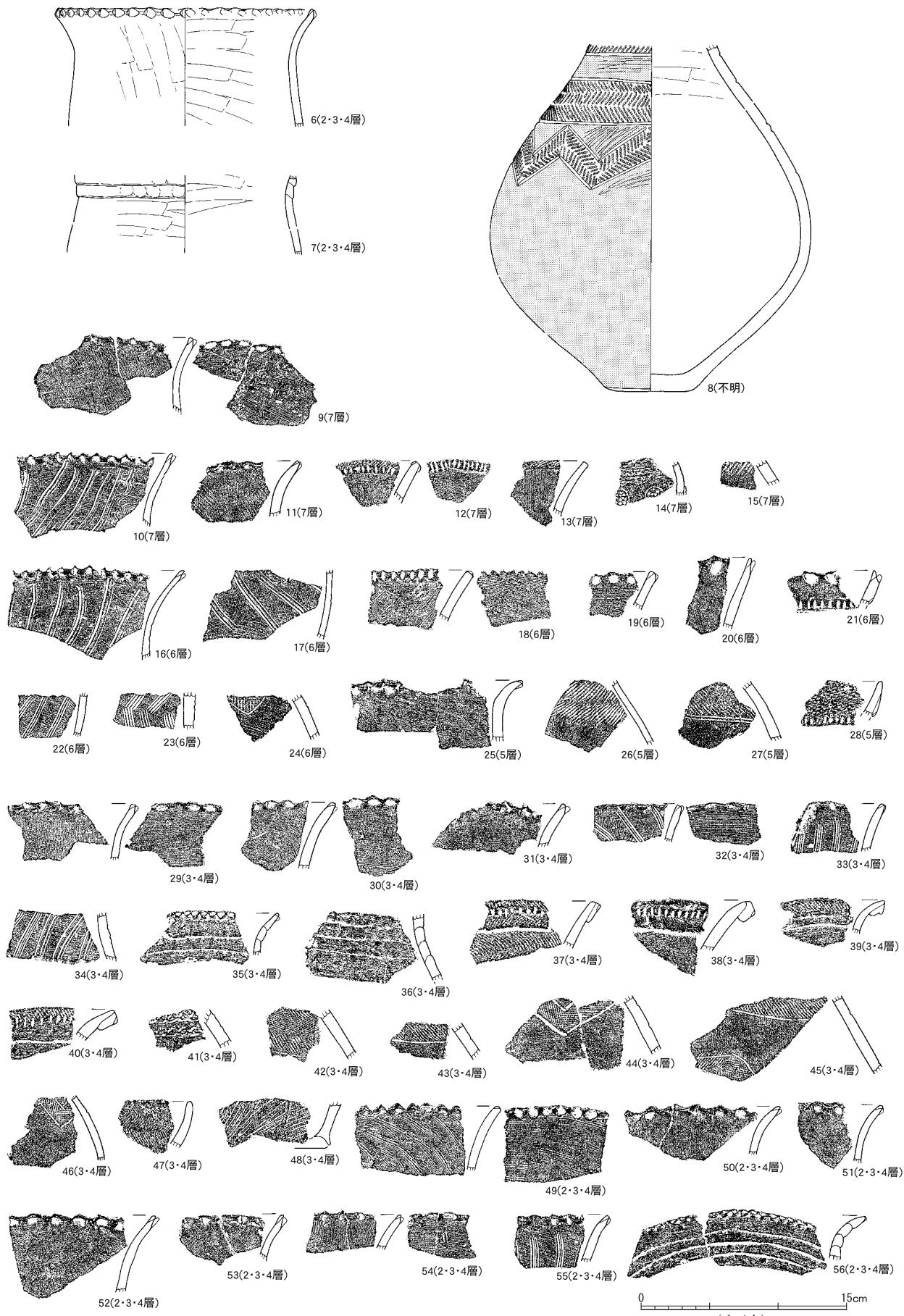


V3区



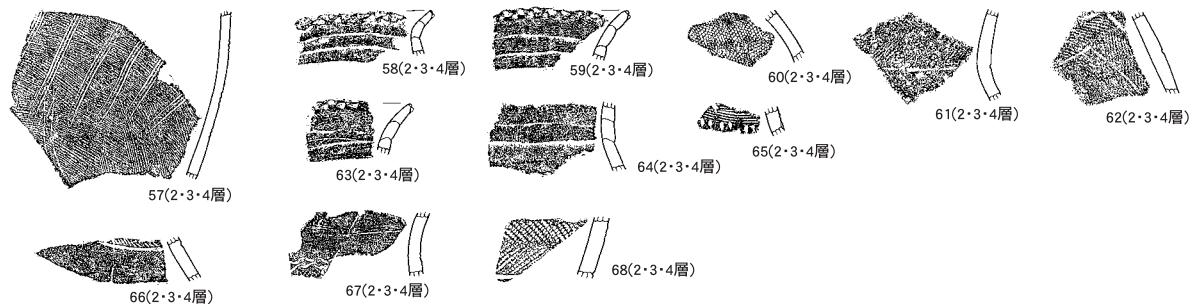
第155図 A地点環濠(19) 遺物

V3区

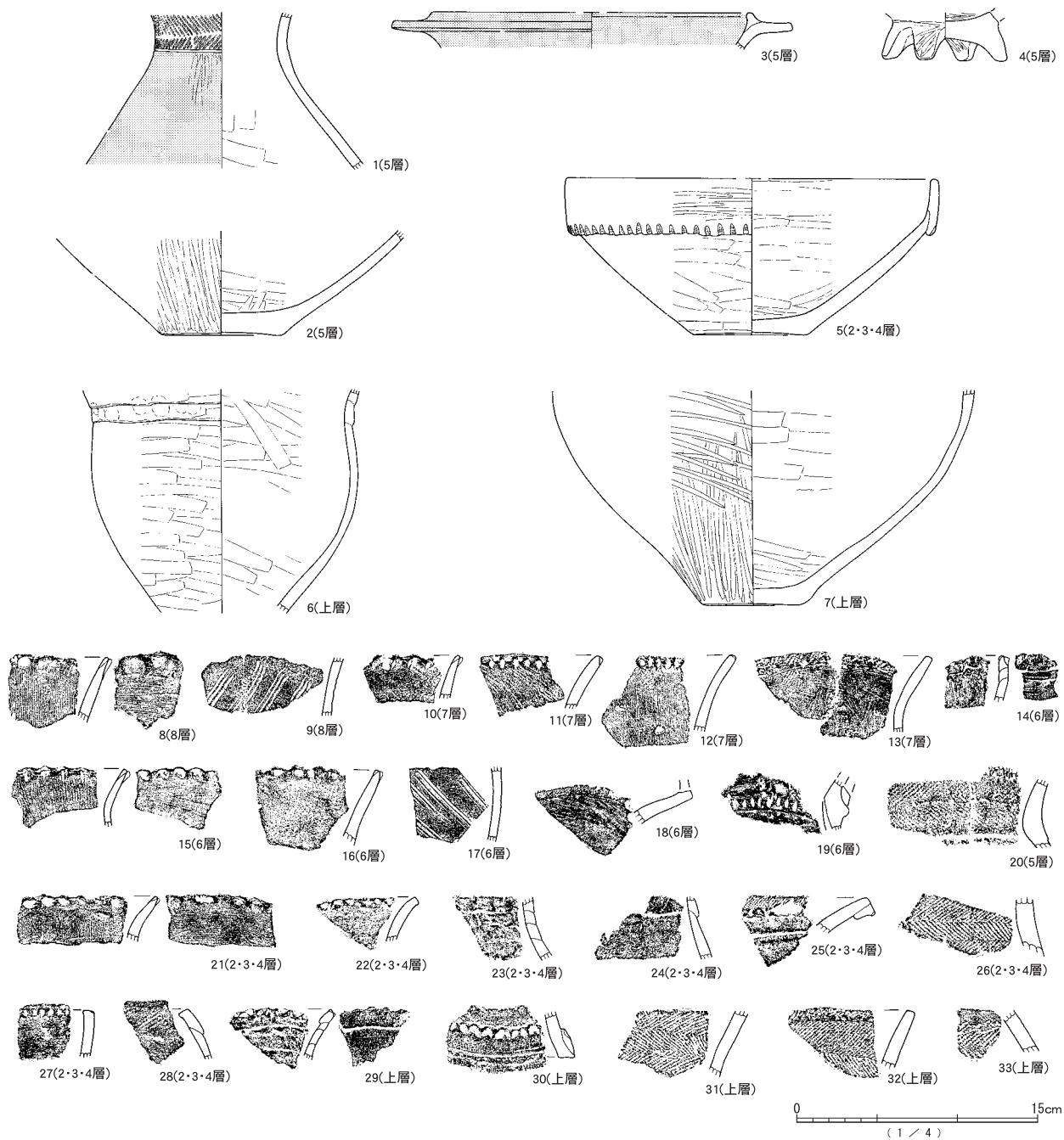


第156図 A地点環濠(20) 遺物

V3区

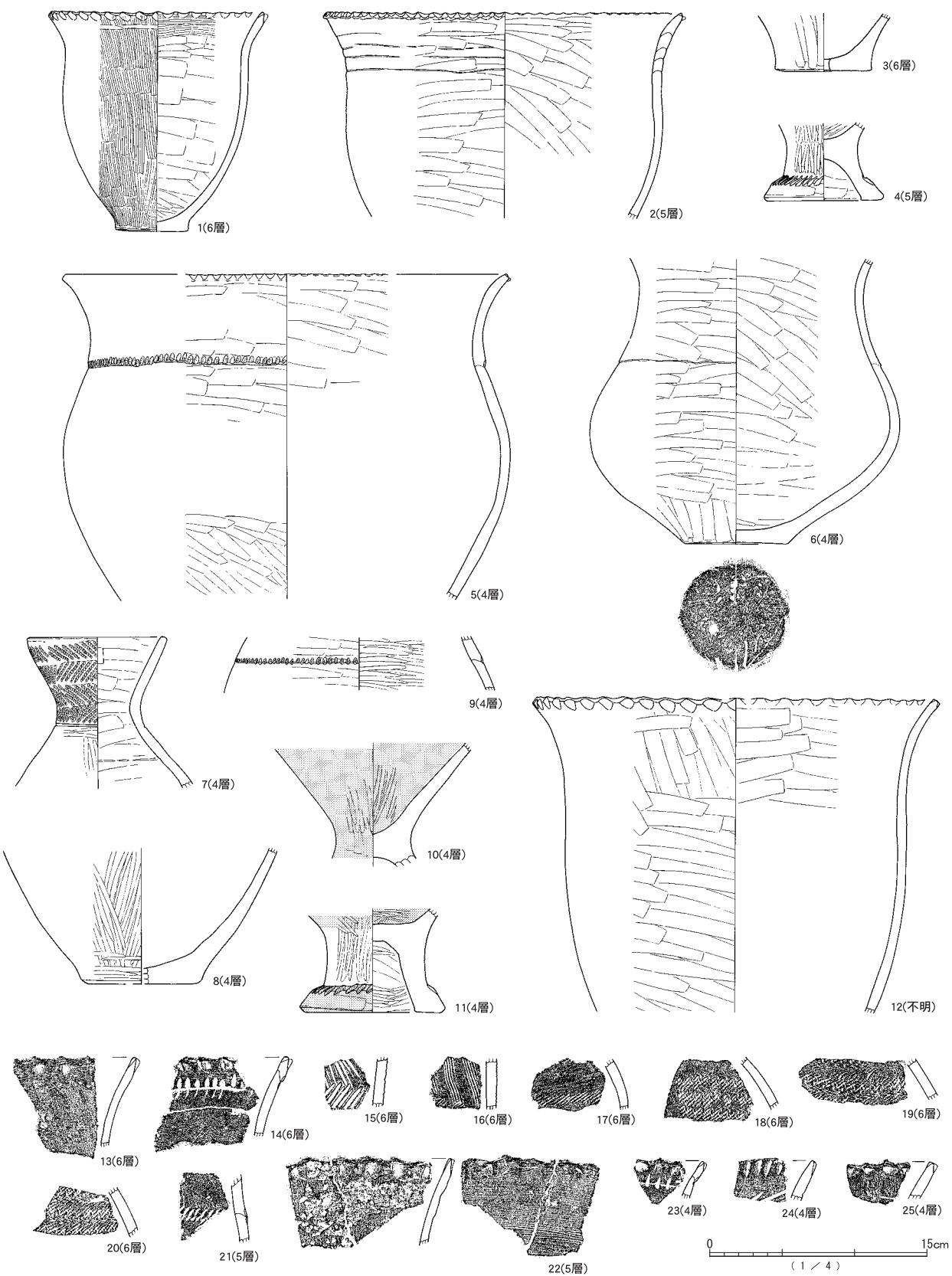


W3区



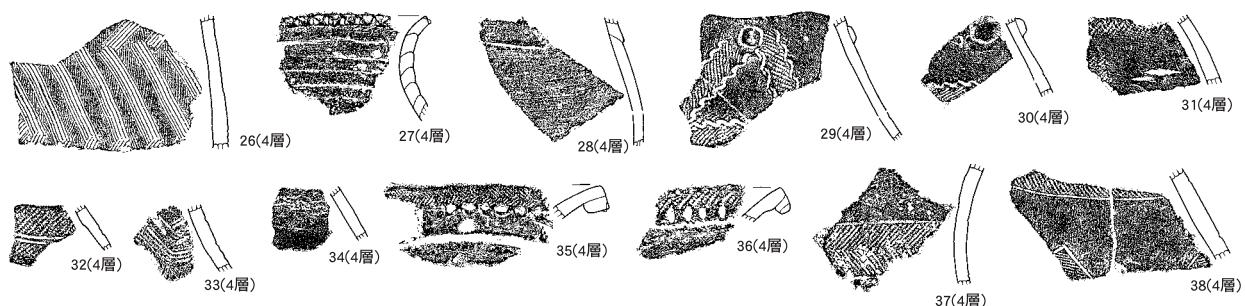
第157図 A地点環濠(21) 遺物

X3区

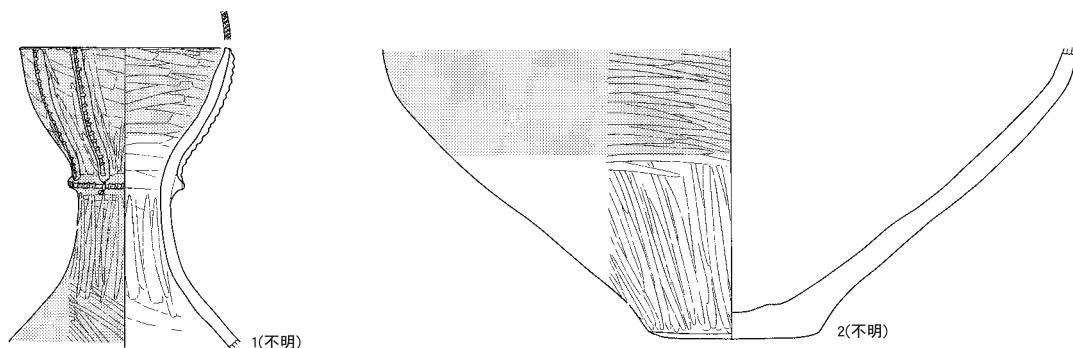


第158図 A地点環濠(22) 遺物

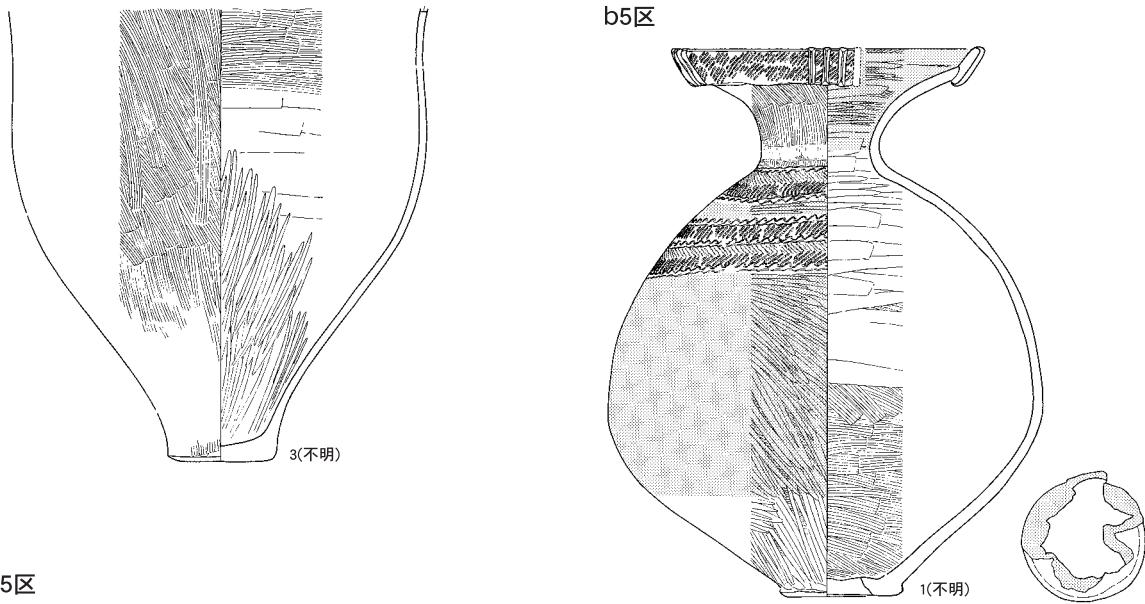
X3区



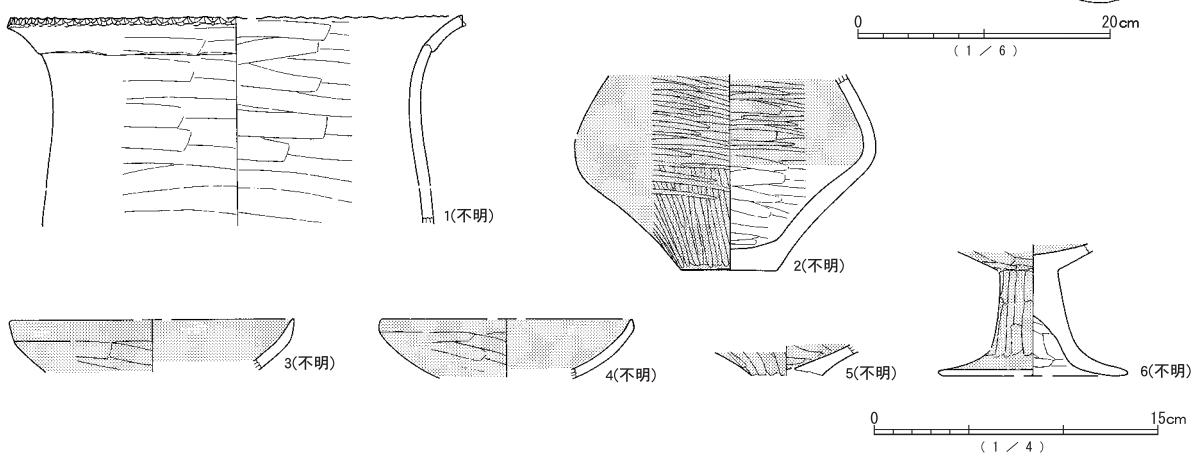
Y3・4区



b5区

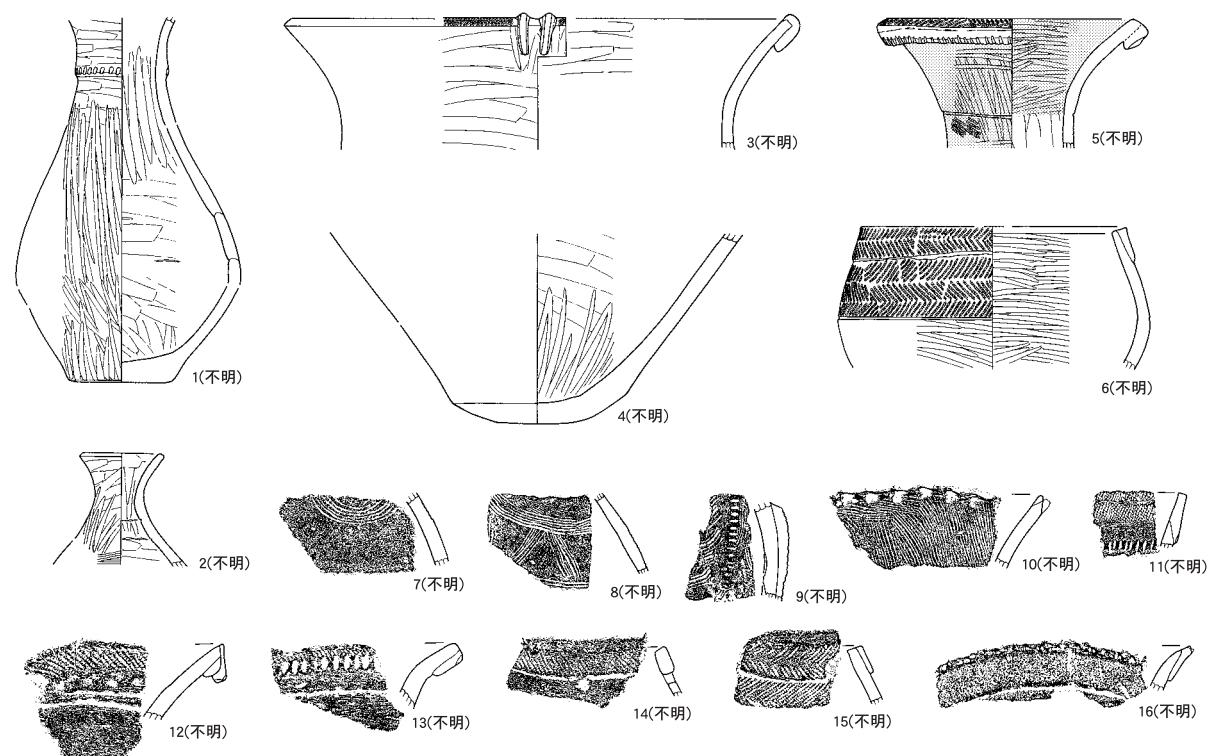


d5区

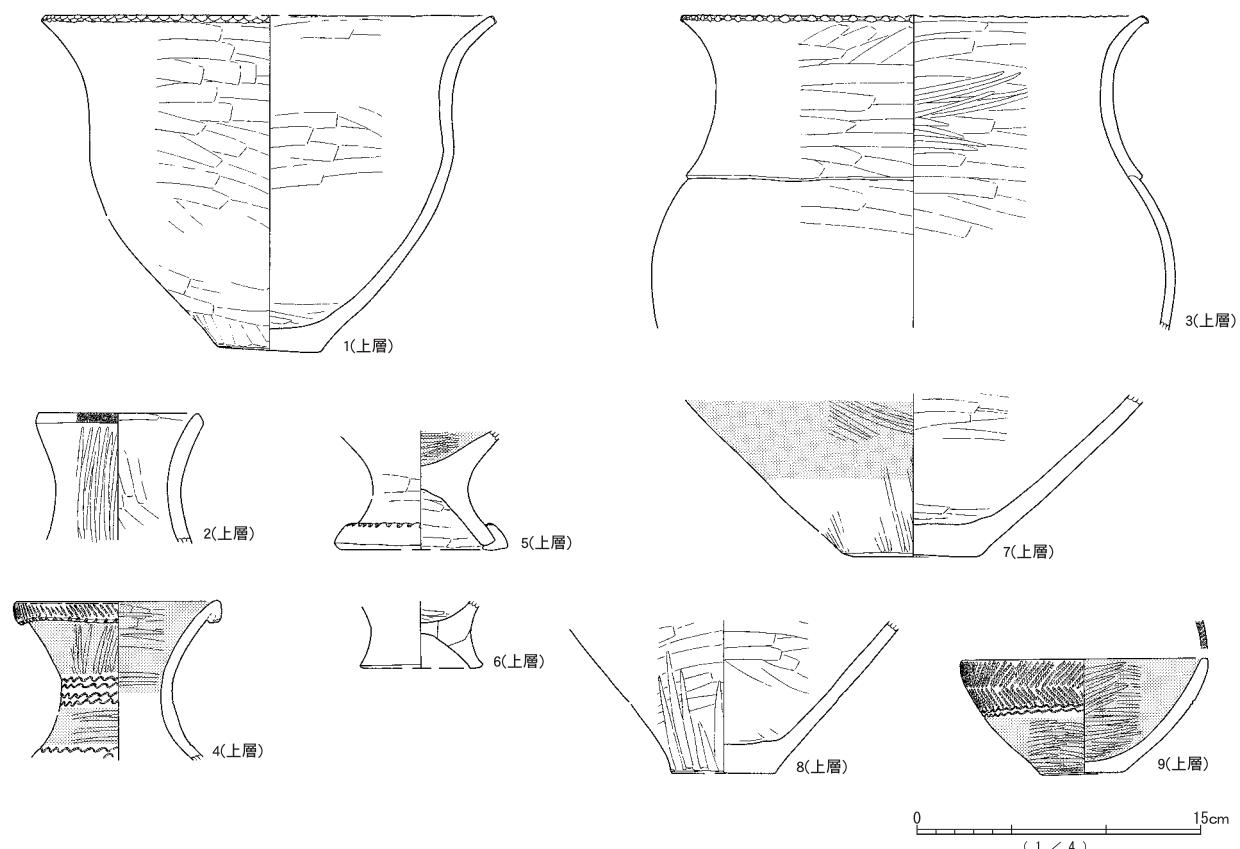


第159図 A地点環濠(23) 遺物

e6区



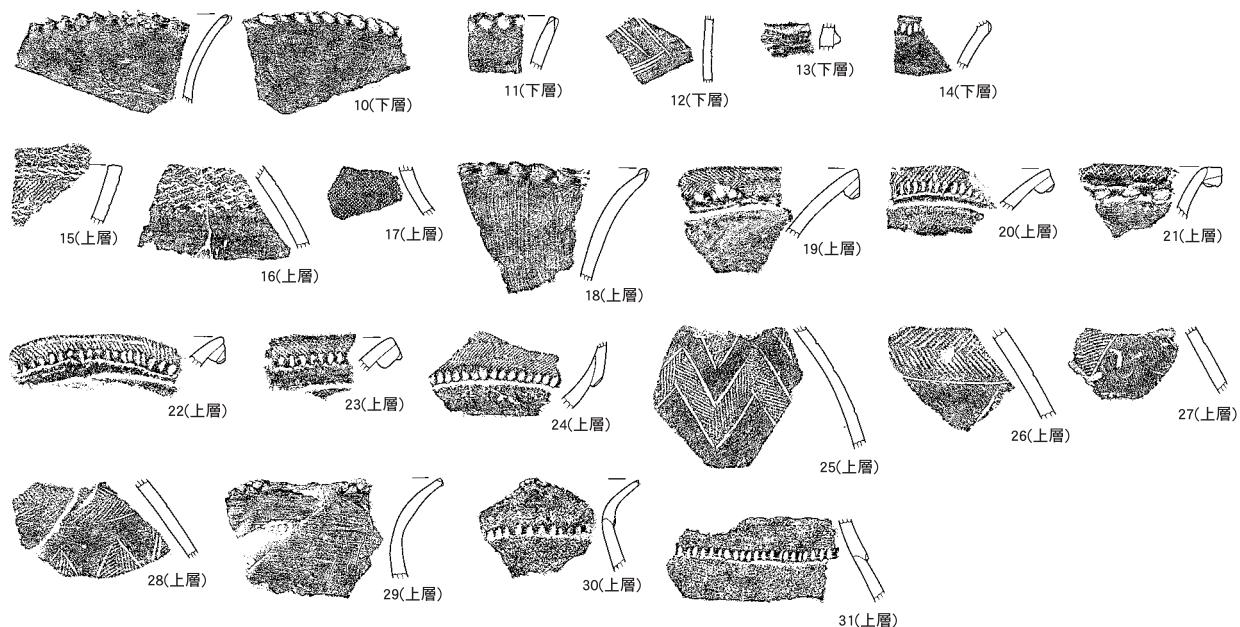
e7区



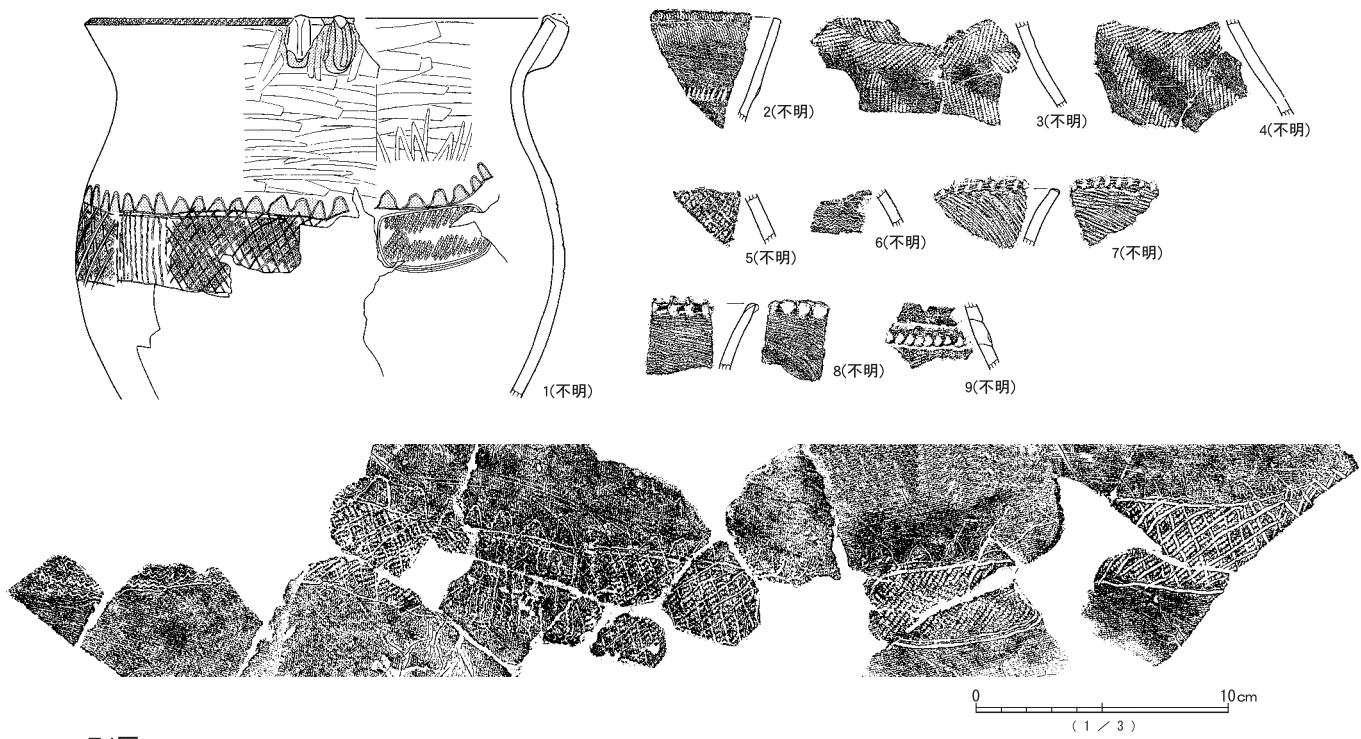
0 15cm
(1/4)

第160図 A地点環濠(24) 遺物

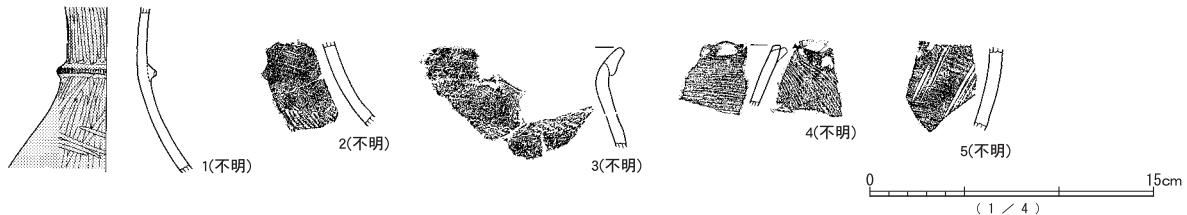
e7区



D4区

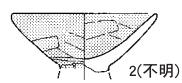
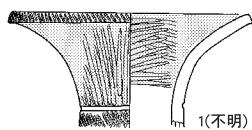


E4区

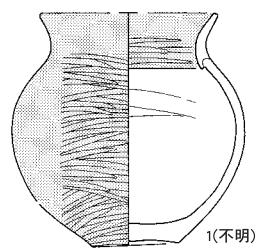


第161図 A地点環濠(25) 遺物、B地点環濠(3) 遺物

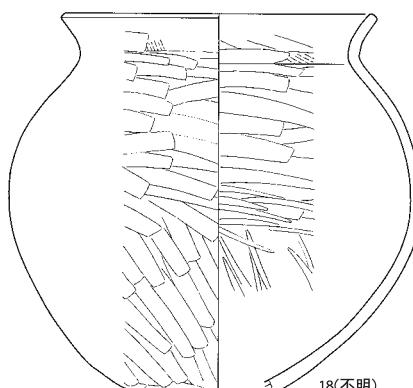
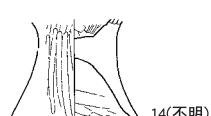
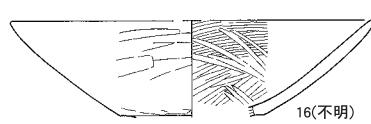
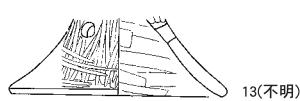
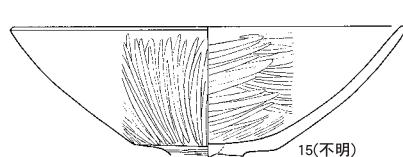
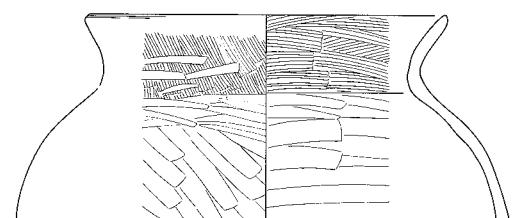
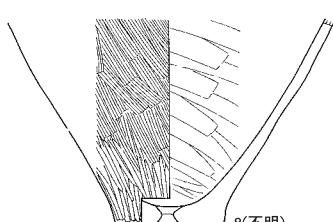
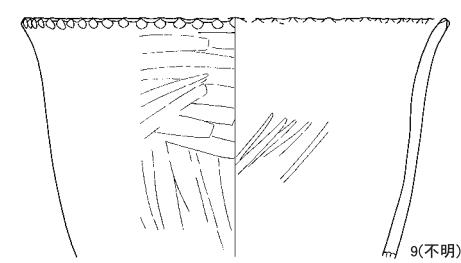
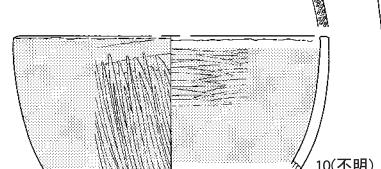
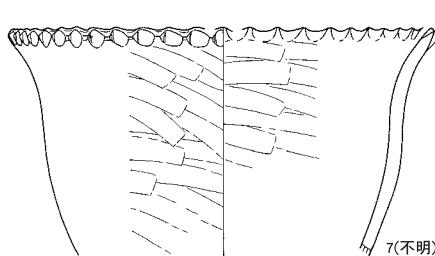
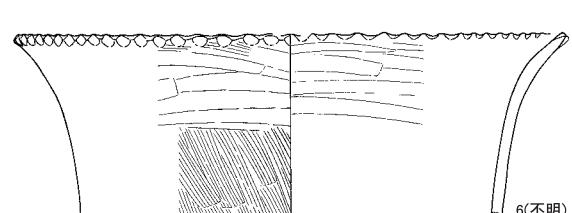
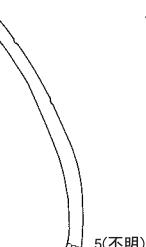
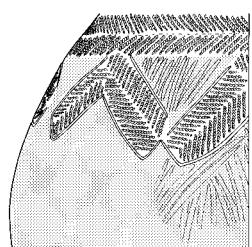
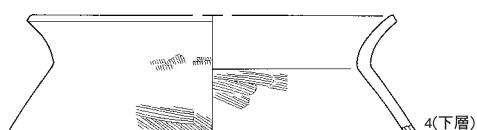
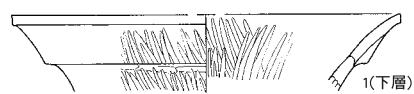
E5区



F5区



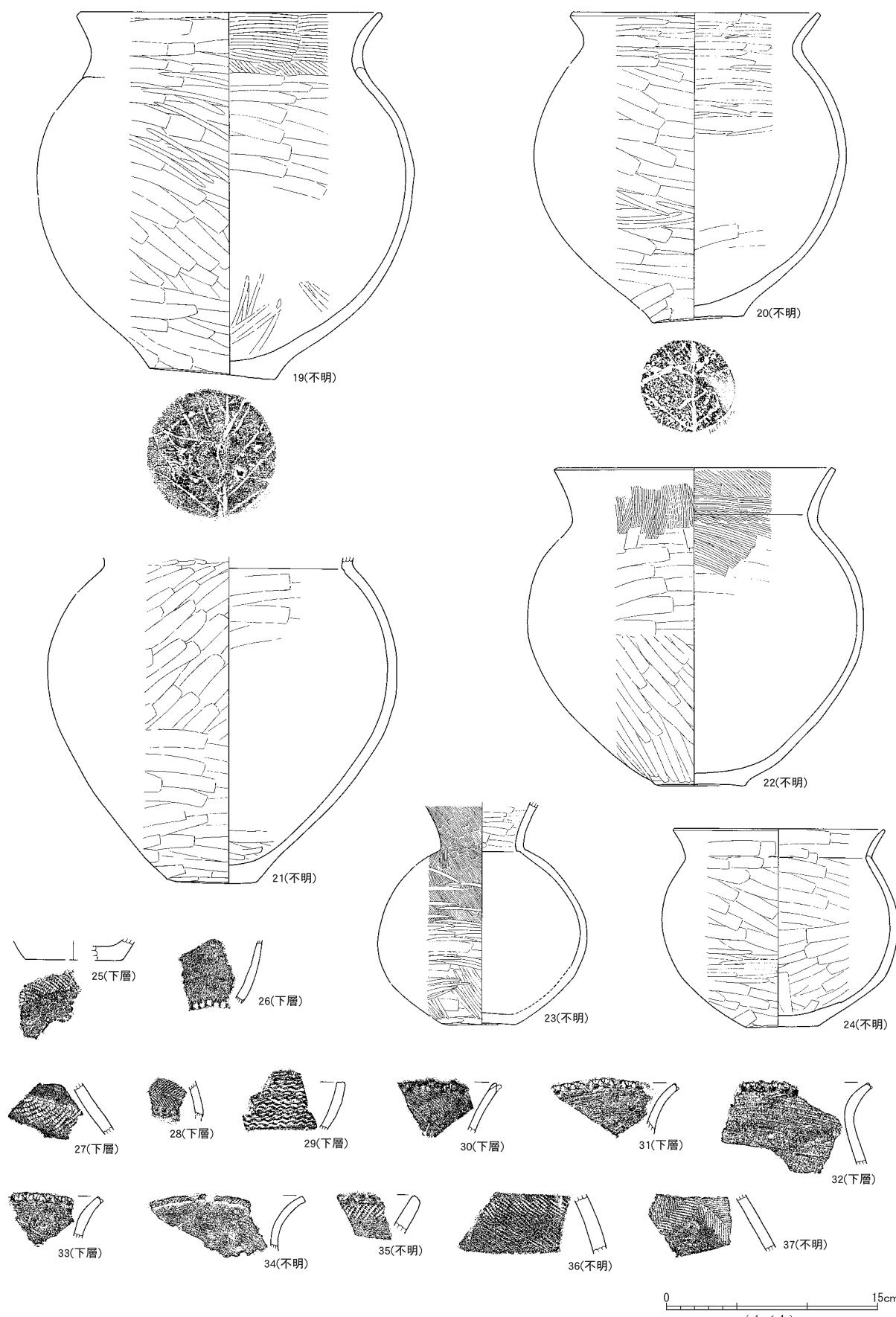
G5区



0 15cm
(1/4)

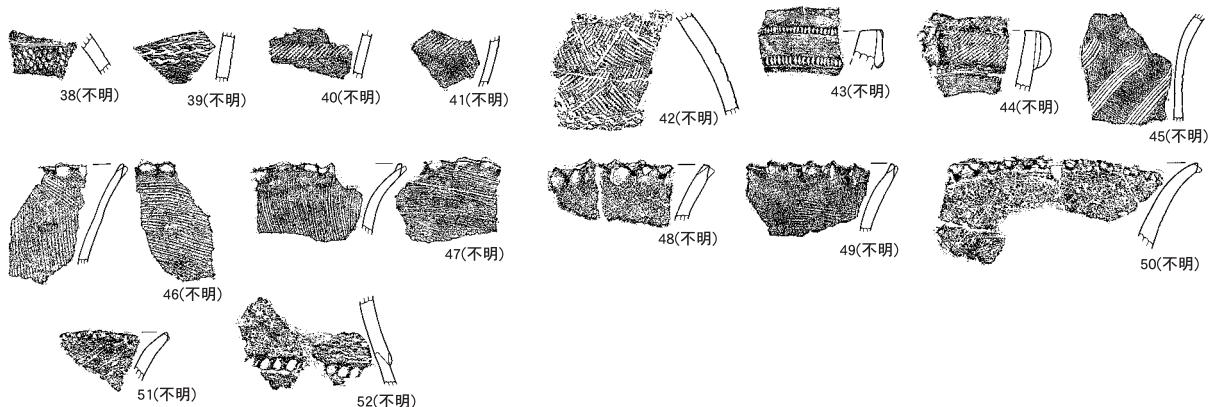
第162図 B地点環濠(4) 遺物

G5区

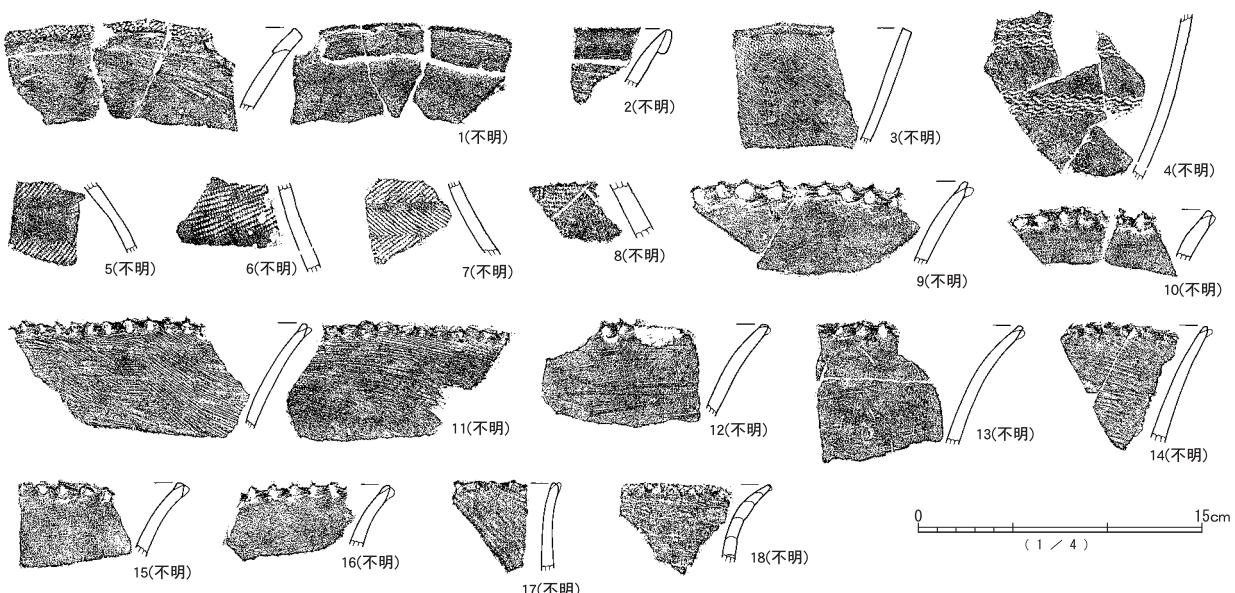


第163図 B地点環濠(5) 遺物

G5区



H6区

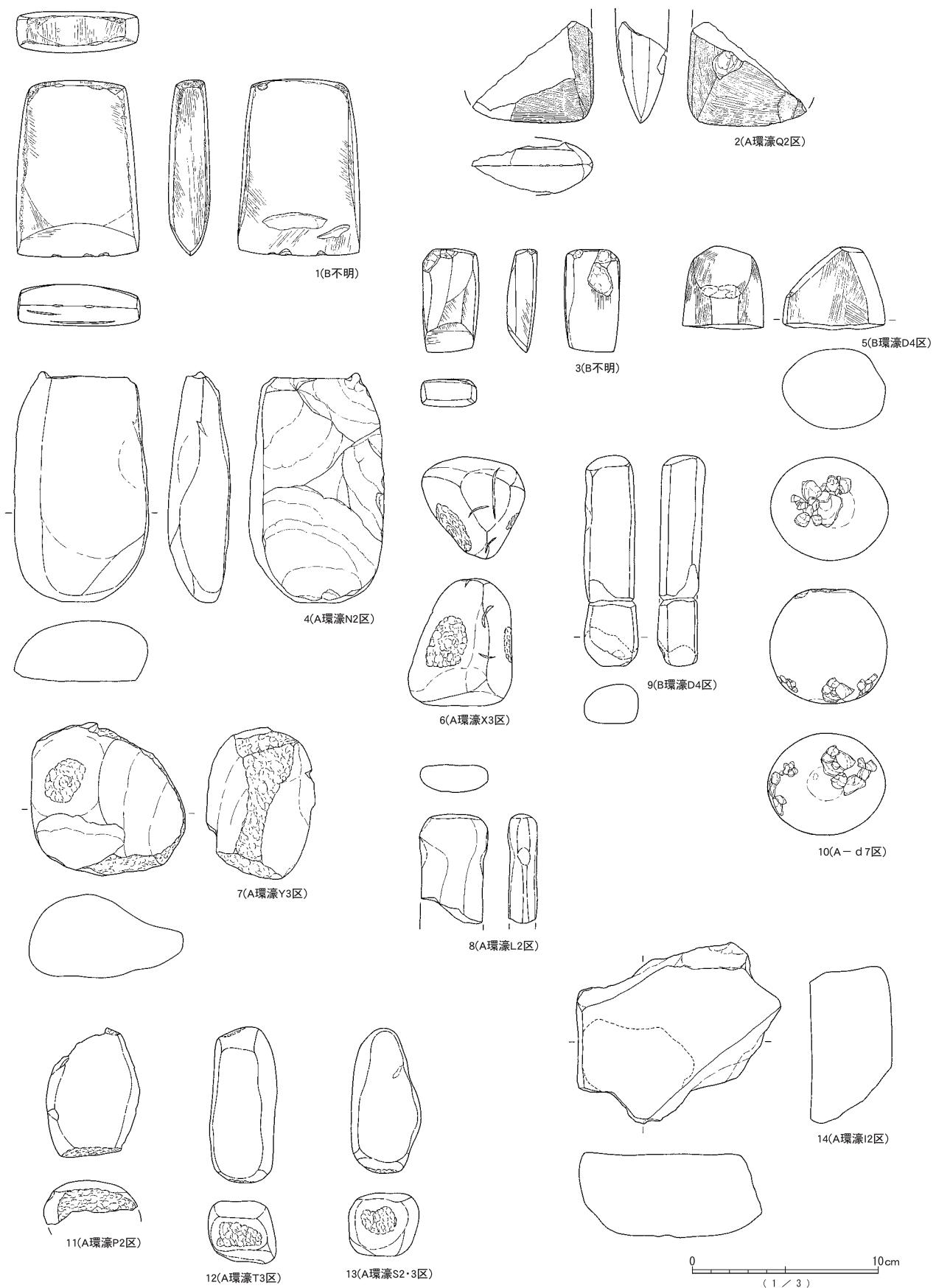


第164図 B地点環濠(6) 遺物

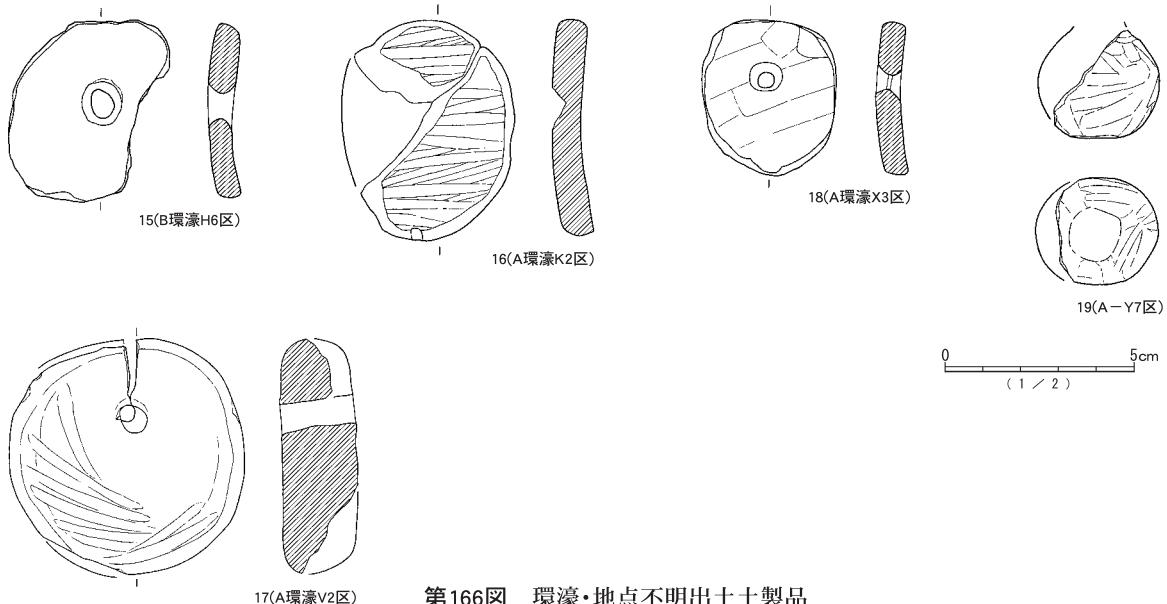
この中で、基準となる層は、粘土粒、粘土ブロックを多量に含む6・5層であり、両層内には道路状の硬化が確認されている。堆積状況からは、8・7層の自然堆積の期間を経て、6・5層が形成される段階で環濠としての機能を停止し、意図的あるいは自然に埋没する。道路状硬化面(層)は、6・5層以外にも複数面確認されており(第135図網部)、埋没の過程で、「道」として使用があったと推察される。

濠にともなう土壘については、遺構としては全く痕跡を残していない。環濠は粘土層を掘り抜いて開削されているが、覆土中位にあたる6・5層は白色あるいは暗褐色粘土を多量に含み、掘り上げた土が濠の周囲に置かれていた可能性は当然考えなければならない。ただ、この堆積状況が、土壘の存在を証明するものかどうかの判断は難しい。なお、現状地形による限り、濠外での土壘の構築は考えにくい。

根田代遺跡環濠では、覆土から投棄によると推定される多量の遺物が出土しており、A地点では、基本グリッドを単位として、層序別に取り上げている。各グリッド別・層序別の遺物量については、



第165図 環濠・地点不明出土石器



第166図 環濠・地点不明出土土製品

第14表に集計した。ここで出土した土器総重量は246.8kgを測る。出土状況には、地区、層位による傾向を認めることができ、Q2・3区、土層断面I付近から東西で若干様相を異にする。西側調査区では、6層を中心に、7~5層形成時に、土器の多量投棄が認められ、この段階は、ほぼ宮ノ台式に限定される。5層ないし4層は、土器出土量の減少傾向が認められるが、3・2層で久ヶ原式が多量に出土する。これに対して、Q2・3区より東側調査区では、6層以下下層部分での出土量が減り、宮ノ台式も西側調査区に比較して少ない。これは、宮ノ台式期の竪穴住居跡の分布に関係する可能性がある(第210図)。東側調査区では、上層部における久ヶ原式の出土量が増加し、S2・3、T3区では、5層が久ヶ原1式、4層が久ヶ原2式を主体とし、層序による時期的な傾向が認められる。Q2・3区を境界とする東西では、土器出土状況も異なるが、とくに5層の時期に齟齬を生じている。なお、「上層」は、第14表の集計では2・3層に含めているが、層序との明確な対応は不明である。

全体としては、8~6・(5)層に宮ノ台式が認められるが、8層でもI2区で回転結節文が認められるように、宮ノ台式の時期的な伸長は明確ではない。おそらく、宮ノ台式終末段階のうちの比較的短期間で埋没が進行したものと推定される。6・5層については、意図的な埋め戻しを含む可能性も考えられる。A地点環濠上層部の出土土器は、一部をのぞき、久ヶ原式に限定され、おそらくこの段階には、おおむね埋没を完了していたと思われる。ただ、B地点については、出土層位が不明ではあるが、古墳時代前期、根田代7・8期の土器の出土が認められる。周辺の土地利用の状況にもよるが、少なくとも古墳時代前期までは、ある程度痕跡を残していた可能性が高い。なお、A地点b5区1(第159図)は、根田代6期に溯る可能性がある。焼成前の底部穿孔が認められ、周辺部での埋葬遺構の存在が予測される。

80号竪穴の部分でも記したが、80号竪穴第123・124図掲載土器には、B地点環濠H6区の出土土器を含む可能性が高い。80号竪穴の調査時の遺構No.も「H6」であり、他に記載情報もないことから、現状において両者を区分することができない。第164図環濠出土土器H6区は、袋単位でまとまり、ビニール袋に環濠の記載があったが、すでに復元作業が行われていたものについては、注記以外の情

報がなく、これらはすべて第123・124図に掲載した。

第165・166図の石器・土製品については、出土遺構が不明のものもあわせて掲載している。

本遺跡の出土石器について付記するならば、磨製石斧は(図版35・77)、両刃が2点で、うち1点が細形である。抉入片刃石斧が1点、扁平片刃石斧が5点で、うち4点は小形である。扁平片刃石斧のうち、4号竪穴例、B地点不明の2例は輝緑岩製で、とくに4号竪穴43(第39図)、B地点不明3(第165図)は、研磨による面取りが丁寧である。いずれも流通石斧の可能性が高い。確実に未製品と考えられるものは皆無であり、可能性として第165図4の董青石ホルンフェルスの礫を掲載したが、整形にともなう敲打痕などは一切認められない。磨製石斧以外では、剥片石器等は皆無であり、磨石等の礫石器と砥石の組み合わせとなる。ただし、砥石の対象、用途は明確ではない。また、鉄器は出土していない。

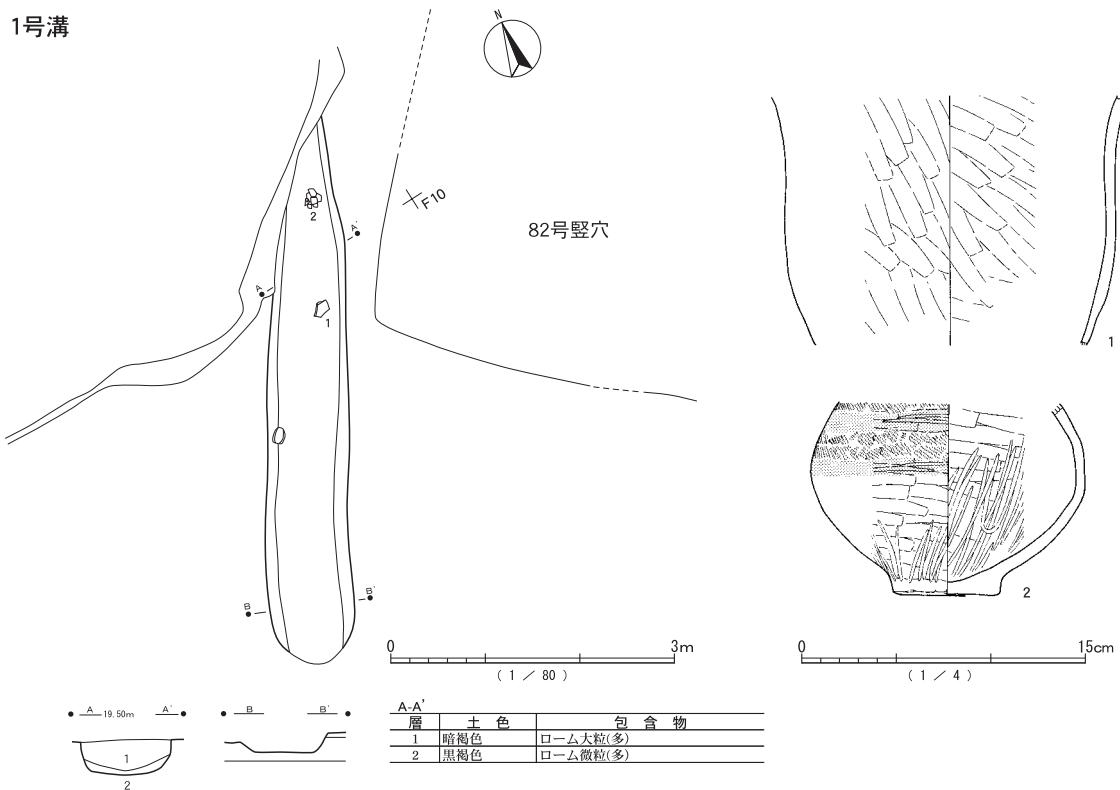
1号溝 (第167図、図版23・72)

1号溝は、B地点のG9・G10区に所在する。走行方位はN - 22° - Eである。両端は遺存していないが、現存長で約5.8mを測る。深さは35cm程度で、U字形ないし逆台形の断面形状を呈する。遺物の出土状況等から方形周溝墓の可能性が想定されるが明確ではない。84号竪穴と重複する溝がこれに対応するようにもみえるが(第13図)、位置的にはやや離れる。

遺物は、現場図面では3点の出土が認められるが、整理段階では2個体の土器が確認できた。

1は、ヘラナデ整形による甕形土器である。2は、胴部下半がほぼ完存の壺形土器であり、無節斜縄文2段無区画、2帯以上の横帯縄文をもつ。

本遺構の所属時期は、根田代1期と推定される。



第167図 1号溝 遺構遺物

(3) 古 墳

根田古墳群は、帆立貝形前方後円墳1基、円墳1基、方墳8基の計10基の古墳からなり、時期的には前期3基、後期2基、終末期5基が知られている(田中1981・2000)。このうち、終末期と想定される9号墳、および1号墳西側に想定されている10号墳については、調査段階では確実にはとらえられていなかつたようである。ここではこのうち、1979年度に調査された調査年次の異なる2基をのぞく、2号墳から9号墳の計8基の古墳について扱うこととする。なお、各古墳の番号については、遺跡分布地図および、当地区の古墳群を最も総括的に把握している田中新史氏に従うこととし、既刊概報等の旧番号(国分寺台全域での通し番号)を別に付しておく(田中2000)。また、前期方墳については、「方形周溝墓」としての理解も可能であると考えるが、ここでは上記のとおりとする。

本報告分の地点別内訳は、A地点7基、B地点1基の計8基であり、A地点の7基については、発掘調査時点で既に墳丘が失われており、周溝と主体部のみの調査となった。

2号墳(281号墳) (第168・169図、図版26・27・72・73)

A地点のほぼ中央に位置し、N4・N5・N6・O3・O4・O5・O6・P4・P5・P6・P7・Q4・Q5・Q6・Q7・R4・R5・R6区に所在する。42・44・52～59号竪穴と重複する。

方墳であり、東西軸で、周溝外径17.20m、方台部(周溝内側下端間)13.95m、周溝内径13.15m、南北軸で、方台部約13.50m、周溝内径12.80mを測る。南北軸の方位は、N - 14° - Wである。墳丘(盛土)は既に削平され、主体部も検出されていない。周溝内については、北溝北西隅部側で底面に若干の落ち込みが、東溝中央部で外側への張り出しが認められるが、埋葬施設としての確証は得られていない。周溝は、幅が最大2.3mほど、深さは最大1.2mほどであった。南側の周溝は斜面地形のため検出されていないが、開口部をもたない全周形と推定される。

周溝内からの出土土器は、1～2・18～20が甕形土器、3～7・12・14が壺形土器、うち5～7は所謂壺形土器である。8・9が鉢形土器、10・13は広口壺形土器、11は結合器台形土器、16は高杯形土器である。このうち6は、今回の整理作業で現物が確認できなかつたため、概報での実測図を再掲載した。1は、北西隅部付近で底面から約20cm程度上より、2は、北溝のほぼ中央底面から散在した状態で出土している。11も、2とほぼ同位置から出土している。5・6は、北東隅部で底面より約25cm程度上より、また、北溝東側覆土より9が出土している。

甕形土器1の口縁端部が面取りされている点、2の頸部器壁が厚く、外面の頸部屈曲がゆるやかである点は、8・9の口縁部の短い鉢形土器、14の小形壺形土器とあわせ、当該地域の五領式最初期の特徴としてとらえられる。

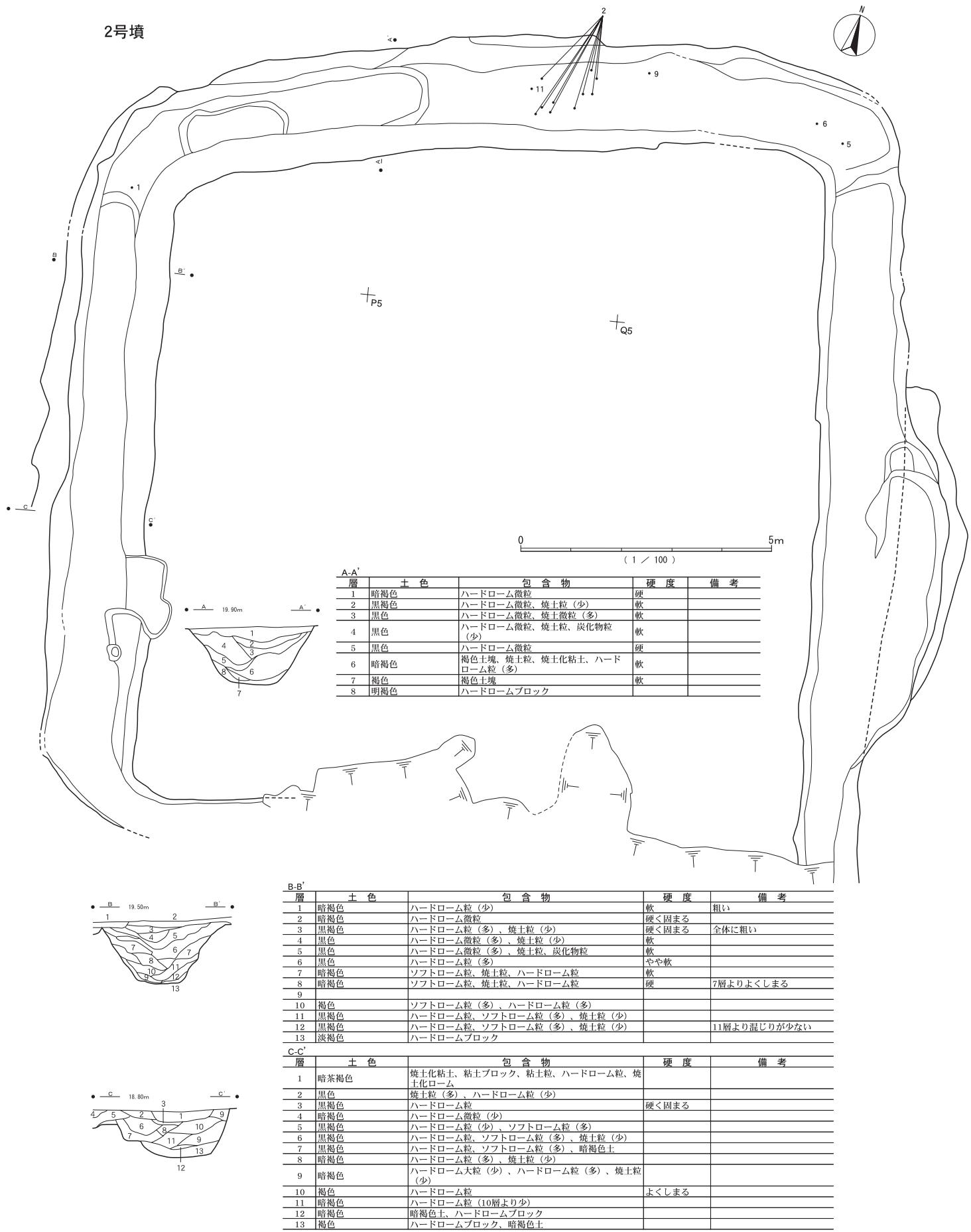
本古墳は、出土土器の特徴から、古墳時代前期初頭、根田代7期に比定することができる。

3号墳(282号墳) (第170・171図、図版27・38・74)

A地点のほぼ中央、2号墳の北側に隣接する。N8・N9・N10・O7・O8・O9・O10・P7・P8・P9・P10・P11・Q8・Q9・Q10区に所在する。34～36・45～51号竪穴と重複し、これらより新しい。北側隅部は土採りによって消滅しており、北側の周溝の一部も後世の道路遺構(1号道路)と重複するため保存状態はよくない。また、南西辺で6号墳と接している。

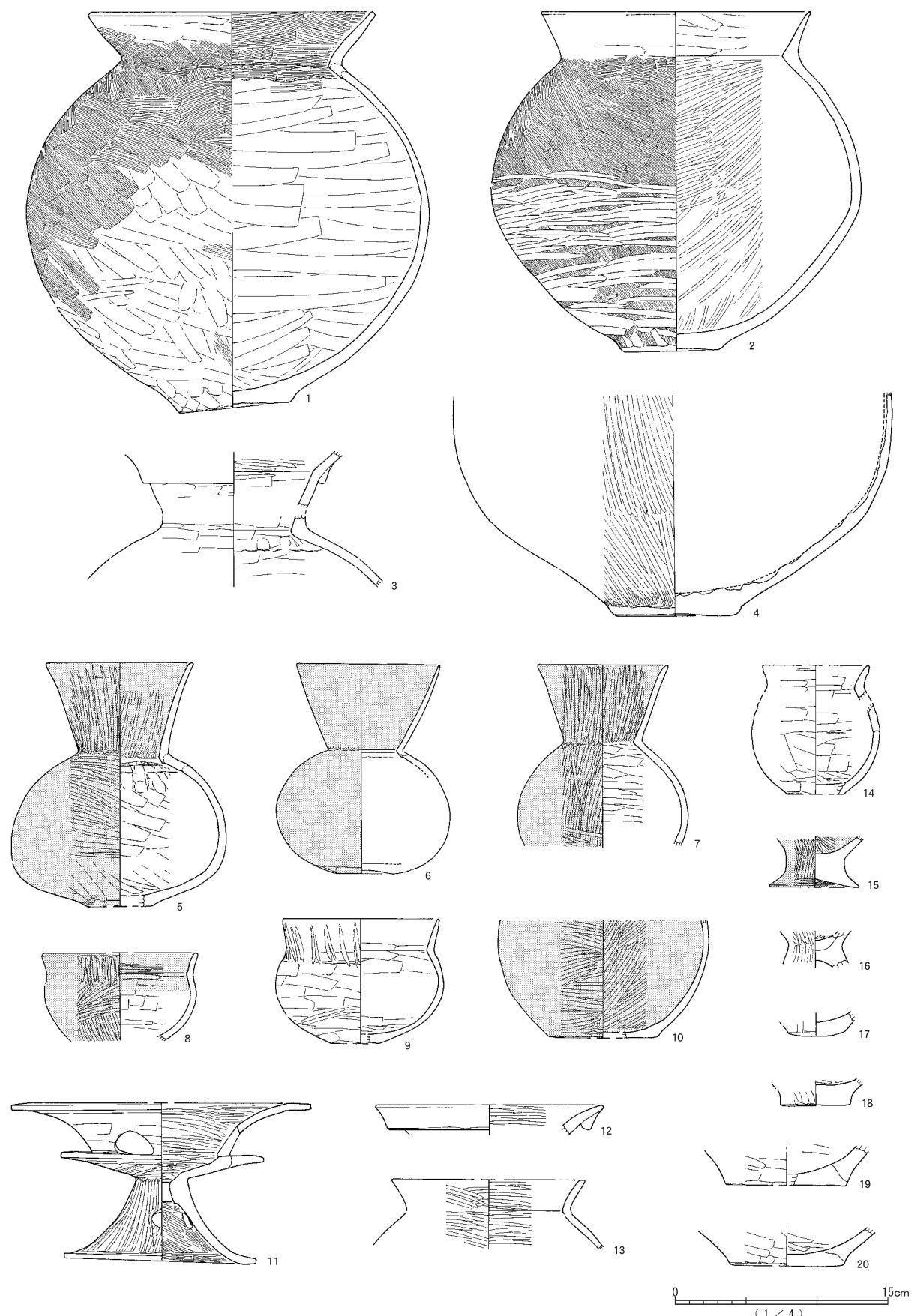
方墳であり、東西(南西 - 北東)軸で、周溝外径16.56m、方台部(周溝内側下端間)13.70m、周溝内径13.10m、南北軸で、周溝外径17.00m、方台部12.58m、周溝内径12.08mを測る。東西軸の方位は、

遺構と遺物 古墳



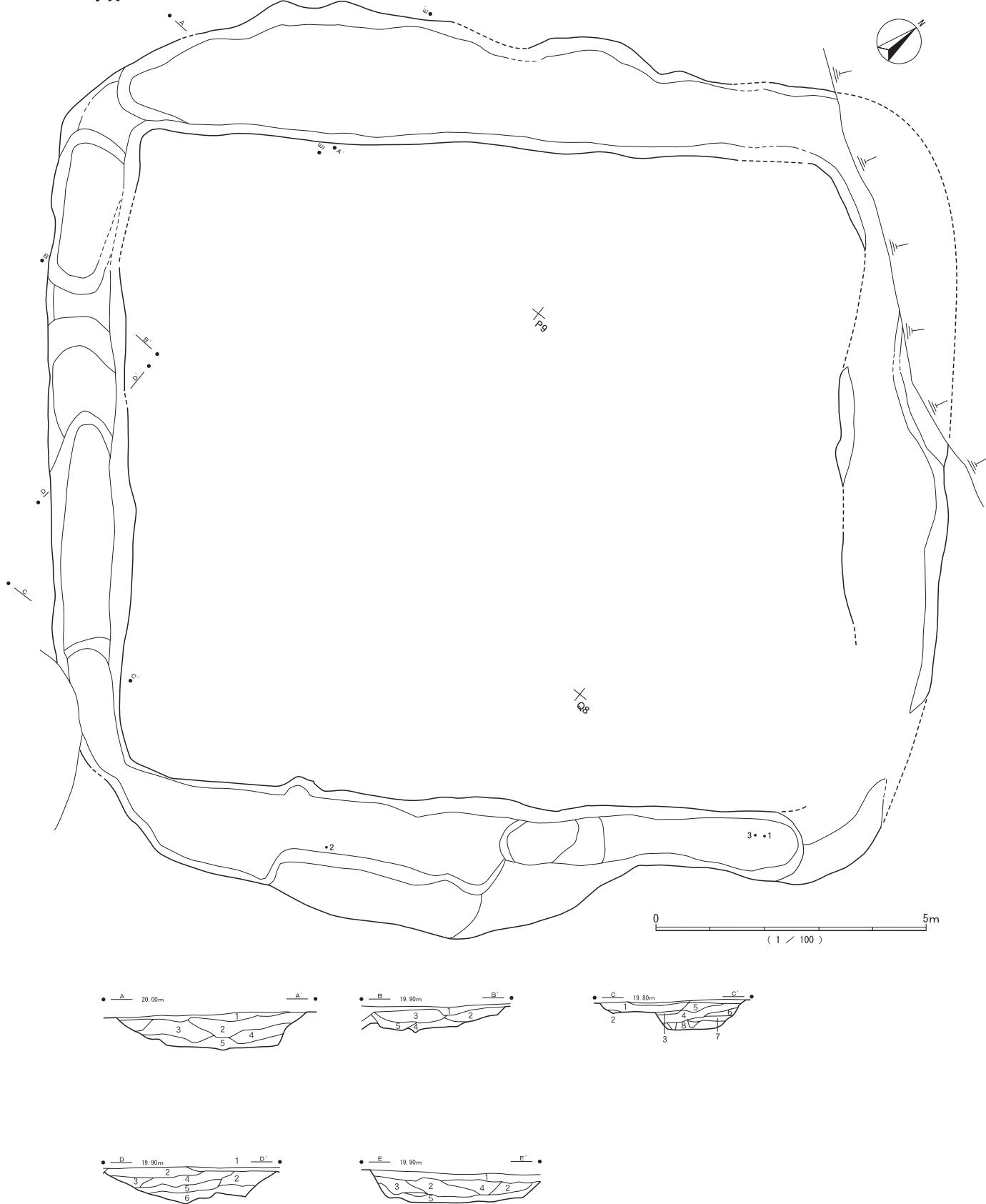
第168図 2号墳(1) 遺構

2号墳



第169図 2号墳(2) 遺物

3号墳



第170図 3号墳(1) 遺構

3号墳

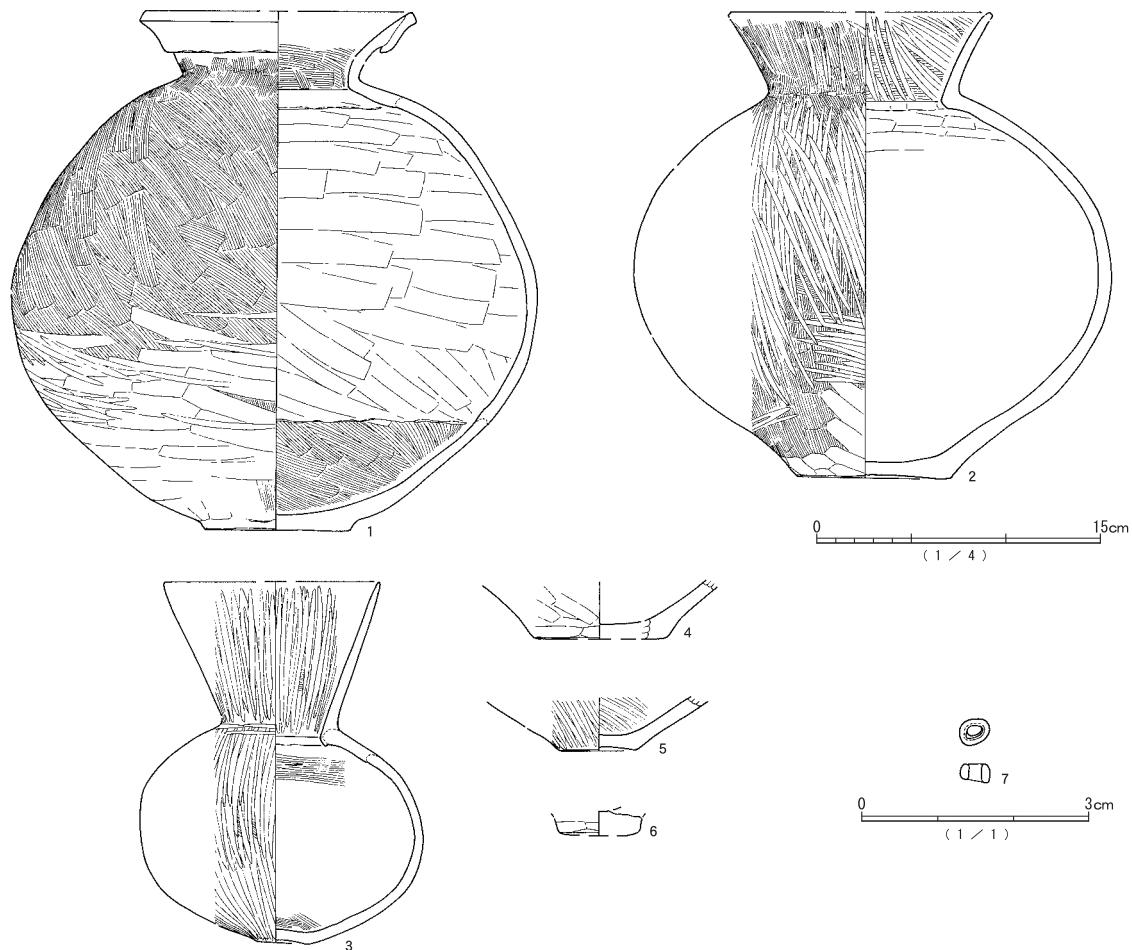
土色	包含物	硬度	備考
	ハードローム粒（多）、焼土化粘土、ハードロームブロック（少）	軟	
	ソフトローム粒（少）、ハードロームブロック（少）、焼土化粘土（少）	軟	
	ハードローム粒	軟	
	ハードロームブロック（少）、焼土化粘土	硬	
	ハードロームブロック	硬	

土色	包含物	硬度	備考
	ハードローム粒、ソフトローム粒（多）、ハードロームブロック（少）	硬	
	ハードローム粒（少）、ソフトローム粒（少）、焼土化粘土（少）		
	ハードロームブロック（多）		
	ハードロームブロック（多）	4層に比べて軟	

土色	包含物	硬度	備考
	ハードローム粒（少）、焼土化粘土（少）、焼土粒（少）	硬	道路状遺構
	ハードローム粒（少）、ハードローム微粒（多）	軟	道路状遺構
	ハードローム粒、ソフトローム粒（多）、ハードロームブロック（少）		床面状に硬化
	ハードローム粒（少）、ソフトローム粒（少）、焼土化粘土（少）		
	ハードローム粒	軟	
	ハードローム微粒、ハードロームブロック、ハードローム大粒	軟	
	ハードロームブロック		

土色	包含物	硬度	備考
	ハードローム粒（多）	硬く固まる	
	ハードローム粒、焼土粒、黒色土粒		
	ハードローム粒（多）		
	ハードローム大粒、焼土粒（少）、ハードローム粒（多）		
	ハードロームブロック		

土色	包含物	硬度	備考
	ハードローム粒（多）	硬く固まる	
	ハードローム粒、焼土粒、黒色土粒		
	ハードローム粒（多）		
	ハードロームブロック		



第171図 3号墳(2) 遺構遺物

N - 44° - E である。墳丘(盛土)は既に削平され、主体部も検出されていない。周溝内埋葬の可能性も推定されるが、判断できない。周溝は、幅が最大2.4mほど、深さは最大0.65mであった。開口部をもたない全周形である。

出土土器は、1~3が壺形土器、うち3は所謂咲形土器、5が椀形土器である。1~3は、いずれも南東辺周溝底面近くから出土している。1・2の壺形土器は、口縁部高が収縮しており、段階として2号墳よりやや新しいと考えられる。立地上、2号墳に対して台地中央部側に位置している点が不自然にも思われるが、ここでは古墳時代前期前半、根田代8期に比定しておきたい。

他に、周溝内よりガラス玉1点が出土している。これは、列点状に並ぶ気泡から管切り法によるものであるが、緑色系で、全体形状が丸みをもち、再加熱表面張力による2次加工が想定される。古墳時代終末期の埋葬遺構からの混入の可能性が高い。

4号墳(283号墳) (第172図、図版27・73)

A地点の中央やや東寄り、3号墳の東側に隣接する。S7・T6・T7・T8・U6・U7・U8・V7・V8区に所在する。63~65号竪穴と重複し、これらより新しいが、終末期方墳の7号墳、さらに、中央付近は後世の道路遺構(1号道路)が東西方向に走行し、西辺周溝の一部は、1号道路により失われている。

方墳であり、東西(北西 - 南東)軸で、周溝外径10.38m、方台部(周溝内側下端間)8.70m、周溝内径8.37m、南北軸で、周溝外径10.55m、方台部8.93m、周溝内径8.45mを測る。東西軸の方位は、N - 27° - E であり、軸の向きは3号墳とおおむね同じである。墳丘(盛土)は既に削平され、主体部も検出されていない。周溝は、幅が最大1.35mほど、深さは最大0.7mほどであった。開口部をもたない全周形と推定される。

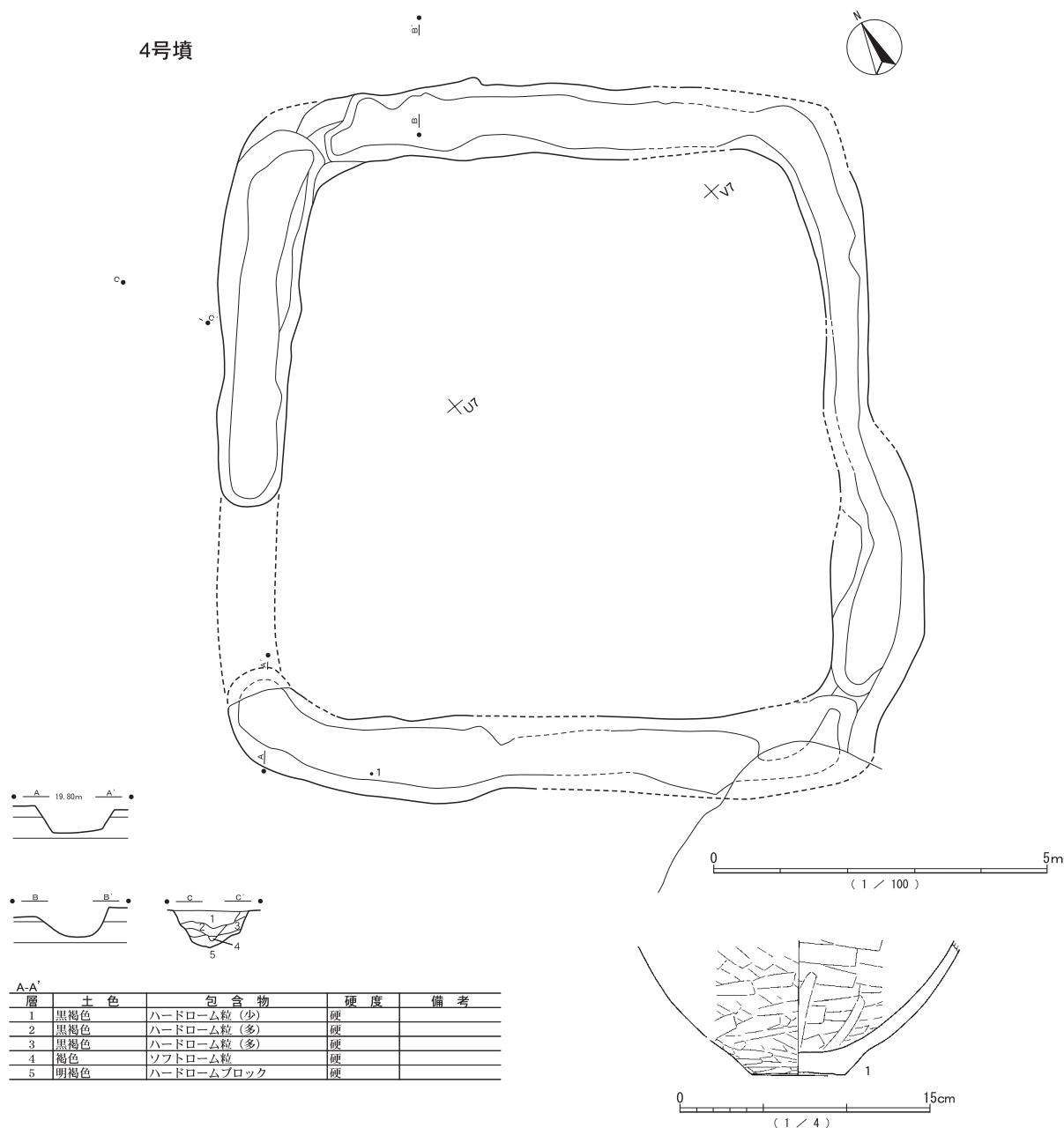
本遺構にともなう可能性のある遺物は、1の甕形土器のみである。南西辺周溝覆土から出土している。この土器から細別時期を判断することは難しいが、主軸をそろえる3号墳との配置状況から、本古墳の所属時期は、古墳時代前期前半、根田代8期に比定しておく。

5号墳(284号墳) (第173~182図、図版28~30・74・79・81)

B地点のほぼ中央に位置し、D5・E5・D6・E6・F6・G6・D7・E7・F7・G7・H7・D8・E8・F8・G8区に所在する。墳丘下より環濠および79・80号竪穴が検出され、さらに81・87号竪穴と重複する。環濠南西側は崖線となり、周溝約1/4は残存していない。

根田古墳群は、調査前段では、墳丘が明確であった1号墳(130号墳)のみ確認されていたが、本墳も、現地表面で比高約1mの墳丘を遺存していた。円墳と推定され、規模は、測定可能な部分で、周溝外径約22.6m、墳丘部(周溝内側下端間)17.8m、周溝確認面内径17.05mを測る。周溝は南西部が開口し、周溝南側端部は外方へ若干屈曲し終わる。周溝のもう一端は、横穴式石室墓道に連続するものと推定される。周溝幅は最大約3.0m、深さは最大約0.65mほどであった。墳丘盛土は、旧地表面から現地表面間で1.35m、墳丘高は、周溝底から約2.3mを測る。

埋葬施設は横穴式石室であり、ローム層を若干掘り抜き設置されていた。石室平面がL字形を呈する片袖形式であり、石室の全長は2.70m、玄室規模は、東壁底面を基準として1.93m、南壁幅1.25m、羨道部は長さ1.45m、幅は最大で0.75mを測る。方位は、玄室を基準とするとN - 58° - E、羨道部でN - 62° - Eである。石室は、内房産と推定される礫石を用材とした切石であり、2段高さ最大1.08cmの壁組みが残存していた。確認面での玄室部墓坑幅は3.15mであり、底面および石室裏

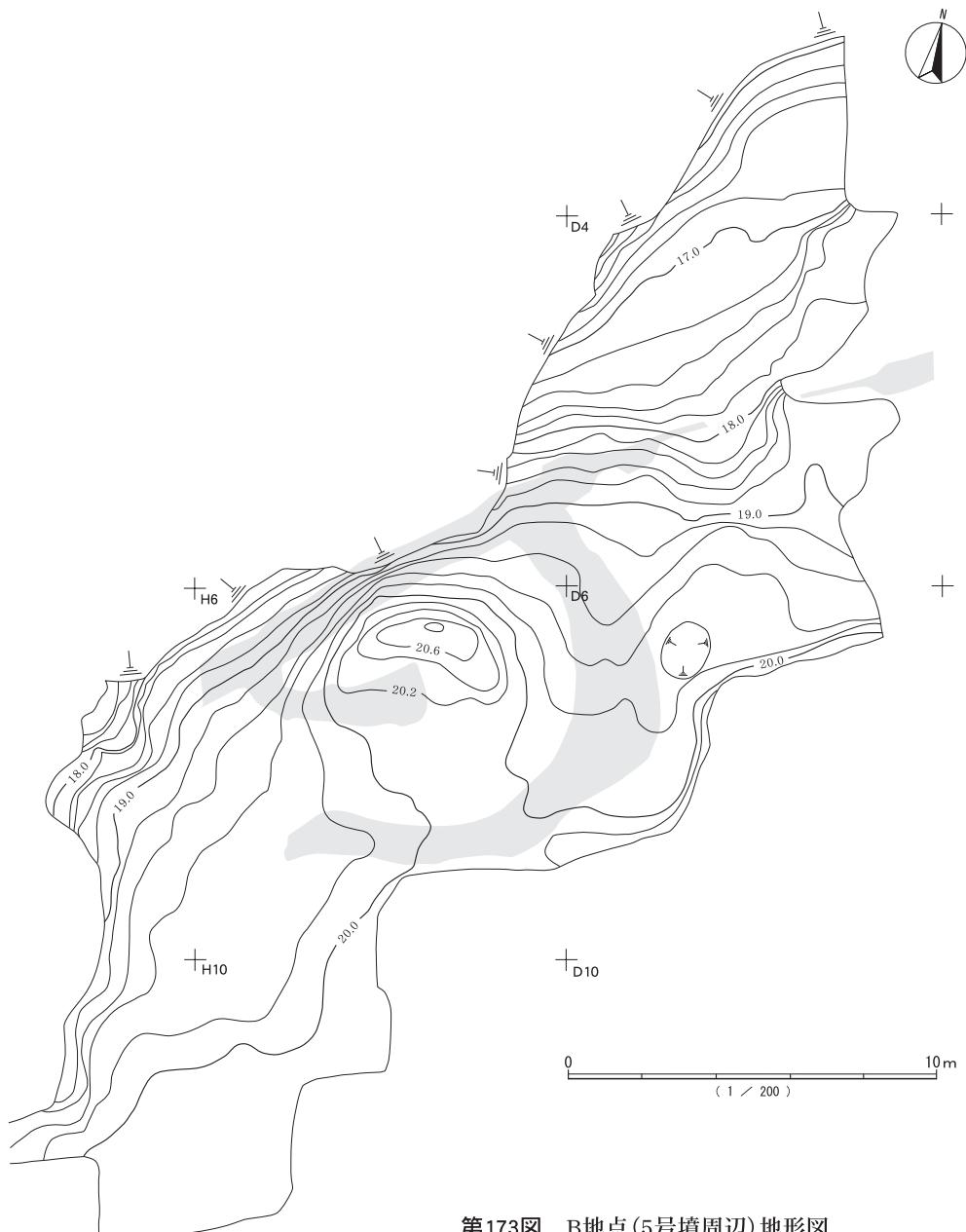


第172図 4号墳 遺構遺物

込には、白色粘土が主に充填されていた。

玄室内南側壁際を中心に、複数体の人骨が検出された。鑑定の結果、少なくとも5体の埋葬が推定される(第3章第3節)。副葬品は、追葬、盗掘により散逸した状態で出土している。

副葬品は、金銅製耳環2点、大刀6点、2振以上(24~29)、刀子7点(30~36)、鉄鎌10点(37~46)である。玉類は全く出土していない。耳環は、今回の整理作業において現品を確認することができなかった。24~25の大刀は、平造り両闘で、棟側は直角闘、刃側は斜闘となる。茎尻は隅丸方形となるが、鎧取り、保存処理のため詳細が明らかではない。24の茎尻部分に鉄製の責金具があり、目釘が付着している。ただし、これは本来位置ではない。目釘穴は、今回X線写真が探し出せなかたため、確認できなかった。30~32・36は、刀子としてはやや大振りである。いずれも両闘であり、茎尻は、34が隅丸方形となるが、35はやや尖る。鉄鎌は、棘籠被形式であり、鎌身部は、37が長三角形式、38・39が柳



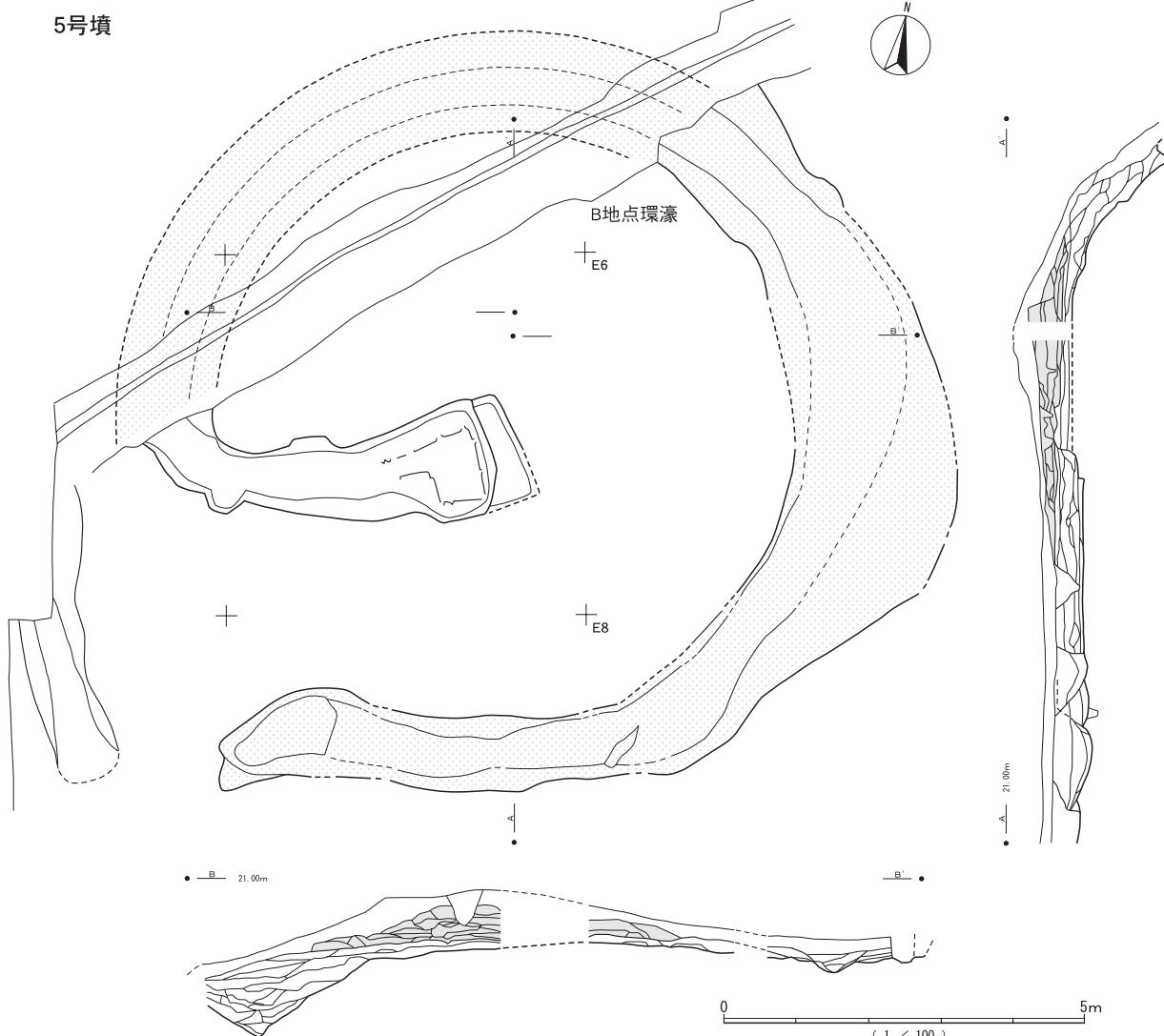
第173図 B地点(5号墳周辺)地形図

葉式、40が片刃箭形式に分類できる。

土器は、時期的に混在と考えられるものをのぞくと、3時期に区分することができる。A期は、1~3の土師器杯形土器にみられる段階であり、2・3は漆仕上げと推定される黒色処理が施される。B期は、4~5、7~9など、突出する底部をもつ須恵器の一群であり、広口長頸壺6・7は同一個体と推定される。C期は12・13などであり、奈良時代に降る。これらは、古墳の使用時期を知る手掛かりとなるが、造営時期については資料的にやや乏しい。

これらの出土状況については、遺物平面図と遺物の照合がとれなかったため、不明確なものが多い。判明しているものは、16の土師器甕形土器頸部が玄室内床面から、5が玄室内、4・6・7が玄室から羨道、1・10が羨道から出土している。

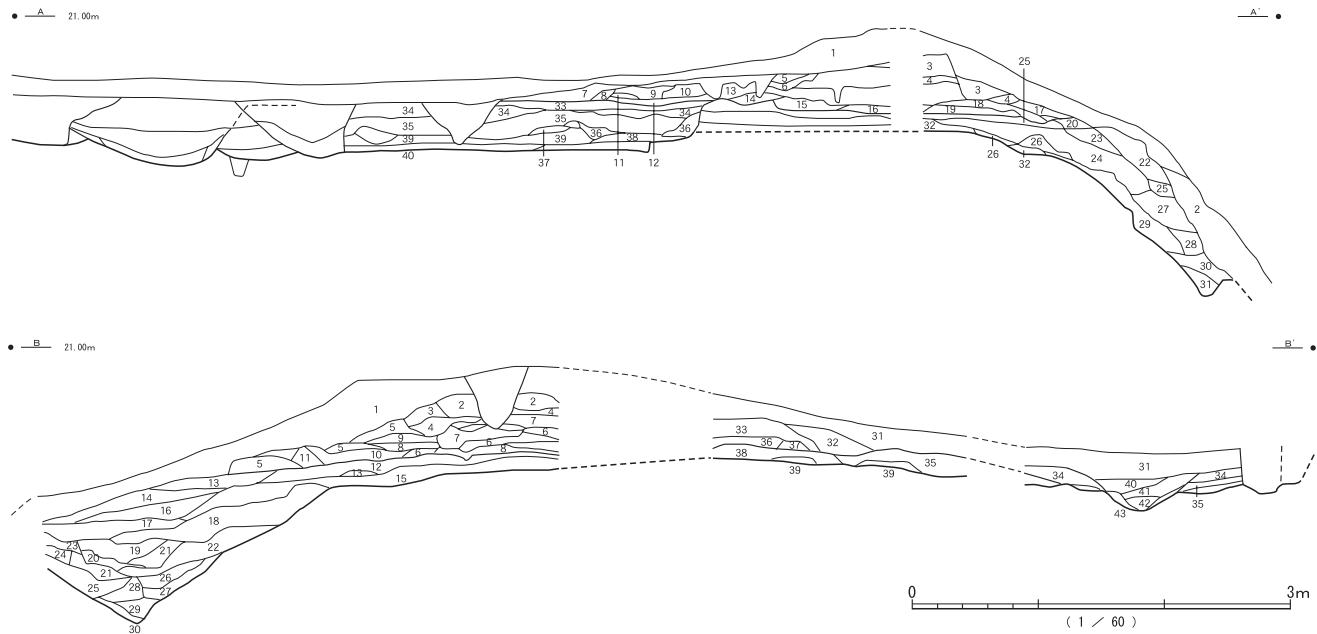
なお耳環のうち1点は、玄室入口部床面付近からの出土である。また、円筒埴輪については、1号



層	土色	包合物	硬度	備考
1	表土			
2	黒褐色	ハードローム微粒、焼土微粒	軟	全面に竹、木の根による搅乱
3	黒褐色	ハードローム大粒（多）	軟	
4	褐色	ハードローム粒、焼土化ロームの集合体	硬	
5	褐色	ハードローム粒	硬く固まる	
6	暗褐色	ハードローム大粒（多）		
7	暗褐色	黒褐色土中に、ハードローム大粒（少）、ハードローム粒（多）、焼土粒、粘土粒（少）		
8	暗褐色	ハードロームブロック（少）、ハードローム粒（多）、粘土粒（少）		
9	暗褐色	ハードロームブロック（多）		
10	暗褐色	ハードロームブロック（少）、粘土粒（多）、焼土化ブロック		
11	褐色	ハードロームブロック		
12	淡暗褐色	ハードロームブロック（少）、ハードローム大粒（多）		
13	黒褐色	ハードロームブロック（少）、ソフトローム粒、ハードローム粒		
14	褐色	ハードロームブロック		
15	暗褐色	ハードローム大粒（多）	よくしまる	
16	黒褐色	ハードローム粒（多）、焼土粒（少）	硬	打ち固め土
17	黒褐色	ハードローム粒（多）	硬	打ち固め土
18	暗褐色	ハードローム微粒（多）	硬	打ち固め土
19	黒色（明るい）	ハードローム粒（多）	軟	
20	黒色	ハードローム微粒、焼土微粒（多）	硬	打ち固め土
21	黒褐色	ハードローム大粒（多）	軟	
22	黒色（明るい）	ハードローム微粒（多）、ハードローム大粒（少）	やや軟	2層に類する
23	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒の集合体	硬	
24	褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒（少）	硬	V字溝覆土
25	暗褐色	ハードローム微粒（多）、ハードロームブロック（少）	硬	V字溝覆土
26	暗褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	V字溝覆土
27	暗褐色	ハードローム粒、黒色土粒（多）	硬	V字溝覆土、打ち固め土
28	暗褐色	ハードローム粒、焼土粒（少）	硬	V字溝覆土
29	褐色	ハードロームブロック（多）	軟	V字溝覆土
30	褐色	ハードロームブロック（多）	軟	V字溝覆土
31	黒褐色	ハードローム微粒（多）、ハードローム大粒（少）	やや軟	
32	黒色	ハードローム粒（若干）	軟	
33	黒褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム微粒（多）	軟	32層に近い
34	黒褐色	ハードローム粒（多）	軟	
35	黒褐色	ハードローム粒（多）、焼土粒（少）	軟	
36	黒褐色	ハードローム微粒、ソフトローム粒（少）	硬	固まる
37	暗褐色	ハードローム粒（多）、焼土粒（多）	軟	
38	暗褐色	ハードローム大粒（多）、ソフトローム粒、ハードローム粒	硬	
39				貼床（80号堅穴）

第174図 5号墳(1) 遺構

5号墳

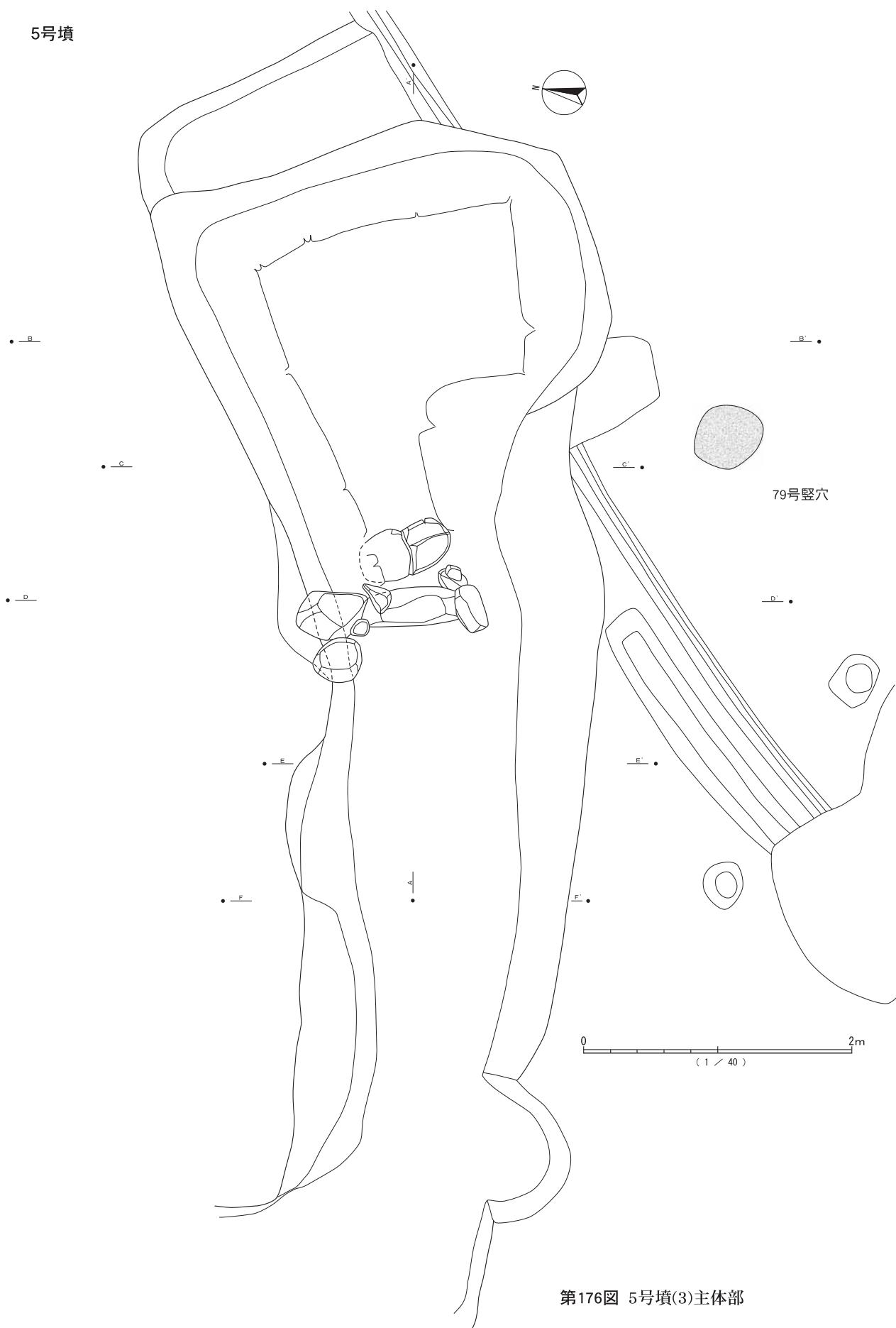


層	土色	包含物	硬 度	備 考
1	表土			
2	暗褐色	ハードローム粒（多）	軟	
3	暗褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム微粒（少）	軟	
4	明褐色	ハードロームブロック（多）	硬	打ち固め土
5	褐色	ハードロームブロック（多）、暗褐色土（多）	硬	
6	褐色	ハードロームブロック（少）	硬	
7	褐色	ハードロームブロック（少）、ソフトローム粒（多）	硬	
8	褐色	ソフトローム粒（多）	硬	
9	暗褐色		軟	上層に打ち固め土
10	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒、焼土粒（極少）	硬	
11	黒褐色（若干明るい）	ソフトローム粒（多）	硬	
12	黒色	ソフトローム粒	硬	
13	黒褐色	ハードローム粒（多）	硬	
14	黒褐色	ハードローム粒	軟	12・3層とは別層
15	黒褐色	ハードローム大粒（多）	硬	
16	黒褐色	ハードローム大粒（多）	硬、よくしまる	
17	黒褐色	ハードローム粒（多）、ソフトローム粒（少）	硬	
18	黒褐色	ハードローム大粒（多）、焼土粒（少）	硬	
19	褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	
20	暗褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	
21	褐色	ハードローム大粒（多）	極めて硬	
22	黒褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム微粒（多）、焼土粒	硬	
23	褐色	ハードロームブロック（少）	硬	
24	褐色		硬	
25	明褐色	ハードロームブロック（多）	硬	
26	暗褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム微粒（多）、焼土化粘土（少）	軟	
27	暗褐色	ハードローム大粒（多）、ハードローム微粒（多）	軟	
28	明褐色	ハードロームブロック（少）、ソフトローム粒（多）	軟	
29	明褐色	ハードロームブロック（少）、ソフトローム粒（しまる）	軟	
30	淡褐色	ハードロームブロック（少）、ソフトローム粒	硬	
31	表土			全面に竹、木の根による搅乱
32	暗褐色	ハードローム粒	硬	
33	暗褐色	ハードロームブロック（多）、ハードローム大粒（少）	軟	
34	暗褐色		軟	32層と同系であるが、表土の影響
35	暗褐色	ハードローム粒、焼土粒	硬	
36	黒色	ハードローム粒（多）	硬	上層に打ち固めた部分
37	黒色	ハードローム微粒（少）	軟	上層に打ち固めた部分
38	黒褐色	ハードローム大粒（少）、ハードローム粒（多）、焼土粒（極少）	硬	上層に打ち固めた部分
39	暗褐色	ソフトローム粒、黒褐色土	硬	
40	黒褐色	ハードローム粒（多）	軟	
41	黒褐色	ハードローム大粒（少）	軟	
42	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒（多）	軟	41層と同系であるがやや暗色
43	暗褐色（明るい）	ハードロームブロック（多）	軟	

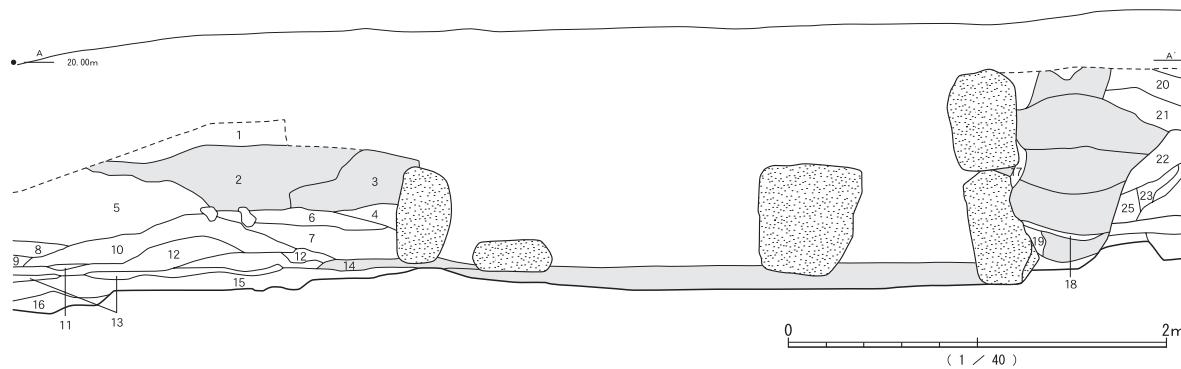
第175図 5号墳(2) 遺構

墳に帰属するものと思われる。1号墳に関連すると推定される円筒埴輪は、本報告の調査区全体も若干量出土しているが、今回の報告では割愛した。

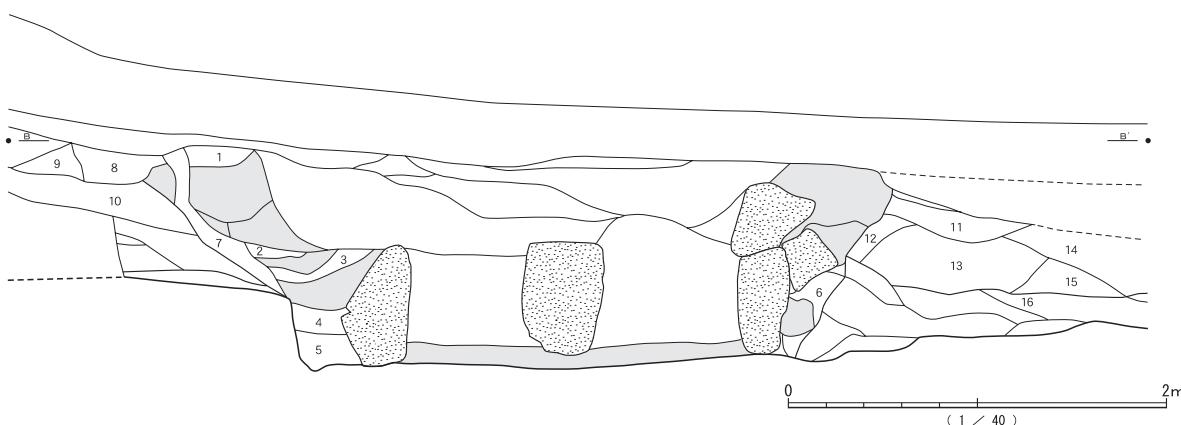
本古墳の所属時期は、根田代9期であり、根田1号墳と終末期方墳の間に位置付けられると推定される。



5号墳



層	土色	包 倉 物	硬 度	備 考
1		ハードロームブロック（多）、粘土粒（多）		
2		白色粘土粒（多）、暗褐色土の粘土（多）	硬	
3		白色粘土粒（多）、ハードロームブロック、暗褐色土の粘土（多）	硬	
4	黒褐色			
5	黒褐色	黒色土（多）		
6	黒褐色	ハードローム粒（若干）、白色粘土		
7	黒褐色	黒褐色粘土（多）		
8	黒褐色	白色粘土粒（多）		
9	黒褐色	白色粘土粒（多）		
10	黒褐色	ハードローム粒（少）		
11	黒褐色	白色粘土粒（多）		
12	黒褐色	粘土粒（少）、黒色土		
13		褐色土、白色粘土（少）、砂礫粒		
14		白色粘土帶		
15		褐色土、白色粘土（少）		
16	暗褐色	ハードロームブロック（多）、白色粘土（少）		
17		黒色土（粘土まじり）		
18		ハードローム粒で固めた層		
19	暗灰褐色	ハードローム粒、粘土粒、黒色土粒（多）		
20	暗褐色	ハードロームブロック、ハードローム大粒		
21	暗褐色	ハードロームブロック、粘土ブロック		
22	黒褐色	ハードローム微粒（少）、焼土微粒（少）		
23	黒褐色	ハードローム微粒（少）、焼土微粒（少）	22層に比して軟	
24	黒茶褐色	ハードローム粒（多）	硬く固まる	
25	黒褐色	ハードローム大粒（少）		

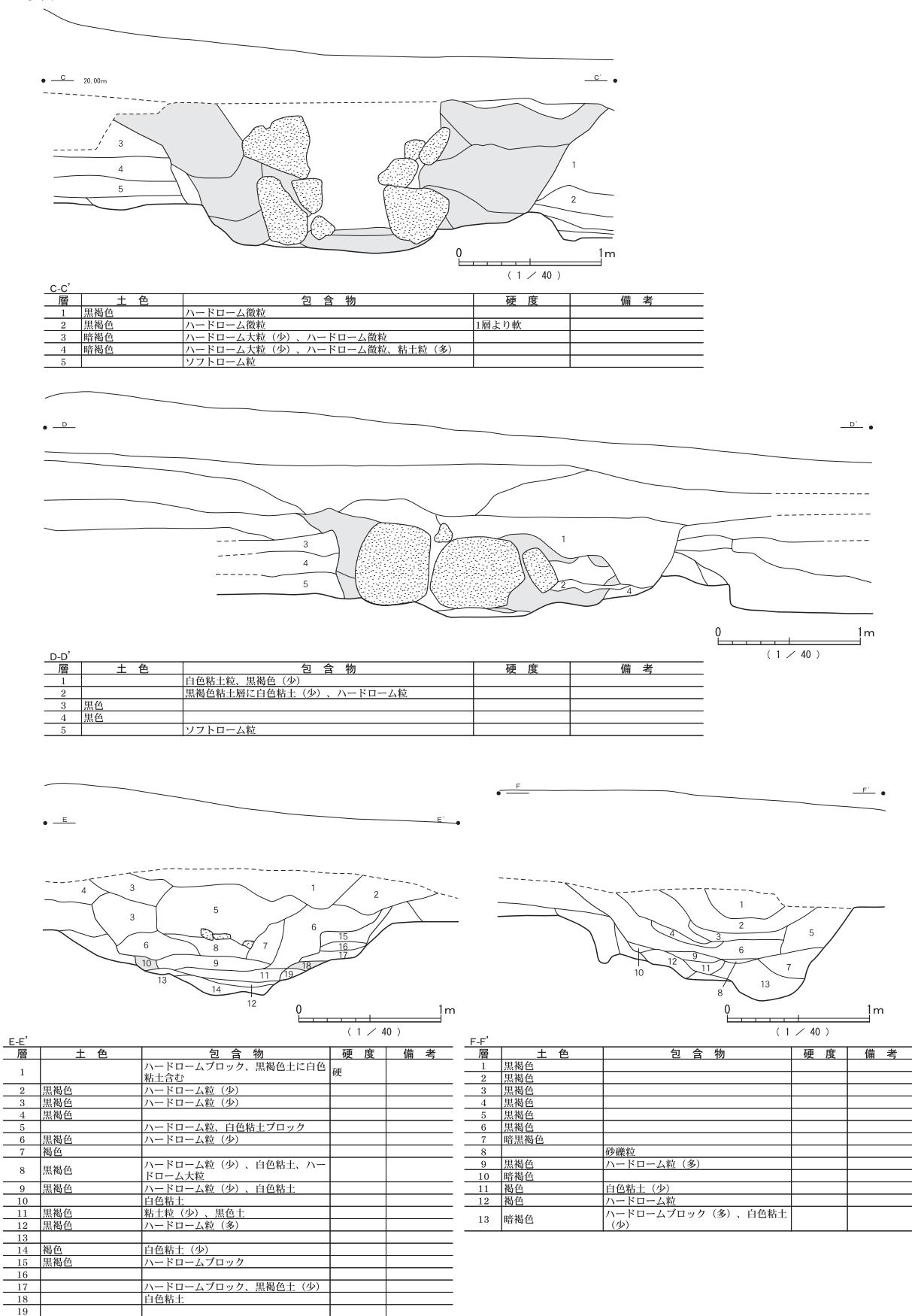


層	土色	包 倉 物	硬 度	備 考
1	暗褐色	ハードロームブロック（多）、ハードローム大粒（多）		
2		ハードローム粒		打ち固めた層
3	黒褐色	粘土粒		7層より粘土粒を多、同系
4	黒褐色	ハードローム粒、粘土粒		
5	明褐色	ハードローム粒		
6	黒褐色	粘土粒（多）	軟	
7	黒色	粘土粒		
8	暗褐色	ハードローム粒（多）、ハードローム大粒（多）		
9	暗褐色			
10	黒褐色	ハードローム粒、ハードローム微粒（若干）		
11	暗褐色	ハードローム粒、粘土粒	軟	
12	暗褐色（暗い）	ハードローム粒（少）	軟	
13	暗褐色（暗い）	ハードローム粒（少）、ハードローム粒（多）	12層より硬	
14	暗褐色	ハードローム粒（多）、焼土化粘土、炭化物粒（少）		
15	暗褐色	ハードローム粒（多）、焼土化粘土、炭化物粒（少）	硬	打ち固めた層
16	暗褐色	ハードローム粒（多）、		

第177図 5号墳(4)主体部

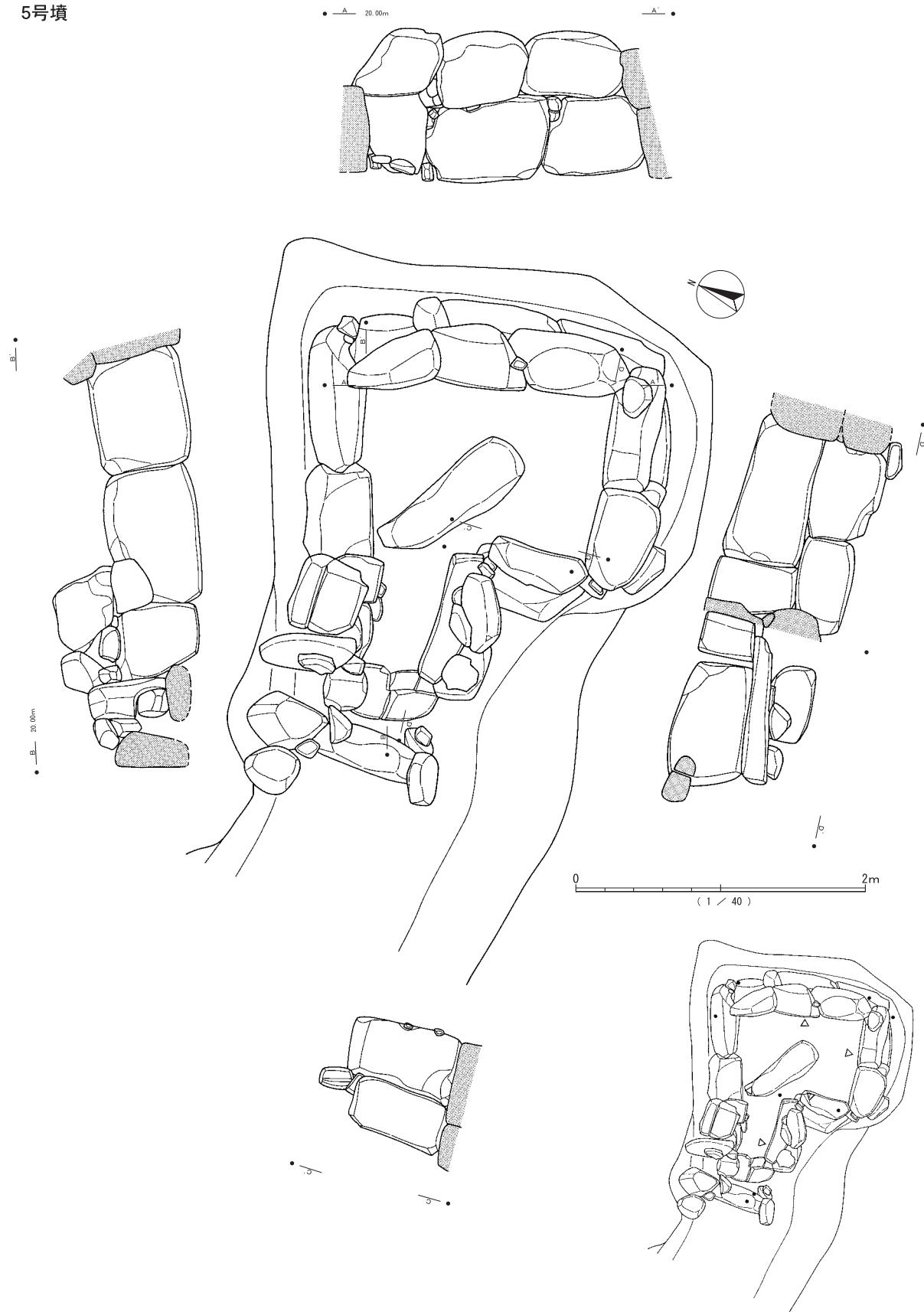
遺構と遺物 古墳

5号墳



第178図 5号墳(5)主体部

5号墳



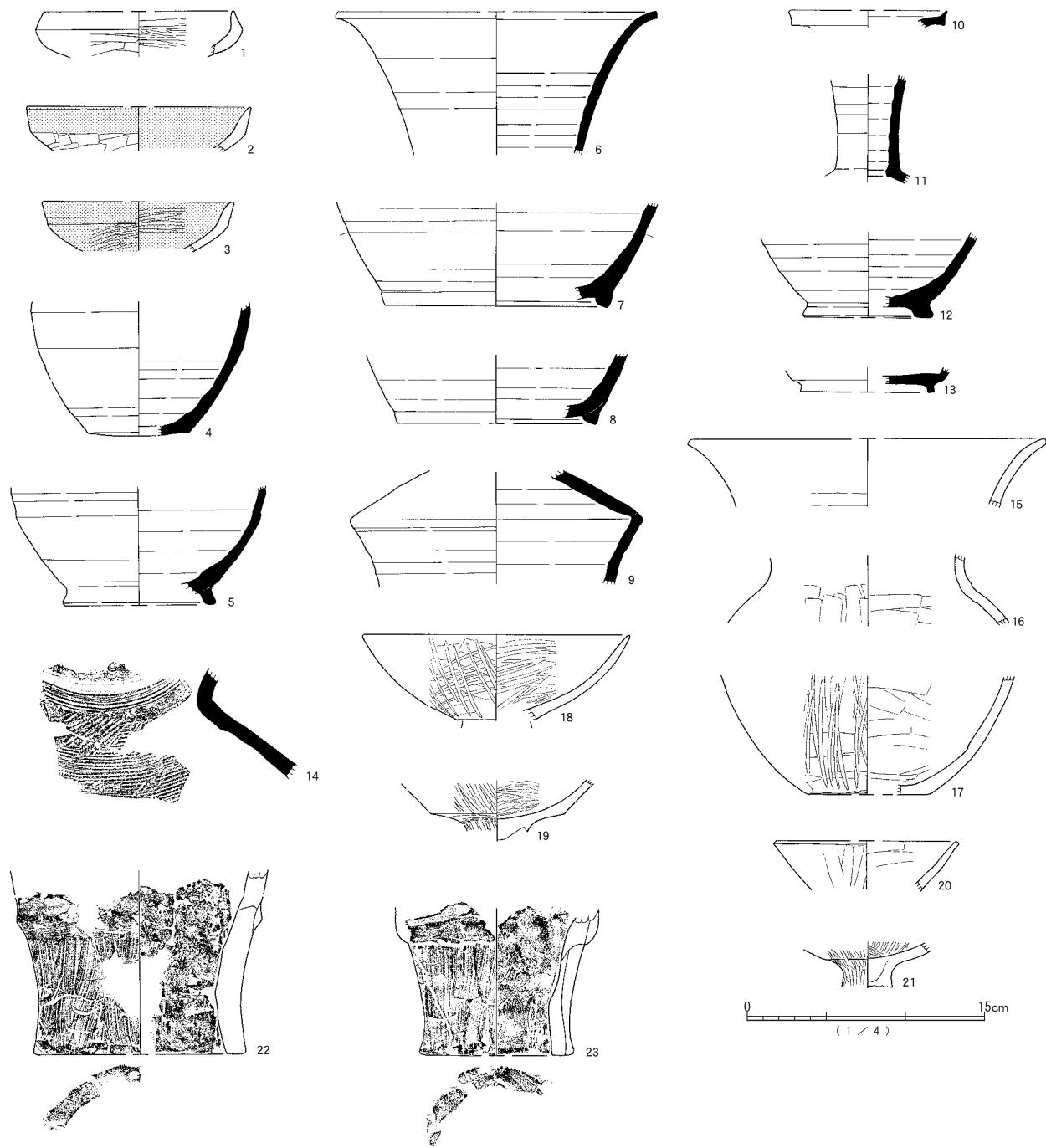
第179図 5号墳(6)主体部

5号墳



第180図 5号墳(7) 石室内人骨・遺物出土状況

5号墳



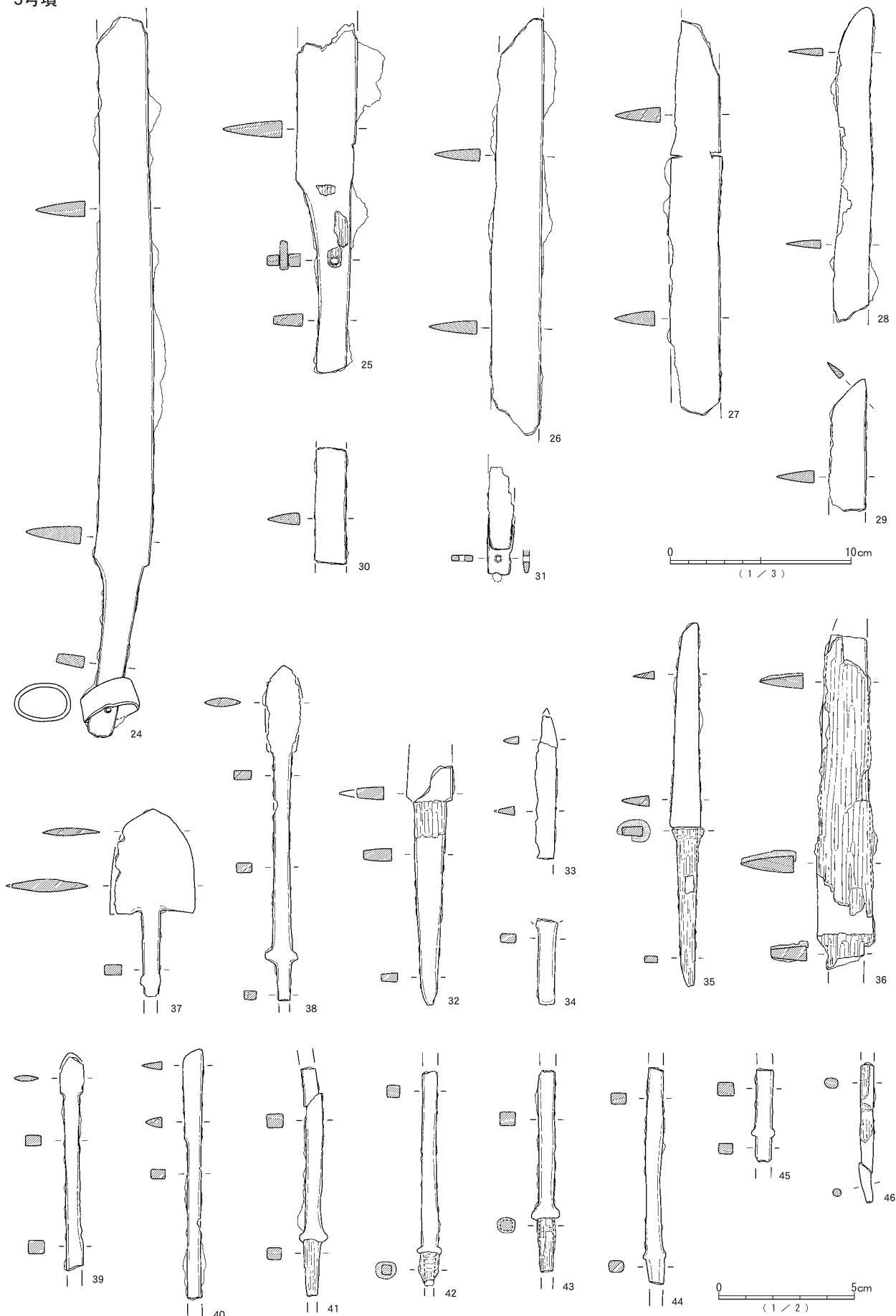
第181図 5号墳(8) 遺物

6号墳(285号墳) (第183~187図、図版30・36~39・80)

A地点のほぼ中央、3号墳の西側に隣接する。L6・L7・L8・M6・M7・M8・M9・N7・N8・N9区に所在する。32・33・35~38号竪穴と重複し、これらより新しい。また、北東隅部で3号墳と接している。

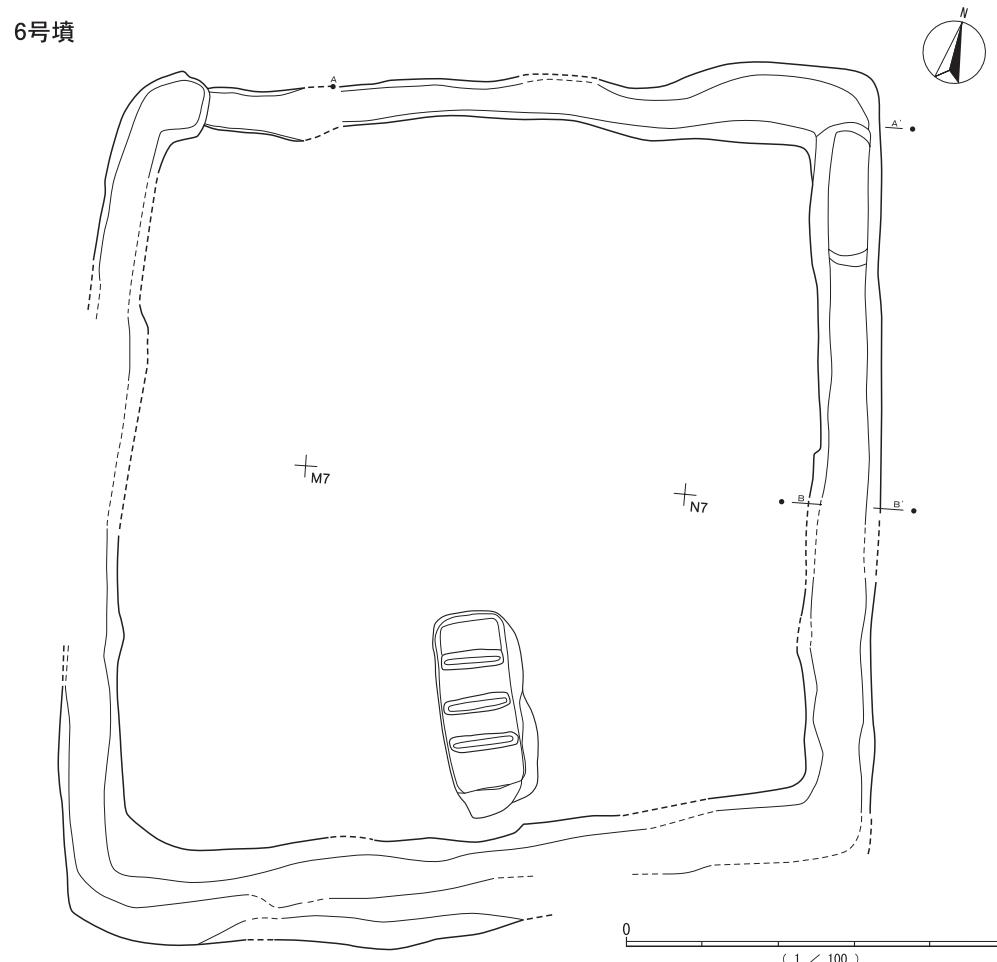
方墳であり、東西軸で、周溝外径10.70m、方台部(周溝内側下端間)9.42m、周溝内径9.07m、南北軸で、周溝外径11.40m、方台部9.88m、周溝内径9.52mを測る。南北軸の方位は、N - 11.5° - Wである。墳丘(盛土)は既に削平されている。周溝は、幅が最大1.1mほど、深さは最大約0.4mであった。開口部をもたない全周形と推定される。

5号墳



第182図 5号墳(9) 遺物

6号墳



層	土色	包含物	硬度	備考
1	黒褐色	焼土化粘土、ハードローム粒	硬	
2	黒褐色	ハードローム粒(多)、焼土粒(少)	軟	
3	黒褐色	ハードローム粒(多)	軟	
4	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒	硬	
5	黒褐色	ハードローム粒、ソフトローム粒	軟	
6	明褐色	ハードロームブロック		

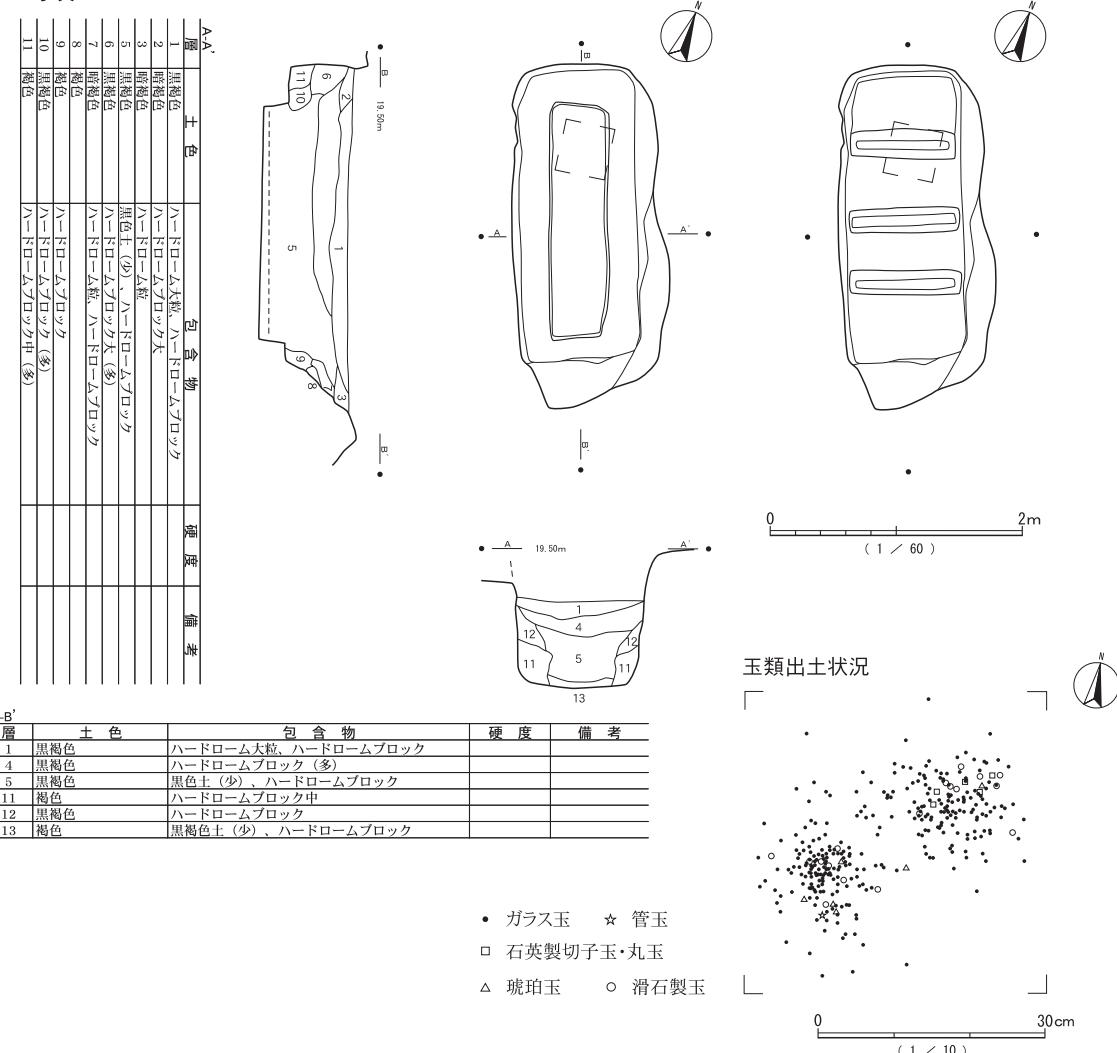
層	土色	包含物	硬度	備考
1	暗褐色		硬	
2	暗褐色		硬	
3				
4	黒褐色	ソフトローム粒、ハードローム粒	軟	
5	黒褐色	ハードローム粒(少)	硬	
6	暗褐色	ハードローム粒、暗褐色	軟	

第183図 6号墳(1) 遺構

主体部は、南辺裾寄り中央部で検出された。地山掘り込み墓坑の木棺墓であり、主軸を南北方向(N - 23.5° - W)にもつ。墓坑は、長さ 2.35m × 幅 1.25m、深さ 1.1m を測り、底面に横溝をもつ。木棺規模は、長さ 1.85m × 幅 0.48m を測る。

主体部より、総数 340 点以上の玉類が出土している(第23表 CD-ROM)。出土位置は木棺内北側にまとまり、頭位方向を示すと推定される。平面分布は2群にわかれ、底面やや上から一部は基底部の横溝に若干落ち込む状況で出土している。内訳は、碧玉製管玉1点、石英製切子玉5点、石英製丸玉1点、滑石製玉17点、琥珀玉5点、ガラス玉総数311点以上であり、このうち、琥珀玉1点、ガラス玉17点は、破損のため実測していない。碧玉製管玉1は、長さ 2.4cm、両面穿孔である。石英製玉類2~7は、いずれも片面穿孔である。琥珀玉8~11は、表面の調整痕が明確ではなく、形状も整ってはいない。滑石製玉は、側面に若干の丸みをもつ円柱状を呈し、径 8.6~11.5mm 10点(12~21)、径 3.3~4.5mm 7

6号墳



第184図 6号墳(2)主体部

点(22~28)に大別される。いずれも脆く表面は磨滅、剥落しており、とくに小形品は遺存状態が悪い。ガラス玉総数311点以上であり、このうち巻き付け法によるもの3点(22~28)、管切り法によるもの56点(32~86、1点未実測)、他は鋳型によると推定される。巻き付け法によると推定されるものは、いずれも直径1cmをこえる丸玉である。不透明で内部の観察はできないが、30は、表面で横方向に伸長する気泡が認められる。管切りによるものは、やや斜方向上下からの打撃による割取りのち研磨を加えたものが一般的であり、全体が円柱状で、小口一方がやや凹み、一方がやや突出する形態を残すものが多い。側面に丸みをもつものも多く、これらは再加熱、表面張力の工程をはさむ可能性がある。基本的には研磨を主とした調整によると推定される。両小口は同心円状、側面は縦方向の研磨条線を明瞭に残すものも多い。研磨痕が不明確なものは、研磨具ないし研磨剤の違いによるものであろうか。なお、調整方法と法量には対応関係があり、小形のものには再加熱による球形化が認められるものが多い。色調は、紺色、濃紺色系が主体となり、青緑色系が混じる。

鋳型製法によるものの判断基準の基本は気泡であるが、不純物、表面の割れ、付着物、法量、色調など、管切りによるものとは明確に区分することができる。このうち、鋳型成型、無調整と判断した

6号墳

管玉



1

石英製切子玉



2



3



4



5



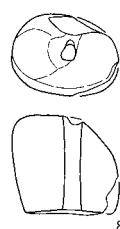
6

石英製丸玉

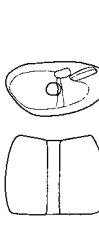


7

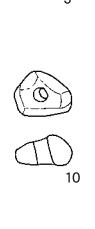
琥珀玉



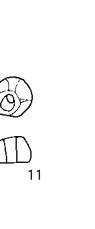
8



9



10



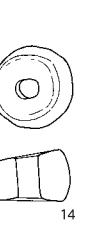
11



12



13



14



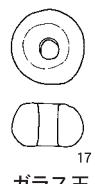
15



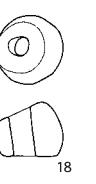
16

5cm
(2/3)

滑石製玉



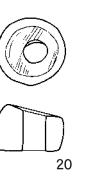
17



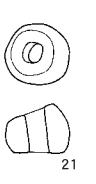
18



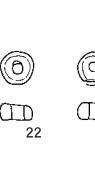
19



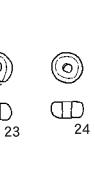
20



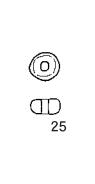
21



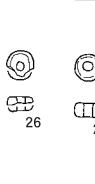
22



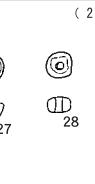
23



24



25



26

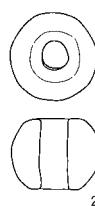


27

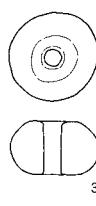


28

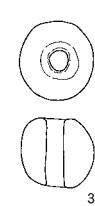
ガラス玉



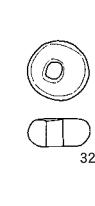
29



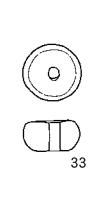
30



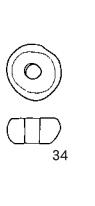
31



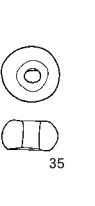
32



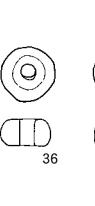
33



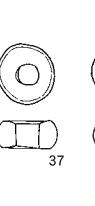
34



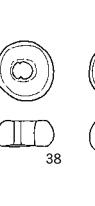
35



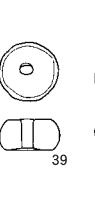
36



37



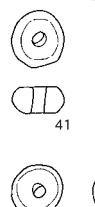
38



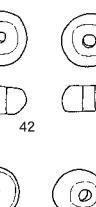
39



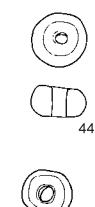
40



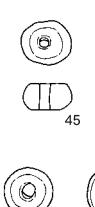
41



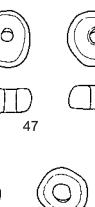
42



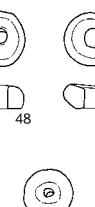
43



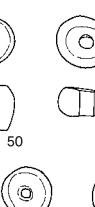
44



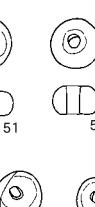
45



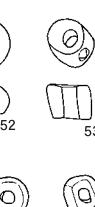
46



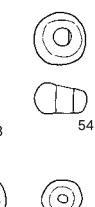
47



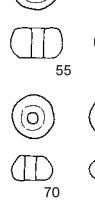
48



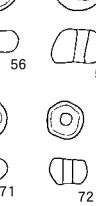
49



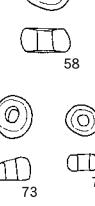
50



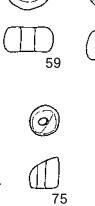
51



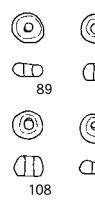
52



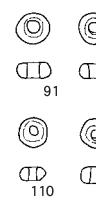
53



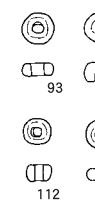
54



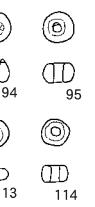
55



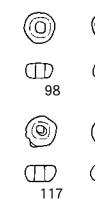
56



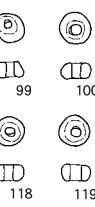
57



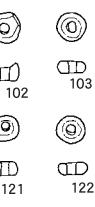
58



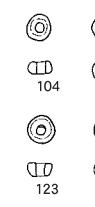
59



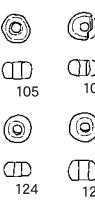
60



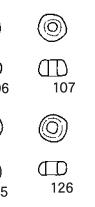
61



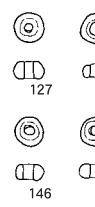
62



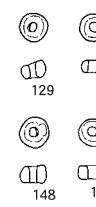
63



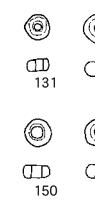
64



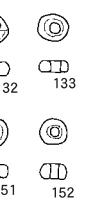
65



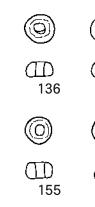
66



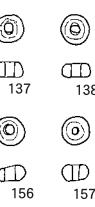
67



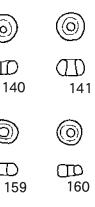
68



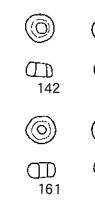
69



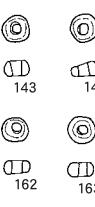
70



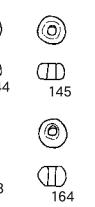
71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



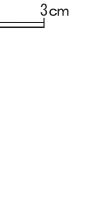
81



82



83



84



85



86



87



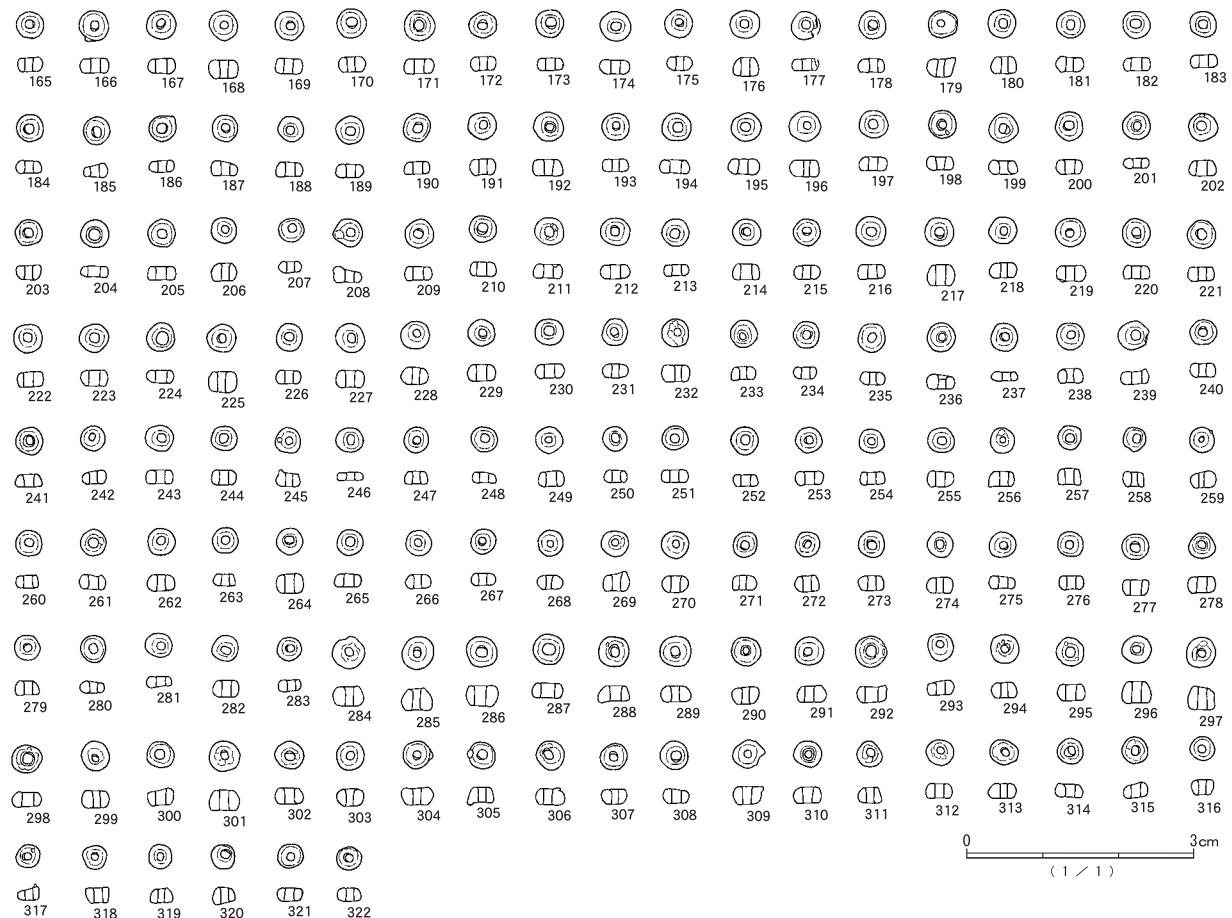
88

0 3cm
(1/1)

第185図 6号墳(3) 遺物

6号墳

ガラス玉

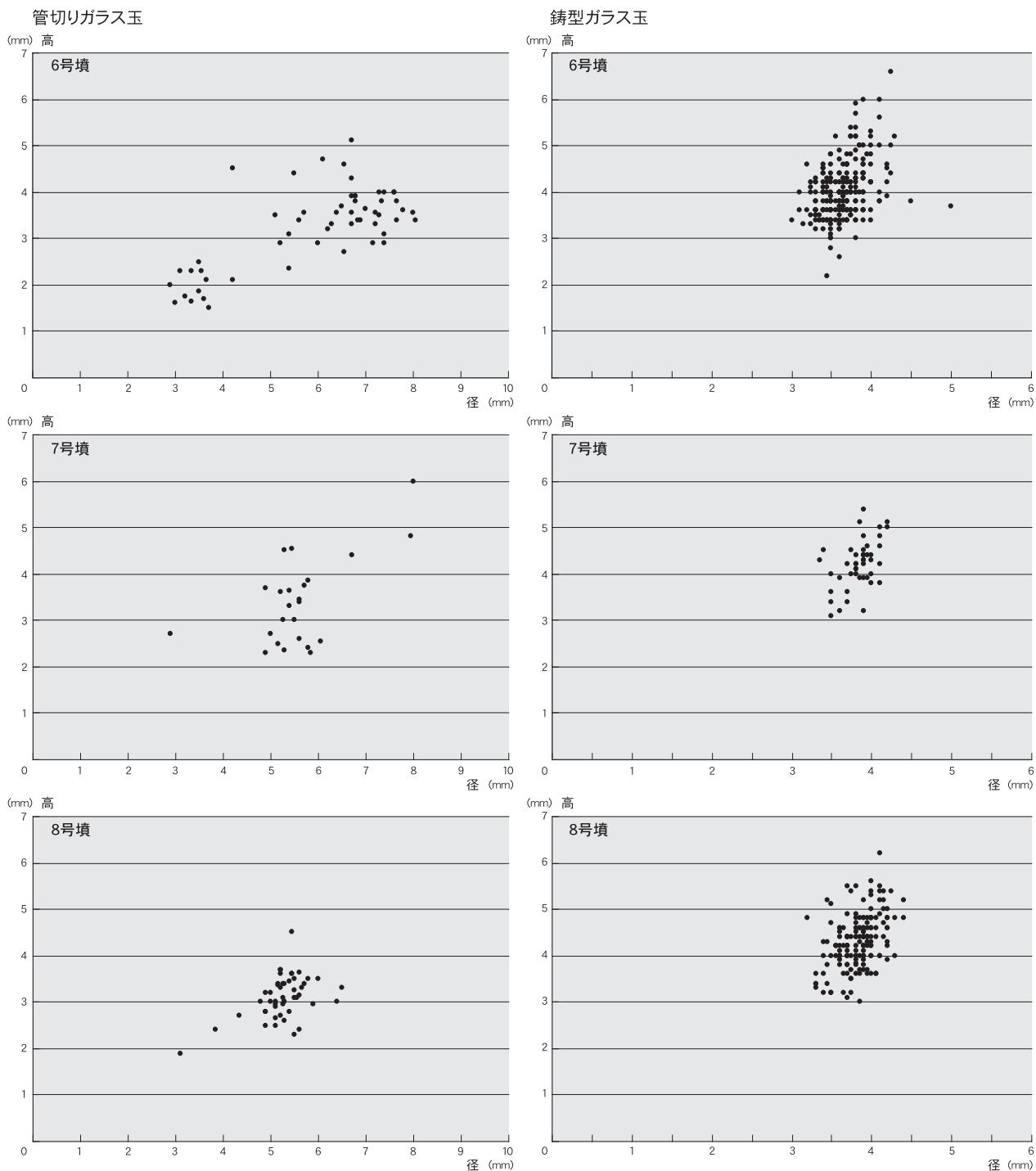


第186図 6号墳(4) 遺物

ものは実測分で39点ある(284~322)。これらは、全体形状がアップル形で、小口径小側周辺に付着物を残している。孔径は、小口径大側に向かってやや細くなる傾向があり、孔壁は、屑ガラスが半溶解状態になっているものが多い。小口径小側表面も粒状になっている場合がある。無調整としたものの中にも、小口凹凸部に若干の研磨を加えた可能性があるものも存在する。再加熱、表面張力によるものと、研磨調整によるものの個体単位での区別は難しい。付着物頂部の観察によって研磨を確認することができるが、研磨条線を明瞭に残すものはほとんど認められない。基本的に、孔縁を含む全体形状が丸みを帯び、孔壁が平坦化しているものを再加熱、表面張力としたが、これらの中にも両小口に研磨を加えたものも認められる。明確な比率を示すことはできないが、6号墳では、鋳型製法によるもののうち約30%程度が再加熱によると考えられ、7・8号墳に対してやや高率となる傾向が認められる。研磨については、アップル形状を残し、小口部分のみ研磨を加えたものから、全体によよぶものまで各種がある。色調については、紺色が一般的である。観察結果は、第23表にまとめた。

玉類以外、本古墳にともなうと考えられる遺物は出土していない。土器の出土がないため、時期詳細を明らかにすることはできないが、同様に玉類を出土している7・8号墳との比較は可能である。とくに明確な相違点は、管切り法によるガラス玉の法量分布にみることが可能であり(第187図)、鋳型法によるものも、研磨率に差があるようと思われる。

本古墳の所属時期は、根田代10期である。



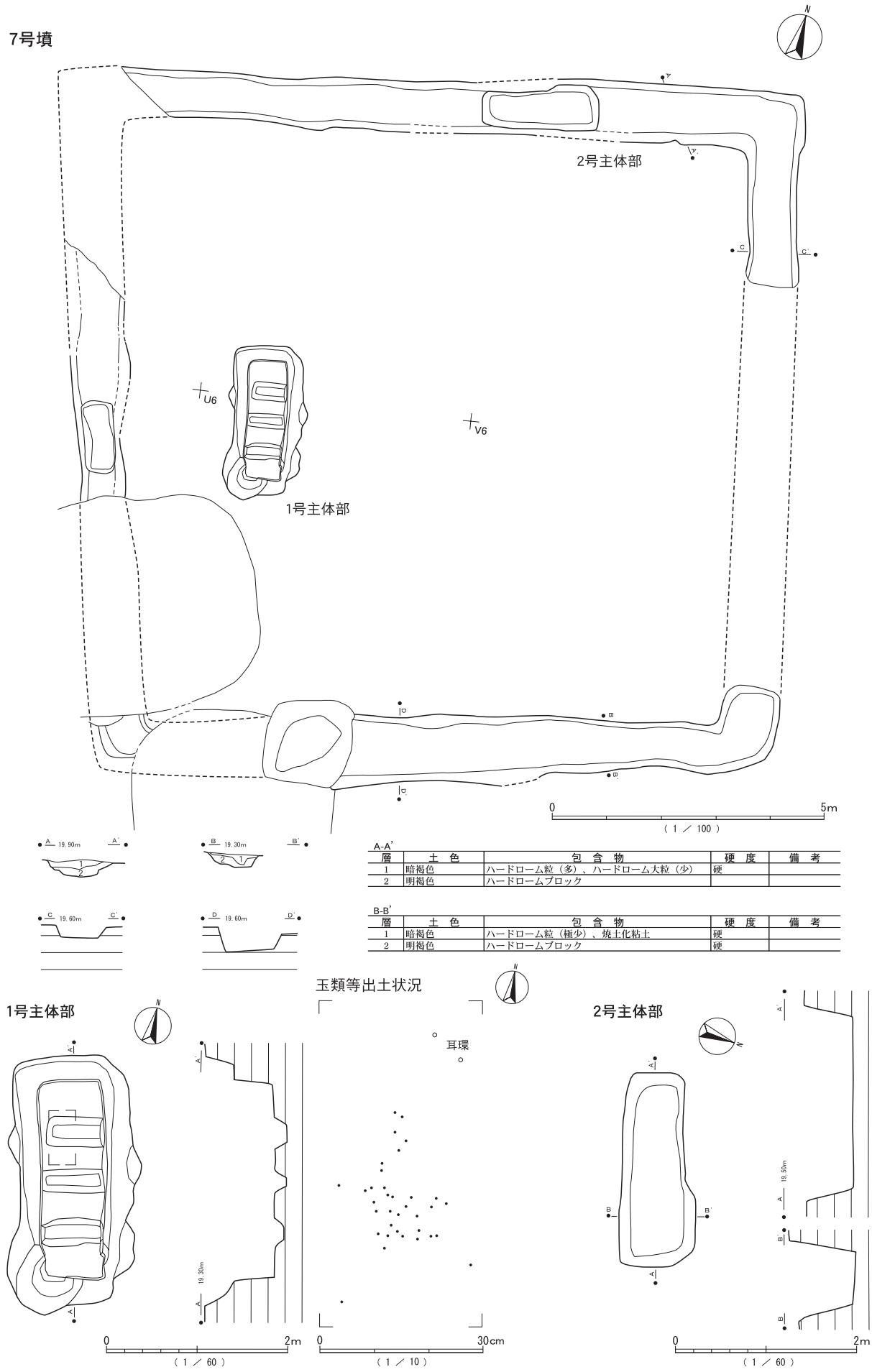
第187図 根田6・7・8号墳出土ガラス玉法量分布図

7号墳(286号墳) (第187~189図、図版31・36・37・39・74・80)

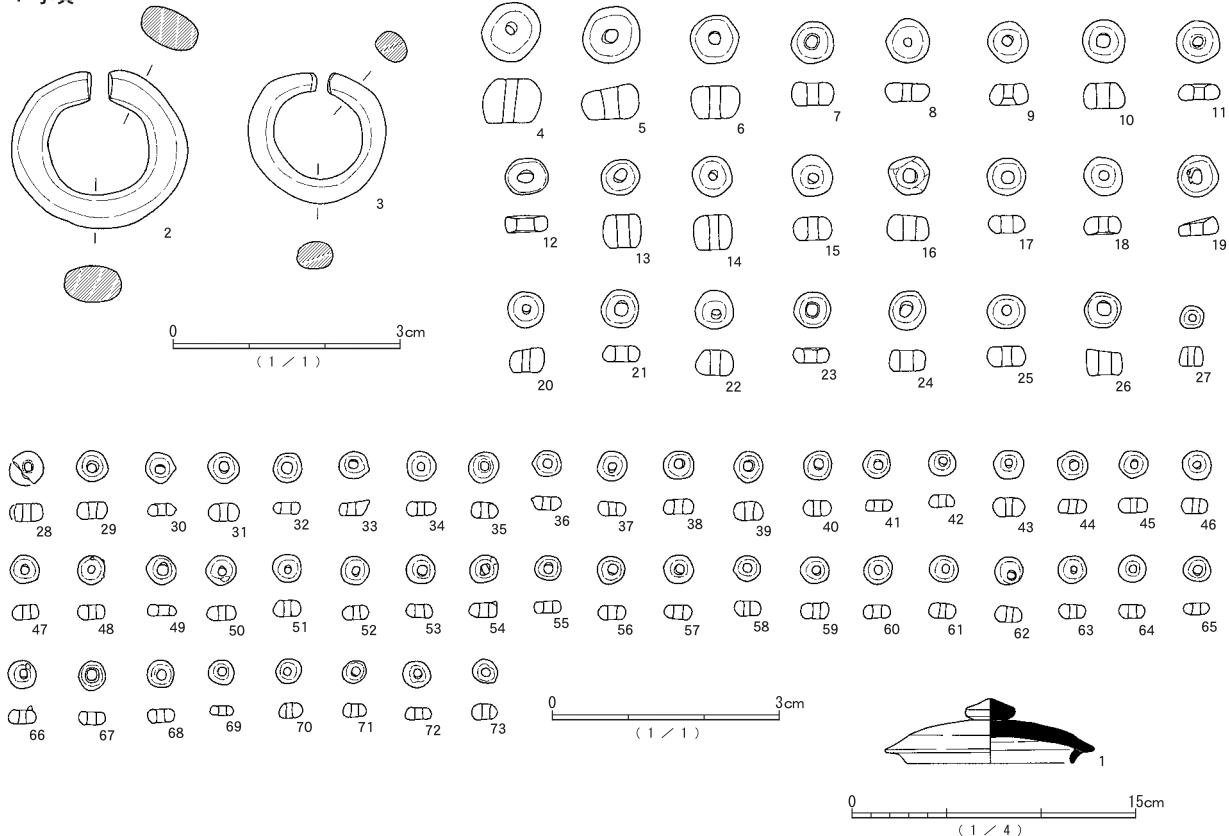
A地点の東側、4号墳と重複するかたちで検出された。T5・T6・T7・T8・U5・U6・U7・U8・V5・V6・V7・V8・W5・W6・W7・W8区に所在する。64~68号竪穴、4号墳と重複し、これらより新しいが、竪穴住居覆土部分の周溝は、明確にはとらえられていない。また、本古墳の北側は、後世の道路遺構(1号道路)が東西方向に走り、北西隅部と東側の周溝の一部が失われている。

方墳であり、東西軸で、周溝外径13.25m、周溝内径11.2m、南北軸で、周溝外径12.9m、方台部11.07m、周溝内径10.78mを測る。東西軸の方位は、N - 71.5° - Eである。墳丘(盛土)は既に削平

7号墳



7号墳



第189図 7号墳(2) 遺物

されている。周溝は、幅が最大1.2mほど、深さは最大0.5mほどであった。

主体部(1号主体部)は、西辺周溝寄り中央で検出された。墓坑主軸は、西溝と平行し、N - 14° - Wを測る。地山掘り込み墓坑の木棺墓と推定されるが、木棺痕跡は検出されていない。底面に横溝3条をもつ。墓坑規模は、長さ2.75m × 幅1.25m、深さ1.15mを測る。天井板の受け部と推定される中段をもち、底面での長さは2.15m、幅0.7mを測る。底面の横溝は、幅約30cm、深さ15cm程度であった。副葬品として、金銅製耳環、ガラス玉が出土している。

埋葬施設として、他に、北辺周溝内中央部で土坑1基が検出されている(2号主体部)。規模は、長さ2.15m × 幅0.65m、深さ0.85mであり、周溝底面を掘り込んでいる。木棺痕跡は検出されていない。副葬品は出土していない。また、西溝中央部で、長さ約1.35mの落ち込みが検出されているが、底面からの深さは10cm程度と浅い。これも、埋葬施設の可能性がある。

1号主体部より副葬品として、金銅製の耳環2点、ガラス玉70点が出土している。出土位置は木棺内北側にまとまり、とくに耳環の出土位置から頭位方向が推定できる。ガラス玉の内訳は、管切り法によるもの24点(4~27)、他は鋳型によると推定される(第23表CD-ROM)。管切りによるものは大形品が主体となり、最大径4cm以下は1点のみである。色調は、6号墳同様紺色、濃紺色を主体とするが、やや多様であるように思われる。

鋳型製法によるものは46点ある。このうち、鋳型成型、無調整と判断したものは2点のみである(72~73)。6号墳と比較して研磨調整によるものが多く、とくに、両小口に対する研磨が一般化しているようにみえる。法量は、径3.3~4.2cm、高1.5~2.7cm程度の範囲に分布がまとまる傾向が認め

られる。

1の須恵器杯蓋は、西溝覆土から出土している。ほぼ完存するが、2破片に分かれ、別の1片は8号墳東辺部Z7区表土より出土している。ここでは、7号墳に帰属するものとしたが、8号墳との関係も無視できない。身と蓋が逆転し、つまみが付加された比較的初期の段階と推定される。

本古墳の所属時期は、根田代10期である。

8号墳(287号墳) (第187・190~192図、図版31・32・36・37・39・74)

A地点の東側、7号墳と隣接して検出された。W5・W6・W7・X5・X6・X7・Y6・Y7・Z5・Z6・Z7区に所在する。70~73号竪穴と重複し、これらより新しい。斜面地形のため南側の周溝は検出されておらず、北側の周溝も1号道路と重複するため、保存状態はあまりよくない。

方墳であり、東西軸で、周溝外径11.95m、方台部(周溝内側下端間)10.45m、周溝内径9.95m、南北軸周溝外径で約11.5mを測る。南北軸の方位は、N-18°-Wである。墳丘(盛土)は既に削平されている。周溝は、幅が最大1.0mほど、深さは最大0.6mほどであった。

主体部は、西辺周溝寄り中央で検出された。墓坑主軸は、西溝に平行し、N-21°-Wを測る。地山掘り込み墓坑の木棺墓である。墓坑規模は、長さ2.60m×幅1.25m、深さ1.0mを測る。木棺は長さ2.0m、幅0.55mほどとみられる。副葬品として、ガラス小玉が検出されている。出土位置は木棺内北側にまとまり、頭位方向を示すと推定される。

ガラス玉は総数で215点以上(+8点程度)を数えることができる(第23表CD-ROM)。内訳は、管切り法によるもの48点(4~27)、鋳型167点以上である。

管切り法によるもののうち、最大径4cm以下の小形品は1点のみであり、大型が主体となる。大型品は、6・7号墳と比較して規格性が高く、径5.0~6.2cm、高さ3cm前後にまとまる傾向が認められる。色調は、紺色を主体とする。

鋳型製法によるものは167点以上ある。このうち、鋳型成型、無調整と判断したものは6点のみであり(211~216)、研磨調整によるとみられるものが圧倒的に多い。とくに、両小口に対する研磨が一般化しているようにみえる。法量は、径3.2~4.4cm、高さ1.5~2.8cm程度に分布がまとまる。色調は、青緑色系が比較的目立つ。なお、80・101・122・151・156は、他と異なり平面断面形とも均整が取れ、不純物、表面の割れも少ない。小口平坦面の幅が狭い特徴も共通している。管切りによるものと比較して、気泡量が多く、列状の配列も認められないことから、鋳型法によると推定されるが、系統が異なる可能性がある。

1の甕形土器は、時期的に本古墳にともなうものと考えられるが、出土状況の詳細は明らかではない。約1/2程度はY4区からの出土である。なお、前述したように、7号墳1の須恵器杯蓋の一部は、8号墳東辺部Z7区表土から出土しており、本古墳に関係する可能性もある。

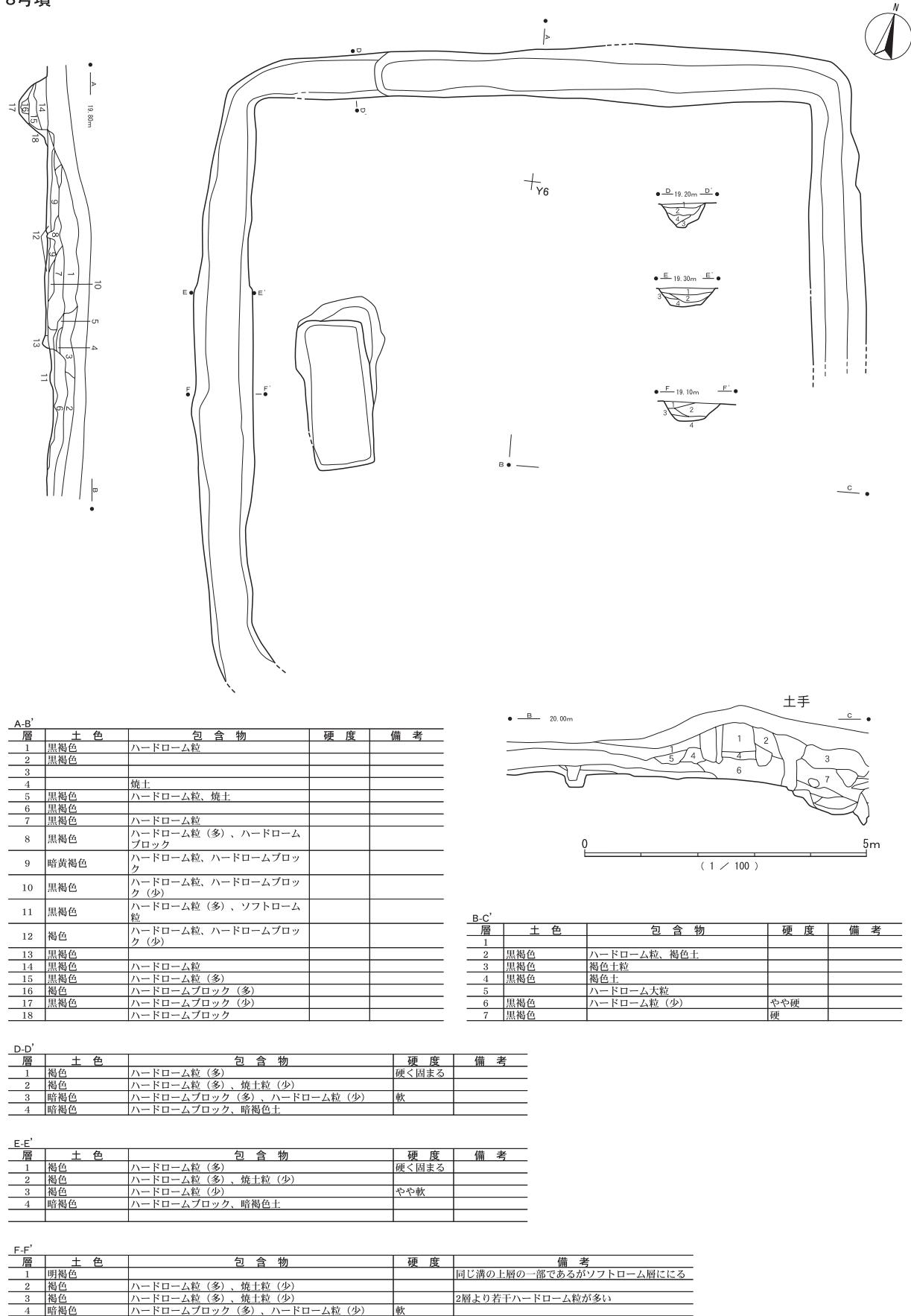
本古墳の所属時期は、根田代10期である。

9号墳 (第193図、図版32)

A地点の西側、6号墳の西25mほどの地点に位置する。D5・D6・D7・E5・E6・E7・E8・F5・F6・F7・F8・G5・G6・G7・G8・H5・H6・H7区に所在する。調査段階では、古墳として認識されていない。埋葬施設と西側の溝との関係が、他の終末期方墳に類することから、古墳として取り上げる。5~9号竪穴と重複し、これらより新しい。ただし、南北を道路遺構(1・2号道路)にはさまれ、遺存状態は悪い。平

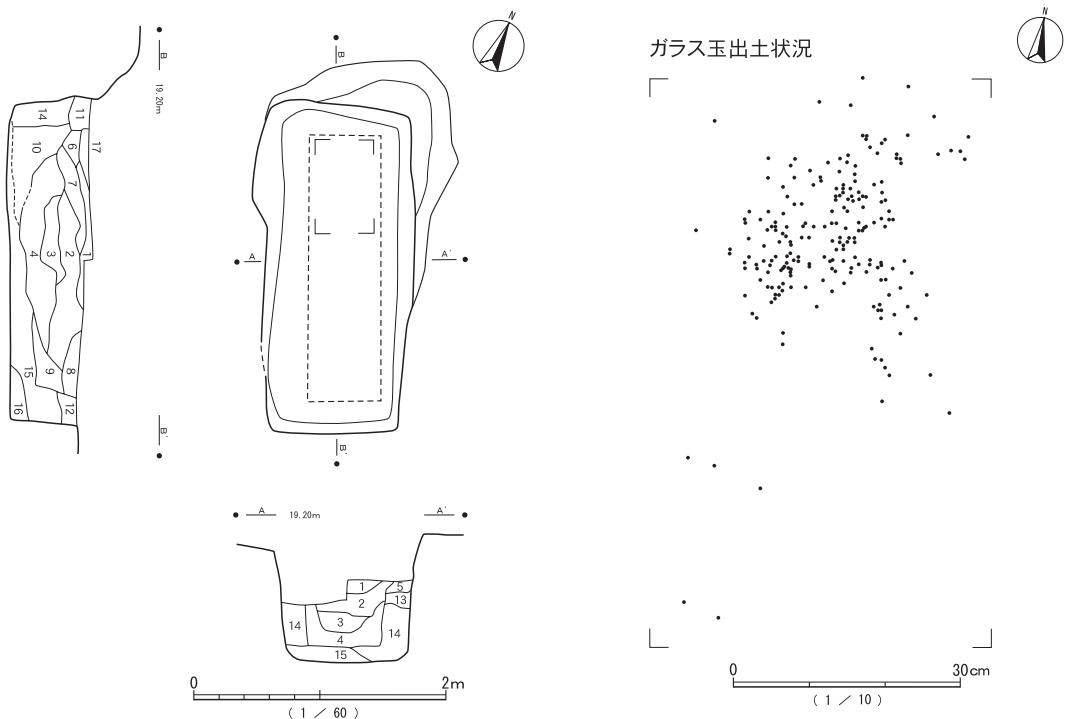
遺構と遺物 古墳

8号墳



第190図 8号墳(1) 遺構

8号墳



層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	黒褐色	ハードロームブロック (多)		
2	黒褐色	ハードロームブロック (多)、黒色土		
3	黒褐色	ハードロームブロック (少)		
4	黒褐色	ハードロームブロック、黒色土 (少)		
6	黒褐色	黒色土、ハードロームブロック		
7	褐色	ハードロームブロック大 (多)		
8	黒色	ハードロームブロック		
9	黒色	ハードロームブロック (少)		
10	黒褐色	ハードロームブロック		
11	暗褐色	ハードロームブロック大		
12	黒色	ハードロームブロック塊		粘質
14	暗褐色	ハードロームブロック (多)		
15	褐色	ハードロームブロック		
16	黒色	ハードロームブロック		
17	暗褐色	ハードロームブロック (多)		

層	土色	包 含 物	硬 度	備 考
1	黒褐色	ハードロームブロック (多)		
2	黒褐色	ハードロームブロック (多)、黒色土		
3	黒褐色	ハードロームブロック (少)		
4	黒褐色	ハードロームブロック、黒色土 (少)		
5	暗茶褐色	黒色土、ハードロームブロック (混)		
13	暗褐色	ハードロームブロック、黒色土 (混)		
14	暗褐色	ハードロームブロック (多)		
15	褐色	黒色土、ハードロームブロック (混)		

第191図 8号墳(2) 遺構遺物

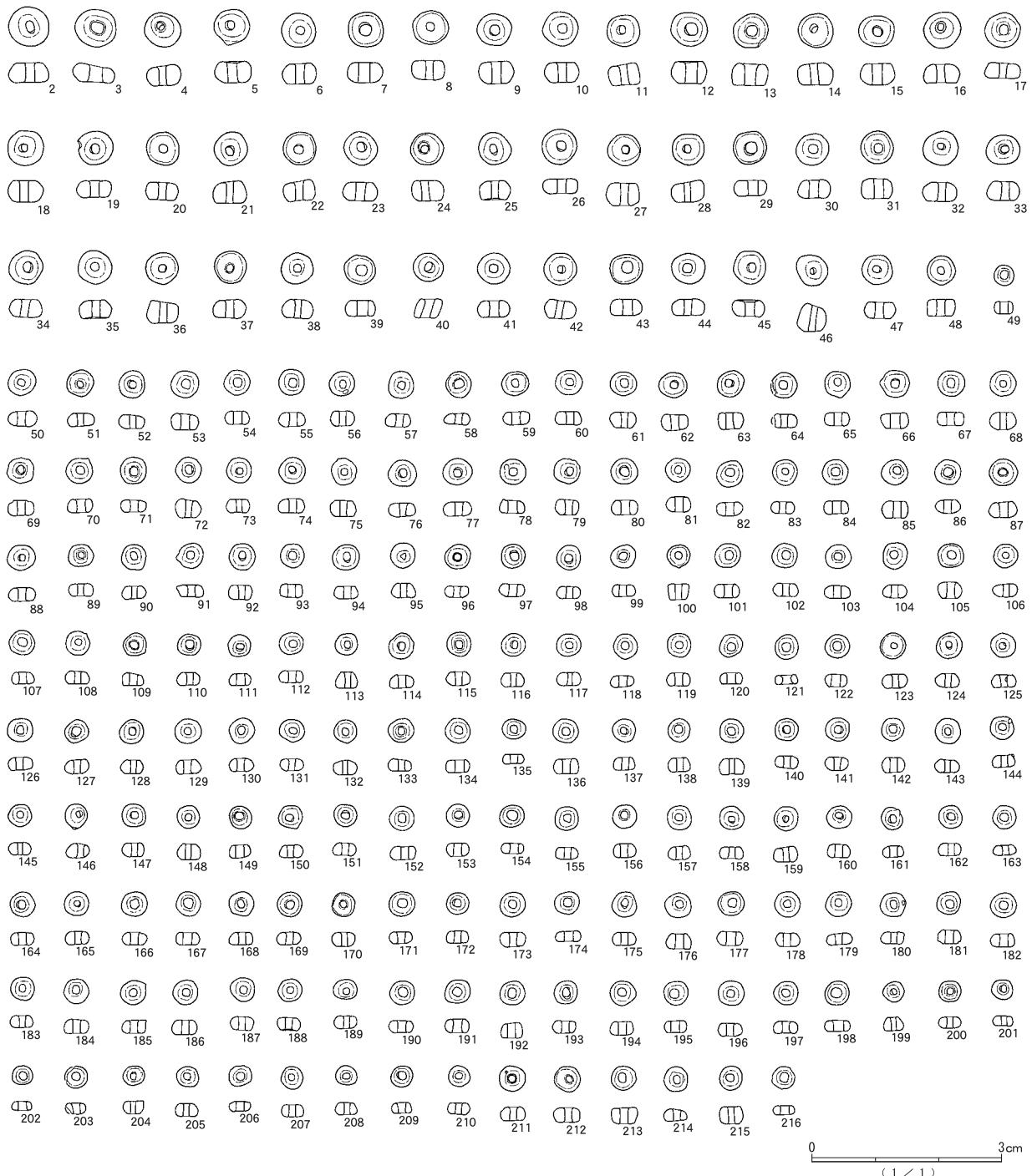
面図による南辺、北辺の溝も、おおむね周溝位置に対応すると思われるが、道路の開削による影響をうけている。

方墳と推定され、南北溝内径で13.8mを測る。西溝を基準とした方位は、N - 21° - Wである。墳丘(盛土)は既に削平されている。

主体部は、西側裾寄りにつくられ、方位はN - 20° - Wを測る。地山を掘り込んだ墓坑内に木棺を納めたものとみられるが、木棺痕跡は検出されていない。墓坑規模は、長さ2.05m × 幅0.80m、深さ最大0.90mを測る。副葬品は検出されていない。

本古墳の所属時期は、根田代10期である。

8号墳



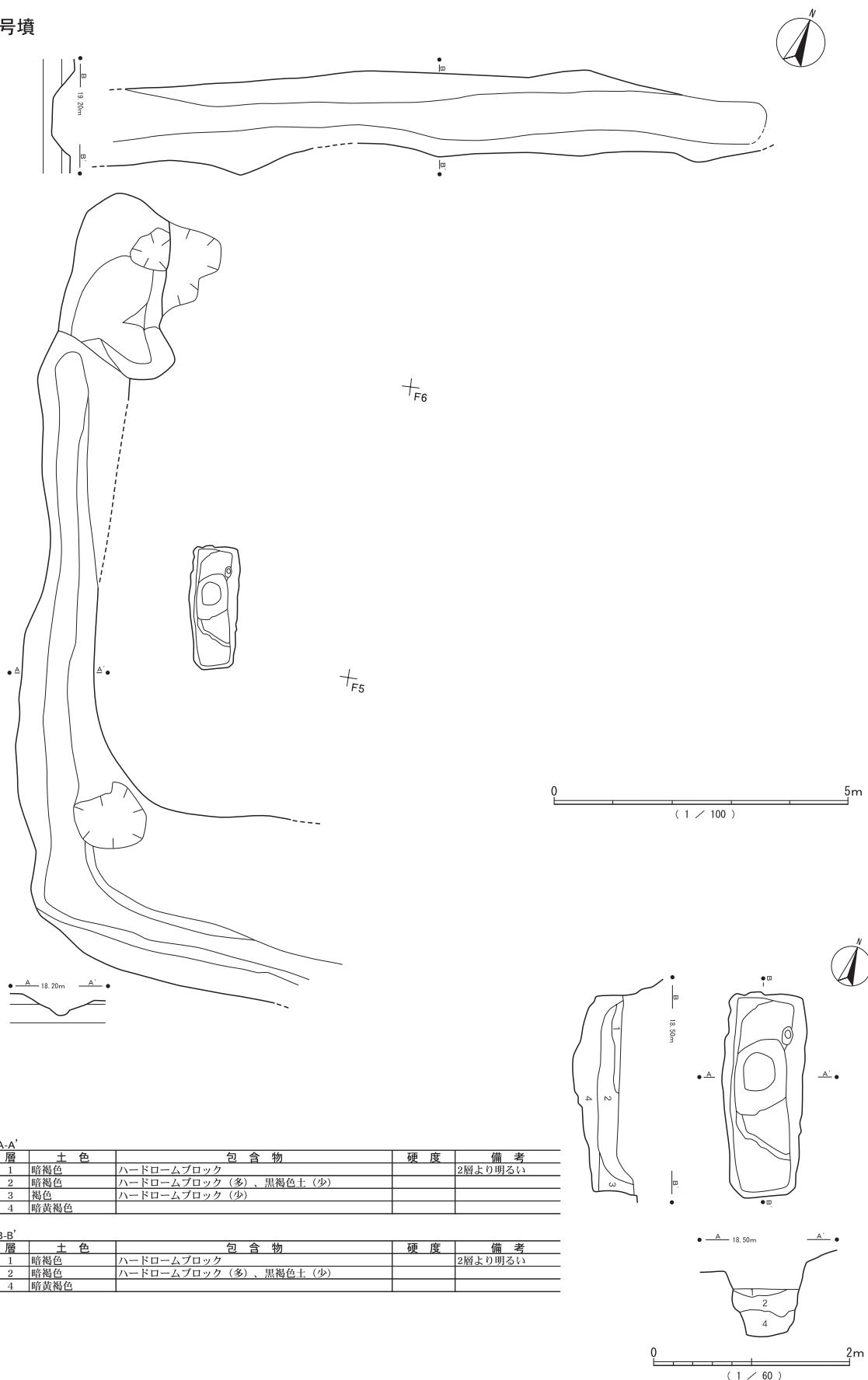
第192図 8号墳(3) 遺物

文 献

田中新史 1981「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会

田中新史 2000『上総市原台の光芒』市原古墳群調査と上総国分寺豊穴住居跡調査団 市原市古墳群刊行会

9号墳



第193図 9号墳 遺構

(4) 土 坑

土坑は、A 地点で12基が検出されている。豊穴住居跡との重複関係および形状から、いずれも弥生時代およびそれ以降と推定されるが、細別時期、性格など詳細が明らかではないものが多い。

時期的には、1号土坑が弥生時代後期、9号土坑が、その構造から古墳時代終末期の木棺土坑墓と考えられる。また、2・3・4号土坑でも木棺痕跡が確認されており、とくに4号土坑では埋葬人骨が検出されている。終末期および奈良時代の埋葬遺構は、他に方墳、地下式土坑墓があり、この時期を中心とする可能性が高いものの、これらの木棺土坑墓の時期を特定する決め手はない。他の土坑も、規模等から、埋葬遺構の可能性が考えられるが、確証はない。

1号土坑 (第194・198図、図版21・72)

1号土坑は、A 地点E6区に所在する。5号豊穴内にあり、この豊穴住居の南西側の主柱穴と一部重複する。検出状況によれば、本土坑は豊穴に後出するとみられる。長軸推定 $2.58\text{m} \times \text{短軸 } 0.90\text{m}$ を測る長方形を呈するもので、深さは最大75cmほどである。長軸方位はN - 41.5° - Wを測る。底面には、直径50cmほどの浅いくぼみが2箇所みられるが、5号豊穴にともなう可能性もある。覆土中央から、1・2の土器が出土している。遺構の性格は明らかではない。なお、覆土断面図は、土層注記の記載がなかったため、分層図のみ提示した。

1・3・4は甕形土器、2は壺形土器である。1・2は、覆土からの出土であるが、据え置いたような状況が認められる。1は口頸部多段の甕形土器であるが、段部はヘラナデにより部分的に消去されている。器形的な特徴から、久ヶ原2式古段階、根田代3期と推定される。

2号土坑 (第194図、図版21)

2号土坑(木棺土坑墓)は、A 地点I9区に所在する。南側で25号豊穴と一部重複するが、検出状況によれば、本土坑は豊穴に後出するとみられる。基底面は、この豊穴の床面下に達する。長軸 $2.35\text{m} \times \text{短軸 } 1.08\text{m}$ を測る楕円形を呈するもので、深さは最大35cmほどである。掘形長軸方位はN - 38° - Wを測る。木棺直葬の墓坑とみられ、木棺痕が検出されている。棺の大きさは、長軸 $1.80\text{m} \times \text{短軸 } 0.50\text{m}$ である。棺方位はN - 39.5° - Wである。

出土遺物としては、1の鉄製刀子が出土している。出土状況等の記録がないため、本来、本土坑にともなうものであるかどうかは明らかではない。遺構写真では(写真図版21)、棺内に遺物を残した土柱状の部分が認められるが、特定できない。刀子は、片平、片鎬造りで、切先は若干両刃状になる。鞘、柄の痕跡は認められない。他に、副葬品等遺物は出土していない。

時期的には、弥生時代後期、古墳時代前期、終末期の各期に対応する可能性があるが、確定できない。刀子については、少なくとも奈良・平安時代以降の所産と思われるが、判断できない。なお、本遺構は、調査概報において、2号木棺墓(MK2)として報告されている(田中1981)。

3号土坑 (第194・198図、図版21・22)

3号土坑(木棺土坑墓)は、A 地点J8・J9区に所在する。22・24号豊穴と一部重複するが、検出状況によれば、本遺構は豊穴住居より新しいとみられる。基底面は、この豊穴の床面下に達する。長軸 $2.50\text{m} \times \text{短軸 } 1.98\text{m}$ を測る幅広の長方形を呈するもので、深さは最大70cmほどである。長軸方位はN - 29° - Wを測る。木棺直葬の墓坑とみられ、木棺痕が検出されている。棺の大きさは、長軸 $1.80\text{m} \times \text{短軸 } 0.99\text{m}$ である。棺方位はN - 28.5° - Wである。副葬品は出土していない。若干の弥生

土器が出土しているが、本遺構にともなうものとは考えにくい。時期は特定できない。なお、本遺構は、調査概報において、3号木棺墓(MK3)として報告されている。

4号土坑 (第195・198図、図版22)

4号土坑(木棺土坑墓)は、A地点J9・J10区に所在する。22号竪穴と重複するが、検出状況によれば、本遺構は竪穴住居より新しい。基底面は、この竪穴の床面下に達する。長軸2.10m×短軸0.94mを測る長方形を呈するもので、深さは最大25cmほどである。掘形長軸(頭位)方向はN-30°-Wを測る。土層断面1・2層は、棺内崩落土と推定されることから、木棺直葬の墓坑とみられる。棺の大きさは、長軸推定2.05m×短軸0.50mである。棺内北側で、頭蓋骨片と歯、上肢骨の痕跡が検出された。埋葬人骨の性別、年齢は、鑑定を経ていないため明らかではないが、ほとんど原形を保っていない。副葬品は出土していない。若干の弥生土器が出土しているが、本遺構にともなうものとは考えにくい。

2・3・4号土坑は近接し、しかも長軸方向がおおむね同一であることから、同時期の墓坑と考えられる。ただし、時期的に特定することは難しい。なお、本遺構は、調査概報において、4号木棺墓(MK4)として報告されている。

5号土坑 (第195図、図版11)

5号土坑は、A地点I3区に所在する。30号竪穴と重複するとみられるが、検出状況から新旧関係は判断できない。長軸2.50m×短軸1.23mを測る長方形を呈するもので、深さは最大50cmほどである。長軸方位はN-92.5°-Wを測る。遺物は出土していない。

6号土坑 (第195図、図版11)

6号土坑は、A地点J3区に所在する。長軸2.88m×短軸1.40mを測る長方形を呈するもので、深さは最大40cmほどである。長軸方位はN-95.5°-Wを測る。遺物は出土していない。

7号土坑 (第195図、図版11)

7号土坑は、A地点K3区に所在する。30号竪穴と重複するが、検出状況によれば、本遺構は竪穴住居より新しい。長軸1.70m×短軸推定1.27mを測る楕円形を呈するもので、深さは最大65cmほどである。長軸方位はN-86°-Wを測る。遺物は出土していない。

8号土坑 (第195図、図版11)

8号土坑は、A地点J2・K2区に所在する。長軸2.00m×短軸0.78mを測る長方形を呈するもので、深さは最大40cmほどである。長軸方位はN-105.5°-Wを測る。遺物は出土していない。

5号～8号土坑は近接し、しかも長軸方向がおおむね同一である。規模形態も類似することから、同時期の墓坑の可能性がある。

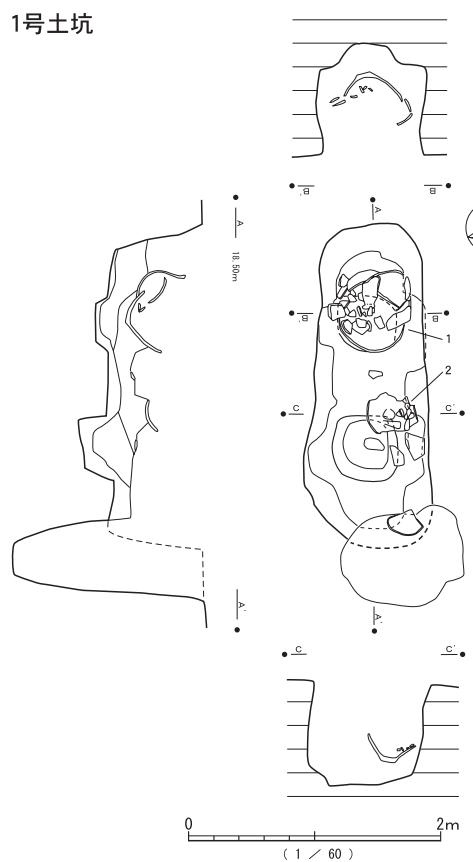
9号土坑 (第196・198図、図版22)

9号土坑(木棺土坑墓)は、A地点R7・R8・S7・S8区に所在する。長軸4.00m×短軸2.42m、深さ最大20cmほどを測る長方形の掘形内に、長軸3.02m×短軸1.16m、深さ最大90cmほどの長方形の掘り込みを有するもので、木棺を埋置したとみられる。上段は、天井板の受け部と推定される。土層断面図によれば、下段南側隅付近が、長さ0.9m、幅0.5m、深さ20cmほど掘りくぼめられているが、性格は不明。掘形長軸方位はN-72.5°-Wを測る。副葬品は出土していない。若干の弥生土器が出土しているが、本遺構にともなうものとは考えにくい。

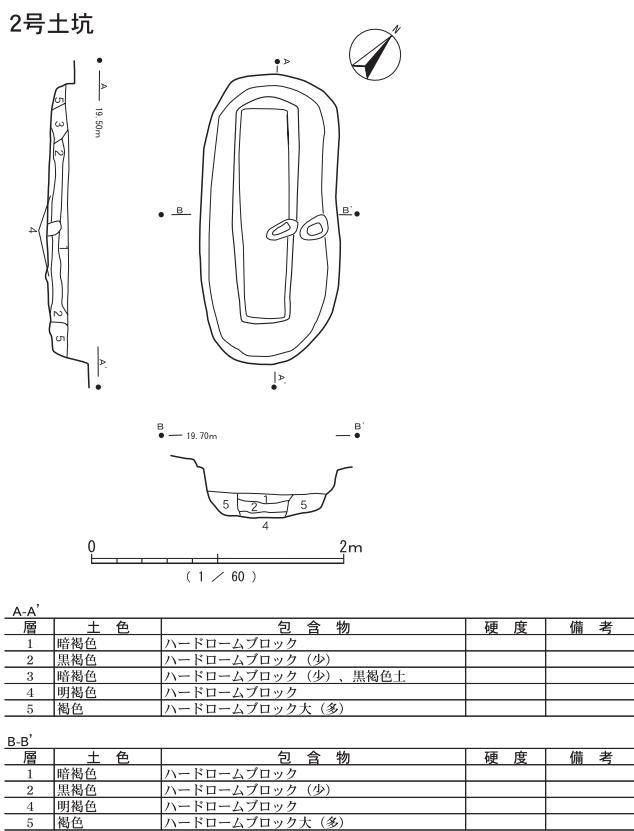
本遺構は、その構造から古墳時代終末期、根田代10期の所産と考えられる(田中1985)。ただ

遺構と遺物 土坑

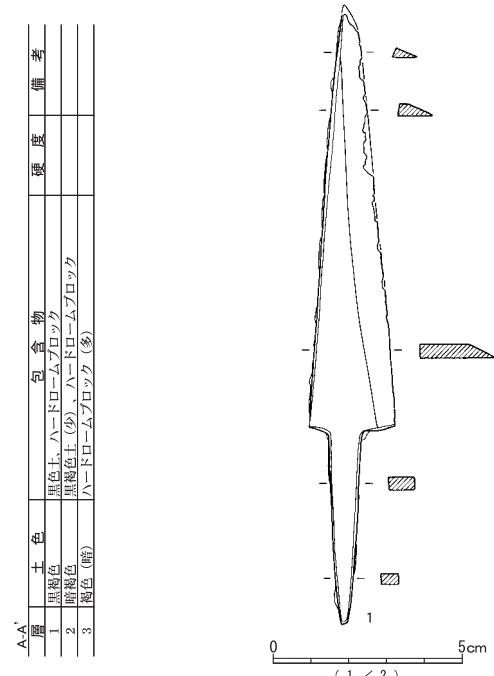
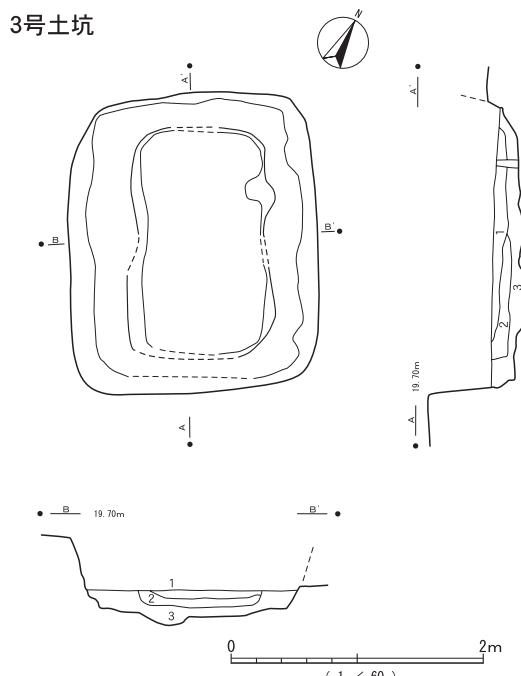
1号土坑



2号土坑



2号土坑

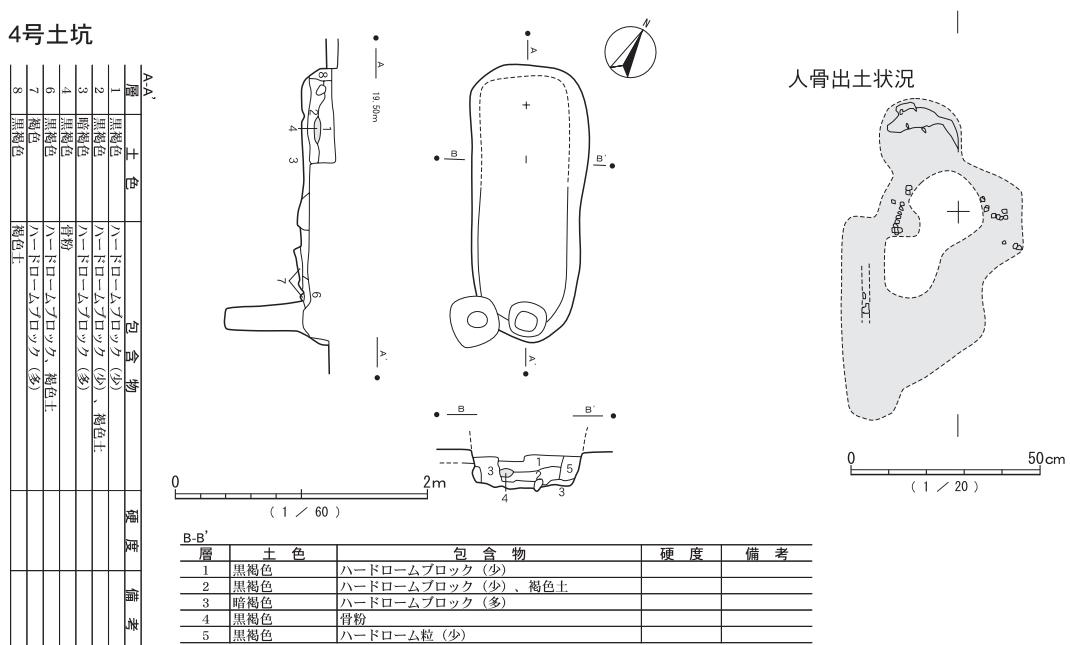


層	土色	包含物	硬度	備考
1	黒褐色	黒色土、ハードロームブロック		
2	暗褐色	黒褐色土 (少)、ハードロームブロック		
3	褐色 (暗)	ハードロームブロック (多)		

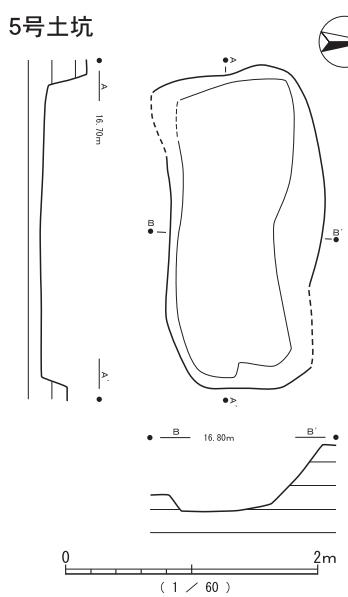
第194図 1号土坑・2号土坑・3号土坑 遺構遺物

遺構と遺物 土坑

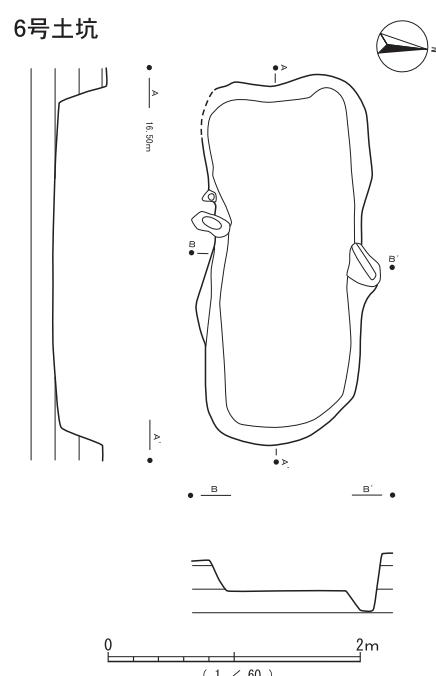
4号土坑



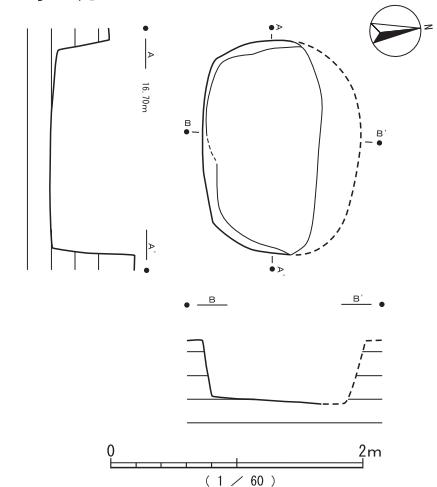
5号土坑



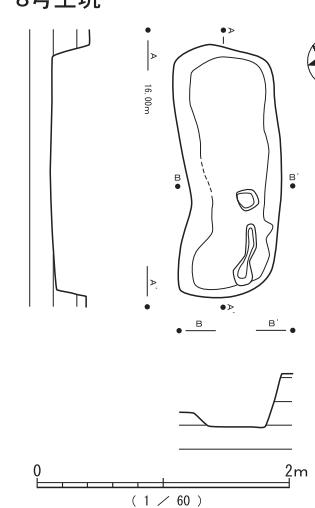
6号土坑



7号土坑



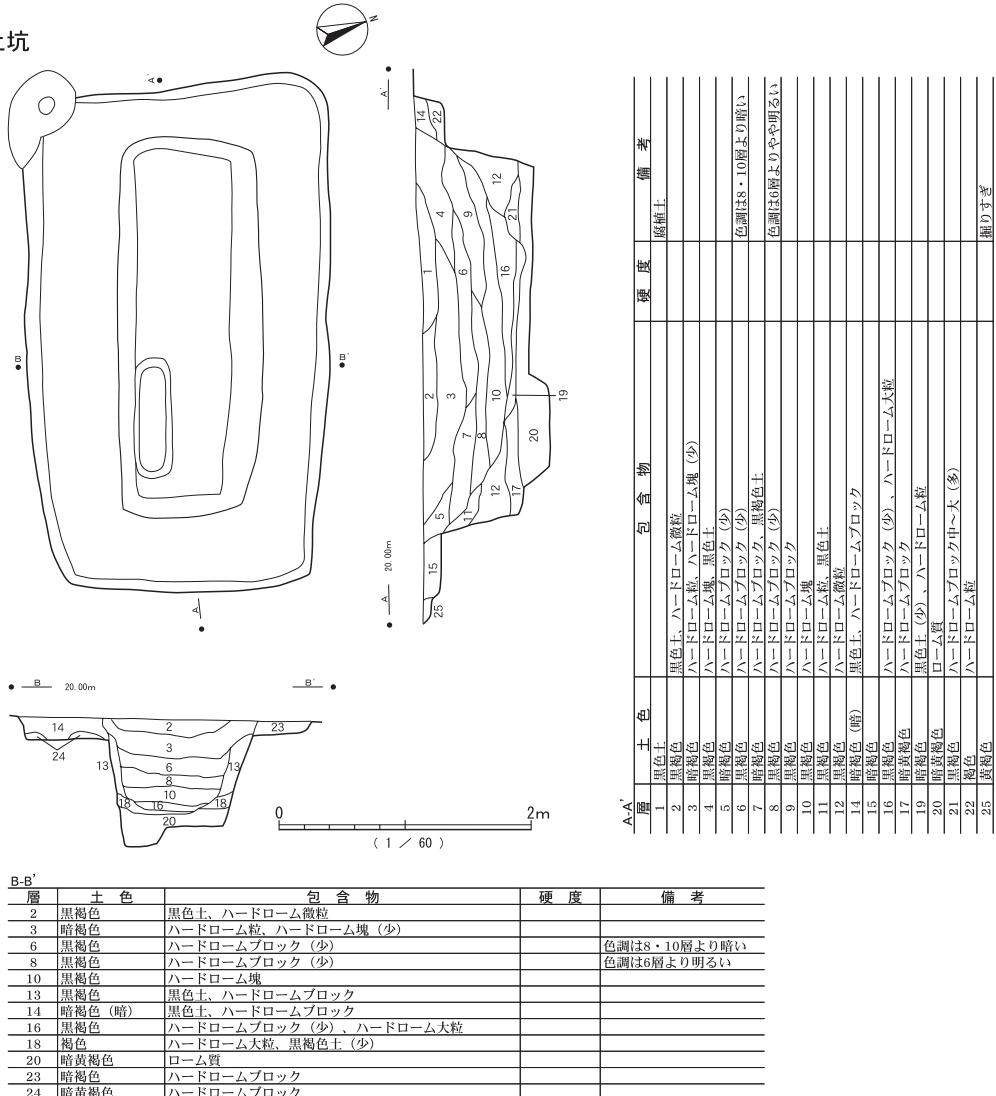
8号土坑



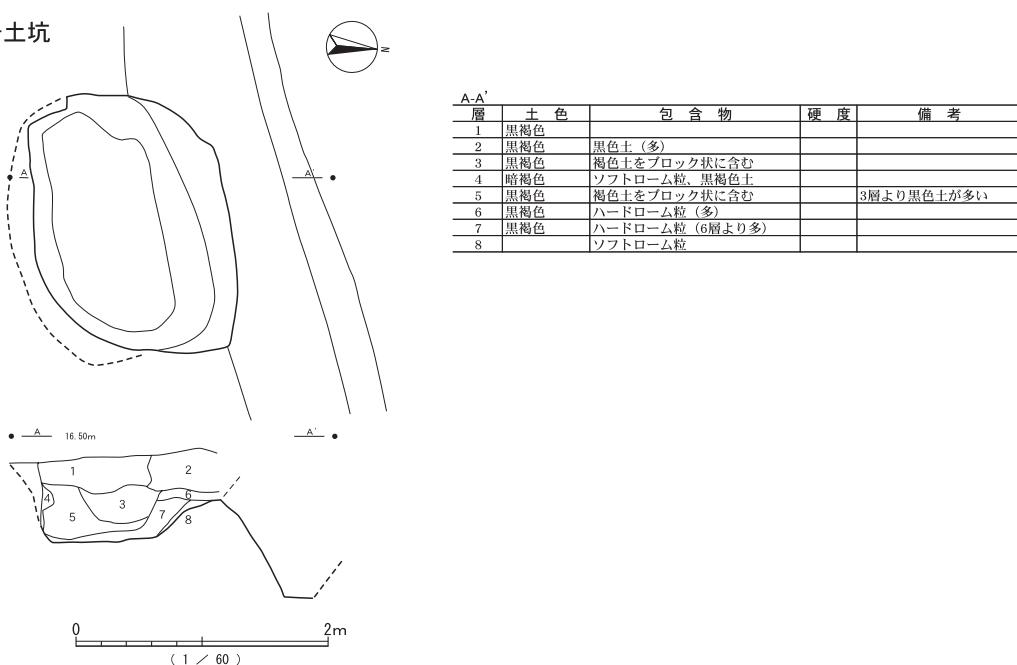
第195図 4号土坑・5号土坑・6号土坑・7号土坑・8号土坑 遺構

遺構と遺物 土坑

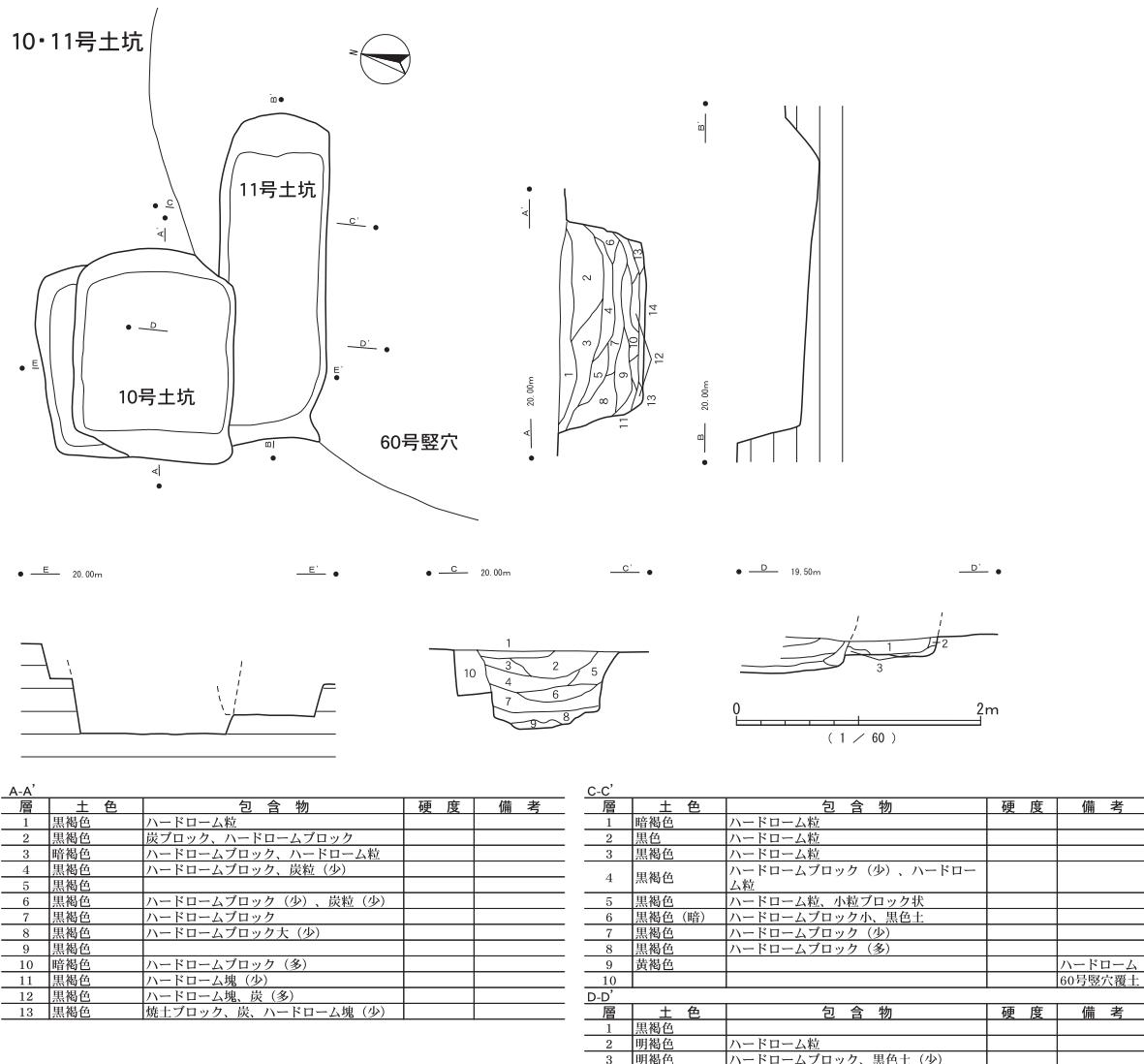
9号土坑



12号土坑



第196図 9号土坑・12号土坑 遺構



第197図 10号土坑・11号土坑 遺構

し、隣接する方墳群とは、主軸をそろえていない。なお、本遺構は、調査概報において、5号木棺墓(MK5)として報告されている。

10号土坑 (第197・198図、図版22)

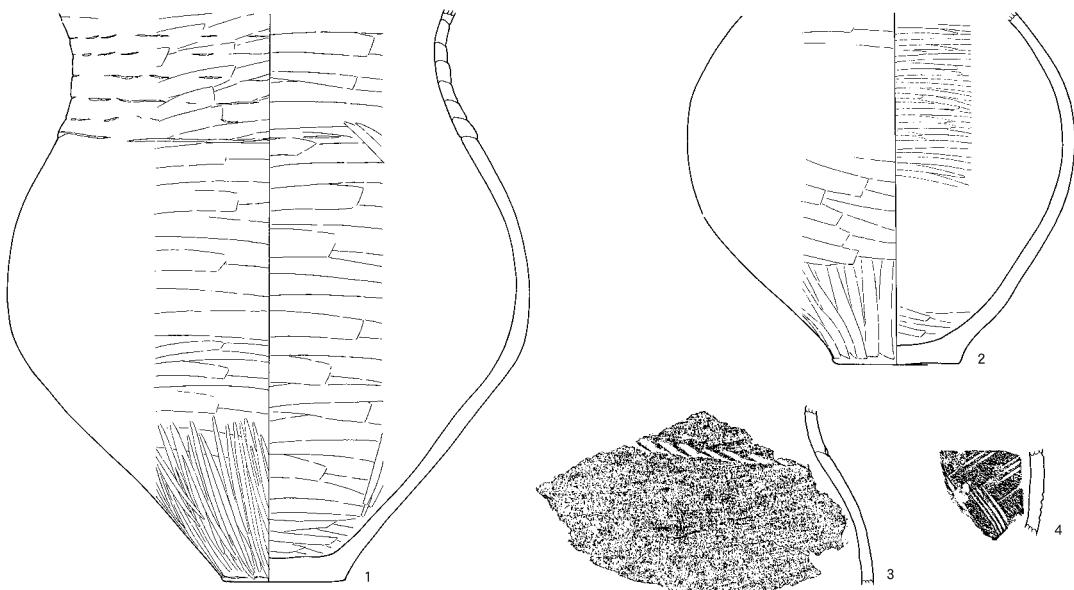
10号土坑は、A地点R7区に所在する。長軸1.72m×短軸1.32mを測る方形を呈するもので、深さは最大70cmほどである。長軸方位はN-99.5°-Wを測る。南東側で60号竖穴と、南側で11号土坑と重複するが、検出状況によれば、本遺構が最も新しい。遺物は出土していない。

11号土坑 (第197・198図、図版22・23)

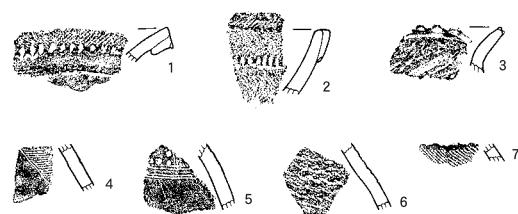
11号土坑は、A地点R7・S7区に所在する。長軸2.66m×短軸0.88mを測る長方形を呈するもので、深さは最大70cmほどである。長軸方位はN-97.5°-Wを測る。北側で60号竖穴、10号土坑と重複するが、検出状況によれば、本遺構は60号竖穴より新しく、10号土坑より古い。遺物は、弥生土器片が若干出土しているが、本遺構に直接ともなうものとは考えにくい。

9・10・11号土坑は、形態が異なるものの近接して存在する。9号土坑と関連するものと考えるならば、10・11号土坑も、終末期方墳群に付帯する墓坑の可能性が想定される。なお、本遺構は、調査概報

1号土坑



3号土坑



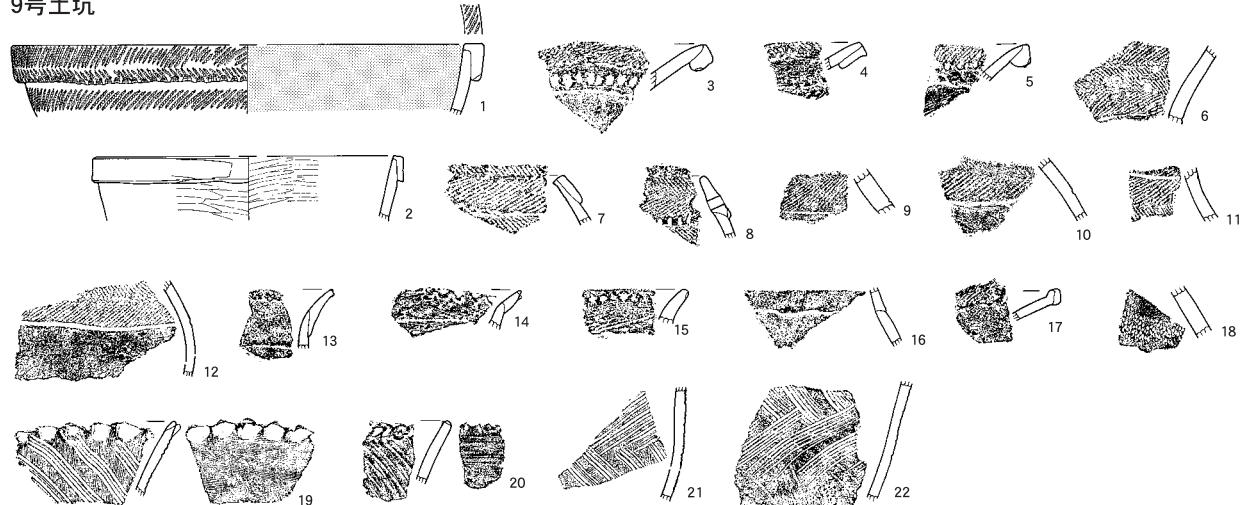
4号土坑



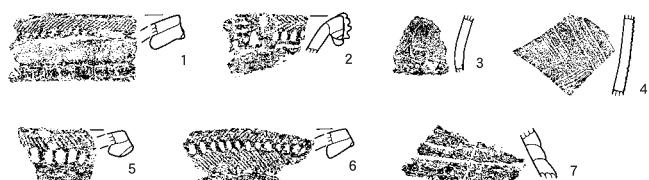
10号土坑



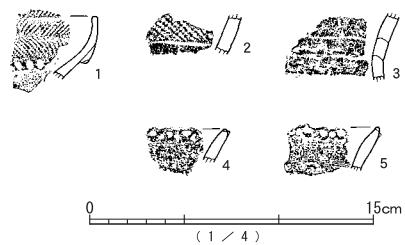
9号土坑



11号土坑



12号土坑



第198図 1号土坑・3号土坑・4号土坑・9号土坑・10号土坑・11号土坑・12号土坑 遺物

において、6号木棺墓(MK6)として報告されている。

12号土坑 (第196・198図、図版23)

12号土坑は、A地点X3区に所在する。長軸2.14m×短軸推定1.74mを測る橿円形を呈するもので、深さは最大70cmほどである。長軸方位はN-67°-Wを測る。北側で環濠と重複するが、検出状況によればこの遺構を掘り込んでつくられている。遺物は、弥生土器片が若干出土しているが、本遺構に直接ともなうものとは考えにくい。

文献

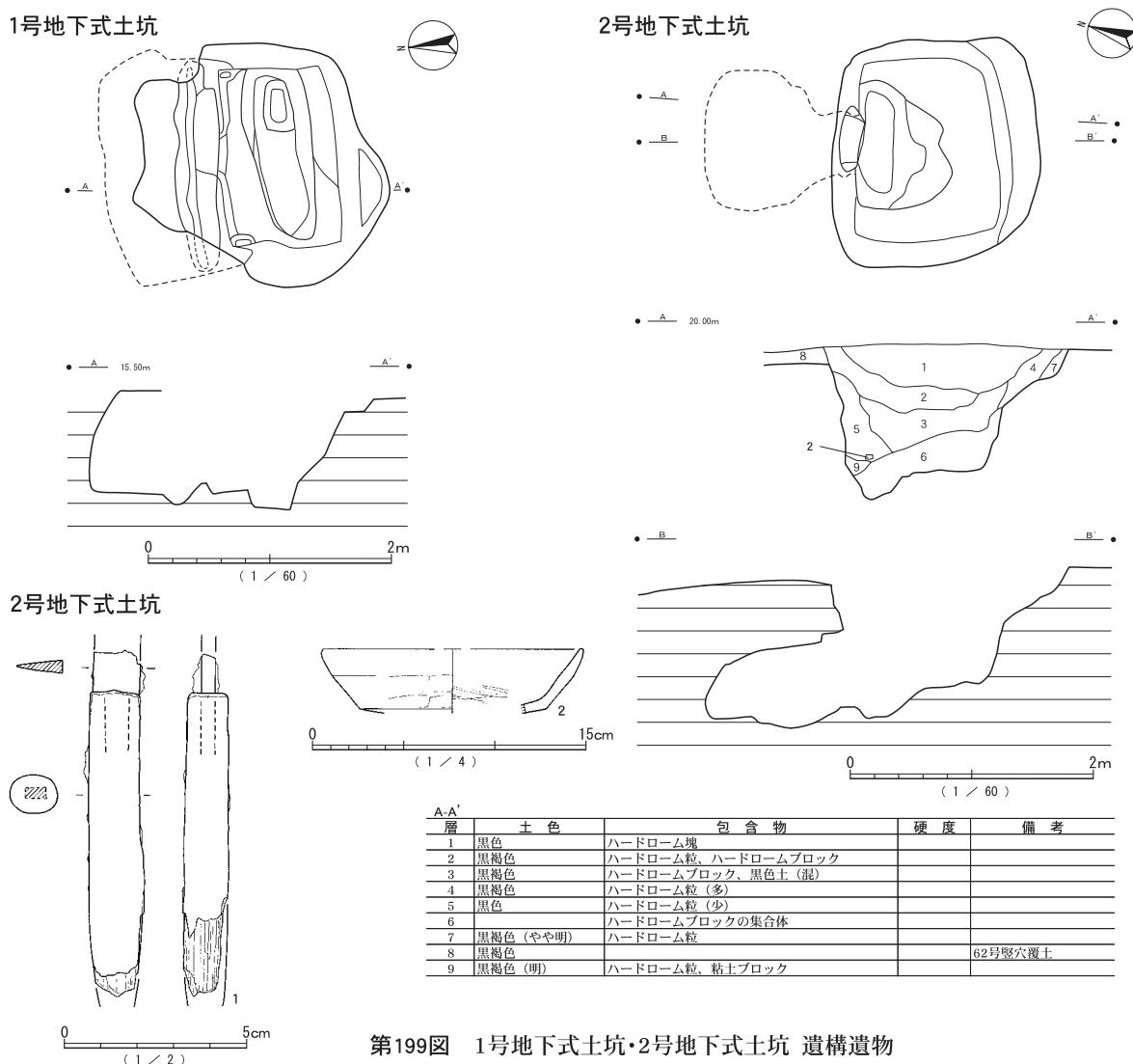
田中新史 1985「古墳時代終末期の地域色 東国の地下式系土壙墓を中心として」『古代探叢』早稲田大学出版部

(5) 地下式土坑

A地点で3基の地下式土坑が検出されている。いずれも、古墳時代終末期末以降奈良時代、根田代10~11期の埋葬遺構と考えられる。

1号地下式土坑 (第199図、図版32)

1号地下式土坑(墓)は、A地点J4区に所在する。29号竪穴の壁面と床面の一部を壊してつくられ



第199図 1号地下式土坑・2号地下式土坑 遺構遺物

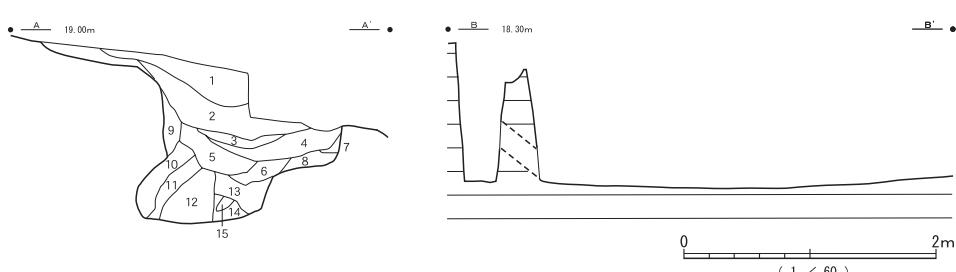
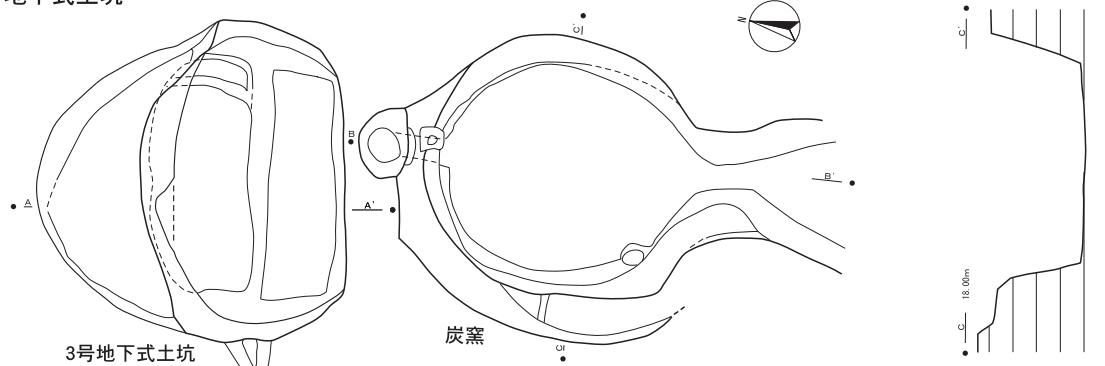
ている。搬入部上面の平面形態は長方形を呈する。墓坑は、北側で一部天井部を残すものの大半は崩落していた。搬入部規模は、上面で長軸2.36m×短軸1.94m、深さは最大1mほどを測る。搬入部の底面は平坦ではなく、東西方向に溝状の段がつく。墓坑は、奥行き0.97m、長軸長1.92mを測る。底面は平坦であるが、搬入部側が溝状となる。入口方向からみた主軸方位は、N-10°-Wを測る。副葬品等遺物は出土していない。

2号地下式土坑（第199図、図版32・33）

2号地下式土坑（墓）は、A地点T8・T9区に所在する。1・3号地下式土坑と比較すると、地下式横穴墓とすべきかもしれない。62号竪穴内にあり、搬入部の竪坑により、竪穴住居の床面の一部は破壊されているが、玄室は床面を天井として残したまま保存されていた。搬入部上面の平面形態は方形であり、南北方向1.70m×東西方向1.80m、深さおよそ1mを測る。この北壁に奥行き1.27m、幅1.15mの玄室がつく。玄室にかけては、凹凸をもちながら30cmほど下がっていく。入口方向からみた主軸方位は、N-15°-Wを測る。埋葬方向は、これにほぼ直交する。

遺物は、鉄製刀子と土師器杯が出土している。刀子は玄室内から出土している。刀子は、平造りで木製の柄が遺存している。X線写真撮影が未了のため、関部形状等詳細は今回報告できない。杯形土器は、8世紀代に比定され、本遺構に関連するものと推定される。竪坑内下層より出土した。

3号地下式土坑



層	土色	包 基 物	硬 度	備 考
1	黒褐色			
2	黒褐色	ハードローム粒（少）		
3	黒褐色	ハードローム粒（多）		
4	黒褐色	褐色土（ブロック状）にハードローム粒を含む		
5	黒褐色	ハードローム粒		
6	黒褐色	ハードローム粒（やや黒い）		
7	黒褐色	ハードローム粒		
8	暗褐色	ソフトローム粒、ソフトローム大粒		
9	暗褐色	ハードローム粒		
10	暗黄褐色	ハードローム粒		
11	暗褐色	褐色土		
12	黄褐色	ハードローム粒		
13	暗褐色	ハードローム粒、黒褐色土	ボソボソ	
14	暗褐色	ハードローム粒、黒褐色土	ボソボソ	
15	黄褐色	ハードローム粒		

第200図 3号地下式土坑・炭窯 遺構

3号地下式土坑（第200図）

3号地下式土坑（墓）は、A地点V4・V5区に所在する。緩斜面部につくられ、斜面側に搬入部を設け、そこから北側に墓坑をつくっている。天井部は一部残存している。搬入部の上面形態は、本来長方形を呈すると推定され、現状で、斜面と垂直方向に1.63m、水平方向に2.58m、搬入部の深さは77cm、奥室の深さは一段下がって1.17mほどを測る。搬入部、墓坑ともに底面はほぼ平らである。墓坑規模は、底面で長軸約1.95mを測る。入口方向からみた主軸方位は、N-10°-Wを測る。埋葬方向は、これにほぼ直交する。副葬品等遺物は出土していない。

なお、3号地下式土坑の南側に隣接して炭窯が検出された。焚き口、煙出しなどの構造から炭窯として利用されたとみられる。斜面側に煙出しの豊孔が設けられ、本体は直径2.4mほどの円形を呈する。深さは最大1.1mほどである。近現代のものと推定される。

（6）粘土採掘坑

発掘調査時点で、弥生時代の粘土採掘を目的とした土坑としてとらえられているものが4基ある。いずれも、掘り込みがローム層下粘土層に達していることによると思われる。現状でその検証は困難であり、性格を固定してしまう遺構名称の使用にはやや躊躇があるが、現場段階での所見を優先することとしたい。また、時代についても、出土土器が特定できなかつたこともあり、明確でないが、一応本節であつかうこととする。

1号粘土採掘坑（第201図、図版10）

1号粘土採掘坑は、A地点K12区に所在する。長軸2.68m×短軸2.42m、深さ最大90cmほどを測る略円形のすり鉢状の土坑である。20号豊穴の床面を掘り込んでつくられている。現場での調査記録によれば、壁面・底面にかけ凹凸が激しく、東側壁面から粘土の塊が検出され、その中から弥生土器片11点が出土しているという。ただし、現状で出土土器等を特定することができない。

2号粘土採掘坑（第201図）

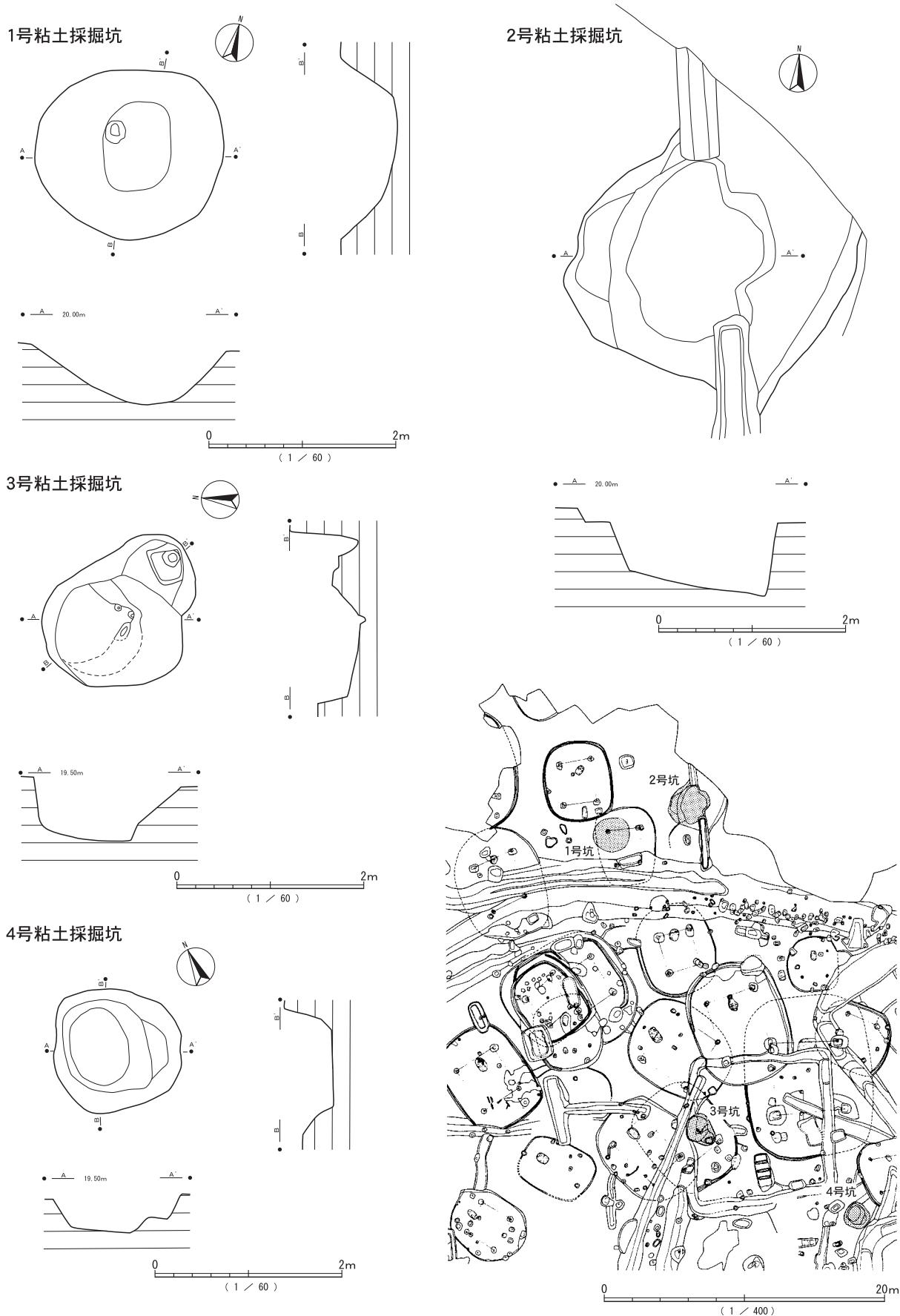
2号粘土採掘坑は、A地点L12区に所在する。長軸4.32m×短軸4.00m、深さ最大1mほどを測る不正円形の土坑である。南側で21号豊穴と一部重複し、この遺構の壁面を壊してつくられている。壁から底面にかけて凹凸が目立ち、覆土上部には黒色土層がのるが、その下は大半がロームブロックであった。出土遺物は確認できない。

3号粘土採掘坑（第201図、図版13）

3号粘土採掘坑は、A地点L7・L8区に所在する。長軸2.44m×短軸1.90m、深さ最大90cmほどを測る不正円形の土坑である。38号豊穴の床面を掘り込んでつくられている。底面は凹凸が目立ち、現場での調査記録によれば、覆土中から黒色の粘土の塊が出土している。出土遺物は確認できない。

4号粘土採掘坑（第201図）

4号粘土採掘坑は、A地点N6区に所在する。長軸1.98m×短軸1.84m、深さ最大70cmほどを測る略円形の土坑である。40号豊穴の床面を掘り込んでつくられている。出土遺物は確認できない。



第201図 1・2・3・4号粘土採掘坑 遺構

遺構と遺物 遺構一覧

地点	No.	遺構	旧No.	挿図	図版	地点	No.	遺構	旧No.	挿図	図版
A	1	竪穴	54	35	7・40・83	A	61	竪穴	64	110	16・78・101
A	2	竪穴	55	36	7・79・83	A	62A	竪穴	不明	111	17
A	3	竪穴	53	37	7・40・41・83	A	62B	竪穴	不明	111	17
A	4	竪穴	56	38・39	7・35・40・77・79・83・84	A	63	竪穴	4	111	17
A	5	竪穴	49	39～44	7・8・40～44・79・84・85	A	64	竪穴	3	112	17・101
A	6	竪穴	48	45	8・44・78・85	A	65	竪穴	6	113	17・53・79・101
A	7	竪穴	47	46・47	8・9・44・85	A	66	竪穴	12	114	17
A	8	竪穴	51	47	9・45・85	A	67	竪穴	5	114	18・101
A	9	竪穴	52	47	9	A	68	竪穴	1	115	17・53・77・101・102
A	10	竪穴	50	48	9	A	69	竪穴	2	116	18・78・102
A	11	竪穴	58	48・49	9・45・78・85・86	A	70	竪穴	13	116	18・102
A	12	竪穴	57	50	9	A	71	竪穴	66	117	18・54・102
A	13	竪穴	59	50・51	9・78・86	A	72	竪穴	67	118・119	18・54・102・103
A	14	竪穴	60	50・51	9・45・78・86	A	73	竪穴	68	118・119	108・54・102・103
A	15	竪穴	62	50・51	9・45	A	74	竪穴	69	119・120	18・103
A	16	竪穴	30B	52	10・46・86	A	75	竪穴	70	120	18
A	17	竪穴	46	53	10・46・86	A	76	竪穴	71	119・120	18・54・103
A	18	竪穴	30	52・53	10・86	A	77	竪穴	72	121	19
A	19	竪穴	45	54・55	10・46・78・86	A	78	竪穴	73	121	19
A	20	竪穴	29	55・56	10・46・78・87	B	79	竪穴	7	122・123	19・54・55
A	21	竪穴	29B	57	10・87	B	80	竪穴	6	122～124	19・55・56・103
A	22A	竪穴	40A	58～62	10・11・35・47・77・88	B	81	竪穴	8	125	19・56・57
A	22B	竪穴	40B	58～62	46・88	B	82	竪穴	3	126	19・57・103
A	22C	竪穴	40B	58～62	46・79・88	B	83	竪穴	5	127	19
A	23A	竪穴	38	58・59・63・64	10・47・88・89	B	84	竪穴	4	127	20・57
A	23B	竪穴	38B	58・59・63・64	10・47・88・89	B	85	竪穴	2	126	20・35・77・104
A	24	竪穴	39	58・59・64～66	10・47・48・89・90	B	86	竪穴	1	128・129	20・57・104
A	25	竪穴	42	67・68	10・11・90	B	87	竪穴	-	130・131	57・58
A	26	竪穴	41	69	11・48・90	B	88A	竪穴	落込	132・133	20・104
A	27	竪穴	43	68・70	11・91	B	88B	竪穴	落込	132・133	20・104
A	28	竪穴	44	70・71	11・48・91	B	88C	竪穴	落込	132・133	20・104
A	29A	竪穴	61A	72・73	7・8・11・49・91	A		環濠		135・138～161・ 165・166	4～6・23～26・35・59・61・65・ 66・68～70・77～79・104～115
A	29B	竪穴	61B	72・73	7・8・11・49・91					136・137・161～166	24・25・70・78・79・115
A	30	竪穴	63	71	11	B		環濠			
A	31	竪穴	28	73・74	12・49・91・92	A	1	溝	2	167	23・72
A	32	竪穴	27	75	12・49・92	A	2	古墳	2	168・169	26・27・72・73
A	33	竪穴	25	76・77	12・49・92・93	A	3	古墳	3	170・171	27・38・74
A	34	竪穴	24	78	12・93	B	4	古墳	1	172	27・73
A	35	竪穴	26	79～81	12・13・49・50・78・79・93・94	A	5	古墳	B-1	173～182	28～30・74・79・81
A	36	竪穴	18	82・83	13・79・94	A	6	古墳	4	183～187	30・36～39・80
A	37	竪穴	31	84・86	13・94	A	7	古墳	5	187～189	31・36・37・39・74・80
A	38	竪穴	32	85・86	13・78・95	A	8	古墳	6	187・190～192	31・32・36・37・39・74
A	39	竪穴	37	87	14	A	9	古墳	-	193	32
A	40	竪穴	17	87	14	A	1	土坑	G-E6	194・198	21・72
A	41	竪穴	65	88・89	14・50・78・79・95・96	A	2	土坑	7	194	21
A	42A	竪穴	35A	90・92	14・96	A	3	土坑	6	194・198	21・22
A	42B	竪穴	35B	90・92	96	A	4	土坑	5	195・198	22
A	43	竪穴	36	91・92	14・96	A	5	土坑	-	195	11
A	44	竪穴	34	92	14	A	6	土坑	-	195	11
A	45	竪穴	23	93	14・50・78・96	A	7	土坑	-	195	11
A	46	竪穴	19	94	14・96	A	8	土坑	-	195	11
A	47	竪穴	20	94～97	15・51・78・96・97	A	9	土坑	2	196・198	22
A	48A	竪穴	21A	97・98	15・51・97	A	10	土坑	1	197・198	22
A	48B	竪穴	21B	97・98	15・51・97	A	11	土坑	3	197・198	22・23
A	49	竪穴	22	97・99	15・97・98	A	12	土坑	G-X3	196・198	23
A	50	竪穴	21C	99	15	A	1	地下式	2	199	32
A	51	竪穴	16	100・101	15・51・52・98・99	A	2	地下式	1	199	32・33
A	52	竪穴	9	102	16・52・99	A	3	地下式	5	200	
A	53	竪穴	8	102・103	16・52・53・99	A	1	探査坑	-	201	10
A	54	竪穴	10	102・103	16・53・99	A	2	探査坑	-	201	10
A	55	竪穴	14B	104・105	16・99	A	3	探査坑	-	201	13
A	56	竪穴	14A	104・105	16・99	A	4	探査坑	-	201	
A	57	竪穴	15	104・105	16・53・79・99	A	1	道路	-	203	33・34
A	58	竪穴	33	106	16・99・100	A	2	道路	-	203	4・6
A	59	竪穴	11	106・107	16・53・100	A		土手	-	202	33
A	60	竪穴	7	108・109	16・53・78・100・101	A		旧石器遺物集中地点		14～31	34・75・76

第3表 根田代遺跡遺構一覧

地点	遺構 No.	種別	主体部	調査No.	挿図	時期	Grid	掘形方位	N-	掘形主軸	掘形副軸	木棺主軸	備 考	
A	6	古墳			183～187	10	M7	23.5	W	2.35	1.25	1.85		
A	7	古墳	1号主		187～189	10	U6	14.0	W	2.75	1.25			
A	7	古墳	2号主		187～189	10	V8	108.0	W	2.15	0.65			
A	8	古墳			187・190～192	10	X6	21.0	W	2.60	1.25	2.00		
A	9	古墳			193	10	E6	20.0	W	2.05	0.80			
A	1	土坑		G-E6	194・198	3	E6	41.5	W	(2.58)	0.90		5号竪穴と重複。竪穴より新。覆土内に土器を据え置いたような状況。	
A	2	土坑(木棺墓)			7	194	-	I9	38.0	W	2.35	1.08	1.80	25号竪穴と重複。竪穴より新。刀子1。
A	3	土坑(木棺墓)			6	194・198	-	J8	29.0	W	2.50	1.98	(1.80)	22・24号竪穴と重複。竪穴より新。
A	4	土坑(木棺墓)			5	195・198	-	J9	30.0	W	2.10	0.94	(2.05)	22号竪穴と重複。竪穴より新しい。人骨残存。
A	5	土坑			-	195	-	I3	92.5	W	2.50	1.23		30号竪穴と重複。
A	6	土坑			-	195	-	J3	95.5	W	2.88	1.40		
A	7	土坑			-	195	-	K3	86.0	W	1.70	(1.27)		30号竪穴と重複。竪穴より新。
A	8	土坑			-	195	-	K2	105.5	W	2.00	0.78		
A	9	土坑			2	196・198	10	S7	72.5	W	4.00	2.42	3.02	天井板の受け部をもつ2段式の掘形。
A	10	土坑			1	197・198	-	R7	99.5	W	1.72	1.32		60号竪穴・11号土坑と重複。本土坑が新。
A	11	土坑			3	197・198	-	R7	97.5	W	2.66	0.88		60号竪穴と重複。竪穴より新。
A	12	土坑	G-X3	196・198	-	X3	67.0	W	2.14	(1.74)			環濠と重複。環濠より新。	

数値()表示は推定値、(+)表示は現存値を示す。

第4表 根田代遺跡土坑・埋葬遺構一覧

遺構と遺物 遺構一覧

地点	遺構No.	調査No.	揮図	時期	Grid	主軸長	副軸長	柱間主軸	柱間副軸	掘形面積	床面積	床面標高	壁高
A	1	54	35	1	C6	(7.40)	(6.68)	3.10	3.42	(42.78)	(38.93)	17.957	0.20
A	2	55	36	3	B5	(6.30)	(5.43)	2.82	2.82	(27.39)	(25.10)	16.957	0.70
A	3	53	37	2	D6	(5.44 +)	(5.07)					17.772	0.50
A	4	56	38・39	1	B4	(5.85)	(4.42)	2.60	2.05	(22.20)	(19.71)	16.150	0.30
A	5	49	39～44	1	E7	7.18	6.04	3.20	3.14	36.96	34.12	18.499	0.65
A	6	48	45	(3)	G7	6.42	5.22	2.60	2.54	27.95	24.58	19.040	0.30
A	7	47	46・47	2	G8	7.18	(6.04)	3.57	3.28	(37.12)	(35.06)	19.120	0.30
A	8	51	47	3	G5	(4.52)	(4.28)			(15.57)	(13.90)	17.847	0.50
A	9	52	47	3	G5							18.087	0.30
A	10	50	48	(3～4)	H5	(3.88 +)	(4.18 +)					18.197	0.50
A	11	58	48・49	1	E3	(5.82)	(4.78)	2.76	2.24	(25.38)	(22.85)	16.151	0.60
A	12	57	50	(1)	E3	4.04	(3.40)			(11.37)	(10.07)	15.591	0.45
A	13	59	50・51	(1～2)	G3	(5.47)	(4.74)	2.68	2.32	(22.10)	(19.36)	15.909	0.60
A	14	60	50・51	1	G3	(4.36)	(3.00 +)					16.114	0.65
A	15	62	50・51	1	H3	2.20	(1.90)			(2.85)	(2.14)	16.454	0.45
A	16	30B	52	3	I13							19.377	0.10
A	17	46	53	(弥生)	I12	(8.35 +)						19.107	0.40
A	18	30	52・53	(1)	J12	5.75	4.96	3.12	2.37	24.55	23.40	19.227	0.40
A	19	45	54・55	1	I11	(8.00)	(6.18)	3.40	3.00	(42.14)	(39.70)	19.382	0.40
A	20	29	55・56	2	K12	(5.56)	(4.24)	2.50	2.44	(20.35)	(19.96)	19.467	0.20
A	21	29B	57	(4)	L12							19.602	0.05
A	22A	40A	58～62	1	J9	5.52	4.52	2.48	2.16	(22.59)	(21.19)	19.219	0.45
A	22B	40B	58～62	1	J10							19.219	0.25
A	22C	40B	58～62	2	I9	6.37	(5.46)	3.02	2.96	(30.59)	(28.70)	19.339	0.35
A	23A	38	58・59・63・64	(2～3)	K10	(6.10)	(5.12)	3.13	2.92	(27.66)	(26.08)	19.444	0.10
A	23B建替	38B	58・59・63・64	(2～3)	K9	(8.10)						19.429	0.10
A	24	39	58・59・64～66	3	J9	(5.35)	(4.78)	2.44	2.61	(21.78)	(19.60)	19.309	0.30
A	25	42	67・68	1	I8	7.62	5.82	3.45	3.03	40.11	37.72	19.341	0.25
A	26	41	69	2	K8							19.586	0.08
A	27	43	68・70	(1～3)	J7	5.32	3.90			(18.45)	(17.30)	19.291	0.20
A	28	44	70・71	2	I6	5.62	4.62	2.42	2.54	21.54	19.89	19.040	0.30
A	29A	61A	72・73	1	J4	5.62	(4.80)	2.55	2.32	(24.41)	(20.82)	17.895	0.65
A	29B	61B	72・73	1	I4	(4.28)	(4.36)	1.98	2.18	(17.10)	(16.60)	17.835	0.30
A	30	63	71	(2～3)	J3							16.565	0.40
A	31	28	73・74	1	L10	(6.50)	5.45	2.78	2.42	(30.53)	(28.62)	19.382	0.20
A	32	27	75	3	K9	7.52	(5.97)	4.00	4.14	(38.61)	(36.74)	19.316	0.25
A	33	25	76・77	1	M9	8.78	6.92	4.54	3.50	53.03	50.02	19.161	0.25
A	34	24	78	3	N10	3.95	(3.64)	1.28	1.28	(12.39)	(11.55)	19.318	0.15
A	35	26	79～81	3	M8	(11.63)	(9.10)	4.78	4.87	(95.87)	(93.16)	19.428	0.15
A	36	18	82・83	(弥生)	N9	(5.40)	(4.71)	2.60	2.68	(21.95)	(20.60)	19.428	0.35
A	37	31	84・86	1	K7	(7.58)	6.20	3.98	2.97	(39.15)	(36.73)	19.250	0.25
A	38	32	85・86	1	L7	(7.56)	(5.92)	3.47	3.12	(40.27)	(38.51)	19.325	0.25
A	39	37	87	(弥生)	K6							19.005	0.20
A	40	17	87	(弥生)	N6			4.00	3.80			19.238	0.30
A	41	65	88・89	1	L4	(5.90)	5.17	2.64	2.20	(26.86)	(25.34)	17.480	0.75
A	42A	35A	90・92	1	N4	(6.25)	(5.50)	3.22	2.48	(30.96)	(28.76)	17.810	0.10
A	42B	35B	90・92	(弥生)	M4			3.18	2.70			17.955	0.10
A	43	36	91・92	(2)	N3	5.20	(5.97)	2.54	2.54	(27.51)	(26.05)	17.640	0.20
A	44	34	92	1	O4	(2.98)	3.25			(8.57)	(7.82)	17.441	0.65
A	45	23	93	5	O10							19.478	0.20
A	46	19	94	1	O9	(3.78)	3.52			(11.96)	(10.92)	19.658	0.20
A	47	20	94～97	1	O9	4.18	3.62			15.73		19.468	0.45
A	48A	21A	97・98	1	P8	6.66	5.48	3.04	3.00	(32.00)	(30.44)	19.648	0.15
A	48B建替	21B	97・98	1	P9	6.88	6.48			(40.68)	(38.62)	19.648	0.15
A	49	22	97・99	4	P9							19.768	
A	50	21C	99	(3～5)	O8	(5.72)	(5.28)	2.87	3.00	(25.90)	(24.37)	19.618	0.10
A	51	16	100・101	3	O7	(4.88)	4.52	2.26	2.52	(19.36)	(17.70)	19.173	0.30
A	52	9	102	4	Q7	(6.10)	(5.84)	2.82	3.34	(31.83)	(29.69)	19.220	0.40
A	53	8	102・103	(4)	Q7	4.08	(3.76)			(13.54)	(12.19)	19.210	0.40
A	54	10	102・103	3	Q6	(3.72)	3.40			(11.88)	(10.52)	19.150	0.40
A	55	14B	104・105	(弥生)	P6	(5.85 +)	(2.61 +)	3.55				19.356	0.10

第5表 根田代遺跡竪穴住居跡一覧(1)

遺構と遺物 遺構一覧

()											
遺構No.	主軸方位	N-	竪穴平面	主柱穴	炉	貯藏穴	壁溝	重複(古)	重複(新)	重複(不明)	他遺物
1	23.5	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○		2・3号竪穴		
2	33.0	W	楕円形	○	○	○	○	1・3号竪穴			有孔土製円盤1
3	78.5	W	楕円形	×	○	○	○	1号竪穴	2号竪穴		
4	126.0	W	隅丸長方形	○	○	○	○				磨製石斧1、砥石2、土製円盤1
5	23.0	W	楕円形	○	○	○	○		1号土坑、9号墳		土玉1
6	61.0	W	楕円形	○	○	△	○	7号竪穴	9号墳		軽石製品(磨石)1
7	57.0	W	楕円形	○	○	○	×		6号竪穴、9号墳		
8	74.0	W	楕円形	×	○	—	○		9号墳	9号竪穴	
9				—	—	—	×		9号墳	8号竪穴	
10	67.5	W	胴張り隅丸方形	×	○	△	×				
11	93.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	△	○			12号竪穴	軽石製品(磨石)1
12	68.0	(W)	楕円形	×	—	○	○			11号竪穴	
13	86.5	W	楕円形	○	○	○	○			14号竪穴	(砥石1)
14	87.0	(W)	隅丸長方形	×	—	—	○	15号竪穴		13号竪穴	(砥石1)
15			円形	×	×	×	×		14号竪穴		
16				—	—	—	×				
17	18.0	(W)	楕円形	○	—	△	○				
18	19.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○		20号竪穴		
19	36.0	W	楕円形	○	○	○	○				砥石(台石)1
20	17.0	W	胴張り隅丸長方形	○	—	—	×	18号竪穴	1号粘土採掘坑		砥石(台石)2
21	25.5	(W)	楕円形	×	○	—	×		2号粘土採掘坑		
22A	59.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	△	○		23・24号竪穴、3・4号土坑		(磨製石斧3)
22B				—	—	△	○		23・24号竪穴、3・4号土坑		
22C	59.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	△	×		23・24号竪穴、3・4号土坑		土製紡錘車1
23A	45.0	W	楕円形	○	○	×	○	22号竪穴	24号竪穴、4号土坑		
23B建替	45.0	W	楕円形	△	△	×	×				貝ブロック
24	30.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○	22・23・26号竪穴	3・4号土坑		
25	45.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○		2号土坑		
26				—	—	—	×		24号竪穴		
27	76.0	W	胴張り隅丸長方形	×	○	×	×				
28	71.0	W	楕円形	○	○	○	×				
29A	96.0	W	隅丸長方形	○	○	—	○		1号地下式土坑		(磨石1)
29B	13.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	—	○		1号地下式土坑		(磨石1)
30				—	—	—	○		7号土坑		
31	29.0	W	楕円形	○	○	—	○	33号竪穴			貝ブロック
32	67.0	W	楕円形	○	○	—	×	33号竪穴	6号墳		
33	31.0	W	楕円形	○	○	○	○		31・32・35号竪穴、6号墳		
34	14.0	W	楕円形	△	○	○	×		3号墳		
35	17.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	△	○	33号竪穴	3・6号墳	36号竪穴	磨石1
36	79.5	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○	46号竪穴	3・6号墳	35号竪穴	土製円盤1
37	54.5	W	楕円形	○	○	×	×		38号竪穴、6号墳、3号粘土採掘坑		
38	51.0	W	隅丸長方形・胴張り隅丸長方形	○	○	○	○	37号竪穴	6号墳、3号粘土採掘坑		砥石2
39				—	—	—	—				
40	28.0	(W)	楕円形・胴張り隅丸長方形	○	○	—	○		2・6号墳、4号粘土採掘坑		
41	39.5	W	隅丸長方形・胴張り隅丸長方形	○	○	○	○				磨・敲石1、土製円盤1
42A	98.0	W	楕円形・胴張り隅丸長方形	○	○	—	×		43号竪穴・2号墳		
42B	98.0	W	楕円形・胴張り隅丸長方形	○	—	—	×		43号竪穴・2号墳		
43	106.0	W	胴張り隅丸方形	○	—	△	○	42号竪穴			
44	17.5	W	胴張り隅丸方形	×	○	△	×		2号墳		
45				—	—	—	×		3号墳		砥石1
46	48.0	W	胴張り隅丸方形	○	○	—	×	48・47号竪穴	36号竪穴、3号墳		
47	92.0	W	隅丸方形	○	○	×	○	48号竪穴	46号竪穴、3号墳		敲石1、貝ブロック
48A	36.5	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○		46・47・49・50号竪穴、3号墳		
48B建替	36.5	W	楕円形	○	○	○	○		46・47・49・50号竪穴、3号墳		台石1
49				—	○	—	—	48号竪穴	3号墳		
50	68.0	W	胴張り隅丸長方形・楕円形	○	○	○	○	48号竪穴	3号墳	51号竪穴	
51	29.5	W	胴張り隅丸長方形	○	○	×	○		3号墳	50号竪穴	
52	42.0	W	隅丸方形	○	○	—	×	54号竪穴	2号墳	53号竪穴	
53	33.0	W	隅丸方形	×	○	—	○	54号竪穴	2号墳	52号竪穴	
54	15.0	W	隅丸方形	×	○	—	×		52・53号竪穴、2号墳		
55	96.0	(W)	楕円形	○	—	—	×		2号墳	56・57号竪穴	

数値()表示は推定値、(+)表示は現存値を示す。

遺構と遺物 遺構一覧

地点	遺構No.	調査No.	挿図	時期	Grid	主軸長	副軸長	柱間主軸	柱間副軸	掘形面積	床面積	床面標高	壁高
A	55	14B	104・105	(弥生)	P6	(5.85 +)	(2.61 +)	3.55				19.356	0.10
A	56	14A	104・105	5	P6	3.44	(3.36)			(10.69)	(9.84)	19.191	0.35
A	57	15	104・105	4	P5	3.02	2.96			7.18	6.51	19.106	0.20
A	58	33	106	(3)	P5	4.32	(4.29)			(16.76)	(13.70)	18.891	0.40
A	59	11	106・107	2	Q5	4.95	(4.08)	1.98	1.86	(16.43)	(14.47)	18.721	0.65
A	60	7	108・109	4	S6	(7.26)	6.26	3.32	3.56	39.31	37.74	18.610	0.35
A	61	64	110	1	S4	(3.92)	(4.13)					18.505	0.40
A	62A	不明	111	(5)	T9		(4.25)					19.613	0.20
A	62B	不明	111	(5)	U9							19.613	
A	63	4	111	4	U9	(3.88)	3.80			(13.17)	(12.02)	19.308	0.30
A	64	3	112	3	V8	(9.10)	(7.62)	4.20	4.62	(59.09)	(56.78)	19.468	0.15
A	65	6	113	5	T6	4.67	4.30	2.44	2.27	16.62	15.46	19.068	0.40
A	66	12	114	(弥生)	U5	(3.50)	3.77			(11.77)	(10.67)	18.998	0.30
A	67	5	114	4	V6	(5.48 +)	5.32	3.40	3.64			19.018	0.20
A	68	1	115	4	W8	5.22	(4.28)	2.78	2.60	19.56	18.43	19.468	0.20
A	69	2	116	(5)	W7	(1.58 +)	(3.40 +)					19.391	0.15
A	70	13	116	1	W6	(5.48)	(5.30)	2.96	3.12	(23.27)	(21.79)	19.081	0.10
A	71	66	117	5	X5	4.86	(4.82)	2.64	2.48	(20.67)	(19.22)	18.650	0.40
A	72	67	118・119	1	X6	(5.60)	(4.34)	2.18	1.98	(22.01)	(18.76)	19.131	0.15
A	73	68	118・119	(1)	Y7	(6.70)	5.80	3.00	3.27	(35.22)	(33.32)	18.999	0.05
A	74	69	119・120	4	Z7							19.089	0.00
A	75	70	120	(弥生)	Z7	(7.80)	(6.26)	3.19	3.00	(42.65)	(38.37)	18.949	0.25
A	76	71	119・120	4	a7	(7.78)	(6.22)	3.40	3.28	(42.67)	(40.26)	19.009	0.30
A	77	72	121	(弥生)	c7							19.074	0.10
A	78	73	121	(弥生)	c6	(2.48 +)	(4.05 +)	2.00	2.54			18.899	0.20
B	79	7	122・123	6	G8							18.930	0.20
B	80	6	122・124	6	F7	(7.46)	(6.50)			(45.87)	(42.81)	18.930	0.30
B	81	8	125	(6~7)	E9	(4.92)	(4.78)			(22.78)	(20.71)	18.940	
B	82	3	126	7	F10	5.30	(5.26)			(26.60)	(25.25)	19.110	0.20
B	83	5	127	(弥生)	G10	(3.80)	(3.30)			(10.35)	(9.17)	18.800	0.20
B	84	4	127	(6~7)	F11	(4.92)	(5.68)			(27.01)	(24.91)	18.900	0.10
B	85	2	126	(1)	F10							19.120	0.10
B	86	1	128・129	(7~8)	B6	6.80	(7.52)			(50.50)	(48.56)	18.630	0.15
B	87	—	130・131	8	D5							18.290	
B	88A	落ち込み	132・133	—	B4	(13.40 +)						16.710	1.30
B	88B	落ち込み	132・133	—	B2	(6.10 +)						16.840	0.50
B	88C	落ち込み	132・133	—	D4	(6.90 +)						16.600	0.80

第5表 根田代遺跡堅穴住居跡一覧(2)

地点	遺構No.	種別	調査No.	連番	挿図	時期	Grid	長軸方位	N-	長軸外径	長軸墳丘	長軸内径	短軸外径	短軸墳丘
A	2	方墳	2	281	168・169	7	P5	14.0	W	17.20	13.95	13.15		(13.50)
A	3	方墳	3	282	170・171	8	P9	44.0	E	16.56	13.70	13.10	17.00	12.58
A	4	方墳	1	283	172	8	U7	27.0	E	10.55	8.93	8.45	10.38	8.70
B	5	円墳	B-1	284	173~182	9	F7			22.60	17.80	17.05		
A	6	方墳	4	285	183~187	10	M7	11.5	W	11.40	9.88	9.52	(10.70)	(9.42)
A	7	方墳	5	286	187~189	10	U6	71.5	E	(13.25)		(11.20)	12.90	11.07
A	8	方墳	6	287	187・190~192	10	X6	18.0	W	11.95	10.45	9.95	(11.50)	
A	9	方墳	—		193	10	F6	21.0	W	(13.80)				

第6表 根田古墳群一覧

地点	遺構No.	種別	調査No.	挿図	時期	Grid	入口方位	N-	堅坑長軸	掘形短軸	堅坑長軸	堅坑短軸	備考	
A	1	地下式土坑	2	199	11	J4	10.0	W	2.36	1.94	1.92	0.97	29号堅穴内。堅穴より新。	
A	2	地下式土坑	1	199	11	T9	15.0	W	1.8	1.7	1.27	1.15	地下式横穴墓。62号堅穴内。堅穴より新。刀子1、土師器杯出土。	
A	3	地下式土坑	5	200	11	V5	10.0	W	2.58	1.63	1.95	0.90	遺物なし。	

第7表 根田代遺跡地下式土坑一覧

遺構と遺物 遺構一覧

()												
遺構No.	主軸方位	N-	竪穴平面	主柱穴	炉	貯蔵穴	壁溝	重複(古)	重複(新)	重複(不明)	他遺物	
55	96.0	(W)	楕円形	○	—	—	×	58号竪穴		2号墳	56・57号竪穴	
56	56.0	W	胴張り隅丸方形	×	○	×	×	58号竪穴		2号墳	55号竪穴	
57	58.5	W	隅丸長方形	×	○	×	×	58号竪穴		2号墳	55号竪穴	
58	72.5	(W)	円形	×	○	○	×	56号竪穴、2号墳		2号墳	赤色顔料	
59	77.0	W	楕円形	○	○	○	○	2号墳		2号墳		
60	49.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	○	10・11号土坑		10・11号土坑	砥石1	
61	91.0	(W)	円形	×	○	—	×	62号地下式土坑		62号地下式土坑	凹石1	
62A	21.0	W	隅丸方形	×	○	—	○	62号地下式土坑		62号地下式土坑		
62B				×	—	—	○	62号地下式土坑		62号地下式土坑		
63	9.5	W	胴張り隅丸方形	×	○	—	×	4号墳		4号墳		
64	46.0	W	楕円形	○	○	—	○	67号竪穴、4・7号墳		67号竪穴、4・7号墳	石鎌1(縄文時代)	
65	55.0	E	隅丸長方形	○	○	○	○	4・7号墳		4・7号墳	紡錘車1	
66	13.5	E	隅丸長方形	×	○	—	×	7号墳		7号墳		
67	19.5	W	胴張り隅丸長方形	○	○	—	○	64号竪穴		64号竪穴		
68	50.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	×	○	7号墳		7号墳	敲・磨石1	
69	33.0	W	楕円形	×	○	—	○	70号竪穴		70号竪穴	砥石1	
70	33.0	W	楕円形	○	○	○	○	69号竪穴、8号墳		69号竪穴、8号墳		
71	116.0	W	胴張り隅丸方形	○	○	○	○	8号墳		8号墳		
72	33.5	W	隅丸方形	○	○	○	○	73号竪穴、8号墳		73号竪穴、8号墳		
73	12.0	W	胴張り隅丸長方形	○	○	○	×	72号竪穴		72号竪穴		
74	49.0	(W)		○	—	○	—	73号竪穴		73号竪穴	75・76号竪穴	
75	38.0	W	楕円形	○	○	○	○	8号墳		8号墳		
76	38.0	W	楕円形	○	○	○	○	74・75号竪穴		74・75号竪穴		
77				×	—	—	×	78号竪穴		78号竪穴		
78	17.0	W	楕円形	○	○	—	○	77号竪穴		77号竪穴		
79	46.0	W		×	○	—	○	5号墳		5号墳	80号竪穴	
80	46.0	W	隅丸長方形	○	○	○	○	80号竪穴		80号竪穴		
81	39.0	W	隅丸方形	×	○	—	×	80号竪穴		80号竪穴		
82	57.5	W	隅丸方形	×	○	—	○	81・85号竪穴		81・85号竪穴		
83				楕円形	×	—	—	82号竪穴		82号竪穴	小形柱状片刃石斧1	
84	54.0	W	隅丸方形	○	○	—	○	82号竪穴		82号竪穴		
85				楕円形	×	—	—	87号竪穴		87号竪穴		
86	32.5	W	隅丸方形	○	—	○	○	86号竪穴		86号竪穴		
87					—	—	—	環濠		環濠		
88A					—	—	—	環濠		環濠		
88B					—	—	—	環濠		環濠		
88C					—	—	—	環濠		環濠		

数値()表示は推定値、(+)表示は現存値を示す。

遺構No.	種別	短軸内径	(m)	盛土高	(m)	周溝幅	(m)	深さ	(m)	埋葬施設	遺物	重複遺構	備考
2	方墳	(12.80)		削平	2.30～2.00	1.20				土師器(甕2、壺2、壠4、鉢2、結合器台1他)	40・42AB・44・52・53・54・55・56・57・58・59号竪穴		
3	方墳	12.08		削平	2.40～1.50	0.65				土師器(壺2、壠1他)、ガラス玉1	34・35・36・45・46・47・48AB・49・50・51号竪穴		
4	方墳	8.37		削平	1.35～1.15	0.70				土師器片	63・64・65号竪穴	7号墳と重複。	
5	円墳				0.9+	3.00～2.00	0.65	横穴式石室、玄室1.93～1.60×1.25m、羨道部1.45×0.75m、片袖L字形		金銅製耳環2、大刀6、刀子7、鉄鏃10、須恵器・土師器	79・80・81号竪穴、環濠	横穴式石室から埋葬人骨5体以上。出土土器には3時期、奈良時代まで。耳環所在不明。	
6	方墳	(9.07)		削平	1.10～0.85	0.40			変則直交1	碧玉製管玉1、石英製切子玉5、石英製丸玉1、滑石製玉17、琥珀玉5、ガラス玉総数311以上	32・33・35・36・37・38・40号竪穴、3号粘土採掘坑	4号墳と重複。	
7	方墳	10.78		削平	1.20～1.10	0.50			変則平行1、周溝内1～2	金銅製耳環2、ガラス玉70、須恵器(杯蓋)	64・65・66・67・68号竪穴	北側周溝内土坑。	
8	方墳			削平	1.00	0.60			変則平行1	土師器、ガラス玉215	70・71・72・73・74号竪穴		
9	方墳			削平	2.9～1.2	0.30			変則平行1		5・6・7・8・9号竪穴、1号土坑	周溝不確実。	

数値()表示は推定値、(+)表示は現存値を示す。

地点	遺構No.	種別	調査No.	挿図	時期	Grid	平面形態	長軸長	短軸長	深さ	備考
A	1	粘土採掘坑	—	201	不明	K12	略円形	2.68	2.42	0.90	20号竪穴と重複。本遺構が新か。弥生土器出土、遺物不明。
A	2	粘土採掘坑	—	201	不明	L12	不整円形	4.32	4.00	1.00	21号竪穴と重複。本遺構が新か。
A	3	粘土採掘坑	—	201	不明	L8	不整円形	2.44	1.90	0.90	38号竪穴と重複。本遺構が新か。
A	4	粘土採掘坑	—	201	不明	N6	略円形	1.98	1.84	0.70	40号竪穴と重複。本遺構が新か。

第8表 根田代遺跡粘土採掘坑一覧

第4節 中近世

(1) 遺構

遺跡は「根田城跡」として周知されている⁽¹⁾。これを示す文献史料・地名・伝承などは確認できないが、遺跡全体が南北から入り込む小谷によって独立し、東側の台地とは土橋状の間隙部のみ連結する特殊地形であること、台地上には空堀・土壘状の構築物が地表面観察されたことにより、中世要害の可能性が指摘されてきた⁽²⁾。実際、台地を切断する小谷部は人為的に手を加えられたようで、弥生時代集落の東側環濠も、この段階で削平されたものと言われている⁽²⁾。その結果、小谷に面した斜面の勾配はきつくなり、独立性の顕著な、城郭的な景観を作っていた。

しかし発掘調査の結果、中世陶磁器類は出土したものの、遺跡を城館跡とする積極的な根拠は見出せなかった。かつて土壘や空堀に比定された構築物は、土手と道路遺構であることが判明した。また、台地周囲の麓には宅地が張り付いているため、先に述べた切岸状の削平事業も城郭普請ではなく、近世農民による宅地造成事業の範疇で捉えうるものと判断できる。

土手（第202図、図版33）

A地点の東端、Y5・Y6・Y7・Z5・Z6・Z7・a6・a7・b6・b7区にかけて所在する。Y5・Y6・Z5・Z6区で南へ屈曲し、全体として「L」字形を呈する。盛土は、黒色土を主体とし、高さ1.2m・幅4m前後を測る。脆弱で、版築された痕跡も認められず⁽²⁾、土壘とは呼び得ないものである。盛土中から近世の瀬戸・美濃登窯製品が出土したため、戦国期まで遡る可能性は薄くなった。道路遺構に沿って盛土されているため、基本的にこれに伴うものと判断できるが、A地点東端で完結、クランクし、台地縁に至る。麓に張り付く宅地区画の延長線に合致するため、近世農民屋敷を囲繞する構築物の一部として理解するのが妥当であろう⁽³⁾。

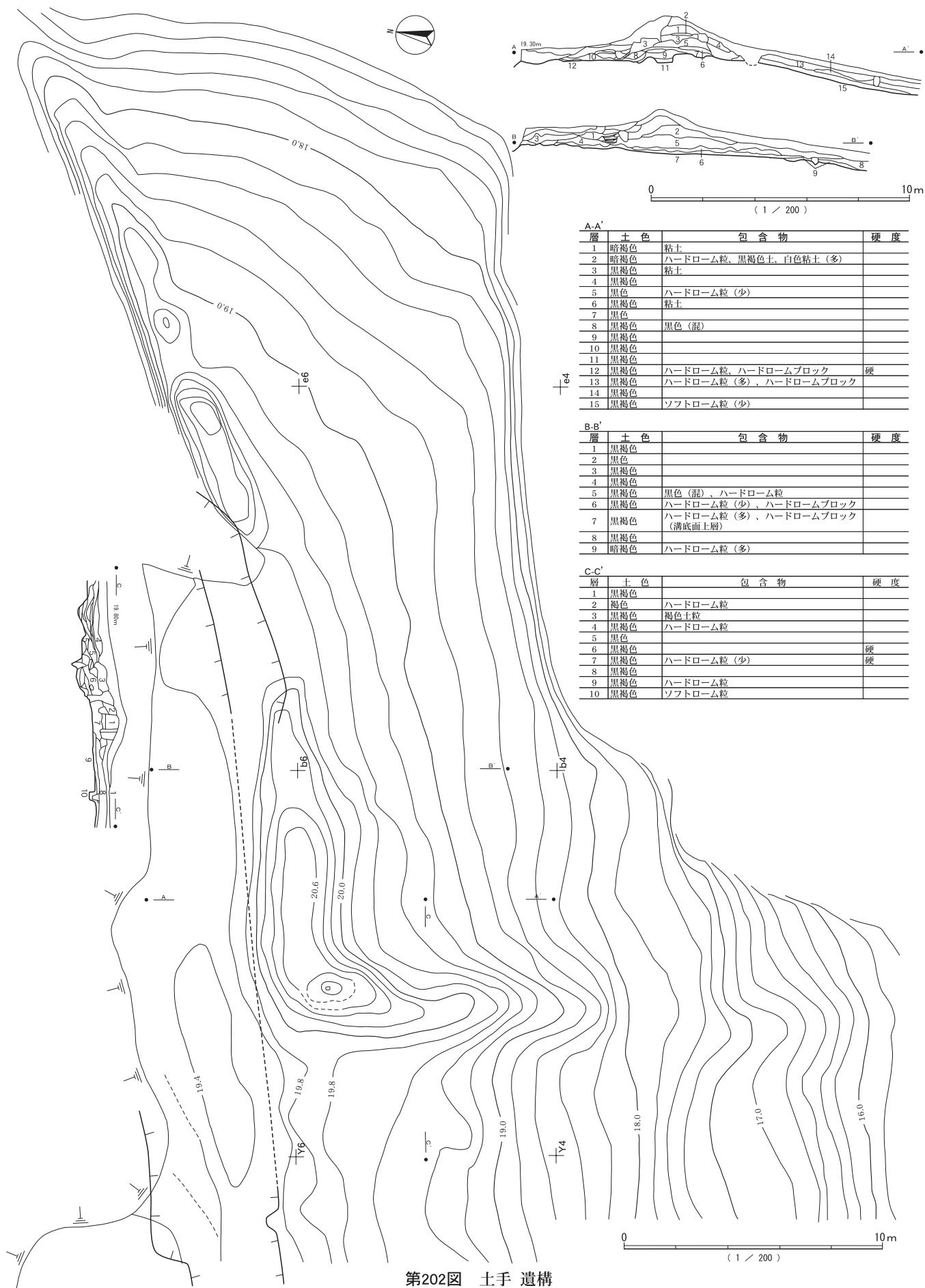
道路遺構（第203図、図版33・44）

道路遺構は、東側台地との連絡土橋からA地点北端を通り台地先端を抜け、麓に下りる1条(1号道路)と、台地南側中央の麓からA地点南端を通り、これに合流する1条(2号道路)が認められる。

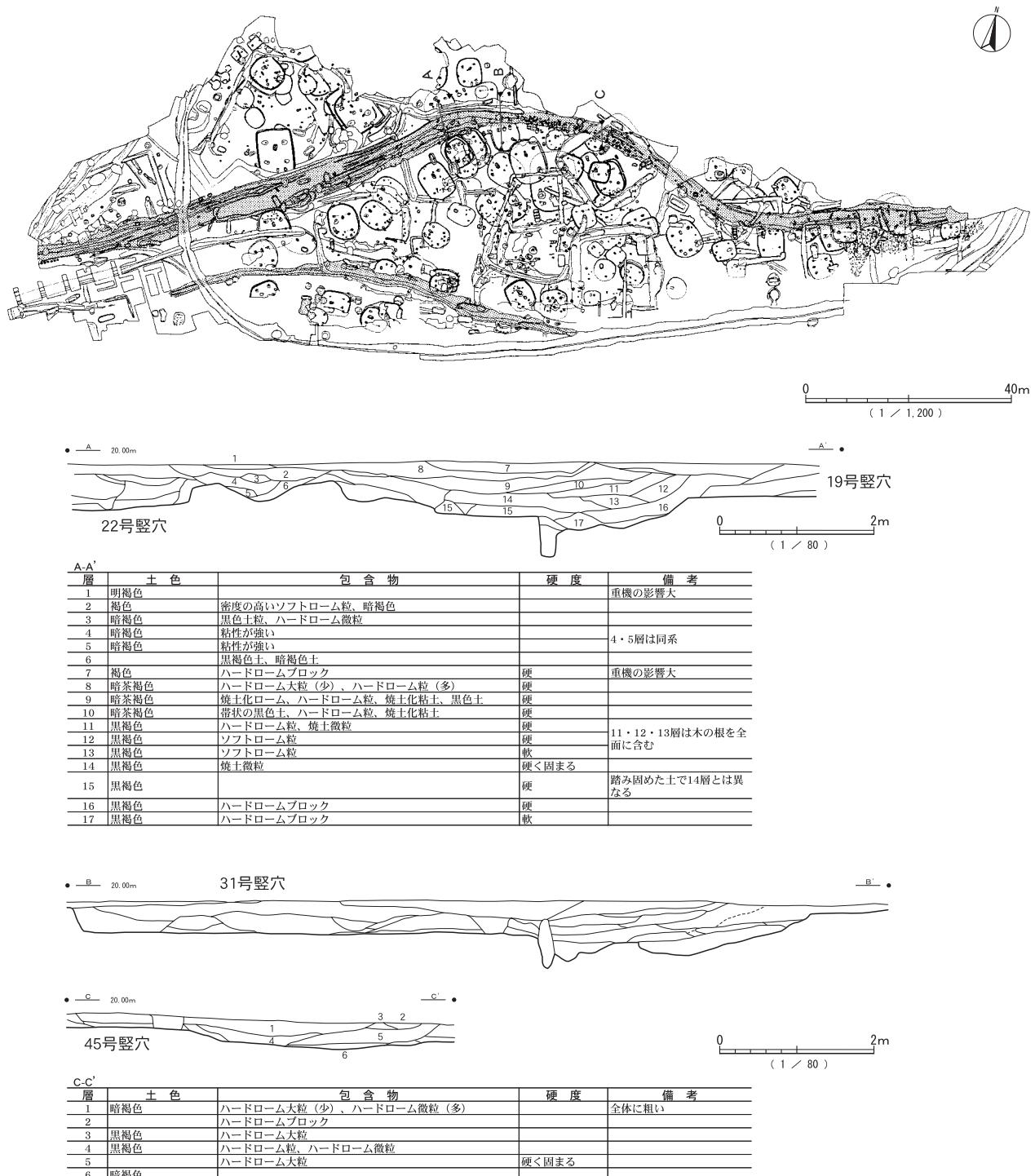
1号道路は、調査区北側縁辺を東西方向に蛇行するように走行する。西端のA7区から東端のC7区に至るこの溝は、全長およそ150m、幅は最大4mほどある。基底面までの掘り込みは最大70cmほどで、覆土途中には複数の硬化面が認められる箇所もある。また、とくに西側では、幾筋もの幅の狭い溝跡が枝分かれするように検出されている。1号道路は、先述の土手を伴う。数度の掘り直しや浚渫が認められるうえ、中世常滑製品が5点(第204図4含む)出土しているので、常滑12型式期まで遡るのかもしれない。区画整理以前においては、台地中央の畠地と縁辺の林地の境界を兼ねていた。

2号道路は、台地縁辺林地に点在する個人墓地を結ぶ参道であった。区画整理時はグリットA4区付近の墓地で途切れていたが、検出遺構自体は台地先端まで伸びる。また、前者遺構との間隙を結ぶ直角方向の小溝群は、個人墓地の区画溝であろう。

なお、今回の整理対象地区に明瞭な中世遺構はなかったが、未報告であるA地点内道路遺構北側の根田1号墳は、台地斜面に接した北西部が削平され、整地面上に方形竪穴状遺構や土坑などが展開することから、確実に中世に帰属する唯一の遺構群と思われる。



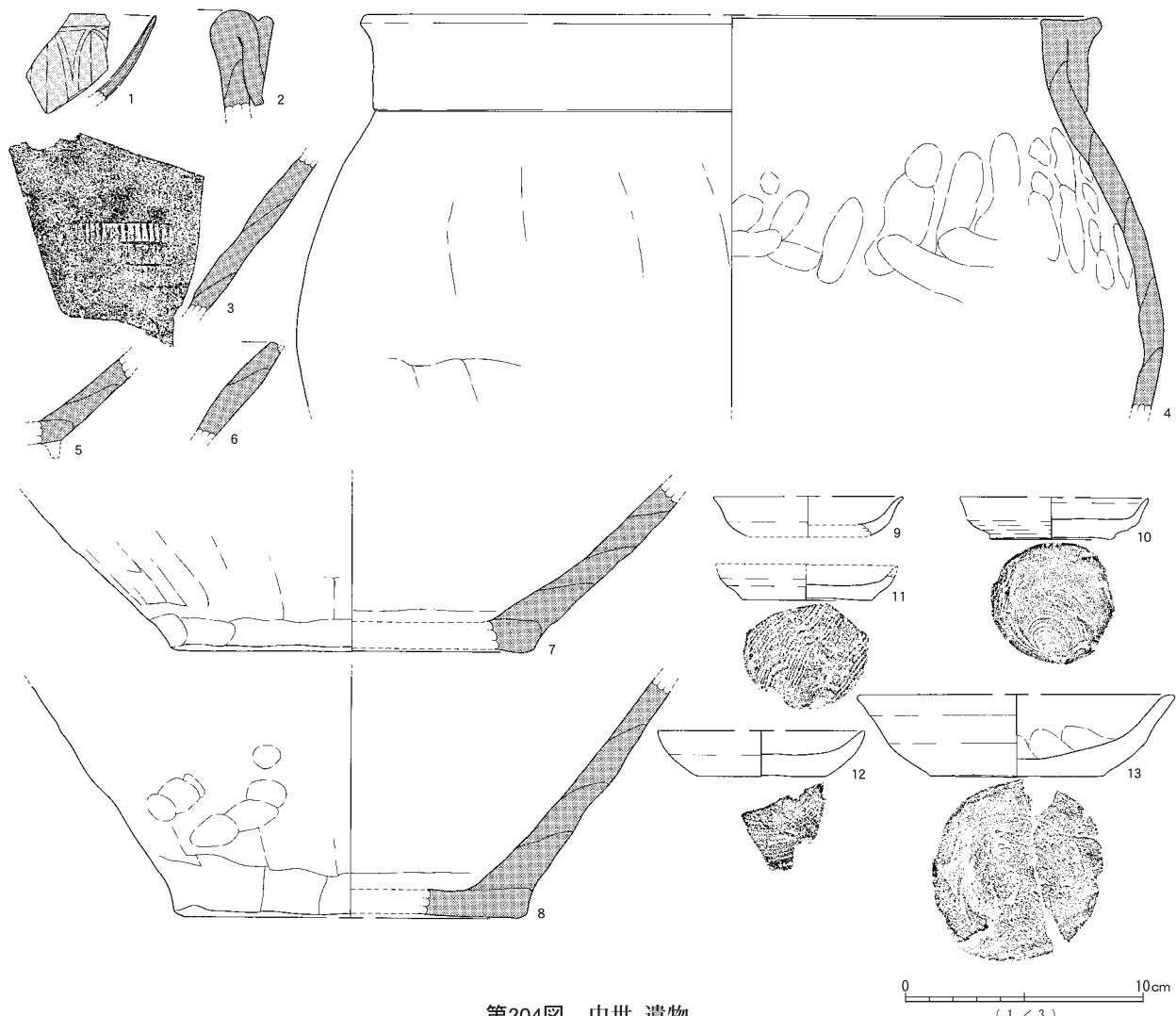
第202図 土手 遺構



第203図 道路跡 遺構

(2) 遺物

総点数22点と少ない。B地点北端の常滑産甕1点(不実測)以外は、すべてA地点から出土した(第204図、図版81)。ほとんどが遺構に伴わず、根田1号墳地区から流出したものかもしれない。これらを型式別に見ると、鎌倉時代前期から中期の「1群」と、室町期の「2群」、戦国期の「3群」に分けられる(第205図グラフ1)。うち、2群は常滑8型式の片口鉢(第204図6)1点のみなので、独立した組成群としては評価できない。これを3群期の消費と見るか、あるいは3群の時期幅を増して捉え



第204図 中世 遺物

るべきか微妙である。もっとも、未整理の根田1号墳地区に方形竪穴状遺構が認められるため、この時期の遺物量は増加する可能性もあるので、詳細は根田1号墳地区の整理報告を待つべきである。現段階における組成主体は、1群と3群に大別できる。

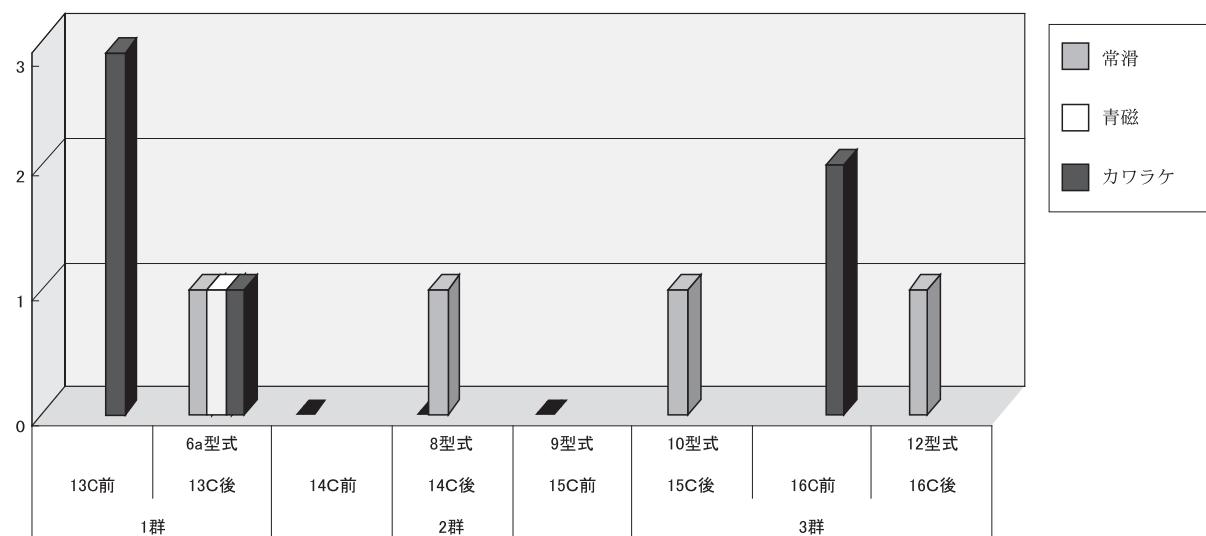
なお、江戸時代前期の遺物は認められず、近世との継続性を追うことはできない。肥前磁器 期並行期から近代にかけて一定量が存在するが、中世との断絶もあり、今回資料として扱わなかった。

(3) まとめ

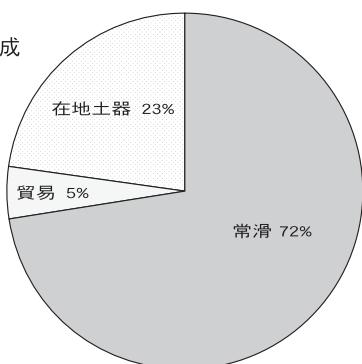
本遺跡を城館跡とする可能性は甚だ低いものと判断する。もちろん遺跡中央部の大半は昭和40年代の土砂取りで湮滅しているが、昭和36年の航空写真からは城郭遺構を読み取れなかった。また、戦国後期における独立丘陵全体を意識した縄張りであれば、A・B両地点においても何らかの普請跡が残るはずであろうし、仮に台地先端部のみの小規模城郭であった場合でも、簡単にせよ堀切や整形区画などが確認されるはずである。しかし実際は何らの城館遺構も検出されていない。

それでは、中世における本遺跡の性質はどのようなものだったのだろうか。現段階において不明と言わざるを得ないが、出土遺物を基に推論を立ててみたい。

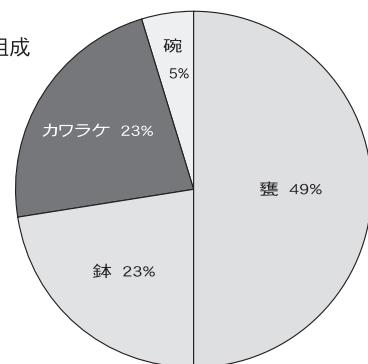
グラフ1 中世陶磁器の時期別出土量 (総数11点)



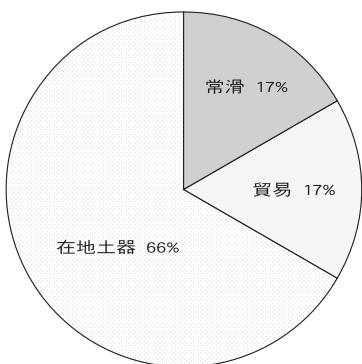
グラフ2
中世陶磁器の产地別組成
(総数22点)



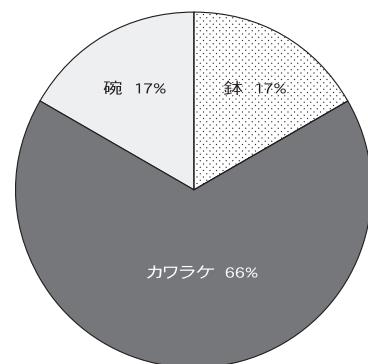
グラフ3
中世陶磁器の器種別組成
(総数22点)



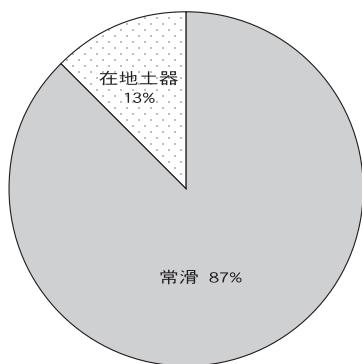
グラフ4
1群产地別組成
(総数6点)



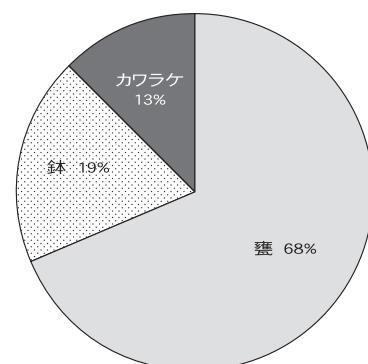
グラフ5
1群器種別組成
(総数6点)



グラフ6
3群产地別組成
(総数15点)



グラフ7
3群器種別組成
(総数15点)



第205図 中世陶磁器出土組成比率

No.	出土 遺構等	産地	器種	外面の特徴	内面の特徴	遺存度	焼成	色調 器面/断面	口径	最大 径	底径	器高	胎土	時期	()は復元値 単位:cm	
1	A5区	龍泉窯 系青磁	碗	鎬蓮弁文刻出、蓮弁比較的の銳い、釉層複数あり厚く、小気泡入る	釉層複数あり厚く、小気泡入る	破片	良	10GY7/1明緑 灰/5Y7/1灰白	-	-	-	-	密で硬質 (1)	I-5b類 (1)		
2	A7区	常滑	甕	折り返し口縁、頸部に密着、テリあり	口縁の折り返し部、丸く肥大	破片	良	5YR3/3暗赤 褐/2.5Y5/1黄 灰	-	-	-	-	白色小粒 少	10型式・ 15c後葉	破面を砥石 に転用、仕上 砥	
3	K3区	常滑	甕	胴部横方向ナデ後、輪積み部に格子目状の押印	粗く横方向ナデ、輪積み痕残る	破片	普通	7.5YR5/4にぶ い褐/10YR7/4に ぶい黄橙	-	-	-	-	白色中～ 小粒多	不明		
4	1号道路	常滑	甕	胴部縦方向へラケズリ後、横方向ナデ、口縁部折り返し、頸部に密着、テリあり	口縁の折り返し部、角形に整形、頸部直下～胴部上位、指頭で強く縦方向ナデ	1/4 以下	良	2.5YR3/3暗 赤褐/5YR5/4にぶ い赤褐	(30.3)	(36.1)	-	-	白色中～ 小粒多	12型式・ 16c後葉		
5	A4区	常滑	片口鉢 I類	底部付高台、胴部下位、幅広く右回転へラケズリ調整	横ナデ、よく使い込む	破片	普通	2.5Y7/1灰白 /10YR8/1灰 白	-	-	-	-	白色大粒 多く粗い	6a型式か・ 13c中葉	破面を砥石 に転用、仕上 砥	
6	f7区	常滑	片口鉢 II類	口縁付近横方向ナデ、口縁直下やや強く横方向ナデ、口縁平たぐるが、面積狭く、外側に若干突出の兆しあり	横方向ナデ	破片	良	5YR4/3にぶ い赤褐/10YR4/1褐 灰	-	-	-	-	白色大～ 中粒	8型式・14 世紀後葉	破面を砥石 に転用、仕上 砥	
7	Q9区	常滑	片口鉢 II類	体部縦方向へラケズリ後底 部付近指頭でやや強く横方 向ナデ	底部立ち上がりから斜上方に ナデ よく使い込む	1/4 以下	やや 不良	7.5YR4/6褐 /7.5YR6/6橙	-	-	(15.2)	-	白色大～ 中粒	不明		
8	1号道路	常滑	片口鉢 II類	体部縦方向へラケズリ後ナ デ	底部立ち上がりから斜上方に ナデ よく使い込む	1/4 以下	普通	5YR4/4にぶ い赤/5YR5/6 明赤褐	-	-	(14.7)	-	白色大～ 中粒	不明		
9	L5区	在地 土器	カワラケ	胴部上位段ナデ	見込み軽く横方向ナデ	1/4 以下	良	7.5YR7/4にぶ い橙	(7.9)	(7.9)	(4.8)	(1.7)	金雲母粒 小、海綿 骨針微量	不明、13 世紀か		
10	37号 竪穴	在地 土器	カワラケ	底部右回転糸切痕無調整で 突出、体部段ナデするが屈 曲あまり顯著でない	概ね平坦で端部立ち上がり 口縁に至る 見込み横方向ナ デ施さない	2/3	良	10YR7/4にぶ い黄橙	(7.9)	(7.9)	5.2	1.8	金雲母粒 小、海綿 骨針微量	12～13世 紀	色調やや白 っぽい	
11	37号 竪穴	在地 土器	カワラケ	底部静止糸切痕付く若干突出するが顯著でなく、立ち上がり軽いナデするが、施されていないと思われる	形状は10に似るが、立ち上がりがやや緩い 見込み横方向ナデ	1/4	良	10YR6/4にぶ い黄橙	-	-	(5.4)	(1.5)	金雲母粒 多、海綿 骨針少	13世紀か		
12	37号 竪穴	在地 土器	カワラケ	底部回転糸切痕無調整、立 ち上がりナデ調整し突出しない 体部段ナデ	底部から口縁まで緩く立ち上 がる 見込み横方向ナデ	1/4 以下	良	10YR7/4にぶ い黄橙	(8.5)	(8.6)	(5.3)	1.4	金雲母多			
13	37号 竪穴	在地 土器	カワラケ	底部回転糸切痕ナデ消す 底部外周軽くナデするがやや 突出 体部中位を若干強く横 ナデ	底部中央から口縁まで球状に立ち上がる 見込み抉るよ うに横方向ナデ	1/3	良	10YR6/4にぶ い黄橙	(13.3)	(13.3)	7.3	3.4	金雲母			

(注釈)

青磁の分類は森田 勉1981「鎌倉出土の中中国陶磁器について」『貿易陶磁研究No.1』日本貿易陶磁研究会編 所収 に基づいた
常滑製品は中野晴久1994「生産地における編年について」全国シンポジウム「中世常滑焼をめぐる」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 所収 に基づいた

第9表 根田代遺跡A地点出土中世実測遺物観察表

A地点

産地	器種	型式	点数
常滑産陶器			8
	甕	不明	7
	片口鉢II類	不明	1

B地点

産地	器種	型式	点数
常滑産陶器			1
	甕	不明	1

(総数9点)

第10表 不実測中世遺物

まず1群であるが、常滑6a型式期に消費のピークがあったものと思われる。6点と少ないが、3群とは200年近く断絶する。このように遺物量の主体を戦国期に置きながら、中世前期に若干のピークを持つ現象は、国分寺台地区やその近隣に広く認め得るものである⁽⁴⁾。組成はカワラケが過半数を占めるため、日常的な消費様式とは異なる(第205図グラフ5)。例えば麓の村落に対する葬送の場など、特殊な空間を想定し得ようか。ただしこの場合、遺物量が少なく、村落共同体の活動を積極的に評価することは危険である。当時としては比較的高価であろう青磁連弁文碗などが認められることから、むしろ村落内における特定階層者との関わりを考えるべきであろう。

3群は常滑10型式期を中心とする。常滑産陶器は鉢が一定量認められるが(第205図グラフ7)、瀬戸・美濃系擂鉢に置き換わっていないので、少なくとも古瀬戸後期様式一期新段階以前に消費活動の区切

りを置くべきであろう。常滑12型式(第204図4)も1点混じるが、3群の中では例外として捉えるべきで、近世陶磁器群とは時期的に断絶する。組成としては、瀬戸・美濃製品が入らない点、カワラケが比較的多い点で特殊と言える。通常、常滑10型式期は古瀬戸後期様式期の遺物群が一定量入るはずであるが、ここでは一切出土せず、日常の生活消費形態とは完全に異なる。

このうち常滑甕の消費は肥甕として理解できるが、畠開墾の画期は明らかでない。一方、鉢・カワラケについては、消費が細々と続く状況から、可能性として葬送空間を想定できる。その場合、台地縁辺部が中世を通じ葬送の場とされてきた、あるいは一時断絶を見たとしても、空間の無縁性は生き続けてきたということになる。儀礼的なカワラケ・鉢と常滑甕のみの器種構成から鑑みると、畠地化が進む台地縁辺部を葬送空間として再編した戦国期において、この場がより下層の人民に開放されたことを示すのではないだろうか。実際に台地南側の縁辺部は区画整理直前まで墓地が点在しており、D3区付近で近世土壙墓群が確認されている。これらはそれぞれ、麓の屋敷地割に連続する区画溝に囲繞されたものと考えられる。近世において、縁辺林地帯が個人墓地として利用されていたことは明らかである。

仮にA地点北辺を走る1号道路が常滑12型式期まで遡るとすれば、これまで述べてきた観点からも、区画整理以前における当地の村落が、景観的には戦国末期に完成したとの見方が可能になるであろう。この見解に立つ場合、江戸後期以降に遺物消費が活発化する事態が問題となるが、これらも基本的に墓域に伴うものであろうから、単に物資の搬入が促進される時期ゆえに、供献遺物が増加したものと考えられよう。

ただし、これまで述べてきた遺跡の性質については、あくまでも推測の域を出るものではない。中世遺物群、特にカワラケと鉢が墓域に帰属することが明確となれば、屋敷墓の成立を3群の消費期に求めるにしても、あるいは過渡期として村の共同墓地を想定するにしても、村落発展の資料として大きな有効性を持つであろう。しかしこの問題は、未整理地区の資料を加えた上で検討すべきであり、今後の課題としたい。

注 釈

- (1) 1997『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書』 旧上総・安房国地域 千葉県教育委員会編
- (2) 浅利幸一 1981「根田遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団発行 所収
- (3) 市原市域では、近世屋敷地を土手で囲繞する例が存在する。例えば下矢田城跡の土壘とされていた遺構群は、近世の屋敷地(村落寺院か)に伴う土手であったことが発掘調査で裏付けられ、遺跡が城館でないことが判明した(小出紳夫 1997『下矢田城跡』『平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告書』財団法人市原市文化財センター編 所収)。このような例は中世城館として周知されている遺跡に数多く存在する可能性があり、土壘(土手)状遺構以外に明確な根拠が無いような城館遺跡に対しては注意を要する。
- (4) 同様の事例は、台遺跡B地点、西広貝塚、山田橋大山台遺跡で認められる。西広貝塚の中世前期遺物群は未報告であるが、水注・壺からなる特殊用品が組成の50%を占め、開発地内における特定階層者の墓域などが近接した可能性がある(半田堅三 2003『市原市台遺跡B地点』財団法人市原市文化財センター編 市原市教育委員会発行・大村直 2004『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第88集 なお、西広貝塚については、近年中に発掘調査報告書を刊行する予定)

第3章 自然遺物および自然科学的分析

第1節 根田代遺跡のローム層序対比

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

千葉県市原市根田に所在する根田代遺跡は、北東部を村田川、南西部を養老川にそれぞれ区切られた市原台地の西端部付近に位置する。市原台地を構成する地形面は、酸素同位体ステージ5cの時期に形成された下総下位面に区分されている(貝塚ほか編,2000)。この形成時期はおよそ10万年前とされ、武蔵野台地のM1面もほぼ同時期に形成された台地である。

本遺跡の発掘調査は1980年に行われ、弥生時代中期の環濠集落の検出が注目されたが、ローム層からは旧石器が出土し、国分寺台地区では事例の少ない旧石器時代の石器群が出土した遺跡としても知られている。今回の分析調査では、旧石器時代の遺物が出土した調査区断面のローム層について、層序対比の指標となるテフラ層であるAT(後述)を火山ガラス比分析により検出し、さらに、今後市原台地におけるローム層の標準層序となる資料の作成を目的として、各層位の重鉱物組成を求める。これらの結果から、発掘調査時の層序および検出された石器群の帰属時期を検証するための資料を作成する。

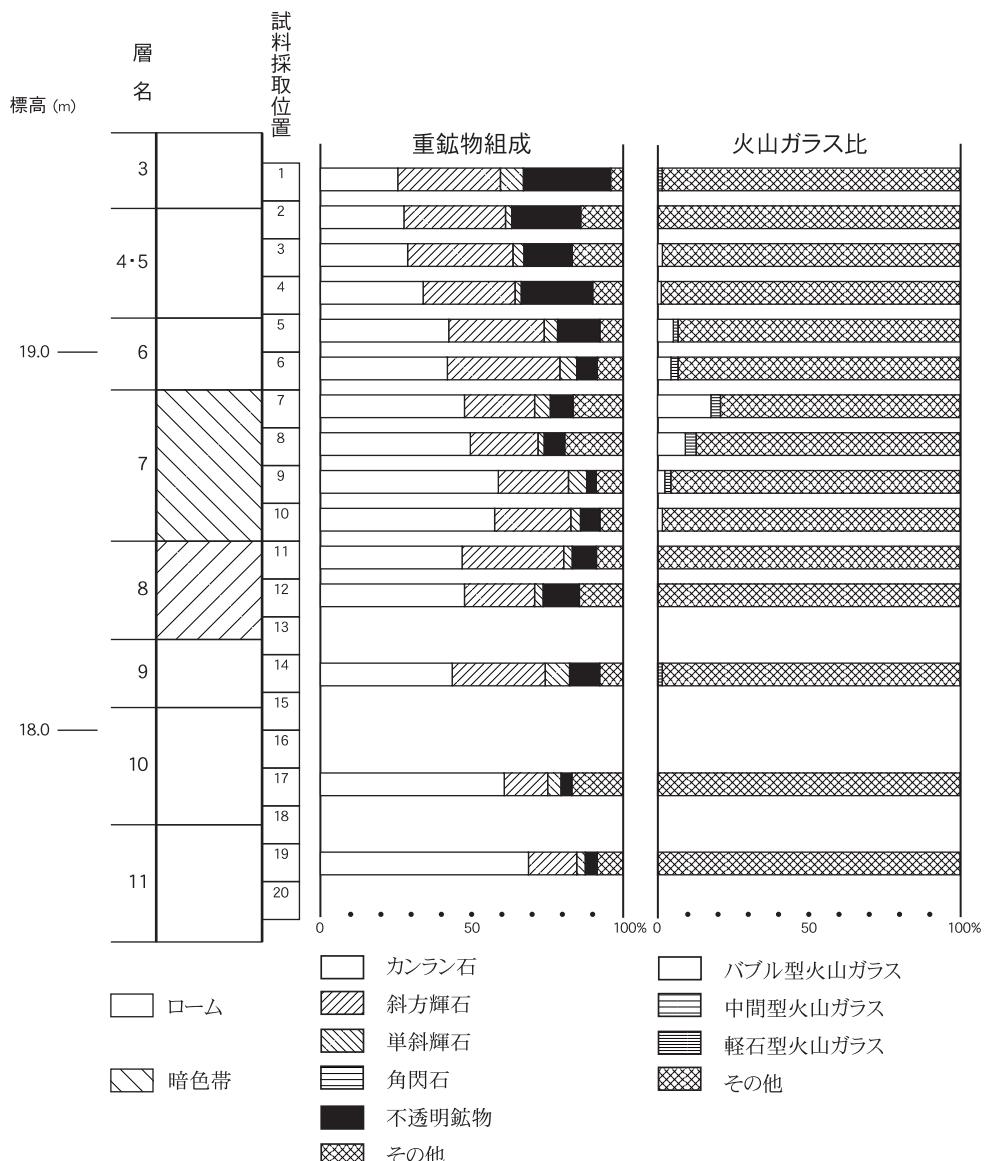
(1) 試料

確認されたローム層は、最上部が3層とされ、以下11層まで分層されている。これらのうち、6層にAT層があるとされ、7層および8層は第2黒色帯とされた。遺物は、7層および8層上面に集中して出土したとされている。

試料は、調査区北面セクションのJ7グリッドとK7グリッドの境界付近の土層断面から採取された。採取層位は、3層上部から11層上部にわたり、30cmの間をあけて設定された2列から、厚さ10cmの試料を10cmの間隔を開けて合計20点が採取されている。試料には、上位より1~20までの試料番号が付された。各試料の採取層位は、2列の試料採取層位を便宜上1列にして柱状図を作成し、分析結果を呈示した第206図に併記する。なお、本報告では、発掘調査時の上記土層観察所見を参考に、試料番号1~12までの全点と試料番号14、17、19の合計15点を分析試料とした。

(2) 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンゲステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、



第206図 北面セクションJ7-K7の重鉱物組成および火山ガラス比

試料番号	カラン石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	酸化角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	64	85	19	1	0	72	9	250	0	1	4	245	250
2	69	84	5	0	0	57	35	250	0	0	1	249	250
3	72	87	9	0	0	40	42	250	4	0	2	244	250
4	85	76	5	0	0	59	25	250	3	0	2	245	250
5	106	79	11	1	0	35	18	250	13	0	4	233	250
6	105	93	14	0	0	17	21	250	11	0	6	233	250
7	119	58	13	0	0	19	41	250	44	0	8	198	250
8	124	56	5	1	0	17	47	250	23	0	9	218	250
9	147	58	15	0	0	8	22	250	6	0	5	239	250
10	144	63	8	0	0	16	19	250	4	0	1	245	250
11	117	84	7	0	0	20	22	250	2	0	0	248	250
12	119	58	7	0	0	30	36	250	1	0	1	248	250
14	109	77	20	0	0	25	19	250	0	0	4	246	250
17	152	36	11	2	0	9	40	250	0	0	1	249	250
19	172	40	7	1	0	10	20	250	0	0	0	250	250

第11表 北面セクションJ7-K7の重鉱物・火山ガラス比分析結果

その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。また、軽鉱物においても変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

(3) 結果

分析結果を第11表、第206図に示す。重鉱物組成は、3層から4・5層の中部(試料番号3)までは、斜方輝石が最も多く、これに次いでカンラン石と不透明鉱物が中量含まれる。また、少量の単斜輝石を伴う組成であるが、4・5層下部以下の層位ではカンラン石が最も多く、斜方輝石はカンラン石に次いで中量であり、単斜輝石および不透明鉱物は少量である。その中で、4・5層下部から7層下部までの層位では、下位ほどカンラン石の量比が高く、斜方輝石の量比が少なくなり、7層下部にカンラン石の量比の極大層準が認められる。8層上部から9層では、カンラン石の量比が変わらず、10層から11層にかけては、下位ほどカンラン石の多い傾向が窺える。特に11層上部では、カンラン石が70%近くを占める高率となる。

火山ガラス比では、6層から7層上部にバブル型の濃集が認められる。また、3層(試料番号1)では、直下の試料番号2に比べて量比は微量であるが、軽石型が若干多くなり、また中間型も認められる。

(4) 考察

今回の分析結果において、最も重要な指標となるのは、6層から7層上部にかけて認められたバブル型火山ガラスの濃集である。この火山ガラスは、その形態とローム層における層位から、姶良Tn火山灰(AT:町田・新井,1976)に由来すると考えられる。ATは鹿児島県の姶良カルデラを給源とするテフラであり、関東地方のように給源より遠方では、無色透明のバブル型火山ガラスを主体とする。また、ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定(例えば松本ほか(1987)、村山ほか(1993)、池田ほか(1995)、宮入ほか(2001)など)から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5~3.2万年前におよぶとされている(町田・新井,2003)。町田・新井(2003)は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難である事情を述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6~2.9万年前頃になるであろうとしている。

本地点におけるATの降灰層準については、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている(早津,1988)ことから、7層上部(試料番号7と8の境界付近)に推定される。なお、これまでに当社で行った多数の武蔵野台地における立川ローム層の分析例から、ATの降灰層準は、標準層序の 層最上部に推定されることが多い。したがって、暗色帯を形成している本地点の7層および8層は、ATの降灰層準を指標にすると、武蔵野台地の立川ローム層における第2暗色帯(BB)にほぼ対比される。

ここで、根田代遺跡における旧石器時代の石器群の出土層位とATとの関係については、上述の推

定降灰層準に従えば、6層出土遺物はAT降灰以後、7層出土遺物は、上部のものはAT降灰時頃、中部以下のものはAT降灰以前、8層上面出土遺物はAT降灰以前ということになる。

一方、3層に微量認められた軽石型および中間型火山ガラスについては、その形態とローム層最上部という層位から、武蔵野台地で立川ローム上部ガラス質火山灰(UG:山崎,1978)とされている細粒テフラに由来する可能性がある。UGは、浅間火山軽石流期のテフラの細粒部に相当すると考えられているが、その噴出年代は明記されていない(町田・新井,2003)。ただし、浅間軽石流期の年代については、放射性炭素年代で1.3~1.4万年前(町田・新井,1992)、層位学的な年代も加味した暦年で1.5~1.6万年前とされているから、これをUGの年代と考えて良い。本地点では火山ガラスの量比が微量なため、試料番号1の採取層準がUGの降灰層準になる可能性は低く、それよりも上位にある可能性がある。武蔵野台地では立川ローム層の層上部にUGの降灰層準が推定される例が多い。このことから、本地点の3層は、ほぼ層に対比されるとしてよい。

ところで、本地点の重鉱物組成の層位的变化については、分層された層位によく対応した結果が得られた。南関東各地に分布する更新世の台地(例えば相模野台地、武蔵野台地、大宮台地、下総台地など)におけるローム層の重鉱物組成の層位的な変化は、概ね台地単位内ではどこでも共通する傾向が得られており、台地内における層序対比の有効な指標となっている。現時点では、市原台地における立川ローム層の重鉱物分析例がほとんどないため、本地点と他の市原台地上の遺跡との対比については述べることができない。しかし、今回の重鉱物分析結果は、ATの降灰層準と合わせて、市原台地の立川ローム層における対比の基準とすることが可能である。今後、市原台地におけるローム層の対比を行う場合には、ATの層準に加えて、重鉱物組成も求めることにより、より詳細な層序対比が可能になると考えられる。

引用文献

- 早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノロジー - ATにまつわる議論に關係して - .考古学研究,34,18-32.
- 池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫,1995,南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代.第四紀研究,34,377-379.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編,2000,日本の地形4 関東・伊豆小笠原.東京大学出版会,349p.
- 町田洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰 - 姶良Tn火山灰の発見とその意義 - .科学,46,339-347.
- 町田洋・新井房夫,1992,火山灰アトラス.東京大学出版会,276p.
- 町田洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,姶良Tn火山灰の14C年代.第四紀研究,26,79-83.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演旨).地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM),2001,Qm-010.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦,1993,四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討 - タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代 - .地質学雑誌,99,787-798.
- 山崎晴雄,1978,立川断層とその第四紀後期の運動.第四紀研究,16,231-246.

第2節 根田代遺跡検出の貝層

(1) 位置と時期

根田代遺跡からは、弥生時代の遺構中に形成されたいいくつかの貝層がみつかっている。住居内覆土中に形成されたものが3箇所、環濠覆土内に形成されたものが1箇所の計4箇所である。いずれもブロック状に形成された規模の小さいもので、住居覆土内のものは、23号竪穴・31号竪穴・47号竪穴にそれぞれあった。これらの住居はA地点の中央よりやや西にあり、3軒は比較的近接している。このうち、23号竪穴のものは、この中では比較的量がまとまっていた。環濠覆土内のものは、わずかな量であったがA地点T3区の4層からみつかった。

(2) 貝層の内容物

今回の調査では、貝層がサンプルとして残されたものの、整理作業の段階では既に水洗が終わっており、貝類以外の遺物が残されていなかった。したがって、獣や魚などの動物遺存体について分析することができなかった。

貝類の量は最小個体数の総数が、23号竪穴62点、31号竪穴85点、47号竪穴が125点である。内訳は、第11表・第207図グラフに示したようにそれぞれ組成がかなり異なる。

23号竪穴では、主体はハマグリで、全体のおよそ60%を占め、次いでマガキ・アカニシ・ツメタガイなどが10~15%の割合でみられる。ほかに、シオフキ・ウミニナ・イボキサゴがある。

31号竪穴では、ハマグリとシオフキがそれぞれ40%ずつを占める。アサリも10%ほどみられる。ほかにツメタガイ・イボキサゴがある。

47号竪穴では、イボキサゴがおよそ80%を占め、次いでシオフキが9%弱みられる。ほかに、ハマグリ・アサリ・ウミニナ・カワニナがある。

(3) 主体貝のサイズについて

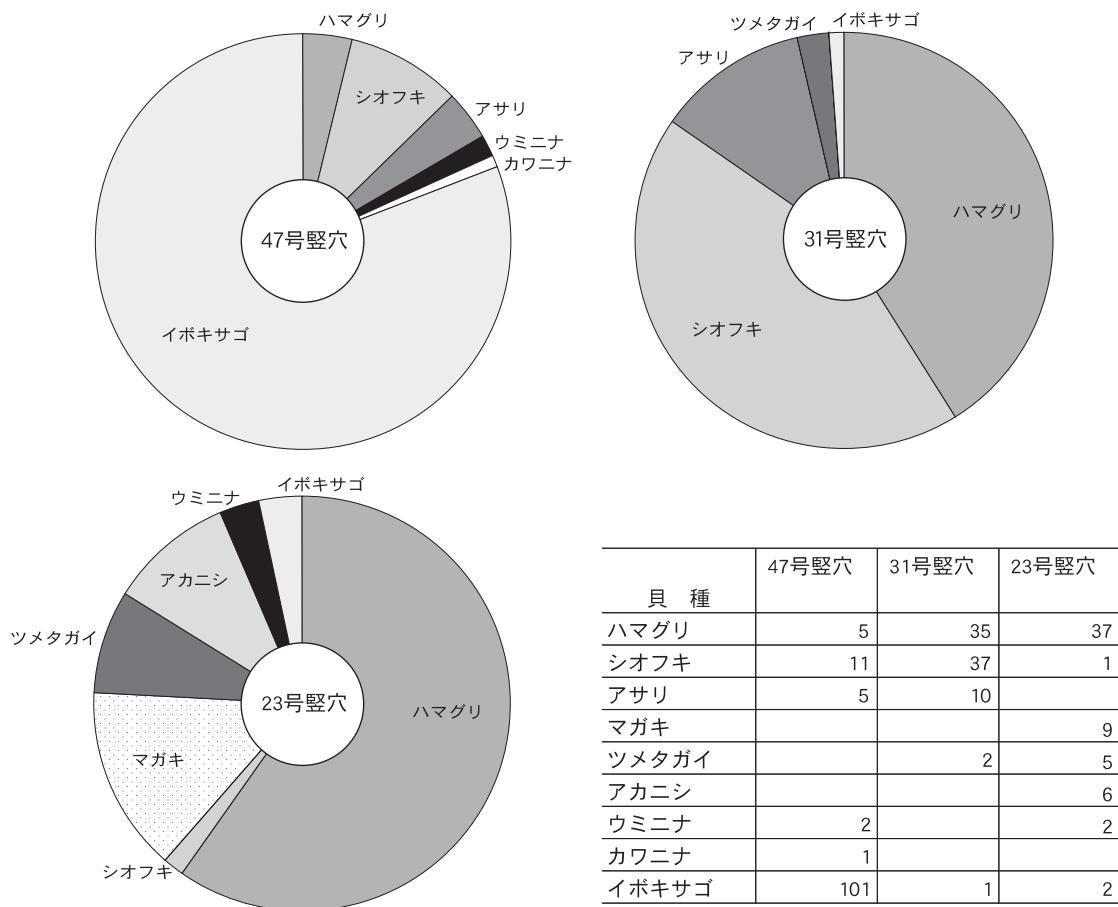
イボキサゴのサイズ

一般的にイボキサゴの大きさについて計測値を示すことは少ないが、今回47号竪穴内貝層中にややまとまった資料が得られたことから、その数値をデータ化することとした。試料数は殻の保存状態

	47号竪穴			31号竪穴			23号竪穴			環濠 (A地点T3区4層)		
全体重量 (g)	300			1,410			2,820			65		
貝総重量 (g)	250			1,065			2,750			45		
計数対象外重量 (g)	50			345			70			20		
貝種	最小個体数	L	R	最小個体数	L	R	最小個体数	L	R	最小個体数	L	R
ハマグリ	5	5		35	32	35	37	30	37	5	3	5
シオフキ	11	11	10	37	27	37	1	1				
アサリ	5	5	5	10	10	9						
マガキ							9	9	4			
ツメタガイ				2			5			1		
アカニシ							6					
ウミニナ	2						2					
カワニナ	1											
イボキサゴ	101			1			2					

土器片1
ハマグリR殻利用赤彩貝1
ハマグリ合せ貝9組

第12表 根田代遺跡軟体動物組成表



第207図 根田代遺跡弥生竪穴住居覆土内貝層貝種組成

の良好な48点である。殻の直径(殻幅)を計測した。結果については、第208図グラフに示した。殻の直径の最小は13.4mm、最大は18.2mm、平均値は16.1mm、16.1~16.5mmの個体が全体のおよそ30%を占める。

ハマグリのサイズ

ハマグリを主体とする貝層は、23号竪穴と31号竪穴であるが、31号竪穴内貝層中のものは、残存状態があまりよくなく計測できる資料が少ない。これに比べ、23号竪穴のものは、比較的残存状態が良好で、資料点数もある程度まとまっていることから、これを用いて殻高のサイズを計測することとした。計測資料としては、最小個体数は37点であったが、貝合せの結果、合弁となった個体が9組しかなかったことから、実際には最低でも58個体あったと推定できる。このうち、腹縁部が残存する試料53点について計測した。結果については、第208図グラフに示した。殻高の最小は40mm、最大は80mm、平均値は62.1mm、61~65mmと71~75mmの個体がそれぞれ全体のおよそ20%を占める。殻高の大きさが6cmを超えるものを主体とすることは特筆に値する。遺跡付近の縄文時代のデータと比較すればその違いは歴然とする。

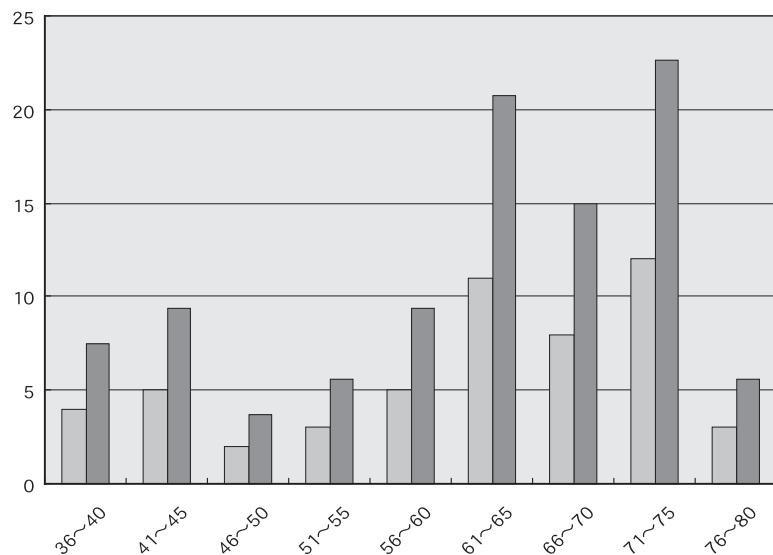
国分寺台地区の縄文後期の大規模貝塚である祇園原貝塚では、後期初頭から一部弥生時代中期までの各時期に属する貝塚がみつかっている。調査報告書には、その主要なものについて、ハマグリの殻高分布を示している。これによると、後期初頭の称名寺式期には、およそ35mmほどの大きさのものが多く、後期前葉の堀之内1式期には30mmほどの大きさのもの、後期中葉の加曾利B式期にはおよ

23号竪穴覆土内貝層出土のハマグリの大きさ

計測値：殻高 (mm)

試料数：53

大きさ (mm)	点数	比率(%)
36~40	4	7.5
41~45	5	9.4
46~50	2	3.8
51~55	3	5.7
56~60	5	9.4
61~65	11	20.8
66~70	8	15.1
71~75	12	22.6
76~80	3	5.7
計	53	100

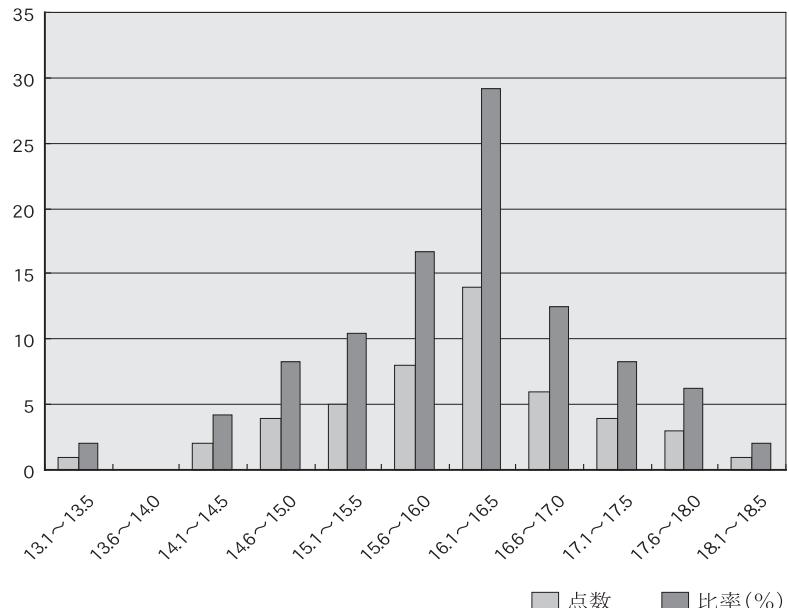


47号竪穴覆土内貝層出土のイボキサゴの大きさ

計測値：殻幅 (mm)

試料数：48

大きさ (mm)	点数	比率(%)
13.1~13.5	1	2.1
13.6~14.0		
14.1~14.5	2	4.2
14.6~15.0	4	8.3
15.1~15.5	5	10.4
15.6~16.0	8	16.7
16.1~16.5	14	29.2
16.6~17.0	6	12.5
17.1~17.5	4	8.3
17.6~18.0	3	6.3
18.1~18.5	1	2.1
計	48	100



第208図 根田代遺跡貝層出土ハマグリ・イボキサゴの大きさ

そ35mmほどの大きさのもの、後期後葉の安行式期のものには40mm前後のものが多いという傾向がみられ、後期の終わりに近づくにつれ、大きな個体が目立つようになる。弥生中期の貝層は1箇所しか検出されていないことからその傾向を捉える事は難しいが、この資料からすると30mm前後の個体が多いものの、殻高70mmまでの個体も散見する状況にあった。

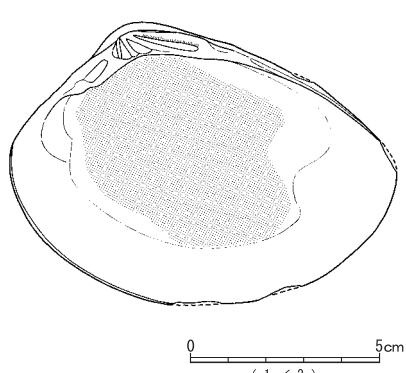
これらのデータと比較すると本遺跡のハマグリのサイズがいかに巨大であるかがわかる。縄文後期前葉のほぼ倍の大きさということになるのである。一般に、東京湾岸の貝塚産ハマグリが弥生時代以降大型化の傾向を示すことはこれまでにもたびたび指摘されており、実際に本市でも、東千草山遺跡や椎津茶ノ木遺跡などのデータで実証されている。東千草山遺跡では、弥生後期の住居内に堆積した厚さ30cm以上の良好な貝層中の資料およそ1,100点を計測した結果、最小5mm・最大75mm、およそ35~50mmの個体を中心とするサイズ構成を認めた。

貝に対する捕獲圧が高まると、殻サイズは小型化の傾向を示し、逆に捕獲圧が低くなると、生物の成長速度と齢構成に任せた小型から大型個体までの自然な個体群を形成することが考えられる。縄文中期から後期前葉にかけ、とくに東京湾東岸地区では多数の集落の人々が一斉に貝類を採集し大規模な貝塚が形成される。このために、個体群が大型化する暇もなかったものとみられる。一方、縄文後期の終わり頃から生業活動が徐々に変容し始め、貝類採取が後期の前葉ほどではなくなると、ハマグリのサイズにも徐々に復調の兆しが見えはじめる。そして、農耕を中心とする生業に転化する弥生時代の到来とともに、海岸生物群とともに貝類は本来のサイズ構成を取り戻したものとみられる。本市では、弥生時代の遺跡に残された資料は、遺構内などに遺存する貝層で、一集落でせいぜい一カ所あるかどうかという程度である。これを縄文時代と同様に評価すると、海岸部では消極的活動を想定せざるをえないが、果たして実際はどうであったのか。稻作を中心とする生業とはいえ、海岸近くに生活する集団が縄文以来の伝統的な生活と簡単に縁を切るとも考えられず、貝類の採集方法・処理の仕方・廃棄の仕方などが縄文時代のそれと変わっている可能性も考えなくてはなるまい。採集した貝をムラとは別の場所で処理し、殻を廃棄してしまったとしたら集落には何も残らないことになる。この場合、集落に持ち帰られた貝の意味合いは特別なものとなり、本遺跡の23号竪穴内のもののようにハマグリの巨大な個体が厳選されている背景もまた特別な扱いの所産なのかもしれない。本跡からは特大のアカニシ数点がみつかっていることも併記しておきたい。いずれにせよこの問題については、本市の類例を蓄積するとともに、他地域の状況を踏まえたうえであらためて検討する必要がある。

(4) 貝製品について

23号竪穴の覆土内貝層に混じって1点の貝製品がみつかっている(第209図)。殻長10.1cm・殻高7.4cmを測る大型のハマグリの右側の殻を利用したもので、貝殻内面に赤彩の痕跡が認められた。これ以外には加工の痕は認められない。貝殻外面には赤彩の痕跡は認められなかった。最近の縄文時代の貝塚調査では貝層サンプルの水洗・内容物の選別作業を経て、多数の貝製品がみつかっている。その中で、赤彩貝と呼ばれる製品も多数検出されるようになった。主として、オオノガイ・シオフキ・バカガイ・ムラサキガイ・ハマグリなどの貝殻の内外面に赤彩された製品であり、殻本体に特に加工はない。特に、外面への赤彩が顕著なことと、使われる貝種が殻表面に筋の多いざらついた質のものが多いことから、赤色顔料を付着させること自体に意味のあった製品と考えられてきている。一方、

内面にのみ赤彩が認められる個体があることから、パレット状の容器としての用途もあったとみられる。容器としては、ほかにアスファルトを容れたものが見つかった事例もある(岩手県岩泉町貝鳥貝塚)。本遺跡の資料では、赤彩は内面のみにしか認められていない。外面については、この製品が遺跡内に放置されて以後今日に至るまでの間に失われた可能性もあるが、現状の状態から赤色顔料を溶かすためのパレット状の容器としてとらえたい。いずれにしても、弥生時代のものとしてはあまり類例が知られていない資料と言える。



第209図 23号竪穴貝層内出土貝製品

第3節 根田代遺跡（千葉県市原市）から出土した人骨

平田和明・長岡朋人

(聖マリアンナ医科大学解剖学教室)

1. はじめに

根田代遺跡は千葉県市原市根田2丁目に所在する遺跡である。昭和55年に上総国分寺台遺跡調査団によって発掘調査が行われ、根田5号墳の横穴式石室から6世紀末から7世紀初頭に属する人骨が出土した。今回、出土人骨の調査を行い、その成果を報告する。

2. 出土状況

横穴式石室から複数の人骨が攪乱された状態で発掘された。出土した部位は、主に頭蓋、歯、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨であり、椎骨、肋骨などの体幹骨や手骨、足骨は皆無に等しい。保存状態が非常に悪く、個体の識別が不可能であるため、部位別の報告を行う。

3. 人骨の所見

(1) 頭蓋

多数の頭蓋片がみつかった。保存状態は非常に悪く、数センチの骨小片がほとんどである。側頭骨の数は左右各3個あった。

(2) 歯

上顎歯11本、下顎歯19本が残っていた。歯槽に植立していたのは、上顎では右5本、左4本、下顎では右4本、左5本である。歯の咬耗度はMolnar(1971)に従い記述し、歯の咬耗度に基づく年齢推定はLovejoy(1985)に従った。ただし、遊離歯からの年齢推定は、歯種の誤判別の危険性を考慮し、行わなかった。

A 上顎歯

1-1) 植立歯

7 6 5 4 3

歯の咬耗は、象牙質の露出が点状に現れた程度であり、咬耗度はMolnar (1971) の3度から4度である。歯の咬耗に基づく年齢は、20歳から30歳と推定できた。

1-2) 植立歯

4 5 6 8

咬耗度は、Molnar(1971)の2度から3度である。歯の咬耗に基づく年齢は、20歳から30歳と推定できた。

2) 遊離歯

上顎右第1大臼歯（咬耗度4）

上顎左大臼歯（歯種不明）（咬耗度2）

以上の2本が遊離歯である。

年齢は、20歳から30歳の個体が少なくとも1体含まれる。

B 下顎歯

1-1) 植立歯

(8) 7 6 × 2 | 2 3 × × 6 7 (8)

歯の咬耗は、象牙質の露出が点状に現れた程度であり、咬耗度はMolnar(1971)の2度から3度である。歯の咬耗に基づく年齢は、20歳から30歳と推定できた。特記事項として、左右の下顎側切歯、及び下顎左犬歯に特殊磨耗を認めた(写真1)。特殊磨耗は、切歯、及び犬歯の切縁中央部がアーチ状に磨り減り、苧績み作業による磨耗(森本、1995)に類似する。しかし、対となる上顎歯が欠けているため、磨耗の成因が特定できない。

1-2) 植立歯

6 7

歯の咬耗は、象牙質の露出が点状に現れた程度であり、咬耗度はMolnar(1971)の3度から4度である。歯の咬耗に基づく年齢は、20歳から30歳と推定できた。

2) 遊離歯

下顎右犬歯(咬耗度5度)

下顎右大臼歯(歯種不明)(咬耗度1)

下顎右大臼歯(歯種不明)(咬耗度2)

下顎右第1大臼歯(咬耗度3)

下顎右第3大臼歯(咬耗度2):齲蝕を認めた

下顎左犬歯(咬耗度3度)

下顎左第1大臼歯(咬耗度4)

下顎左第2大臼歯(咬耗度3)

以上の8本が遊離歯である。

下顎骨左側が重複していたため、少なくとも20歳から30歳の個体が2体残っていることになる。

(3) 寛骨

右寛骨の破片が1個残っていた。Y字軟骨が癒合していたため、15歳以下の個体ではない。性判定はできない。

(4) 四肢骨

四肢骨片は複数個体分が重複して残っていた。

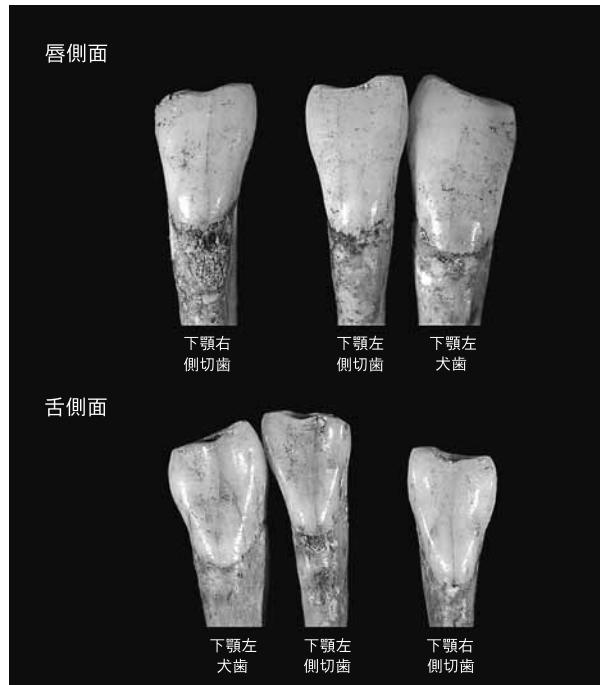


写真1：特殊磨耗と推定される歯

A 上腕骨

上腕骨の骨幹部のみが残っていた。右が2本、左が1本、左右が不明なものが3本である。

B 尺骨

尺骨の骨幹部のみが残っていた。右が1本、左が3本である。

C 桡骨

桡骨の骨幹部のみが残っていた。右が2本、左右が不明なものが1本である。

D 大腿骨

大腿骨の骨幹部のみが残っていた。右が5本、左が2本、左右が不明なものが3本である。

E 脛骨

脛骨の骨幹部のみが残っていた。右が5本、左が4本である。

F 胫骨

胫骨の骨幹部のみが残っていた。右が1本、左が2本、左右が不明なものが3本である。

4.まとめ

最小個体数は、右大腿骨、及び右脛骨の数から5体である。歯の咬耗度から少なくとも2体が20歳から30歳の個体であると推定できた。しかし、頭蓋や寛骨の保存状態が非常に悪く、性別判定はできなかった。特殊所見として、下顎側切歯、及び犬歯に特殊磨耗を認め、遊離していた下顎右第3大臼歯に齲蝕を認めた。

文 献

Lovejoy, O. (1985) Dental wear in Libben population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 47-56.

Molnar, S. (1971) Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology, 34: 175-190.

森本岩太郎 (1995) 苫積み作業によると思われる飛鳥・室町時代女性切歯の磨耗. Anthropological Science (Japanese Series), 103 : 447-465 .

第4章 市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落

市原市域を含む東京湾東岸地域の弥生時代は、過去30年間、実際には国分寺台遺跡群において大規模な発掘調査が行われていたにもかかわらず、資料的な空白を生じてきた。この間、90年代以降の旧君津郡域の資料的な蓄積は、研究史の進捗をみるまもなく、爆発的な拡大をとげた。市原市域についても、坊作遺跡(小出2002)、釜神遺跡(田中2002)、向原台遺跡(高橋2002)、台遺跡(半田2003)、山田橋遺跡群(大山台遺跡)(大村2004b)、御林跡遺跡(木對2004a)などの報告書が相次いで刊行され、大厩遺跡(三森・阪田他1974)、菊間遺跡(斎木・種田・菊池1974)、土宇遺跡(柿沼他1979)、唐崎台遺跡(田中・鈴木1981)以降の空白期を脱しつつある。

ここでは、今後ようやく着手されることであろう検証作業の叩き台として、根田代遺跡と市原台地周辺地域の環濠集落を含む遺跡群についての現状での知見を明らかにしておく。

第1節 根田代遺跡変遷の概要

根田代遺跡は、残念ながら遺跡中心部の状況が不明ではあるが、独立丘陵上に立地する地形的環境から、遺跡範囲を限定することが可能であり、遺構群の動態、土地利用の変遷が比較的とらえやすい利点がある。ここでは、まず、弥生時代以降を含め、根田代遺跡の変遷の概要をまとめておきたい。

時期区分については、第2章第3節冒頭で述べたとおり、以下の11期とする(黒沢1997・1998、大村1994・2004b・2004c)。

根田代1期	弥生時代中期宮ノ台式終末期(B6・7期)
根田代2期	弥生時代後期久ヶ原1式期
根田代3期	弥生時代後期久ヶ原2式期
根田代4期	弥生時代後期山田橋1式期
根田代5期	弥生時代後期山田橋2式期
根田代6期	弥生時代終末期TB2式期(鴨居上ノ台式期)
根田代7期	古墳時代前期初頭TE1a期(五領1式期古段階)
根田代8期	古墳時代前期前半TE1b期(五領1式期新段階)
根田代9期	古墳時代後期
根田代10期	古墳時代終末期
根田代11期	奈良時代

本報告対象調査区の、弥生時代から奈良時代の検出遺構数は、竪穴(住居)跡95軒(建て替えを含め97軒)、環濠1条、溝1条、円墳1基・方墳7基の古墳計8基、土坑12基、地下式土坑3基、粘土採掘坑4基である。竪穴住居跡95軒は、いずれも弥生時代から古墳時代前期の所産と推定され、A地点83軒、B地点12軒である。弥生時代中・後期85軒、弥生時代終末期から古墳時代前期前半が7軒、不明3軒、時期別では、弥生時代中期29~31軒、後期43~45軒、終末期2~4軒、古墳時代前期前半3~5軒、弥生時代不明10軒、不明3軒である。各時期の軒数は、やや曖昧な表記となるが、1期29~31軒、2期8~12軒、3期13~18軒、4期11~13軒、5期7~8軒、6期2~4軒、7期1~4軒、8期1

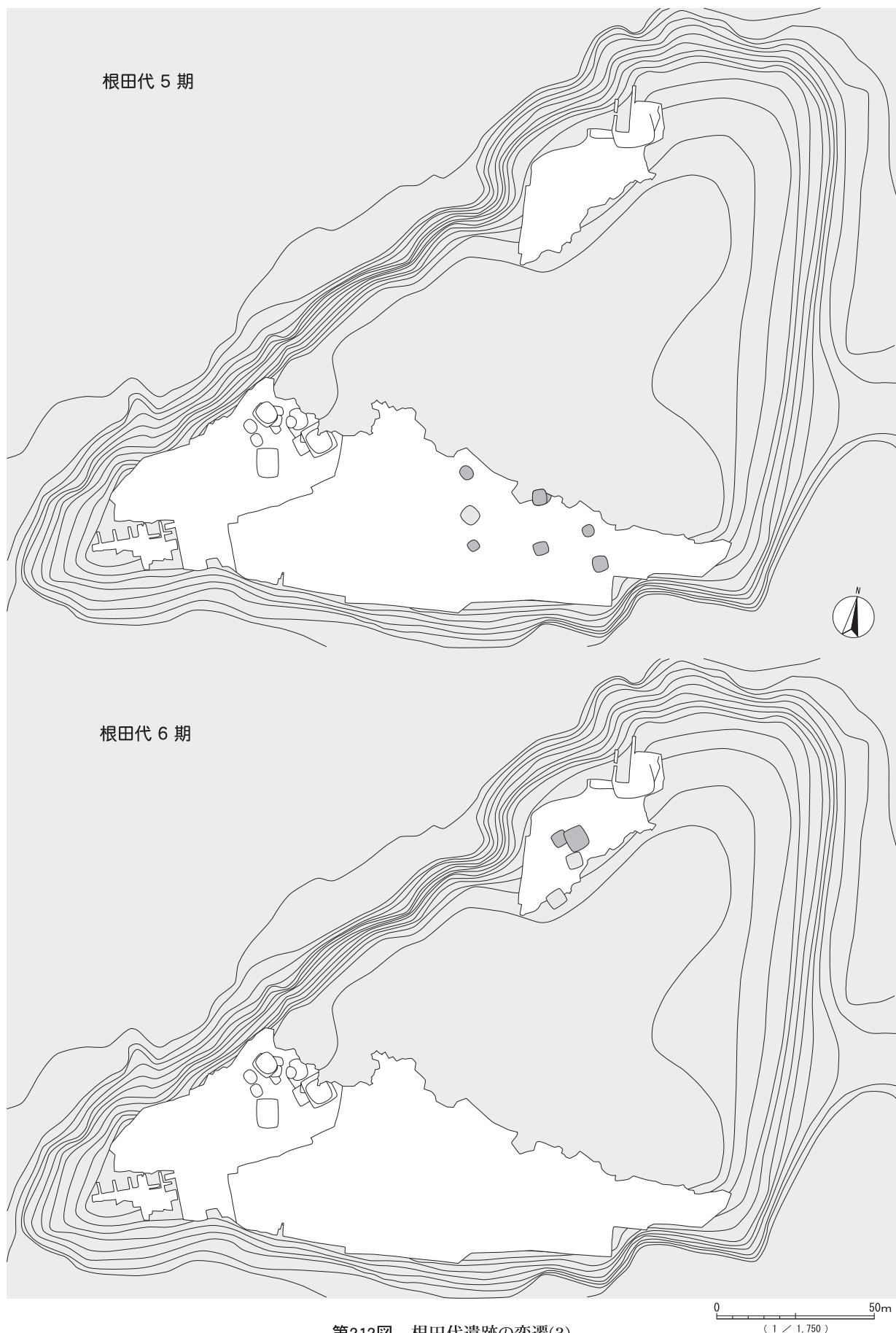


第210図 根田代遺跡の変遷(1)

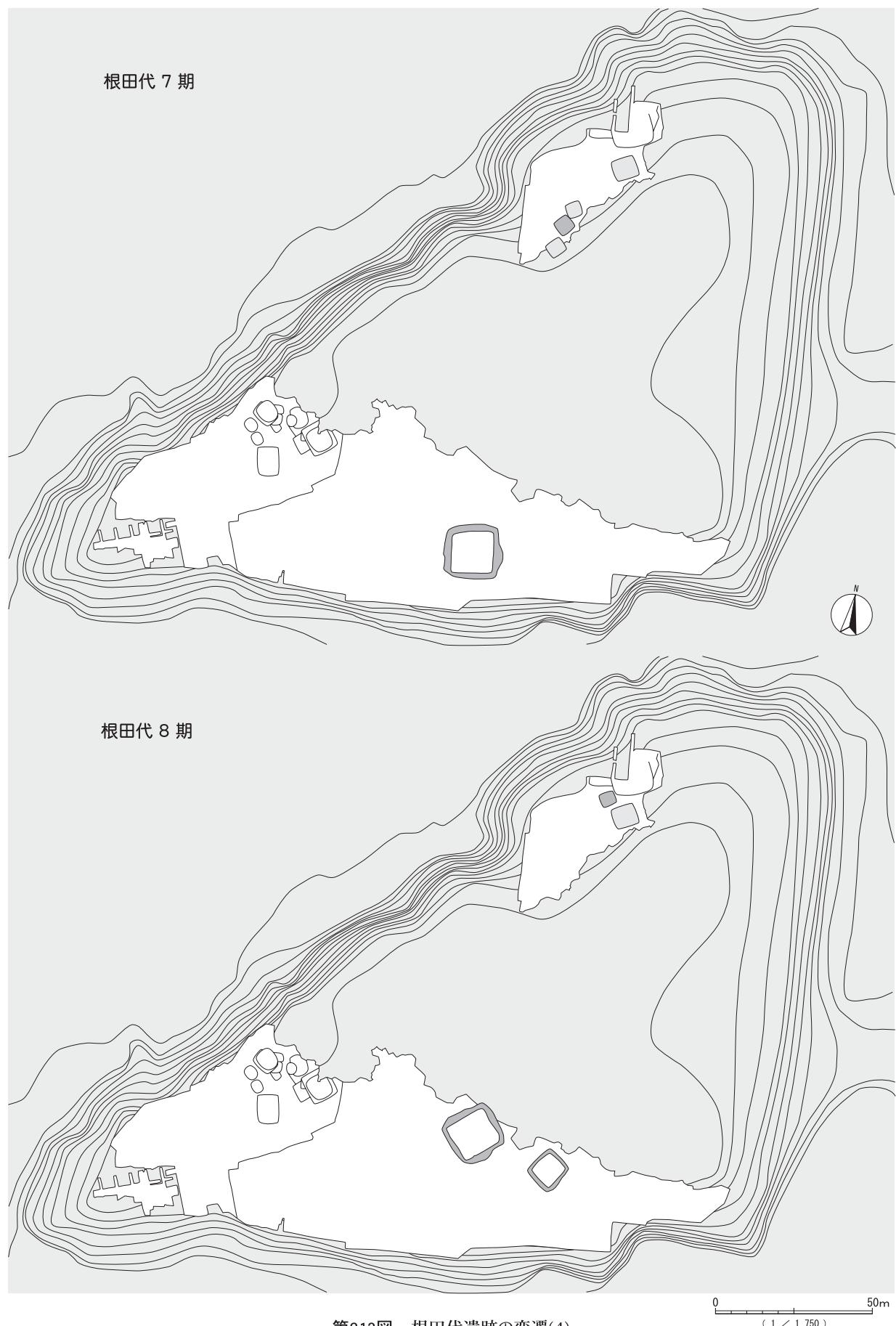
市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



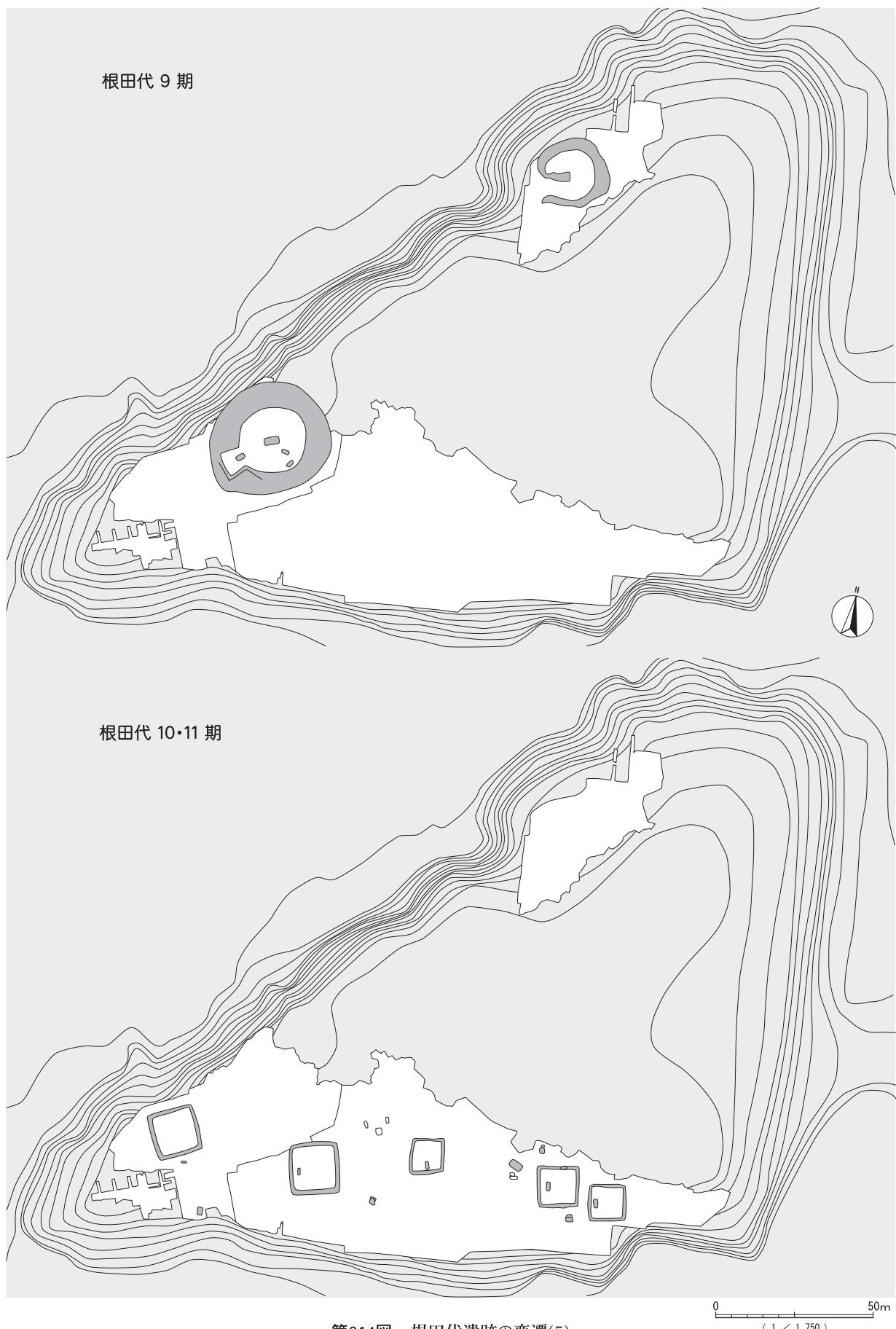
第211図 根田代遺跡の変遷(2)



第212図 根田代遺跡の変遷(3)



第213図 根田代遺跡の変遷(4)



第214図 根田代遺跡の変遷(5)

~2軒となる。1979年度調査区では、弥生時代の竪穴住居跡25軒が検出されており(田中2000)、弥生時代の竪穴住居跡総軒数は113~115軒になる。

1期は、宮ノ台式期終末段階であり、環濠が掘削され、この段階において機能を停止する。環濠規模は推定19,830m²、濠内で18,650m²を測る。竪穴住居跡は、A地点西側を中心とする傾向はあるものの、調査区全体に分布する。竪穴形態は、胴張り隅丸長方形から隅丸長方形を呈し、とくに主柱穴間内区側に炉を設置する傾向がある。1979年度調査区の竪穴住居跡の多くも、全体図から判断するならば、当該期に比定される可能性が高い。

環濠廃絶後も、竪穴住居跡は継続的に累積していく。2期久ヶ原1式期は、1期の竪穴住居跡と対応する分布傾向が認められるが、3期以降次第に中心地点を西側へ移動させていく。後期2~5期の竪穴住居跡は、基本的に時期的な断絶がないと思われるが、5期から弥生時代終末期6期の間、終末期前半段階が明確ではない。ただし、各期竪穴住居跡の分布を考慮すると、未調査区に現状空白期の竪穴住居跡が存在していた可能性は高い。

A地点の竪穴住居跡は、5期をもって終焉し、6期はB地点に現れる。古墳時代前期7期には、A地点は墓域化し、方墳(方形周溝墓)が造墓されるが⁽¹⁾、環濠b5区1(第159図)の底部穿孔壺形土器は、6期に遡るものであり、この段階で、居住域、墓域の区分が明確化した可能性もある。古墳時代前期7・8期は、ともに五領1式に比定されるが、7期は定型化した小形丸底壺成立前段にあたる。この段階は、A地点が墓域、B地点が居住域として利用される。7期2号墳と、8期3・4号墳の立地状況は、やや不自然にも思われるが、6・7期の居住域が遺跡中央部まで及んでいた可能性も想定される。

8期から9期の間は、少なくとも現状調査区においては確実に空白期となり、この間は土器等遺物の出土も限られる。9期は、根田1・5号墳造墓段階であり、ここでは、古墳時代後期、終末期の境界を、便宜的に、根田古墳群における円墳から方墳の転換時期に重ねておく。根田1号墳は、国分寺台地区の後期古墳では、山倉1号墳(小橋2004)に次ぐ規模をもつ。下総系定型化前段の円筒埴輪をもち、「欽明朝期の所産」とする年代が示されている(田中2000)。5号墳は、おそらくこれに継続するものと考えられるが、遺物の出土状況がかならずしも明確ではなく、造墓時期を検討すべき遺物も乏しい。出土須恵器については、7世紀末と推定されるものが主体となり、一部は奈良時代に降るものを含む。土師器杯については、漆仕上げと推定される黒彩で、径の小形化が認められる。少なくともTK209型式期以前には遡り得ないが、これが、造墓時期を示すものであるかどうかは判断できない。鉄鎌については、棘籠被形式であるが、鎌身部はいずれも関部が明確であり、端片刃箭形式を含まない。大刀関部は、一方が深く斜角となるものであり、これらは、少なくとも出土須恵器には対応しない。雜駁ではあるが、6世紀末から7世紀前半の年代を与えておきたい。

10期、終末期方墳群については、7号墳出土須恵器が造営の一時期を示している。杯身蓋逆転期の所産であろう。管切り法によるガラス玉の法量分布(第188図)、および鋳型ガラス玉の調整技法からは(緒方2002)、6号墳 7号墳 8号墳の変遷が推定される。当該地域の方墳は、古墳時代終末期の古墳として終焉することなく、奈良・平安時代まで継続的につくられるが、根田古墳群方墳群は、いずれも墳裾に寄る木棺墓を主体部とし、古墳時代終末期の比較的短期の間の連続的に造墓されたものと推定される。なお、1979年度調査区では、区画をもたない土坑墓(1号土壙墓)から、鍔付直刀1、銅胎銀貼耳環2、琥珀製棗玉11、石製玉4、ガラス玉316が、また石棺墓(1号石棺墓)から銅胎金貼

耳環2が出土している。この点からみると、本報告での土坑についても、多くはこの段階に属す可能性が高い。地下式土坑については、11期、奈良時代に降るが、根田代遺跡の墓域としての利用は、1号地下式土坑出土土師器杯および、5号墳出土須恵器を一応下限として考えておく。

根田代遺跡では、奈良時代の地下式土坑墓以降、近現代にいたるまで、土地利用の痕跡が認められない。1979年度調査区では、中世の台地整形と推定される区画が認められるものの、台地平坦部については、明確な遺構を残してはいない。

第2節 宮ノ台式と久ヶ原式の成立

(1) 宮ノ台式の概要

土器型式の存立の基本は「合意」形成であり、その点でみれば、宮ノ台式は、近年の南関東地方の弥生土器編年で最も研究が進展している部分であろう。研究史に触れる事はしないが、現状では、安藤広道による下末吉台地～期が全体の基準的な大枠となっていると思われるが(安藤1990a・1990b・1996)、房総半島については、小倉淳一(1996)、黒沢浩(1997・1998)らの研究があり、ここでは、主に黒沢の研究成果を参考しておく。市原周辺地域では、過去標式的な資料としてあつかわれてきた菊間遺跡、大厩遺跡以外にも、近年、釜神遺跡、台遺跡などの報告書が刊行され、さらに国分寺台地区の整理作業の進捗もあって、当該地域における宮ノ台式の再編も今後可能であると思われるが、ここでは、根田代遺跡を対象とする中で、宮ノ台式後半期から久ヶ原式成立期の概要について触れておきたい。

宮ノ台式については、今回、黒沢による房総(B)1～7期の細別案を基準とする。東京湾東岸地域では、櫛描文の定着比率が相対的に低いが、現状での地域的枠組みを維持する限りにおいては、黒沢が述べているような2大別、ないし過渡期を別にした3大別が基本となり、擬似流水文・丁字文の櫛描文、王字文・楕円文・十字文等の磨消縄文による単位意匠文が認められる段階と、横帯縄文を主体とする段階に大別することが可能である(黒沢1993)。本稿での、前半期、後半期もこれを区分指標とする。

黒沢による前半期細別案は、他地域との関係をもとに個別遺構資料が相対化されているように見えるが、房総半島全体でもいまだ資料的な制約がある。ただ、市原台地周辺地域では、過去須和田式系としてとらえられていた北島式、御新田式系の一定程度の定着が認められ、菊間遺跡、南総中学遺跡(倉田・相京1978)や、白船城跡3次下層(桜井・黒沢1997)、台遺跡B地点など類例が増加しつつあり、その状況は、小櫃川中流域右岸の袖ヶ浦市西原遺跡(伊藤1999)の墓域である、袖ヶ浦市上泉遺跡群上ノ山遺跡(中能1998)でも確認できる。北島式の提唱もあり、その成果に即した検討も必要と思われるが、今回は触れることができない(吉田2003a・2003b、埼玉県考古学会2004)。

宮ノ台式後半期は、横帯縄文を基本的特徴とし、B4期を前半期との過渡期として、B5期からB7期に区分されている。黒沢によるその変遷過程は、単斜縄文を基本要素とし(大崎台3期=B5期)、単斜縄文に羽状縄文・回転結節文が加わる段階(大崎台4期=B6期)、羽状縄文の発達と重畠化、回転結節文の区画文として採用と意匠文としての減少(大崎台5期=B7期)が指標として設置されている。また、単斜縄文は沈線区画をともなう段階から無区画へ移行すること、胴部有段の「輪積み甕」の出現と、横走羽状文の減少(大厩3期=B6期)などが、段階指標として認められる。これらは、小倉の編年基準ともおおむね一致する。ただ、別稿で述べたように。B7期、とくに菊間4期について

は、久ヶ原式への傾斜が明確であり、宮ノ台式と久ヶ原式との関係の中で再整理が必要となる。久ヶ原式への端緒は、B6期には成立するが、久ヶ原式からみた基本属性は、壺形土器の羽状縄文重畠による帯縄文2帯化、沈線区画、山形縄文帯、複合(折返し)口縁(A・B類、大村2004b分類)、甕形土器の粘土紐積上げ痕による口頸部多段(A類)、単段(B・C亞1類)、ナデ整形、交互押捺(刻み)波状口縁、口縁部有段ないしは帯縄文沈線区画(B・C類)の椀形土器などの諸点に整理することが可能であり、これらのうち、壺形土器の帯縄文2帯、沈線区画、山形縄文帯、甕形土器Ba・Bb・C亞1類(第218図)は、甕形土器口唇部の表裏指頭押捺波状、交互押捺と伴する。これに対して、壺形土器口縁部形態A・B類、甕形土器A類の成立は段階として遅れ、甕形土器口唇部交互押捺への変換と一致する可能性が高い。その成立段階は、菊間4期、椎津茶ノ木遺跡123号遺構(木對1992)にみることが可能であり、これら属性の一体的な成立をもって、宮ノ台式と久ヶ原式を区分することが適当であると考える(大村2004b・2004c)。

この区分原理を前提とすると、宮ノ台式B6・7期については、再整理が必要となるが、とくに黒沢による菊間4期については、第6号溝状遺構をのぞくと、基本的には久ヶ原1式に含まれると考える。また、大厩4期におけるY-22・33・72号址は、久ヶ原式への傾斜というよりも、久ヶ原2式の混在が認められる。大厩遺跡は、久ヶ原1式が明確ではない点にやや疑問を残すが、菊間遺跡、根田代遺跡などとの比較からみれば、大厩遺跡における久ヶ原式は、久ヶ原2式を主体とする。したがって、菊間4期については久ヶ原1式に組み込むとしても、大厩遺跡における宮ノ台式B7期の存立には検討の余地がある。ただ、黒沢が大厩3期(B6期)とする大厩遺跡Y-47号址では、重畠化した羽状縄文の発達による文様構成の選択限定化が認められ、甕形土器の横走羽状文も客体化する。市原台地周辺地域で、この段階に比定されるものには、姉崎東原遺跡A地点007住居跡(高橋1990)、祇園原貝塚32号住居(忍澤1999)などがある。これらの竪穴住居跡例は、無区画の単斜縄文も伴するが、単節羽状縄文の重帯・重畠化が認められ、007住居跡では沈線区画、山形縄文帯を構成要素とする。壺形土器口縁端部には、端部の拡張がみられ、甕形土器は、胴部が張り、胴部最大径が口縁部径を上回るものも存在する。口唇部は、指頭による押捺波状を基本とするが、横走羽状文は客体化し、32号住居では、口縁部有段例も認められる。

市原台地周辺地域のこの段階の壺形土器は、周辺地域と比較して、帯縄文2帯化が明確であり、久ヶ原式への傾斜がいちはやく認められる可能性もあるが、基本的には、姉崎東原遺跡A地点007住居跡、祇園原貝塚32号住居段階は、大崎台5期、佐倉市大崎台遺跡270・431号住居址に併行するものと考えておきたい(柿沼・千田1985・1986・1987)。なお、大崎台遺跡431号住居址には、久ヶ原1式に比定される椎津茶ノ木遺跡123号遺構出土例とほぼ同段階と推定される佐野原1式の口縁部連弧文土器が伴するが、宮ノ台式と久ヶ原式との関係では、段階として区分すべきであると考える(大村2004c)。

宮ノ台式B6期とB7期については、久ヶ原1式を認めたとしてもなお成立する余地を残している(第13表)。ただ、B6期大厩遺跡Y-38・44号址など、横帯縄文の羽状化とともに重畠化は進行しているが、一方、宮ノ台式内において、羽状縄文が単斜縄文、回転結節文に対して主体化する段階の設置が可能かどうかはかならずしも明確ではない。宮ノ台式B7期は、久ヶ原1式を除外した場合、他の各段階と同レベルでの細別区分としては、適用において問題を残すと思われる。

(2) 根田代遺跡の宮ノ台式

根田代遺跡は、本来編年的検討の前提となるべき、遺構検出状況による新旧関係がかならずしも明確ではなく、また、土器の出土状況も把握されているわけではない。したがって、宮ノ台式については、前述の整理のもとに、遺跡全体での編年的範囲、継続時期について検討を加えておく。

根田代遺跡の宮ノ台式は、有東・宮ノ台式系の櫛描文、所謂「須和田系」は、明らかに希薄であり、擬似流水文は唯一31号竪穴(第74図)より、またその系譜下にある楕円文も、A地点環濠P2区35(6層)(第147図)のみであり、これらも、伴出土器をみる限りでは前半期に遡るものとはいえない。

竪穴住居跡単位での組成は、遺物量の少ない12・13・14・19・27・33・38・61・70・72・73・85号竪穴をのぞくと、1・44号竪穴以外、4・5・11・18・22・25・29・31・37・41・42・46・47・48号竪穴で回転結節文が伴出している。また、羽状縄文は、久ヶ原式との分別が明確ではないものも含むが、1・4・5・22A・25・37・41・42・44・46・47・48号竪穴より出土している。「輪積み甕」ないしその祖型と考えられる有段の甕形土器も、5・11・14・25・31・33・37・42・46・47・48号竪穴等で出土している。これに対して、例えば結紐文は、端部の遺存しているものではあるが、5号竪穴108(第43図)、24号竪穴67(第65図)、25号竪穴28・33(第68図)、41号竪穴53・54(第89図)、B地点環濠G5区5(第162図)等にすぎず、24号竪穴、G5区例は充填縄文が羽状化している。

これらの中で、姉崎東原遺跡A地点007住居跡、祇園原貝塚32号住居段階、B7相当期は、5号竪穴(第40～44図)が対応すると考えられ、横帯縄文の2帯化が認められる。7・9は羽状縄文帯と結節文帯により構成され、9の上帯は、羽状縄文帯と結節文帯が重層する。甕形土器の横走羽状文も客体化しており、有段の甕形土器との組み合わせとなる。また、47号竪穴(第95～97図)では、後述するように久ヶ原式と直接関連するC亞1類(51・52)が出土している。

これに対して1号竪穴(第35図)は、回転結節文を欠き、沈線区画の横帯縄文、横走羽状文の甕形土器があり、古相を示す可能性がある。また、29号竪穴(第72・73図)は、2軒の竪穴住居跡が重複し、土器の帰属は不明確ではあるが、沈線区画の意匠文、沈線区画回転結節文の横帯連結山形文帯が認められる。しかし、これらについても、宮ノ台式B6期より以前に遡るものではない。根田代遺跡の状況は、

	宮ノ台式			久ヶ原式	
	仮B5期	(仮B6・7期)		1式	2式古段階
市原市域基準	大厩Y-69号址 菊間14号住 菊間16号住 菊間49号住 若宮C地区	大厩Y-31号址 大厩Y-38号址 大厩Y-52号址 菊間44号住 菊間2号周溝 祇園原貝塚2号住 向原台64号住	大厩Y-47号址 大厩Y-73号址 菊間15号住 菊間6号溝状遺構 姉崎東原007住 祇園原貝塚21号住	椎津茶ノ木123号 菊間1号住 菊間10号住 菊間18号住 菊間28号住 南向原3号住 千草山131号住 山田橋大山台48号住	大厩Y-19号址 大厩Y-20号址 大厩Y-33号址 大厩Y-60号址 坊作221号住 坊作232号住 小田部新地14号 東官台002号住
根田代竪穴住居跡		1号竪穴 29号竪穴 31号竪穴	5号竪穴 47号竪穴	3号竪穴 7号竪穴 20号竪穴 26号竪穴 59号竪穴	(24号竪穴) (51号竪穴)
根田代環濠I-P区		(7・8層)	(4～6層)	2・3層	
根田代環濠Q-X区		6～8層		5層	3・4層
黒沢編年(1997・1998)	B5期	B6期	B7期		
小倉編年(1996)	ET II b期		ET III期		
安藤編年(1990a・b)	SiIV期	SiV期前半	SiV期後半		

第13表 市原台地周辺地域宮ノ台式・久ヶ原式編年基準

Grid	I 2	J 2	K2	L 2	M 2	N 2	O 2	P 2	Q 2・3	R 2・3	S 2・3	T 2・3	U 3	V 2・3	W 3	X 3	Y 3・4
土層の厚さ(cm)	205	177	182	185	180	182	182	160	145	142	152	162	172	185	180	187	205
全体(ε)	10,855	16,330	11,250	16,880	10,250	13,480	5,930	13,590	8,040	18,420	13,700	26,440	15,920	24,400	10,860	19,120	11,290
土器密度指数*	53.0	92.3	61.8	91.2	56.9	74.1	32.6	84.9	55.4	129.7	90.1	163.2	92.6	131.9	60.3	102.2	
2・3層(上層)	3,500	4,630	3,920	6,670	1,480	2,920	2,090	1,900	4,960	4,910	7,640	14,320	4,750	9,530	4,210	540	
4層	2,160	650	710	2,750	680	320		1,360		880	2,750	3,670	4,500	7,250		7,990	
5層	2,080	2,390	1,010	1,030	6,720	310	770	3,190	1,790	290	2,520	6,240	5,950	1,820	1,520	2,310	
6層	1,600	5,930	2,960	3,880	220	3,720	1,020	3,760	1,160	1,110	290	1,300	310	1,320	1,210	700	
7層	1,055	1,960	960	1,660	410	5,590	1,130	1,400	130	810	500	850	220	1,390	660	260	
8層	460	290	90					150		210		60	190		200	1,380	
一括		480	1,600	890	740	620	920	1,830		10,210					3,090	3,060	5,940
																	11,290

* V字溝の上面幅や形態は基本的に同じと仮定

「上層」の本来の対応層は不明確

Grid	I 2	J 2	K2	L 2	M 2	N 2	O 2	P 2	Q 2・3	R 2・3	S 2・3	T 2・3	U 3	V 2・3	W 3	X 3	Y 3・4
上層	山田橋式 久ヶ原式		久ヶ原式 1・2古	久ヶ原式 1・2古	久ヶ原式			久ヶ原式	久ヶ原式	久ヶ原式	久ヶ原式	久ヶ原式 2式 久ヶ原式	久ヶ原式				
2・3層	久ヶ原式	久ヶ原式										久ヶ原式 2式	久ヶ原式	久ヶ原式			
4層	久ヶ原式 B6・7期	久ヶ原式						久ヶ原式 B6・7期		久ヶ原式 B6・7期	久ヶ原式	久ヶ原式 2式	久ヶ原式	久ヶ原式	久ヶ原式 B6・7期	久ヶ原式	
5層	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	
6層	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	
7層	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	B6・7期	
8層	B6・7期																

第14表 A地点環濠地区・層位別土器出土量と時期

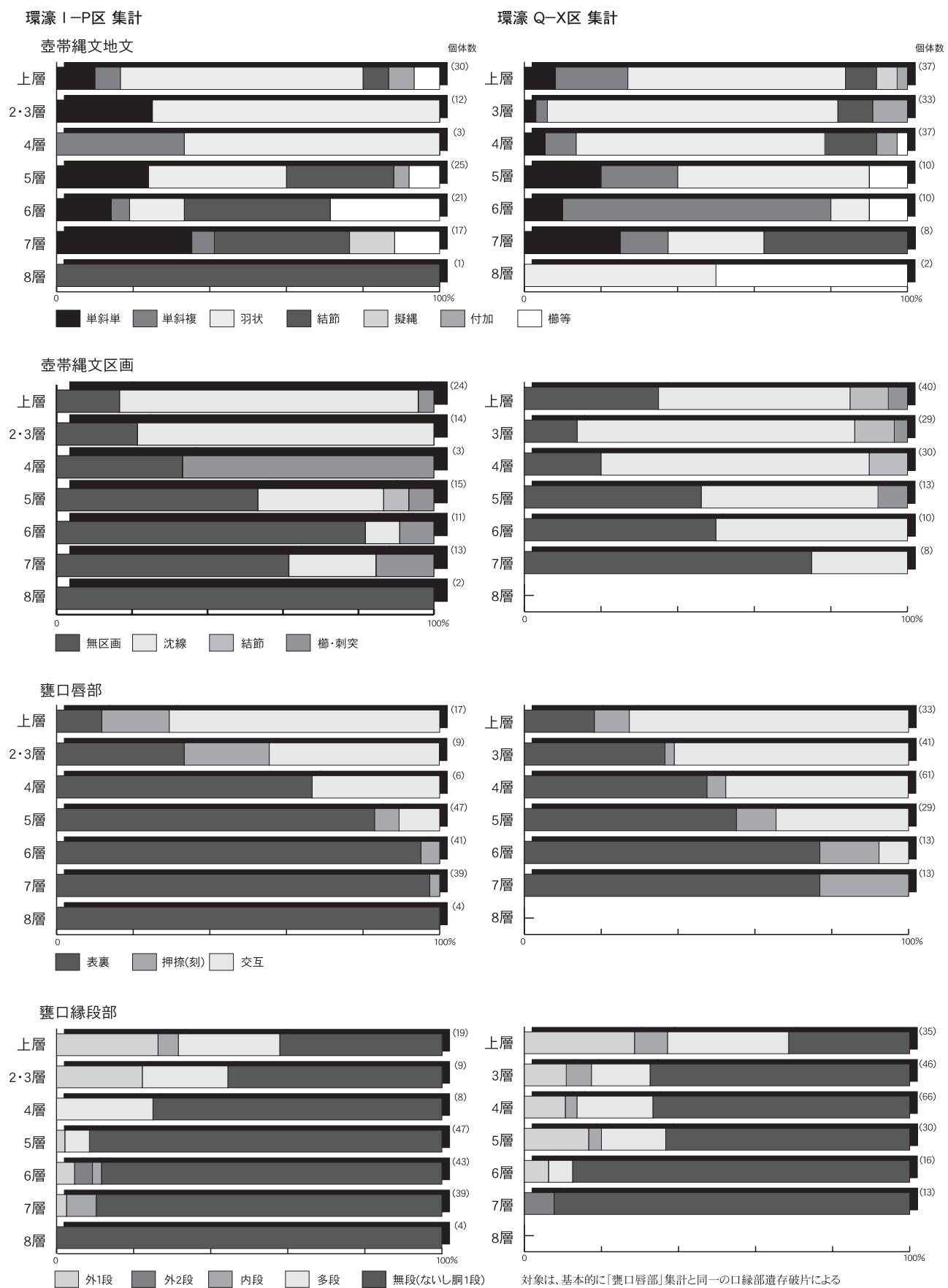
遺物出土状況が明確ではない点もあり、竪穴住居跡の重複による土器の散在化、各要素の普遍化を生じている可能性も考えられる。しかし、個体単位でみても、B6期前段は明確ではない。可能性として、前述した擬似流水文、あるいは80号竪穴12(第124図)の沈線区画横帯単斜縄文の広口壺形土器などが候補となるが、B5期に比定すべき確証がもてない⁽²⁾。

根田代遺跡において、層序的な検討が可能な遺構としてA地点環濠がある。宮ノ台式は、I2区～N2区の7～5層などで多量に出土しており、7～5層の層厚は、地区によっては1.4mに達する。第215図は、主な属性要素を地区・層別に集計したものであるが、層別の合算集計は、東西調査区で時期的に若干の齟齬を生じているため、西側のI-P区、東側のQ-X区を別にした。

全体としては、甕形土器口唇部押捺などに、久ヶ原式への移行が明確に認められる。I2区～N2区など西側調査区5層ないし4層は、やや土器出土が希薄化するものの、3・2層で久ヶ原式が多量に出土する。東側T2・3区周辺の状況をみても、久ヶ原式成立段階の土器群が認められ、その下部は、宮ノ台式最終未段階を含むものと推定される。また、最下部のI2区8・7層、比較的遺物量の多いN7区7層などでも回転結節文があり、竪穴住居跡群との比較においても、明確な段階差は認めにくい。ただ、I-P区の集計では、6・5層において、羽状縄文の増加が認められ、単斜縄文単段と回転結節文の組み合わせによる8・7層と、これに羽状縄文が加わる6・5層に区分が可能である。環濠の場合は、基本的に機能停止期以降の遺物を含むと考えるべきで、とくに、6・5層については、意図的な埋め戻しをともなう可能性がある。その過程で道としての利用も認められるが、比較的短期間のうちに埋没が進行したと思われる。これに対して、8・7層は、環濠機能時の自然堆積層としてとらえられ、土層堆積状況にもとづく現場所見と一致する。ただ、6・5層についても、羽状縄文が他を圧倒する状況は認められず、羽状縄文とともに沈線区画の増加も指摘できるが、他に型式区分につながる組成変化を確認することはできない。口縁部有段の甕形土器は、8・7層にも存在し、横走羽状文についても、全体に出現率が低く、明確な傾向は認められなかった⁽³⁾。

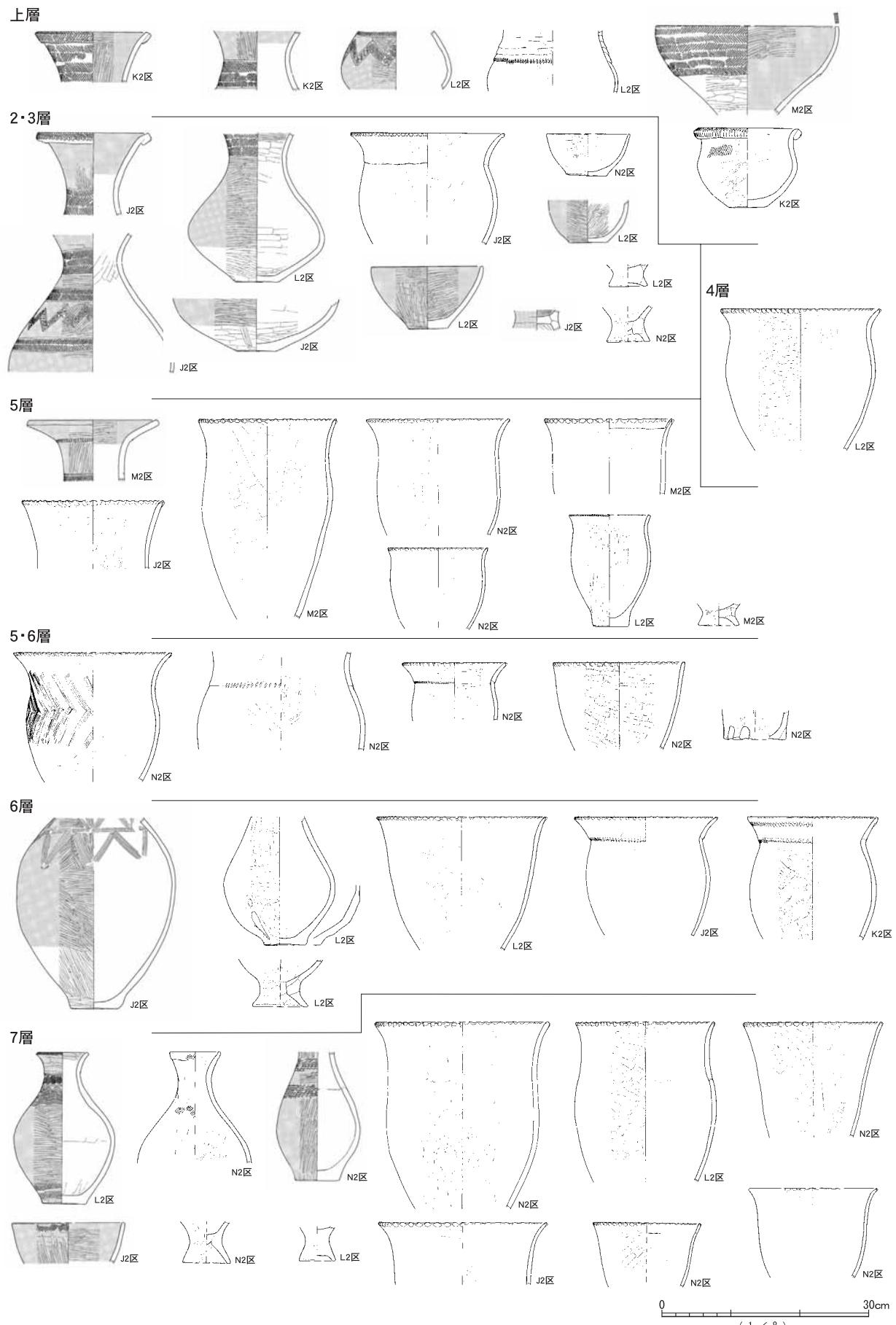
8・7層と6・5層は、傾向として宮ノ台式B6期とB7期に対比が可能ではあるが、前述したように、B6期とB7期については、他の各段階と同レベルでの細別区分とは考えない。

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落

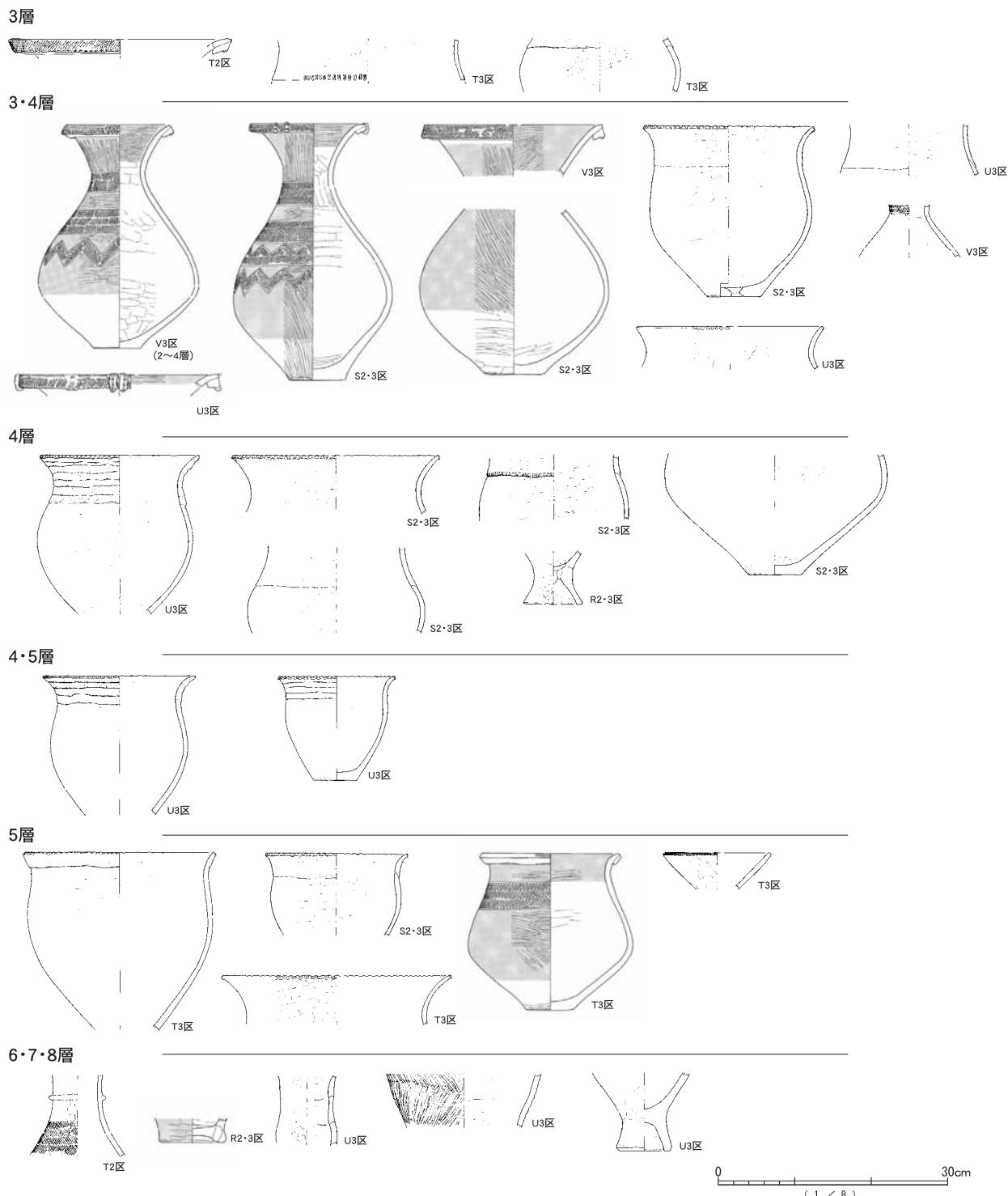


第215図 環濠出土土器層序別属性比

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第216図 環濠層位別出土土器(I-P区)



第217図 環濠層位別出土土器(Q-X区)

(3) 久ヶ原式の成立過程

根田代遺跡では、環濠の機能停止期以降も継続的に竪穴住居群が形成され、久ヶ原式成立期の様相を明確にとらえることが可能である。後期については、別稿において「久ヶ原式」と「山田橋式」に大別し、さらに細別4段階、細々別6段階の設定を行った(大村2004b・2004c)。根田代遺跡、坊作遺跡、山田橋遺跡群によって、資料的には各期を網羅することとなり、編年的な枠組みの整備は完了しつつある。本遺跡では、宮ノ台式から久ヶ原式への移行過程が比較的明確であることから、久ヶ原式

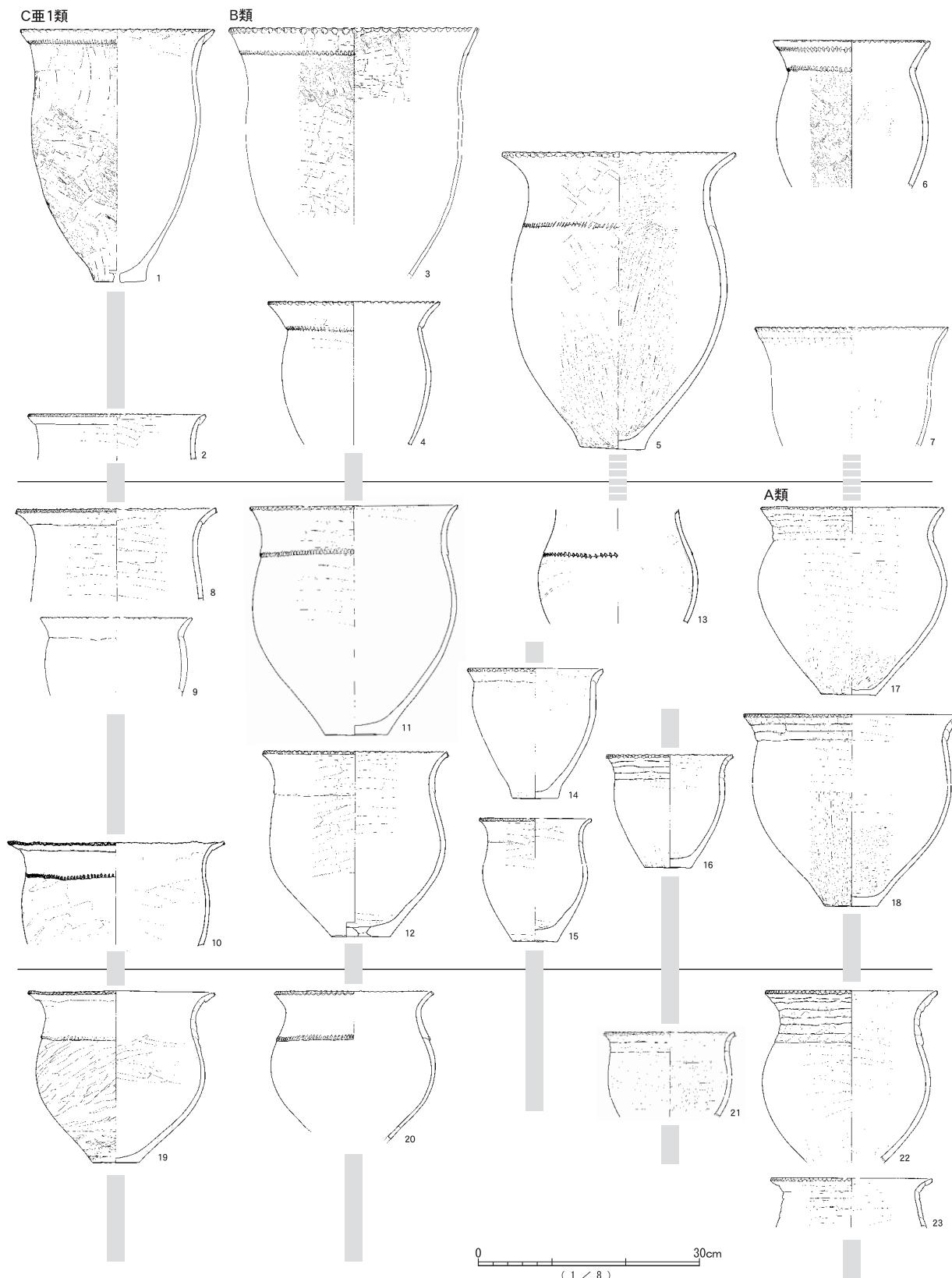
成立期について、若干の検討を加えておく。

久ヶ原式は、前述したように、壺形土器口縁部形態A・B類、帯縄文2帯、沈線区画、山形縄文帯、口縁端部交互押捺(刻み)による甕形土器A・Ba・Bb・C亜1類、有段ないし沈線区画帯縄文の椀形土器の一体的な成立をもってとらえることが可能であり、とくに甕形土器は、宮ノ台式からの連続的な組列が明確である(第218図)。宮ノ台式から久ヶ原1式の甕形土器は、口縁部に所謂折り返し口縁状の段部をもつC亜1類が指標となる(松本1993)。これは、宮ノ台式に成立するが、口唇部施文の型式変化、すなわち、表裏押捺から、口縁端部の交互押捺(刻み)への変化に、宮ノ台式終末段階から久ヶ原式成立期を重ねることができる。

所謂「輪積み甕」の端緒は、宮ノ台式B6期における、口縁部有段のC亜1類、頸部有段のB類の出現にあると推定される⁽⁴⁾。宮ノ台式C亜1類は、23号竪穴50・52(第63図)、27号竪穴5(第68図)、31号竪穴35(第74図)、33号竪穴63(第77図)、37号竪穴39(第86図)、42・43号竪穴28(第92図)、48号竪穴38(第98図)などであり、段部はやや扁平で、段部下端に押捺を加えることが一般的である。C亜1類は、20号竪穴1・2・41(第55・56図)、33号竪穴56(第77図)、59号竪穴4(第107図)、A地点環濠I2区59(第139図)、A地点環濠K2区24(第141図)、A地点環濠T3区1・65(第152・153図)、A地点環濠d5区1(第159図)など、久ヶ原式に連続する組列を認めることができる。とくに、宮ノ台式期の47号竪穴5・112～114(第95・96図)は、口縁段部断面形状が久ヶ原式に類する。47号竪穴例は、他の甕形土器の口唇部がいずれも表裏押捺であるのに対し、口縁端部への棒状工具腹部等による押捺であり、類例は、大厩遺跡Y-47号址などで認められる。ただし、大崎台遺跡第431号住居跡、椎津茶ノ木遺跡123号遺構例にみられる広口の壺形土器の可能性も考えられ、47号竪穴51～53は、口縁端部に単節斜縄文ないし擬縄文が施文される。所謂折り返し口縁は、周辺地域を含め、「後期」の土器編年上の指標としてとらえられるが、その端緒を認めることができる。このC亜1類は、久ヶ原1式において、東京湾岸地域に普遍的な分布が認められ、久ヶ原式成立の同時性を証明するものと考えられる。C亜1類は、おおむね宮ノ台式から久ヶ原1式に限定され、久ヶ原2式には、B類と形式的に一体化し、B類の亜式として山田橋1式まで存続する。

B類は、頸部屈曲部にあわせて幅広の段部をもつものである。宮ノ台式については、5号竪穴22・23(第41図)、22号竪穴(23・24号竪穴)61・62(第62図)、23号竪穴56(第63図)、28号竪穴26～28(第71図)、31号竪穴37(第74図)、61号竪穴8(第110図)、A地点環濠J2区3(第140図)、A地点環濠N2区11(第145図)などをあげることができる。本類は、5号竪穴22・23、22号竪穴(23・24号竪穴)61、23号竪穴56、大崎台遺跡第144・431号住居跡にみられるように、胴部横走羽状文との組み合わせが目立つ。B類は、頸部径の収縮による器形変化にともないC亜1類から派生したと考えることもできるが、宮ノ台式段階では、個体単位での区分が不明瞭で、おそらく、器形変化にともない、形式的な差違が明確化していった考えるべきであろう。B類は、A地点環濠A2区1(第138図)、N2区12(第145図)のように、胴部の張りの強化によって、胴部位置に段部を降下させたものが派生する。その系譜は、袖ヶ浦市上大城遺跡(第218図13)(笠生1994)など、久ヶ原1式段階でも確認できるが、久ヶ原1式におけるA・B・C亜1類の段部最下段位置は、頸部周辺を基本とし、その降下は、久ヶ原2式で明確になる。

なお、宮ノ台式B類には、頸部と口縁部両方に段部をつくるものが存在する。その押捺位置は特徴



1 祇園原貝塚21号住居、2 47号竪穴、3 祇園原貝塚32号住居、4 環濠J2区、5 環濠A2区、6 環濠K2区、7 祇園原貝塚41号溝、8 環濠d5区、9 20号竪穴、10 下大城遺跡8号住居、11 22号竪穴、12 環濠S2・3区、13 下大城遺跡10号住居、14 59号竪穴、15 環濠S2・3区、16 環濠U3区、17 3号竪穴、18 26号竪穴、19 小田部新地遺跡14号遺構、20 坊作遺跡230号住居、21 24号竪穴、22 環濠U3区、23 24号竪穴

第218図 宮ノ台式、久ヶ原1・2式壺形土器変遷

的であり、口縁段部下端と口縁端部内面側に加えられる。A地点環濠K2区3(第141図、第218図6)の他にも、5号竪穴162・164～166(第44図)、25号竪穴57(第68図)、29号竪穴36(第73図)、31号竪穴36(第74図)、33号竪穴59(第77図)、35号竪穴74(第81図)、37号竪穴40・41(第86図)などがあり、組成上一定量を占める。ただし、その押捺手法の系譜的関係は明確ではない。

口頸部多段のA類は、宮ノ台式から基本的に除外すべき要素であり、初現例としては、祇園原貝塚41号溝例(第218図7)をあげることもできるが、これは、連続的な指頭押捺が強調されているものの、粘土紐積み上げ痕は基本的に消去されている。本遺跡3号竪穴1・2(第37図)、7号竪穴21(第47図)、26号竪穴1(第69図)、59号竪穴1(第107図)、A地点環濠U3区5・7(第154図)あるいは菊間遺跡第18・28号住居址など、口縁端部はいずれも交互押捺であり、その成立は久ヶ原1式の指標としてとらえられる。なお、段部断面形状は、肉厚で連続的な指頭痕を残すものがより古い特徴と考えられていたが、根田代遺跡における久ヶ原1式の諸例は、横方向のヘラナデにより扁平、平坦化しているものが多い。

他に、口縁部内面側に段部をつくるC亜2類も、宮ノ台式から久ヶ原式移行期に特徴的に認められ、宮ノ台式については、23号竪穴、61号竪穴などで、B類ないしC亜1類と併出する。

五領式成立にいたる壺形土器の器形変化は、全体として頸部径の収縮と、胴部球形化を指向し、宮ノ台式B6・7期から久ヶ原1式において頸部屈曲が進む。その後は、頸部屈曲が一端鈍化し、段部最下段位置は、山田橋2式まで降下を続け、胴部最大径位置付近まで段部を拡張する。ただ、久ヶ原2式には、24号竪穴7(第64図、第218図23)のように、口唇部を短く屈曲させるものが認められる。

当該地域の壺形土器文様帶は、前述したように、宮ノ台式最終末段階において、羽状縄文の重畠化と頸部文様帶の形成による横帯縄文2帯に収斂していく傾向が認められる。久ヶ原式の成立は、複合口縁と横帯縄文の沈線区画への限定規格化が指標となる。椎津茶ノ木遺跡123号遺構では、回転結節文による横帯文、結紐文連結による山形文があり、また、大厩遺跡Y-19号址では、椀形土器の帯縄文の地文として結節文が確認できるが、これは過渡期的ないしは客体的な混在であり、とくに区画文としての結節文は、久ヶ原式において基本的に除外される。前稿では、宮ノ台式期と終末期の間を、久ヶ原式と山田橋式に大別したが、その基準は、壺形土器、広口壺形土器、椀形土器、高杯形土器各器種形式を横断する、「様式」的変化としての帯縄文沈線区画(久ヶ原式)と結節区画(山田橋式)である。その編年指標としての有効性については、近年、これを曖昧化する方向で検討が進められてきた(諸墨1993、小高1995)。しかし、前稿で集計結果を提示したように、帯縄文区画は、壺形土器、広口壺形土器、椀・高杯形土器と一体的な変化が認められ、壺形土器口縁部形態、壺形土器口頸部文様位置など、区画変化に対応した組成変化が検証可能である(大村2004b第181図)。また、久ヶ原2式を主体とする坊作遺跡では、結節区画は皆無であるし、今回のA地点環濠集計(第215図)をみても、久ヶ原式における帯縄文区画文の沈線への限定化は明らかである⁽⁵⁾。

久ヶ原1式と2式の壺形土器は、本遺跡においてもなお特定が難しい。ただ、3号竪穴3(第37図)、菊間遺跡第1号住居址例などは、所謂折り返し口縁(B類)の初現的な定型化前の形状を示すものと考えられる。これに対して、本遺跡の状況をみると、口縁部形態A類は明らかに希薄である。A類は、断面形が三角形状を呈するものであり、B類が地域的な普遍性をもつのに対して、本類は久ヶ原式・山田橋式に特徴的に認められる形式である。口唇部外面ないしは口縁端部に粘土紐を多段に貼付け、

加飾面の拡張を特徴とするものであり、おそらく、久ヶ原2式において発達する可能性が想定される。

なお、久ヶ原1式期の20号竪穴28(第56図)は、櫛刺突による羽状文、区画列が認められ、菊川式と推定される。小破片のため、混在の可能性もある。菊川式は、市原台地でも類例が増加しつつあり、久ヶ原式期では、他に御林跡遺跡120号遺構に類例がある(木對2004a)。西部東海、近畿との広域編年網に精度を与えるためには、菊川式との関係整備が不可欠であるが、現状においてもとくに後期前半期についての対応は明確ではない⁽⁶⁾。

また、A地点環濠集計(第215図)にもみられるように、久ヶ原式では、付加条3種の一定量の定着が認められる。これに対して、山田橋1式以降、安房地域の影響による網目状燃糸文が当該地域にも波及する。個体単位では識別が困難なものもあるが、系譜的には明確に区別すべきである⁽⁷⁾。

久ヶ原1式の楕形土器は、7号竪穴(第47図)、28号竪穴(第71図)でまとまって出土している。幅広の口縁端部をもち、口縁部有段、帯縄文沈線区画を特徴とする。ただし、久ヶ原2式との型式的な差違は明確ではない。宮ノ台式との関係では、23号竪穴5(第63図)、26号竪穴6(第69図)の無頸壺形状のものが問題となるが、宮ノ台式においても、浅鉢器形は、祇園原貝塚の3号住居、E3-13・23区などで認められる。この段階では、沈線区画は明確ではない。宮ノ台式の楕形土器は、14号竪穴2(第51図)にみられるように、段部は無押捺で、段部接合痕を明瞭に残さず、ケズリ出し状になるものが多い。久ヶ原1式では、7号竪穴1がその特徴を残している。

第3節 中期環濠集落と後期集落

(1) 根田代遺跡の環濠集落

根田代遺跡の環濠規模は、推定19,830m²、濠内で18,650m²を測る。根田代1期の竪穴住居跡は、本報告対象地区で約30軒を数えるが、1979年度調査区では、弥生時代の竪穴住居跡25軒が検出されており、全体で濠内70~80軒程度と推定される。竪穴住居跡間の重複も認められ、また、他の環濠集落と比較しても、時期幅に比較して竪穴住居跡の密度がやや高いようにもみえる。これは、宮ノ台式期で根田代1期(宮ノ台式B6・7期)の占める実際の年代幅にも関連するが、なお「根田代0期」の存在には注意する必要があると思われる。ただ、少なくとも本報告対象地区の所見としては、宮ノ台式B6・7期前半の集落設置とともに環濠が開削され、B6・7期後半には機能を停止したと考えざるを得ない。

宮ノ台式の竪穴住居跡は、隣接する台遺跡、御林跡遺跡、長平台遺跡でも検出されており、とくに台遺跡では、宮ノ台式前半期の環濠集落が形成されている。このうち、台遺跡B地点、御林跡遺跡南調査区(1984・85・87年度調査区、旧根田遺跡)(木對2004a)について報告書が刊行され、御林跡遺跡北調査区(1978年度調査区)(谷島1979)、長平台遺跡(半田・白井1982)で現在整理作業が行われている。宮ノ台式前半期と推定される台遺跡環濠集落については後述するが、後半期各期についても、散在的な竪穴住居跡の分布が確認できる。根田代遺跡と同時期、宮ノ台式B6・7期の竪穴住居跡も存在しており、少なくとも土器編年上、根田代遺跡環濠開削前、埋没以後に限定されるわけではない。これら遺跡群の全体構造は、整理作業の進捗の中で、改めて検討すべき必要があると思われる。

根田代遺跡の墓域については、1979年度調査区、環濠外台地西側先端部で2基の方形周溝墓が検出されている。全体図からは、四隅開口形と推定される1基を確認することが可能であり、もう1基

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第219図 南関東地方環濠集落分布図

(大村2004cより、一部改変)

については、溝跡が交錯しており判断できない。本報告調査区内でも、B地点の1号溝は方形周溝墓の可能性を残す。また、台遺跡B地点の方形周溝墓群には(第220図)、9号方形周溝墓(第221図)などB6・7期に比定されるものも混在する。御林跡遺跡の状況がなお不明確ではあるが、おそらく、台遺跡環濠集落上に展開する方形周溝墓群が、根田代遺跡環濠集落に対応する可能性が高い。また、台遺跡D・E地点でも四隅開口形の方形周溝墓群が検出されているが、詳細は明らかではない。

なお、国分寺台地区では、天神台遺跡(諏訪台遺跡)において、約50基におよぶ四隅開口形の方形周溝墓群が検出されている(浅利1985・2002、田中2000)。集落の隣接は確認されておらず、君津市常代遺跡(伊藤・甲斐1996)や袖ヶ浦市向神納里遺跡(稻葉1995)の状況もこれに類する可能性がある。少なくとも当該地域では、居住域に対して、独立墓域を形成する場合も想定しておく必要があろう。

(2) 市原台地周辺地域の環濠集落

南関東地方において、環濠集落ないしV字溝が検出されている遺跡は、管見によるだけでも古墳時代前期初頭を含め176遺跡を数えることが可能であり(第219図)、千葉県下ではこの内40遺跡が所在する(第15表)。その中でも、市原台地周辺地域は、弥生時代中期において、神奈川県鶴見川流域、東京都荒川流域とともに、濃密な分布が認められる。

環濠集落を列島規模でみるならば、その性格は多様であろう。しかし、その多様性の多くは環濠集落の成長の過程で派生するものと考える。また、関東地方の事例をみる限り、内在的な集団意識のみによって成立するものではない(寺澤1998)。環濠集落と土器型式の波及拡散には、きわめて密接な関係があり、環濠開削の契機を総論として述べるならば、集団移住にともなう集団間の接触と開発の拠点設置を主因として考えるべきであろう。後期の事例ではあるが、相模湾沿岸地域、武藏野台地における環濠集落の形成は、「東海系」の移入、すなわち集団移住という具体的な事実をもって検証されつつある(西相模考古学研究会2001、2002など)。また、東日本の弥生時代前期における分布は、

市町村	遺跡名	時期	市町村	遺跡名	時期
野田市	二ツ塚殿台遺跡	終末前期初	市原市	台遺跡C地点	中期
柏市	戸張一番割遺跡	終末前期初	市原市	祇園原貝塚上層	中期
市川市	国府台遺跡	中期／後期	市原市	南岩崎遺跡	中期
市川市	須和田遺跡	後期	市原市	南総中学遺跡	中期
佐倉市	大崎台遺跡	中期／未前初(条濠)	袖ヶ浦市	美生遺跡第4地点	後期
佐倉市	高岡大山遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	西ノ窪遺跡	中期
佐倉市	石川阿ら地遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	根形台遺跡群XVI地点	
印西市	向ノ地遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	根形台遺跡群IV地点(堂野遺跡)	中期
八千代市	田原窪遺跡	中期	袖ヶ浦市	根形台遺跡群XIV地点(閑野遺跡)	後期
千葉市	戸張作遺跡	中期	袖ヶ浦市	根形台遺跡群I・III地点(境No.2遺跡)	中期
東金市	道庭遺跡	中期	袖ヶ浦市	西原遺跡	中期
市原市	草刈遺跡	中期／後期(条濠)	袖ヶ浦市	滝ノ口向台遺跡	中期／後期
市原市	菊間遺跡	中期	木更津市	東谷遺跡	後期
市原市	菊間深道遺跡	中期	木更津市	鹿島塚A遺跡(庚申塚B遺跡)	中期／後期
市原市	菊間手永遺跡	中期	木更津市	大山台遺跡	後期
市原市	大原遺跡	中期	木更津市	千束台遺跡	中期／後期
市原市	大原浅間様古墳下層	中期	富津市	前三舟台遺跡	後期
市原市	潤井戸西山遺跡(草刈尾梨遺跡)	中期	君津市	鹿島台遺跡	中期
市原市	向原台遺跡	中期	君津市	畠山遺跡	中期
市原市	根田代遺跡	中期	館山市	萱野遺跡	中期

第15表 千葉県環濠(条濠)集落一覧

(大村2004c)より、一部訂正



第220図 根田代遺跡・台遺跡・御林跡遺跡全体図

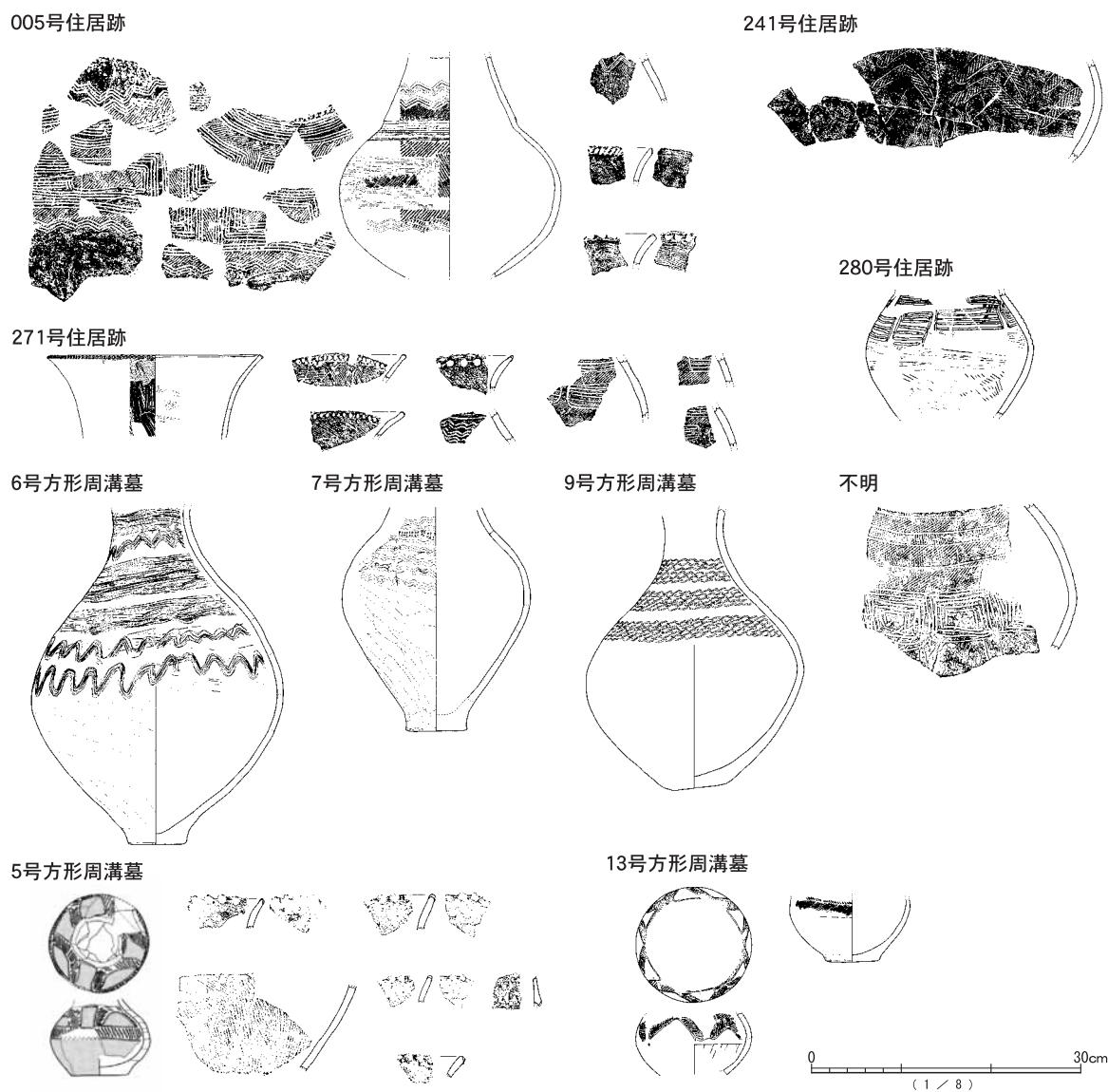
遠賀川式の波及と一致する(石川2001b)。千葉県域でも、終末期から古墳時代前期初頭に下総台地の常総系(臼井南式)への浸食があり(比田井1995)、ここでも、環濠集落が形成される(第219図)(高花1993)。これには、柏市戸張一番割遺跡(古宮・下津谷1997、高花2003)のように、方形区画をとるも

のがあり(第229図)、おそらく、古墳時代前期の茨城県那珂町森戸遺跡(西野1990)、茨城町奥谷遺跡(鯉渕1989)、石下町国生本屋敷遺跡(阿部・藤尾1990)なども環濠集落としての評価が必要であると考える(大村2004c)⁽⁸⁾。

市原市域では、環濠ないしV字溝が検出されている遺跡が、根田代遺跡を含め13遺跡確認できる(第230図)。未整理の遺跡もあるが、まずその概要をまとめておく。

台遺跡 (第220図)(第229図2)

台遺跡は、調査年次によりAからE地点に区分されている(第4図)。環濠は、B地点における4号溝であり、B地点東端部からC地点を中心として集落を囲繞する。C地点東側で途切れるため、集落を完全に区画するものではないが、浅利幸一による復元案によれば、A地点に連続し、長軸長185m、短軸長125mを測るほぼ橿円形の囲繞が認められる(浅利2002)。環濠からの土器の出土は限られていたようであり、B地点4号溝の出土土器も宮ノ台式ではあるが、時期詳細の決め手に欠ける。C地点は未整理であり、いまだ内容は不明であるが、B地点については集落変遷の概要をみることができ



第221図 台遺跡B地点出土土器

る(半田2003)。報告によるB地点の竪穴住居跡数は、弥生時代中期9軒、後期108軒、古墳時代前期43軒、古墳時代中期後半から後期120軒である。重複が著しく、報告書から軒数を改めて数え直すことは困難であるが、数量的な傾向としては妥当であろう。

宮ノ台式期の竪穴住居跡出土土器には、重四角文、擬似流水文、磨消縄文による単位意匠文など、宮ノ台式前半期の特徴が認められる(第221図)。とくに、005号住居跡の出土土器は、開村の一時期を示している。005号住居跡例は、頸胴部間が有段となり、刺突列をもつこと、3本を単位とする束線具を使用し、頸部および胴部下半に波状文、胴部に単帯の重四角文が描かれること、重四角文間にみられるように縄文施文が充填縄文となる点が指摘できる。これらの特徴を、北島式に関連する近年の研究に対比するならば、北島式ないし北島式の前段、埼玉県深谷市上敷免遺跡Y-3・4号住居跡段階(上敷免新式)(滝瀬・山本他1993、吉田2003b)、宮ノ台式最古段階(B1期)に遡る可能性がある。B地点の竪穴住居跡は環濠外に所在するが、環濠に近接して分布する。また、B地点では19基の四隅開口形の方形周溝墓が確認されているが、このうち、5・6号方形周溝墓等の出土土器は、005号住居跡には後出するものの、B4期を含む宮ノ台式前半期に位置付けられる。これらの点から想定される台遺跡の変遷は、まず、宮ノ台式最古期に先駆けとしての集落設置があり、これを核とした集住化の過程で環濠が開削される。B地点の方形周溝墓群は、台遺跡の環濠経営時期に対応する可能性が高い。環濠機能停止時期は、おそらく宮ノ台式B4期前後と推定され、一旦空白化する。これは、環濠に土器の投棄がほとんどみられないことを傍証とする。台遺跡環濠集落上に展開する方形周溝墓群は、根田代遺跡に対応する可能性が想定され、台遺跡環濠集落が根田代遺跡環濠集落と併存する可能性は低い。なお、台遺跡環濠集落中央部に占地する大形の方形周溝墓については、台遺跡環濠集落維持期に、象徴的に造墓されたものであろう。

中期以後の台遺跡B地点について略記するならば、久ヶ原式段階は数軒の竪穴住居跡を確認することができるものの希薄であり、山田橋1式において広範囲に竪穴住居跡が展開する。ただし、これが台遺跡全体の状況を反映するものかどうかは明らかではない。

向原台遺跡(第222図)(第229図3)

向原台遺跡は、2002年に報告書が刊行されたが(高橋2002)、環濠に関係する記録類が確認できず、実態は明らかではない。ただし、本遺跡でV字溝が検出されたことは、浅利幸一、田中新史(田中2000)によって指摘されている。浅利の記載によれば、「V字溝は、台地縁辺に占地する2号墳とされる盛り土下に、東西方向にその上面の輪郭を確認し、調査は一ヶ所にトレンチを入れるものであった。おそらくは弥生時代中期の集落を囲繞するV字型環濠であろうと思われる」(浅利1981)。竪穴住居跡群に対する位置関係からみても、可能性は認め得るものと考える。

検出された弥生時代の竪穴住居跡は59軒であり、宮ノ台式B6・7期、山田橋2式期に大別される。久ヶ原2式ないし山田橋1式と考えられる住居跡も認められるが、不確実である。細別時期ごとの軒数は明示できないが、宮ノ台式期は25軒程度と考えられる。開村時期は、B5期に遡る可能性もあるが、おおむね根田代遺跡と対応する。本遺跡の場合、環濠の機能停止と同時に居住域としての使用も一端停止した可能性が高い。

祇園原貝塚上層(上総国分尼寺跡下層)(第222図)(第229図4)

1991年度に行われた5次調査において、上総国分尼寺南外郭溝南側より、幅約2m、深さ約1.5m

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第222図 向原台遺跡・祇園原貝塚上層全体図

の断面V字形の溝が検出されている(忍澤1995)。未整理のため詳細は不明であるが、宮ノ台式期と推定される。

確認された溝の延長距離は、東西方向約25mにすぎないため、濠の区画形態などは明らかではないが、1~4次調査(調査面積15.300m²)については、すでに報告書が刊行されており(忍澤1999)、改めて検討を加えておく。1~4次調査では、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡が39軒検出されており、内訳は、宮ノ台式期が23軒、久ヶ原式期が1軒、弥生時代終末期が7軒、古墳時代前期が3軒、不明が5軒である。宮ノ台式期は、B4期からB6・7期におよぶが、久ヶ原1式への移行は認められない。5次調査で検出されたV字溝が仮に集落を囲繞するものであるならば、これら竪穴住居跡群が区画対象の候補となる。

5次調査V字溝から1~4次調査区北西端までの直線距離は約250mを測るが、当該地域の環濠集落から類推すると、これを越える環濠規模は想定しにくい。地形的にみると、縄文時代の貝層を形成している西側の2次調査区周辺は埋没谷であり、区画整理前の地形図でも若干の谷地形が認められる。この谷地形を地形的境界と考えると、2次調査区で検出された、東西方向の道路跡の東側延長上にある、若干弧状を呈する溝が、環濠の痕跡として指摘できる。整理段階では、道路跡の側溝延長部分と推定したが、断面形等は不明である。これを環濠とした場合の南北長は約152mを測る。宮ノ台式期の竪穴住居跡は、推定環濠外北西側にも分布を広げるが、これらはB6・7期を中心とする。

これはあくまでも全体図からの推論であり、5次調査および尼寺跡の整理作業の中で検討すべき必要がある。

菊間遺跡群(菊間遺跡)(第223図)(第229図5)

菊間遺跡は、大厩遺跡とともに、現状においても、市原台地周辺地域における宮ノ台式期の代表的な調査遺跡である(斎木・種田・菊池1974、斎木・深沢1978)。

遺跡は、東京湾岸平野部から村田川流域いたる屈曲点の台地上に立地する。1973年度に約4,000m²について発掘調査が行われ、弥生時代の遺構として、竪穴住居跡49軒、方形周溝墓2基、V字溝1条が検出されている。環濠と推定されているのは第4号溝状遺構であり、遺跡東端の台地縁辺から検出されている。その掘削位置から環濠の可能性が推定されるが、囲繞形態は明らかではない。また、調査が局部的であったため、出土土器もなく、埋没時期を問題とすることもできないが、開削時期は宮ノ台式前半期に溯る可能性がある。

竪穴住居跡は、第11号住居址が宮ノ台式前半期、B2期に比定され、その後、久ヶ原1式期までほぼ継続的に認められる。後期段階は、久ヶ原1式期以降、確実には山田橋2式新段階の第1号周溝(方形周溝墓)以外明確ではない。

菊間遺跡群(菊間深道遺跡)(第223図)(第229図6)

1993年度に発掘調査が行われ、菊間古墳群が所在する台地上の中央部でV字溝が検出された(高橋1994b)。調査対象面積は1,170m²であるが、確認調査であったため詳細は明らかではない。溝は、東西方向に走行し、やや弧状を呈する。確認面上端幅約2m、深さ1.3mであり、西側は端部となり開口する可能性がある。溝部は部分的な調査のため、遺物もなく、厳密には宮ノ台式期とする決め手はない。菊間遺跡第4号溝状遺構とは、約190mの至近距離にあるが、環濠であった場合、別区画となる可能性が強い。

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第223図 菊間遺跡群・菊間手永遺跡環濠集落群

隣接地(B地点)(田所1995)でも確認調査が行われており、竪穴住居跡の著しい重複が認められたが、東関山古墳、権現山古墳に隣接することもあり、全体に遺存状態が不良であった。出土土器は、宮ノ台式から後期、終末期、古墳時代前期におよぶが、後期は、菊間遺跡同様やや希薄であるように思われる。

菊間手永遺跡 (第223図)(第229図7)

発掘調査は、1972年度と1983年度に行われ、すでに報告書が刊行されている(近藤1987)。遺跡は、村田川左岸、市原台地の北端部に位置し、小支谷をはさみ、東側台地上には菊間遺跡群が展開する。溝4が環濠と推定されており、やや蛇行しながらも全体として弧状を呈し、直線距離で約100mにわたって検出されている。両端は、菊間天神山古墳周溝および中世の造成区画によって破壊され、囲繞形態全体は明らかではない。報告によれば、環濠内から検出された弥生時代の竪穴住居跡は15軒であり、このうち4軒が宮ノ台式期、2軒が後期、他は不明である。また、環濠外でも宮ノ台式期の竪穴住居跡14軒、四隅開口形の方形周溝墓2基が検出されているという。溝4には、多量の土器投棄が認められ、これらは宮ノ台式B6・7期に比定され、この段階に環濠の機能停止が想定される。

菊間手永遺跡は、面積の大半を占める1972年度の調査区について、遺構と遺物が照合せず、また、報告では実測土器も少なく、集落全体の時期的な傾向はつかみづらい。宮ノ台式は遺跡全体をみても、B6・7期以前に積極的に遡る要素は認められず、擬似流水文(楕円文)が出土しているものの、これも上下に回転結節文を重ねている。環濠内外の竪穴住居跡の時期的傾向はとらえられない。

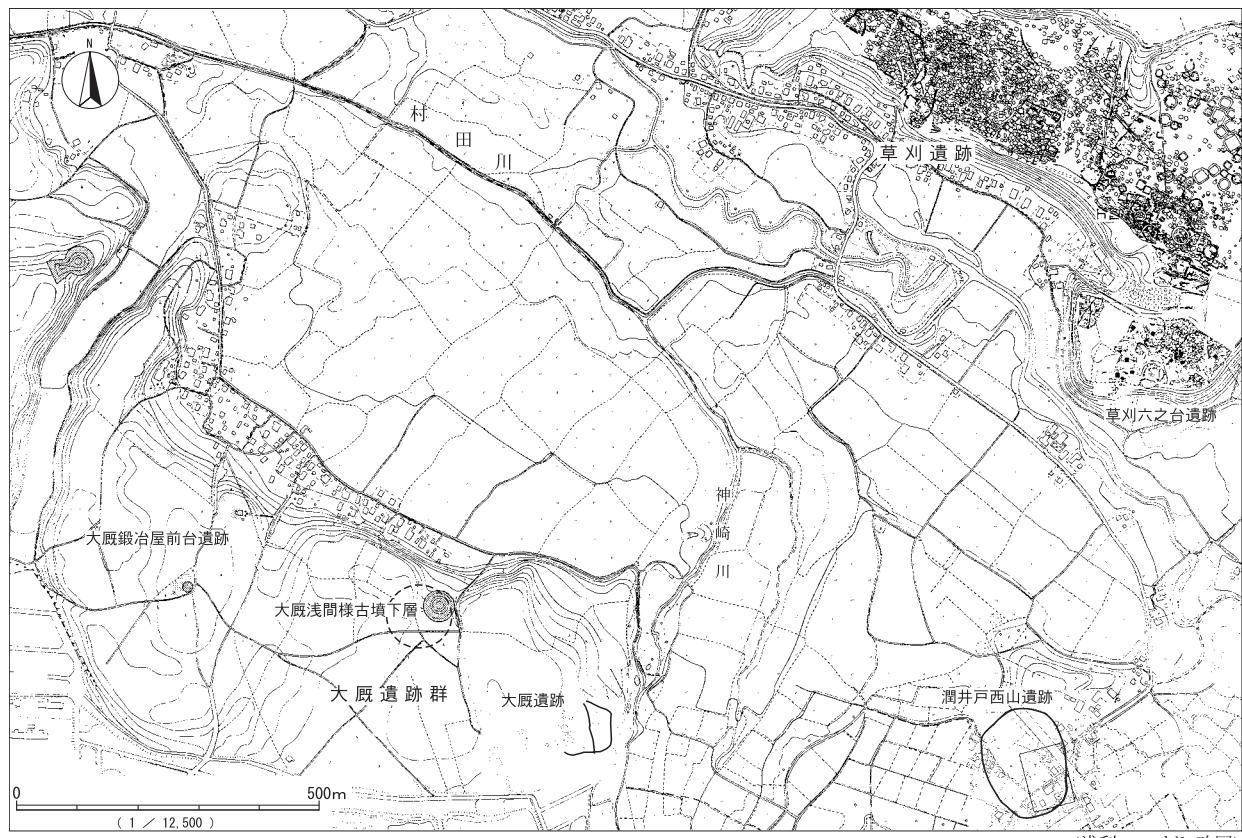
市原台地の東京湾側海岸平野には、市原条里制遺跡が展開するが、本遺跡に近接する実信地区、仮称県立スタジアム地区では、宮ノ台式期の水田が広範囲で検出されている。実信地区的自然流路を中心とする出土土器は、B5~6・7期に比定される(新田1998、財団法人千葉県文化財センター1998、小久貫・加納・高梨1999)。

本遺跡は、中期以後久ヶ原式を認めるができるものの、集落としては縮小していく可能性があり、空白期をおき山田橋2式新段階から終末期、そして古墳時代前期前半に再度盛期をむかえる。

大厩遺跡群(大厩遺跡) (第224・225図)(第229図8)

大厩遺跡は、村田川とその支流である神崎川の合流地点からやや神崎川側に入った左岸の台地上に立地する(三森・阪田他1974)。後述する大厩浅間様古墳下層遺跡とともに、大厩遺跡群の一角を占める。検出された弥生時代の竪穴住居跡は69軒であり、このうち終末期は7軒、山田橋式期は3軒程度であり、調査区西側に散在する。中心となる時期は宮ノ台式期から久ヶ原2式期であるが、久ヶ原2式期の竪穴住居跡は、環濠西側に展開する傾向があり、おそらく、弥生時代後期において、中心点を変えながら、集落を展開していく状況がうかがえる。現状の調査区では、山田橋式期への継続性が明確ではないが、後期における集落の展開は、大厩遺跡群全体の中でとらえる必要があると思われる。

大厩遺跡では、神崎川に直面する台地縁辺から、支谷側縁辺を巡るY-62・75号址と、ほぼ南北方向に走行するY-72・73号址の2条のV字溝が検出されている。Y-62・75号址は、西側部分が断線開口しており、集落全体を囲繞していたかどうかは明らかではないが、囲繞を前提とした場合の推定最小規模は7,560m²程度を測る。出土土器には、擬似流水文や、横帯縄文では单斜縄文を多帯に重ねたものが認められ、沈線区画による三叉舌状文などの意匠文が発達する。埋没の経過に応じた時期差が認められ、とくにY-75号址では、回転結節文や羽状縄文も出土している。ただ、機能停止時期はB4



第224図 村田川中流域の環濠集落群

(浅利1985より、改図)

期と推定され、集落の設置にともない開削され、比較的短期のうちに埋没が進行したと推定される。ただし、B5期以降の竪穴住居も、一定居住域内で累積的に重複する。これに対してY-72・73号址は、羽状縄文こそ限られるが、回転結節文、輪積み甕に連なる有段の甕形土器が認められ、B6・7期における埋没が想定できる。現状において環濠とはとらえられないが、居住域を区画していた可能性も否定できない。

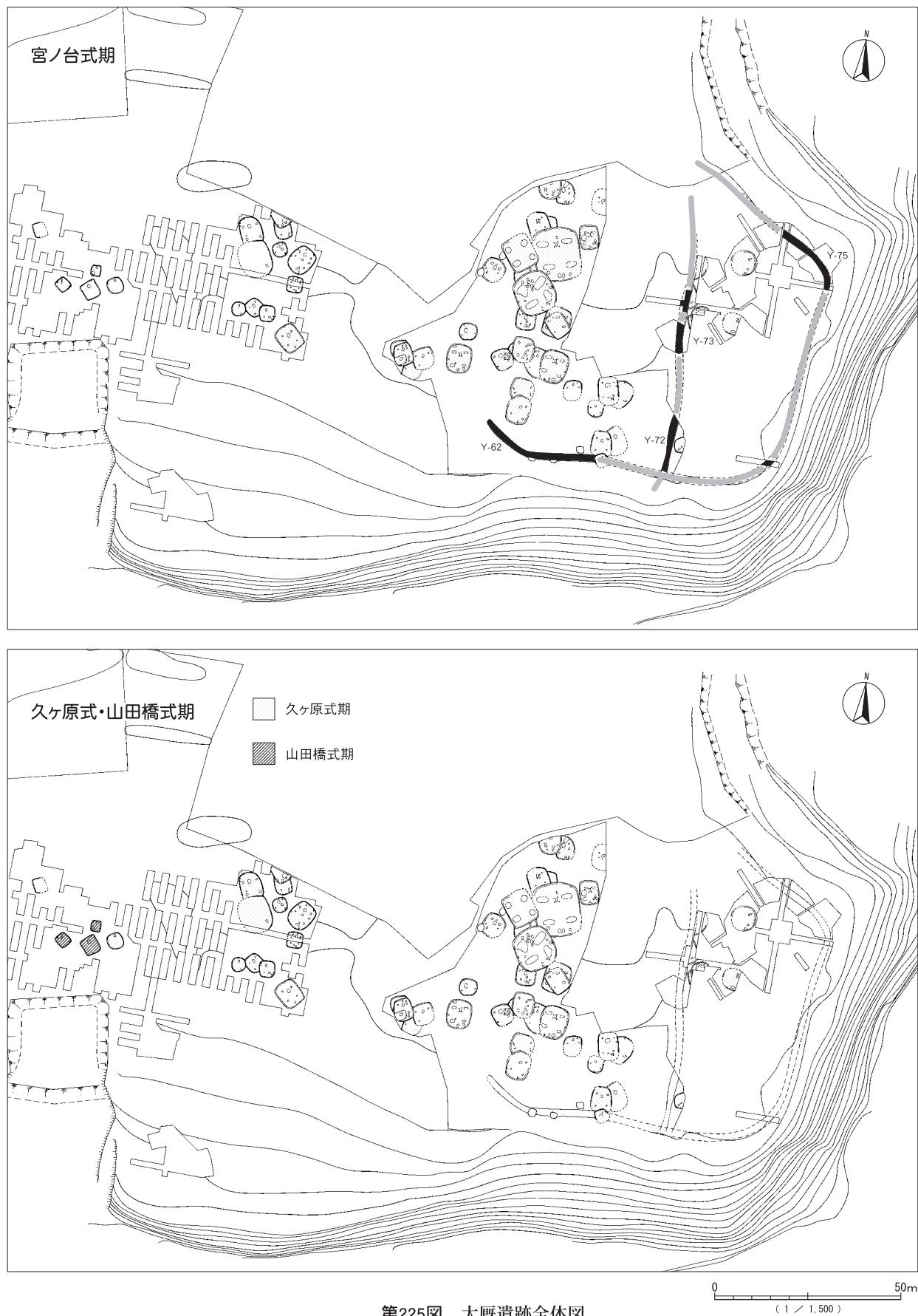
大厩遺跡群 (大厩浅間様古墳下層遺跡) (第224図)(第229図9)

1984年度、1990年度に発掘調査が行われ、古墳時代前期末に比定される大厩浅間様古墳の墳丘下より、2条のV字溝が検出された(浅利1997)。大厩遺跡とは同一の台地上に立地するが、大厩浅間様古墳下層遺跡は、村田川本流に直面する台地上に立地する。両遺跡の調査地点は、直線距離でわずか300mにすぎない。また、村田川右岸の草刈遺跡とは、村田川をはさみ対面する位置関係にある。

2条のV字溝のうち、2号溝は、台地縁辺に沿って開削され、古墳墳丘下旧表土面からの深さは1.9~2.4mを測る。もう一方の1号溝は、2号溝と直交方向に走行するが、途中で立ち上がり2号溝とは接続しない。幅2.1~2.2m、旧表土面からの深さは1.71~1.78mを測る。調査範囲が古墳墳丘下に限られているため詳細は明らかではないが、2号溝については、地形的な掘削位置から、環濠の可能性が高い。出土土器は、2号溝で櫛描波状文の壺形土器、単斜縄文2帯をもつ鉢形土器が、1号溝では、沈線区画、単斜縄文による意匠文を配した壺形土器が出土している。土器の出土量も少なく、両者の時期差、細別時期を確定することはできないが、B4~5期に比定することは可能であると思われる。

調査区内では、他に弥生時代の遺構として、竪穴住居跡11軒、方形周溝墓4基、木棺土坑墓1基が検出されている。このうち、竪穴住居跡は、いずれも環濠埋没以降であり、久ヶ原2式、山田橋式、

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



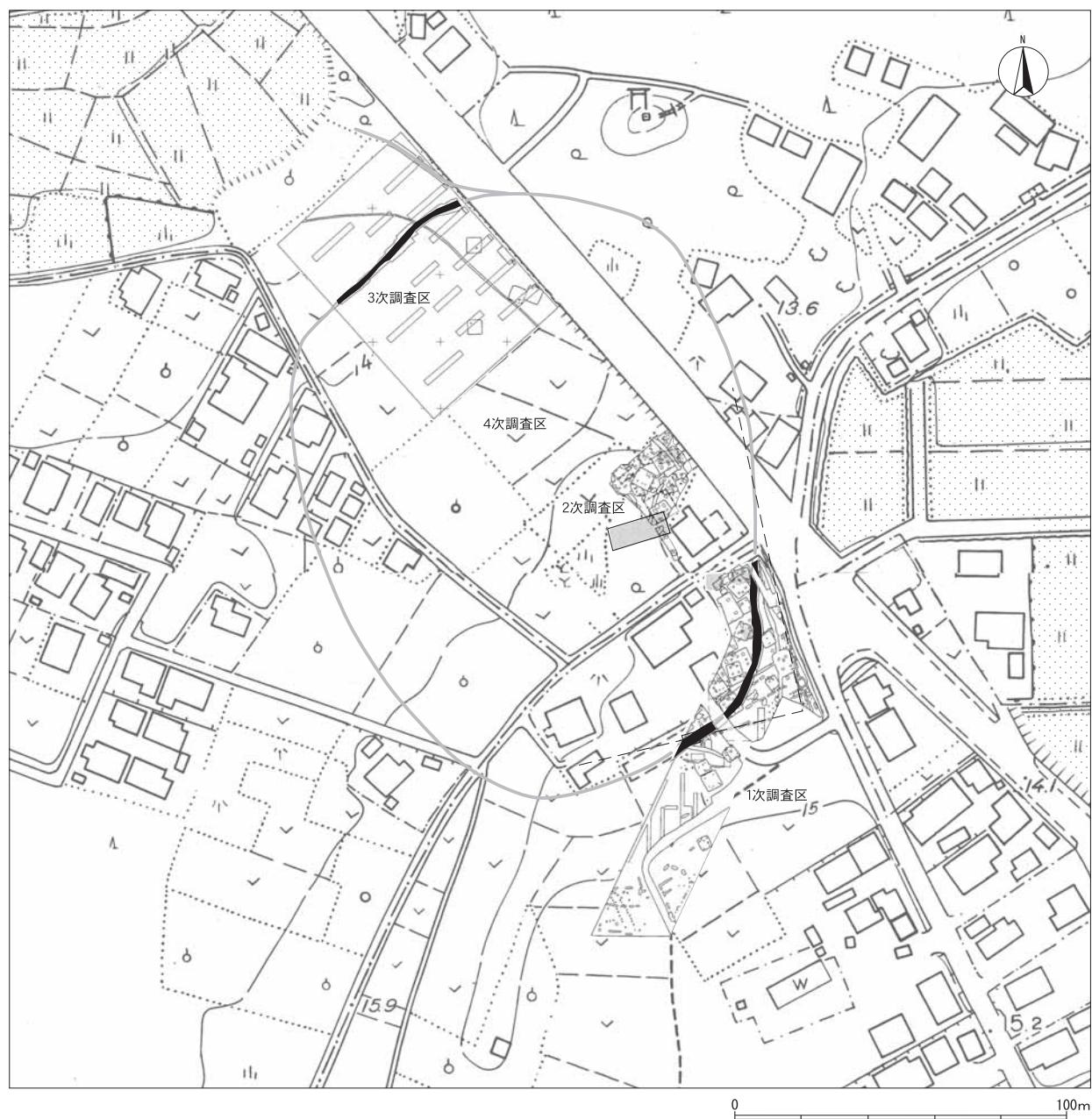
第225図 大厩遺跡全体図

終末期に位置付けられる。ただ、方形周溝墓群は、宮ノ台式前半期に遡るものであり、2号方形周溝墓より単線(ヘラ描き)による擬似流水文、3号方形周溝墓より、沈線区画単斜縄文帯間を弧状文で充填する壺形土器が出土している。このうち、3号方形周溝墓出土例は、3本を単位とする束線具と単線により弧状文を描き、地縄文は省略され、縄文は横帯縄文に収束している。菊間遺跡第11号住居址例には後出するが、B3~4期に比定し得るものと考える。これらは、V字溝出土土器に先行し、集落開設時期を示す可能性がある。

2号溝を環濠とした場合、方形周溝墓群を区画内に取り込むこととなるが、全体の集落構成は現状において明らかにすることはできない。

潤井戸西山遺跡 (第226図)(第229図10)

発掘調査は現在までに4次行われており、1・2次についてはすでに報告書が刊行され(鈴木1986、



第226図 潤井戸西山遺跡全体図

半田 1992)、3・4 次についても本年度(2004 年度)内に刊行が予定されている。なお、2 次については所在小字名から「草刈尾梨遺跡」の名称が与えられているが、明らかに同一の遺跡であることから、「潤井戸西山遺跡」に統一する。遺跡は、村田川左岸の低位段丘に所在し、村田川へ向かって北へ突出する微高地の先端部近くに占地する。現村田川流路は北約 400m にあり、遺跡の東西は沖積低地がせまる。西側には、神崎川をはさんで大厩遺跡が所在する。標高は概ね 14~15m、沖積低地との比高は 0.8~1.2m にすぎないため、1 次調査では、環濠底に滞水が認められた。当時の地下水位は明らかではないが、環濠北側で低地部へ分岐する溝がみられることから、「濠」としての状況を呈していた可能性もある。本遺跡は、宮ノ台式期の環濠集落であるとともに、和泉式期の首長居館が検出されている。

環濠は、1 次調査および 3 次調査において南北端が検出され、これにもとづく環濠規模復元値は約 19,400 m²を測る(木對 2004b)。宮ノ台式期の竪穴住居跡は、1 次調査で環濠外から 1 軒、環濠内の 2 次調査で 4 軒が検出されており、B5~6・7 期に比定される。環濠内の出土土器はきわめて少なく、後期の遺構は皆無で、土器も遺跡全体で若干量しか認められることから、環濠の機能停止と同時に居住域としての使用も停止した可能性が高い。

なお、3・4 次調査区は、環濠内中心部にあたるが、調査前に徹底した破壊が行われていたため、残念ながら遺構の詳細は明らかではない。

草刈遺跡 (第 227・233 図)(第 229 図 11)

村田川右岸の台地上に立地する遺跡であり、村田川をはさみ大厩遺跡群、潤井戸西山遺跡と対峙する。遺跡の詳細は不明であるが、概要が県史に記載されている(大谷・白井 2002)。

宮ノ台式期の環濠集落は、遺跡東端部の F・I 区にあり、2 区画が重複する。時期差をもって継起的に開削されたことが明らかである。環濠は、南側の台地縁辺に対して開口するが、現状崖線は本来地形ではない。また、東環濠の外縁に東環濠とほぼ併行する溝がみられるが、詳細は明らかではない。宮ノ台式期の竪穴住居跡は、環濠内を中心として約 20 軒が検出されているという。

草刈遺跡は、弥生時代後期において爆発的な拡大を遂げ、約 1,000 軒を数える竪穴住居跡が展開する。この時期、北西 - 南東方向の条濠が 2 条検出されており、これを「環濠」とする記載もあるが、その性格は、集落の変遷過程の中で検討される必要がある。なお、条濠の時期については、後期前半とする指摘がある(小高 1995)。

草刈遺跡は、古墳時代前期前半へ向かって、さらに集落規模を拡大する⁽⁹⁾。ただし、その状況は、市原台地周辺地域ではかならずしも特異なものではない。

南岩崎遺跡 (第 230 図 12)

養老川の支流である戸田川右岸の台地上に立地する。2002・2003 年度に市道新設工事に伴い発掘調査が行われ、路線に直行する方向で 2 条の V 字溝が平行して検出されている。現在整理途上のため詳細は明らかではないが、少なくともうち 1 条については弥生時代中期末に遡る。濠の区画形態は明らかではないが、V 字溝西側、台地縁辺部側に竪穴住居跡が集中する傾向があり、東側、台地中央部側で方形周溝墓 2 基が検出されている(田中 2002、近藤 2004)。

南総中学遺跡 (第 227 図)(第 229 図 13)

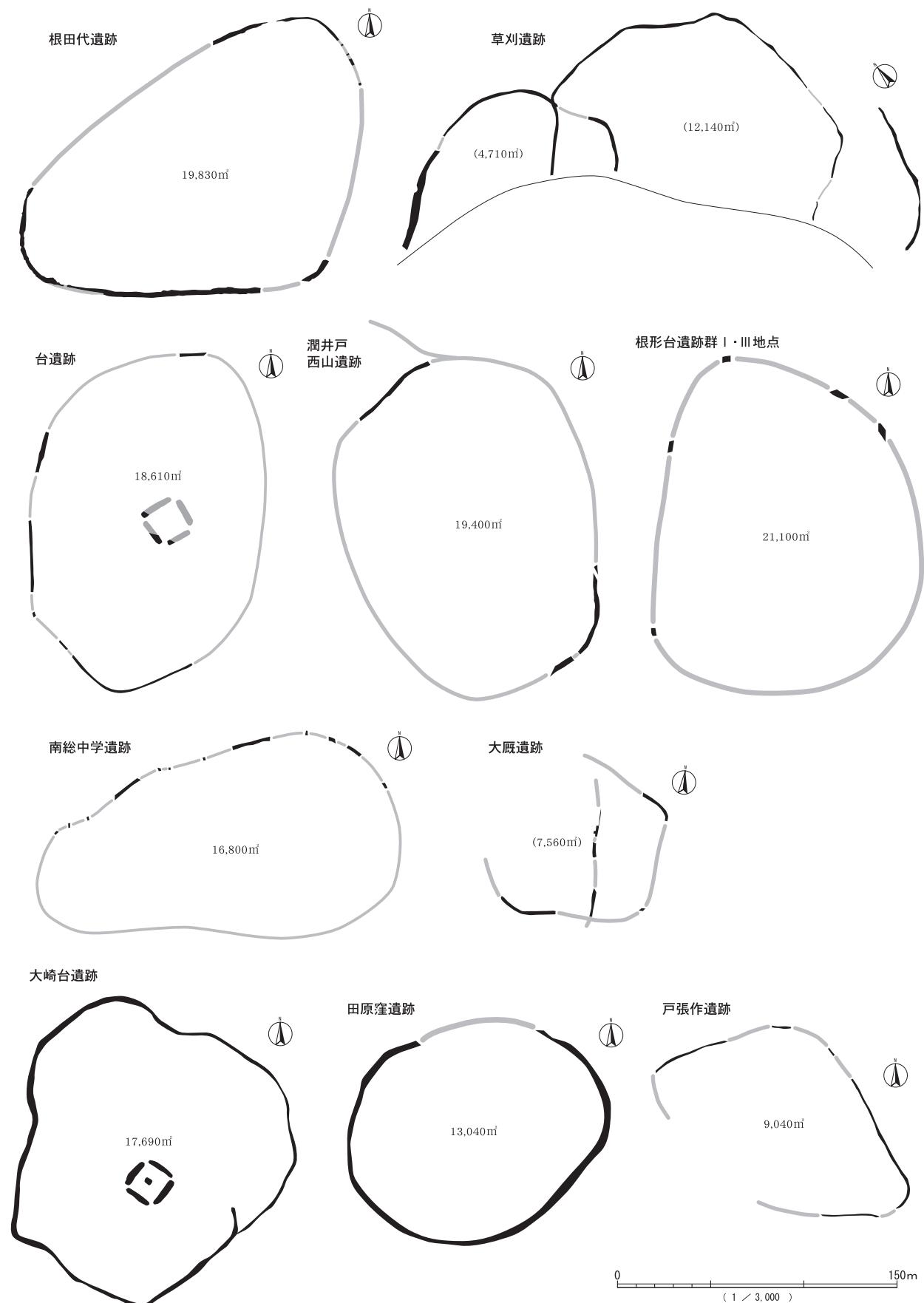
発掘調査は、1971・1972 年に約 44,000 m²を対象として行われた。調査は、試掘坑で確認された遺

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落

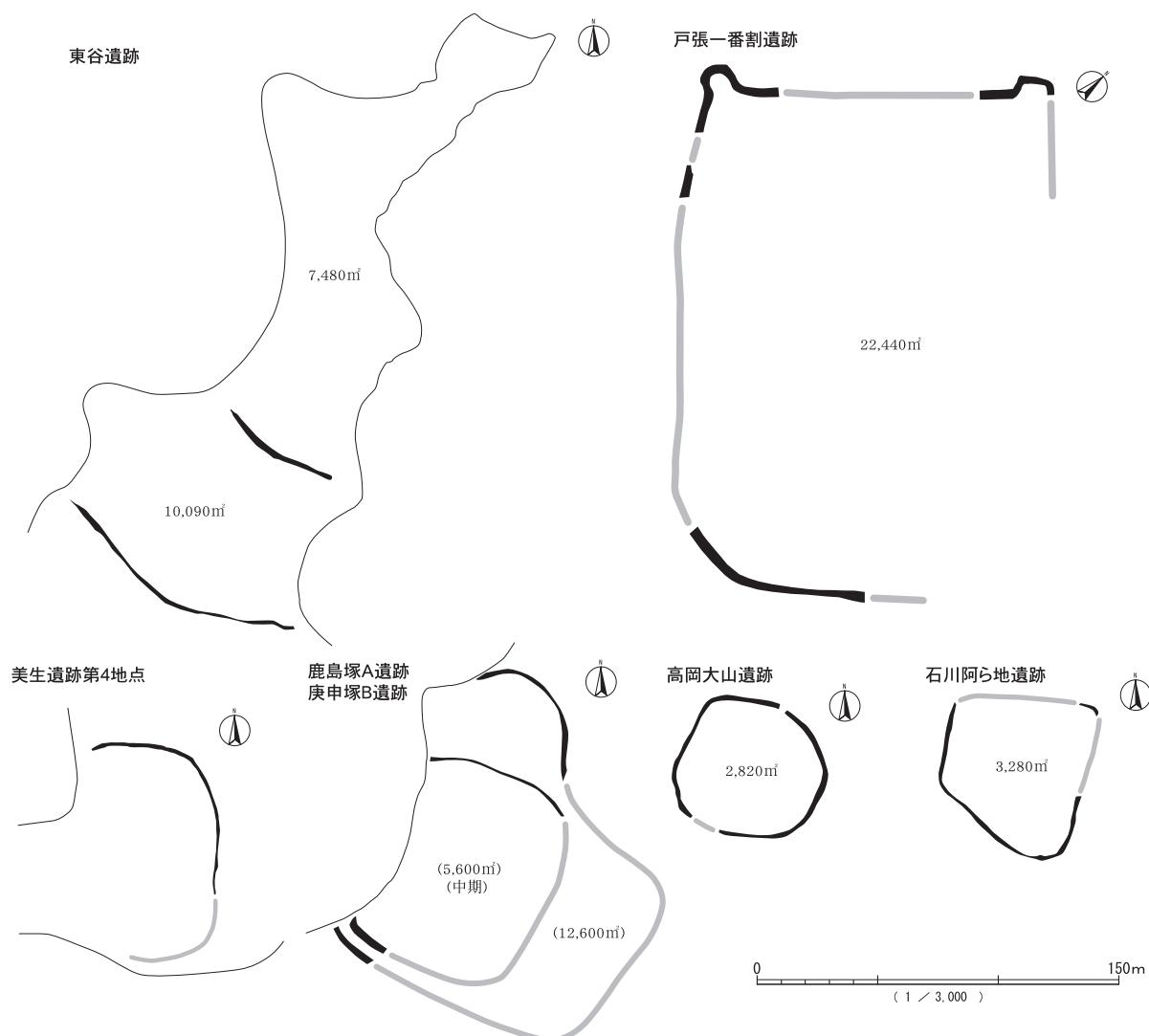


第227図 草刈遺跡・南総中学遺跡全体図

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第228図 千葉県の環濠集落(1) 弥生時代中期



第229図 千葉県の環濠集落(2) 弥生時代後期～古墳時代前期

構範囲を拡張する方法であり、現時点からみれば、かならずしも完全なものではない。また、調査終了後に出土資料保管場所が火災に遭遇する不運にもみまわれ、遺跡の全貌を報告書から読み取ることは容易ではない。検出された弥生時代の遺構は、竪穴住居跡及び竪穴遺構42軒、方形周溝墓23基、土器棺3基、V字溝1条である(倉田・相京1978)。時期的には、擬似流水文、丁字文等の櫛描文と、沈線区画の单斜縄文による横帯文、意匠文が特徴的に認められる宮ノ台式前半期と、宮ノ台式最終末から久ヶ原1式、久ヶ原2式古段階にいたる2時期に大別することができる。その間の継続性についてはかならずしも明確ではない。断片的な資料をつなぎ合わせてみると、前半期の竪穴住居跡は環濠内の2次調査区、および環濠外と推定される1次調査区にわたって分布する。方形周溝墓のうち、確実にこの時期に比定されるものは、M'-31方形周溝墓など、環濠内の小支谷縁辺に所在する。これに対して、宮ノ台式B6・7期から後期初頭の竪穴住居跡は、環濠内を中心として分布する。環濠外1次調査区の方形周溝墓の所属時期はいずれも明確ではないが、K-24土器棺墓が方形周溝墓群に伴うものであるならば、後半期に構成された可能性が高い。これが変遷の概要であるとするならば、環濠は、宮ノ台式B6・7期になって集落を囲繞した可能性があり、報告掲載のV字溝出土土器は、久ヶ

原1式に見える。ただし、V字溝出土土器がきわめて少ないとする記載があり、その後の集落の展開を考えると疑問も残る。

環濠は、現状で、集落北側部分の検出にとどまっているが、地形から推定される規模は、東西約210m、南北約95mを測る。

市原市域の環濠集落は、地域全体としては、国分寺台地区のある市原台地養老川下流域右岸、養老川中流域、村田川流域に分布が集中する。養老川左岸下流域については、現状では調査事例も少なく、光風台団地造成時に、V字溝断面が確認されたとする伝聞もあるが、詳細は明らかではない。袖ヶ浦台地中央の椎津川流域では、六孫王原遺跡(半田1997・櫻井1997)において、宮ノ台式から久ヶ原式と推定される四隅開口形の方形周溝墓20基以上が検出されているが、集落の実態は明確ではない。袖ヶ浦台地の袖ヶ浦市側、小櫃川右岸では、根形台遺跡群(安藤1997、安藤・稻葉他2001、能城・稻葉他2002)、西ノ窪遺跡(井口・簗島1985)、西原遺跡で、宮ノ台式期の環濠集落が検出されている。

当該地域の特徴としては、小地域範囲に環濠集落群を構成することであるが、草刈遺跡での環濠の重複にみられるように、集落の継起的な再編をともなうことが想定される。

環濠規模は、安藤広道が指摘するように(安藤2003)、関東地方では基準的な2万m²程度が一般的であり、神奈川県横浜市折本西原遺跡(石井・倉沢1980、岡田1988)や神奈川県茅ヶ崎市下寺尾西方A遺跡(村上・井澤2003)のように、これを超える大形の環濠集落は、千葉県域全体をみても検出されていない(第228・229図)⁽¹⁰⁾。

(3) 市原台地周辺地域の弥生時代中期遺跡群

房総半島の初期農耕集落の成立は、方形周溝墓を指標とするならば、君津市常代遺跡SZ-134(伊藤・甲斐1996)が池上・中里式段階以前、中期前半に遡る可能性があり、また、袖ヶ浦市向神納里遺跡の方形周溝墓群(稻葉1995)の形成も池上・中里式段階に遡る(石川2000)。現状では、神奈川県小田原市中里遺跡(戸田2000)に比較し得る集落居住域の検出例はないが、東京湾東岸地域においても、本格的な農耕集落の形成が宮ノ台式期以前に遡ることは確実であろう。

養老川、村田川流域を中心とする市原市域では、常代遺跡、向神納里遺跡に対応する段階の方形周溝墓は検出されてはおらず、武士遺跡(田村・加納・高柳他1996)(第230図A)の再葬墓は、常代遺跡と時期的な接点をもつ。他に、宮ノ台式期前の遺跡としては、小谷田八木遺跡(藤崎1983)(第230図C)、西国吉遺跡(蜂屋1999)(第230図B)があり、池上・中里式期の西国吉遺跡は、竪穴住居跡等は検出されてはいないものの、甕形土器の組成比率が高く、集落跡と推定される。

しかし、集落分布は、宮ノ台式期において変容し、東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺部へ集落が進出する(第230図)⁽¹¹⁾。これは、沖積地に対する積極的な水田開発によるものと推定され、菊間手永遺跡に近接する市原条里制遺跡実信地区では、宮ノ台式B5~6・7期の土器を多量に包蔵する自然流路と、これに伴う堤状遺構、溝、そして極小区画水田多数が検出されており、水田範囲は、実信地区、並木地区、仮称県立スタジアム地区をあわせ、北東・南西方向550m、北西・南東方向350mにおよぶ。常代遺跡で検出された合掌構造の堰を含め、当該時期における開発の実態は、かつての、谷水田による分割労働を発展の基盤とした弥生時代觀とは異なり、大規模な労働の集約が前提となる。これは、環濠集落への集住の一要因としてとらえられる。関東地方の初期農耕集落の沖積低地への指向は

明らかであり(石川2000・2001a)、市原市域でも、砂堆上に立地する山新遺跡(小橋2002b)や、養老川右岸の山田大宮遺跡(米田1986)、村田川左岸の潤井戸西山遺跡、中横峰遺跡(小川2000)、鎌之助遺跡(田所2000b・2001、鶴岡2001)など、低位段丘面での検出例が増加しつつある。いまだ低地部での調査事例が乏しいものの、今後、とくに山田大宮遺跡周辺地域、養老川中流域には注意が必要である。

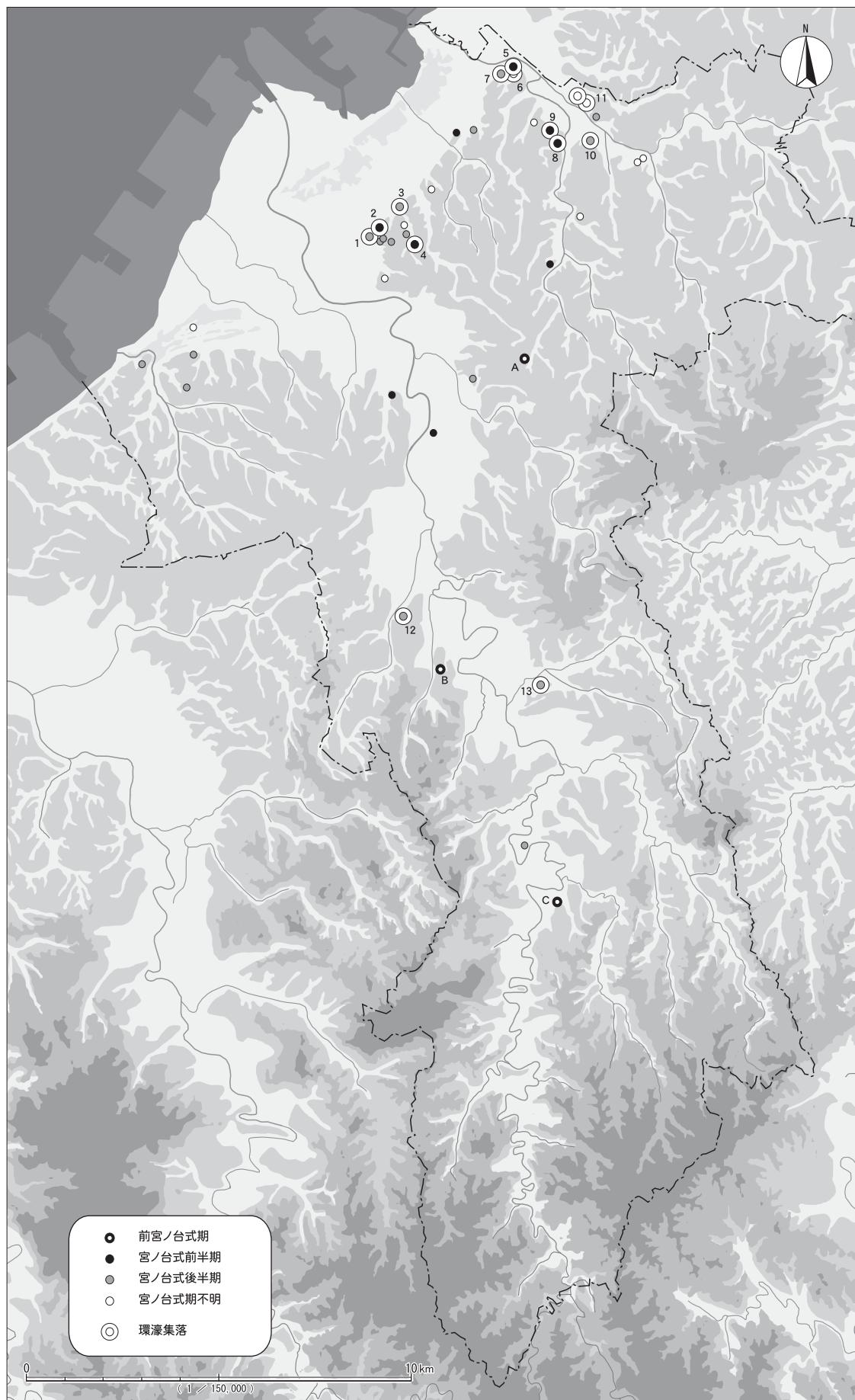
B4期を含む宮ノ台式前半期の遺跡としては、台遺跡、菊間遺跡、大厩遺跡、大厩浅間様古墳下層遺跡、白船城跡下層遺跡(石田1987、桜井・黒沢1997)、小田部新地遺跡(山口1984)、祇園原貝塚上層遺跡、釜神遺跡、山田大宮遺跡、南総中学遺跡などがあり、台遺跡、菊間遺跡、大厩遺跡、大厩浅間様古墳下層遺跡、祇園原貝塚上層遺跡で環濠を形成する。他に、草刈遺跡がこの段階の環濠をともなうことが想定され、南総中学遺跡の環濠も、この段階に遡る可能性を残している。

前半期に開村する集落のうち、台遺跡は宮ノ台式B1期、菊間遺跡はB2期に遡ると推定されるが、環濠の開削時期を特定することはできない。ただし、大厩遺跡(Y-62・75号址)、大厩浅間様古墳下層遺跡では、B4期に機能を停止している。この段階は、大崎台遺跡、東金市道庭遺跡(有沢・石本・小高1983)、西原遺跡などの環濠も埋没が進行しており、神奈川県横浜市鶴見川流域の大塚遺跡(伊藤・小宮・坂上・武井・宮澤1991、岡本・小宮・坂上・武井1994)、折本西原遺跡内濠の廃絶時期にもおおむね対応する。これら南関東地方の環濠集落の消長を、一連の事象とする必然性は現状において乏しいが、そもそも、環濠集落の排他的な区画は、隣接集落との相対的な関係の中で成立するものと考えられ、関連する地域範囲を特定することは難しいものの、それぞれの地域においては、連動性をもつ可能性が高い。台遺跡についても、少なくとも根田代遺跡成立時期には廃絶していたと考えられることから、おそらく、B4期には機能を停止していたと推定される。

宮ノ台式後半期の環濠集落は、根田代遺跡、向原台遺跡、菊間手永遺跡、潤井戸西山遺跡、南岩崎遺跡、南総中学遺跡などがあり、現状では条濠と考えられる大厩遺跡Y-72・73号址もB6・7期に埋没する。このうち、根田代遺跡、向原台遺跡、菊間手永遺跡は、B5期からB6・7期前半に成立し、比較的短期に環濠機能を停止したと推定される。潤井戸西山遺跡、南岩崎遺跡など、開村時期が明らかではない遺跡もあるが、宮ノ台式B5期の環濠集落は、現状において明確ではない。この段階は、若宮遺跡C地区(市毛・滝山1967)、加茂遺跡D地点(小橋2002a)などの短期小規模な集落が目に付く。袖ヶ浦台地の北東端に位置する釜神遺跡は、B4期からB5期を中心とする集落であり、面積約20,000m²の一見独立丘陵状を呈する立地地形の特徴から環濠集落の存在が予測され、また工事計画も現状地盤を大幅に下げるものであったため、斜面地を含めた調査が行われたが、環濠は検出されなかった。調査面積18,000m²に対して、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする竪穴住居跡257軒が検出され、このうち宮ノ台式期は11軒であったが、その後の竪穴住居跡の累積によって断片化しており、軒数自体本来のものとは考えにくい。当該地域のB4期からB5期の状況を反映している可能性がある。

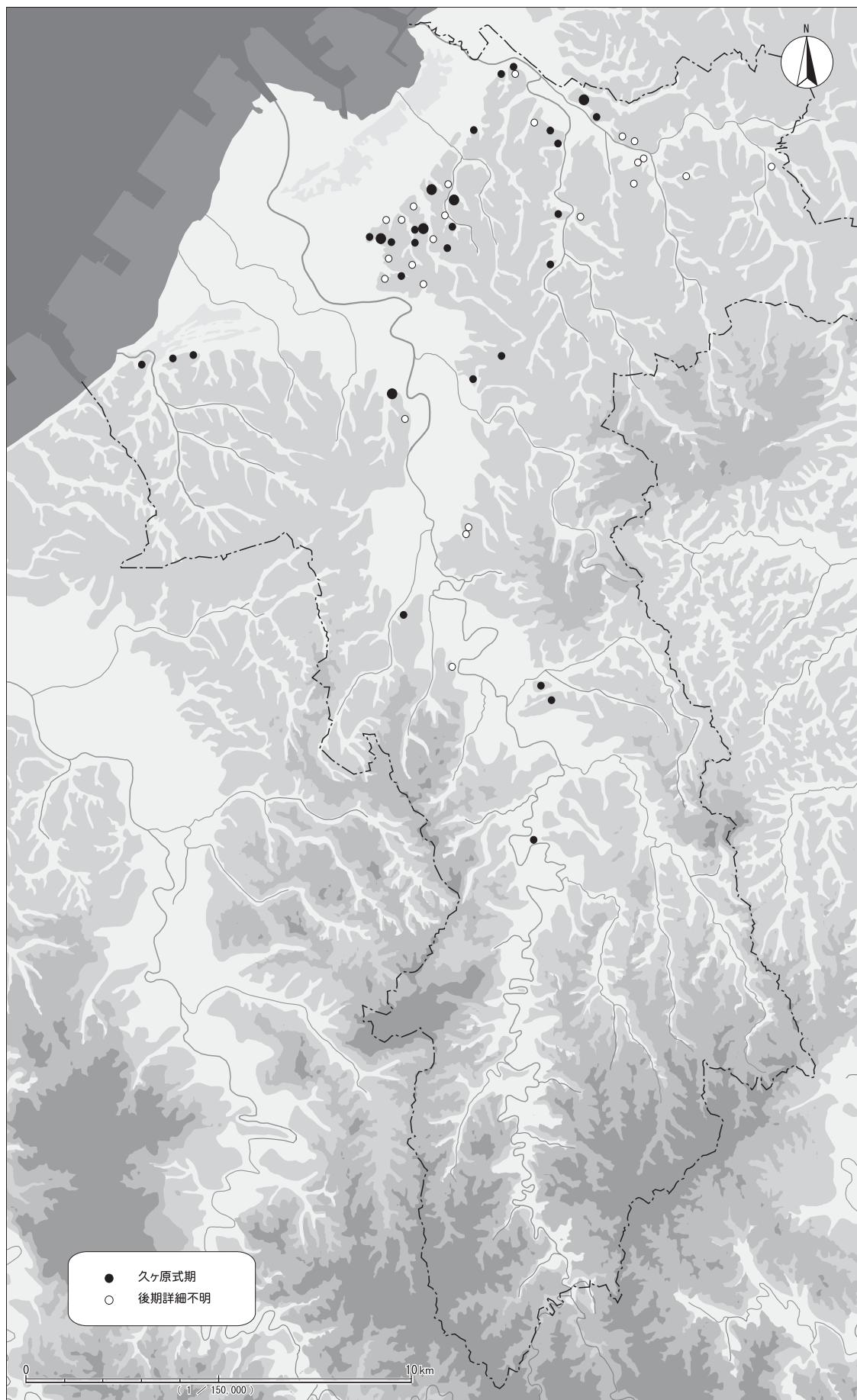
安藤広道による、鶴見川流域遺跡群の分析では、長期継続を前提として環濠集落がとらえられており、一定期の環濠埋没により、「集落の境界が不明瞭になることがあったとしても、ここで言うところの環濠集落は、その際に集落が分散したり断絶したりしているわけではない」という(安藤1991)。市原台地周辺地域でも、大厩遺跡などは、環濠の有無にかかわらず、宮ノ台式期を通じて一定範囲内で竪穴住居を重ねている。また、菊間遺跡や祇園原貝塚上層遺跡など、前半期の開村以降、B6・7期

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



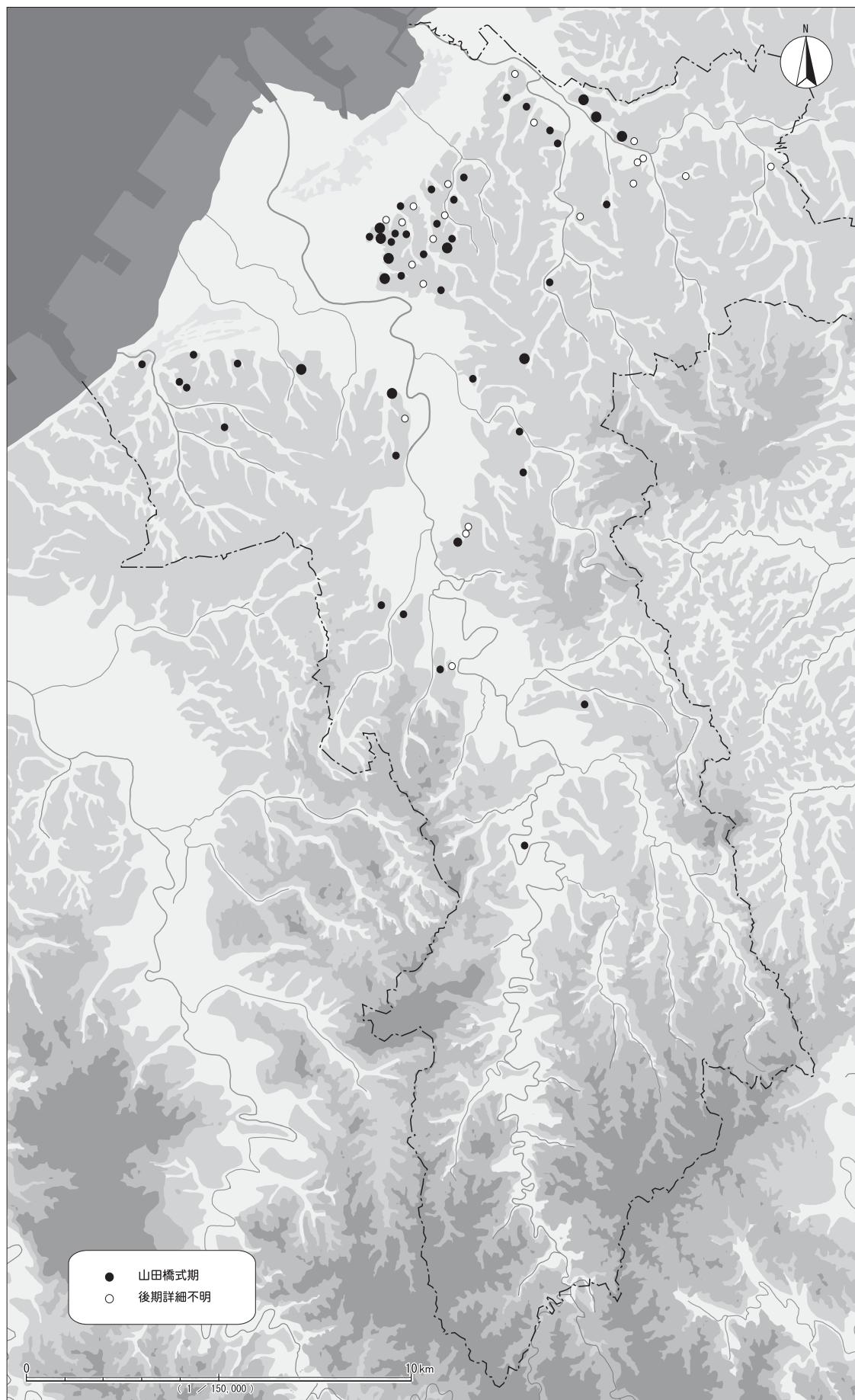
第230図 市原市域集落遺跡群(1) 中期

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第231図 市原市域集落遺跡群(2) 後期 久ヶ原式期

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第232図 市原市域集落遺跡群(3) 後期 山田橋式期

ないし久ヶ原1式期まで継続的に維持される遺跡もあり、後期以降の集落との比較では安定的ともいえる。しかし、当該地域では、草刈遺跡での環濠の重複にみられるように、宮ノ台式期内で集落の再編をともなう例があり、台遺跡と根田代遺跡、菊間遺跡群と菊間手永遺跡、あるいは小櫃川右岸の根形台遺跡群の環濠集落群なども、集落の再編成を含むものと推定される。その時期は、B4期からB6・7期の間に想定できる。

B6・7期の非環濠集落としては、叶台遺跡(大村1992a)、番後台遺跡(藤崎1982)、姉崎東原遺跡(高橋1990・1993)、椎津茶ノ木遺跡、草刈六之台遺跡(白井・田島他1994)などがあり、根田代遺跡周辺遺跡でも、散在的な竪穴住居跡の分布が認められる。このうち、姉崎東原遺跡などは、B6・7期後半の環濠停止期を中心とするが、すべてを、離合集散の中で時期的な色分けをすることは困難である。しかし、少なくとも当該地域の環濠集落群は、安藤が想定する鶴見川流域ほどの長期的な安定性は明確ではなく、環濠集落群、あるいは拠点集落と衛星的集落の恒常的な関係は認められない。

例えば、畿内地方中心部、大阪平野、奈良盆地では、環濠集落を中心とした長期にわたる安定的な領域を形成しているが、これは、環濠集落群の拮抗した関係にもとづくものと推定される。それぞれは、内部に手工業等の発達による拠点的な機能を整え、さらには物流による相互依存関係を構築していく。また、これを基盤とし、制御する首長権力の成長をみることも可能である。しかし、南関東地方では、地域における交易、あるいは生産の拠点としての役割を担う集落は明確ではなく、拠点集落独自の機能はなお証明されてはいない⁽¹²⁾。前述したように、集団移住にともなう集団間の接触と、開発の拠点設置、開発にともなう労働の集約を主因として考えるべきであろう。ただ、B6・7期前半を中心とする環濠の再掘削、小櫃川流域以南における後期環濠集落形成の具体的な契機は、今のところ明らかではない⁽¹³⁾。

(4) 宮ノ台式期と久ヶ原・山田橋式期の集落

東京湾東岸地域の後期環濠集落は、草刈遺跡の条濠のぞけば(第233図)、袖ヶ浦台地小櫃川右岸の袖ヶ浦市美生遺跡群第4地点(浜崎1993)を北限とし、東京湾西岸と地理的接点をもつ地域に限定される(第219図)。後期環濠集落が、相模湾岸から東京湾西岸の荒川流域、大宮台地に濃密な分布が認められるのに対して、東京湾東岸地域は明らかに希薄化する。前述したように、相模湾沿岸地域、武蔵野台地における環濠集落の形成は、東海地方からの集団移住という具体的な事実をもって検証されつつある。一方、東京湾東岸地域の久ヶ原式・山田橋式土器は、対外的には、南関東各地域広範囲に影響を与えており、外部からの影響に対しては閉鎖的で、とくに山田橋式は内部に段階的かつ交錯した地域色をみせる。土器地域性の発現形態は、情報の伝達をもたらす移住や流通の範囲、形態によると考えられるが、当該地域の状況は、環濠形成の主因となる大規模な集団移住、また交易においては遠隔地との直接的な交渉を欠く、限定された日常的交通の累積にもとづくものと推定される(大村2004c)。

しかし、東京湾東岸の村田川流域からおそらく小糸川流域にいたる地域では、後期において、関東地方でも有数の大規模な遺跡群を形成するのである。

市原台地周辺地域では、宮ノ台式終末段階の環濠機能停止期以降、谷奥への進出と同時に、台地上広範囲に集落が展開する(第231・232図)(大村1993・2004b)。宮ノ台式期の市原台地東京湾側縁辺

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第233図 草刈遺跡・草刈六之台遺跡全体図

部では、村田川側の菊間遺跡から根田代遺跡の間に、菊間手永遺跡、若宮遺跡C地区、白船城跡下層遺跡、人面土器を出土した三嶋台遺跡を含む郡本遺跡群、向原台遺跡、台遺跡と、連続的な集落占地が確認できるが、根田代遺跡、郡本遺跡群をのぞき、久ヶ原式期において台地縁辺部から一端後退し、台地平坦部を広範囲に利用する集落景観に変貌する。台地下の市原条里制遺跡では、前述したように、村田川側の実信地区、並木地区で宮ノ台式期の水田跡が検出され、他に、菊間地区、市原地区でも、宮ノ台式土器が出土している。ただ、後期の遺物は、各地点ほぼ皆無であり、水田経営の継続性は明確ではない。水田関連遺構検出の有無が、かならずしも土地利用の実態を反映しているとは限らないが、集落立地に対応した状況が認められる。

久ヶ原1式期の集落としては、宮ノ台式期から継続する根田代遺跡、菊間遺跡などとともに、南向原遺跡(田中1976)、千草山遺跡(田中1989)など短期小規模の集落が目に付くが、少なくとも久ヶ原2式期には、御林跡遺跡、坊作遺跡、唐崎台遺跡、郡本遺跡群などで中核的な集落が成立している。とくに、国分寺台地区養老川右岸、根田代遺跡から天神台遺跡、蛇谷遺跡(市毛・須田・新田1977)にいたる弧状地帯では、山田橋式期から終末期TB2式期(鴨居上ノ台式期)、古墳時代前期初頭TE1期(五領1式期)に濃密な竪穴住居跡の分布が認められる(第3図)。台遺跡B地点も、宮ノ台式後半期から久ヶ原式期に集落規模を縮小するが、山田橋1式期において大規模かつ広範囲に竪穴住居が展開する。根田代遺跡、台遺跡、御林跡遺跡、長平台遺跡、中台遺跡(上総国分僧寺下層)、天神台遺跡(浅利1985・2002)、蛇谷遺跡は、現状調査区において分断され、地形的にもいくつかの支谷をはさむが、一体的な遺跡群として把握すべきものと思われる。その中では、漸次南側へ中心点を移動させていく傾向が認められ、終末期には、中台遺跡が中核となり、神門墳丘墓群(田中1977・1984、浅利1989)の成立基盤となる⁽¹⁴⁾。

後期の生産遺跡としては、根田代遺跡東側の村上遺跡で、溝底に杭列を伴う自然流路が検出されている(小久貴・渡邊1997)(第2図)。集落分布に対応し、主要な生産域が、東京湾側の市原条里制遺跡から、養老川流域側に移動した可能性も想定される。また、台地広範囲に展開する集落の状況からは、陸稻を含む畑作の比重も考慮しておく必要がある⁽¹⁵⁾。

当該地域の弥生時代後期は、宮ノ台式期の環濠集落への集住に対して、明らかに異なる集落景観を構成する。その比較は以下の諸点の事例に整理することができる。

		宮ノ台式期	久ヶ原・山田橋式期
a	集落景観	環濠集落への集住	竪穴住居散在、広範囲に展開、開放的
b	竪穴建替・移動	同心円状の拡張、小範囲での累積	同位置での建替・重複の減少、散在
c	竪穴出土土器	覆土への多量投棄、多	少
d	竪穴規模	規模分布全体に大	主柱穴を欠く小形竪穴の増加と平均規模の小形化
e	甕形土器容量	長胴、大形	短胴球形化、熱効率維持のための支脚形土器出現
f	大形竪穴住居	隔絶性不明確	規模の隔絶化
g	方形周溝墓	多数、規模均等、帶状・列状の計画的配置	少数、散在
h	墓域	居住域との明確な分離	竪穴住居跡群に混在

このうち、(a)の集落景観については、坊作遺跡、武士遺跡など、後期においては中規模と推定される集落でも宮ノ台式期の環濠規模に匹敵する規模をもち、広範囲かつ散在、開放的で、山田橋遺跡群は、山田橋式期において少なくとも100,000m²以上の遺跡範囲が想定される(第16表)。郡本遺跡群でも、断片的な調査では集落範囲が想定できないほど、広範囲にわたる竪穴住居跡の分布が確認さ

れている(木對1987、田中1995、小川1998、田所1998・2000a、鶴岡1999、高橋2004)。草刈遺跡の状況は、かならずしも特異なものではない(第233図)⁽¹⁶⁾。しかし、山田橋遺跡群における、現状での調査面積59,175m²に対する竪穴住居跡220軒は、散漫な拡張としてとらえることが適当であり、集落範囲も、後述するように変遷の結果として形成されたものである。宮ノ台式期の集住化とは明らかに異なる集落構造、集団原理が想定できる。

(b)の同心円状の拡張をともなう建て替えは、根田代遺跡を含め、東京湾東岸地域ではかならずしも明確ではないが、東京湾西岸の大塚遺跡や折本西原遺跡などでは特徴的に認められる。(c)はやや曖昧な基準ではあるが、当該地域の調査では常識的であり、(b)そして(a)に関連する。根田代遺跡でも、後期になると竪穴住居跡の分布が変動するが、後期、とくに集落範囲が極端に拡大する山田橋式期の集落は、居住域の拡大を指向するように、基点を変えて竪穴住居が更新される傾向が明らかであり、出土土器量の減少は、周辺竪穴住居からの投棄の有無、すなわち、竪穴住居の累積が一定の居住域を前提としていることを示している。

竪穴規模は、後期において、小形のものが占める割合が明らかに増加し、規模分布も全体に小形化する(第234図、第17表)。(e)の土器容量もこれに対応した変化と考えられ、竪穴規模の小形化が、直接居住集団規模に関連することを示している(第235図)(大村1988)。ただ、竪穴規模は、弥生時代前期の状況が明らかではないものの、当該地域では縄文時代後期末から大形化が認められ、また、

遺跡名	市町村名	時期	種別	居住域 累積面積	竪穴住居 軒数	調査面積	備考	文献
根田代遺跡	市原市	宮ノ台式期	環濠	19,830	(30)	9,070	竪穴住居跡軒数は本報告対象の宮ノ台式期。	
大厩遺跡	市原市	宮ノ台式期	環濠	(7,560)	(45)		環濠規模は推定最小値。	三森・阪田他1974
台遺跡	市原市	宮ノ台式期	環濠	18,610				浅利2002他
潤井戸西山遺跡	市原市	宮ノ台式期	環濠	19,400				鈴木1986他
大崎台遺跡	佐倉市	宮ノ台式期	環濠	17,690	153		居住域全掘。竪穴住居跡軒数は宮ノ台式期	柿沼・千田1985他
大塚遺跡	横浜市	宮ノ台式期	環濠	22,000	115		居住域全掘。	伊藤・小宮・坂上・武井・宮澤1991
坊作遺跡	市原市	久ヶ原2式期		13,000	42	24,660	居住域の一群はほぼ全掘。尼寺跡下層にも別群が展開か。	小出2002
山田橋遺跡群	市原市	(久ヶ原式～) 山田橋式期		(116,000)	(220)	59,175	居住域面積は推定。	大村2004
武士遺跡	市原市	山田橋式期		16,500	63	48,000	居住域の一群はほぼ全掘か。	田村・加納・高柳他1996
草刈遺跡	市原市	後期		142,000	1,000+	—	居住域面積は竪穴住居跡群の主要部のみ。軒数は遺跡総数。	大谷・白井2002
天神台遺跡	市原市	後期～古墳前期		(56,000)	(462)	133,000	居住域面積は地形による推定。竪穴軒数は古墳時代前期を含む。	浅利1994
草刈遺跡	市原市	古墳前期		245,000	—	—	居住域面積は竪穴住居跡群の主要部のみ。	大谷・白井2002

第16表 弥生時代中期から古墳時代前期の集落居住域規模

遺跡名	時期	竪穴軒数	平均床面積A (m ²)	平均床面積B (m ²)	無主柱穴竪穴率
根田代遺跡	宮ノ台式期	28	27.28 /24軒		5軒 / (28軒) 17.86%
大塚遺跡	宮ノ台式期	115	25.11 /96軒		4軒 / (115軒) 3.48%
根田代遺跡	後期	44	24.55 /30軒	20.98 /28軒	14軒 / (37軒) 37.84%
坊作遺跡	久ヶ原2式期	42	19.09 /42軒	16.73 /40軒	18軒 / (39軒) 46.15%
山田橋大山台遺跡	山田橋式期	107	17.29 /89軒	15.21 /86軒	56軒 / (89軒) 62.92%

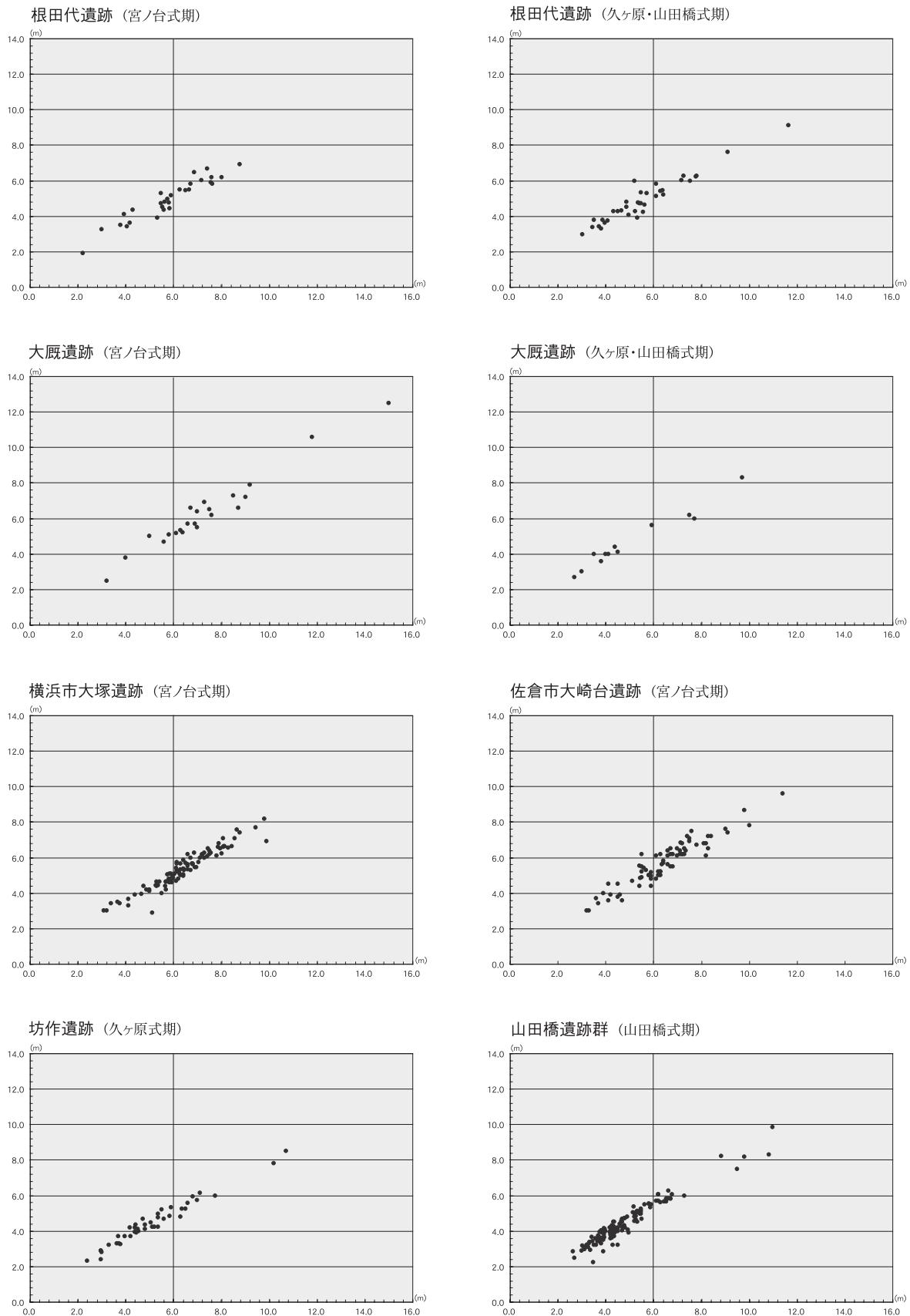
根田代遺跡は、小竪穴状の5号竪穴、および中後期の区分が明確ではない竪穴住居跡を除き、建て替えを含める。

山田橋大山台遺跡は、後期全体を対象とし、数軒の久ヶ原式期を含む。

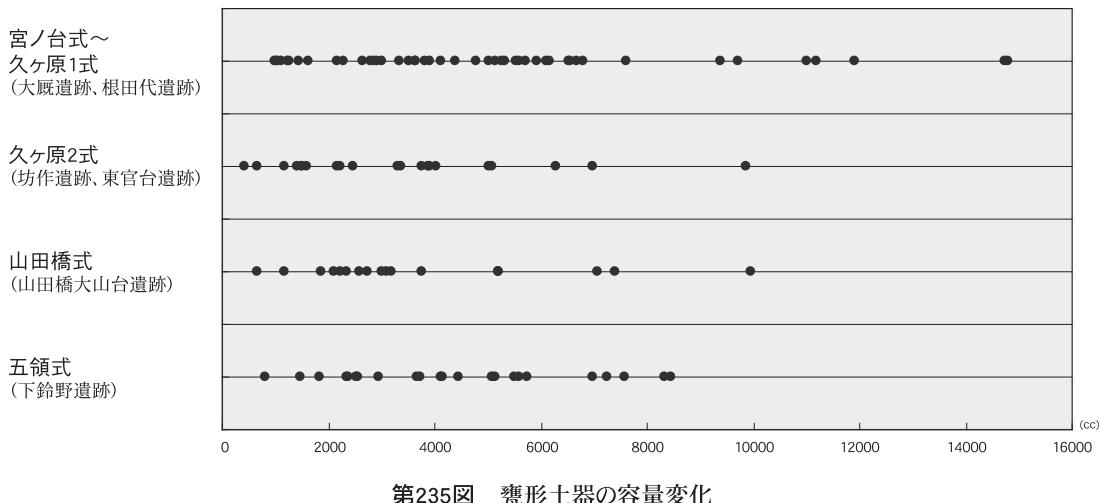
「平均床面積B」は、長軸長8m以上の大形住居を除外したもの。

第17表 竪穴住居跡規模比較

市原市域の弥生時代中期環濠集落群と後期集落



第234図 積穴住居跡規模比較

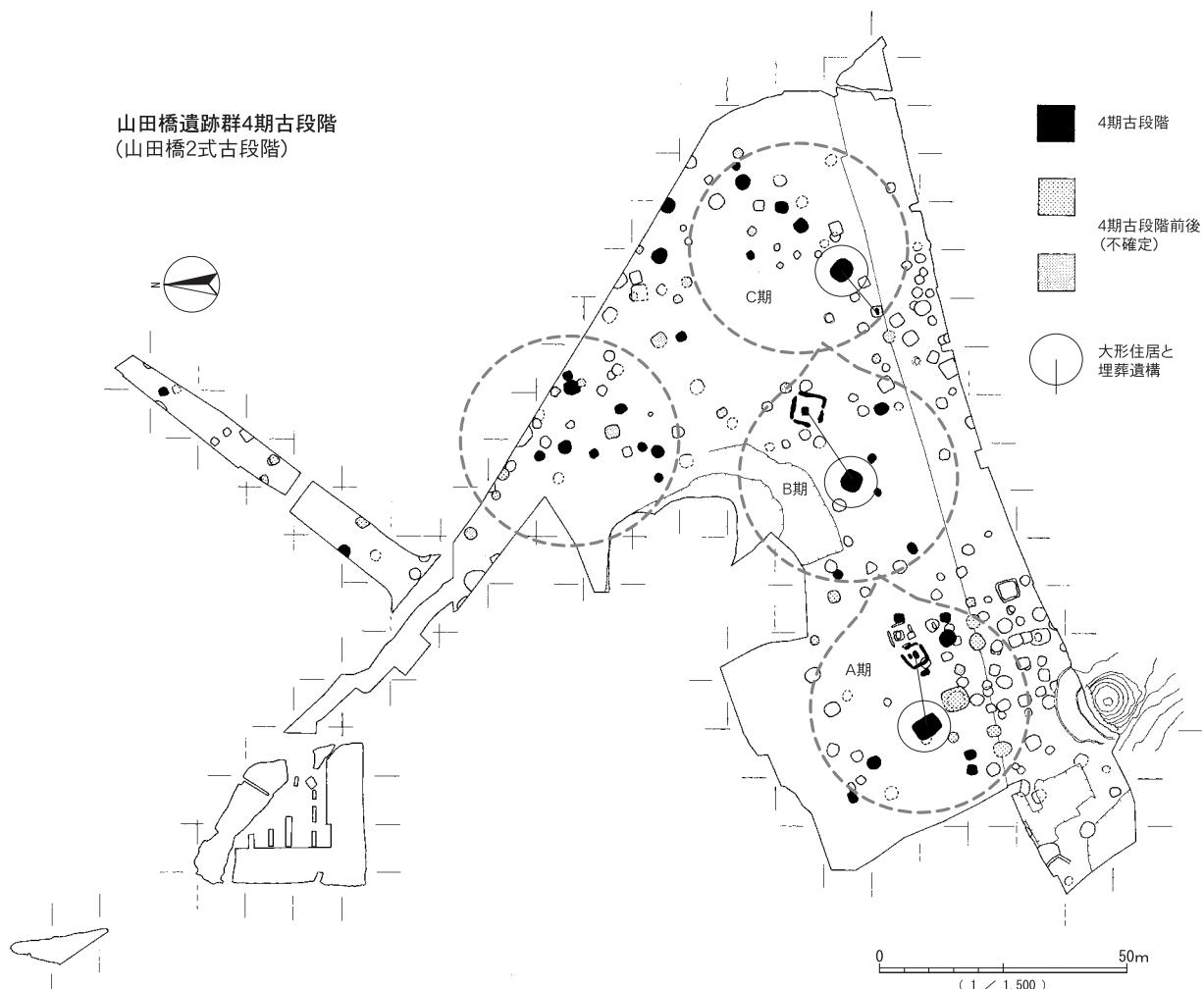


第235図 甕形土器の容量変化

後期においても環濠集落を形成する東京湾西岸地域でも、宮ノ台式期から後期、終末期へ向けて漸移小形化する。

(f)の大形住居跡は、山田橋遺跡群では220軒に対して長軸長が8mをこえる竪穴は7軒のみであった。隣接する千草山遺跡は、2軒の竪穴住居から構成される短期小規模の集落であるが、うち1軒の竪穴は長軸長が10.15mを測る。少なくともこの段階の大形住居は集落を代表すると考えられる。根田代遺跡では、3期の35号竪穴が長軸長11.63mを測り、他に、23B号竪穴、64号竪穴などが後期において長軸長8m以上を測る。大形住居の機能については、過去様々な検討が加えられているが、山田橋遺跡群では、方形周溝墓、木棺土坑墓との配置上の対応関係が認められ、これが首長居宅である可能性は高いと思われる(第236図)。これに対して、宮ノ台式期では、竪穴規模の隔絶性が普遍的には認められない。根田代遺跡では、集落中央部の状況が明確ではないが、大塚遺跡では規模分布から明確に特定の竪穴住居を識別することはできない⁽¹⁷⁾。この段階でも、大厩遺跡Y-38・44号址、折本西原遺跡Y13号住居址など、突出した規模の竪穴住居跡は存在するが、少なくとも普遍的な存在ではない。また、大厩遺跡の2軒は、ともにB6・7期に比定される。

中期の方形周溝墓は、乳幼児以外の未成人をも方台部中央に埋葬し、群として集団墓を形成する(大村1991・2004a)。その造墓行為には明確な秩序、規制が認められ、個々の方形周溝墓は相互に溝を接しながら列状に配列される。向神納里遺跡では、南北方向700mにわたり141基の方形周溝墓が帯状に配列されており、天神台(諏訪台)遺跡でも、各列の方向は一定しないものの、規則的な配列をみることができる。方形周溝墓は、おそらく集団墓を形成する一般的な墓制として成立した可能性が高い。しかし、久ヶ原式期になると、小田部新地遺跡など、四隅開口形式からの平面形態の変化にともない、列構成から離れ単独化する傾向が認められる。おおむね形態変化以降は、比較的大規模な集落においても10基をこえる検出例は限られ、山田橋式期の武士遺跡では、63軒の竪穴住居跡に対して方形周溝墓は3基、袖ヶ浦市文脇遺跡(山本1992)では、後期から終末期の竪穴住居跡約360軒に対して7基の方形周溝墓が竪穴住居群と混在する。配列方法、主軸方向にも規則性が認められない。山田橋遺跡群での埋葬遺構も、5基の方形周溝墓、3基の単独木棺土坑墓のみである。山田橋遺跡群大山台遺跡では、方形周溝墓、木棺土坑墓の造墓にともない、直前の竪穴住居が破棄されることが確認されており、一時期をみれば居住域、墓域は分離されていたと考えられる。しかし、墓域設定ある



第236図 山田橋遺跡群の変遷

いは居住域についても非継続的であり、このことが、竪穴住居跡群との混在、単独化、不規則な配列の要因となるものと推定される。国分寺台地区全体では、中期の方形周溝墓140基に対して、後期約30基とする集計が示されているが(田中2000)、竪穴住居跡数を勘案するならば、その差異は明らかであり、この段階に被葬者の選択が進行したと推定される。

これらの比較から想定される、宮ノ台式期と久ヶ原・山田橋式期の集団原理は、一口に言えば、宮ノ台式期の緊密な紐帯組織と、後期における弛緩である。とくに、向神納里遺跡の方形周溝墓群にみられる長期継続的で規則的な構成は、一貫した集団紐帯を背景にすると思われる。この段階に、親子関係にもとづく分節化した系譜的な出自観念の成立をみると困難であり、おそらくは、共通出自の観念を基盤とするものと推定される。台遺跡のように、環濠内に象徴的に大形の方形周溝墓が造墓される例が関東各地域で散見されるが、これも、大崎台遺跡では、早期に土器投棄、竪穴住居との重複がみられ、現実的な個人が始祖として設定されたものとは考えられない(大村1992b)。安藤広道も指摘するように、この段階では、首長の存在そのものもが、かならずしも鮮明かつ継続的なものとして認知できない(安藤2003)。

これに対して、久ヶ原式期、とくに山田橋式期になると、集団紐帯の弛緩とともに、首長個人が顕在化する。しかし、この段階の方形周溝墓には、一定墓域の継続的な設置は認められない。集落の変

遷過程も、居住域の拡大を指向するように、継続的な基点を欠き変動する。山田橋遺跡群大山台遺跡では、大形住居の移動にともない、竪穴住居群も漸次移動していく(第236図)⁽¹⁸⁾。一方で増殖し、また一方で縮小廃絶する状況は、当該時期、地域の基本的な動態であり、集落間の力学的な関係は、首長個人の力量により世代ごとに統合更新され、それにともない集落あるいは集落群が再編されたものと推定される。宮ノ台式期の事例ではあるが、折本西原遺跡の大形竪穴住居は、同心円状の拡張によって顕在化する(久世2001)。この段階の首長は、あくまでも個人的な力量による集団内の選択にもとづくと考えられ、集落も、首長権の移動、新たな首長の認知にともない、世代的に再編される。結果としての集落範囲は、その変遷過程の累積結果であり、環濠集落への集住とまさに対極をなす。少なくともこの段階に、首長地位の特定集団への固定化を認めることは困難であると思われる。

ただし、宮ノ台式期の緊密な集団組織は、前述したように竪穴住居の居住単位から見れば縄文時代後期末以降の基層的なものであり、環濠への集住化の基底にあって、これを促進強化したと考えることはできるものの、環濠への集住が、緊密な集団紐帯の直接的な要因となるものではない⁽¹⁹⁾。当該地域における集落景観の変貌は、基本的には外的契機の有無にもとづくものと推定される。すべての事象を首長権力の単系的発展段階論に収斂・単純化すべきではない。

当該地域の弥生時代中期と後期、また、後期においては、東京湾西岸、東岸地域は、集落構成、墓制、土器型式の地域性の発現形態など、様々な点で異なる内容をみせる。相異なる地域相の比較対照は、交通、集団関係といったより高次の解釈を可能にすると考える。また、市原市域では、弥生時代終末期において神門墳丘墓群が、古墳時代には前期古墳として関東地方でも卓越した規模をもつ姉崎古墳群が出現する。国分寺台地区の整理作業の進捗による資料の共有化によって、これらの成立にいたるプロセス、成立基盤についての検討が進むものと期待される。

註

- (1) 根田古墳群前期方墳については、過去の経緯から「方墳」の呼称を使用したが、方形周溝墓としての理解も必要であると思われる(大村2004a)。
- (2) 根田代遺跡では、4号竪穴12(図版83)、5号竪穴5(図版84)など、地文として擬縄文が一定量認められる。これは、一見単節縄文様であるが、条・節の繰り返しが認められず、縦横の凹部が連続してわけではない。一定範囲をもって施文されており、櫛等の刺突のやるものではない。布目圧痕を含む可能性もあるが、各凹部が比較的深いにもかかわらず、経糸、緯糸の交差による凹部の縦横方向への伸張が認められないものもあり、なお検討を必要とする。5号竪穴5を例にすると、施文はおよそ1cm四方の単位をもっており、一部扇状になることから回転をともなう可能性がある。ただし、これは布目痕であることを否定するものではない。ただし、各凹部内の細かい凹凸は、少なくとも条の撚りによるものではない。また、経緯による反復も認められず、少なくとも布目圧痕以外を含むことは確実である。前稿では、オオバコの花茎等を原体として想定したが、これも確証があるわけではない。なお、段部の押捺部にみられる圧痕については、基本的に布目圧痕と推定されるが、擬縄文はこれに対して明らかに粗い。
- (3) 第215図は、未実測個体も含めて集計を行った。分類は多岐に及んだが、個体数の関係で傾向がつかめないものが大半であった。
- (4) 宮ノ台式の口縁部有段のC亜1類、頸部有段のB類は、かならずしも粘土紐積み上げ痕によるものではない。
- (5) 区画文に關していえば、過去の久ヶ原式・弥生町式に対比することもできるが、久ヶ原式・山田橋式は、単純な回帰ではない。とくに呼称における「弥生町式」の当該地域での使用は、この間の研究史を明らかに無視するものである。
- (6) 他に、82号竪穴5(第126図)が外来系の可能性がある。頸部櫛描文部分が小破片のため明確ではないが、埼玉県以北の

櫛描文系であろうか。竪穴住居の伴出土器とは考えにくい。

- (7) とくに山田橋 1 式に散見される地文としての回転結節文についても、安房地域の影響によると思われる。ただし、山田橋式における区画文としての結節文の系譜については、なお検討の必要がある。
- (8) 千葉県北部下総台地から東関東の環濠集落は、時期的に五領 1 式古段階 (TE1a 式期) が中心となる。これは、奈良県纏向遺跡纏向遺跡辻土坑 4 下層に対応する段階と考える。ただし、東関東地方古墳時代前期の方形区画すべてが「環濠集落」ではない (大村 2002a)。
- (9) 草刈遺跡では、J 区までの発掘調査で、弥生時代竪穴住居 669 軒、古墳時代竪穴住居 979 軒、古墳 171 基、奈良・平安時代竪穴住居 168 軒とする集計が示されている (島立 1992)。古墳時代は、大半が前期に比定される。
- (10) 第 228・229 図環濠全体図文献 草刈遺跡 (大谷・白井 2002)、台遺跡 (浅利 2002)、潤井戸西山遺跡 (木對 2004b)、根形台遺跡群・地点 (安藤・稻葉他 2001)、南総中学遺跡 (大村 2002b)、大厩遺跡 (三森・阪田他 1974)、佐倉市大崎台遺跡 (柿沼・千田他 1985・1986・1987)、八千代市田原窪遺跡 (秋山 1995)、千葉市戸張作遺跡 (菊池 1998・1999)、木更津市東谷遺跡 (西原 1997)、袖ヶ浦市美生遺跡第 4 地点 (浜崎 1993)、木更津市鹿島塚 A 遺跡・庚申塚 B 遺跡 (岡野 1994・當眞 2001)、柏市戸張一番割遺跡 (古宮・下津谷 1997)、高花 2003)、佐倉市高岡大山遺跡 (宮内・大沢・阿部他 1993)、佐倉市石川阿ら地遺跡 (喜多 1993)

上記文献をもとに作図した。環濠面積は、各文献全体図から計測した。

- (11) 第 230～232 図は、小谷田八木遺跡をのぞき、発掘調査実施遺跡にもとづく分布図であり、とくに、養老川左岸袖ヶ浦台地側の遺跡密度が低いのは、開発の進捗の程度を反映している。また、基本的に居住域、竪穴住居跡の検出遺跡を対象としているが、中期前半と宮ノ台式期については方形周溝墓群から構成される山田大宮遺跡、六孫王原遺跡などを含んでいる。

第 230 図宮ノ台式期については、前半期、後半期に継続する遺跡が限られているため、区分して表示した。継続遺跡については、推定環濠形成時期、推定開村時期にもとづく。

作図は、市原市遺跡管理システム (GIS) の出力図を下図として Illustrator に配置し作成した。

- (12) 千葉県域では、一般に石器生産が低調であるといわれている。袖ヶ浦市美生遺跡群 (浜崎 1993) などでは小規模な石器生産が行われているが、本遺跡では確実に磨製石斧の未製品と考えられるものは存在しない。
- (13) 東京湾東岸地域の後期環濠集落の形成時期は、未報告遺跡も多く、いまだ明確ではない。現状資料では、おおむね山田橋 1 式期には機能を停止している例が多い。三浦半島、東京湾西岸地域と接点のある地域に限定されているが、相模川・境川流域の環濠集落の形成は、山田橋 1 式期以降であり、時期的には対応しない (大村 2004c)。
- (14) 大規模な集落群は、草刈遺跡を含む千原台地区でも認められ、大厩遺跡群なども可能性がある。東京湾東岸地域の弥生時代後期から古墳時代前期前半の遺跡は、竪穴住居跡軒数の比較をみても各時代を圧倒しており (大村 1993、集落研究班 1996)、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、下総台地、東関東、さらには東北地方への移住母体となる (比田井 2004)。
- (15) 遺構分布の変遷が、畑作による連作回避に関連する可能性については、山田昌久によって指摘されている (山田 2000)。炭化種実等の検出例も各遺跡で増加しているが、山田橋大山台遺跡では、イネ 57 点に対して、ムギ類 24 点が検出されている。
- (16) 第 233 図草刈遺跡全体図は、『千葉県の歴史』資料編考古 2 (大谷・白井 2002) 掲載図を再トレースしたものであるが、詳細が明確ではないため、かならずしも正確ではない。あくまでも参考図であり、詳細は元図を参照願いたい。
- なお、草刈遺跡の後期条濠 2 条が、当初から居住域を区画するものとして掘削されたとするならば、その広範囲にわたる設定の背景として、畑作の可能性をより重視すべきかもしれない。
- (17) 大塚遺跡では、環濠内中央部付近の Y17・Y32・Y80 号住居址を中心的な竪穴住居と推定しているが (岡本・小宮・坂上・武井 1994)、規模等にみる他竪穴住居との差異は、後期、終末期の大形住居と比較して明確ではない。
- (18) 第 236 図 A～C 期は、土器編年上検証できるわけではない。前後期を含めた集落全体動態から想定したものである。
- (19) 東谷遺跡、庚申塚 B 遺跡などの環濠集落では、後期においても、方形周溝墓の列状の配列が認められる。また、相模川流域、東京湾西岸地域の後期でも、群在する方形周溝墓群が散見できる。ただし、個々の竪穴住居の居住単位と、集落レベルでの集団組織を同レベルにおいてとらえることが適當かどうかは判断が難しい。

文 献

- 秋山利光 1995「田原窪遺跡」『平成6年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
- 浅利幸一 1981「根田遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 浅利幸一 1985「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』
- 浅利幸一 1989「神門三号墳」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』
- 浅利幸一 1994「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
- 浅利幸一 1997『市原市大庭浅間様古墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第42集
- 浅利幸一 2002『市原台遺跡群』『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 阿部義平・藤尾慎一郎 1990『再現・古代の豪族居館』財団法人歴史民俗博物館振興会
- 有沢要・石本俊則・小高春雄 1983『道庭遺跡』道庭遺跡調査会
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分(上)」『古代文化』第42巻第6号 財団法人古代学協会
- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分(下)」『古代文化』第42巻第7号 財団法人古代学協会
- 安藤広道 1991「弥生時代集落群の動態 横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に」『調査研究集録』第8冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 安藤広道 1996「南関東地方(中期後半・後期)」『YAY!(やいっ!)』弥生土器を語る会20回到達記念論文集 弥生土器を語る会
- 安藤広道 2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』第50巻第1号 考古学研究会
- 安藤道由 1997『根形台遺跡群 地点』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第136集
- 安藤道由・稻葉理恵他 2001『平成12年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書 根形台遺跡群』袖ヶ浦市教育委員会
- 井口崇・簗島正広 1985『西ノ窪遺跡 袖ヶ浦町郷土博物館建設に伴う発掘調査』袖ヶ浦町教育委員会
- 石井寛・倉沢和子 1980『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石川日出志 2000『南関東の弥生社会展開図式・再考』『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』株式会社東京堂出版
- 石川日出志 2001a『関東地方弥生時代中期中葉の社会変動』『駿台史学』第113号 駿台史学会
- 石川日出志 2001b『東日本の環濠集落』『弥生時代の集落』学生社
- 石田広美 1987『白船城跡第1次』財団法人市原市文化財センター調査報告書第15集
- 市毛勲・滝山昌彦 1967『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書第3冊 市原市教育委員会
- 市毛勲・須田勉・新田栄治 1977『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 伊藤郭・小宮恒雄・坂上克弘・武井則道・宮澤寛 1991『大塚遺跡 弥生時代環濠集落址の発掘調査報告 遺構編』港北ニュー タウン地域内埋蔵文化財報告 横浜市埋蔵文化財センター
- 伊藤伸久・甲斐博幸他 1996『常代遺跡群』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第112集
- 伊藤伸久 1999『平成11年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書 西原遺跡』袖ヶ浦市教育委員会
- 稻葉昭智 1995『大竹遺跡群 向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第103集
- 大谷弘幸・白井久美子 2002『ちはら台遺跡群』『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 大村直 1987『下鈴野遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第16集
- 大村直 1988『豎穴住居に住む人々』『考古学研究』第34巻第4号 考古学研究会
- 大村直 1991『方形周溝墓における未成人中心埋葬について 家族墓・家長墓説批判』『史館』第23号 史館同人
- 大村直 1992a『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集
- 大村直 1992b『古代東国社会の基盤』『新版古代の日本』第8巻関東 角川書店
- 大村直 1993『ムラの廃絶・断絶・継続』『市原市文化財センター研究紀要』
- 大村直 1994『戸張一番割遺跡の甕形』『史館』第25号 史館同人
- 大村直 2002a『弥生・古墳時代のムラ研究について』『ムラ研究の方法 遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会論文集4
- 大村直 2002b『南総中学遺跡』『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 大村直 2004a『方形周溝墓』『千葉県の歴史 資料編 考古4 遺跡・遺構・遺物』千葉県(2003年3月送稿)
- 大村直 2004b『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第88集

- 大村直 2004c 「久ヶ原式・山田橋式の構成原理 東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住・物流」『史館』第33号 史館同人
- 岡田威夫 1988 『折本西原遺跡 - 』折本西原遺跡調査団
- 緒方雪絵 2002 「弥生・古墳時代のガラス玉の基礎的研究 上総地域を中心に」『土筆』第7号 土筆舎
- 岡野祐二 1994 『請西遺跡群 鹿島塚A遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第84集
- 岡本勇・小宮恒雄・坂上克弘・武井則道 1994 『大塚遺跡 弥生時代環濠集落址の発掘調査報告 遺物編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財報告 横浜市埋蔵文化財センター
- 小川浩一 1998 「都本遺跡(4次)」『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 小川浩一 2000 「潤井戸中横峰遺跡(2次)」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
- 小久賀隆史 1983 『千原台ニュータウン 草刈遺跡A区(第1次調査)・鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター
- 小久賀隆史・渡邊高弘 1997 『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書 市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡』財団法人千葉県文化財センター調査報告第309集
- 小久賀隆史・加納実・高梨友子 1999 『市原市市原条里制遺跡』財団法人千葉県文化財センター調査報告第354集
- 小倉淳一 1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号 史館同人
- 忍澤成視 1995 『根田祇園原貝塚(第5次調査)』『市原市文化財センター年報 平成3年度』
- 忍澤成視 1999 『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小高春雄 1995 「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『千葉県文化財センター研究紀要』16
- 柿沼修平他 1979 『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6
- 柿沼修平・千田利明 1985 『大崎台遺跡発掘調査報告』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会・佐倉市
- 柿沼修平・千田利明 1986 『大崎台遺跡発掘調査報告』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会・佐倉市
- 柿沼修平・千田利明・青木幸一 1987 『大崎台遺跡発掘調査報告』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会・佐倉市
- 喜多圭介 1993 『千葉県佐倉市石川阿ら地遺跡』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書第66集
- 木對和紀 1987 『市原市郡本遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第14集
- 木對和紀 1992 『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集
- 木對和紀 2004a 『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 木對和紀 2004b 「潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡」『平成15年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 久世辰男 2001 『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 倉田芳郎・相京建史 1978 『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会
- 黒沢浩 1993 「宮ノ台式土器の成立 東海地方の櫛描文土器群の動向から」『駿台史学』第89号 駿台史学会
- 黒沢浩 1997 『房総宮ノ台式土器考 房総における宮ノ台式土器の枠組み』『史館』第29号 史館同人
- 黒沢浩 1998 『統・房総宮ノ台式土器考 房総最古の宮ノ台式土器』『史館』第30号 史館同人
- 小出紳夫 2002 『坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 鯉渕和彦 1989 『奥谷遺跡 小鶴遺跡(上)(下) 一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第50集
- 小橋健司 2002a 『市原市加茂遺跡D地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第82集
- 小橋健司 2002b 『姉崎山新遺跡(第2地点)』『市原市文化財センター年報 平成11年度』
- 小橋健司 2004 『市原市山倉古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 吉宮隆信・下津谷達男 1997 「弥生・古墳時代の市域」『柏市史』原始・古代・中世編 柏市教育委員会
- 近藤敏 1987 『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集
- 近藤敏 2004 『南岩崎遺跡(1次・2次調査)』『市原市文化財センター年報 平成13・14年度』
- 斎木勝・種田斎吾・菊池真太郎 1974 『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 斎木勝・深沢克友 1978 「東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『研究紀要』3 考古学から見た房総文化3 弥生時代 財団法人千葉県文化財センター
- 埼玉考古学会 2004 『シンポジウム「北島式土器とその時代 - 弥生時代の新展開 - 」の記録』埼玉考古第39号 埼玉考古学会
- 財団法人千葉県文化財センター 1998 『市原市市原条里制遺跡(県立スタジアム)』『千葉県文化財センター年報』No.22
- 櫻井敦史・黒沢浩 1997 『白船城跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第35集

- 櫻井敦史 1997「姉崎六孫王原遺跡 F 区」『市原市文化財センター年報 平成 6 年度』
- 笹生衛 1994『上大城遺跡発掘調査報告書』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第 100 集
- 三森俊彦・阪田正一他 1974『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県開発公社
- 島立桂 1992「市原市草刈遺跡 J 区(千原台地区)」『千葉県文化財センター年報』No.17
- 集落研究班(當眞嗣史) 1996「弥生時代後期から古墳時代前期の集落研究」『君津都市文化財センター研究紀要』
- 白井久美子・田島新他 1994『千原台ニュータウン 草刈六之台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第 241 集
- 鈴木英啓 1986『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 9 集
- 高田博 1986『千原台ニュータウン 草刈遺跡(B 区)』財団法人千葉県文化財センター
- 高橋康男 1990『市原市姉崎東原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 37 集
- 高橋康男 1993『市原市姉崎東原遺跡 B 地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 51 集
- 高橋康男 1994a「東官台遺跡」『平成 5 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 高橋康男 1994b「菊間深道遺跡」『平成 5 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 高橋康男 2002『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 高橋康男 2004「古甲遺跡(第 6 次)」『市原市文化財センター年報 平成 13・14 年度』
- 高花宏行 1993「高岡大山遺跡における 3 世紀後半から 4 世紀初頭の様相について」『高岡遺跡群』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書第 71 集
- 高花宏行 2002「戸張一番割遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古 2 弥生・古墳時代』千葉県
- 滝瀬芳之・山本靖他 1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 128 集
- 田所真 1995「菊間深道遺跡 B 地点」『平成 6 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 田所真 1998「郡本遺跡群(古甲遺跡第 4 次)」『市原市文化財センター年報 平成 7 年度』
- 田所真 2000a「郡本遺跡群(古甲遺跡第 5 次)」『市原市文化財センター年報 平成 8 年度』
- 田所真 2000b「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報 平成 9 年度』
- 田所真 2001「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報 平成 10 年度』
- 田村隆・加納実・高柳圭一他 1996『市原市武士遺跡』千葉県文化財センター調査報告第 289 集
- 田中新史 1976「南向原遺跡」『南向原 古墳・方形周溝墓・住居址の調査』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第 63 号 早稲田大学考古学会
- 田中新史 1980「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第 77 号 早稲田大学考古学会
- 田中新史 2000『上総市原台の光芒 市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会
- 田中清美・鈴木英啓 1981『唐崎台遺跡 千葉県市原市能満唐崎台における弥生時代後期の集落址の発掘』唐崎台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- 田中清美 1989『千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 29 集
- 田中清美 1995『市原市郡本遺跡(第 2 次)』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 56 集
- 田中清美 2002『釜神遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 76 集
- 田中大介 2002「南岩崎遺跡」『第 17 回市原市文化財センター遺跡発表会要旨平成 13 年度』
- 対馬郁夫・谷島一馬・浅利幸一・柿沼広 1976「加茂遺跡 C 地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 鶴岡英一 1999『市原市郡本遺跡(第 4 次)』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 61 集
- 鶴岡英一 2001「潤井戸鎌之助遺跡(第 2 次)」『市原市文化財センター年報 平成 10 年度』
- 寺澤薰 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 當眞嗣史 2001『請西遺跡群発掘調査報告書 庚申塚 A 遺跡・庚申塚 B 遺跡』木更津市教育委員会
- 戸田哲也 2000「中里遺跡の調査」『中里遺跡講演会 東日本弥生時代の幕開けを解明する』平成 12 年度小田原市遺跡調査発表会要旨 小田原市教育委員会
- 中能隆 1998『上泉遺跡群上ノ山遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第 148 集

- 西相模考古学研究会（小田原シンポ準備会）2001『シンポジウム弥生時代のヒトの移動相模湾から広がる世界 資料集』
- 西相模考古学研究会 2002『弥生時代のヒトの移動相模湾から考える』考古学リーダー1 六一書房
- 西野則史 1990『北郷C遺跡 森戸遺跡（上）（下） 一般国道349号線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第55集
- 西原崇浩 1997『木更津市中尾遺跡群東谷遺跡の弥生時代の環濠集落』『君津都市文化財センター第4回遺跡発表会資料』
- 西原崇浩 2002『中尾遺跡群』『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 新田浩三 1998『市原条里制遺跡』『平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
- 能城秀喜・稻葉理恵他 2002『根形台遺跡群』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第176集
- 蜂屋孝之 1999『市原市西国吉遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第65集
- 浜崎雅仁 1993『美生遺跡群 第4・5・9地点』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第93集
- 半田堅三・白井久美子 1982『長平台遺跡の調査』『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 半田堅三 1997『姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集
- 半田堅三 2003『市原市台遺跡B地点』『上総国分寺台遺跡調査報告』財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 比田井克仁 1995『下総地域の主体性 東京湾岸との相対的関係から見た弥生～古墳時代の様相』『法政考古学』第21号 法政考古学会
- 比田井克仁 2004『古墳時代前期における関東土器圏の北上』『史館』第33号 史館同人
- 藤崎芳樹 1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 藤崎芳樹 1983『市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器』『研究連絡誌』第3号 財団法人千葉県文化財センター
- 古内茂 2002『大厩遺跡』『千葉県の歴史 資料編 考古2 弥生・古墳時代』千葉県
- 松本完 1993『南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性』『翔古論聚 久保哲三先生追悼論文集』久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 松本完 2004『シンポジウム『北島式土器とその時代』を振り返って』『埼玉考古』第39号 埼玉考古学会
- 簗島正広 1992『請西遺跡群発掘調査報告書』『庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡・山伏作古墳群第22号墳』木更津市教育委員会
- 宮内勝己・大沢孝・阿部寿彦他 1993『高岡遺跡群』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書第71集
- 村上吉正・井澤純 2003『下寺尾西方A遺跡』かながわ考古学財団調査報告157
- 諸墨知義 1993『小櫃川流域における後期弥生土器について マミヤク遺跡を中心として』『君津都市文化財センター研究紀要』
- 谷島一馬 1979『御林跡遺跡の調査』『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 山口直樹 1984『小田部新地遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第4集
- 山田昌久 2000『考古資料から畠を考える』『はたけの考古学』日本考古学協会 2000年度鹿児島大会資料集第1集
- 山本哲也 1992『文脇遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第69集
- 吉田稔 2003a『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 吉田稔 2003b『北島式の提唱』『北島式土器とその時代 弥生時代の新展開』埼玉考古別冊7 埼玉県考古学会
- 米田耕之助 1986『山田大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第8冊

付編 DTP 入稿について

埋蔵文化財情報のデジタル化、ネットワーク化は、近々避けて通ることのできない課題となる。また、発掘調査費用のコスト削減の側面からみても、整理作業方法はつねに更新されるべきであり、DTP化も当然検討が必要となる部分である。

本報告書は、フルデジタルでの入稿を行った。全国的にみれば、後発ではあるが、今後、一貫したワークフローを作成するためには実績の積み重ねが必要であり、今回の作業工程、仕様を記録として残しておく。なお、これはあくまでも制作記録であり、ここでの情報には誤ったものがないとは限らない。また、入稿段階までの記録であり、結果完成にいたる工程の中で、いかなる問題を生じたかは含まれていないことを留意願いたい。

近年、デジタルデータは身近なものとなり、ワープロ・表計算ソフトの使用は一般化している。しかし、印刷製本に至る過程では、すべてのデジタルデータが直接反映されているわけではない。Microsoft Excelについては、表作成のエディタとしての役割があるが、Wordによるレイアウトは、あくまでも「見本」でしかない。そこで作り込むことは、無益どころか弊害にもなりうる。挿図のキャプションや遺物No.等の指定も、そこでいかに手間をかけたとしても、アナログ入稿では、再入力により、程度の差はあれ一端劣化せざるを得ない。デジタルデータのすべてをいかに伝達するか、作成時の手間をいかに直接反映させるかが、DTP化に対する基本的な視点となる。その中で、いかなる工程のどの段階までを内作業として行うかは、DTPの進捗、コスト計算にあわせて検討しなければならない。

ただ、DTP化を進めていっても、完成品(印刷製本)まですべてを内製することは有り得ないわけで、異なるシステムやハードウェア環境に引き渡される。デジタル入稿が、印刷製本費全体の低減につながるとしても、出力トラブルの大半が制作側のデータミスによって生じる状況では、それに対する責任の所在が今後問題となることは明らかである。モニタ上の画像が虚像でしかない場合も多々あり、独りよがりの判断ではなく、一貫したワークフローの作成が急務といふ。

制作環境

PC

EPSON Endeavor Pro2000 + 22型CRT + 液晶ペンタブレット WACOM C-1500X

WindowsXP Pro、P4 3.06MHz、1.5GBRAM (Adobe Creative Suite Premium)

EPSON Endeavor MT-6000 + 液晶ペンタブレット WACOM C-1500X

WindowsXP Pro、P4 2.02MHz、1.0GBRAM (Adobe Creative Suite Standard)

NEC VT1000J / 6 + 17型CRT

WindowsXP Pro、P 997MHz、256MBRAM (Adobe Illustrator10.0.3、Adobe Photoshop7.0)

(NEC Mate MY34Y / G-E + 19型液晶)

WindowsXP Pro、P4 3.39GHz、2.0GBRAM (Adobe Creative Suite Premium)

スキャナ

EPSON ES-8500 (モノクロ2階調、ダブルトーン画像)

EPSON GT-X700 (カラー複数画像)

デジタルカメラ

OLYMPUS CAMEDIA E-20 (有効画素数495万画素)

FUJIFILM FinePixF710 (有効画素数620万画素)

プリンタ

RICOH imagio MF-3540W

EPSON LP-9100PS3

使用ソフト・基本設定

画像処理 Adobe PhotoshopCS(8.0.1)、7.0

画像形式 Photoshop(PSD)形式 PhotoshopEPS形式

PhotoshopEPSオプション エンコーディング

バイナリ ダブルトーン、モノクロ2階調

JPEG(最高画質/低圧縮率) カラー、グレースケール

画像解像度 出力等倍 1200pixel / inch(モノクロ2階調)

出力等倍 350(~400) pixel / inch (カラー、ダブルトーン、グレースケール)

ダブルトーンオプション

インキ1 ブラック 0 : 0% 100 : 100%

インキ2 TOYO0823pc 0 : 0% 100 : 90%

版下レイアウト・デジタルトレース Adobe IllustratorCS(11.0.0)、10.0.3

形式 IllustratorAI形式(CS、10.0.3) IllustratorEPS形式(10.0.3)

編集 Adobe InDesignCS(3.0.1)

文字組み 行末約物半角を基準に一部カスタマイズ

禁則処理 弱い禁則

印刷出力線数指定 175ipi

遺構・遺物トレース

遺構図については、全体図など一部をのぞき、すべてIllustratorによるデジタルトレースとした。遺物のトレースは、制作時のコスト面で、現状においてアナログトレースが優位であることから、従前通りの版下作成とし、全凸図版(A4判×200%以上)については、スキャニング、ゴミ取り、モノクロ2階調化までを事前に外注した。ただし、A3判以下のものについては内製とした。一般には、ハイエンド製版スキャナとコンシューマ向けフラットベッドスキャナでは、仕上がりに大きな差ができるといわれるが、Photoshopでのレベル補正、アンシャープマスクの設定さえ習得すれば、少なくともモニタ上ほぼ同等の仕上がりが認められる。なお、一部スクリーントーンのモアレが予測されたものについてはグレースケールとし、「ぼかし」処理を行ったが、モノクロ2値画像を含め、モアレが確実に回避できたかどうかは、現状において明らかではない。遺物のうち旧石器については、実測・トレースまでを委託としたため、Illustratorでの納品成果を使用し、追加実測したものも、デジタルトレースとした。

デジタルトレースにあたっては、液晶ペンタブレットを導入しているが、現状では、なおペン先とトレース線の連絡に違和感があり、また修正作業などでマウスとの併用も煩雑であったようで、作業後半では線入力そのものもマウスが主体になってしまった。トレースは、今回、主に「ペンツール」を使用したが、「鉛筆ツール」によるペンタブレットの慣れが必要であると思われる。

遺構図のデジタル化は、本来現場から一貫したものであることが望ましいが、アナログ図面についても、デジタルトレースを行い、CADで座標を与えることによって、全体図の作成も可能となる。現状の制作環境では、そこまでの内製化はできないが、市原市では、すでに1997年度からGIS(市原市遺跡情報管理システム)を導入しており、デジタル情報の資産化にも資すると思われる。

挿図版下作成

版下作成は、まず平面・断面の配置を終えた遺構のデジタルトレース原図を台紙に仮貼りし、これを基準として遺物トレースを貼り込み仮組とした。遺物トレースはこれをスキャニングし、最終的には、Illustratorの遺構デジタルトレース書類(ファイル)に、遺物図のモノクロ2階調PhotoshopEPS形式を配置した。キャプション、遺物No.等のテキストの入力は、すべてIllustrator上で行っている。

表組み

挿図上の土層注記表については、Illustrator書類にExcelを直接ペーストした。ただ、直接貼り付けた場合、罫が罫として認識されないものがあるため、土層注記表以外については、ExcelのアドインソフトであるEIコンバータ(チップスコネクション社製)を使用してIllustratorに取り込み、罫の太さ等の加工、調整を行っている。

遺構写真

遺構写真は、通常のとおりモノクロ仕上がり等倍で引き伸ばし、図版単位で組作業を行った後に、スキャニングした。スキャニングは、すべて内製とした。Photoshopでは、傾き調整、切り抜き、画像解像度の設定、レベル補正、アンシャープマスク処理ののち、ダブルトーン設定まで行った。

カラー画像については、ボジからの取り込みとなったが、いずれも退色が激しく、乗算による合成処理のち色調補正を行った。CMYKへのモード変更、EPSエンコーディングについてはハンドリングを考慮して、JPEG(最高画質/低

圧縮率)にした。しかし、カラー画像については、送稿後の色校正が必要と思われ、ここまで処理を進めることは、かならずしも意味があることではない。EPS形式とは別に、RGBカラー、ネイティブ形式を添付したが、よりノーマル状態での添付が適当であったかも知れない。

プロファイルについては、「Japan Color 2001 Coated」としたが、結局埋め込みは行わなかった。

遺物写真

当センターには、一眼レフタイプのデジタルカメラとして、NikonD1Xがあるが、これは通常遺物実測用として使用しており、レンズの取り外し時の障害が危惧されたため、スペック上問題のないOLYMPUS CAMEDIA E-20を使用した。E-20は、画質モード(RAW・TIFF)で、2,560pixel × 1,920pixel =4,915,200画素のスペックであり、175線350dpiを基準とすると、最大18.58cm(2,560pixel / 350dpi × 2.54inch) × 13.93cm(1,920pixel / 350dpi × 2.54inch)の撮影が可能である。したがって、横1段組(縦2段)については、ほとんど余白がとれないものの、横2段以上の組については、まったく問題がない。ただし、必要画素数を満たしているかどうかについては、画像解像度の設定時に確認した。撮影モードは、TIFF形式とした。ただ、E-20は欠点として連写による書き込み速度が遅いため、詳細写真(写真図版83～115)、平置きの一部については、コンパクトカメラであるF710を主に使用した。F710は、RAWの設定も可能ではあるが、JPEG画質モードFINEで撮影を行い、加工前に添付ソフトによって一括TIFF形式に変換した。さらに、Photoshopでの加工にともない、PSD EPS形式に変換した。なお、撮影時の設定は、シャープネス、コントラスト以外、基本的にフルオートであった。

Photoshopでの加工は、傾き調整、切り抜き、レベル補正、画像解像度の設定、アンシャープマスク処理、モード変更(RGBカラー グレースケール ダブルトーン)、カラーについては、モード変更(RGBカラー CMYKカラー)を行った。平置き撮影の遺物については、フリーフォームペンツールのマグネットオプションを使用し、クリッピングパスによって切り抜いた。

仕上がりの画質は、とくにレベル補正、アンシャープマスクが重要な工程となる。なめらかで深みのある画像に仕上げるには、256階調をできるだけ広範囲に使用しなければならないが、設定の詳細は省略する。

写真図版下作成

画像ファイルは、ファイル名を構造遺物No.に変更後、組みの異なる立物、平置きにわけ、さらに、掲載順となる構成単位のフォルダに整理した。組み作業にともない、最終的には、Illustratorの書類単位で作成したフォルダに移動し格納した。修正用のPSD形式は、その下位フォルダに収納した。フォルダ構成は、挿図も同様である。

写真画像は、事前に作成したIllustratorのテンプレートに貼り込んだ。なお、画像の貼り込みはリンク配置であるが、確実性を考慮し、最終的なファイル保存の際には「配置した画像を含む」にチェックを入れている。

Illustratorでの配置画像のマスク処理は、クリッピングマスクとともに、スキャニング前に複数画像を組み上げた構図版については、白塗りオブジェクトを重ねることによってマスキングを行った。なお、Web上の一印刷会社の入稿仕様では、この方法は推奨されていない。同様の方法をとった「山田橋大山台遺跡」では、印刷会社から具体的な指摘をうけていないが、その是非は明らかではない。また、キリヌキ画像の背景については、「山田橋大山台遺跡」ではIllustratorで生成したため、背景のみダブルトーン化していない。今回は、PhotoshopでK=5のベタ画像を作成してダブルトーンとし、最終的にはInDesign上で合成配置した。

なお、キャプション類はIllustratorで配置しているが、ノンブル等については、InDesignで設定した。

使用フォント

DTP化にあたっては、フォントが大きな問題となる。高解像度出力ができないといわれてきたTrueTypeについても、対応が可能となってきたようではあるが、結局、出力機にインストールすることができないフォントでは、いくら作り込んでも、置き換えによりレイアウトの組み崩れを起こしてしまう。過去の実施例からみても、とくに、表組みの崩れは顕著であり、また、キャプションでの行末揃えの配置は、各フォント固有の文字詰めの関係で、まず間違いなく凹凸を生じる。置き換えを前提としない一貫した環境設定が必要であり、今回、デジタル入稿を行うにあたって、フォントの導入を検討した。選択肢は、CIDフォントかOpenTypeフォントということになるが、将来性と第一には価格の点で、「DynaFont OpenType100 Standard」とした。業界標準ともいわれるモリサワフォントであれば、おそらく支障がないと思われるが、結局は、出力環境に依存する問題であり、選択の是非は明らかではない。

ただ、Illustrator(Windows版)でOTFの欧文を使うと等幅半角になってしまう挙動があり、また、Ver.10.0.3へのダウンバージョン時に、テキストデータが分割され、再編集が困難な状況があつたこと、10.0がOTFに完全対応していない

いことにより、10.0とCSでは、字詰めなどが異なることが作業上明らかとなり、最終的には、Illustrator上のフォントはすべてアウトライン化した。アウトライン化によってファイルサイズは若干大きくなるが、送稿側からみれば、作り込めば作り込むだけレイアウトの変調はあってはならないことである。結局、OTFの実際上の使用は、InDesign上のみとなったため、印刷仕様上Dyna Fontを条件とはしなかった。なお、アウトライン化した場合、当然のことながら再編集は困難となる。文字校正は、送稿前に徹底して行ったが、確實ではないため、アウトライン化前の作成バージョンでのネイティブ形式を添付した。フォントの問題についても、PDF入稿が今後の課題であると思われるが、PDFで埋め込むにせよ、あるいはアウトライン化するにせよ、文字校正を前提とした入稿では問題解決にはならないように思われる。

保存形式・バージョン設定

当センターでは、Photoshopは5.0から使用しているものの、Illustratorについては9.0から、InDesignについてはCSからのスタートである。後発のため、最新バージョンが揃った状態ではあるが、受稿側の出力環境は、Illustrator8.0がなおスタンダードであるといわれている。

基本的なバージョン設定については、RIP等のCSへの対応状況が明らかではないため、当センターで検証可能なIllustrator10.0.3をベースとし、8.0への対応も考慮して、一部で使用した透明効果(炉の火床面)についても、ラスタライズ処理を行った。ただ、OTFを使用したことにより、テキストの再編集が生じた場合、8.0ではおそらく認識されないと思われる。なお、透明効果については、PDF1.3をベースとするPDF/Xにおいても分割・統合が必要なようで、透明効果やドロップシャドウなどを不用意に使うことは控えるべきかもしれない。

出力形式については、QuarkXpressへの対応も考慮して、最も安定しているといわれるEPS形式としたが、バージョンが混在する現状においては、PDF形式での保存が一部で推奨されている。Illustratorは、テキストエンジンの違いから、8.0以前とCS以降ではまったく異なるものとなっており、CSで作成した書類を10.0では開くことすらできない。こうした混在環境は、ソフト側が進化を止めない限り続くことが予想される。これは、単純にIllustratorのバージョンの違いだけではなく、出力環境すべてに影響する。PDFは、画像もフォントも埋め込んでしまえば、出力環境に依存しないといわれており、PDFが推奨される一因であると思われる。ただ今回は、写真図版の基本仕様がダブルトーンであるため、少なくともIllustratorへのPhotoshop画像の貼り込み形式はEPS意外に選択の余地がなく、IllustratorについてもEPS形式とした。

InDesignCSについては、主流であるといわれる2.0へのダウンバージョンの問題が一部で指摘されていたため、使用については、最終段階まで躊躇した。途中、3.0.1への移行もあり、また、Wordでレイアウト見本を作成することと比較しても操作が容易であることから、最終的には使用に踏み切った。ただし、今回は、InDesignを仕様条件とはしなかった。

なお、今後InDesignを使用するにあたっては、工程上の工夫が必要であると思われる。写真図版については、Illustrator - InDesignの二重構造での入稿となったが、少なくともその一部は本来不必要的構造となる。また、InDesignの配置形式は、ネイティブ形式が推奨される場合がある。InDesignCSはPhotoshop形式に完全対応しており、ダブルトーンや、本来PostScriptのオブジェクトであるクリッピングマスク、レイヤー、レイヤー効果、レイヤーマスク、背景の透明部分を保持したまま配置することなどが可能であるといわれている。今回、保存形式の混在は好ましくないとの判断から、挿図についても、最終的にはすべてEPS形式としたが、作成上EPS形式の最大の欠点は、モニタ上配置画像がプレビューでしか確認できない点である。アナログトレース(モノクロ2階調)とデジタルトレースが混在する状況下では、明らかに手間が生ずる部分である。実作業で、モノクロ2階調にIllustratorで修正を加えたり、細かいテキストの配置を行う場合は、PSD形式を一端配置した後に、リンクの更新(変更)を行ったが、そもそもネイティブ形式で配置を行えば、生じることのない手間である。また、とくにモノクロ2値データは、ファイルサイズの圧縮効果が絶大であるとの指摘もみられる。

今回は、試行錯誤の結果として、フォントなど制作環境とは合致しない、ややアンバランスな設定となった点はいなめない。DTP化にあたっての最大の難点は、出力に対する自前での検証が行えないことであり、また、契約規則による限り、事前に特定業者との打ち合わせができるわけでもない。ただ、少なからずノウハウを蓄積したことより、今後のワークフローの作成に寄与しうるものと思われる。また、今回、内製化にあたって、従来の積算基準に抵触するようなコスト増を生じたとは考えない。それでも内製化のメリット、デメリットは存在する。基本は、「中途半端に作り込まないこと」であると考えるが、デジタルトレースなどの外部委託も考慮する必要があると思われる。少なくとも、期間

面に直結する「校正」への依存体質からの脱却には明らかに効果的である。

今後、印刷データの入稿は、ISO 準拠の標準規格である「PDF / X」が主流になっていくともいわれている。InDesign CSからは、直接書き出しが可能であるが、仕様などの検討は今のところ行つてはいない。ただ、PDF / X 入稿から PDF の納品にいたる、PDF 形式を基本とした一貫したワークフローの作成が課題になると思われる。今回は行つてはいないが、InDesign では、「リンク」、「しおり」の自動生成も可能であり、より利用しやすい PDF の作成も容易となる。その中で、報告書自体の仕様内容の変更も考慮する必要があると思われる。PDF の作成自体は、別段従来のアナログ入稿においても、写真製版などのアナログ仕様の指定をしない限り作成は可能である。しかし、PDF 作成に対するコスト増の議論もあるなかでは、制作側の努力も必要であろう。

本書でも、PDF を添付したが、CD-ROM の添付は、それだけをみれば、明らかにコスト増を生じている。ただし、本書では、土器 3,614 点、玉類 634 点などの観察表等を印刷部分から除外し、CD-ROM 化した。これを印刷部分に含めると、約 150 頁の増となる。なお異論はあると思われるが、そもそも数値データを含む遺物観察表は、デジタルデータでの提供が自然であると考えられ、コスト面での効果も絶大である。また、このことによって PDF の添付を可能とした。

印刷物と混在し、電子図書の先行きがなお不透明な現状過渡期においては、PDF が基本となると思われる。現在廉価の PDF 作成ソフトも普及しつつあり、PDF はスタンダードの地位を着実に固めている。また、オンデマンド印刷なども視野に入れることができる。少なくとも現状においては、HTML、XML 形式等による、自由な表現形態、とくに印刷物を排した場合の、ネットワーク上の自由な更新は、報告書の性格上なじまないように思う。ただ、今後、県レベルでの具体的な報告書作成基準の策定は必要になるであろう。

主な参考文献

大橋幸二著『Adobe InDesign 文字組み徹底攻略ガイド』ワークスコープレーション 2004 年

上高地仁著『失敗しない Illustrator 出力講座』インクナブラ 2004 年

上高地仁著『PDF / X を使う前に読む本』インクナブラ 2004 年

木村菱治著『フォトショップ DTP レッスン帳』エムディエヌコーポレーション 2002 年

和田義浩・松田俊輔他共著『DTP フォント完全理解!』ワークスコープレーション 2002 年初版

他に、Web 上の印刷会社各社の入稿仕様、DTP 関係の HP が参考になった。

デジタルトレース導入にあたっては、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター篠原祐一氏、株式会社パスク木口裕史氏よりご教示を頂いた。

本報告書の作成は、以下の整理補助員が担当した（五十音順）。

安藤真由美（実測・DTP）、池内順子（トレース）、小倉るみ子（実測・DTP）、鴨居真純（遺構）、重藤由紀子（遺物・図面）、鈴木麻美（実測・DTP）、鈴木由紀子（遺物・実測）、清宮きよ子（遺構）、内藤敏子（遺物）、半沢敏子（トレース）、三浦奈津子（遺物・実測）



写真版

Nedadai Site





市原台地全景(養老川上空付近から北東方向) 1978年度撮影



国分寺台全景(市原市庁舎上空付近から北西方向) 1978年度撮影



根田代遺跡(右上、調査前)、台遺跡C地点(下)、御林跡遺跡(左上) 1978年度撮影



根田代遺跡(右上、調査前)、御林跡遺跡 1978年度撮影



根田代遺跡全景



根田代遺跡全景



根田代遺跡全景



A地点南側環濠



A地点南西部環濠



A地点環濠L2区断面D



A地点全景



A地点環濠



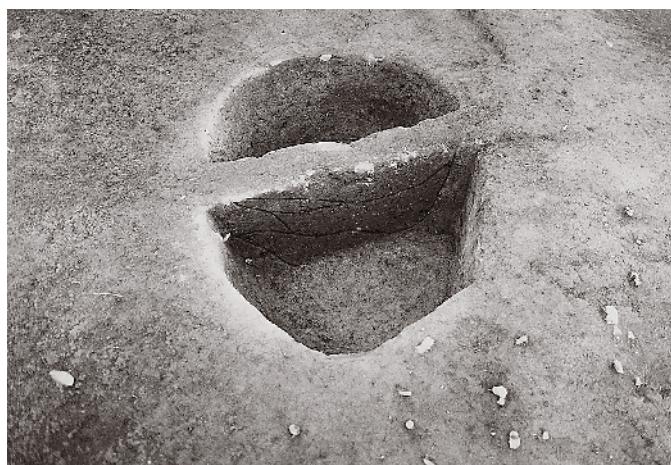
1号壺穴



2号壺穴



3号壺穴



3号壺穴内土坑



4号壺穴



5号壺穴（東から）



5号壺穴（南から）



5号壺穴 遺物出土状況

図版8 遺構 竪穴住居跡



5号竪穴 遺物出土状況



5号竪穴 遺物出土状況



5号竪穴 遺物出土状況（第40図7）



6号竪穴（東から）



6号竪穴（南東から）



7号竪穴



7号竪穴 貯蔵穴遺物出土状況（第47図1）



7号竪穴 貯蔵穴



7号竪穴 貯蔵穴



8-9号竪穴



10号竪穴



11号竪穴



11号竪穴 遺物出土状況



12号竪穴



13-14-15号竪穴

図版10 遺構 竪穴住居跡



18・16号竪穴



19号竪穴



19号竪穴 貯藏穴



19号竪穴 貯藏穴遺物出土状況（第55図1）



20号竪穴・1号粘土採掘坑



21号竪穴・2号粘土採掘坑



22・23・24号竪穴（南から）



22・24・25号竪穴（東から）



22号竪穴 遺物出土状況



25号竪穴



25号竪穴 遺物出土状況



26号竪穴



27号竪穴



28号竪穴



29号竪穴



30号竪穴・5~8号土坑

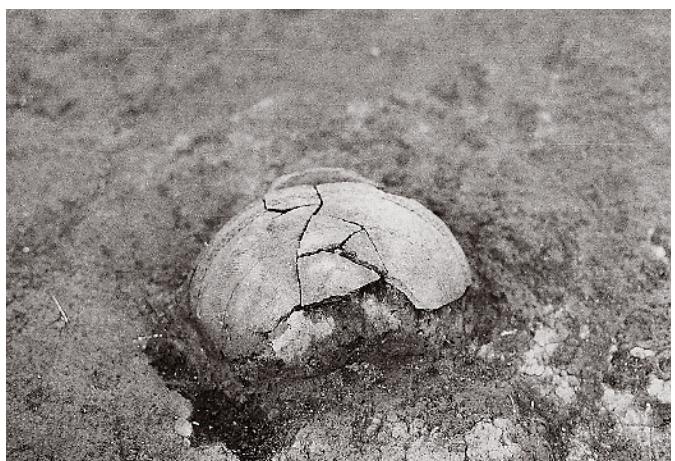
図版12 遺構 壇穴住居跡



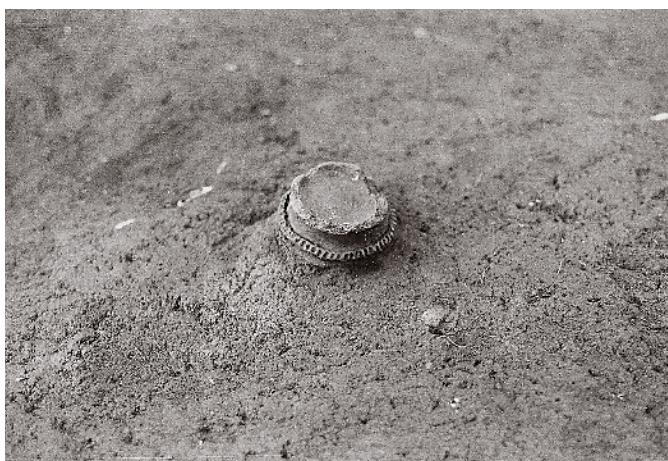
31号竪穴



32号竪穴



32号竪穴 遺物出土状況（第75図1）



32号竪穴 遺物出土状況（第75図3）



33号竪穴



34号竪穴



35号竪穴（南から）



35号竪穴（東から）



35号竪穴 遺物出土状況（第80図19）



35号竪穴 遺物出土状況（第80図18）



36号竪穴



36号竪穴



37号竪穴



37号竪穴



38号竪穴・3号粘土探掘坑



37・38号竪穴・3号粘土探掘坑

図版14 遺構 竪穴住居跡



39号竪穴



40号竪穴



41号竪穴



42・43号竪穴



44号竪穴



45号竪穴



46号竪穴



46号竪穴



47号竪穴



47号竪穴



48・49号竪穴



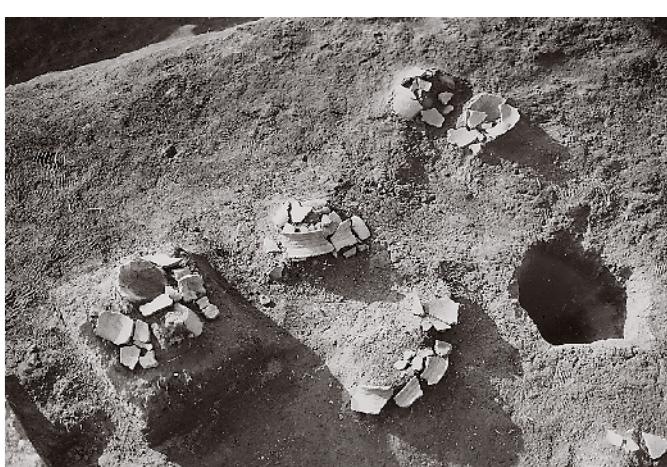
50号竪穴



50号竪穴



51号竪穴



51号竪穴 遺物出土状況



51号竪穴 遺物出土状況（第101図19）

図版16 遺構 竪穴住居跡



52・53・54号竪穴



55・56号竪穴



57号竪穴



57号竪穴 遺物出土状況（第105図1）



58号竪穴



59号竪穴



60号竪穴



61号竪穴



62号壁穴



63号壁穴



64号壁穴



65号壁穴



66号壁穴



68号壁穴



68号壁穴 炉内埋設土器 (第115図7)

図版18 遺構 竪穴住居跡



67号竪穴



69号竪穴



70号竪穴



71号竪穴



72・73号竪穴



74号竪穴



75・76号竪穴



75・76号竪穴



77号竪穴



78号竪穴



78号竪穴



79号竪穴



80号竪穴



81号竪穴



82号竪穴



83号竪穴

図版20 遺構 竪穴住居跡



84号竪穴



85号竪穴



86号竪穴



86号竪穴 遺物出土状況（第129図10）



86号竪穴 貯蔵穴



86号竪穴 遺物出土状況（第128図1）



88号竪穴（西から）



88号竪穴（北から）



1号土坑



1号土坑 遺物出土状況



2号土坑



2号土坑



3号土坑（北から）



3号土坑（東から）

図版22 遺構 土坑



3号土坑



4号土坑



4号土坑



4号土坑 人骨出土状況



9号土坑



10号土坑



11号土坑



10号土坑



11号土坑



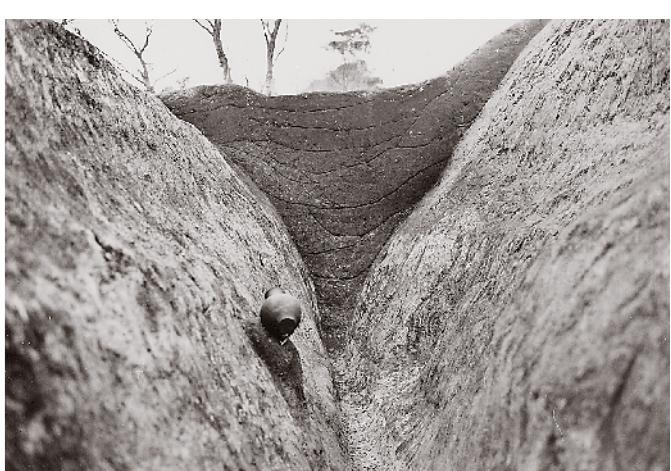
12号土坑



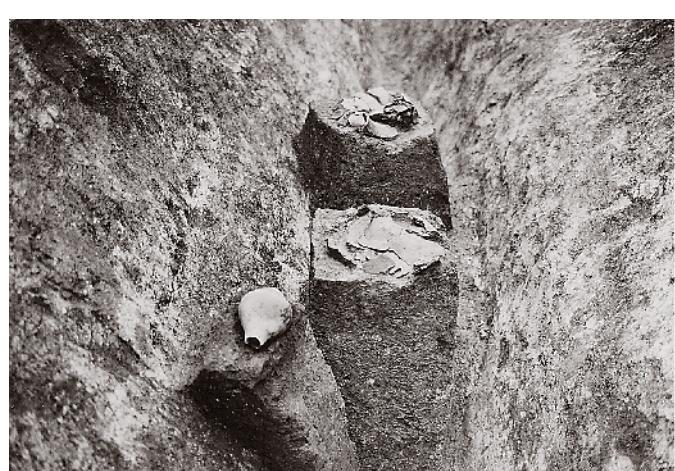
1号溝



1号溝 遺物出土状況（第167図2）



A地点環濠 L2区断面



A地点環濠 J2区遺物出土状況（第140図12）



A地点環濠 L2区遺物出土状況（第142図1）



A地点環濠 N2区



A地点環濠 N2区遺物出土状況（第144図6）



A地点環濠 N2区遺物出土状況



A地点環濠 R2・3区断面J



A地点環濠 U3区断面M



A地点環濠 X3・4区断面P



B地点環濠



A地点環濠



B地点環濠



B地点環濠



B地点環濠 北端部



B地点環濠 北端部



A地点環濠 遠景（西より）



A地点環濠 遠景（北西より）



A地点環濠 遠景（西より）

図版26 遺構 環濠・古墳



A地点環濠 遠景（東より）



A地点環濠 遠景（東より）



A地点環濠 遠景（東より）



A地点環濠 I1-I2区断面A



A地点環濠 J2区



2号墳



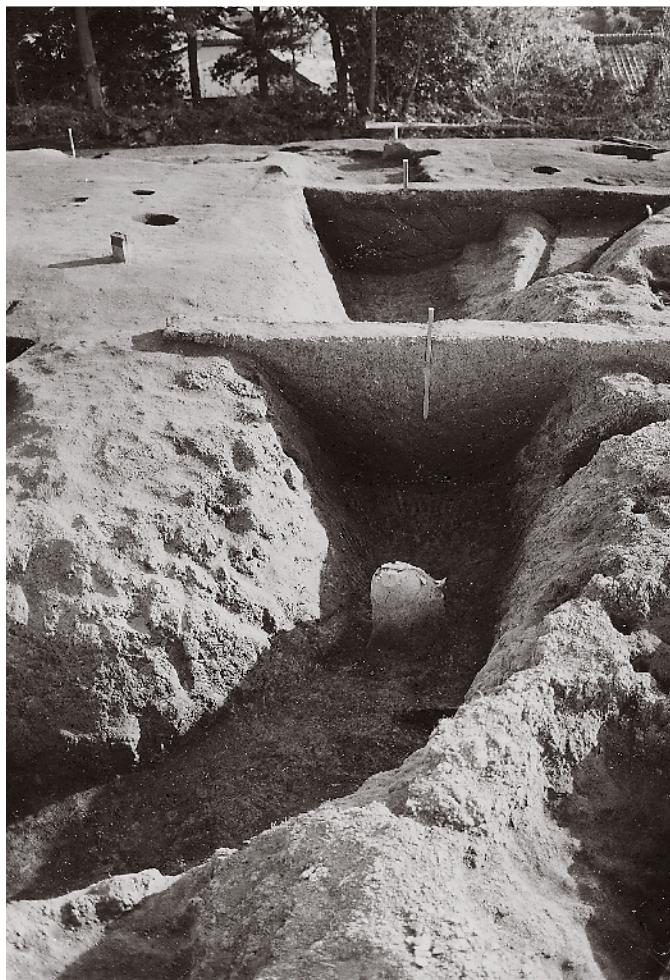
2号墳 周溝内遺物出土状況



2号墳 周溝内遺物出土状況



2号墳 周溝内遺物出土状況



2号墳 周溝内遺物出土状況



3号墳 周溝内遺物出土状況



3号墳 周溝内遺物出土状況



3号墳 周溝内遺物出土状況



4号墳



5号墳 調査前



5号墳 調査前



5号墳



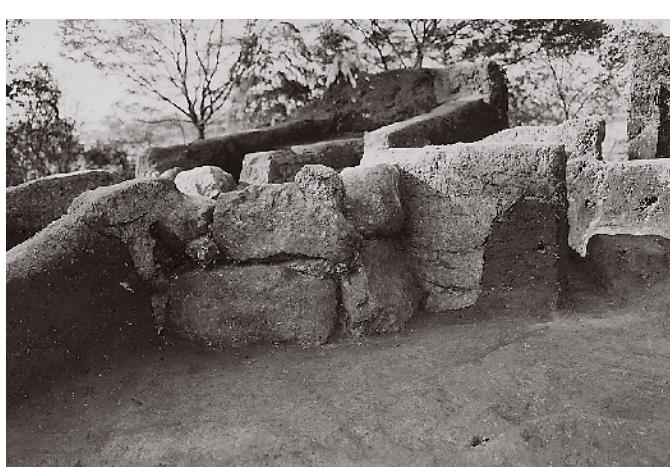
5号墳



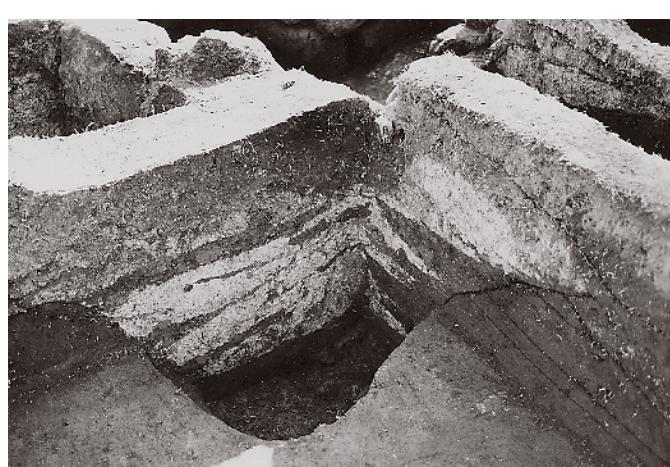
5号墳



5号墳



5号墳 主体部



5号墳 主体部



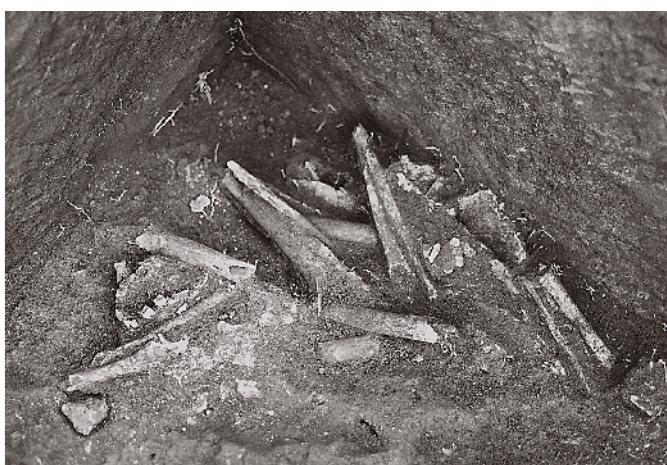
5号墳 主体部



5号墳 主体部人骨出土状況



5号墳 主体部人骨出土状況



5号墳 主体部人骨出土状況



5号墳 主体部人骨出土状況



5号墳 主体部



5号墳 主体部

図版30 遺構 古墳



5号墳 主体部



5号墳 主体部



6号墳



6号墳 主体部



6号墳 主体部遺物出土状況



6号墳 主体部遺物出土状況（玉類）



6号墳 主体部遺物出土状況（玉類）



6号墳



7号墳 (東から)



7号墳 (西から)



7号墳 主体部遺物出土状況 (耳環)



7号墳 主体部



8号墳 (東から)



8号墳 (南から)



8号墳 主体部



8号墳 主体部

図版32 遺構 古墳・地下式土坑



8号墳 主体部



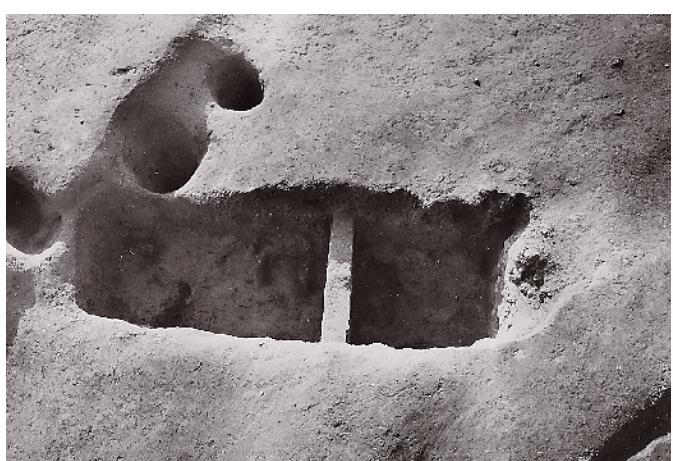
8号墳 主体部遺物出土状況 (ガラス玉)



9号墳 主体部



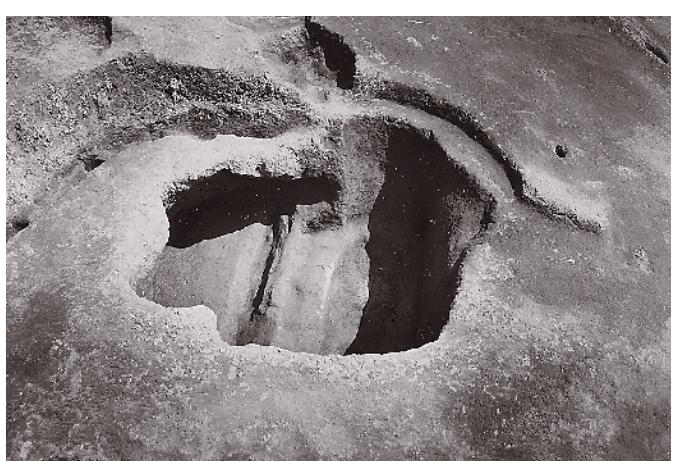
9号墳 主体部 (北から)



9号墳 主体部 (東から)



1号地下式土坑



1号地下式土坑



3号地下式土坑



2号地下式土坑



2号地下式土坑



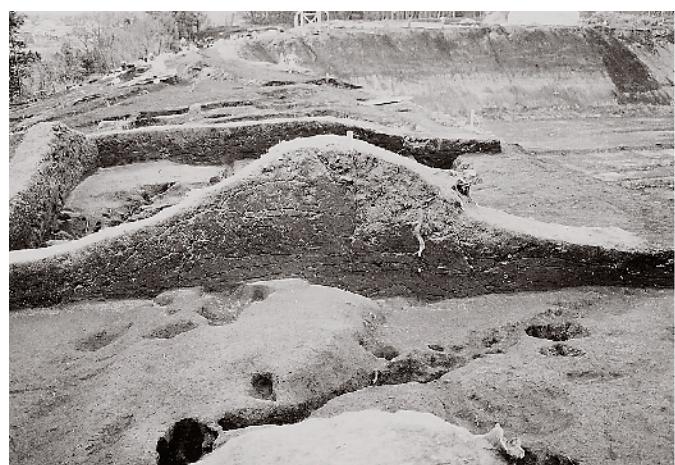
炭窯



土手 (北から)



土手 (東から)



土手 (東から)



土手 (東から)



道路遺構 中央部 (東から)

図版34 遺構 道路・旧石器



道路遺構 東端部（西から）



道路遺構 東端部（東から）



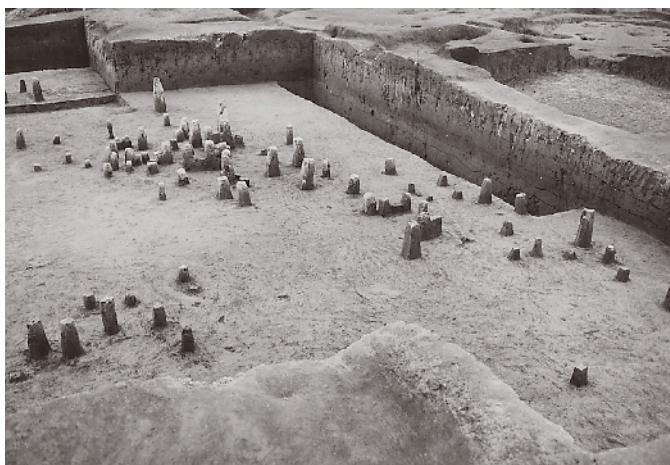
旧石器調査区全景



旧石器調査区 東壁断面



旧石器調査区 北壁断面



旧石器調査区 遺物出土状況



旧石器調査区 北壁断面



旧石器調査区 西壁断面



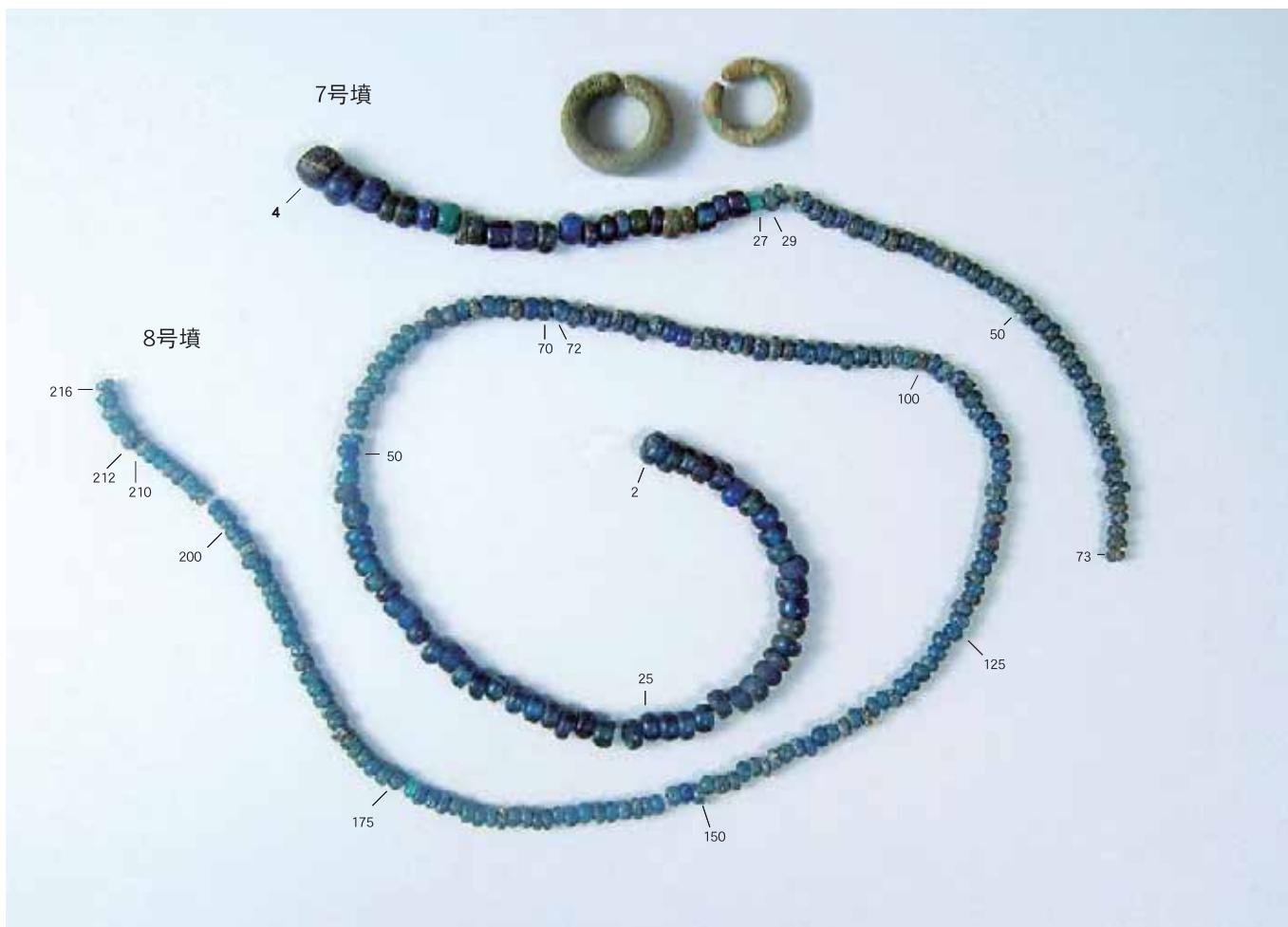
根田代遺跡出土宮ノ台式・久ヶ原式土器



根田代遺跡出土磨製石斧



根田6号墳出土玉類



根田7・8号墳出土玉類、耳環



6号墳-29



6号墳-40



6号墳-50



6号墳-72



6号墳-80



6号墳-87



6号墳-201



7号墳-4



8号墳-107



8号墳-137



8号墳-185



8号墳-213

図版38 遺物 玉類



6号墳-1



6号墳-9



6号墳-10



6号墳-14



6号墳-15



6号墳-16



6号墳-18



6号墳-21



6号墳-30



6号墳-32



6号墳-38



6号墳-53



6号墳-74



6号墳-79



6号墳-81



6号墳-84



6号墳-86



6号墳-137



6号墳-150



6号墳-154



6号墳-162



6号墳-183



6号墳-189



6号墳-249



6号墳-288



6号墳-305



6号墳-310



6号墳-312



7号墳-25



7号墳-36



7号墳-48



7号墳-49



7号墳-55



7号墳-72



8号墳-7



8号墳-17



8号墳-32



8号墳-42



8号墳-44



8号墳-69



8号墳-91



8号墳-105



8号墳-108



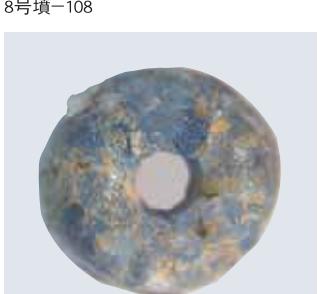
8号墳-121



8号墳-122



8号墳-151



8号墳-212



8号墳-215



1号竪穴-1



3号竪穴-2



3号竪穴-3



3号竪穴-1



5号竪穴-1



4号竪穴-1



3号竪穴-4



5号竪穴-2



5号竪穴-5



5号竪穴-6



5号竪穴-8



5号竪穴-7



5号竪穴-10



5号竪穴-9



5号竪穴-11



5号竪穴-18



5号竪穴-17



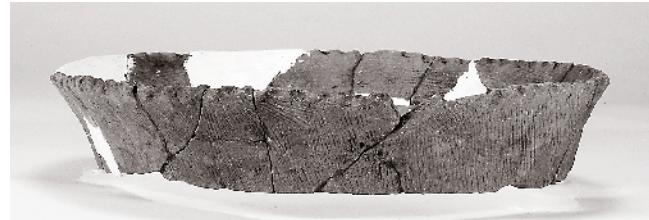
5号竪穴-20



5号竪穴-21



5号竪穴-19



5号竪穴-26



5号竪穴-27



5号竪穴-23



5号竪穴-29



5号竪穴-28



5号竪穴-35

図版44 遺物 弥生土器



5号竪穴-32



5号竪穴-36



5号竪穴-38



7号竪穴-2



6号竪穴-1



7号竪穴-3



7号竪穴-1



7号竪穴-4



8号竪穴-1



11号竪穴-2



8号竪穴-3



11号竪穴-3



15号竪穴-1



14号竪穴-2



15号竪穴-2

図版46 遺物 弥生土器



16号竪穴-1



20号竪穴-1



22C号竪穴-2



20号竪穴-5



22号竪穴-1



22(23・24)号竪穴-5



23号竪穴-1



23号竪穴-3



23号竪穴-5



23号竪穴-7



24号竪穴-5



22A号竪穴-1



22A号竪穴-4

図版48 遺物 弥生土器



24号竪穴-8



26号竪穴-4



24号竪穴-22



26号竪穴-5



26号竪穴-2



28号竪穴-1



28号竪穴-3



28号竪穴-6



29号竪穴-1



32号竪穴-3



33号竪穴-1



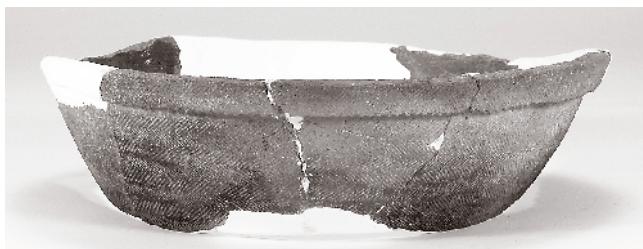
31号竪穴-4



35号竪穴-3



32号竪穴-1



35号竪穴-4

35号竪穴-10

図版50 遺物 弥生土器



35号竪穴-13



41号竪穴-1



35号竪穴-18



41号竪穴-4



35号竪穴-19



45号竪穴-1



45号竪穴-5



47号竪穴-9



47号竪穴-38



47号竪穴-11



48号竪穴-1



47号竪穴-22



51号竪穴-4

図版52 遺物 弥生土器



51号竪穴-7



51号竪穴-8



51号竪穴-14



51号竪穴-19



51号竪穴-18



53号竪穴-1



52号竪穴-1



53号竪穴-3



59号竪穴-1



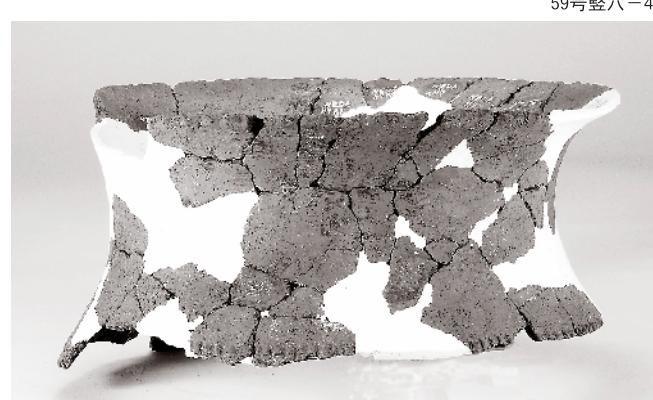
54号竪穴-1



59号竪穴-4



57号竪穴-2



60号竪穴-4



68号竪穴-7



65号竪穴-4



71号竪穴-1



76号竪穴-5



79号竪穴-1



72・73号竪穴-1



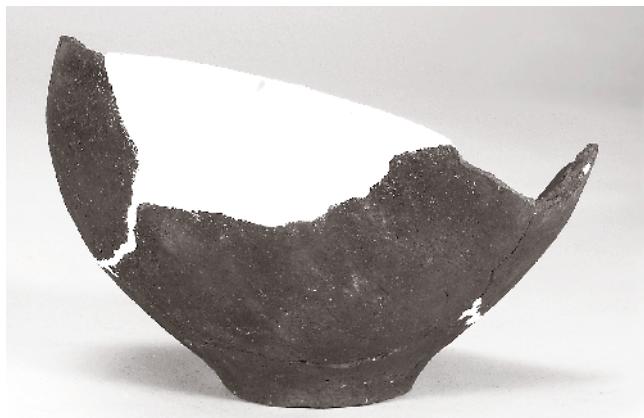
79号竪穴-2



72・73号竪穴-9



76号竪穴-1



79号竪穴-3



79号竪穴-5



80号竪穴-1



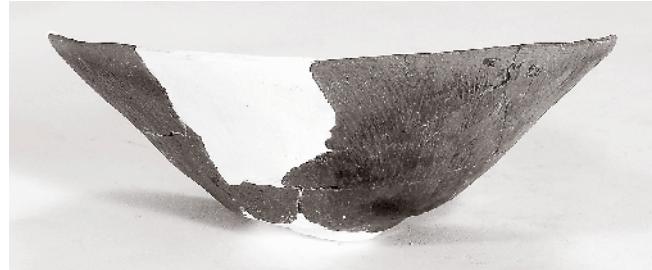
80号竪穴-3



80号竪穴-4



80号竪穴-12



80号竪穴-8



80号竪穴-13



80号竪穴-15



80号竪穴-14



80号竪穴-17



80号竪穴-18



80号竪穴-24



81号竪穴-2



81号竪穴-1



81号竪穴-3



86号竪穴-1



86号竪穴-6



81号竪穴-4



86号竪穴-10



84号竪穴-2



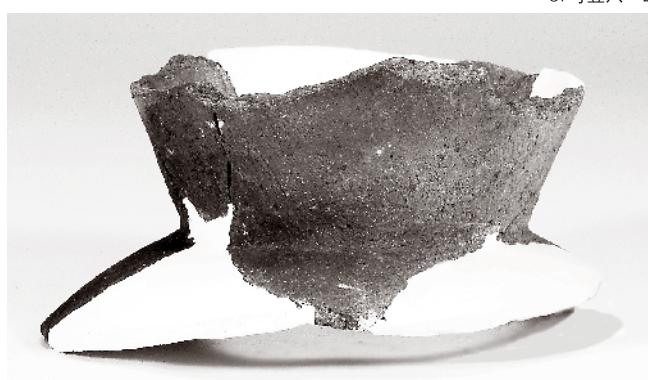
87号竪穴-1



87号竪穴-2



87号竪穴-3



87号竪穴-6



87号竪穴-4



87号竪穴-7



87号竪穴-8



環濠(A地点)B2区-3



87号竪穴-9



環濠(A地点)A2区-1



環濠(A地点)C2区-1



環濠(A地点)A2区-2



環濠(A地点)J2区-7



環濠(A地点)J2区-10



環濠(A地点)B2区-1



環濠(A地点)J2区-3



環濠(A地点)J2区-12



環濠(A地点)J2区-4



環濠(A地点)K2区-3



環濠(A地点)J2区-11



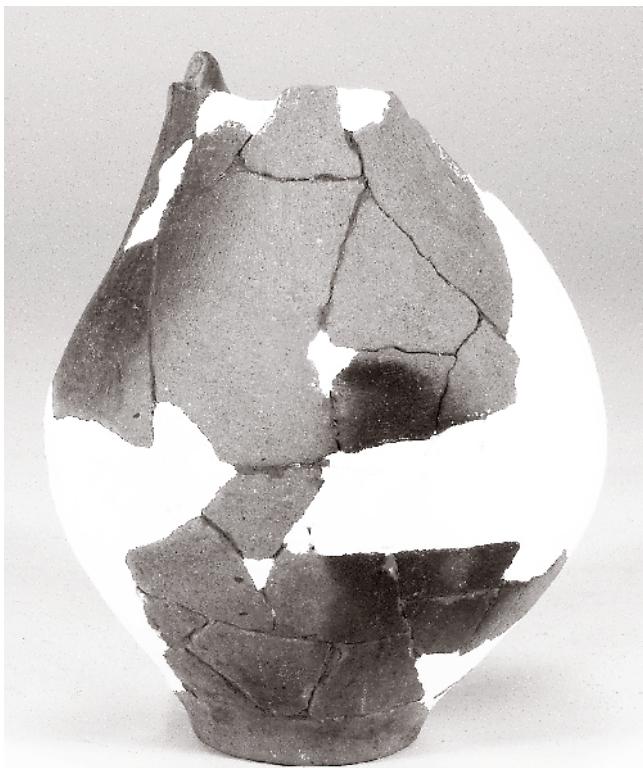
環濠(A地点)K2区-11



環濠(A地点)K2区-9



環濠(A地点)K2区-10



環濠(A地点)L2区-4



環濠(A地点)L2区-1



環濠(A地点)L2区-10



環濠(A地点)L2区-5



環濠(A地点)L2区-12



環濠(A地点)L2区-17



環濠(A地点)L2区-14



環濠(A地点)M2区-4



環濠(A地点)M2区-10



環濠(A地点)M2区-8



環濠(A地点)N2区-3



環濠(A地点)N2区-2



環濠(A地点)N2区-5



環濠(A地点)N2区-7



環濠(A地点)N2区-6



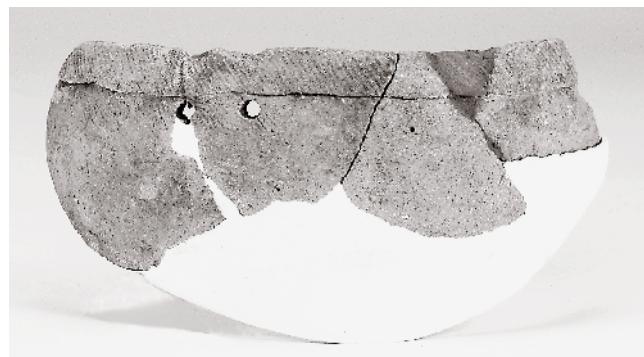
環濠(A地点)N2区-9



環濠(A地点)N2区-15



環濠(A地点)N2区-10



環濠(A地点)P2区-8



環濠(A地点)Q2区-3



環濠(A地点)R2・3区-6



環濠(A地点)N2区-16



環濠(A地点)P2区-6



環濠(A地点)S2・3区-1



環濠(A地点)S2・3区-5



環濠(A地点)R2・3区-3



環濠(A地点)S2・3区-7



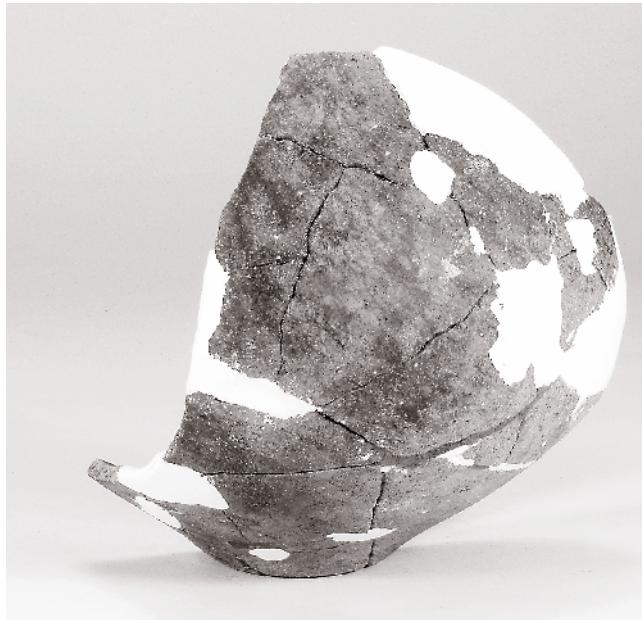
環濠(A地点)R2・3区-4



環濠(A地点)S2・3区-11



環濠(A地点)R2・3区-5



環濠(A地点)S2・3区-4



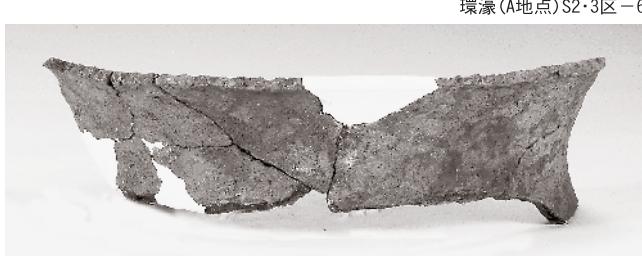
環濠(A地点)T3区-1



環濠(A地点)S2・3区-6



環濠(A地点)T3区-3



環濠(A地点)S2・3区-8



環濠(A地点)U3区-5



環濠(A地点)T3区-10



環濠(A地点)U3区-7



環濠(A地点)U3区-8



環濠(A地点)V3区-5



環濠(A地点)U3区-10



環濠(A地点)W3区-6



環濠(A地点)V3区-8



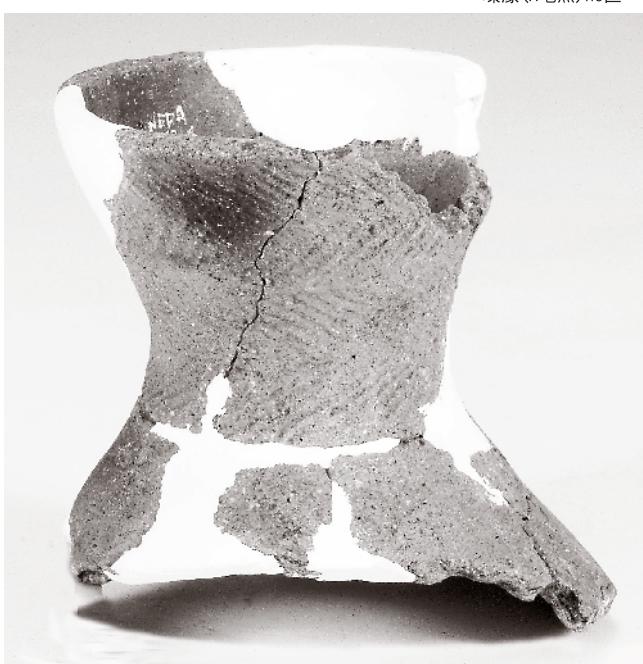
環濠(A地点)W3区-7



環濠(A地点)X3区-1



環濠(A地点)X3区-2



環濠(A地点)X3区-7



環濠(A地点)X3区-4



環濠(A地点)X3区-11



環濠(A地点)X3区-6



環濠(A地点)X3区-5



環濠(A地点)Y3・4区-1



環濠(A地点)b5区-1



環濠(A地点)Y3・4区-3



環濠(A地点)d5区-2



環濠(A地点)e6区-5

図版70 遺物 弥生土器



環濠(A地点)e6区-1



環濠(A地点)e7区-9



環濠(B地点)D4区-1



環濠(A地点)e7区-1



環濠(B地点)E4区-1



環濠(A地点)e7区-4



環濠(B地点)E5区-1



環濠(B地点)G5区-7



環濠(B地点)G5区-17



環濠(B地点)G5区-18



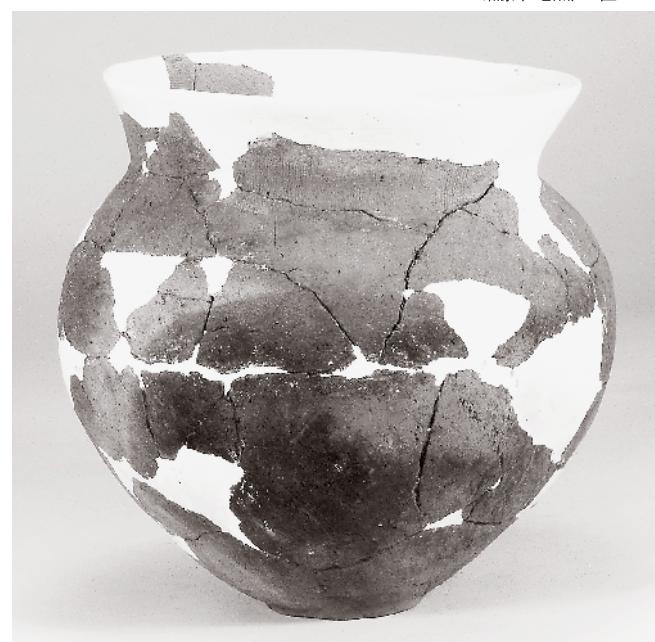
環濠(B地点)G5区-24



環濠(B地点)G5区-19



環濠(B地点)G5区-20



環濠(B地点)G5区-22



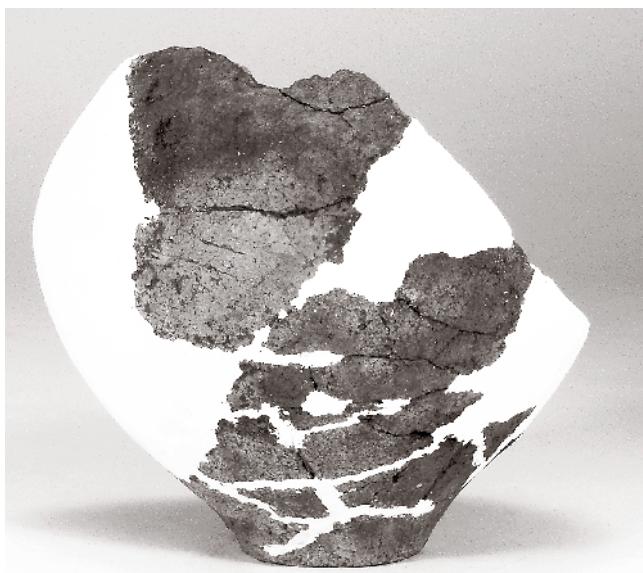
環濠(B地点)G5区-21



環濠(B地点)G5区-15



1号土坑-1



2号土坑-2



2号墳-4



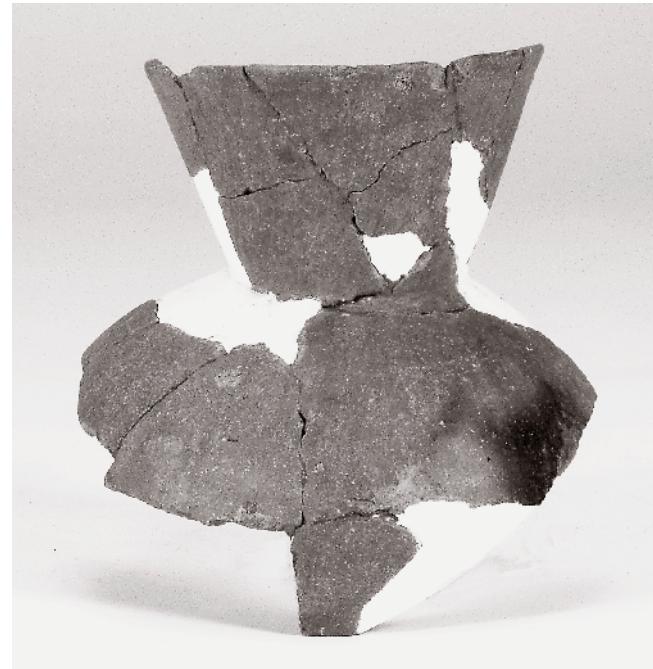
環濠(B地点)G5区-23



1号溝-2



2号墳-1



2号墳-7



2号墳-5



2号墳-8



2号墳-11



2号墳-9



4号墳-1



3号墳-1



5号墳-6



5号墳-18



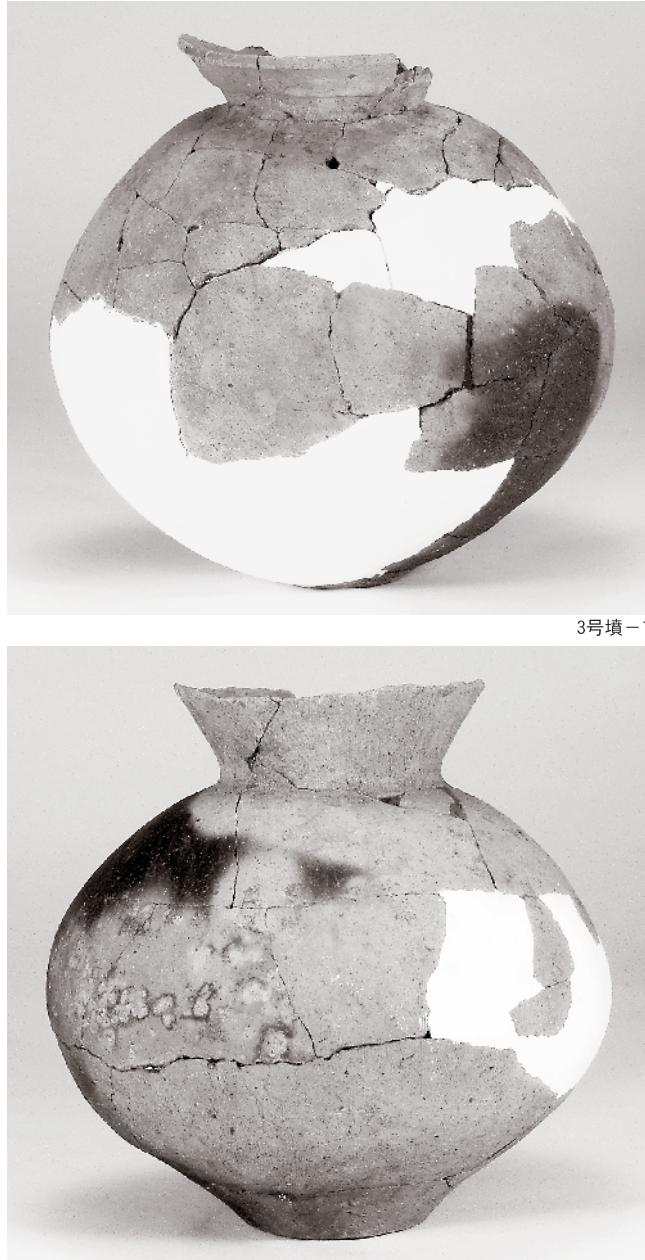
7号墳-1



8号墳-2



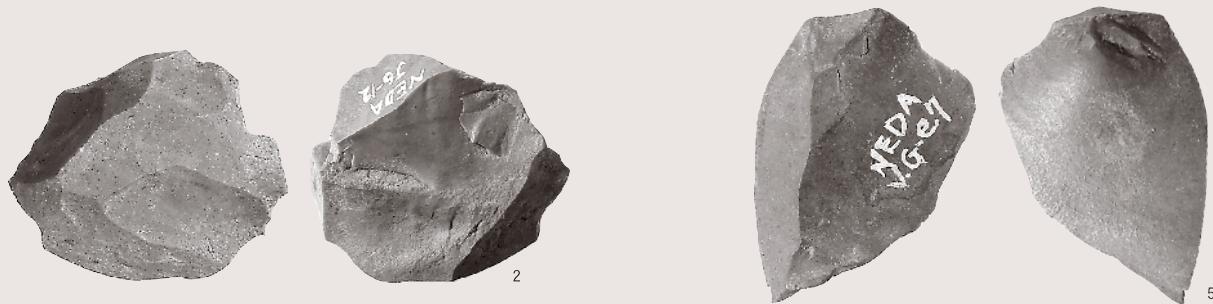
中世-10



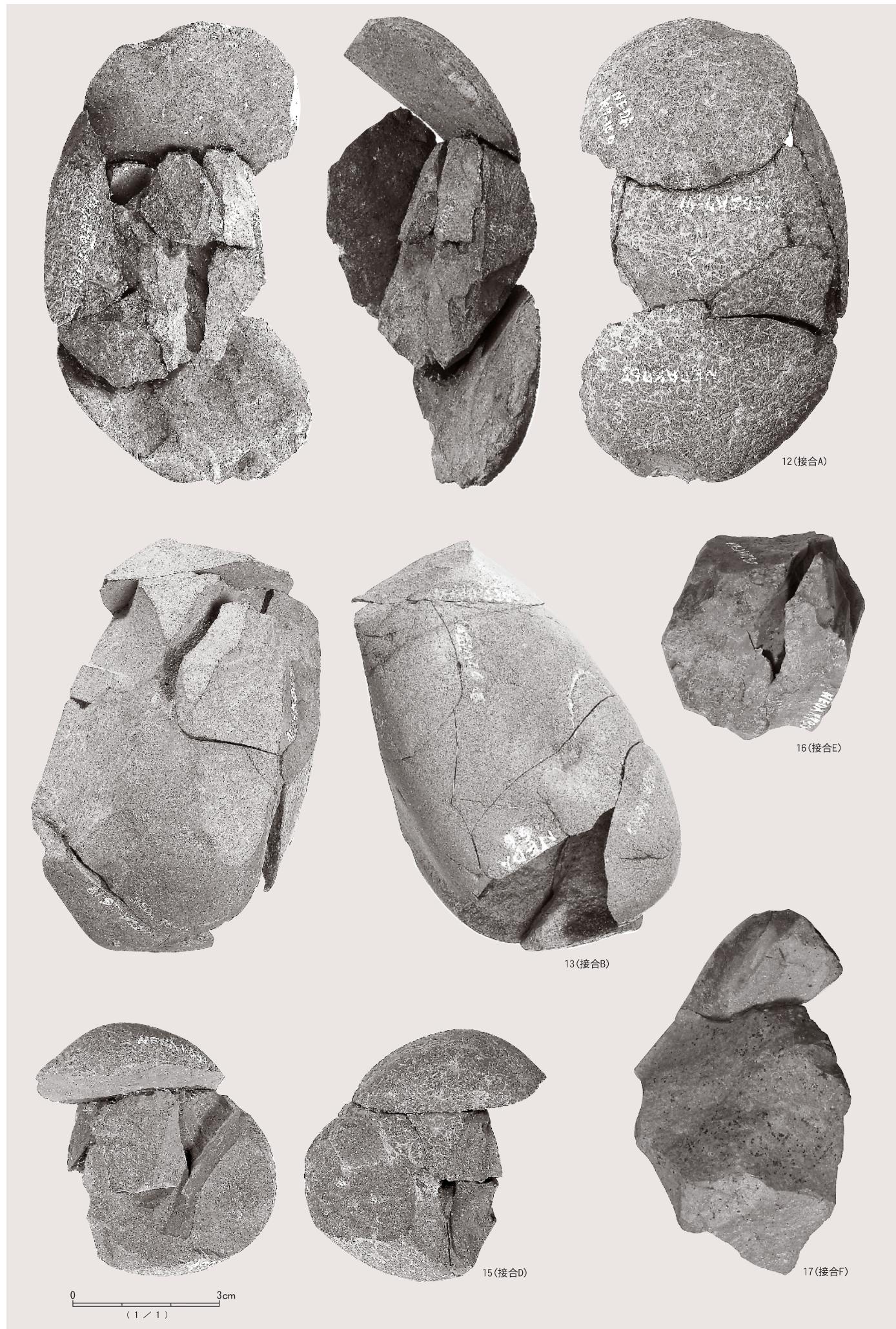
3号墳-2

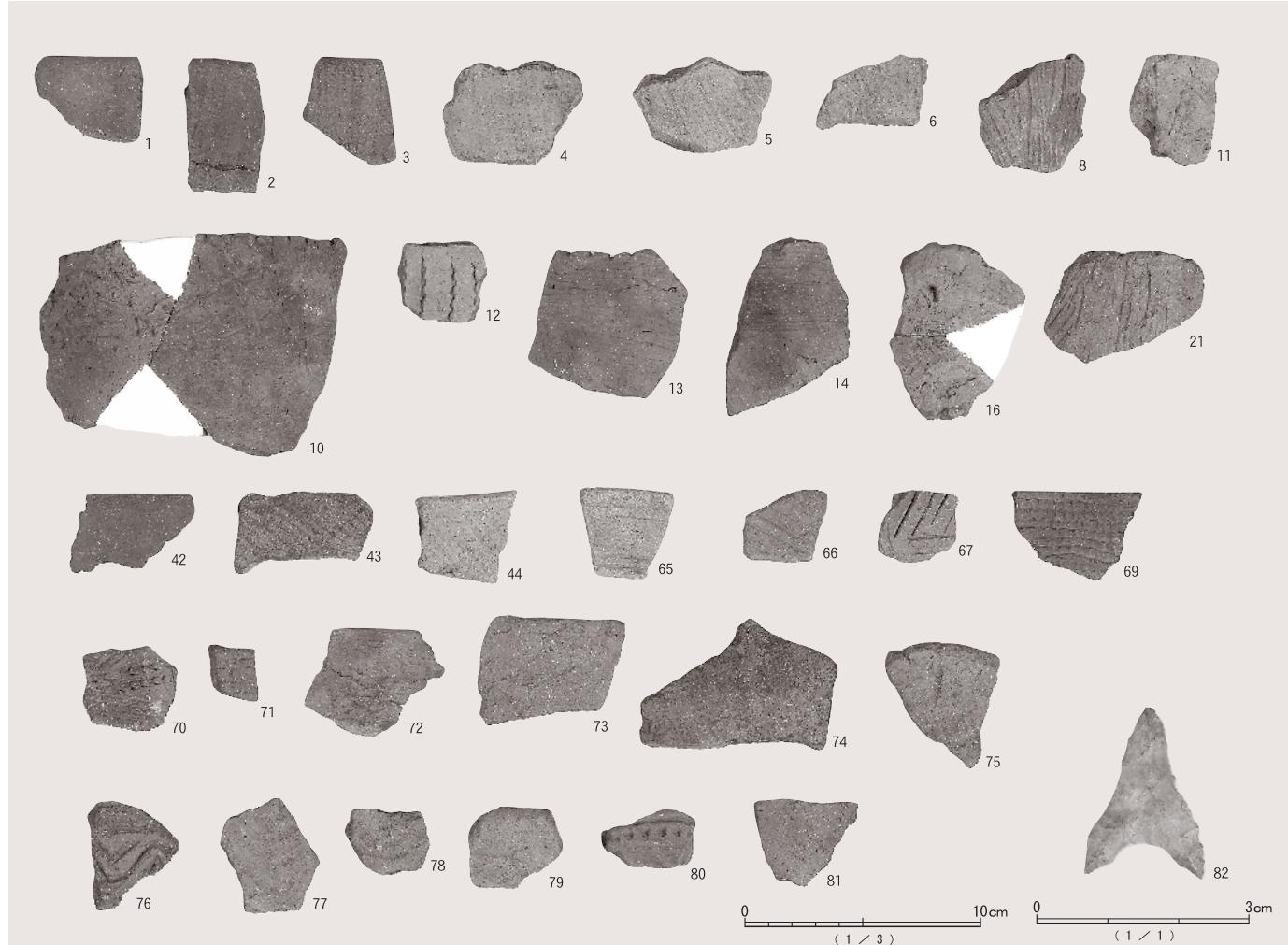


3号墳-3



0 3cm
(1/1)



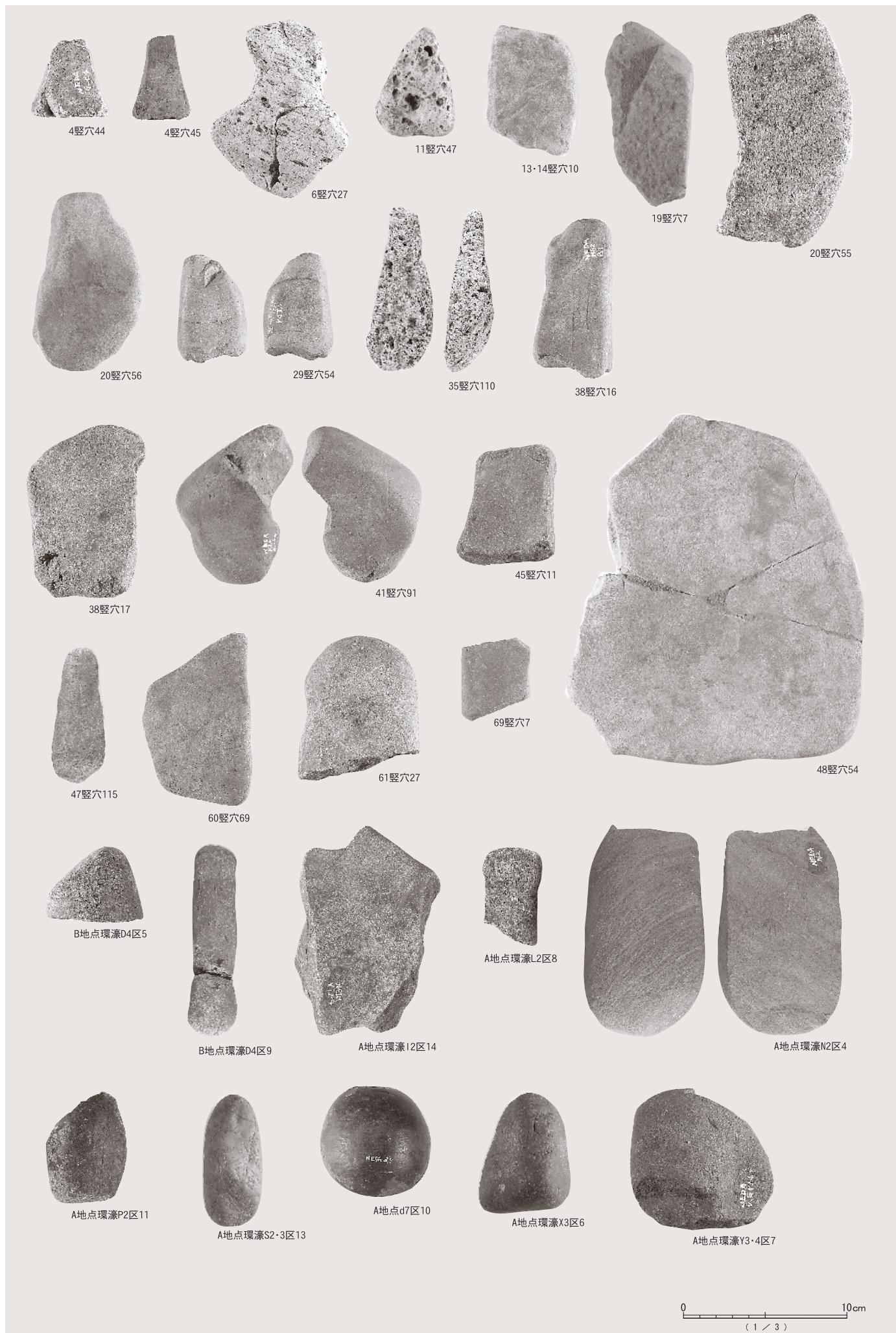


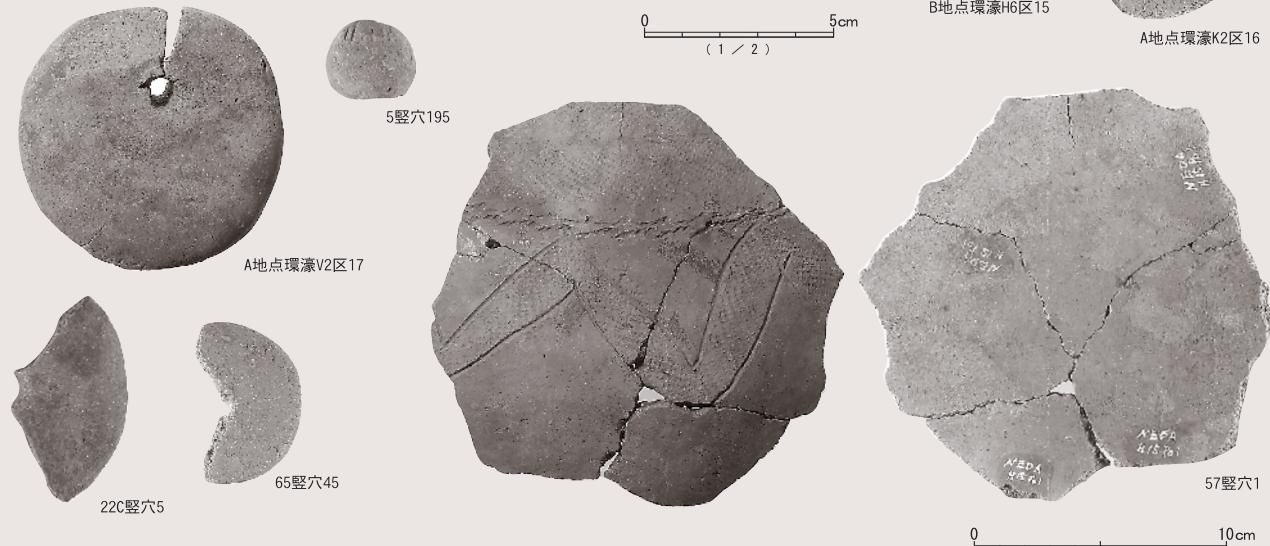
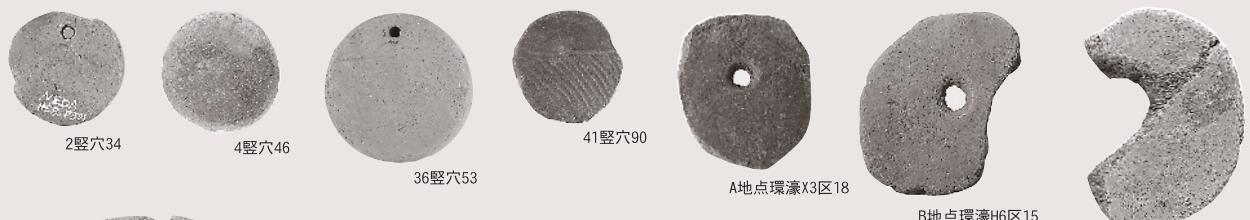
0 10cm
(1 / 3)

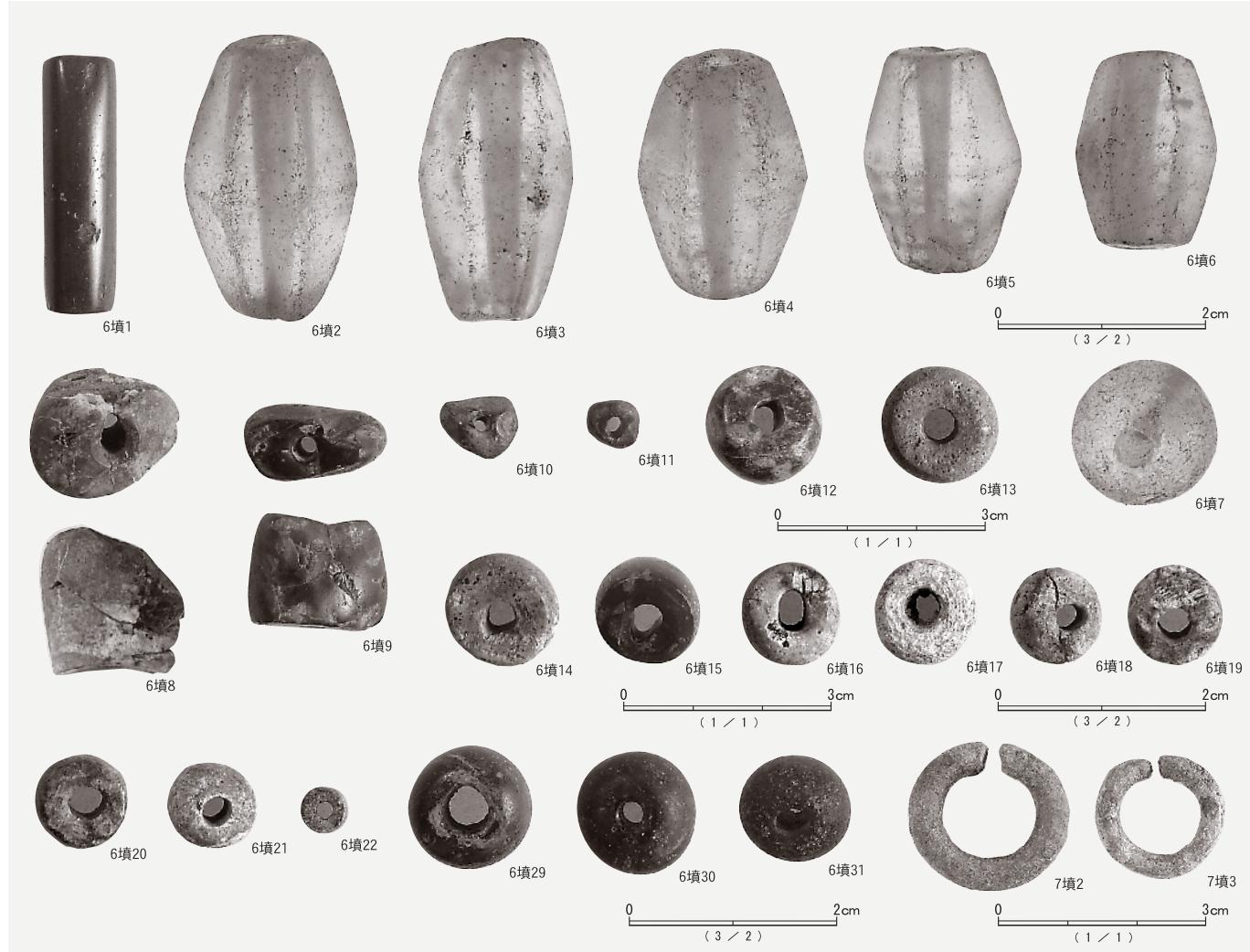
22竪穴83

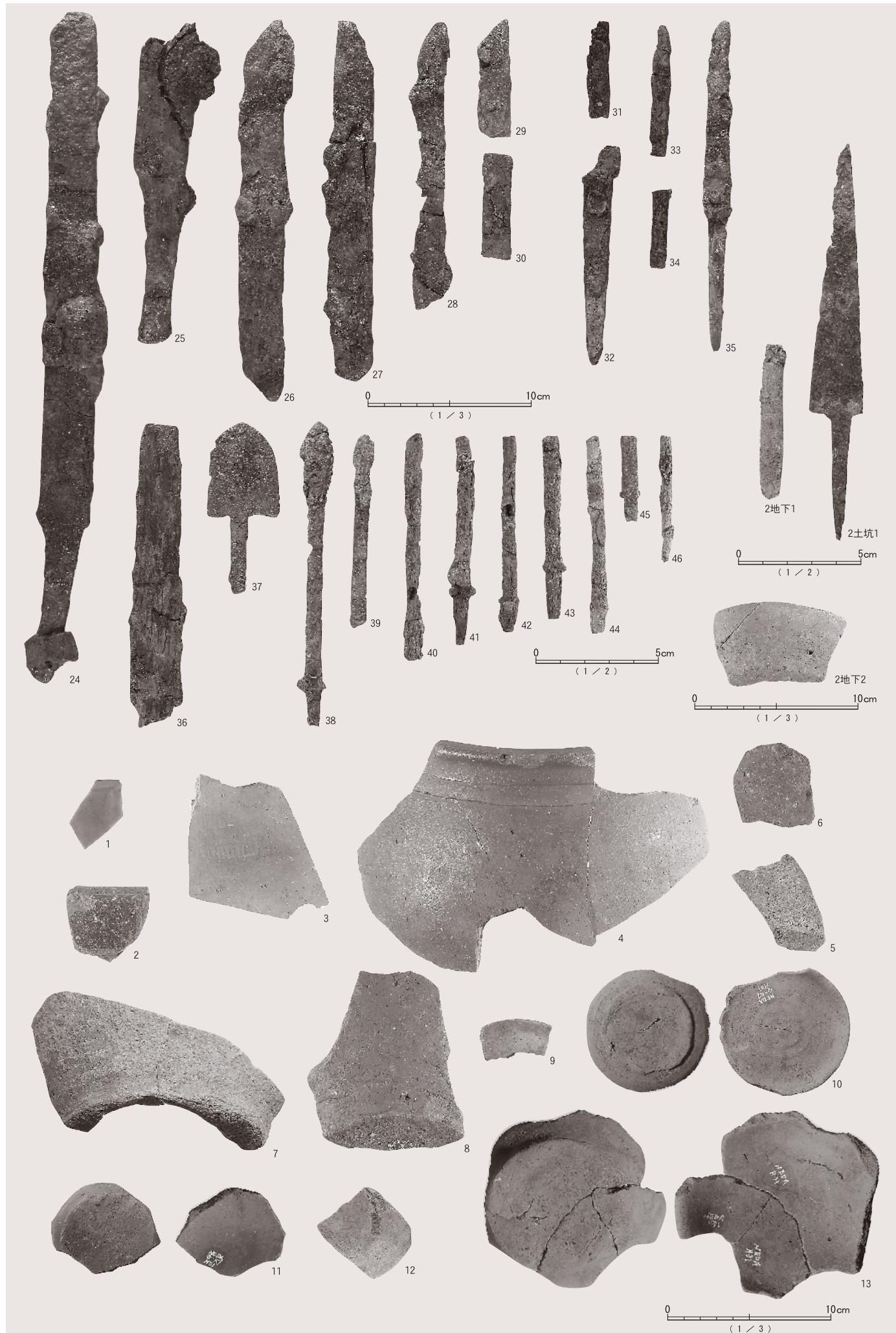
0 5cm
(1 / 2)

4竪穴43

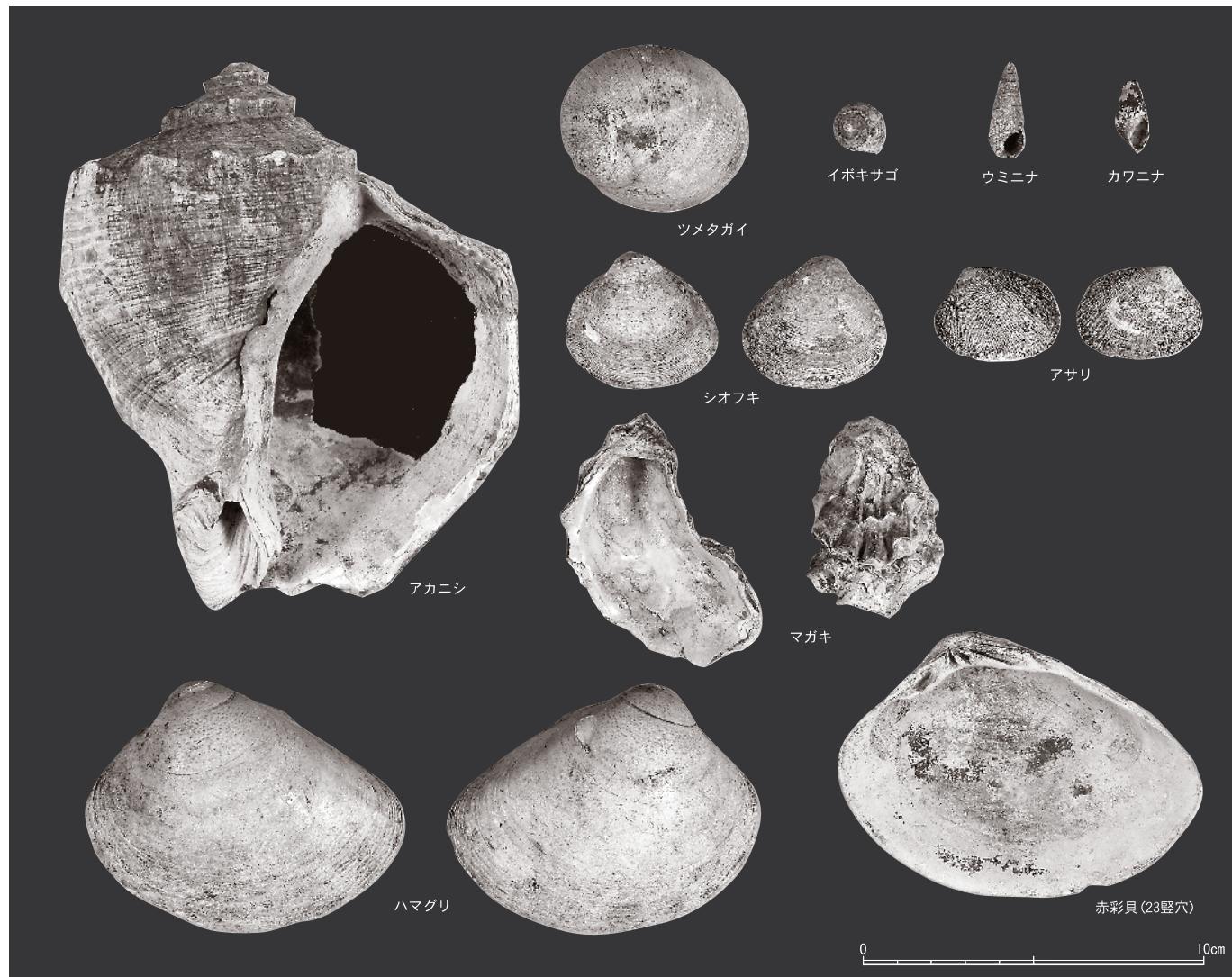








図版82 遺物 貝

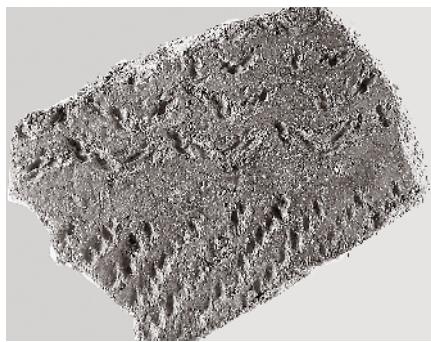




1号竪穴-1



2号竪穴-18



3号竪穴-7



1号竪穴-2



2号竪穴-19



4号竪穴-1



1号竪穴-10



2号竪穴-22



4号竪穴-1



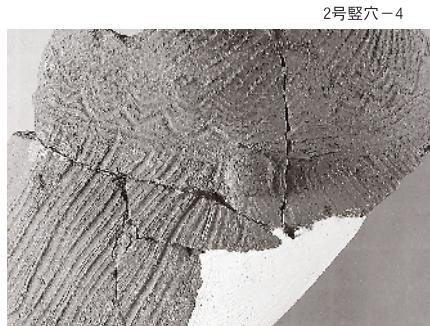
2号竪穴-4



2号竪穴-28



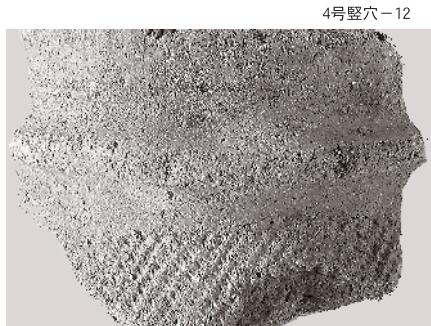
4号竪穴-12



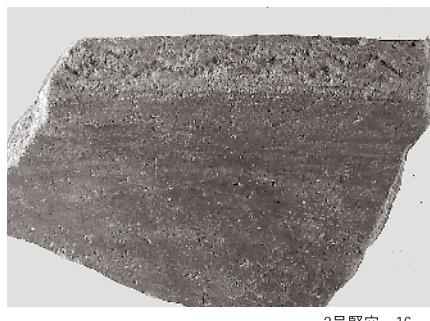
2号竪穴-4



3号竪穴-1



4号竪穴-14



2号竪穴-16



3号竪穴-2



4号竪穴-21

図版84 遺物 弥生土器詳細



4号竪穴-30



5号竪穴-6



5号竪穴-28



4号竪穴-36



5号竪穴-7



5号竪穴-32



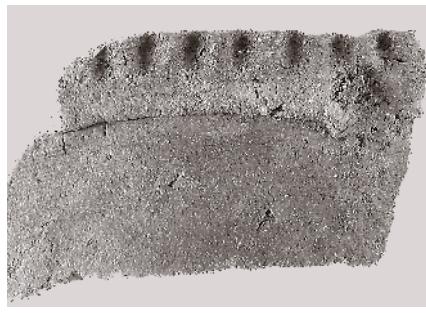
4号竪穴-36



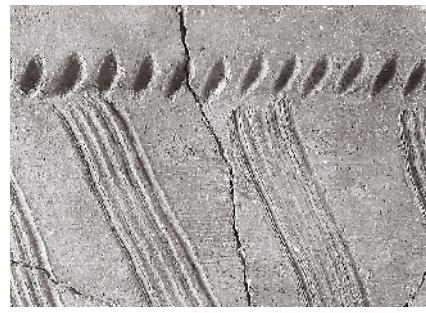
5号竪穴-9



5号竪穴-36



4号竪穴-41



5号竪穴-22



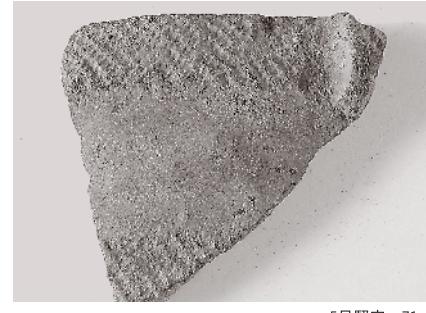
5号竪穴-38



5号竪穴-1



5号竪穴-23



5号竪穴-71



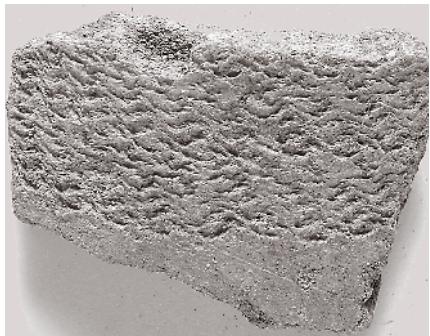
5号竪穴-5



5号竪穴-27



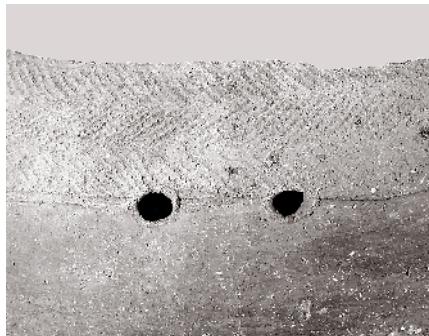
5号竪穴-85



5号竪穴-111



5号竪穴-1



7号竪穴-1



5号竪穴-113



6号竪穴-5



7号竪穴-2



5号竪穴-122



6号竪穴-6



7号竪穴-16



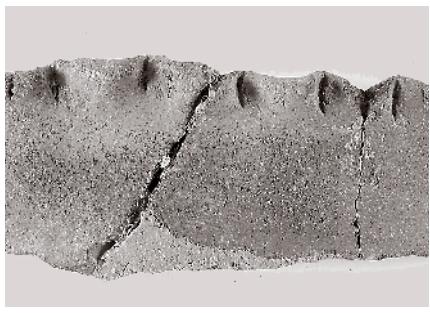
5号竪穴-124



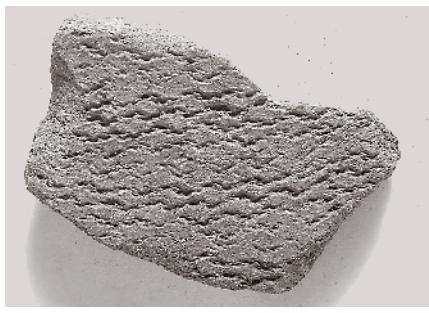
6号竪穴-7



8号竪穴-1



5号竪穴-125



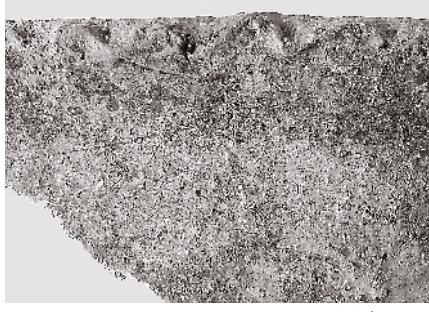
6号竪穴-9



11号竪穴-1



5号竪穴-161



6号竪穴-22

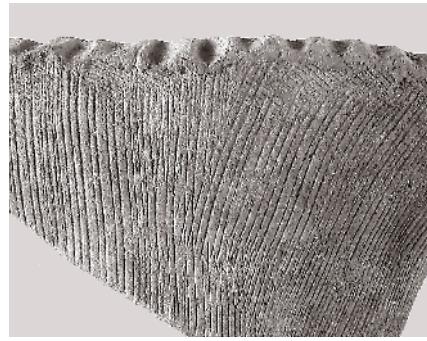


11号竪穴-2

図版86 遺物 弥生土器詳細



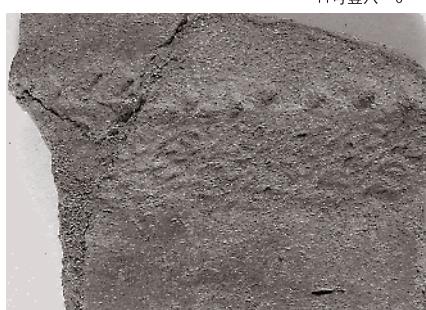
11号竪穴-6



14号竪穴-3



18号竪穴-26



11号竪穴-27



14号竪穴-4



18号竪穴-32



11号竪穴-34



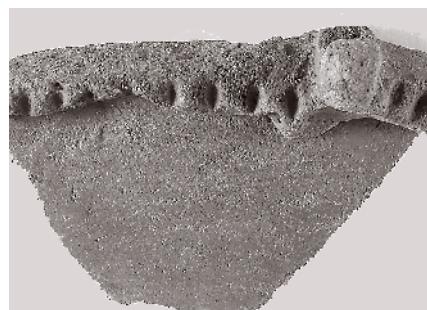
16号竪穴-1



18号竪穴-36



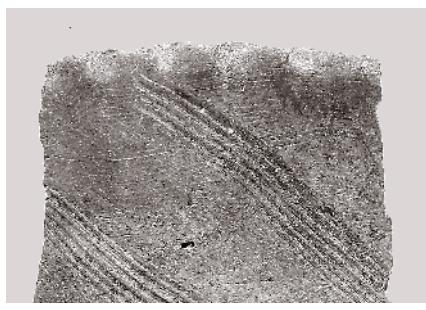
11号竪穴-36



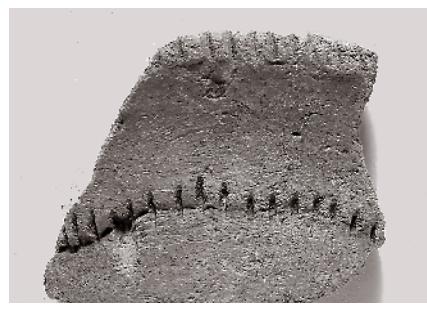
18号竪穴-11



18号竪穴-50



13号竪穴-1



18号竪穴-17



19号竪穴-1



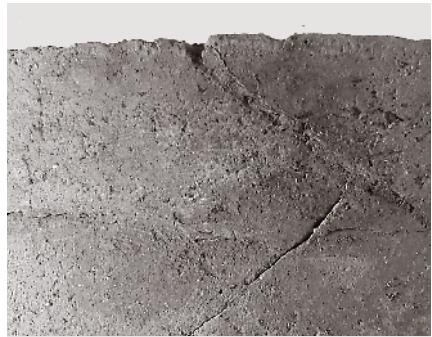
13・14号竪穴-2



18号竪穴-25



19号竪穴-4



20号竪穴-1



20号竪穴-51



22号竪穴-4



20号竪穴-1



20号竪穴-53



22号竪穴-25



20号竪穴-2



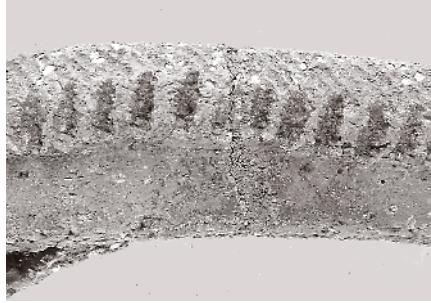
21号竪穴-1



22号竪穴-27



20号竪穴-3



22号竪穴-1



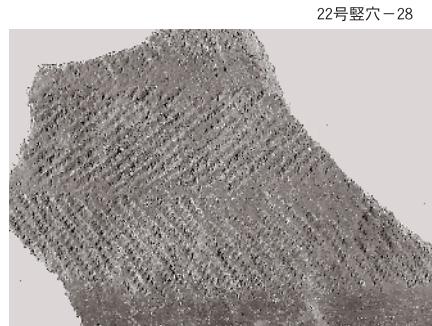
22号竪穴-28



20号竪穴-28



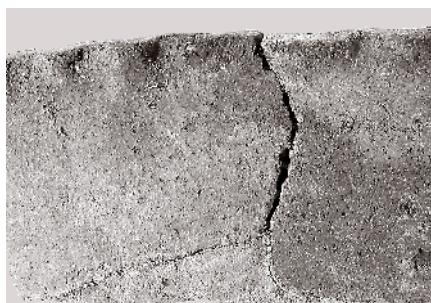
22号竪穴-2



22号竪穴-47



20号竪穴-41



22号竪穴-3



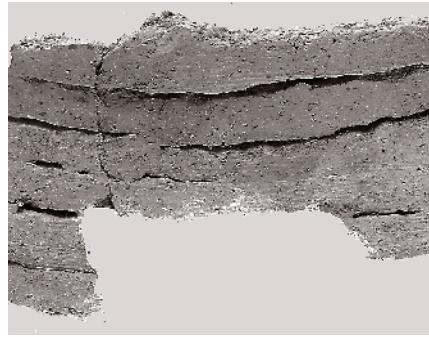
22号竪穴-61



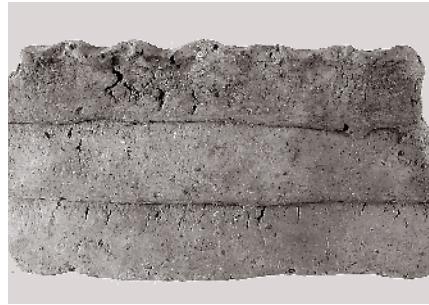
22号竪穴-68



22A号竪穴-8



23号竪穴-2



22号竪穴-73



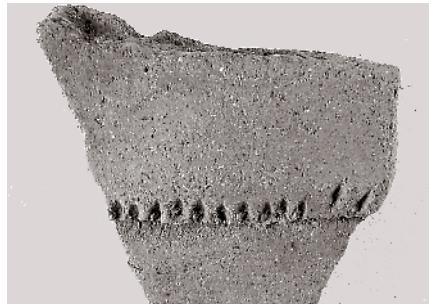
22B号竪穴-1



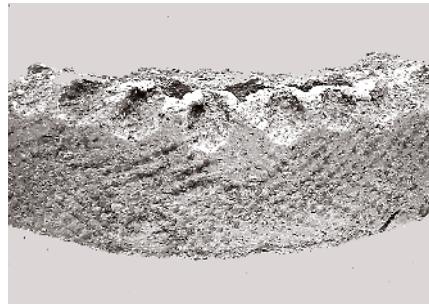
23号竪穴-6



22A号竪穴-1



22B号竪穴-4



23号竪穴-9



22A号竪穴-3



22C号竪穴-1



23号竪穴-27



22A号竪穴-5



22C号竪穴-2



23号竪穴-28



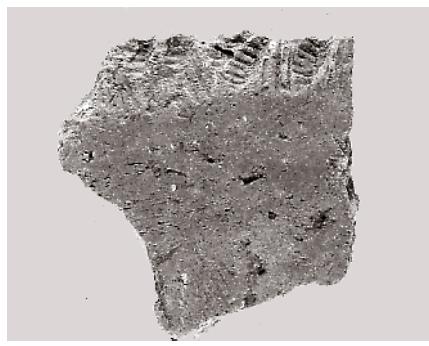
22A号竪穴-7



23号竪穴-1



23号竪穴-32



23号竪穴-41



24号竪穴-3



24号竪穴-62



23号竪穴-44



24号竪穴-7



24号竪穴-63



23号竪穴-46



24号竪穴-10



24号竪穴-67



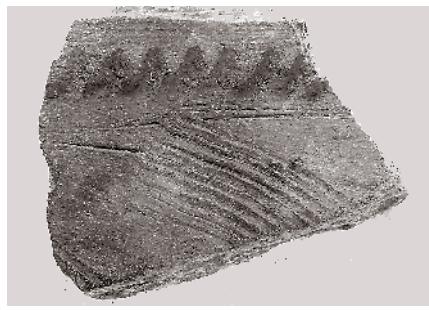
23号竪穴-52



24号竪穴-11



24号竪穴-78



23号竪穴-56



24号竪穴-12



24号竪穴-85



24号竪穴-1



24号竪穴-61

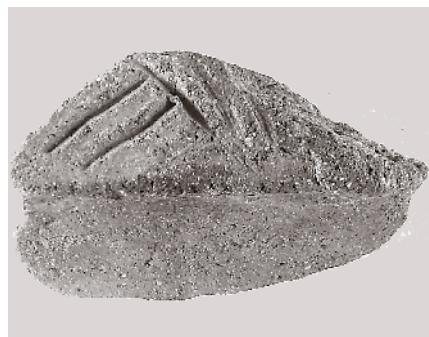


24号竪穴-88

図版90 遺物 弥生土器詳細



24号竪穴-90



25号竪穴-16



26号竪穴-2



24号竪穴-95



25号竪穴-18



26号竪穴-3



24号竪穴-110



25号竪穴-22



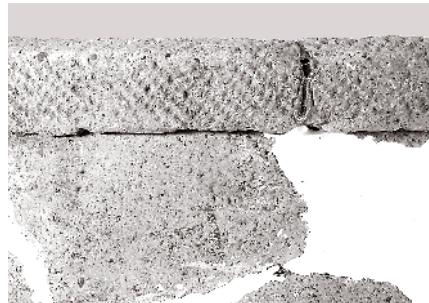
26号竪穴-4



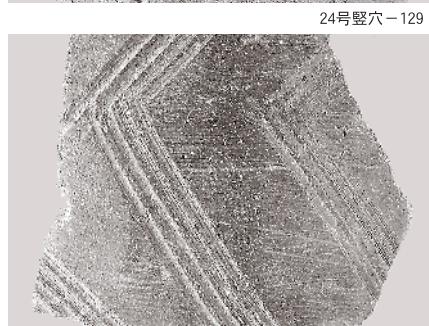
24号竪穴-129



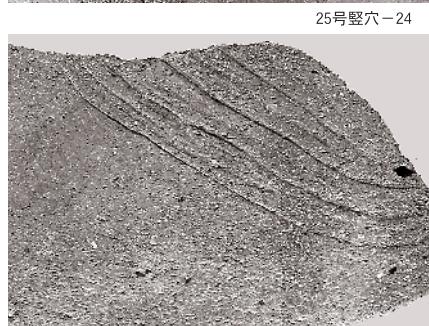
25号竪穴-24



26号竪穴-5



24号竪穴-134



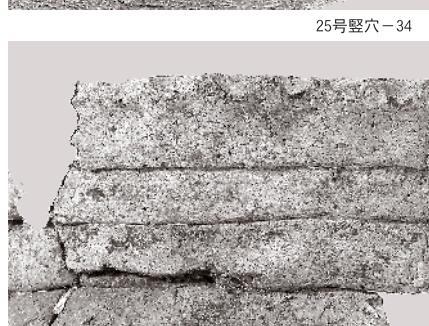
25号竪穴-34



26号竪穴-6



24号竪穴-152



26号竪穴-1



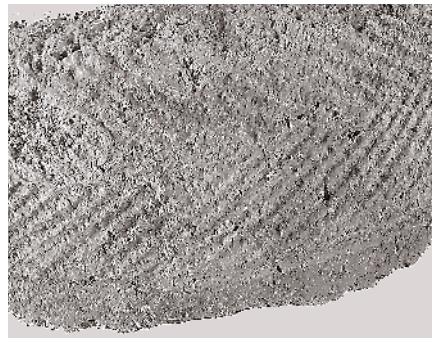
26号竪穴-16



27号竪穴-8



27号竪穴-27



29号竪穴-29



27号竪穴-13



28号竪穴-44



29号竪穴-36



28号竪穴-1



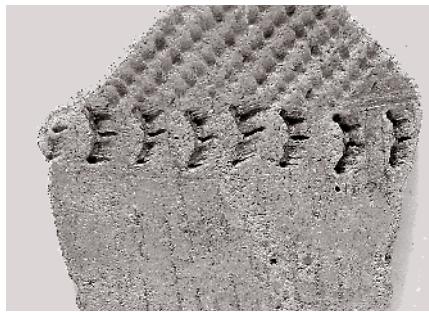
29号竪穴-16



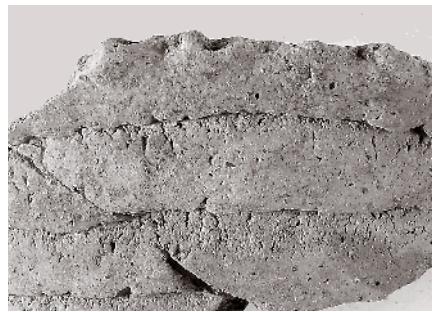
29号竪穴-39



28号竪穴-2



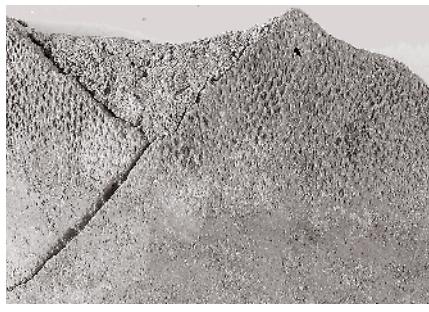
29号竪穴-18



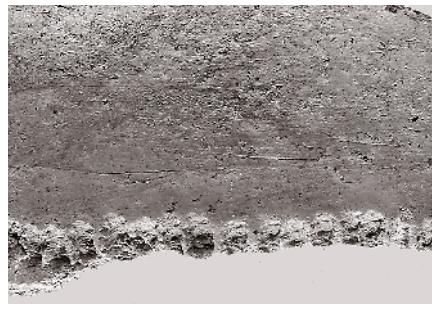
29号竪穴-40



28号竪穴-6



29号竪穴-22



29号竪穴-45



28号竪穴-26



29号竪穴-27



31号竪穴-1

図版92 遺物 弥生土器詳細



31号竪穴-2



31号竪穴-35



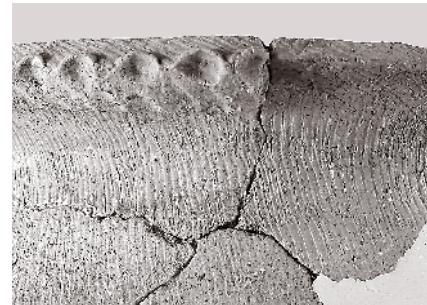
32号竪穴-9



31号竪穴-4



31号竪穴-37



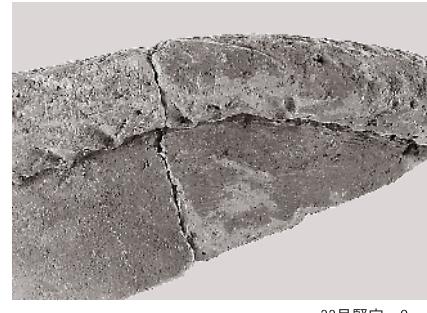
33号竪穴-1



31号竪穴-19



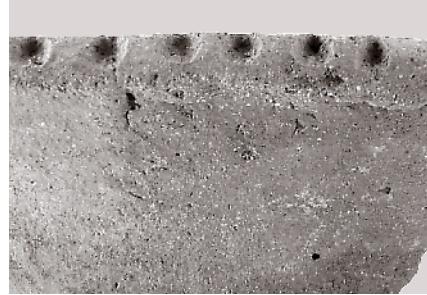
31号竪穴-38



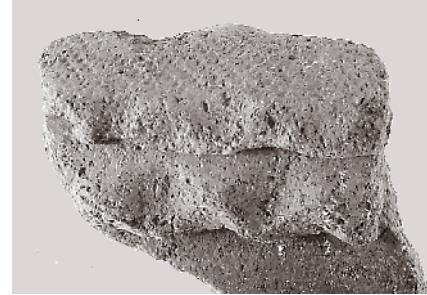
33号竪穴-2



31号竪穴-20



31号竪穴-46



33号竪穴-19



31号竪穴-25



31号竪穴-50



33号竪穴-21



31号竪穴-27



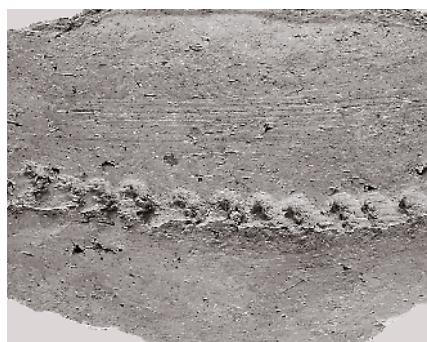
32号竪穴-1



33号竪穴-33



33号竪穴-41



33号竪穴-71



35号竪穴-40



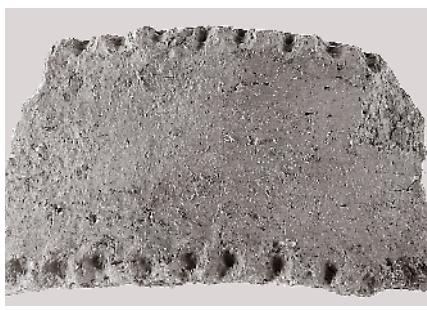
33号竪穴-42



34号竪穴-10



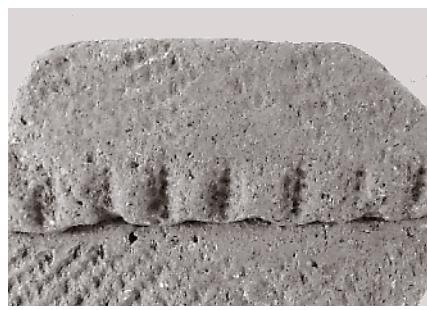
35号竪穴-57



33号竪穴-54



35号竪穴-2



35号竪穴-60



33号竪穴-56



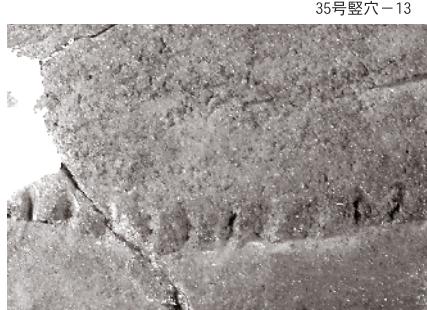
35号竪穴-13



35号竪穴-66



33号竪穴-57



35号竪穴-13



35号竪穴-95



33号竪穴-58



35号竪穴-19



35号竪穴-97

図版94 遺物 弥生土器詳細



35号竪穴-100



36号竪穴-41



37号竪穴-20



35号竪穴-2



37号竪穴-1



37号竪穴-29



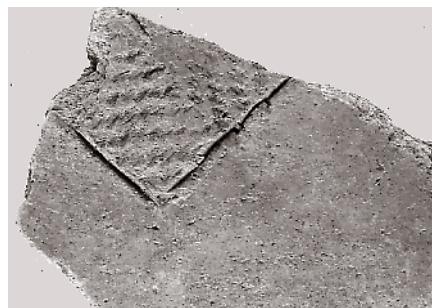
36号竪穴-2



37号竪穴-2



37号竪穴-31



36号竪穴-21



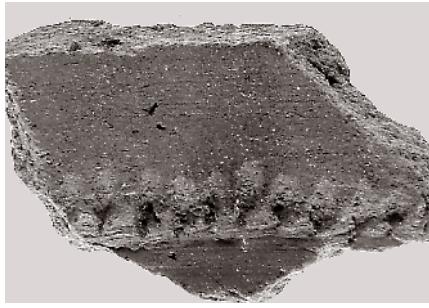
37号竪穴-13



37号竪穴-39



36号竪穴-26



37号竪穴-18



37号竪穴-45



36号竪穴-27



37号竪穴-19



37号竪穴-47



38号竪穴-1



41号竪穴-32



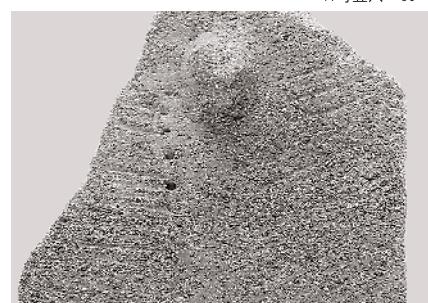
41号竪穴-60



38号竪穴-7



41号竪穴-33



41号竪穴-61



38号竪穴-9



41号竪穴-35



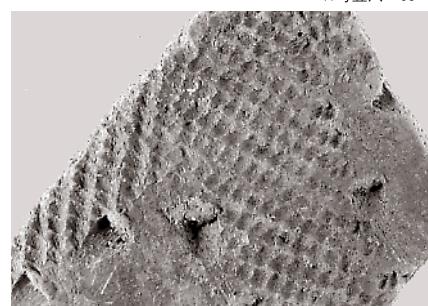
41号竪穴-65



41号竪穴-1



41号竪穴-40



41号竪穴-68



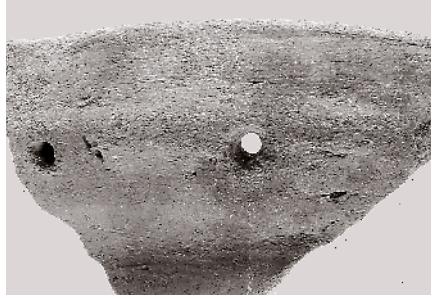
41号竪穴-6



41号竪穴-52



41号竪穴-70



41号竪穴-24

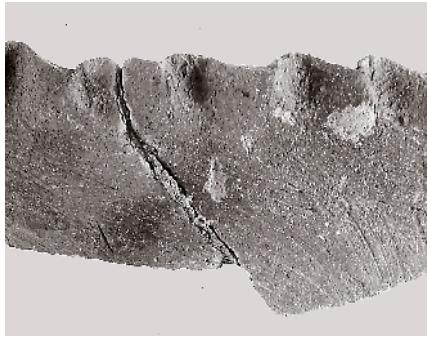


41号竪穴-54

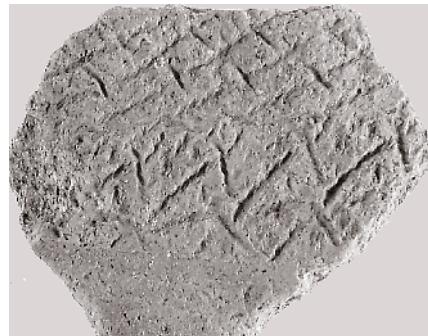


41号竪穴-77

図版96 遺物 弥生土器詳細



41号竪穴-80



42・43号竪穴-23



46号竪穴-10



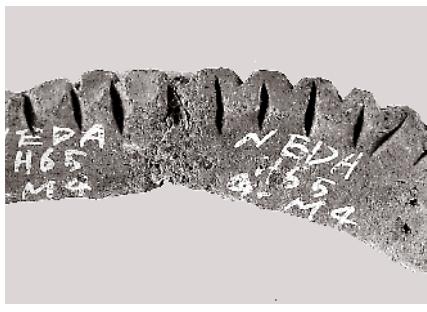
41号竪穴-84



45号竪穴-1



47号竪穴-3



41号竪穴-86



45号竪穴-1



47号竪穴-9



42・43号竪穴-1



45号竪穴-1



47号竪穴-13



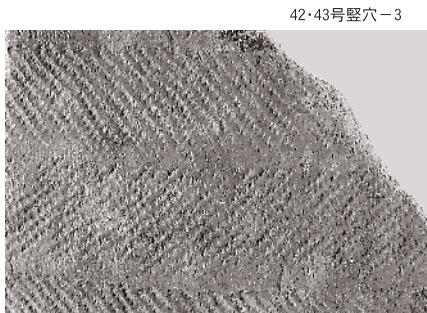
42・43号竪穴-3



45号竪穴-3



47号竪穴-14



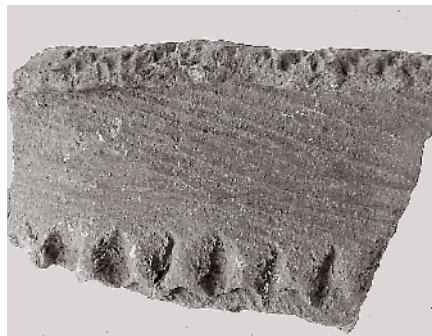
42・43号竪穴-15



45号竪穴-5



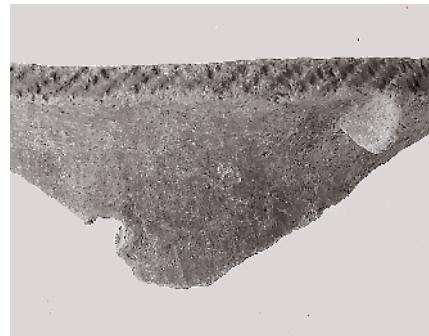
47号竪穴-51



47号竪穴-52



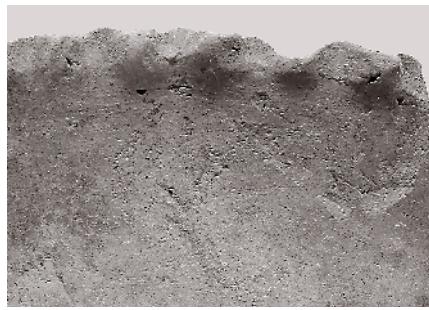
47号竪穴-81



48号竪穴-2



47号竪穴-62



47号竪穴-83



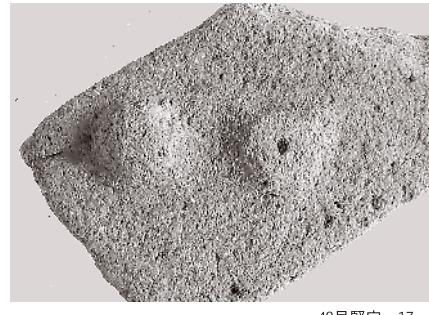
48号竪穴-14



47号竪穴-67



47号竪穴-91



48号竪穴-17



47号竪穴-70



47号竪穴-112



48号竪穴-21



47号竪穴-73



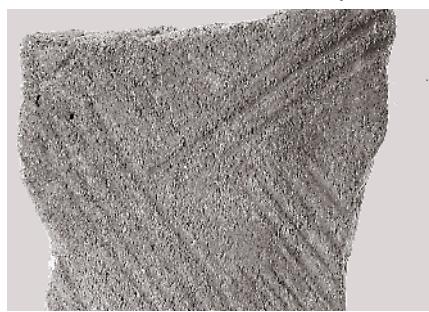
47号竪穴-114



48号竪穴-22



47号竪穴-78



47号竪穴-125



49号竪穴-6

図版98 遺物 弥生土器詳細



49号竪穴-7



51号竪穴-20



51号竪穴-58



51号竪穴-6



51号竪穴-25



51号竪穴-63



51号竪穴-7



51号竪穴-26



51号竪穴-64



51号竪穴-8



51号竪穴-31



51号竪穴-68



51号竪穴-14



51号竪穴-50



51号竪穴-72



51号竪穴-19



51号竪穴-53



51号竪穴-73



51号竪穴-75



54号竪穴-3



57号竪穴-2



52号竪穴-1



55・56号竪穴-1



57号竪穴-10



52号竪穴-1



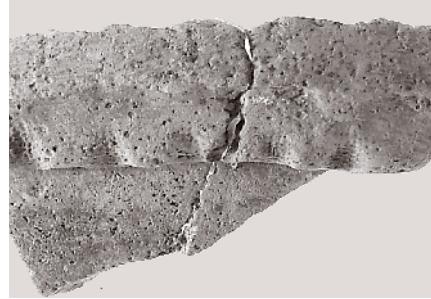
55・56号竪穴-1



57号竪穴-21



53号竪穴-3



55・56号竪穴-6



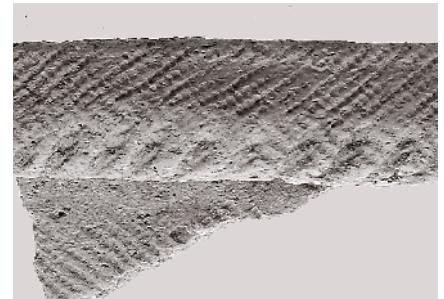
57号竪穴-22



53号竪穴-4



57号竪穴-1



57号竪穴-29



54号竪穴-1



57号竪穴-2



58号竪穴-3

図版100 遺物 弥生土器詳細



58号竪穴-5



59号竪穴-24



60号竪穴-21



59号竪穴-4



59号竪穴-25



60号竪穴-23



59号竪穴-15



60号竪穴-1



60号竪穴-26



59号竪穴-18



60号竪穴-4



60号竪穴-31



59号竪穴-12



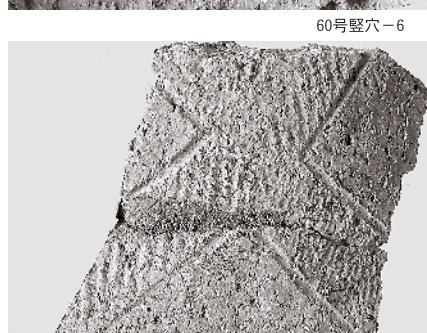
60号竪穴-6



60号竪穴-40



59号竪穴-19



60号竪穴-20



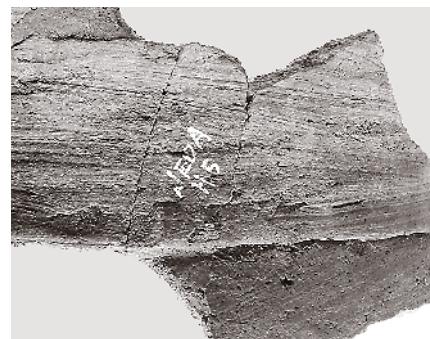
60号竪穴-51



60号竪穴-52



64号竪穴-4



67号竪穴-1



61号竪穴-5



65号竪穴-1



67号竪穴-1



61号竪穴-7



65号竪穴-33



67号竪穴-1



61号竪穴-8



65号竪穴-38



67号竪穴-2



61号竪穴-24



65号竪穴-39



67号竪穴-4



64号竪穴-1



65号竪穴-40



68号竪穴-1

図版102 遺物 弥生土器詳細



68号竪穴-2



69号竪穴-3



71号竪穴-6



68号竪穴-3



70号竪穴-2



72・73号竪穴-1



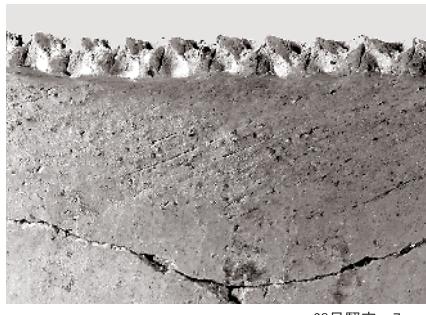
68号竪穴-4



70号竪穴-6



72・73号竪穴-1



68号竪穴-7



70号竪穴-11



72・73号竪穴-9



68号竪穴-22



71号竪穴-1



72・73号竪穴-16



68号竪穴-29



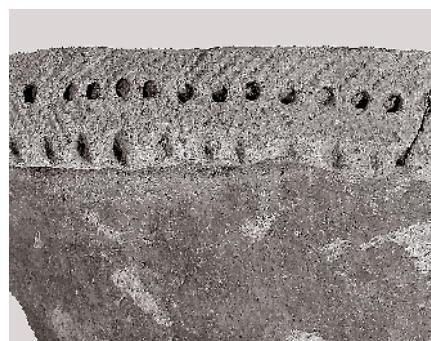
71号竪穴-2



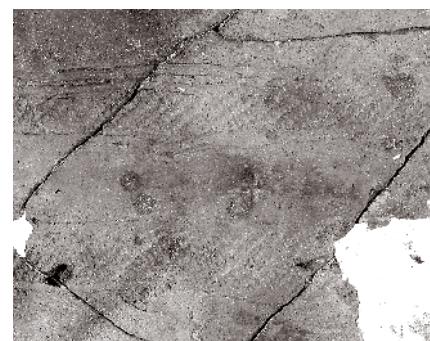
72・73号竪穴-23



72・73号竪穴-26



76号竪穴-2



80号竪穴-12



72・73号竪穴-31



76号竪穴-3



80号竪穴-12



74号竪穴-1



76号竪穴-5



80号竪穴-13



74号竪穴-3



76号竪穴-7



80号竪穴-14



74号竪穴-4



80号竪穴-1



80号竪穴-15



74号竪穴-10

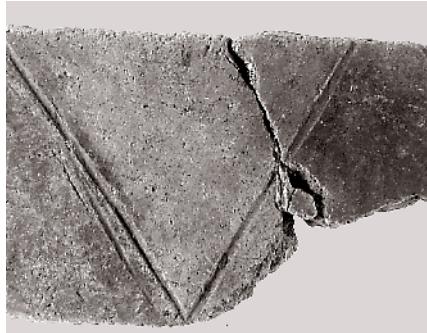


80号竪穴-2

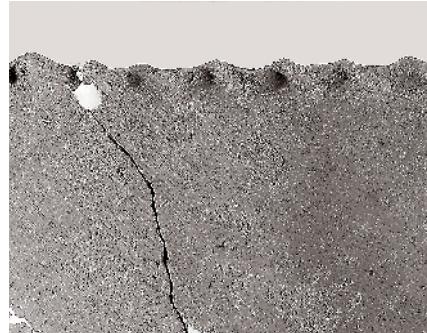


82号竪穴-5

図版104 遺物 弥生土器詳細



85号竪穴-2



環濠A-A2区-2



環濠A-I2区-44



85号竪穴-3



環濠A-B2区-1



環濠A-I2区-56



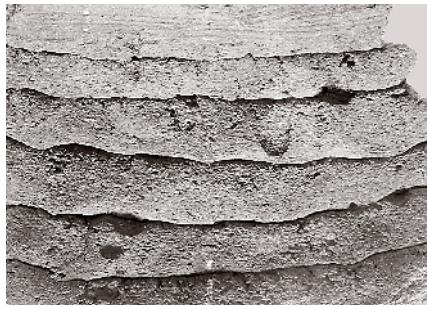
86号竪穴-10



環濠A-B2区-2



環濠A-I2区-61



88号竪穴-14



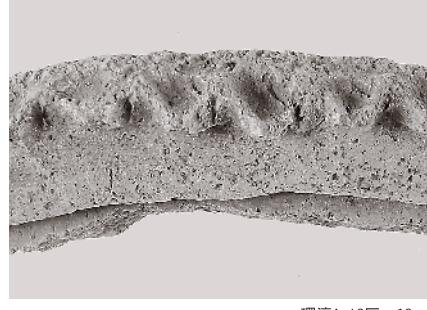
環濠A-B2区-3



環濠A-I2区-64



環濠A-A2区-1



環濠A-I2区-12



環濠A-J2区-3



環濠A-A2区-1



環濠A-I2区-37



環濠A-J2区-4



環濠A-J2区-7



環濠A-K2区-10



環濠A-L2区-10



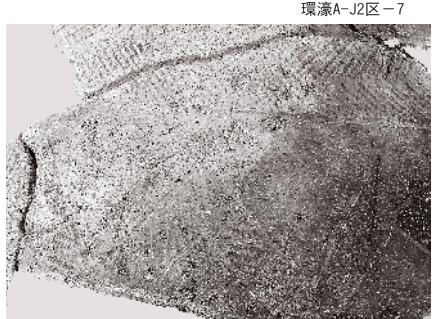
環濠A-J2区-7



環濠A-K2区-11



環濠A-L2区-12



環濠A-J2区-10



環濠A-K2区-16



環濠A-L2区-18



環濠A-J2区-11



環濠A-K2区-24



環濠A-L2区-19



環濠A-K2区-3



環濠A-K2区-30



環濠A-L2区-19



環濠A-K2区-9



環濠A-L2区-1



環濠A-L2区-39

図版106 遺物 弥生土器詳細



環濠A-M2区-4



環濠A-M2区-16



環濠A-N2区-8



環濠A-M2区-4



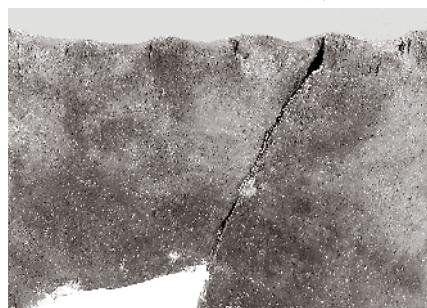
環濠A-N2区-1



環濠A-N2区-9



環濠A-M2区-8



環濠A-N2区-2



環濠A-N2区-9



環濠A-M2区-8



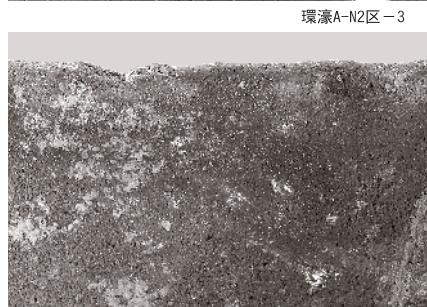
環濠A-N2区-3



環濠A-N2区-10



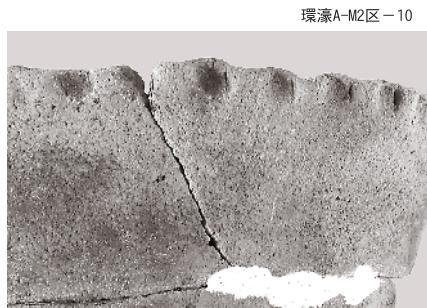
環濠A-M2区-10



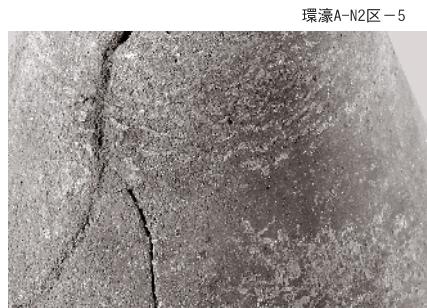
環濠A-N2区-5



環濠A-N2区-11



環濠A-M2区-13



環濠A-N2区-6



環濠A-N2区-12



環濠A-N2区-15



環濠A-02区-1



環濠A-02区-11



環濠A-N2区-16



環濠A-02区-3



環濠A-02区-13



環濠A-N2区-17



環濠A-02区-5



環濠A-02区-13



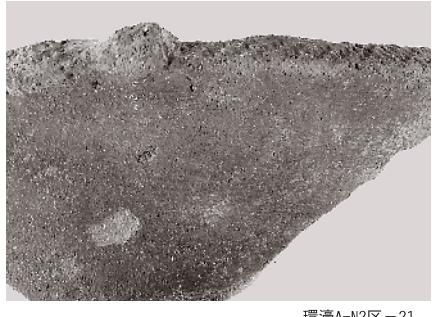
環濠A-N2区-19



環濠A-02区-8



環濠A-02区-14



環濠A-N2区-21



環濠A-02区-9



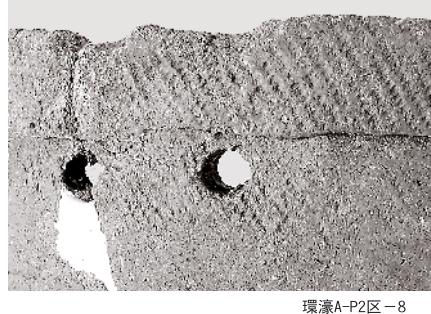
環濠A-02区-17



環濠A-N2区-48

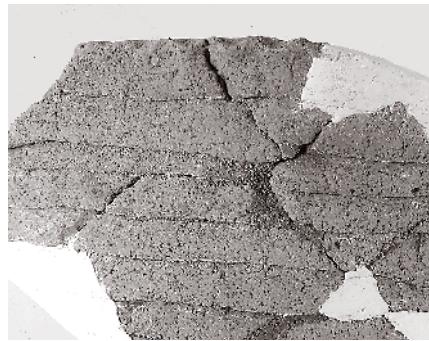


環濠A-02区-10



環濠A-P2区-8

図版108 遺物 弥生土器詳細



環濠A-P2区-16



環濠A-P2区-57

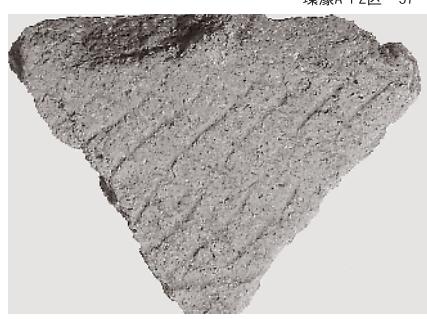


環濠A-Q2区-12



NEADA

環濠A-P2区-21



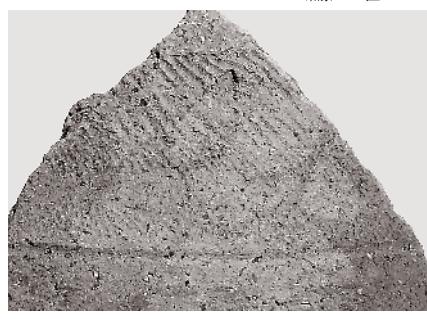
環濠A-P2区-62



環濠A-Q2区-14



環濠A-P2区-33



環濠A-P2区-63



環濠A-Q2区-16



環濠A-P2区-35



環濠A-Q2区-1



環濠A-Q2区-19



環濠A-P2区-36



環濠A-Q2区-5



環濠A-Q2区-20



環濠A-P2区-54



環濠A-Q2区-6



環濠A-Q2区-24



環濠A-Q2・3区-9



環濠A-R2・3区-10



環濠A-S2区-12



環濠A-Q2・3区-10



環濠A-R2・3区-11



環濠A-S2区-39



環濠A-Q2・3区-16



環濠A-R2・3区-18



環濠A-S2区-41



環濠A-Q2・3区-17



環濠A-R2・3区-23



環濠A-S2区-5



環濠A-R2・3区-2



環濠A-R2・3区-30



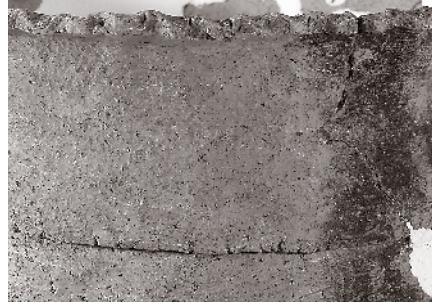
環濠A-S2区-5



環濠A-R2・3区-7

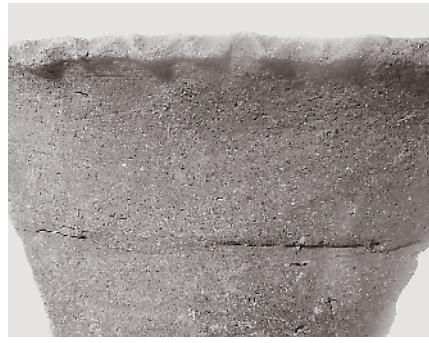


環濠A-R2・3区-31



環濠A-S2区-6

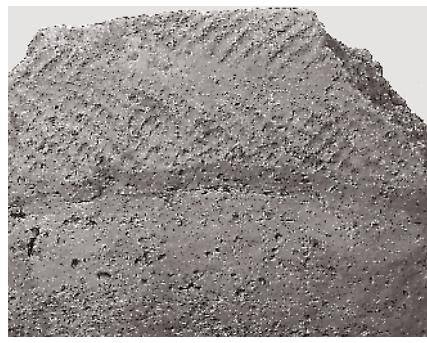
図版110 遺物 弥生土器詳細



環濠A-S3区-3



環濠A-S2-3区-20



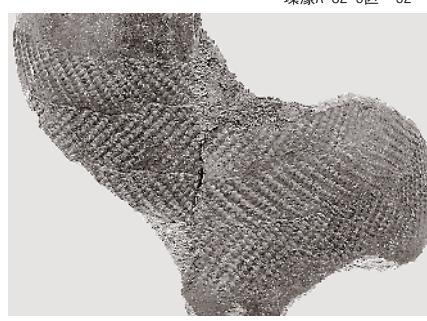
環濠A-S2-3区-32



環濠A-S3区-4



環濠A-S2-3区-21



環濠A-T2区-1



環濠A-S3区-10



環濠A-S2-3区-22



環濠A-T2区-7



環濠A-S2-3区-8



環濠A-S2-3区-25



環濠A-T2区-8



環濠A-S2-3区-11



環濠A-S2-3区-26



環濠A-T2区-16



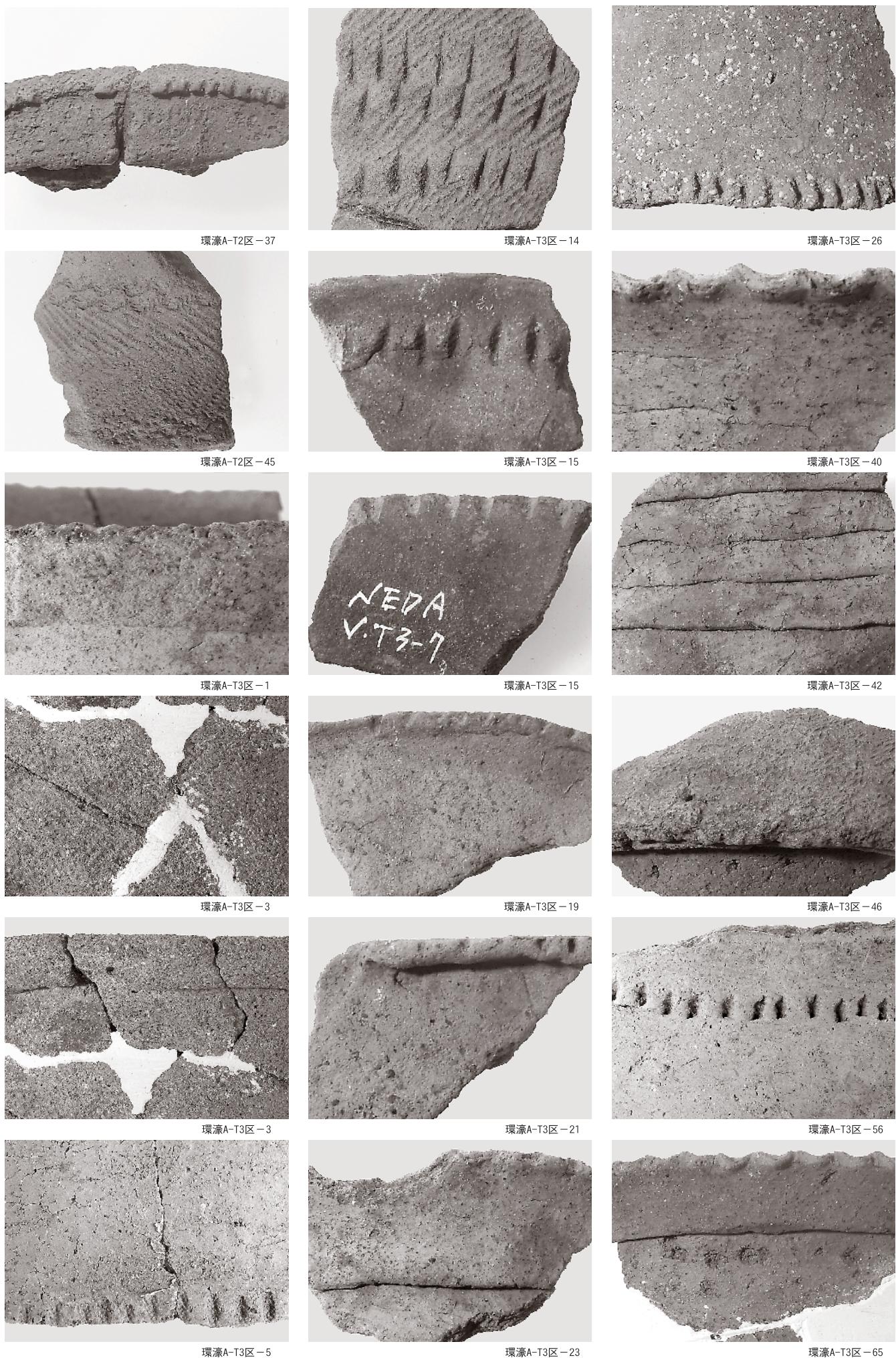
環濠A-S2-3区-18



環濠A-S2-3区-28



環濠A-T2区-22



図版112 遺物 弥生土器詳細



環濠A-T3区-72



環濠A-U3区-7



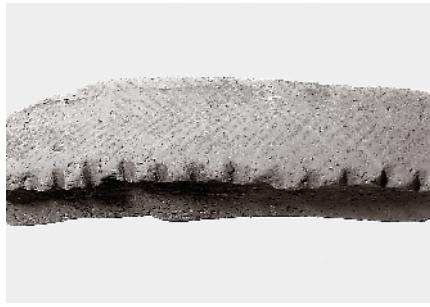
環濠A-U3区-21



環濠A-T3区-78



環濠A-U3区-10



環濠A-U3区-23



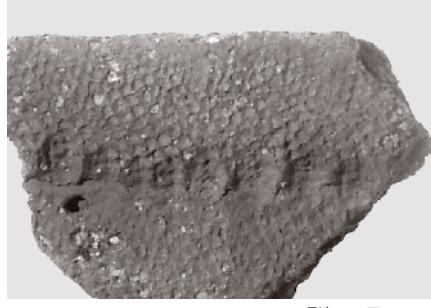
環濠A-T3区-82



環濠A-U3区-14



環濠A-U3区-41



環濠A-T3区-90



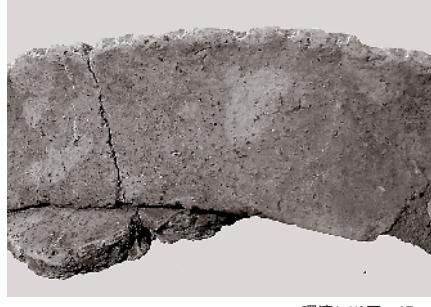
環濠A-U3区-16



環濠A-U3区-48



環濠A-U3区-5



環濠A-U3区-17



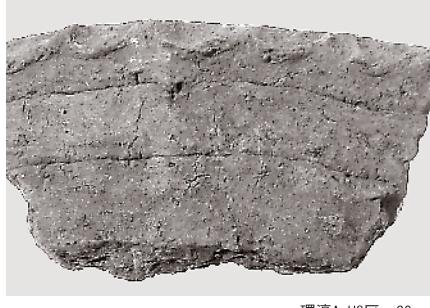
環濠A-U3区-51



環濠A-U3区-6



環濠A-U3区-18



環濠A-U3区-60



環濠A-U3区-62



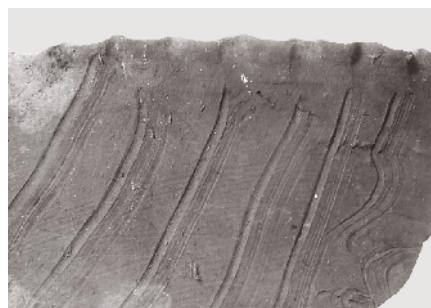
環濠A-V3区-8



環濠A-V3区-40



環濠A-U3区-62



環濠A-V3区-10



環濠A-V3区-55



環濠A-U3区-69



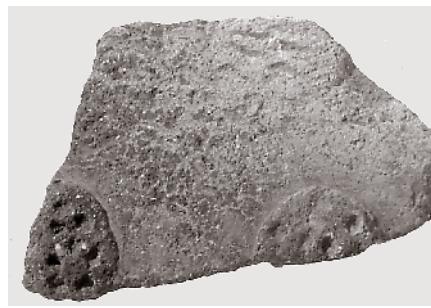
環濠A-V3区-12



環濠A-V3区-57



環濠A-V3区-1



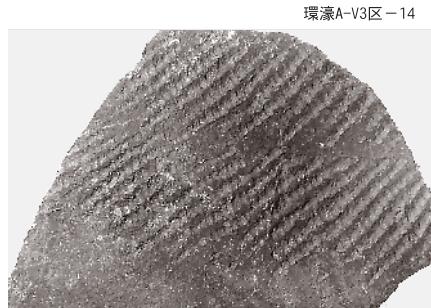
環濠A-V3区-14



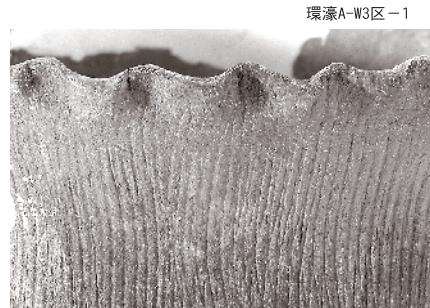
環濠A-W3区-1



環濠A-V3区-5



環濠A-V3区-26



環濠A-X3区-1



環濠A-V3区-5

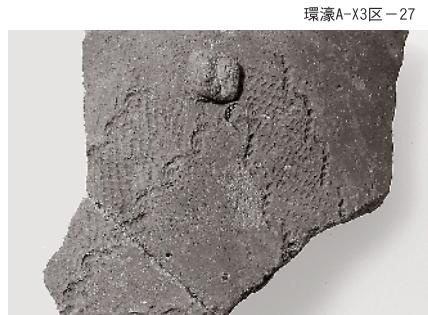
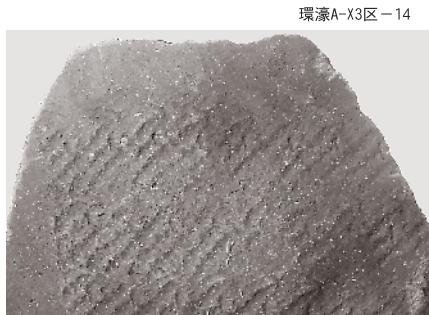
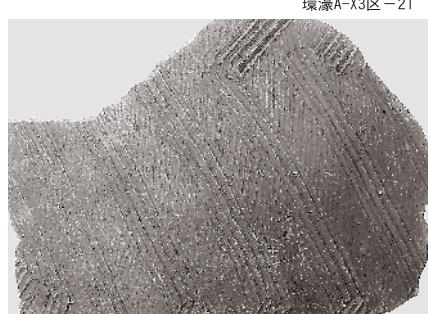


環濠A-V3区-37



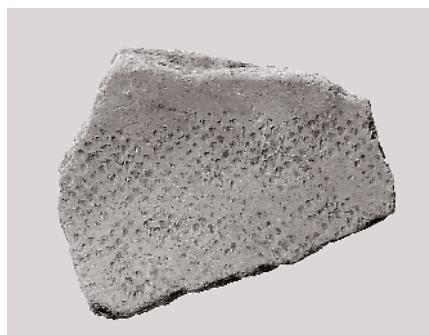
環濠A-X3区-2

図版114 遺物 弥生土器詳細

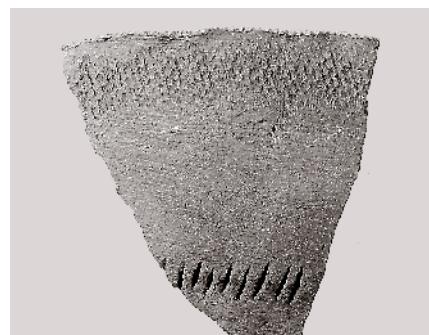




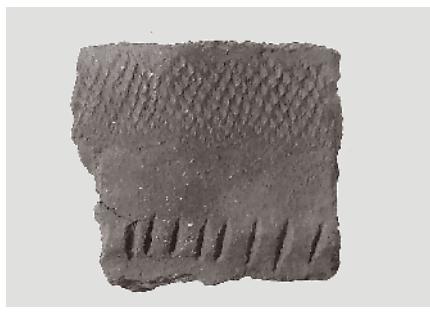
環濠A-e6区-10



環濠A-e7区-17



環濠B-D4区-2



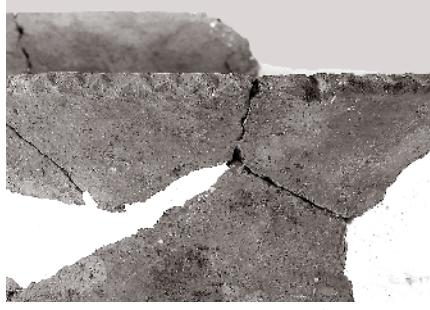
環濠A-e6区-11



環濠A-e7区-20



環濠B-D4区-3



環濠A-e7区-1



環濠A-e7区-21



環濠B-D4区-4



環濠A-e7区-3



環濠A-e7区-24



環濠B-G5区-42



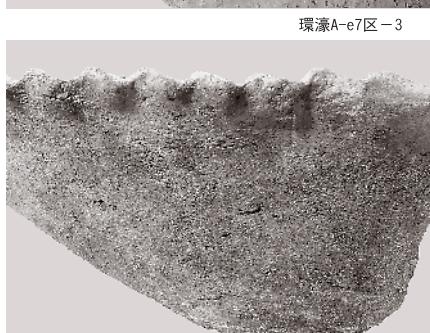
環濠A-e7区-3



環濠A-e7区-25



環濠B-H6区-9



環濠A-e7区-10



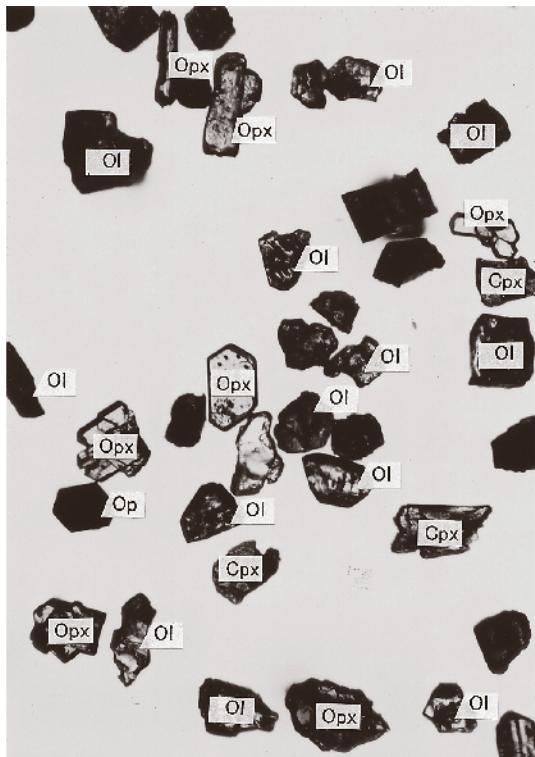
環濠B-D4区-1



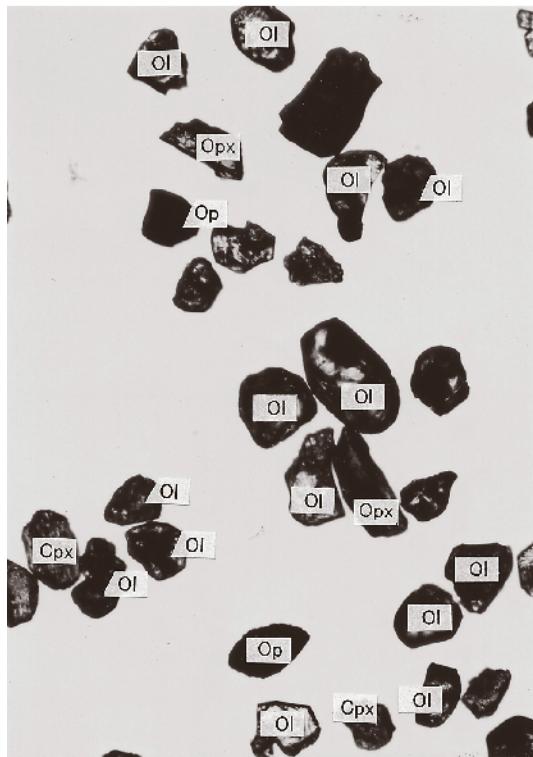
環濠B-H6区-11



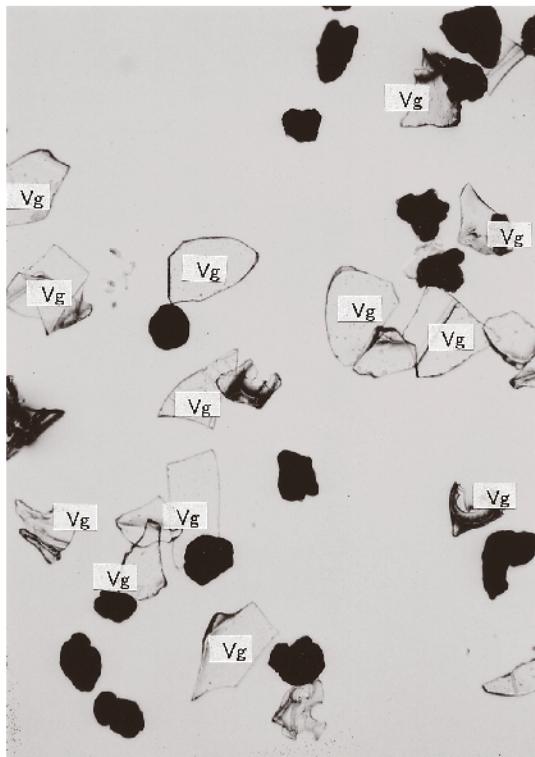
1. 重鉱物 (北面セクション J7-K7;1)



2. 重鉱物 (北面セクション J7-K7;6)



3. 重鉱物 (北面セクション J7-K7;19)



4. ATの火山ガラス (北面セクション J7-K7;7)

OI: カンラン石 Opx: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Op: 不透明鉱物 Vg: 火山ガラス

0.5mm

報告書抄録

ふりがな	いちはらしねだだいせき							
書名	市原市根田代遺跡							
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告書							
巻次	X III							
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第92集							
編著者名	大村直、忍澤成視、安井健一、櫻井敦史、平田和明、長岡朋人、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)7300							
発行年月日	2005年(平成17年)3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ねだい 根田代遺跡 ねだ 根田古墳群	ちばけん いちはらし ねだ 千葉県市原市根田2 丁目1他ほか	12219	713 714	35° 30' 07"	140° 06' 17"	198008~ 198103	本調査 (上層) 6,860 本調査 (下層) 165	土地区画整 理事業に伴 う埋蔵文化 財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
根田代遺跡 根田古墳群	包蔵地 集落跡 古墳	旧石器時代	遺物集中地点1	旧石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、土製品、鉄器(大刀、刀子、鉄鎌他)、玉類(管玉、切子玉、丸玉、琥珀玉、石製玉、ガラス玉他)、耳環等	弥生時代中期末の環濠集落。緯度経度は、世界測地系による。			
		弥生時代中・後期	竪穴住居跡85軒 環濠1条 溝1条 土坑1基 等					
		弥生時代終末期・ 古墳時代前期	竪穴住居跡7軒 方墳(方形周溝墓)3基 等					
		古墳時代後期・ 終末期・ 奈良時代	円墳1基 方墳4基 地下式土坑3基 木棺土坑墓 等					
		各時代総数	竪穴住居跡95軒 環濠1条 古墳8基 土坑12基 地下式土坑3基 粘土採掘坑4基 溝(道跡) 等					

上総国分寺台遺跡調査報告書 XIII
財団法人市原市文化財センター調査報告書第92集

市原市根田代遺跡

平成17年3月18日 発行

編 集 財団法人市原市文化財センター

発 行 市原市教育委員会
財団法人市原市文化財センター
市原市能満1489番地
TEL 0436(41)7300

印 刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510番地1
TEL 0436(22)4348